
The Legend Of Red Stone

シクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Legend Of Red Stone

【Nコード】

N9301L

【作者名】

シクル

【あらすじ】

テイテスという小さな島国に暮らす、「神力」と呼ばれる異能力の使い手、チリー、その親友であるニシル、そして記憶喪失の少女ミラルの三人は、失踪したテイテスの王を捜すため、島を出て外の世界へと一歩踏み出す。

しかしその一歩は、ゲルビア帝国の壮大な陰謀との戦いの始まりでもあった。

王の失踪した理由、滅ぼされた国「東国」、強大な力を持つ石「赤石」、そしてミラルの失われた記憶

様々な謎と陰謀が絡

まり合い、今彼らの運命が動き出す。

全三部構成の長編シリーズファンタジー！
現在第二部までが完結。

episode 1「Opening-1」（前書き）

外伝と短編を除けば、今作で七作目となりました、シクルです。

「The Legend Of Red Stone」は、過去に「超会！」と同時連載をしていましたが、私の勝手な都合により修正のための削除をしていました。

執筆済みの部分を全て修正し終わりましたので、また初回から連載を開始しようと思います。

話の本筋はあまり変更していませんので、「なにこれ全然違う」とかそういう状況にはならないと思います（多分）。

違和感のある表現や、不足していたシーンを追加していますので、読みやすくなっているハズです（きっと）。

前置きが長くなりましたが、楽しんでいただければ幸いです^^

episode 1「Opening-1」

薄れ行く意識の中で、男は少女の顔を思い浮かべた。脳裏を過るあどけないその笑顔に、男は微笑んだ。

「アルドっ！ アルドっ！」

男の背後にあるドアの向こうから、ドアを何度も叩く音と少女の声が聞こえてくる。男はそれを無視するかのようにかぶりを振り、夜空を仰いだ。曇り一つないこの夜空と同じように、男の心の中も曇り一つなくスッキリとしていた。

死が、迫っているというのに。

突きつけられた銃口に、男は少しの怯えも見せなかった。それどころか、満足げに笑みさえ浮かべていた。

悔いはねえ。いや、なくはないかな……。

「じゃあな。……………」

静かに、背後のドアへとそう言葉をかけた。と、同時に

銃声が、鳴り響いた。

フェキタス。町の中心にある巨大な噴水が特徴的な小さな町である。

町の西部には活気のある市場が並んでおり、品ぞろえに関しては大きな町にも引けを取らない。あまり豊かな町ではないため、店を持つ商人よりも圧倒的に屋台のようなもので商品を買っている商人の方が多い。

そんな市場の中、少し胡散臭い屋台があった。

「……………これ、本物か……………」

やたらと真剣な顔で、一人の少年が目の前に並ぶ黒いリンゴをまじまじと見ている。みた感じ、年齢は十六歳くらいだろうか。前髪は彼の両目を隠す程に長いが、分けているのか隠れているのは右目だけだった。別に見えないとか、なくなっているとかではないらしく、前髪を右手で避け、しっかりと両目でリンゴを眺めている。

店主はニヤニヤと笑いながら勿論ですよ、と自信満々に答えている。

白い、ボサボサの長い髪に包まれた頭を、少年はボリボリとかきつつ唸ると、やがてポケットから財布らしき袋を取り出した。

その瞬間、店主は口元だけでニヤリと笑う。

「じゃ、じゃあこの黒いリンゴを」

少年が言いつつ、並んでいる黒いリンゴの内一つに手を伸ばそうとした時だった。

「馬鹿っ！」

素早く、少女の声と共に少年の頭に背後から鋭い平手打ちが飛ぶ。驚いた少年は、伸ばしていた手を引っ込め、慌てて背後を見る。

そこに立っていたのは、腰まで伸びた美しく長い栗色の髪と、強気そうな釣り目が特徴の、かわいらしい少女だった。見た目や雰囲気から、少年と同年代であることが察せられる。

「な、なにすんだよミラル!?」

少年は先程平手打ちを食らった頭を右手でさすりつつ、ミラルと呼んだ少女に問う。

「そのリンゴ、どう考えても怪しいでしょうがっ！」

「でも、黒いんだぜ？俺こんなリンゴ初めて見た！」

「私はそんな、墨で塗りたくっただけのリンゴを堂々と売る店を初めて見たわ」

ミラルの言葉に、凶星だったのか店主は肩をびくつかせる。

少年は再度黒いリンゴへ手を伸ばし、自分の顔の近くまで持っていく、眺める。

「あ、ココだけちょっとかすれて赤い」

そう呟き、残念そうな顔でリングを元の位置に戻した。

「さっさと行くわよチリー」

「あ、ちよつと待った」

チリーと呼ばれた少年は、ポケットから細かく折り畳まれた紙を取り出すと、それを広げて店主に見せた。

「なあ、この人知らないか？」

チリーによつて広げられた紙には、一人の男性が描かれていた。端正な顔立ちの、年齢で言えば三十代前半と言った感じの金髪の男性だった。

店主はその絵を眺め、しばらく考え込むような素振りを見せたが、すぐに首を横に振った。

「すまないね。見たことのない顔だよ」

「やっぱ駄目か……」

チリーは一瞬沈んだような表情になったが、軽く笑ってお礼を言い、紙を細かく折り畳むと、ポケットの中へ戻した。

「チリー、ミラル」

不意に、二人の背後からまだ幼さの残る少年の声が聞こえる。二人が振り向くと、そこには背の低い少年が立っていた。

短髪で少し童顔の少年だった。背は前述した通り、チリーよりも頭一つ分程低い。彼もまた、チリーやミラルと同年代だと見受けられる。

「ニシル」

「その様子だと、そつちも駄目だったみたいだね」

「そつちはどうだったのよ？」

ミラルの問いに、ニシルと呼ばれた少年は、肩をすくめて見せた。

「全然。誰も見てないってさ」

「やっぱ駄目か……」

チリーはがつくりと肩を落とすと、深く溜息を吐いた。

「どこ行つたんだよまったく……」

「……ここにはいないのかもね、王様」

ニシルの言葉に、チリーはかまな、と頷く。

「よし、んじゃ一旦宿に戻るか。ミラルはどうする？」

「私は少し買い物してから戻るわ」

「へえ……。何かあるのか？」

「何かあるのか？ じゃないでしょ。ふざけて落として、一つしか持って来てないランプを破壊したのは一体どこの誰だったかしら？」

ミラルの言葉に、凶星であったチリーは多少たじろぐ。

「あ、あのランプはニシルがだな……」

「僕のせいにするなバカチリ！ お前が一人でぶん回した拳句に落として壊したんだろ！」

ニシルに軽く頭を小突かれ、チリーは頭を抑えて唸る。ニシルが言っていることは事実なので、反論することも反撃することも出来ない。

「とにかく、私はランプ買ってくるから、二人は先に戻ってて」

チリーとニシルはコクリと頷き、宿のある方向へと歩いて行った。

失踪した王の搜索。それが、チリー達三人が島を出た理由だった。小国、テイテスでのんびりと暮らしていた三人だったが、ひよんなことから彼らは、失踪した王、アレクサンダーを搜索することになったのだ。

王自らが島の外へ出たのか、それとも何者かに連れ去られたのか。書き置き一つ残さずに消えた王を、三人は捜している。

「適当なので良いよね」

先程買ったランプの入った袋を片手に、ミラルは呟いた。フェキタスの雑貨店には様々な物が置いてあり、ランプは勿論他にも沢山の日用品が並んでいた。

ランプにも様々な種類の物があつたが、残金が少ないためあまり選べず、結局最も安いカンテラ型のオイルランプを購入した。

雑貨店は思いの外遠い場所にあり、チリー達の待つ宿屋に徒歩で戻るには二十分以上かかりそうだ。

ミラルは軽く溜息を吐くと、宿屋に向かって歩き始めた。

まだ昼間なため、町の中には沢山の山の人達が忙しそうに歩いている。フェキタスは小さい割に人口が多いので、賑やかさでは大きな町にも負けないだろう。

忙しそうに彼らにぶつからないよう歩いていると、不意にどこからか人間を突き飛ばす音が聞こえた。

辺りを見回すが、近くに倒れているような人間はいない。ふと路地裏の方を見ると、そこにはしりもちをついている小さな男の子と、一人の大柄な兵士がいた。

不審に思い、ミラルは路地裏の中へと入っていく。

「小僧……この俺様にぶつかってただで済むと思うなよ……？」

兵士の方は若く、二十代前半といった感じの男であった。男の子の方はまだ七歳か八歳程度の子供だ。

「ご、ごめんなさい……」

男の子は怒気を発している兵士の男に怯え、しりもちをついたままブルブルと震えている。

「ごめんなさいで済むと思ってるのか……？ この俺様はあのゲルピア帝国の兵士様だぞ！？ 誰のおかげでこの町にいられると思ってるんだ！？ あア！？」

「その子のお父さんとお母さんのおかげでしょ。普通に考えて」

気が付けば見ていられなくなって、ミラルは兵士と男の子の会話を割って入っていた。

「何だお前は……！？」

兵士の男は突如現れたミラルを怪訝そうな顔を見る。

「アンタには関係ないでしょ。そんなことより、ぶつかっただくらいで大人が小さい子苛めるなんて……。大人げないにも程があるわ」

呆れたように溜息を吐きながらそう言うと、ミラルはしりもちをついたままの男の子に手を差し出した。

「立てる？」

「う、うん……。ありがとうお姉ちゃん」

男の子は戸惑いながらも礼を言い、ミラルの手を取ると少しだけ笑った。

「おい女！ 俺様はゲルビア帝国の兵士様だぞ！！ なめた態度とつてるとこの町から追い出すぞこらア！」

「お生憎様。私、この町の住人じゃないから。用も済んだし、追い出したきゃ追い出せば？」

怒鳴り散らす兵士の男を、ミラルは負けじと睨む。

「反抗的な態度取りやがって……！ ゲルビアの兵士である俺を侮辱するということは、ゲルビア帝国そのものを侮辱するってことだ！」

無茶苦茶である。

そんなゲルビア兵士の様子に、ミラルは呆れ顔で溜息を吐いた。ゲルビア帝国は大国なため、時折何を勘違いしたのか、今ミラルの目の前にいる兵士の男のように、暴論を振りかざして好き放題やっている連中が最近が増えてしまっている。

「連行だ。こっちに来い」

「連行！？ アンタ、それは流石に無茶苦茶」

ミラルが言い終わる前に、素早くミラルの首筋に男の手刀が入る。徐々に意識が遠のいて行き、ミラルの視界はブラックアウトした。

フェキタスには宿屋が一つしかない。観光客が多い訳ではないため、部屋の一つ一つも大した大きさではなかった。

チリーとニシルが使用している部屋は、この宿屋の部屋の中でも安い部屋なので、あるのは二つのベッドと机、そしてシャワールームくらいのものだ。

「ミラル……妙に遅いね……。ランプが見つからないのかな……？」
ミラルがランプを買いに行っからもう結構経ったが、一向にミ

ラルが帰って来る気配がない。一応部屋は別々なので、既に部屋に戻っているという可能性も考えられなくはないが、ミラルなら一度この部屋に来て、ランプの購入を報告するハズである。

「それはないだろ。アイツはそんなに方向音痴じゃないし、ランプくらいならすぐ見つかるだろ」

ベッドの上でゴロゴロしながら、チリーはぶっきらぼうに答える。「それはそうだけど……」

あまり心配する素振りを見せないチリーとは逆に、ニシルは心配そうな表情でもう一つのベッドに腰掛けている。

「僕は捜しに行くべきだと思う」

「却下だ。ミラルなら大丈夫だろ」

何を根拠に言っているのだろう。チリーの態度からは「面倒臭い」という意思しか伝わらない。とてもじゃないがミラルを信頼して言っているとは思えない。

そんなチリーの態度に苛立ちを覚え、ムツとした表情になると、不意にニシルは立ち上がった。

「もういい。僕だけで捜しに行く！」

ニシルはそう言い放つと、早歩きで部屋の外へと出て行った。

「……」

そんなニシルの背中を一瞥し、チリーは身体を起こすと頭をポリポリとかく。

「あーわかったよ！ 俺も行くから待ってくれ！」

チリーは立ち上がると、急いでニシルの後を追いかけた。

episode 2「Opening-2」

まどろみの中で、思い返すのは潮の香りとおぼろげな記憶。

ユラユラ揺れる小舟の中、少女は一人横たわる。

ここがどこかもわからぬまま、自分が誰なのかもわからぬまま。

ただ、横たわる。

揺れる小舟の中、心の安息を求めた少女は、己の記憶に蓋をした。

辛い記憶に、蓋をした。

「う……ん……」

まだ視界がぼやけている。ぼやけたままでもわかるのは、目の前にあるのが床だと言うことだ。どうやらうつ伏せに倒れているらしい。

「……あれ？」

手が動かせない。右手首と左手首が、自分の背中 of 辺りで縛られているのが、感覚でわかった。足も同じように、縄で縛られているようだ。全く身動きがとれない。

「気がついたかな……？」

聞き覚えのない声だ。つい先程（とは言っても意識を失ってからどれくらい経っているのかわからないため、先程とは言えないのだが）揉めた兵士の男の声とも違う。

「誰よ……？」

静かに問う。ここでパニックになって騒いだところで何の意味もない。まずは状況判断だ。この男から何とかして自分の置かれている立場を把握しなくてはならない。

「私か？ 私はゲルビア陸軍フェキタス部隊隊長の……」

コツコツと歩く音が聞こえる。男はミラルの元へ近づいて来てい

るらしい。

足音が止まる時には、ミラルの目の前に男の足があった。男が屈むと、ミラルにも男の顔が見えた。角刈りで、筋肉質な顔をした中年男性だった。

「エルピスだ。今君がいるのは、ゲルビア陸軍基地フェキタス支部の隊長室、つまり私の部屋だ」

エルピスと名乗った男はふふんと鼻を鳴らした。

相手の素性、所在地等が判明したのは良いのだが、身動きが取れないのはどうしようもない。中々帰ってこないのを不審に思ったチリー達が助けに来るのを期待することしか、今のミラルには出来なかった。

何にしても、町の外ではなくて良かった。

「何で軍がこんなことすんのよ……！ 私が何したって言うのよ！」

縄を何とかしようともぞもぞ動くが、どうにも縄は解けない。やはり助けを待つしかないようだ。

「君を連れて来た兵士の話によると、君は我らがゲルビア帝国を侮辱したそうじゃないか。いかなあそういうのはあ……」

あの程度で侮辱だと言うのか。否、侮辱などしていない。どうやらこの隊長は、あの兵士の無茶苦茶な話を鵜呑みにしているらしい。それとも、同じ考え方なのか。どちらにせよ、ロクな連中ではないのは確かだった。

「私をどうしようってのよ……？」

ミラルの言葉に、エルピスはニヤリと笑った。その笑みに嫌悪感を覚え、ミラルは背筋に寒気が走るのを感じた。

「そうだね……我が隊の慰安婦なんかどうかね？」

「慰安……婦……？」

ミラルが怪訝そうに問うと、エルピスはミラルの耳元でボソボソと何かを囁いた。

エルピスが囁き終わる頃には、ミラルの顔は青ざめていた。

「ふ、ふざけないでっ！ 誰がそんなことするもんですかっ！」
「良いねえ。そういう気の強い子も、需要があつて悪くないよ」
エルピスのその言葉に、ミラルは更なる悪寒を覚えた。

「ああ、あの娘ね。五分くらい前に、確かにランプを買つてつたよ」
ミラルがランプを買つた雑貨店。チリー達がその店員に栗色の髪で釣り目の女の子がランプを買わなかったか、と問うと、店員は快く答えてくれた。

どうやら、ミラルがランプを買つたのはこの店らしい。

「ランプを買えてるのに帰つて来ないつてことは、やっぱり何かあつたんだよ」

「だな……。まさか誘拐されたとかじゃないよな……」

「でも、ミラルを誘拐するメリットが性的なこと以外に思いつかないよ……」

「……お前ミラルを何だと思つてんだよ」

呆れ顔でそう言ったチリーへ、ニシルは冗談だよ、と笑つて見せた。

「とりあえず周辺を探してみようぜ」

チリーの提案に、ニシルはコクリと頷き、二人で店の外へ出て行った。

「ミラルー！ ミラルー！」

二人でミラルの名前を呼びながら、周囲を捜してみたが一向に見つかる気配はなかった。

「つたく……何で王様捜さなきゃいけないのにミラルまで捜さなきゃなんねーんだよ！」

「どこ行つちやつたんだろ……」

ニシルが呟き、二人共が「ミラル誘拐説」を真剣に考えようとしていた時だった。

「チリー、アレ！」

ニシルが指差した路地裏には、泣きそうな顔で小さな男の子が立っていた。

チリー達は路地裏に入ると、男の子の元へ駆けよった。男の子の傍には、ミラルが落としたのであるうランプの入った袋が転がっていた。

「これ、ミラルが落としたんじゃない!?」

「だろうな……。おい、どうした? 何があつたんだ?」

チリーが問うと、男の子はついに泣きだし、嗚咽混じりに説明し始めた。

「あのね……。っ! お姉ちゃんが……。っ! 僕を助けてくれて……。それが原因でっ……。! お姉ちゃん、ゲルビアの兵士つて人に連れていかれて……」

ゲルビアの兵士は名前ではないと思うが、子供の言うことなので一々つつこまない。それに、この男の子のおかげで、ミラルが誘拐されたのだと確信することが出来た。

「連れて行かれたって……。ミラル、ホントに誘拐されたっばいね……」

「だな……。面倒なことに巻き込まれやがって……」

悪態を吐き、チリーは嘆息する。

「でもミラル、何をしたんだろ……」

「さあな。でもこの子の話じゃ、悪い事をした訳じゃなさそうだし……。ニシル、フェキタスには確かゲルビア軍の基地あったよな?」

「うん。でもそれが……」

ニシルは少し不思議そうな顔をしたが、すぐに胸の前で手を叩き、そついうことか、と呟いた。

「ああ、行くぞ。位置は大体わかるよな?」

フェキタスに来る前、迷ったりしないように道中で地図を念入りに確認しているため、基地のような目立つ建物の場所ならすぐわかる。ニシルとミラルに限っての話なのだが……。

「うん！」

チリー達は男の子に礼を言い、心配しなくて良いと安心させると、フェキタスにあるゲルビア軍の基地に向かって走り出した。

目を覚ましてから数分、寝返りを繰り返して、何とか自分のいる部屋がどういふ部屋なのか確認することが出来た。おかげで服が埃まみれだ。

かなり殺風景な部屋で、灰色の壁と灰色の天井、幾つかの窓と出入り用のドア、後は簡素なベッドと必要最低限の用具と銃だけが置かれた机と椅子だけだった。無論、ドアは閉じられている。

やはり自力で脱出するのは不可能なようだ。

「ふむ……。諦めた様子が見えないね。両親が助けに来るとでも思っているのかい？」

「お生憎様。私には両親なんていないわ。いたとしても、私は顔も覚えていないもの」

エルピスの言葉に、ミラルはすました顔で答える。

「では誰の助けを待っているのかな？」

「……仲間よ。とびつきり信頼出来る仲間」

ミラルがそう言った時だった。

勢いよくドアが倒れ、中に兵士が一人倒れ込んで来る。

「ッ！？ 何事だッ！？」

部屋の中に、少年が二人、ゆっくりと入って来る。ミラルにはそれが誰だかわかっていた。必ずここに来るのだと信じてやまなかった。

「チリー！ ニシル！」

チリーとニシルである。どうやら二人はこの基地に侵入し、ミラルを助けるためにこの部屋まで来たようだ。

「おお悪い。ローププレイの途中だったか」

「馬鹿っ！ 何ふざけてんのよっ！ どう考えても捕らえられてる

だけでしょ私！ ローププレイなんかしてないわよ！」

眩き、いそいそと部屋を出ようとするチリーを、ミラルは怒鳴りつけた。

「そこまで元気なら大丈夫そうだな」

チリーはニツと笑うと、エルピスの方を向いた。

「何なんだお前達は……ッ！？ 他の兵士達はどうした……！？」

「他の兵士達……ああ、アイツらね」

そう言っつてチリーは部屋の外を指差す。そこには何人かの兵士が廊下に倒れ伏していた。

「あんまり弱いんでボコつちまったよ。な、ニシル」

「だね。訓練が足りないよ訓練が」

そう言っつて、ニシルはニヤニヤと笑った。

「ふざけるな……ッ！ 貴様ら三人共反逆罪だッ！！」

憤慨し、怒号を飛ばしたエルピスは、傍にある机の上の銃を手に取り、チリー達に向けた。

「死ねエツ！」

エルピスの声と共に銃声が鳴り響き、銃弾が発射される。

「よつと」

次の瞬間、弾丸はチリーに直撃 するハズなのだが、聞こえたのはチリーの叫び声ではなく、金属音だった。

「な、何だ……！？ いつの間にソレを……どこから取りだしたんだッ！？」

チリーの身を守っていたのは一本の大剣だった。己の身の丈程ある大剣を盾にし、チリーは弾丸を防いだのだ。

「貴様……能力者……ッ！？」

エルピスの言葉に答えようともせず、チリーはエルピスに向かって駆け出した。

「うわあああッ！！」

エルピスの叫び声が聞こえた時にはチリーの手は大剣は握られていなかった。

「気絶でもして反省してるッ！」

鈍い音がして、エルピスの顔面にチリーの拳が直撃する。エルピスはそのまま仰向けに倒れ、気を失った。

「よっし。いっちょ上がり」

チリーはエルピスが倒れたのを確認すると、腕を組んで得意げにニツと笑った。

ミラルは無事、チリー達によって救出された。

結果的に、ゲルビア陸軍基地フェキタス支部は、チリーとニシルのたった二人だけでほぼ壊滅状態となってしまうた。とは言え、エルピスが兵を集め、独断で勝手に作ったような基地らしく、兵力が弱いのは当然とも言えた。

フェキタス町民達は、基地を壊滅状態にしたチリー達を称賛した。なんでも、ゲルビアの兵士の横暴さには前から腹が立っていたらしく、壊滅させてくれてスカツとしたとのことだ。

お礼として、町民達の善意で食料等をいくらか分けてもらったため、チリー達は住民達によくお礼を言い、宿で一晩過ごす、次の町、エリニアへと旅立つことにした。

「まったく……ホント無茶ばっかするんだから」

エリニアへと向かう汽車の中、チリーの正面に座るミラルが溜息を吐く。フェキタスでの事件のことだろう。

「まあそう言うなって。お前も助かってんだから良いだろ」

「うん……それは、まあ……ありがと」

仄かに頬を染めつつ、ミラルは呟いた。

「次は……エリニアだっけ？」

「ああ。フェキタスから更に西つつつたら、まずエリニアだろ」

ニシルの問いに答えると、チリーは片手に持っていた地図を広げ、エリニアを指差す。

西。テイテスの占い師が、王の居場所として指定した方角だった。

「とにかく、もう無茶はしないでよ」

「どうだろうな……。まあ」

チリーは真横の窓を開けた。心地よい風が、汽車の中へと吹き込んで来る。

「何とかなるだろ」

そう言って、チリーはニッと笑った。

episode 3「East survivor - 1」

東に、国があった。

独自の文化を持つ、あまり大きくはない島国だった。小さいながらも発展していたその国は、ある秘密を抱えていた。

その秘密を原因に、国は滅びた。

焦土だけを、残して。

「やっと着いたか……。かなり退屈だったぜ」

駅に到着した汽車から降りると、チリーは持っていたトランクケースをその場に置き、グツとのびをした。フェキタスからエリニアに到着するまで、汽車で二時間。チリーを退屈させるには十分過ぎる時間と空間であった。

「僕は、最初のボートの旅よりは何十倍も快適だったと思うよ」

チリーに続いてニシルも汽車から降りて来る。

「退屈つて……。アンタらほとんど寝てたじゃないの……。私の方がよっぽど退屈だったわよ」

呆れた顔で降りて来たのはミラルだった。如何にも気だるそうに車輪の付いたトランクケースを引きずっている。

「まあとにかく。エリニアに到着だ」

フェキタスを出たチリー達は、その更に西へ向かうため、ここエリニアまで汽車に乗って来た。エリニアはフェキタスよりは大きな町で、アギエナ国の首都でもある。

「この名産つて何かな……」

「何だっけなあ……。町で調べてみようぜ」

「名産より先に、王様でしょ」

呑気な会話をしているチリーとニシルに、呆れ顔でミラルはそう

言った。

「この町にいるかなあ」

「どうだろうな……。まあ、とりあえず捜すか」

チリーとニシルが、そんな会話をしていた時だった。

汽車の中から中年くらいの男が降り、そろそろとチリーのトランクケースに近づいている。

チリーとニシルは会話に夢中で、ミラルは気付かずに地図を眺めている。男はトランクケースをそっと抱えると、すぐに全速力で駆けだした。

「ッ!? 俺の荷物ッ!」

男が駆け出してやっとな気付いたのだろう。チリーは逃げる男を指差して叫ぶ。

「荷物盗られるなんて……ダサいよチリー」

そう言っただけでニシルはチリーを指差してケラケラと笑っている。呑気なものだ。

「うるっせえ! 笑ってる場合かッ!」

「そうよ! 追いかけるなよ!」

チリーとミラルは(ニシルはまだケラケラと笑っている)急いでトランクケースを抱えた男を追いかけた。しかし、二人が男に追いつく前に、鈍い音がして男はその場にしちもちをついた。

「ッ!?」

男の目の前に一人の青年が立ちはだかったからだ。

端正な顔立ちの、長身の青年であった。年齢は、二十代のようにも、十代後半のようにも見える。短く切り揃えられた髪型からは、清潔な印象を受ける。

「な、何だお前! そこをどけッ!」

男が怒声を上げるが、青年は腰に両手を当て、仁王立ちのまま動こうとしない。

「そのトランクケースは貴方の物ではないハズだ。今なら見逃す、ちゃんと持ち主に返すんだ」

真摯な眼差しで、青年は言い放った。チリーとミラルは、その状況に呆気にとられ、ただ立ち尽くして青年を見ていた。先程までケラケラと笑っていたニシルでさえ、笑うのをやめて青年の方へ視線を向けている。

「うるせえッ！ お、お前には関係ないだろ！！」

男の言葉を聞き、青年は残念そうに溜息を吐いた。

「そうか……。なら仕方がないな」

「ハア！？ 何が仕方な」

男が言い終わらない内に、男の腹部に青年の膝が食い込んでいた。

「か……はア……ッ」

口から胃液を吐きだしながら、男はその場にドサリと倒れた。

「一応加減はしてある。これに懲りたらもう盗みなんてするなよ」

青年はそう言うのと、男が抱えているチリーのトランクケースを強引に奪い、チリーの方へ歩み寄る。

「このトランクケース……君のだろ？」

「あ、ああ……。ありがとう……」

丁寧に青年から差し出されたトランクケースを、チリーは頭を下げながら受け取る。

「困った時はお互い様だよ」

青年はニコリと、爽やかに微笑んだ。が、不意にピタリと表情が固まった。

青年と、ミラルの目が合う。

「あの、何か……？」

ミラルが問うと、青年は何か考え込むような表情を見せた。

「君は……」

「……？」

「いや、何でもない。気にしないでくれ」

何かを言いかけたが、青年は気のせいかと呟き、首を左右に振った。

「それじゃ、俺はこれで」

もう一度微笑み、そう言い残すと、どこかへと去ってしまった。

「あの人……」

怪訝そうな表情で、ミラルは青年の背中を見つめていた。

追われている。そんな意識が、青年の中にはずっとあった。移動中は勿論、宿での寝食の際すら誰かに監視されているような気がしている。否、監視されている。

故にここしばらく安眠など一度も出来ていない。ベッドの中では常に意識を研ぎ澄まし、いつ襲われても対抗出来るようにしている。

いい加減休みたいのだが、姿を見せない追跡者は一向に休ませてはくれない。時折感じる殺意から察するに、追跡者は自分を殺すつもりでいるのだろう。

エリニア……。ゲルビア帝国を目指し、ココまで来たは良いが、地図から考えてゲルビア帝国はまだ遠い。それまでの間ずっと追跡者の影に怯えなければならぬのか……。

「ふう……」

青年は溜息を吐いた。

「ん、兄ちゃん、どうかしたのかい？」

不意に声をかけられ、慌てて返事をする。

「いえ、何でも……すいません」

市場で買い物途中であった。青年は買った物（主に服などの生活用品）を受け取り、お金を渡すとその場を離れた。

恐らく、今の自分は相当衰弱しているだろう。なんせここ一週間程まともに眠れていないのだから。自分が追跡者だったとしたら、確実に今を狙う。

そろそろ限界かも知れない。そんなことを考えつつ歩いていると、いつの間にもやら大通りに出ていた。沢山の人や馬車が行き交う大通りの中でも、青年を追跡する気配は消えない。いや、むしろ今まで

より近く感じられた。

「やあ、青蘭せいらん」

「ッ!?!」

不意に、耳元で囁かれた自分の名前。青年の額を嫌な汗が流れる。「よく頑張ったけど……そろそろ限界みたいだね？ そうだね？

青蘭？」

青蘭と呼ばれた青年はゴクリと唾を飲み込んだ。

間違いない。この声の主こそ、ここしばらく青蘭を狙い続けていた追跡者だ。

「東国とうこくが消えて寂しいよね？ 仲間がいなくて寂しいよね？ ね？

そうだね？ 青蘭？」

耳元で疑問符を繰り返す声に、青蘭は苛立ちを覚えたが、今はそんなことよりも如何にこの追跡者から逃れるかだ。

衰弱した今の自分では、確実に殺される。

「でも心配しなくて良いよ。すぐに僕が青蘭を仲間の所に連れて行くからね？ 仲間の所に行きたいよね？ そうだね？ 青蘭？」

仲間の所に連れて行く……。やはり追跡者は青蘭を殺すつもりらしい。

一刻も早く追跡者から離れなくては……。

「今逃げようと思ったね？ そうだね？ 青蘭？」

見透かされている。追跡者は青蘭の耳元から顔を離す。

「逃げてみても良いよ。でも衰弱し切った君が僕から逃げ切れるとは思えない。自分でもわかってるんだよね？ そうだね？ 青蘭？」

追跡者の言う通りだ。例え逃げ切れても、追跡者は必ず青蘭をもう一度見つけ出すだろう。

「駅での事件が弱った身体に更なる負荷を与え、今青蘭は体力をかなり消耗している。そうだね？」

「どうやら何もかもお見通しらしい。だが、こんな所で死ぬ訳にはいかない。」

青蘭は追跡者から逃れるため、思い切り駆け出した。

「無駄な消耗を避けるために能力は使わない……。そうだね？ 青蘭？」

大通りの真ん中に立っている小柄な男　　追跡者は走っている青蘭の背中を見つめ、ニヤリと笑うとその背中を全速力で追いかけた。

「ねえ、あの人。さっき駅で助けてくれた人じゃない？」

チリー達が大通りに出ると、不意にミラルが大通りの真ん中辺りを指差す。

ミラルが指差した方向をチリー達を見ると、確かにそこに立っていたのは、先程駅で盗難にあったチリーを助けた青年であった。

その青年の背後を、小柄で、仮面を付けた男がベツタリと張り付くように立っていた。

「だな……。でも後ろに立ってるあの妙な男は何だ？」

「多分、同性愛者なんだよ二人共。チリー、そつとしいてあげて怪訝そうな顔をしていたチリーは、ニシルの言葉になるほど、と頷く。

「ば、馬鹿っ！ アンタ達何言ってるのよ……！ お、男の人同士なんて……っ！」

何故かミラルは頬を赤らめ、頬に両手を当ててきゅーきゅーわめいている。

ミラルが頬を赤らめている理由が、チリーには到底わかるはずもなく（ニシルはわかったらしく、クスクスと笑いを抑えている）、ミラルを眺めつつ首を傾げるばかりだった。

「あ、おい。アイツ走りだしたぞ」

先程まで立っているだけだった青年は、突如として走り始めた。まるで逃げているかのようだ。

青年が逃げるように走りだしてから数秒後、青年の後ろに立っていた男も、後を追うように走り始めた。

「ねえ、あの人が逃げてるんじゃないかな？」

「あの変な男からか？」

チリーの問いに、ニシルはコクリと頷く。

「僕達も追ってみようよ。あの人が困ってるなら、チリーは恩返しするべきだしね」

ニシルの言葉に、チリーはだな、と頷いた。

「よし、行くぞ」

「うん」

「男の人同士だなんて……っ！」

コクリと頷いたニシルの隣で、ミラルは未だにきゃーきゃー騒いでいた。

そんなミラルの姿に、チリーは呆れ顔で溜息を吐いた。

「いつまでやってんだ……。ほら、行くぞ」

「え、あ……うん……って、ちょっと待ちなさいよ！」

やっと正気に戻ったらしく、ミラルは慌てて走りだした二人の後を追いかけた。

追跡者は、青蘭が全快の時なら容易に逃げ切れる程度の速度で追いかけて来るのだが、先程から青蘭と追跡者の距離は縮むばかりだ。やはり、青蘭はかなり衰弱している。逃げ切れることは不可能に等しい。

「諦めて死んで楽になった方が良い……。でも諦められない。そうだね？ 青蘭？」

後ろから追跡者が問いかける。が、答えている余裕などなく、青蘭は黙ったまま走り続ける。

限界に近い。自分でもわかってる。必死に走っているが、今にも足が纏れてしまいそうだ。いつ転んで追跡者に捕らえられてもおかしくない。

「かなり消耗してるね？ もうこれ以上は逃げられない……。そうだね？ 青蘭？」

腹立たしいが追跡者の言っていることは本当だ。もうこれ以上は走れそうもない。

せめて町の外くらいにまでは逃げようと思っていたが、それもままならないらしい。まだ大通りすら抜けられていない。

「捕まえた」

青蘭の肩に手が置かれる。追跡者の手だ。ついに……。追いつかれた。

グツと。青蘭の肩に置かれた手から、引っ張られるような力が加えられる。青蘭はその場に仰向けに倒された。

背中や腰に衝撃が走る。

追跡者は身体を起こそうとする青蘭の前に立ち、ニヤリと笑った。「諦めた方が良い。わかってるね？ そうだね？ 青蘭？」

じつとりと。額に汗が滲む。青蘭を見降ろすこの仮面の男。追跡者からは、明確過ぎる程の殺意が向けられている。

「何故……俺を殺そうとする？」

大方の予想はついているのだが、あえて問う。この男が何故自分を狙うのか。自分の意思で殺そうとしているのか、それとも誰かから命じられて殺そうとしているのか。

「殺される前に殺される理由くらいは知っておきたい。そうだね？
青蘭？」

いい加減疑問符を繰り返すこの男の口調には、ぶん殴ってやりたいくらい苛立ちを感じるのだが、残念なことに今の青蘭にはぶん殴れる程の体力がない。

「良いよ。在り来たりな言葉だけど冥土の土産ってやつだね？ ありがたく聞くんだよ？ 青蘭？」

疑問符を繰り返し、男はクスリと笑った。

「東国戦争……覚えているね？ 青蘭？」

東国戦争。その単語を耳にした途端、疲労と死への恐怖で弱気になつていた表情が一変し、怒りに歪んだ。

目の前でクスクスと笑う追跡者を、青蘭は力いっぱい睨んだ。

「顔付きが変わったね？ 青蘭？」

「お前……ッ！」

「察しが良いね？ 既に青蘭の殺害を僕に依頼したのが誰かわかったんだね？ そうだね？ 青蘭？」

グツと。奥歯を噛みしめながら追跡者を一層強く睨みつけた。

「ゲルビア帝国……ッ！」

怒りと憎しみを込めて、青蘭はその名を呟いた。

「別に殺す必要はないよ？ アレの在処を喋りさえすれば、命までは取らないよ？」

「アレ……？ 何のことだ……？」

「往生際が悪いね？ なら、東国戦争で死んだ仲間達の元へ行くしか、選択肢はないね？ そうだね？ 青蘭？」

東国戦争 否、アレが戦争などと呼べるものだろうか。

アレはただの 一方的な虐殺である。

何の宣告もなく平和主義国である東国全土を襲い、ゲルビア帝国は国民を残らず焼き払った。最新技術によって造られた大型爆弾は生物だけでなく土地すら焼き尽くし、今や東国全土が焼け野原……。草木一本生えない、爆弾に含まれていた化学物質により突然変異を起こした奇怪な生物が徘徊する地獄のような場所と化していた。兄に助けられ、青蘭だけは無事生き残っているが、青蘭は東国戦争で全てを失っていた。

「貴様らは……ッ！ 東国全土を焼き払い、地獄に変えても尚足りないと言うのかッッ！」

力を振り絞り、よろめきながらも青蘭は立ち上がる。

「無駄だね？ そのボロボロの身体で僕と戦おうという意思だけは称賛しても良いけどね？」

追跡者が仮面の裏で、ニヤリと笑った気がした。

追跡者は右手を横に広げると、大きく青蘭目掛けて振った。

「ッ！？」

風を切る音がして、追跡者の手の平から伸びた鉄製の細いワイヤーが、青蘭の首に巻き付く。

いつの間にか青蘭達を取り囲んでいた人々の数名が、事態を把握し、悲鳴を上げた。

「これは……神力……ッ！」

「そういえば言っただけでなかつたね？ 僕も能力者だよ？」

グッと追跡者が右手を引くと、青蘭の首を絞めているワイヤーが更にキツく青蘭の首を締めあげる。

「ぐ……ッ！」

首に巻き付いたワイヤーを両手で握るが、鉄製であるため、衰弱した今の青蘭では千切れそうにない。否、全快であってもこのワイヤーを千切ることは不可能だ。

「この僕、エトラのワイヤーは簡単には千切れないよ？」

追跡者 エトラがニタリと笑う。

「そろそろ終わりだね？ そうだね？ 青蘭？」

青蘭を絞殺せんとエトラが更に右手を引こうとした時だった。

「ちよつと待ったアツ！」

エトラの右手から伸ばされ、青蘭の首を絞めていたワイヤーは、突如乱入した少年の大剣によって切り裂かれた。

観衆が歓声を上げた。突如現れた少年　チリーが、己の身の丈程もある大剣で、エトラのワイヤーを切断したからだ。

「僕の相手は青蘭だけだったよね？　そのハズだよな？」

エトラは自分の右手から伸びる切断されたワイヤーと、チリーの持つ大剣を交互に見比べながら焦った様子で疑問符を繰り返す。

「これで借りは返したな」

チリーは振り向き、後ろで啞然としている青蘭へと視線を移すと、ニツと笑った。

「お前……」

「チリー！」

人込みをかき分け、ニシル、ミラルもチリー達の元へと駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

ミラルは青蘭の元へ駆け寄ると、心配そうに問うた。

「あ、ああ……」

正直、青蘭は今にも倒れそうな程衰弱しているのだが、いらぬ心配をかけぬため「大丈夫だと答えた。

「チリー、コイツ……」

「ああ、俺と同じ能力者だ……。ニシル、下がってる」

チリーの言葉にニシルはコクリと頷くと数歩下がった。

「どんな事情か知らねえが、俺の恩人を殺そうってなら……」

チリーは大剣を構え直し、エトラをギロリと睨んだ。

「容赦しねえぞッ！」

素早く、チリーはエトラめがけて駆け出した。

「誰かは知らないけど、邪魔する気だね？　そうだね？」

エトラはそう言うと、右手を真横に振った。すると右手が振られた軌跡の延長線上をワイヤーが駆け、チリーの横から首目掛けて巻きつかんとうねる。

「邪魔だッ！」

チリーがワイヤー目掛けて大剣を振ると、金属音と共にワイヤーは弾かれた。

「ワイヤーを出せるのは右手だけじゃないね？ わかってるね？」

エトラはニヤリと笑うと、今度は左手を横に振った。すると、今度は逆方向からチリーの首目掛けてワイヤーが飛んでくる。

「な　ッ!？」

もう片方からのワイヤーは予想していなかったらしく、反応が遅れたチリーは跳躍する。

「無駄だね？ そうだね？ 少年？」

風を切る音がして、エトラのワイヤーは空中にいるチリーの左足首に巻き付いた。

「げッ！」

チリーの左足首にワイヤーが巻き付いたのを確認すると、エトラはクスリと笑い、左手を素早く引いた。

「チリー！」

ミラルが叫ぶとほぼ同時に、左足首に巻き付いたワイヤーに引張られ、チリーはドサリと勢いよく地面に叩きつけられた。

「ぐ……ッ！」

呻きつつ立ち上がるうとするチリーを見て、エトラは立てないよ？ と笑みを浮かべ、左手を強く引いた。

左足首に巻き付いたワイヤーにより、チリーの身体は地面を引きずられ、エトラの目の前まで引き寄せられる。

「こんの糞飯面野郎がアッ！」

チリーが悪態を吐きながら、大剣をエトラの左手から伸びたワイヤー目掛けて振ろうとすると、エトラがクスリと笑い、右手から伸びたワイヤーで大剣を持ったチリーの手をパシンと鞭打った。

「ぐあッ！」

あまりの激痛に、チリーは持っていた大剣を取り落とす。

「痛いね？ 当然だね？ 鉄製のワイヤーで、鞭の要領で叩かれたら痛いよね？ そうだね？ 少年？」

エトラはクスクスと笑うと、右手のワイヤーでチリーの胸部を強く鞭打った。

「がアッ！」

苦痛で呻き声を上げるチリーを見下ろしながら、エトラはクスクスと笑った。

「チリー！」

泣きそうな顔でミラルが叫ぶと同時に、先程まで黙っていたニシルが拳をギュツと握りしめた。

「アイツ絶対許さない。僕が一発ぶん殴ってくる」

肩をいからせながらチリーとエトラの元へ駆けだそうとしたニシルを、そつと青蘭が制止した。

「何で止めるの……！？」

「俺が行く……。アイツを助けた後、俺は多分倒れるだろうから、後のことを頼む」

真摯な眼差しで、ニシルの目を真っ直ぐに見る青蘭に、ニシルは渋々頷いた。

「ありがとう」

そう言うつと、青蘭は凄まじい速度でチリー達の元まで駆けた。

「変なもん左足に巻き付けやがって……！」

悪態を吐いたチリーをワイヤーで叩くと、エトラはそのワイヤーをチリーの首に巻き付けた。

「そろそろ死ぬべきだね？ そうだね？ 少年？」

ッ！！」

「うわあああああッ！」

一発。

エトラの仮面を付けた顔面にチリーの右拳が直撃する。

仮面は音を立てて碎け、その中から気絶した男の顔が露わになり、エトラはそのままその場に倒れた。

「よし！ 終わり！」

青蘭と共にその場に倒れているエトラを見下ろし、チリーは両手をパンパンとはたくと、ニツと笑った。

ゆっくりと。閉じていた目を開くと、最初に視界に入ったのは木造の天井だった。

「あ、大丈夫？」

青蘭が身体を起こすと同時に、心配そうな様子で少女が声をかける。

声のした方へ視線を移すと、栗色の長い髪の少女が椅子に腰かけていた。青蘭が駅で出会った少女である。

「もう三日も寝てたのよ？」

青蘭が目を覚ましたことに安堵したのか、少女はニコリと微笑んだ。

「……ここは？」

「私達の借りてる宿よ。貴方がどの宿を借りてるのかわからなかったから……ごめんね、勝手なことして」

申し訳なさそうに言う少女に青蘭は礼を言うと、辺りを見回した。どうやら本当に彼女達が借りている宿らしく、青蘭が数日前に借りた宿とは別の部屋だった。彼女の話から察するに、青蘭はこの部屋のベッドで三日も寝込んでいたらしい。

「こちらこそすまない。迷惑かけたな」

「いえ、こちらこそ。あの馬鹿を助けてくれて、ありがとう」

あの馬鹿？ 助けた？

少しずつ、青蘭の中で三日前 青蘭が倒れる前の記憶が蘇る。

青蘭を追跡してきた仮面の男、エトラに殺されかけていたところを、大剣を持った白髪の少年に助けられた。そしてエトラとの戦闘で危機に陥っていた彼を、最後の力を振り絞って青蘭は助けたのだ。

「いや、助けられたのは俺の方だ。あの時彼が来なければ、俺は確

実に殺されていた」

青蘭は苦笑し、目の前の少女の顔をまじまじと見つめた。

「あの……何か？」

栗色の髪、強気そうな釣り目……過去に、どこかで見たような少女だ。もっと彼女が小さかった頃に……。

「いや……そういえば自己紹介がまだだったな。俺は青蘭」

「あ、そうね。私は、ミラル」

ミラル。

その名前を、青蘭は知っている。もう何十年も前の記憶だが、確かに覚えている。

ミラル。彼女は過去に、青蘭と出会っている。が、彼女はそのことを覚えていないらしく、「青蘭」という名前を聞いても反応を示さなかった。

「もしかして、君は」

青蘭が言いかけた時だった。

「ただいまー」

ボタンとドアが開き、中に二人の少年が入って来る。

あの時青蘭を助けた白髪の少年と、その少年が危機に陥った際、真っ先に助けようとした少年だった。

チリー達が部屋に戻ると、既に青蘭は目を覚ましていた。

「お、目が覚めたのか」

「すまないな。巻き込んだ拳句、いらぬ迷惑をかけた」

青蘭が申し訳なさそうに言うと、ニシルは気にしないで、と微笑んだ。

「あの時止めてくれなきゃ、僕は例えチリーを助けられたとしても大怪我してたと思う。そのお礼だと思って、これくらい気にはしないで」

「俺なんて二回も助けられたしな」

そう言ってチリーは軽く笑った。

「そうか……。ありがとう」

「そういえばアンタ、名前は？」

チリーが問うと、青蘭はニコリと微笑んだ。

「青蘭だ。君達は？」

「僕はニシル。んで、こつちがバカチリ」

ニシルはチリーを指差し、ニヤニヤ笑いながら青蘭の問いに答えた。

「バカは余計だろ！」

チリーがニシルを軽く小突くと、ニシルはすかさず小突き返した。そのまま何度もお互いに小突き合い、低次元な争いをしている二人を眺めながら、青蘭は苦笑した。

「青蘭は何をしている人なの？」

不意に、ミラルが問う。

「いや、仕事はしていない。少々訳があつてな……。ゲルビア帝国へ向かう旅の途中だ」

そう言った瞬間、青蘭の表情に影が差したのを、ミラルは見逃さなかった。

「良かったら、話してくれない？」

ミラルの言葉に、青蘭は沈黙する。

低次元な小突き合いを続けていたチリー達もピタリとそれを止め、青蘭の方へ視線を移した。

「お前達になら、話しても良い……。かもな」

そう呟き、青蘭はコクリと頷いた。

「東国戦争って、聞いたことあるか？」

青蘭の問いに、ミラルはコクリと頷いた。

「何だっけそれ」

と、問の抜けた顔で呟くチリーに、ニシルが概要を説明する。

「ゲルビア帝国が随分前に大量の軍隊で東国って国を襲った事件だよ。相当有名な話なのに、何で知らないの？」

「興味がなかったからな」

「少しは島の外のことに興味を持って！」

ニシルがまたしてもチリーの頭を小突いたのを皮切りに、再び小突き合いという低次元な争いが、二人の間で勃発した。

「俺は、その東国の生き残りだ」

青蘭の言葉に、ミラルは青蘭に目を据えた。

チリーを小突いていたニシルも手をピタリと止め、ミラルと同様に青蘭に目を据える。

チリーはどういうことなのかまったくわかっておらず、は？と間の抜けた声を上げながら、ニシルとミラルを交互に見ている。

「東国戦争の最中、俺は兄さんに助けられ、辛うじて東国から逃げ出したんだ……。俺が東国を出てから数日後、辿り着いた国をうろろしている間に、東国を完全に滅ぼしたという話を聞いた」

ギョツと。青蘭は拳を握りしめる。

「俺は……東国を滅ぼしたゲルビアが許せない。何らかの理由があったにせよ、あそこまでする必要はなかったはずだ……。俺がゲルビアへ向かう目的は、東国への攻撃を命じたゲルビア国王を殺すためだ」

青蘭の、強い意志の込められた「殺す」という言葉に、一瞬場が凍り付く。

数秒の沈黙の後、チリーはそうか、と呟いた。

「だったら、丁度良いじゃねえか」

「え？ 何がよ？」

ミラルが不思議そうに問うと、チリーはニツと笑い、青蘭の元へ歩み寄る。

「旅するんなら、一緒に行こうぜ？」

「え……？」

チリーの提案に、一瞬青蘭は啞然とした。

「俺達も訳あって旅の途中だ。丁度ゲルビアはテイテスから西の方角……。道は同じだ」

チリーの言葉に、考え込むような素振りを見せていたニシルがなるほど、と呟いた。

「一緒に行こうぜ。青蘭」

そつと。チリーが青蘭に手を差し伸べる。

一緒に行こうぜ。青蘭。

一瞬、手を差し伸べているチリーが、青蘭の中で兄の姿と重なって見えた。

「……わかった」

苦笑し、青蘭は差し伸べられたチリーの右手をそつと握った。

「良いよな？」

振り返り、チリーが問うと、ニシルは当然だろ、と親指を突き立て、ミラルは構わないわ、と微笑んでいた。

「んじゃ、決まりだな」

ニツと笑ったチリーにつられて、青蘭も微笑んだ。

幼い頃、兄に逃がされ、東国を出てからもう何年も経つ。

しばらくとある家にお世話になってはいたが、ある程度成長するとその家も出、ただゲルビアへの復讐のためだけに旅をして来た

独りで。

目の前で笑っている三人……これから、共に旅をすることになる三人。仲間という感覚を、青蘭は久しぶりに感じた。

「それじゃ、お前達のことも教えてくれないか？」

「何が？」

青蘭が問うと、チリーは不思議そうな顔で問い返した。

「俺だけ過去語ったんじゃ不釣り合いだろ？ お前達の旅の理由、教えてくれないか？」

青蘭の言葉に、チリーは頷いた。

「えっと……そうだな……」

チリーがどう説明しようかと一所懸命に考えていると、ミラルが

ポンとその肩を叩いた。

「私が説明するわ」

静かに、ミラルがそう言う。

「バカチリじゃ説明出来そうにないしね」

「うるせえバーカ！」

クスクス笑うニシルを見て、チリーは低レベルな台詞と共にニシルを小突いた。小突かれたニシルはすぐさま小突き返し、第三次低次元戦争が二人の間に勃発した。いい加減にしてほしいものである。

「テイテスって、知ってる？」

そんな二人をよそに、ミラルは青蘭に問うた。

青蘭はミラルの問いに、コクリと頷いた。

「あの島国だよな？」

ミラルはええ、答えると、話を続けた。

「テイテスは、私達の故郷なの」

そう言ってミラルは私は違うけど、と付け足した。

「そのテイテスを治めている王様が、突然姿を消したの」

この言葉を皮切りに、ミラルは語り始めた。

チリー達三人が旅立つに至るまでの、数日間の話……。

episode 6 「Beginning - 1」

「核」と呼ばれる物質がある。

テイテスと呼ばれる島国は、その「核」と呼ばれる謎の超物質によつて構成されている。「核」は周囲にある物質を引き寄せ、一つの島を形成しているのだ。

「核」はテイテスの初期王によつて作られたが、その詳しい作成方法などは未だ謎である。「核」について詳しく知る者は、テイテス内でも王族の者だけである……。

「うおらアッ！」

潮風が吹き、波の音が響く海岸の砂浜で、少年の声が響いた。

白髪の少年が、拳を振り上げ、大柄な男に殴りかかつて行く。

男は後ろで一つに縛った長い髪を揺らしながら素早く少年の拳をかわし、少年の腕をガツシリと掴むと、グツと力を込めて握った。

「ぐ……ッ！」

右腕に感じる痛みに歯を食いしばりながら、少年は空いているもう片方の手で男の顔面目掛けて拳を突き出した。が、その拳は男の顔面に届く寸前で男の手によつて止められる。

「クソ……ッ！」

少年が悪態を吐く。

「チリー、もう少し考えて」

男が言いかけたその時だった。

「うおおッ！」

後ろから小柄な少年が殴りかかって来ていた。

「良い奇襲だ」

眩き、男はチリーと呼ばれた少年の腕と拳を掴んでいる両手を、大きく回転させた。

「な　　ッ!?」

チリーが声を上げた時には既に遅く、少年の身体は驚く程あっさりど、まるで風車のように回転し、砂浜の上にドサリと倒れた。

「が、殺気が隠せていない」

男の背後から殴りかかって来る少年の顔面に、男は素早く右手で裏拳を放った。

「うわッ!?」

鈍い音と共に、少年の顔面に男の裏拳が炸裂する。

鼻に当たったらしく、少年は鼻血を流しながらその場へ仰向けに倒れた。

「まだまだ甘　　うお、ニシル!　大丈夫か!」

男は振り返り屈むと、鼻血を流しながら倒れている少年の顔を覗き込む。

「アಂತの……せいだよ」

ニシルと呼ばれた少年は、力なく答えると目を閉じ、カクンと首から力を抜いた。

「ニシルウウウウツツ!」

「いや、死んでねえから」

ニシルの身体を抱きよせ、絶叫する男の後ろから、立ち上がったチリーが冷静に言い放つ。

「なんだよノリが悪いな」

男は呆れたように眩くと、抱き寄せていたニシルの身体から手を離した。

ドサリと音を立ててニシルの身体は再び砂浜の上に倒れる。

「うわ、扱い酷!」

ニシルは目を開けると、身体を起こし、鼻血を拭くと立ち上がって服についた砂をはらった。

「はいはいそこまで。休憩にしましょ」

パンパンと手を叩く音がして、三人が音のした方向へ同時に視線を移すと、そこには栗色の長い髪をした少女が、バスケットを腕にかけて呆れ顔で立っていた。

「おお、ミラルちゃん。いつもすまないね」

ミラルと呼ばれた少女はいえいえ、と微笑むと、バスケットの中をぐそぐそと漁り、中から箱を取り出し、蓋を開けると三人に見えるように傾けた。

「サンドイッチ。食べるでしょ？」

「ありが」

男が言い終わるより早く、チリーとニシルの二人は素早くミラルの眼前まで迫る。

「いただきッ！」

チリーが箱の中のサンドイッチに手を伸ばすが、届くより先にミラルが箱を持ち上げた。

「ちよつとは待ちなさい！ 大体アンタはそそっかし」

言いかけ、ミラルは両手で持っていた箱を片手に持ち替えると、空いた左腕の肘で背後から忍び寄るニシルの腹部に肘打ち喰らわせた。

「ぐっ……！」

完全に不意をつかれ、ニシルは苦しそうに腹部を押さえてうずくまった。

「ニシルも！ 別にあげない訳じゃないんだから……どこかに座って落ち着いて食べれば良いじゃない」

そう言って、ミラルは軽く溜息を吐いた。

「ミラルちゃん、あの木の上で良いんじゃないか？」

男が打ち上げられたのであろう大木を指差す。

「一昨日からあったものだから、既に乾いてるだろ。あそこに座って食べようじゃないか」

男がニツと笑うと、ミラルもつられて微笑んだ。

を取り出し、チリーに手渡した。

「さ、さんきゅ……」

チリーは手渡された水筒の蓋を素早く開けると、中の水をガブガブと勢いよく飲んだ。

「やれやれ、行儀が悪いな」

嘆息し、キリトと呼ばれた男は箱から一つ、サンドイッチを手に取った。

「でも、育てたのはキリトさんですよ」

そう言っミラルがクスクスと笑う。

「いやいや、そういう面は母さんに任せていてだな……」

ゴホンと咳払いをし、キリトはサンドイッチを口に入れた。

「それにしても、ミラルちゃんもこの島にかなり馴染んだなあ……」

「そうですね。もう十年も経ちますし……」

「もうあれから……十年か」

十年前、一人の少女が小舟に乗ってこの島、テイテス島に流れ着いた。最初に発見したのはチリーとニシルの二人であった。

二人は記憶をなくして錯乱している少女を何とか落ち着かせ、何とか大人達と相談して、テイテス島へ住まわせるに至ったのだ。その少女こそ、今こうしてチリー達とサンドイッチを食べているミラルのことである。

未だにミラルがこの島に流れ着く前の記憶は戻っておらず、戻る気配もないらしい。

しかしこの島で暮らしている時間の方が島に流れ着く前より長くなっているため、徐々にミラル自身も無理に過去の記憶を思い出すとしなくなっていた。

「私は、すごく好きですよ……今の生活」

そう言っ、ミラルは目を細めた。

「昔のことか、もう気にならないのか？」

キリトの問いに、ミラルは首を横に振った。

「気にならないと言っ嘘になります。でも、今の生活を壊すよう

な記憶なら……私はいません」

「好きなんだな。この島のことか」

「島も。島の人達も大好きです」

そう言つて微笑み、ミラルはサンドイッチを頬張っているチリーとニシルの二人を交互に見た。

「あ……」

ボソリと。箱に手を伸ばしたチリーが間の抜けた声を上げた。

ミラルが箱を見ると、既に箱の中は空になっていた。隣では得意気にニシルが両手にサンドイッチを持っている。

「両手持ちは反則だろおいッ！」

抗議の声を上げたチリーを、ニシルはフフンと鼻で笑った。

「最初からルールなんてないのさ」

「よし、お前の言いたいことはよくわかった。ちよつと表出る」

「いやココ表だから」

クスクスと笑うニシルに腹を立てたのか、チリーは勢いよく立ち上がるとニシルの目の前まで歩み寄り、ニシルの頭を小突いた。

「痛っ！」

「先手必勝！」

「何が先手だッ!? ただの不意打ちだろバカチリー！」

ニシルまでもが勢いよく立ち上がり、チリーの頭を小突いた。すぐにチリーがやり返し、いつの間にか取っ組み合いのケンカが勃発していた。

「やれやれ……」

そんな二人を眺めながら、ミラルは嘆息し、箱や水筒をバスケットの中に片づけた。

しばらく眺めている内に、力尽きたのか二人はその場に仰向けに倒れ、やるじゃねえか、そつちこそ、などと満足気な顔で話していた。無駄に青春している二人だった。

「なあミラル、お前島の外のこととか覚えてないのか？」

不意に、チリーは身体を起こすとミラルに問うた。

続けてニシルも身体を起こし、うんうんと興味深げな表情で頷いた。

「前にも言ったでしょ？ 私は何も覚えてないわ」
そう言って、ミラルは嘆息する。

「チリー、島の外に興味があるのか？」

キリトが問うと、チリーはニツと笑った。

「当然だろ。俺はこんなちっぽけな島に留まるつもりはないぜ」

「それは僕も同感。やっぱり、外の世界が見てみたいよね」

二人は顔を見合わせ、嬉しげに頷き合った。

「まあ、だったら俺を倒せるくらいには強くなることだな」

キリトは立ち上がると、二人の頭の上にポンと手を置いた。

「今に見てるよ馬鹿親父！ 顔面に風穴空けてやるぜ！」

「おう、楽しみにしておいてやろう」

キリトはニツと笑うと、二人の頭から手を離れた。

そんな光景を眺め、ミラルは微笑んだ。

ミラルはこんな時間が好きだった。何でもないようなこの瞬間が

……。

まるで、こんな平穏な時間が、過去になかったかのように、大切に思えていた。

episode 7 「Beginning - 2」

一人の男が、王の寢室の前を歩いていた。

黒く、艶のある長い髪はまるで女性のように美しかった。

「異常はない……な」

周囲を注意深く見回しつつ、男はそう呟いた。

この城の者は、警戒心が足りなさ過ぎる……。

心の内でそう呟き、男が寢室の前を通り過ぎようとした時だった。

「……!？」

ゆっくりと。こちらへ歩いて来る足音が聞こえている。人影が、

男の前方に二つ。

「貴様らは……？」

右手を二つの人影へかざし、静かに男は問うた。

「マリオン、やれるか？」

男の問いには答えず、静かに、人影の内一人が、もう片方へ問うた。

「無理だろ。俺ら戦闘タイプじゃねえし」

「お前の能力ならちやっちやとやれるだろ」

一人がそう言うと、マリオンと呼ばれた男は舌打ちをする。

「仕方ねえ……ちよっと待ってる」

「貴様ら、一体何者」

男が言いかけた時だった。人影が一つ、瞬時にその場からかき消えた。

「な　　ッ！」

男が表情を驚愕に歪めた時には既に遅く、男の背後には、先程の人影と思しき人物　　マリオンが立っていた。

「これ、疲れるんだよなあ」

嘆息し、マリオンは男の首筋へ素早く手刀を喰らわせた。

「が　　ッ」

短く呻き声を上げ、男はその場に倒れた。

「俺の能力で城の外まで運ぶから、お前はアレクなんたらを連れ出せ」

「……了解」

人影が小さく頷くと同時に、グツと人影の身長が伸び始める。短髪だった髪は、美しく艶のある長髪へと変わる。そしてマリオンを一瞥して嘆息すると、王の眠っている寝室のドアを軽く叩いた。

「で、何なのよ？　すごいものって」

よく晴れた午前中、ミラルが居候させてもらっている家の前までわざわざやってきたチリーとニシルにミラルが問うと、興奮気味のチリーがすげえ、と何度も繰り返した。

答えになっていない。

「すごいと言うより……なんか不思議な感じだけどね」

平静を装ってはいるが、ニシルもやや興奮気味の様子だ。

「だから何なのよそれは？」

「見てのお楽しみ。とりあえず僕らについて来てよ」

ミラルは正直なところ、午前中は家でゆっくりとしたかったのだが、この二人の様子から察するに、相当なものを見たのだろう。ついて行かなければならない辺り、どうやら移動不可能なものらしい。「仕方ないわね」

嘆息し、そう呟くとハイテンションに騒ぎながら、意気揚々と先頭を歩くチリーの後ろを、ミラルはニシルと共にいって行った。

しばらく歩くと、この島の中心辺りとされる森の前に到着した。

「ココって子供だけで入っちゃダメだったと思うんだけど」

ミラルの言う通り、この森への子供の立ち入りは、テイテスの王から直々に禁じられている。

子供のみならず、この森は大人ですら入るのを躊躇う程だ。何があるのかは知らないが、王直々に立ち入りを禁じるくらいだ、余程危険なのかも知れない。

「十七年も生きた俺達を子供扱いすること自体おかしいぜ」

腰に手を当て、胸を張って得意げな顔でチリーは言う。例えそうでも、チリーの言動は基本的に子供そのものなのだが……。

「だよ。僕らももう子供じゃないし、こんな森くらいどうってことなかったよ」

「どうってことなかったって……アンタ達入ったの!？」

軽い口調で言うニシルの言葉に、ミラルは耳を疑う。

「猪とかが数匹いるだけで大したことじゃなかったしな」

「猪って……」

ミラルからすれば猪は十分に大したことなのだが、彼らにはそうでもないようだ。

「行こう」

大量に生えた雑草を踏み分けながら、チリーとニシルは奥へと進む。

「ちょっと、待ちなさいよ!」

慌ててミラルも先を行く二人を追いかけた。

森の中に入ると、見渡す限り大自然。小鳥が囀り、小動物や虫がミラル達の足元を駆け巡る。まるでジャングルだ。

「結構奥だったよな?」

目の前で行く手を阻む枝を押し退けながらチリーが問うと、ニシルはコクリと頷く。

「うん。結構歩いたよ」

会話から察するに彼らは、ミラルが起床するかなり前からこの森の探索を始めていたらしい。

「この森、猪出るんでしょ? 大丈夫なの?」

心配そうにミラルが問うと、ニシルがクスリと笑った。

「大丈夫だよ。僕らで一通り倒しといたから」

軽々とニシルは言うが、二人がかりとは言え普通の少年が倒せる程、猪は甘くない。が、彼らは普通ではなかった。

先日のように彼ら二人はほぼ毎日、キリトと共に特訓を行っている。その日々の積み重ねが、二人を強くしたのだろう。

「そう言えば、今日はキリトさんと特訓しなくて良いの？」

「ああ、今日は親父が寝てたからな。無しになった」

親父　　というのはキリトのことだ。

過去にゲルビアで傭兵をやっていたキリトは、万が一の時のために、チリーとニシルを鍛えている。キリトが二人を鍛え始めたのはミラルがこの島に来た後からだが、それでも既に五年はやっている。故に、二人が強いのも当然である。

「それにしても……アンタ達何でまた森なんかに入ったのよ？」

呆れ顔でミラルが問うと

「「暇だったから」」

と、二人はほぼ同時に笑いながら答える。

「他にすることがなかったのね……」

ミラルは呆れて溜息を吐いたが、二人まったく気にしない様子で、森の奥へとドンドン進んで行った。

森の中を歩き始めて随分と経ったハズなのだが、一向に目的地に辿り着く気配がない。

しばらく歩き続けているため、鍛えている二人はともかく、ミラルの足には次第に疲労が溜まりつつあった。

「まだなの……？」

表情に疲労感を浮かべつつ、ミラルが問う。

「そろそろだ」

チリーがそう答えてから三十秒もしない内に、ニシルが着いたよ、と前方を指差した。

「これ……」

ミラルは目の前に広がる光景に息を飲んだ。

先程まで景色は樹木や雑草に覆われていたのだが、その場所だけは樹木はおろか雑草すら生えておらず、裸の地面が広がっていた。まるで、その部分だけ焼き払われたかのようだった。

そしてその中心　　恐らくこの島の中心とも言える部分。

「すげーだろ。俺達も昨日初めて見た時はビツクリしたぜ……」

黒い宝石のような何かが、そこには埋まっていた。元々黒かったというよりは、何らかの原因で色あせてしまったような色であった。その宝石のような何かは二つに割れてしまっており、本来なら一つの球体として存在していたであろう形である。その宝石のような何か……その破片の間にある地面には、球体が埋まっていたかのような窪みがあった。

「……………」

ミラルは、この光景に言いようのない不安を覚えた。

テイテスは、国としては非常に小規模である。

世界の大半を占める大陸、アルモニア大陸に近接している島がテイテスで、正直国であること自体疑わしくなるような、そんな規模である。

テイテスの大きさは比較するならアルモニア大陸の大国、ゲルビア帝国の首都パンドラと変わらない程度の大きさ　　つまり、大国と言えどもゲルビア帝国の首都内に収まりきる程度の小ささなのだ。

故にテイテス内に区分はなく、村は一つ……つまり島全体が一つの村であり、一つの国なのだ。

それ程小さなテイテスでも、王は存在する。

この島、テイテスを国としたのは初代王のアレクサンダー一世である。現在はアレクサンダー三世が王に該当する。

王も、法も、城も存在し、テイテスは小規模ではあるが一つの国

として成り立ってはいる。

一応王が存在することで国は成り立っているのだが、チリー達三人が森の中に侵入する三日前、いつもなら朝は早いアレクサンダー三世が、既に午後が近いと言うのに向に目を覚まさない。

王の側近を務める者の一人、アグライは今朝から不審に感じていた。

それに、若くして側近となった男、トレイズも今朝から一度も見えない。

王とトレイズの失踪？ この考えが正しいなら、トレイズはともかく王はなんとしても捜し出さねばならないだろう。が、まだそうと決まった訳ではない。

王が、城内にどうか確かめなくてはならない。

アグライとトレイズを除いた他の者は、島内で何かが起きる訳ないと高をくくっているのか、基本的に警戒心に欠けている。

王を起こす役目（と言っても王は基本的に自分で起きるのであまり必要ない）はアグライ自身なので、既に一度起こしに行っているのだが、ドアを叩いても王からの返事はなかった。

昨日は非常に疲れている様子だったので、王はまだ眠っているのだろうと思ったアグライは、起こさぬようそのまま寝かせておくことにしていた。

しかし、流石にこの時間まで目覚めないととなると、失踪していないにしても体調不良の可能性がある。勝手に部屋に入るなど命じられてはいるが、これからもう一度確認しに行き、返事がないようなら中に入ってみるしかない。

そう思い、アグライは王の部屋へと向かった。

王の部屋の前まで来ると、アグライはすぐに二度ドアをノックした。が、数秒待っても王からの返事はない。

「私です。アグライです。どこか調子が悪いのですか？」

声をかけるが、返事はない。

「無礼をお許し下さい！ 勝手ながら、部屋の中に入らせていただきます！」

意を決して、アグライは部屋のドアを開いた。その瞬間に気が付く。王が不用心に鍵を開けたままにしているハズがない、と。

「王……様……？」

アグライは、口を開いたまま啞然とした。

いつもなら王が眠っているハズのベッドの中に、王の姿がないのだ。高級な羽毛布団がはぐられ、シーツが露わになっている。

「王が……王が……！」

アグライの報告により王、アレクサンダー三世の行方を追い、島中が搜索されたが一向に王の姿は見当たらなかった。

アグライ達上層部は、国外へと何者かによって連れされたのではないかと判断した。殺されている可能性も高い。

搜索隊を出そうかとも考えたが、アレクサンダー失踪を公にする訳にはいかない。国から数人の兵と、民間から数人、搜索隊を出すことが決定した。

王の失踪が近隣諸国に知れば、攻め入る隙を与えることになる。国内的にならともかく、王の失踪を国外に知られる訳にはいかないのだ。

テイテスには兵と呼べる者が少なく、国全体の安定等を考えて数人残しておかなければならないので、搜索隊に出せる人数はごく少数だ。故に、民間からでも出さなければ人数が不足し、効率が悪くなるのだ。

森から帰った後、城の付近を通ったチリー達は、木でつくられた看板の前に人だかりが出来ているのを発見した。

「おい、何の集まりだ？」

チリーが二人に問うが、どちらも知らないらしく、不思議そうに小首を傾げている。

「あの、すみません。何かあつたんですか？」

傍にいた男性にミラルが尋ねる。

「ああ、ここからじゃ人が邪魔で看板が見えないのか」

男性の言葉に、ミラル達はコクリと頷く。

「王様が、失踪したんだってさ」

「ッ!？」

まるで他人事のように言う男性の言葉に、三人共が絶句した。

episode 8 「Beginning - 3」

人混みを掻き分け、三人はやつとのことで見板が見える位置まで辿り着く。

「マジか……」

ボソリと。看板の内容を読み終えた驚愕した表情でチリーが呟く。ニシルとミラルの二人も同様に、驚きを隠せない様子だった。

看板に書かれていた内容を要約すると失踪したアレクサンダー王を捜索するため、兵ではない一般の島民から捜索隊を募集すること。事を他国に悟られぬため（攻め込まれるので）、少人数……二、三人くらいがベストらしい。

立候補する者は城へ向かい、担当者のアグライの元で試験を受けなければならぬようだ。

見事王を見つけ出し、無事連れ帰ることが出来た者には多額の報酬が出るらしいが、リスクが高いせいに行こうと言う者は見当たらなかった。

「一般の島民ってことは……」

「俺達でも良いってことだよ……?」

ゴクリと。二人は唾を飲み込んだ。

ずっと、外の世界に憧れていた……。島での生活が不満な訳ではない、ただの好奇心だ。外の世界を見てみたいという強い好奇心。少年二人を動かすには十分過ぎる理由だ。

「ニシル」

「ん?」

「俺が、次お前に何て言うかわかるか?」

ニシルはゴクリと頷き、微笑んだ。

「『一緒に王様捜しに行こうぜ』、でしょ?」

「わかつてるじゃねえか」

そう呟き、チリーは看板からニシルの方へ視線を移すと、そのま

まどここかへ走り出した。

「ちよつと、どこへ……」

ミラルが言い終わらない内に、ニシルもチリーの後を追いかけ始める。

「ま、待つてよ！」

訳がわからず困惑しつつも、ミラルはそんな二人を追いかけのだった。

「駄目だ。お前達にはまだ早い」

即答であった。チリーとニシルが王搜索隊に立候補する意を父、キリトに伝えてみたところ、腕を組んだまましかめっ面で断られた。看板を見た後、チリー達が向かったのは自宅であった。

ミラルは中に入らず、不安げな表情で二人を外で待つていた。

チリーとニシルは同じ家で暮らしている。

親に捨てられ、行き場をなくしていたニシルをキリトが引き取り、まるで我が子のように育てていたため二人は兄弟同然の関係なのだ。チリーの母は病弱だったため、チリーが幼い頃、既に亡くなっている。それ故、チリーとニシルは、キリトが男手一つで育てているのだ。

「なんでだよ！？ もう俺達は島の外に出られるくらい強いし、もう子供じゃねえ！」

「そつだよ！ 僕達だつてもう十分外に出られる年齢だよ！」

必死にそう言う二人へ、キリトは首を左右に振った。

「駄目だ。何度も言わせるな二人共。お前達が外に出たところで野垂れ死ぬだけだ。やめておけ」

いつもの軽い態度からは想像もつかないような厳格な態度で、キリトは静かに、言葉の中に怒気を込めた。しかし、チリー達は一向

に引こうとせず、唸りながらキリトを睨みつけている。

「野垂れ死んだりなんかしねえ！俺達が十分強いのは、親父だつてわかってんだろ！？」

チリーの言葉に、キリトは静かに首を横に振った。

「いや、弱いな。少なくとも俺に勝てないようじゃ、島の外なんかには出せない」

キリトがそう言うと同時に、力任せにチリーは右拳で壁を殴った。「だったら……！」

相当腹を立てているのか、その声は怒りに震えていた。

「だったら、俺が親父を倒せば行かせてくれるんだな！？」

キリトが想像した通りの答えであった。拳を震わせ、キリトを睨みつけてくるチリーを見て嘆息すると、キリトはコクリと頷いた。

「良いだろう。俺に勝てるのならな」

「その言葉、絶対忘れんなよ！」

チリーは再度キツとキリトを睨みつけるとそう吐き捨て、家の外へと飛び出した。

「僕も、本気だから」

静かに言い残し、ニシルもチリーの後を追った。

ミラルが家の外で待機していると、ドタドタと足音をさせながら、肩を怒らせてチリーが家から出て来た。続けてニシルもどこか怒っているような雰囲気が出て来た。

「ど、どうだった？」

二人の態度から察すれば答えはわかったも同然なのだが、ミラルはあえて問う。

「あの糞親父！俺達のことをまだガキ扱いしてやがる！」

チリーは地団駄を踏みながら怒り散らしている。

ニシルの方は黙ったまま、拳をギュツと握りしめている。

「駄目……だったんだ……」

まるで自分のことのようにガックリと肩を落としたミラルの肩に、ニシルがそつと手を置いた。

「大丈夫だよ。僕とチリーがおじさんを倒せば、許可してくれるみたいだから」

「キリトさんを？」

ミラルの問いに、ニシルはコクリと頷く。

「ニシル！ 絶対勝つぞ！」

「うん！」

二人は顔を見合わせて頷くと、特訓特訓と騒ぎながら海岸へと向かって行った。

いつもの砂浜。いつもキリトとチリー達が特訓をするあの砂浜である。

辺りには波の音が鳴り響き、上空では海鳥達が鳴いている。

海岸には島の外から流されて来た様々な物が流れ着いており、瓶やら大木やらが所々に転がっている。

「待ってたぜ……親父」

ギユツと拳を握りしめ、チリーは目の前に立っている男キリトを軽く睨んだ。

「いつもの砂浜に会い……ね。チリー、ニシル、お前達はいつから親に対してそんな生意気な文章が書けるようになったんだ？」

キリトが左手に持っているのは、小さな紙切れだった。

そこには「いつもの砂浜に会い」とおせじにも綺麗とは言えない字で書き殴られており、隅に小さく「チリー、ニシル」と書かれている。キリトはその紙をビリビリと破くと、海の方へ放った。

「おじさんも、いつから子供相手に武器を使うような大人になったの？」

ニシルは、キリトの背に背負われている剣の柄部分を睨みつける。「悪いが、俺は本気でお前達を行かせるつもりがないのでな……」。

本気でやらせてもらおう」

そつと。キリトは剣の柄に手をかけた。

それを見て、チリーとニシルも素早く身構える。

「チリー……ニシル……」

ボソリとそう呟いたのは、チリー達から離れた場所で遠巻きに三人を見ているミラルであった。

胸の前で両手を組み、祈るようにチリー達を見つめている。

正直この戦い、ミラルからすればチリー達には勝ってほしくない。島の外のことを考えれば、チリー達が危険に晒されるのは目に見えているし、何より二人が自分の傍を離れるのが心配で仕方がないのだ。

ミラルがこの島に来てから今日まで、ずっと三人一緒に過ごして来た。ケンカをするような日もあったが、三人は常に一緒だった。

その二人が今、島を離れるために戦おうとしている。

チリー達には、勝ってほしくない。キリトに倒され、説教を受けて、諦めて、それでまた今まで通り三人で過ごしたい。しかしそれでも、チリー達のことを尊重したい気持ちと、キリトとの戦いで傷ついてほしくないという思いが存在し、ミラルの中でない交ぜになっていた。

ただ、見ていることしか出来ない。

それが悔しくて、ミラルは歯噛みした。

ゆっくりと。キリトは剣を抜いた。小振りな、扱いやすいショートソードだ。

日光に照らされ、剣の刀身がキラリと光った。

「行くぞ。二人共」

キリトは剣を片手で持ち、構えると、素早く二人の方へ駆けた。

「来いッ！」

キリトはチリーの眼前まで迫ると、チリーの肩目掛けて斜めに斬り込んだ。

チリーが素早くそれをかわすと同時に、キリトの背後からニシルが殴りかかる。

「おおッ！」

キリトは身を屈めてニシルの拳を避けると、剣の柄でニシルの腹を強打した。

「ぐ……ッ！」

呻き、一瞬停止したニシルの身体に、キリトは裏拳を打ち込み、そのまま後方に吹っ飛ばす。

そのまま数メートル飛び、ドサリとニシルは倒れた。

「ニシルッ！」

右拳で殴りかかってくるチリーの右拳を、キリトは左手でガツシリと掴んだ。

チリーは右腕を下に振ってキリトの左手を振り払うと、素早く後退し、キリトから距離を取った。

「どうした？ 島の外に出るなら、俺から逃げているようじゃ駄目だな」

「うるせえ……ッ！」

ギユツと拳を握りしめ、チリーは歯噛みした。

キリトに近づこうにも、素手と剣では間合いに差があり過ぎる。

キリトは本気だ。下手をすれば斬られて重傷を負う可能性も高い。

今のキリトなら、例え相手がチリーとニシルでも、その剣で斬るだろう。我が子と、我が子同然に育て子であっても。そうまでして

キリトはチリー達を止めたいのだろう。と、チリー自身も薄々わかつていた。反対するのは真に自分達のことを考えてのことなのだ。

だが、引くつもりはなかった。

キリトの親心はわかる。が、それでもチリーと、ニシルの好奇心を抑えるには至らない。

現にチリーは諦めていないし、先程倒れていたニシルも起き上がり、反撃のタイミングを見計らっている。

「親父」

「何だ？」

「俺は……いや、俺達は……」

チリーとニシルは、真摯な眼差しで真っ直ぐとキリトを見据え、そして同時に叫んだ。

「絶対に諦めるつもりはないッ！」

「クソガキ共め……」

二人の言葉に、キリトはそう呟いたが、その表情にはどこか笑みが浮かんでいた。

episode「Beginning-4」

叫んだのは良いが、状況は何も変わっていない。ただでさえ二人がかりで倒せないというのに、今回は武器まで装備している。丸腰で勝てるとは到底思えない。

何か武器でもあればまた別なのだが、いくら様々な物が流れ着いているとはいえ、武器として使えそうなものはこの砂浜にはなかった。

木の枝などなら数本あるのだが、こんなものでは剣に対抗するのは不可能だろう。

「親父……一つ、聞いて良いか？」

チリーの問いに、キリトはコクリと頷く。

「何でそうまでして反対するんだ？」

チリーの言葉に、キリトは数秒黙り込む。

「親父？」

「約束……だからだ」

「……え？」

最初の方がうまく聞き取れず、聞き返すがキリトは繰り返さなかつた。

「お前達を……島の外に行かせる訳にはいかない」

スツと。キリトはチリーに剣の刃先を向けた。その刃先を、チリーはキツと睨みつけた。

「引くつもりはねえ。俺は、王様を捜しに行くッ！」

叫び、チリーはキリト目掛けて駆け出した。

それに合わせて後方でニシルもキリト目掛けて駆け出している。

「……来いッッ！ 二人共！」

剣を構えたキリトの間合いギリギリまで近づくと、チリーは地面を勢いよく蹴り、高く跳躍した。

「ッ！？」

「おおおおッ！」

キリトの頭上で拳を振り上げ、一気にキリト目掛けてチリーは下降する。

キリトは迫って来るチリーの拳を、剣の刀身で防いだ。チリーがかなりの勢いで下降してきているため、腕では防げないと判断したからだ。

「今だッ！」

チリーが叫ぶと同時にキリトが振り向くと、後方からニシルがキリトの方へと突っ込んできていた。

「甘いッ！」

キリトは刀身でチリーの拳を防いだまま上に振り上げた。

「うわッ！」

そのままチリーは飛ばされ、受け身を取り損ね、キリトの目の前でドサリと倒れる。

素早くキリトは剣を持ち替え、背後から迫るニシルの顔面に、右腕で裏拳を喰らわせた。

「が……ッ……ッ！」

モロに喰らい、ニシルはそのまま仰向けに倒れた。

「糞ッ！」

チリーが身体を起こしたその時だった。

小気味良い、風を切る音と共に剣が振られ、チリーの顔に剣の刃先が向けられた。

ピタリと。動かそうとしていた身体を、チリーは止めた。

「いい加減にしろ」

「チリーっ！」

遠くからミラルの悲鳴が聞こえてくる。

「もうやめにしないか？ チリー」

静かに、キリトが問う。

向けられた刃先を凝視し、ゴクリと。チリーは唾を飲み込んだ。

「これ以上続けても、お前達が傷つくだけだ……。諦める」

親としての……忠告。チリー達の身を案じての言葉であることは明白であった。

しばらく沈黙したが、すぐにチリーはニヤリと笑い、舌を出した。「嫌だね」

「何……？」

その言葉に、キリトは顔をしかめる。

「俺は絶対外を見に行く……！ 大量に土産話持って帰るから、親父は家で待ってるよ！」

「チリイイイッ！」

キリトが、剣を勢いよく振り上げた。

ここまでですとは思っておらず、チリーの表情に驚愕の色が浮かんだ。

「チリーッ！」

起き上がったニシルと、遠くで見つめているミラルが同時に叫ぶ。ミラルは我慢しきれずにチリー達の方へ駆け出した。しかしそれでも、キリトは剣を振り下ろした。チリー目掛けて、だ。

感情の昂りが、キリトの判断を狂わせた。剣を、振り下ろさせたのだ。

目を閉じ、顔を背け、チリーは拒絶するように両手をキリトに突き出した。

その時だった。

「な　　ッ！？」

聞こえてきたのは驚愕するキリトの声と、耳を劈く金属音だった。

「これは……ッ！」

ニシルもミラルも驚愕し、チリーとキリトを凝視している。

「え……？」

チリー自身も驚愕の色を隠せず、目の前の光景にただ呆然としている。

「神力……ッ！」

キリトの剣からチリーを守ったソレは、チリーの身の丈程もある大剣であった。

その巨大な刀身で、キリトの剣を防いでいる。

チリーは大剣とキリトとを交互に見、今の状況をチャンスと判断すると大剣を振ってキリトの剣を弾いた。

大剣は見た目の割に軽いらしく、チリーが片手で振れる程度であった。

「しまった！」

キリトが気付いた時には既に遅く、キリトの持っていた剣は回転しながら宙を舞い、キリトの後ろで砂浜に突き刺さった。

「形勢……逆転だッ！」

チリーは素早く立ち上がり、キリトをその場に蹴り倒すと、大剣の刃先をキリトへと向けた。

「俺の勝ちだ」

得意げにそう言ったチリーを一瞥し、キリトは嘆息する。

「その通りだ」

チリー達とキリトの戦いの翌日、チリーとニシルは意気揚々と城へ向かった。

門番に、王搜索隊志願の意を伝えると、二人を見て訝しげな顔をしながらも城内の広間まで通された。

広間には何も置かれておらず、アグライと名乗る初老の男と、目つきの悪い長髪の男と、寡黙そうな角刈りの男が立っていた。

「ふむ。丁度良い人数だ。名前は？」

アグライの問いに、チリーから順番に名乗っていく。

長髪の方はアベル、角刈りの方はロタールと名乗った。

「ちよっと待ってくれよ」

不意に、アベルがチリー達の方へ視線を移した。

「どういうことだ？ まさかこんなガキ共を島の外へ搜索隊として出す気か？」

アグライはコクリと頷いた。

「彼らの実力は試すまでもない。キリトから話は聞いている」

「親父を知ってるのか？」

チリーが問うと、アグライはコクリと頷いた。

「彼とは古い友人でね。彼がこの島に来る前から私は知っているよ。アグライはキリトの実力を高く評価しているらしく、そんな彼に勝利したチリー達の実力を、少しも疑っていない様子であった。

「俺は納得いかねー！ こんなガキ共のお守しながら王の搜索なんて出来るかよ！ アンタもそうだよな！？」

アベルが「問うと、ロタールはコクリと頷いた。

「子供では多少問題があるのでは？」

表情一つ変えずに問うロタールに、アグライは少し考え込むような素振りを見せたが、すぐにポンと胸の前で両手を叩いた。

「では試験はこうしましょう。アベルとチリー、ロタールとニシルが戦い、その内勝った二人を搜索隊として出す……。これで、どうかね？」

アグライの言葉に、アベルはニヤリと笑った。

「余裕だぜ……。ガキ一人倒すだけで良いんだろ？」

チリーはムツと顔をしかめると、アベルの方へ視線を移した。

「どうかな？ アンタじゃ無理かもよ？」

「冗談はやめとけ。俺は冗談が通じないんだ……」

ギロリと。アベルはチリーを睨みつけた。チリーも負けじとアベルを睨み返す。

「今この場で始めてくれても良いぜ？ 俺はお前ごときにや負けねえ」

ニヤリとチリーが笑うと、アベルは背負っている剣を抜いた。

「上等だガキィッ！」

そんなアベルを、アグライは止めようともせずただジッと二人の

やり取りを見ていた。

「来いよ」

人差し指をクイクイと動かし、チリーが挑発すると、アベルは剣を構えてチリー目掛けて駆け出した。

「僕らも始めちゃおうよ」

そのすぐ傍で、ニシルがロタールにそう言っただけで笑っていた。

「おらアツ！」

チリーの眼前まで迫り、アベルは剣を振り降ろす。が、突如出現したチリーの大剣によって防がれ、アベルの剣は弾かれた。

アベルの剣は宙を舞い、アベルの傍に音を立てて落下した。

「神力使い……」

驚愕するアベルには一瞥もくれず、アグライは興味深げにチリーを見つめていた。

「アベルさん、まだやる？」

大剣を構え、ニヤリと笑うチリーに、アベルは嘆息する。

「いや、俺が悪かった……。お前、そんな神力使いだっただんな」

悔しげに言いつつも、アベルはチリーへ微笑みかけた。

「ロタールさん。力だけじゃ無理があるよ」

そのすぐ傍では、足元に倒れるロタールを見下ろしながら、ニシルがニヤリと笑っていた。

「アグライさん、これでどうかな？」

チリーの言葉に、アグライは十分だ、と頷いた。

チリー達の出発準備は着々と整って行った。

あくまで隠密にということ、船を出してもらえなかったが、代わりに四人乗り（チリーとニシルの荷物や食料を置く場所も考慮してのこと）の大きなボートを用意してもらった。

他にも数人、テイテス城から兵士が派遣されたが、チリーの「鬱

陶しい」の一言だけで、彼らは別行動となった。二手に分かれた方が効率良いだろうと判断し、アグライはチリーの要求を承諾した。

このボートで行けばアルモニア大陸本土のアギエナ国へは一週間以内に行けるようだ。幸い、城の占い師によるとここ一週間の間は雨も降らないし嵐も来ないらしい。アギエナ国への入国許可は、アグライが手配してくれたおかげで既に降りている。

そこから、西へ。それが城の占い師が占った王の居場所であった。

トランクケースに荷物を詰め、二人はボートに乗せた。

これから始まる旅のことを想像しながら、チリーとニシルは顔を見合わせて笑った。

「俺達、島の外に出るんだな……」

「そうだね。まさかこんなことになるなんて、少しも予想しなかったよ」

そんな二人のやり取りを、キリトは黙って見つめていた。

「親父、行って来るよ」

コクリと。キリトは頷いた。

「ああ。気を付けるよ。それと、目的を忘れるなよ？ お前達の目的は旅行じゃなくて」

「王様を見つげ出すこと……でしょ？」

ニシルに先を言われ、キリトは苦笑する。

「そういうことだ。良いか？ 危険だと感じたらすぐに帰って来いよ？」

そう言ったキリトに、チリーは心配すんな、と笑った。

「それじゃ、そろそろ乗るか」

呟き、チリーがボートへ乗り込もうとした時であった。

「待って！」

不意に聞こえたのはミラルの声であった。

重そうなたランクケースを持ち、ハアハアと息を切らしながらキリトの背後に立っていた。

「ミラル……」

「チリー、ニシル……私も……」

小さな車輪の付いたランクケースを引きずりながら、チリー達の傍まで歩み寄る。

「私も……連れてって!」

しばしの沈黙……。

だが、すぐに泣きそうな顔でミラルが口を開いた。

「私……二人がこのまま行っちゃうって思うと、すごく寂しかった……。ホントは、行ってほしくない。ずっと一緒に、この島にいたい。でも……二人は行くんだよね?」

ミラルの言葉に答えられず、二人は黙り込む。ミラルは沈黙を肯定と受け取り、そのまま言葉を続けた。

「だったら……私も行く。私も、二人と一緒に外の世界を見たい!」
そんなミラルの言葉に、二人は微笑んだ。

「来いよ」

チリーはミラルのランクケースを中ば強引に受け取ると、ボートへ乗せた。

「だったら、ミラルも一緒に行こう。僕達は全然構わないから」

ニシルの言葉に、泣きそうな顔をしていたミラルは嬉しそうに微笑んだ。

ミラルがキリトの方へ視線を移すと、キリトもニコリと微笑んだ。

「ミラルちゃん。アイツらのこと、頼んだぞ」

「……はい!」

ミラルは嬉しそうに返事をする、ボートに素早く飛び乗った。

「さ、二人共! 行こう!」

先程までと態度が一変したミラルに、二人はやれやれ、と嘆息すると、ボートに乗り込んだ。

「じゃあな親父」

「じゃあねおじさん」

「行って来ます。キリトさん」

三者三様の別れの挨拶にキリトは微笑んだ。

「おう、行って来い！」

そう言つて、笑顔で親指を突き立てた。

徐々に遠ざかつて行くボートを眺めながら、キリトは溜息を吐くと、ポケットから一枚の写真を取り出した。

赤ん坊を抱いた白髪の美しい女性と、その隣で微笑む今よりちょっとだけ若いキリトの姿が映っている。

「ラウラ……。悪い。約束……。破っちまった」

愛おしげに、写真に写る女性をキリトは見つめた。

「アイツは、お前の望み通りには育たなかったよ」

大切に、この島でチリーを育てる。それがキリトと妻
ラウラが交わした約束であった。

「でもまあ、心配すんな」

苦笑し、キリトは既に小さく見える程遠のいたボートへ視線を移した。

「アイツは、アイツらは 俺の自慢の息子だ」

ニツと笑い、アイツらなら心配ない。とキリトはまるで自分に言い聞かせるかのように呟いた。

episode 10 「Freezing town - 1」

辺り一面が氷で覆われている。

まるでこの町だけ氷河期になったかのような光景であった。が、雪も降っていないし、太陽は変わらず照りつけている。

それなのにこの町は凍っていた。

町そのものが、だ。

地面も、建物も、全てが凍りついており、足元には凍ってしまった鳥が無造作に転がっていた。

四人共がその光景に啞然とし、ただただ凍った町並みを眺めていた。

「これ、どういうことなの……？」

しばしの沈黙の後、ミラルが口を開く。

「さあ……な」

驚愕に顔を歪めたまま、チリーが答える。

話は数時間前に遡る。

エリニアで青蘭を助け、共に旅することになりお互いの旅の目的を話し終えた翌日（青蘭が気絶している間に王を搜索してはいたが、エリニアにはいなかった）、チリー達はエリニアから西の町、ドウナイへと向かった。

エリニアからドウナイへは汽車は通っていないが、大した距離ではないので徒歩で十分な距離だった。しかし、歩いている内に異変に気付く。

ドウナイ付近の地面や草木が凍っているのだ。

不審に思いながらも四人がドウナイへ辿り着くと、ドウナイは完全に氷結していたのだ。

「この鳥……本当に凍ってる」
足元に転がっていた凍りついた鳥を拾い上げ、ニシルはしげしげと眺める。

「ああ、完全に凍っている……。しかし、何故……」

訝しげな表情で、青蘭は考え込みながら辺りを見回した。が、やはり視界に映るのは氷ばかりだった。見回したところで仕方がない。
「人も……凍ってるのかな」

ボソリと。凍りついた鳥を眺めながらニシルが呟く。

「こ、怖いこと言わないでよ！ そんな訳……ないでしょ？」

ブルツと身震いしながらミラルはそう言ったが、可能性は否定出来ない。それどころかその可能性は高いくらいだ。

「……凍ってるだろうな」

ニシルに歩み寄り、凍りついた鳥を青蘭が覗き込む。

「鳥は俺達人間よりも体温が高いんだ。その鳥が凍りついてるってことは……」

ゴクリと。青蘭以外の三人が唾を飲み込む。

「この町の人間も……凍ってるってことか……？」

チリーの言葉を聞いた途端ミラルの顔から血の気が引いた。

「嘘……」

身体から力が抜け、倒れかけたミラルの身体を慌ててチリーが支える。

「大丈夫か？」

「あ、うん……。ごめん」

申し訳なさそうに謝り、ミラルは改めて辺りを見回した。本当に、辺り一面氷ばかりである。うんざりする程氷、氷、氷。全てが凍りついたこの町が一種の地獄のようにも思えた。

「ここで立ってても仕方ないよ。どこか入れそうな家でも探して休もうよ」

「でも、勝手に入っちゃまずいわよ」

ニシルの提案にミラルが不安げな顔で言う。

「どうせ人間も全員凍ってるだろ。関係ねえよ。ついでに、人間が本当に凍ってるかどうか、確かめようぜ」

チリーの言葉に、ニシルと青蘭はコクリと頷き、ミラルも渋々納得した。

ほとんどの家がドアごと凍っており、とても入れたものではなかった。おまけに地面が全て凍っているせいで、滑らないように用心して歩かねばならなかったため、移動が非常に不便だ。

そんな状況に嘆息し、チリーは歩きながらも辺りを見回す。

本当に氷ばかりだ。先程ドアごと凍った家の氷をあの大剣で破壊しようとしてみたが、氷は異常なまでに硬く、その気になれば鉄さえ切り裂くチリーの大剣でも、破壊することは出来なかった。火も試してみたが、表面が少し溶ける程度で、ドア周辺だけでも溶かそうものなら、日が暮れても足りないくらいであった。

「この氷……神力によるものかも知れないな」

不意に立ち止まり、傍で凍っている建物の氷をコンコンと青蘭が叩く。

「そついえばそれ……神力ってなんなんだ？」

「お前知らないで使ってたのか!？」

不思議そうに問うチリーに、驚いた様子でニシルが問う。

「知らねえよ。お前は知ってるの？」

「僕だつて知らないよ！ キリトさんからもアグライさんからも結局説明されてないし……」

そんな二人に、青蘭は呆れ顔で溜息を吐く。

「私も……気になる」

そう言つて、ミラルが青蘭の方を見ると、青蘭は仕方ない、と呟いて説明を始めた。

「神力つてのはチリーの大剣や、この間のエトラのワイヤーみたい

なのを言うんだ」

青蘭がそう言うと同時に、チリーが大剣を出現させ、これかと問う。

青蘭はコクリと頷き、説明を続けた。

「神力つてのは文字通り、神の力みたいな物だ。神力の使える者……神力使いはその神の力で通常では実現不可能な現象を引き起こすことが出来るんだ。チリーのように武器を出したり、炎や水等を自在に操れる奴もいるだろう。ちなみに俺は一定時間内の肉体強化だ」
青蘭の肉体強化。エリニアでエトラとの戦闘でピンチになっていたチリーを助けた際に見せた高速の移動。あの状態が能力を……神力を発動した青蘭の状態なのだろう。

「神力が使える人の基準って何？」

「規則性はわからないが、神力使いは体内に未知の遺伝子を宿しているらしい。そして能力発動のきっかけは人によって様々だから、遅ければ老人になってから発動する奴だっている……。ゲルビアの人体実験でわかったことだけだな……」

言葉の中の、「ゲルビア」の部分だけどこか怒りが込められていた。

「なあ、本当に俺は……お前達と一緒に来ても良かったのか？」

不安げに、青蘭が問う。

「何でそんなこと聞くんだよ？」

「エリニアで襲われていたように、俺はゲルビアから命を狙われている。俺といると恐らく……いや、確実にゲルビアからの刺客との戦いにお前達を巻き込むことになる。アイツらは基本的に神力使いだぞ。下手をすれば、お前達は」

青蘭が言い切らない内に、ポンと。チリーの手が青蘭の肩に置かれる。

「関係ねえよ。そんな時は、こないだみたいにぶっ飛ばせば良いだろーが」

ニツと。チリーが笑った。ニシルとミラルもチリーと同じ思いだ

ということ伝えるかのように、青蘭に微笑みかけた。

「そうか……。ありがとう」

本当に、良い仲間が出来た……。

青蘭は心底そう思うことが出来た。

「それにしても、チリーがねえ……」

呟き、不思議そうにニシルはチリーの持っている大剣を眺める。

「何だよ？」

「いや、チリーに未知の遺伝子って……バカなのにねえ……」

ニヤニヤと笑うニシルの頭をチリーは右手で小突いた。

「誰がバカだ誰が！ 能力とバカは関係ないだろ！」

「お前そうやってすぐ叩くのやめろよバカチリ！」

素早くチリーの頭をニシルが小突く。

最早恒例となったこの風景に、嘆息しつつも青蘭とミラルは苦笑した。

と、その時であった。

「ねえ、アレ！」

チリーの頭を小突くのを止め、不意にニシルが前方を指差す。

慌てて三人がニシルの指差す方向へ視線を移すと、一人の小さな男の子が大量の木の葉が入った小さな籠を抱えて走っていた。

「この町の子かも知れない……。追いかけるぞ」

青蘭の言葉に、三人はコクリと頷くと、四人は少年の後を追いかけて行った。

気付かれぬよう、まるで尾行するかのようになり四人は少年の後を追った。

少年は凍りついた地面に慣れていられしく、滑ることなく平然と走り続けている。やはり、この町の住人なのかも知れない。

しばらく少年を追っていると、凍りついた一件の家に辿り着いた。その家の左側から先だけ、何故か氷に覆われておらず、そこだけま

るで別世界のようにだった。

その家のドアは凍りついておらず、少年はドアを開けると中へ入っていった。

「この町の子……みたいね」

ミラルの言葉に、チリーがそうだな、と頷いた。

「この町について、あの子に聞いてみるのが手っ取り早いんじゃないか？」

チリーの提案にニシルがコクリと頷く。

「僕もそう思う。もしかするとこの町の中でまともに動けるのは、僕達とあの子だけかも知れないし……」

青蘭は考え込むような仕草をしながら、少年の入っていった家を見つめた。

「もしこの町を覆う氷が神力によるものなら、本体がいるはずだ。

考えたくはないが、この氷はあの少年……もしくは関係者という考え方も出来る」

「ま、とにかく本人に聞くのが一番だろ。中に入ってみようぜ」

チリーはそう言うのと家の前まで歩いて行き、トントんとドアを叩いた。

「おーい。俺だー」

「いやそれおかしいから。退いてチリー」

チリーを押し退け、ニシルはトントんとドアを叩く。

「すいませーん。誰かいますかー？」

しばらくそのまま待っていると、ガチャリとドアが半分程開いた。ドアの陰に隠れ、顔だけを出してあの少年がオドオドとした様子でこちらの様子を伺っていた。

「ねえ、この町、どうしてこんなことになってるの？」

屈んで少年と目線を合わせ、微笑みながらミラルが問うと、少年はビクンと肩をびくつかせた。

「え、えと……あの……」

かなり動揺しているらしく、視線が泳いでいる。

「おお悪い悪い。ミラルは怖いよな」

ミラルに一瞥をくれ、少年の方へ視線を移すとチリーはニヤニヤと笑った。

「怖くないわよ！」

そんなチリーの脛にミラルは右足で蹴りを入れる。クリーンヒットしたらしく、チリーは絶叫しながら痛そうに脛を押さえて片足で飛び跳ねている。

そんな二人を見ながら嘆息し、青蘭は屈んで少年と視線を合わせた。

「なあ、この町のこと、俺達に教えてくれないか？」

少し落ち着いたらしく、少年はジツと青蘭を見つめた後、小さくコクリと頷いた。

「ほら見る！ 青蘭なら素直に頷いたぞ！ やっぱミラルが怖か

」

チリーが言い終わらない内に、もう片方の足へミラルの蹴りが入ったのは最早言うまでもない。

ニシルはそんな二人を見ながらケラケラと笑っている。

「入って良い……よ。お兄ちゃん達は、アイツと関係ないみたいだし」

そう言って少年はドアを完全に開け放ち、どうぞ、と呟いた。

「アイツ……？」

四人は少年の言った「アイツ」という言葉が気になったが、今は聞かずに家の中へと入っていった。

少年の家の中は暖かかったが、家のほとんどが氷に覆われていた。この家は町の中でもかなり奥の方へ位置しているためか、完全に凍りついてはいなかった。ドアを開けることが出来るのもそのせいだろう。

奇跡的にも暖炉は無事だったらしく、中でパチパチと音を立てながら薪が燃えている。が、その暖炉の前に、明らかに異質な物が置かれていた。

「これって……まさか……」

暖炉の前に置いてあるソレを凝視し、ミラルが息をのんだ。

「うん。そうだよ……」

少年は静かにソレに歩み寄り、悲しげな表情を見せた。

「僕のお父さんとお母さん」

わかつてはいたものの、その場にいた少年以外の全員が驚愕に表情を歪めた。

暖炉の前に置いてあるソレは紛れもなく 凍りついた人間

そのものであった。

中年くらいの男性と女性が、何かの作業中だったのであるうポーズのまま、氷に覆われてピクリとも動かない。

「やっぱり、凍ってたみたいだね……」

ゴクリと。ニシルが唾を飲み込む。

「酷え……」

そつと。呟きながらチリーはその氷に触れた。

冷たい。当然だが、元は温かな体温を持った人間だったことを考えると、その冷たさは非常に寂しく感じられた。

「……君、名前は？」

青蘭が問うと、少年はボソリとマテュー、と答えた。

次に青蘭が名乗ると、他の三人も順々に名乗っていった。

「マテュー。少し質問しても良いかな？」

コクリと。マテューは頷いた。

「まず、何故町の外で凍っている人はいないんだ？」

「町が凍ったのは……夜だったから。多分、皆家の中で凍ってるんだと思う」

窓の外に一瞥をくれ、マテューは答えた。

「君は、何故助かっているんだ？」

青蘭の問いに、マテューは数秒、黙り込む。

「僕は……家の外の、氷が届いていない場所にいたから……」

この家の近く。唯一凍っていない場所があった。恐らく氷結が始まった時、マテューはその場所にいることで逃れることが出来たのだらう。

「マテュー、俺からはこれで最後だ。さっき言ってた『アイツ』って言うのは？」

青蘭が問うた途端、少年の顔が恐怖で引きつった。

「アイツ……。長い髪の、変な男……」

呟くように、マテューは続ける。

「町が凍ってから、いつもうるついでるんだ……。昨日アイツに見つかった時、僕はアイツに襲われたんだ……！」

青蘭は小声で、チリー達にそいつが犯人かも知れない、と囁いた。

「そういえば、何で夜中に家の外にいたの？」

ニシルが問うと、またしてもマテューは黙り込んでしまった。

しばしの沈黙の後、涙目で口を開いたのはマテューであった。

「僕……お父さんに……我が仮言つて、それで……」

目から涙をボロボロとこぼしながらも、嗚咽混じりで一所懸命にマテューは続ける。

「それで……お父さんは悪くないのに……僕が、僕が怒って……外に飛び出してたら……」

「町が凍り始めた……って訳だな」

不意に、膝を屈めてマテューと視線を合わせると、チリーはマテューの頭の上にポンと手をのせた。

「二人を……この町を元に戻したいか？」

真っ直ぐに。チリーはマテューの瞳を見据える。

マテューはコクリと頷き、涙声でうん、と答えた。

「だったら、約束だ」

そう言つて、チリーはマテューへ右手の小指を突き出した。

絶対に俺達がお前の両親と、この町を元に戻す。だから、ちゃんとお父さんに謝るんだぞ」

「チリー兄ちゃん……」

呟き、マテューはそつと自分の小指を突き出されたチリーの小指に絡めた。

「指切りげんまん。嘘吐いたら針千本のーます」

チリーは指を離すと、約束だ、と微笑んだ。

「……うん！」

ゴシゴシと袖で涙に濡れた両目を拭い、マテューは微笑んだ。

「まったく……チリーはすぐ情に流されるんだから……」

マテューの家を出た後、呆れ顔でニシルは嘆息した。

「し、仕方ないだろ……！ あんなの見せられたら……」

暖炉の前に置かれた凍りついたマテューの両親、涙を流しながら訳を話すマテュー、そして、氷に覆われたこの町。

「そつよニシル、いくら王様捜しが一刻を争うからって、この町をこのままにしておける訳がないじゃない！」

「冷静なだけなのに僕が悪者みたいじゃないか……」

やや肩を落とし、ニシルは溜息混じりに呟いた。

「まあニシルの言う通り、王捜しを優先しなくてはならないのも確かだと思つな」

ニシルをフォローしつつ、青蘭は言葉を続けた。

「だが、この町が凍り始めた時にこの町に王様がいて、一緒にこの町で凍っている可能性だってなくはないんだ。マテューのことも考えれば、この町のことは解決しといて損はないと思うぞ」

そう言って、青蘭はそのまま言葉を続ける。

「乗りかかった船だ。何とかしてこの町が氷結した原因を探って、解決しようぜ」

チリーの言葉に、三人はコクリと（ニシルは渋々と）頷いた。

「とりあえずはマテューの言ってた『アイツ』って言うのを捜した方が良くも知れないわね」

ミラルの言葉に、青蘭はコクリと頷いた。

「ああ。そいつが町を凍らせた犯人である可能性は極めて高いな」

「んじゃ、二人一組で手分けして捜そうぜ？ その方が効率高いだろうし」

「そうだな」

青蘭は頷き、言葉を続けた。

「もし『アイツ』が犯人なら、十中八九神力使いだ。俺とチリーは組まずに、能力者と無能力者で組んだ方が良い」

青蘭の提案に、ニシルは小さく頷く。

「それじゃミラル、じゃんけんして勝った方が青蘭と、負けた方がチリーとペアってことで」

「わかったわ」

「ちよつと待て！ 何で俺のペアが負けた方なんだ！？ 俺がハズレみたいじゃねーか！」

頷き合う二人に視線を移し、大声でチリーは抗議したが、二人に黙殺されてしまった。

「じゃーんけーん！」

「ぼいっ！」

じゃんけんに負けたのは、ミラルであった。

「チリーより断然青蘭の方が頼りになるから助かるよ」

勝ったニシルはそう言っただけで笑い、それを聞いて怒るチリーを見ながら青蘭は苦笑していた。

「まあ、じゃんけんだから仕方ないわね」

一方、負けたミラルは悔しがる様子もなく、うつむきながら若干頬を赤らめつつそう呟いていた。

ニシル、青蘭組は町の中を。

チリー、ミラル組はマテューの家付近の、凍っていない場所を探索することになった。

チリー達は範囲が狭い分すぐに終わるので、終了次第、ニシル達と合流することになっている。

凍っていない場所は、雑木林のようになっており、町とは違って剥き出しになった地面に、背の高い木が何本も立っていた。

「ねえ、もし『アイツ』が神力使いだとしても、町を丸ごと凍らせるくらい強力な能力って、流石にあり得ないんじゃないかな…」

…

ミラルの言葉に、チリーは唸りながら考え込む。

「確かに俺も青蘭もそんな大規模なことは出来ないし……。世の中にはもっとスゲー奴がいるんだよって言われりゃそれまでだが…」

…

「もしかすると神力使いの仕業じゃない……とか？」

「もしそうなら、こんなふざけた現象どうやって起こすんだよ？」

しばし沈黙し、二人で考え込む。が、一向に答えは見つからない。

「あーわっかんねえ！」

痺れを切らしたチリーは頭をボリボリとかいた。

「とにかく、『アイツ』を捜しゃ良いんだよ！」

「アバウトね……」

ミラルは嘆息し、微笑んだ。

「まあ、確かにチリーの言う通りだね。とりあえず『アイツ』、捜

しましょ？」

「おう！」

チリーがそう言い、探索を再開しようとした時だった。

「待ちたまえ」

「ッ！」

突如、背後から聞こえた声に二人はすぐに振り返る。

「ここで、何をしている？」

背後にいたのは、金色の長い髪をした男だった。中性的な顔立ちで、背丈はチリー達と変わらない。腰には鞘に収められた剣が提げられている。

男は右手で前髪をかき上げ、クスリと笑った。

「おや、こんなところに素敵なお譲さんが……」

早足でミラルに歩み寄り、男はミラルの眼前で片膝を付き、呆然としているミラルの右手を取った。

「初めましてお譲さん。僕はゲイラ……。ゲルビア帝国軍の一小隊で隊長務めさせてもらっている」

「は、はあ……」

苦笑しているミラルに、ゲイラと名乗った男は微笑み続ける。

「おい」

「ああ美しい。その栗色の髪も、まるで吸い込まれそうなその瞳も、全てが美しい……。僕は何故、これ程まで輝いている宝石を今まで見つけ出すことが出来なかったのだらう……」

「おい」

「でも、僕らはこうして出会えた。僕はこうして君と言う名の宝石を見つけ出すことが出来た……。なんて幸せなんだらう」

「おいつつってんだろこの金髪ロン毛野郎ッ！」

散々無視され、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、激昂したチリーが怒鳴り散らす。

やっこのことでチリーの存在に気付いたらしく、ゲイラはチリーの方へ視線を移す。

「ああ、男か。帰れ帰れ」

「扱いに差があり過ぎるだろッ！　っつか何なんだお前はさつきから！」

ゲイラはフンと鼻を鳴らし、肩をすくめた。

「男には興味ないんだよ。僕に相手してほしかったら性転換でもしてくるんだね」

「ゲイラ隊長！」

妙なやり取りをしていると、後方から大量の足音が聞こえてくる。「こいつらは……！」

気が付けばゲイラの後ろには十人程度の兵隊らしき男達が並んでいた。先程のゲイラの話から察するに、ゲイラの小隊のメンバー達だろう。

「で、君達はここで何をしている？」

腕を組み、ゲイラが問う。

「そりゃこつちの台詞だ。ゲルビア帝国軍の皆様方が、こんな所で何をしていらっしやるのか、是非お聞きしたいものだけ軟派野郎」

ギロリと。チリーはゲイラを睨みつける。

「口が悪いな。君は」

「んじゃお前は性格悪いんじゃないの？　お前みたいな節操のない女好きは大抵性格悪いんだよ！　大体ミラルを口説くなんて節操がないにも程が」

チリーが言い終わらない内に、チリーの脛をミラルの蹴りが直撃する。

「痛ッ！」

脛を押さえ、チリーはその場でピョンピョン飛び跳ねる。

それを眺めながら、ゲイラがクスクスと笑った。

「まあ良いよ。この町については口外される訳にはいかない」

不意に、ゲイラの表情が一変し、真剣なものになる。

「ここで始末させてもらうよ」

スツと。ゲイラは腰に提げていた剣を鞘から抜いた。

「離れてろ！ ミラル！」

素早く大剣を出現させたチリーに、ミラルはコクリと頷いて数歩退いた。

「神力使い……」

すると、ゲイラは後ろで控えている隊員達の方へ視線を移す。

「お前達は手を出すな」

そう指示をし、数歩退かせ、ゲイラは剣を構えた。チリーも大剣を構え、ゲイラを睨みつける。

「おい、もう一回聞け。お前らゲルビアの奴らが何でこの町にいるんだ？ まさか……」

ギユツと。大剣の柄を握り締め、チリーは一層強くゲイラを睨みつけた。

「この町の氷、お前らがやったのか？」

チリーの問いには答えず、ゲイラはクスリと笑い、剣の刃先をチリーに向けた。

「答える義務も義理もない。第一僕は、男には手厳しいんでね」

「そうかよ……。だったら……」

大剣を構え直し、チリーはゲイラ目掛けて駆け出した。

「力づくで聞きだしてやるッ！」

大剣を振り上げ、ゲイラの頭部目掛けて勢いよくチリーは大剣を振り降ろした。が、素早く反応したゲイラは、その大剣を剣で受け流し、一歩後退する。

「やるのかい？ 僕と……」

クスリと笑い、ゲイラは一歩踏み込んでチリーとの間合いを詰めると、剣を横に振った。

チリーは高く跳躍し、剣を避け、そのままゲイラの背後に着地すると、大剣の刃先をゲイラの背中目掛けて勢いよく突き出した

その時だった。

「な　　ッ!?!」

異形。

チリーの目に映ったゲイラは正に異形の存在。人でありながら人ならざる部位を持ち、ソレによつて、まるで重力から解き放たれたかのように宙に浮き、啞然としているチリーをあざ笑つかのように笑みを浮かべている。

「すごい……」

ゲイラを見上げ、ミラルも驚嘆の声を上げている。

「どうだい？　君の大剣よりも美しく、それでいて華麗な能力だろ
う?。」

翼。

ゲイラの背に生えたソレは紛うことなき翼だった。

その姿は、まるで絵画に描かれた天使のようで、老若男女問わず魅了するような……そんな姿だった。

「出たぞ！　隊長の能力だ！」

隊員達はゲイラを見上げながら歓声を上げている。

「何でもアリなんだな……！　神力つてのは……!」

悪態を吐き、チリーはゲイラを睨みつけた。

「さあ、続きといこうか。地を這う下等動物君」

どこを歩いてても、景色はまったくと言って良い程変わらなかつた。それも当然だろう。この町は、全て氷に覆われているのだから。

「『アイツ』つてのはやっぱり、神力使いなのかな……」

「わからない。が、その可能性が最も高いな。しかし町一つを丸ごと凍らせる程の能力……か」

辺りの氷に触れ、青蘭は考え込む。

仮に『アイツ』というのが神力使いだったとして、町を丸ごと凍らせることが出来る程の神力使いだと考えるのは少し苦しい。もし

そうなら、青蘭やニシルが戦ったところで到底敵わないだろう。チリーと一緒に、それは同じだ。

「この件……。ゲルビアが関わっている可能性が高いな」

「ゲルビアってあの、ゲルビア帝国だよな？」

「ああ。奴らは神力研究という名目の元に、何人もの能力者をまるでモルモットのように扱い、人体実験を繰り返している」

「どうしてゲルビアはそんなことを？」

険しい表情で言う青蘭に、そうニシルが問うた。

「人工的に、能力者を造り出すため……。じゃないか？」

「人工的に……。能力者を……？」

「ああ。知つての通り神力は非常に強力だ。だが、神力にも個人差はある。戦闘に生かせることの出来る能力もあれば、そうでない能力もある」

「戦闘向きじゃない能力もあるんだね……」

「そうだ。だが……。もし、戦闘向きの強力な能力者を、研究によつて人工的に好きなだけ造り出せるとしたら……。ニシル、お前がゲルビア国王ならどうする？」

青蘭の問いに、ニシルはゴクリと唾を飲み込んだ。

「神力使いで、無敵の軍隊……」

ゴクリと。ニシルの言葉に青蘭は頷いた。

「恐らくこの町の中……。もしくは付近に、ゲルビアの研究所があるはずだ」

「なら、この氷も……」

「ああ。実験の結果か、逃げ出した実験体の仕業か」

青蘭が言いかけた時だった。

「青蘭！ アレ！」

すぐさま青蘭がニシルの指差す方向へ視線を移すと、そこには一人の男が立ち尽くしていた。

黒く、艶やかな長い髪と両腕を、前屈みの姿勢でダラリと垂らし、髪の間から焦点の合わない目でその男は二人を見ている。

アイツ……。長い髪の、変な男……。

二人の脳裏に、マテューの言葉が過る。

「長い髪の変な男……まさか！」

ニシルが気付いた瞬間だった。

「アア……！」

低い呻き声を上げ、男はこちらへ突っ込んで来た。

「ニシル！」

青蘭の言葉にコクリと頷き、ニシルはすぐに男を避けた。

「アア……ッ」

ピタリと。男はニシルと青蘭の間の位置で動きを止めた。

「青蘭！」

「ああ、間違いない……！ この男が……ッ！」

マテューの話していた「アイツ」である。

「ア……アッ！」

まともに言葉を喋ることが出来ないのか、男は先程から呻くばかりだった。

「青蘭！ コイツ何かおかしいよ！」

「実験体……ということか」

ボソリと呟き、青蘭は男を凝視する。

青蘭の視線に気づいたのか、男はゆらりと身体を動かし、青蘭の方へ視線を移した。

「ア……」

スツと。だらりと垂らされていた男の右腕が上がり、青蘭へ向けられた。

「青蘭ッ！」

ニシルが叫ぶと同時に、青蘭は横っ飛びに避けたが間に合わず、青蘭の右腕が凄まじい速度で凍っていく。

「ぐ……ッ！」

肘の辺りまで凍ってしまった右腕を押さえ、男を凝視したまま青蘭が呻く。

「コイツが……この町を……！」

再度、男の右腕が青蘭に向けられた。

空中から剣の刃先をチリーに向け、ゲイラは急降下し始めた。素早く反応し、チリーは大剣でゲイラの剣を防ぐ。

「ウゼエッ！」

ゲイラの剣を弾き飛ばそうと、チリーは大きく大剣を振るが、ゲイラはすぐに上昇し、チリーの大剣を避けた。

「卑怯だろそれ！ 飛んでる奴とどう戦えってんだよ！」

大剣の刃先を上空のゲイラに向け、睨みつけながらチリーは地団駄を踏む。

「君は僕に一撃も与えることなく……死ぬ」

クスリと。ゲイラはチリーを嘲るように笑った。

「テメエ……ッ！」

「チリー落ち着いて！ 相手のペースに吞まれちゃ駄目よ！」

「わかつてる！ わかつてるんだが……！」

ミラルの言う通り、一々腹を立てていけばゲイラの思う壺である。「それにしても、暴走した実験体を調査しに来ただけなのに、君のように美しいお嬢さんに出会えるなんて……」

ゲイラはミラルの方へ視線を移すと、うつとりとした表情で見つめている。その視線に不快感を覚え、ミラルは顔をしかめる。

「暴走した実験体……？」

チリーがそう問うと、ゲイラは静かに溜息を吐いた。

「君にそんなことを教える義務も義理もない。さっきも言ったハズだよ」

そんなことより、と付け足し、ゲイラは言葉を続けた。

「君とそのお嬢さんの関係……教えてくれるかな？」

不意に、ゲイラが問う。

「ちよ……え……!?」

その問いにミラルは赤面し、うつむいたまま黙ってしまった。

「仲間だ。何よりも大切な……仲間の一人だ」

真摯な眼差しでチリーが言い放つ。と、同時にチリーの脛にミラルの右足が直撃する。

「痛アツ！ おま、これで三回目だし、今のは流石に意味わかんねーッ！」

蹴られた脛を押さえ、チリーはピョンピョンと飛び跳ねる。

「うっさい！ 馬鹿！」

そしてキツと。赤面したままミラルはゲイラを睨みつけた。

「そうか……そういうことか……。残念だ」

肩を落とし、ゲイラは溜息を吐く。

「なら……」

ギロリと。ゲイラが未だに脛を押さえて飛び跳ねているチリーを睨みつける。

「君を殺せば、彼女は僕の物だ」

「……ハア？」

意味がわからない。といった様子でチリーが声を上げた時だった。

ゲイラの翼が大きく開かれ、翼の中から無数の羽がチリー目掛けて飛来する。

「な……ッ!?」

慌てて大剣を構え、まるで雨のように降り注ぐゲイラの羽を防ぐ。しかし、全て防ぎきれぬ訳もなく、腕や足等、身体の節々にゲイラの羽が突き刺さる。

「ぐ……ッ！」

殺傷力はそれ程高くないようだが、こつも無数に降り注がれては厄介だ。

「こ……のオ……ッ！」

大剣で羽を防ぎつつ、チリーは勢いよく地面を蹴り、ゲイラ目掛

けて高く跳躍した。

「ッ!?!」

ゲイラが驚愕し、降り注いでいた羽がピタリと止まった。

「おらアアアッ!」

叫び、驚愕に歪んでいるゲイラの顔面を、大剣を持っていない左手で思い切りチリーは殴りつけた。

鈍い音と共にゲイラの身体は後ろに反り返り、そのまま一気に落下していった。

「『君は僕に一撃も与えることなく……死ぬ』じゃなかったのか? 軟派野郎!」

地面に着地し、倒れているゲイラに向かってチリーは言い放つ。

「……を………たな」

ボソリと。聞こえるか聞こえないかギリギリの音量でゲイラが呟く。

「僕の顔に……傷をつけたなッ!?!」

起き上がり、今までのゲイラからは想像できないような形相で、

ゲイラはチリーを睨みつけた。

「殺してやる……!」

ゲイラの殺気に気圧され、チリーは一步後退した。

episode 13「Freezing town - 4」

青蘭が高く跳躍する。それとほぼ同時に先程まで青蘭の立っていた場所に、大人の拳大程度の氷が出現する。

右腕の氷を抑えつつ着地すると、青蘭は男をギロリと睨みつけた。「厄介な能力だ……！」

男の能力は、氷。物体や生物を凍らせたり、大気の水分を氷に変え、自在に操る能力……というのがこの数秒間での男の能力に対する青蘭の見解である。

「青蘭、大丈夫!？」

ニシルの問いに、大丈夫とは……答えられない。

男の能力がわかったところで打開策が見つかった訳ではない。おまけに、右腕は凍らされているため、思うように戦うことが出来ない。

右腕の氷を睨みつけ、青蘭は歯噛みする。

「青蘭！ 来るよ！」

ニシルの言葉にハツとなり、青蘭目掛けて駆けて来る男の姿を見据える。

「行くぞ」

青蘭の能力 単純な身体能力の強化。腕力、脚力、体力等を一時的に著しく増幅させる。しかし、その対価に多大な疲労を肉体に受けることになるのだが。

「ッ!？」

青蘭が、地面を踏みこんだ

刹那、青蘭の姿がニシルの視

界から消えた。

そして次の瞬間には、男の腹部に青蘭の左拳が食い込んでいた。

「速い……！」

素早い動きは見慣れている。そんなニシルでさえ、気を抜けば視界から消えてしまう程の速さだ。

ニシルが驚嘆の声を上げ、男が小さく唸り声を上げた。

青蘭は素早くその場から一步後退すると、今度は左足で男の頭部目掛けて回し蹴りを放った。その瞬間だった。

男は頭部に青蘭の左足が直撃する寸前、右手で青蘭の左足を防いだ。ただ防いだだけなら、強化された青蘭の回し蹴りを受け切れるはずがない。が、青蘭の左足は男の頭部に当たる直前でピタリと止められた。

「これは……ッ！」

凍っている。青蘭の左足は先程の右腕と同じように、膝の辺りまで凍ってしまっているのだ。

「青蘭ッ！」

男の左手が、青蘭に向けてかざされる。

「く……ッ！」

青蘭は横つ跳びに男の左手から離れた。が、左足が凍っているため、上手く受け身を取れずにその場に転がる。

「クソ……ッ！」

悪態を吐き、地面に思い切り凍りついた左足を叩きつける。しかし、氷に傷は付いたものの碎ける気配はなかった。

スツと。男の手が青蘭へ向けられる。と同時に、男の手の先に数個、氷の塊が出現する。「ッ!？」

男の手の前で浮いていた数個の氷塊は、勢いよく青蘭目掛けて発射された。

動かし辛い左足を必死に動かし、青蘭は氷塊を横つ跳びに避ける。氷塊はそのまま真っ直ぐに飛び、青蘭の背後にあった建物の氷に直撃し、建物の氷の一部を穿った。

「あの氷を砕く程の威力……ッ！」

驚愕に顔を歪める青蘭に、男は再度氷塊を飛ばす。

「青蘭！」

飛ばされた氷塊を、凍らされた左足を高く上げることによってそれを受けた。

氷塊が左足の氷に直撃し、勢いよく砕けた。と同時に、青蘭の左足を覆っていた氷もまた、同様に砕け散っていく。

氷から解放された左足を地面に降ろし、確認するように青蘭は踏み締める。

「よし！」

男を真っ直ぐに見据え、青蘭は構えた。

氷塊の威力はかなり強力……。その気になれば、鉄さえ切ることの出来るチリーの大剣ですら、破壊することの出来なかつた氷を、いとも容易く破壊する程の威力だ。一撃たりとも喰らう訳にはいかない。

更に、男に近づけば、触れた部分を凍らされてしまう。下手に近づけば確実に凍る。

「青蘭……やっぱり僕も……！」

男へ視線を移し、ニシルが身構える。

「駄目だ！ 能力無しでは危険過ぎる！」

「ア……アッ！」

ゆらりと。男がニシルの方へ視線を移した。垂らされた髪の間から、焦点の合わない両目がニシルをジッと見ている。

「ニシルッ！」

男が、ニシル目掛けて駆け出した。

凍らせる気だ。

「逃げるオ！」

青蘭が叫ぶが、ニシルは硬直したまま動かない。

「う、わあ……！」

凍らされる。その恐怖はニシルに想像以上の恐怖を与えた。

身体が硬直して動かない。

既に、男が眼前まで迫っていた。

「アア……アツ！」

ニシル目掛けて男の右手が突き出される

その瞬間だった。

「ニシルツ！」

「ツ！？」

ニシルと男の間に、突如として青蘭が割り込んだ。

「青蘭ツツ！！」

ニシルが叫ぶと同時に足、腰、腹部、腕、肩、そして頭部と、青蘭の身体は凍りついていく。

そしてニシルの前にゴトリと音を立てて転がったのは、マテューの両親と同じように完全に凍りついた　　青蘭だった。

カランと。音を立ててゲイラの持っていた剣が投げ捨てられる。戦闘放棄のようにも見えたが、ゲイラの怒りに満ちた表情から察するに、それはあり得ない。

「この姿は……見せたくなかった」

「　　ツ！？」

次の瞬間、チリーは自分の目を疑った。

いつの間にか背にあったハズのゲイラの翼は、両腕の位置に存在し、更にゲイラの身体は、ゴキゴキと嫌な音を立てながら骨格ごと変化していく。

鷹。

チリーの目の前にいるのは、通常ではあり得ない、チリーの倍くらいのサイズはありそうな鷹がそこにいた。

「お前……ゲイラ……か？」

驚愕に歪んだ表情で、チリーが問う。

「隊長……」

隊員達も、ゲイラがここまでの変貌を遂げるとは知らなかったらしく、驚愕の声を上げている。

「嘘……でしょ……」

呆然と。ミラルは巨大な鷹へと変貌したゲイラを見上げている。異形。

その二文字こそゲイラには相応しい。

『僕の顔に傷を付けた罪……償ってもらおうぞッ！』

怒号と共に、ゲイラはチリー目掛けて突っ込んで来た。チリーは素早く身を屈め、ゲイラの突進を何とか避ける。

「反則だろテムエッ！」

チリーの言葉には答えようともせず、ゲイラは翼を広げると、無数の羽をチリー目掛けて翼を動かしながら発射した。

チリーは大剣で羽を防ぐが、先程よりも数が増しており、いくつかは腕や足へ大量に刺さっていく。

「チリーっ！」

羽の刺さった部位から血を滴らせ、チリーはキッとゲイラを睨みつけた。

『終わりだッ！！』

ゲイラが叫び、飛ばしていた羽を止めると、チリー目掛けて滑空する。

それをチリーは避けようともせず、それどころかニヤリと笑った。「来いよ」

チリーがそう言うと同時に、ゲイラの爪がチリーの肩をガツシリと掴み、そのまま真っ直ぐに滑空を続けた。

『死ねエエエエ！』

「いやあああ！」

ミラルの悲鳴が聞こえると同時に、チリーの身体は、肩をゲイラの爪に掴まれたまま付近の大木に思い切りぶつけられる。

鈍い音とがして、チリーの背中に激痛が走った。

『さて、このままじっくりと料理し』

言いかけ、ゲイラはチリーの右手を凝視した。

『お前、剣はどうした？』

ゲイラの言葉に、チリーはニヤリと笑った。

「さあな。どっかにあるんじゃない？」

『ふざけるな！ 真面目に答えろ！』

チリーは嘲るようにフン、と鼻を鳴らすと、右手の人差し指を上に向けて立てた。

『上……？』

「頭上注意……って、もう遅いな」

『ッ！？』

投げられていた。

チリーの大剣はいつの間にか宙を舞い、ゲイラの頭上を縦に回転していた。

『やめ』

ゲイラが言いかけた時には既に遅く、宙を舞っていた大剣はその刃先をゲイラの背に向け、落下していた。

ズブリと大剣が突き刺さり、ゲイラの背から大量の血が噴射されるが……あ……』

呻き声を上げ、チリーを掴んでいたゲイラの爪が緩み、そのままチリーはゲイラと共に落下した。

「チリー！」

ドサリと。チリーが音を立てて地面に身体を打ちつけられると同時に、ミラルが傍へ駆け寄って来る。

「痛え………！ 無茶………し過ぎたか」

「馬鹿！ アンタもうちょっとで死ぬところだったじゃない！」

チリーは大丈夫だ、と答えると、ゆっくりと身体を起こした。

目の前には背に大剣が突き刺さり、大量の血を流して気絶しているゲイラが倒れている。

チリーはゲイラにゆっくりと近づくと、その背から大剣を引き抜

いた。と、同時に鷹と化していたゲイラの姿は元の人間の姿に戻っていく。ゲイラの身体を抱き起こし、チリーは心臓へと手を当てる。鼓動。

死んではいないらしい。

安堵の溜息を吐き、チリーは大剣から血を滴らせつつ、ざわついている隊員達にその刃先を向けた。

「コイツ連れて帰るか……それとも、俺とやるか？」

チリーの言葉に、隊員達はすぐにゲイラの元へ駆け寄り、数人でその身体を担ぎ上げる。

「て、撤退！」

隊員の一人が叫ぶと同時に、隊員達はゲイラを連れて一目散にその場を去って行った。

ゆっくりと。男はニシルに右手をかざした。

あの氷塊を出すつもりなのだろう。

「やめ……ろ……！」

かざされた男の右手の前に、あの氷塊が数個出現する。

「アア……アッ！」

男の呻き声と共に、その氷塊はニシルに向けて発射された。

「うわあああッ！」

絶叫し、己に向けて発射された氷塊を拒絶するように、目を閉じてニシルは両手を伸ばした。

キリトとの修行のおかげで、ニシルは本来なら的確な判断が出来たはずだ。それ以前に、このような状況に陥らない。

恐怖。

目の前にいる男への単純な恐怖が、ニシルから冷静な思考と行動を奪っていたのだ。

氷塊が直撃するまで、後コンマ二秒、一秒……………。

「……………ッ!？」

直撃 していない。本来なら既にニシルの身体は、あの強大な威力を持つ氷塊により吹き飛ばされ、絶命とはいかずとも瀕死の重傷を負っている そんな状態になっているはずだったが、ニシルの身体に異常はない。

「ア…………ッ」

髪で隠れているため、表情は見えないが、男は戸惑っているようにも見えた。当然だろう。ニシルに直撃するはずだった氷塊は 一つの間にか姿を消しているのだから。

「これは…………一体？」

閉じていた目を開け、ニシルは戸惑いの声を上げると、自分の両手を見つめた。

「何で…………？」

ニシルの両手は、何故か大量の水によって濡れていた。

「アア…………」

「ッ!？」

ニシルが戸惑っている間に、男は再度ニシルに右手を向けていた。あの氷塊を、今度こそニシルに直撃させるつもりなのだろう。

かざされた男の右手の前に、再度数個の氷塊が出現する。

風を切る音と共に氷塊がニシル目掛けて発射される。と同時に、

ニシルはそれを横っ跳びに避けた。

氷塊はそのまま真っ直ぐに飛び、その先にあつた建物の氷に直撃する。

「訳わかんないけど……少し落ち着いて来たぞ！」

キツと。ニシルは男を睨みつけた。

この男の能力……。氷の力は非常に厄介だ。加えて、強化した状態の青蘭と戦える程に戦闘力が高い。正直な話、ニシルがまともに戦つて勝てる相手ではないだろう。

「来い！ このロン毛野郎ッ！」

叫び、ニシルは男目掛けて突っ込んだ。

あの氷塊は威力が高い。が、接近戦に持ち込めば、男とて接近戦をせざるを得ない。

「おおおおッ！」

男の眼前まで近づき、ニシルは男の顔面目掛けて右拳をフック気味に突き出した。

男は身を屈めてニシルの右拳を避けると、ニシルの腹部目掛けて右手を突き出した。拳を握っていないその右手は、ニシルを凍らせるために突き出されたものだった。

ニシルは素早くバックステップでその右手を避け、男の頭目掛けて右回し蹴りを繰り出した。が、その右足は男の左手によって受けられる。

「しまったッ！」

ニシルが気付いた時には既に遅く、ニシルの右足は凄まじい速度で冷凍され、凍っていく。青蘭と同じように……。

「アア……」

凍りついたニシルの右足に一瞥をくれ、呻き声を上げたその時だった。

「ッ!?」

ニシル本人ですら、その光景に顔を驚愕で歪めた。

溶けているのだ。

水が蒸発するような音を立てながら、ニシルの右足を覆っていた氷は凄まじい勢いで溶け、水へと変わっていく。

「溶け……た……!？」

ニシルが驚嘆の声を上げた頃には、ニシルの右足を覆っていた氷は完全に溶け、水へと変わってニシルの右足を濡らしていた。

氷が水へ変わる。この現象を、状態変化という。

熱を加えられた氷と言う名の個体は、水　液体へと変わる。そして更に熱を加えることにより、水は……気体へと変わる。

ニシルの右足を濡らしていた水は、更に状態変化を起こしその形状を気体へと変えていた。

「ア……アアツ!？」

流星にこればかりは男も驚愕の色を隠せない。

身体を揺らし、動揺しているのがニシルにもわかった。

「まさか……僕の……能力？」

神力。

能力者の体内に宿る未知の遺伝子が生み出す超常現象。自由自在に取り出せる大剣。一定時間内だけ格段に能力値を格段に上げることの出来る身体。

熱。

ニシルの能力は、熱。自由自在に肉体から発することの出来る高温の熱。

それが、ニシルの能力。

「熱……か」

上げていた右足を降ろし、数歩後退すると、自分の右手を見つめてニヤリとニシルは笑った。

「アアアツ!」

男が叫び、右手をかざす。瞬時にその右手の前には氷塊が数個、出現する。

風を切る音と共に、氷塊はニシル目掛けて発射された。が、ニシルは避けようとせず、自分目掛けて飛来する氷塊を弾くように右手を振った。

水が蒸発するような音と共に、氷塊は一瞬で気化していく。

「もう氷は、効かない」

グツと。ニシルは拳を握りしめ、男目掛けて殴りかかる。

男は右手でニシルの拳を受ける。だが、ニシルの拳は凍らない。ただ湯気を上げるだけだった。

鈍い音と共に、拳を防いでいた右手ごとニシルの拳が男に直撃する。

よろめいた男の顔面に、続け様にニシルのフック気味に突き出された左拳が直撃し、男はそのまま派手に吹っ飛ぶ。

「青蘭を……町を……元に戻せッ！」

よろよると起き上がるうとする男を睨みつけ、ニシルは叫んだ。

しかし、その叫びに反応を見せず、男は立ち上がるとニシルへ右手をかざした。

「……ッ!? コイツ、やっぱり何かおかしい……！」

ニシルの能力は熱。それは男から見ても明らかだ。故に、男にも氷を使うのは無意味だとわかるはずなのだ。しかしそれでも男はそれでもニシルへ右手をかざした。氷塊を出現させる構えだ。

実験体。という言葉が、ニシルの脳裏を過る。

青蘭もこの男を見た時、「実験体……」ということか」と呟いていた。もしかするとこの男、青蘭の言っていた通り、神力を研究しているゲルビアによって実験台にされた能力者なのかも知れない。それ故に、この男の知能は著しく低下しているのだろう。町一つ氷漬けに出来る程の力と引き換えに。

氷塊が、ニシル目掛けて飛来する。ニシルは右手で氷塊を払い、気化させると男目掛けて駆け出した。

「目を……ッ」

男の眼前まで迫り、ギュッと右拳を握る。

「覚ませッッッ！」

男の顔面にニシルの右拳が直撃し、男はその場に仰向けに倒れた。

祈るように、マテューは氷と化した両親を見つめていた。

火の付いた暖炉の前に置き、少しでも早く溶けるようにと色々試したが、両親を覆う氷は一向に溶け切らない。

一生、このままかも知れない。

そう考えていた矢先、彼らがマテューの前に現れ、そして言った。

「絶対に俺達がお前の両親と、この町を元に戻す。だから、ちゃんとお父さんに謝るんだぞ」

チリーと名乗ったその少年の言葉を信じ、マテューはジッと待ち続けていた。

「やっぱり駄目……かな」

どこか心許ない。よくよく考えれば彼らは大人という訳ではない。大人でも解決出来なさそうなこの氷を、彼らが解決出来るとは考えにくい。そもそも、出会って間もない彼らが、果たしてマテューとした約束を守るだろうか？

そんな不安に駆られている時だった。

「ッ!?」

とろりと。両親の氷が流れる。

凝視していると、両親の氷はドロドロと溶け、水へと変わっていきではないか。

慌てて外を見ると、外の景色を覆っていた氷も同じように、水へと変わっていく様子が見えた。

「まさか……ホントに……!!」

信じられない。といった様子でマテューが両親の方へ視線を移した。その時だった。

「マテュー」

懐かしい声。その声は、ほんの数日間聞いていなかったただけだと言うのに、まるで何十年も聞いていなかったかのように懐かしく聞こえた。

「お父……さん？」

コクリと。目の前に男性が頷く。

「お母……さん？」

コクリと。目の前にいる女性が頷いた。

「マテュー……」

ガバリと。女性が……マテューの母がその小さな身体を抱き締めた。

「お母さん……」

しばらく抱き合い、マテューは目から大粒の涙を流した。母も同じように、涙を流し、抱き締められているマテューの髪を濡らした。

母がマテューを離すと、マテューは父へと視線を移した。

父はマテューを見、ニコリと微笑んだ。

「お父さん……ごめんなさい」

涙声で謝るマテューの頭の上に、父はそつと右手を乗せた。

彼らは守ったのだ。マテューとの、約束を。

ソファの上に横たわるその男の顔には、どこか見覚えがあった。

ニシルは男の顔をジッと眺め、どこで見た顔だったのかを懸命に思い出そうと頭を捻っていた。

「どこで見たんだったかなあ……………」

「知っているのか？」

腕を組み、ジッと男の顔を眺め続けるニシルに、青蘭が問う。

「うん。見たことのある顔なんだ……………。どこで見たのか、いつ見たのかは思い出せないんだけど……………」

「会ったことあるのか？」

「そうかも。それに……………コイツ見ると、何かモヤモヤする……………」

そう言っつてニシルが嘆息すると、コトリと音がして、ニシルと青蘭の前に紅茶が置かれる。紅茶を置いた手の先を見ると、マテューの母親がこちらに笑顔を向けていた。

能力の発現により、男を倒して町と青蘭を氷から解放したニシルは、気絶した男を連れてマテューの家へと向かった。町の氷が消えるので、恐らくチリー達も気付いてマテューの家に向かうだろうと考えてのことだ。

マテューと両親は、ニシル達を快く受け入れ、あるうことか町を凍らせた張本人である男すら中に入れたのだ。

「チリーやミラルに聞いたら、何かわかるかも知れない」

「ということは、テイテスにいた頃に見た顔……………ってことか？」

青蘭の問いに、ニシルはコクリと頷いた。

「うん。僕達が島の外に出たのはほんの数週間前の話だから……………その間に出会った人なら、そう簡単には忘れないと思う。それに、この顔を見たのはテイテスだった気がするんだ」

言い、ニシルが男の顔を眺め続けていると、ガチャリと玄関で音がした。

数秒後、少しよろよろと歩いているチリーと、そんなチリーを心配そうに見ながら歩くミラルが、ニシルと青蘭のいる部屋……居間へと通された。

「あの氷、お前達がなんとかしたのか？」

チリーが問うと、ニシルは澄ました顔でまあね、と答えた。

「流石青蘭だな……」

うんうんと頷きながらチリーは青蘭へと視線を移す。

そんなチリーに青蘭は苦笑し、その横でニシルはムツとした表情になった。

「チリー、『アイツ』を倒したのは俺じゃない。ニシルだ」

「……え!？」

青蘭の言葉に、チリーは驚嘆の声を上げる。

その横でミラルも心底驚いた、といった様子でニシルの方へ視線を向けている。

「僕の神力、発動したんだよ」

ニシルはチリー達に、その時の出来事を全て説明した。

「すごいじゃない!」

とミラルは感嘆の声を上げ、

「ニシルの癖に」

と、チリーはやや不満気な様子で、意味のわからないことを呟いていた。

「で、そっちはどうだったんだ？」

青蘭の問いにミラルが答え、ゲイラとの出来事を簡潔に説明した。

「やはり……ゲルビアか」

「そうね。ゲイラは『アイツ』のことを実験体と呼んでいたわ……。それで、そのソファに寝そべってる人が……『アイツ』？」

ミラルの問いに、青蘭がコクリと頷くと、ミラルはソファに横たわる男の顔を覗き込み　□元に手を当てて絶句した。

「ミラル、どこかで見たことあるよね!？」

男の方へ上体を乗り出し、やや興奮気味にニシルが問うと、ミラルはコクリと小さく頷いた。

「言われてみりゃ……どっかで会ったことあるよな、コイツ」

そう言っただけで、ニシルも男の顔を覗き込む。

「チリー、ニシル……この人……」

チリーとニシルの記憶の中に、この男の名前は浮かんでこなかったのだが、ミラルは違った。ミラルはこの男を知っている。テイテスにいた頃に、一度見たことがあるのだ。

「 トレイズさんよ」

「ッ!？」

ミラルの言葉に、チリーとニシルは驚愕で表情を歪めた。

「トレイズってあの……王様の側近の？」

ニシルが問うと、ミラルはコクリと頷いた。

「間違いないわ。私達と余り変わらない年齢で王様の側近になったから、すごく話題になってたわ……」

ミラルの言葉に、ニシルはなるほど、と胸の前で両手を叩いた。

チリーも思い出したらしく、男の トレイズの顔を眺めている。

「この男がそのトレイズだとして、何故テイテスの王の側近がこんな場所にいるんだ？」

「わからないわ……。でも、王様のことで何か手掛かりがわかるかも知れないわね……」

そう言っただけで、ミラルがトレイズの方へ再度視線を移した時だった。

「おい、起きたぞ」

ゆっくりと。閉じられていたトレイズの目が開かれる。

「……………」

怪訝そうな顔をし、トレイズはゆっくりと身体を起こした。

「……は」

小さく呟き、トレイズは辺りをキョロキョロと見回す。

「おい、大丈夫か？」

チリーが問うた

その瞬間、トレイズは血相を変えた。

「王はツツ!？」

突如叫び、激しく辺りを見回し始めたトレイズに、チリー達は息をのんだ。

「ゲルビアが……ツ！」

舌打ちするように言い放つと、トレイズは立ち上がった。

「ちょっと! どこ行くのよ!？」

「王を……助けに……ツ！」

駆け出そうとする。が、突如身体中に走った激痛にトレイズはよろめき、動きを止めてその場にうずくまった。

「無理するなよ!！」

駆け寄り、差し伸べられたニシルの手をトレイズは鬱陶しそうに振り払う。その行為に、ニシルは顔を驚愕に歪めた。

「うるさい! お前達には関係ない! こうしている間にも……王はッ!！」

痛む身体を押さえながらも、トレイズは立ち上がる。が、その行く手をチリーによって阻まれる。

「邪魔だ……!！」

「とにかく落ち着けよ。俺もそこにいる二人も、テイテスの出身で失踪した王様を捜してる。王様について何か知ってるなら、俺達に教えてくれ」

チリーの言葉に、トレイズは数秒沈黙したが、コクリと頷いた。

「……わかった」

トレイズはふらふらとソファへ戻り、その上へ腰掛けた。

「俺はチリーだ」

チリーに続いて、他の三人も手短かに名乗り、チリー達が王を捜すことになった経緯を簡単に説明した。

説明後、納得したらしくトレイズは小さく頷いた。

「……俺はトレイズ。テイテスで王の側近をしていた者だ」

「なあ、教えてくれ。王様とアンタに何があったんだ？」
チリーが問うと、トレイズは静かに説明を始めた……。

「王は　　誘拐された」

「な　　ッ!？」

トレイズの言葉に、その場にいた全員が息をのむ。

「誰がそんなことを!？」

目の前にある机を勢いよく叩き、チリーが問う。

「ゲルビアだ」

「帝国が……!？」

ゲルビア帝国。アルモニア大陸内で、規模、軍隊、権力、共に大陸内最大の帝国だ。その繁栄の陰に、人体実験や他国への必要以上の侵略等、良くない噂も流れている。

その帝国が、何故テイテスの王を？

テイテスの存在など帝国からすればないに等しいハズだ。たかが小規模な島国の王を、何の理由があつて帝国が誘拐する必要があるのか……。異常な程に不可解に感じられる。

「何で帝国が……王様を？」

ニシルが問うと、トレイズはかぶりを振った。

「わからない……。あの夜、帝国の者と思しき人物が、城の内部へと侵入した……。その侵入に気が付いたのは、情けないことにこの俺一人だった」

重い溜息を吐き、トレイズは言葉を続ける。

「だが、不覚にも侵入者を撃退出来ず、あろうことが王と共に攫われてしまう始末だ……」

王に会わせる顔がない……。そう呟き、トレイズは更に言葉を続けた。

「攫われた後、俺と王は別々の研究所へと連れて行かれた」

「どうして、研究所に？」

ミラルの問いに、トレイズの代わりに青蘭が答える。

「恐らく、神力研究のためだろう。トレイズもそうだし、テイテス

の王も神力使いだった……そうだな？」

トレイズの方へ視線を移し、青蘭が確認するとトレイズはコクリと頷いた。

「だが不可解だな。たかが研究目的くらいで一国の王を攫う必要性がわからない……。神力の研究だけならトレイズだけでも事足りるハズだ。もう一人必要だとしても、わざわざ王を選ぶ理由がわからない。部外者が横やりを入れるようで悪いんだが、何かわからないか？」

青蘭が問うと、トレイズは静かにかぶりを振った。

「それがわからない……。ゲルビア……。何を考えている……？」

自問するように呟き、トレイズは言葉を続けた。

「それで……。王様はどこにいるんだ？」

チリーが問うと、トレイズは何か思い出すかのように険しい表情になる。

「……ヘルテユラ。研究所の研究員達は確かそう言っていたハズだ。不鮮明な記憶だがな……」

「ヘルテユラ……」

トレイズの言葉を繰り返し、チリーは大きく頷いた。

「行くぞ。ヘルテユラに！」

チリーの言葉に、トレイズを含む四人はコクリと頷いた。

e p i o s d e 1 6 「 I n s t i t u t e 」

ドウナイから馬車で数時間、チリー達はヘルテュラへと到着した。ヘルテュラは、現在チリー達がいる国　　アギエナ国とゲルビア帝国の国境に位置する都市である。故に、他の国よりもゲルビアとの交流が深い上、ヘルテュラ内にはゲルビアの軍事基地や研究施設の規模が、他の町の物より大きい。

このヘルテュラの中に、テイテスの王、アレクサンダーが実験台にされている研究所があるのだ。

ヘルテュラへ到着したチリー達は、適当な宿を借りて荷物を置き、早速研究所の場所を調べに向かった。

大勢の人々が歩いている大通りの中、不意にトレイズだけがチリー達から離れ、別の方向へ歩き始めた。

「おい、どこに行くつもりだ？」

「研究所は俺一人で探す。別にお前らと仲間になったつもりはない。馴れ馴れしく話しかけるな」

冷たく言い放つトレイズに、チリーは眉間にしわを寄せて怒りを露にした。

「何だと……！？」

殴りかかろうとするチリーを、青蘭が素早く制止する。

「やめるチリー。今揉めても仕方がない」

「でも、アイツ……！！」

トレイズはチリーに一瞥をくれ、フンと鼻で笑うとチリー達へ背を向け、そのまま歩いて行った。

「なんて自分勝手な野郎なんだ……ッ！」

歩いて行くトレイズの背中を睨みつつ、チリーが悪態を吐くと、隣でニシルが頷き、同意した。

「アイツ……溶かしてやろうか……。チリーのついでに」

「今小さくチリーのついでについて付けなかった!？」

「気のせい気のせい。幻聴だよチリー。僕がチリーを溶かさないと訊かないじゃない」

「やっぱり幻聴じゃない!？」

そんなやり取りをする二人を眺めつつ、ミラルと青蘭は微笑んだ。

「トレイズはともかく……私達は私達で研究所について調べましよう。もしかしたら、研究所とは関係なくても、何か有力な情報が得られるかも知れないわ」

ミラルの言葉に、青蘭はコクリと頷いた。

「そうだな。まずは聞き込みから始めてみよう」

大通りは人が多いため、人を探す手間が省ける。四人は見失わないよう一定の距離を保ったまま二手に分かれた。

「研究所?」

チリーとニシルが問うと、老人は不思議そうな顔で首を傾げた。

「ヘルテュラのどこかに、ゲルビア帝国の研究所があるはずなんですけど……知りませんか?」

ニシルの言葉に、老人は首を横に振った。

「知らないねえ……。最近は何物騒だから、あまりそういうことには関わりたくないねえ……」

「……物騒?」

チリーが問うと、老人はコクリと頷いた。

「ここしばらく変な殺人事件が続いててねえ……」

「どんな殺人事件ですか?」

ニシルが問うと、老人は説明し始めた。

「毎晩、老若男女問わず必ず一人は殺されてるんだよ……。現場に残っているのは被害者の首のみ……。他の部位は一つ残らず消えているんだ……」

「ホラーだな……」

ゴクリと。チリーが生唾を飲み込む。

「現場にはまるで食い散らかしたかのような血痕が大量に残ってる……。噂じゃゲルビアの実験動物か何かの仕業だとか……」

老人が知っていたのはここまでで、それ以上の情報は得られなかった。チリー達が老人に礼を言っていると、老人はどこかへと去って行った。

「ねえチリー。もしさっきのお爺さんの言っていた事件の犯人が、ゲルビアの実験動物か何かなら、やっぱりヘルテュラには研究所があるってことだよな？」

ニシルの言葉に、チリーはゴクリと頷く。

「そうだな……。王様も、トレイズのように実験台になっている可能性が高い……。急いで研究所を探すぞ」

「うん」

チリー達が大通りで聞き込みを開始している頃、トレイズは研究所の前に立っていた。

アレクサンダーを連れて行ったような研究所が、町のど真ん中や目立つ場所に立っているはずがない。故に郊外にあると踏み、トレイズが向かったのは郊外の森だった。少し進んで行くとすぐに、研究所らしき建物を発見することが出来た。

石造りの建物で、あまり整備されていないのか建物の周りには苔や蔦が張り付いている。しかし、中に人がいない訳ではないらしく、窓を見れば人影が忙しなく動いているのが見えた。

「……ここか」

呟き、トレイズはギュツと拳を握りしめた。

あの日、アレクサンダーを救うことが出来なかったことが口惜しくて仕方がない。

今度こそこの手で救って見せる。

そう心の内で強く誓い、トレイズは研究所の入口へと歩み寄り、入口のドアへ手をかけた。

当然の如く鍵がかかっており、トレイズはドアを開けることが出来なかった。

小さく舌打ちし、トレイズは目の前のドアを思い切り蹴った。すると、木製のドアは勢いよく倒れた。

「誰だ!？」

中から音が付いた研究員達の声が聞こえてくる。

「急いでいなければ……ここまで粗っぽい方法を取る必要はなかったのだがな」

呟き、トレイズは研究所の中へと侵入した。

あれからしばらく、チリーとニシルは有力な情報を得られないでいた。老人と同じように、皆研究所とは関わりたくないらしく、知っていきそうな人間も硬く口を閉ざしていた。

青蘭達も似たような状況なのか、見れば誰かに質問をする度に困ったような表情を浮かべていた。

「ねえ、ちよつと良いかな？」

チリーとニシルが考え込んでいると、不意に背後から声をかけられる。

「何だよ？」

後ろに立っていたのは小柄な少年であった。

中世的な顔立ちで、身長はチリーよりは低い、ニシルよりは高い。肩まで伸ばされた髪を後ろで一つに縛っている。少女にも見えなくはない。

「僕はこの町の人間じゃないから、この辺に詳しくないんだ。良かったら案内してくれないかな？」

少年の言葉に、チリーとニシルは首を横に振った。

「悪いな。俺達もこの町の人間じゃないんだ」

「そっか……」

残念そうに呟いた少年が、一瞬青蘭達の方を一瞥した気がした。

「わかった。他の人に頼んでみるよ」

そう言つて少年はどこかへ駆けて行つた。

「何だアイツ……」

「さあ？ それより、早く研究所の場所を探さないと」

ニシルに促され、チリーが聞き込みを再開しようとした時だった。

「チリー！ ニシル！」

青蘭達がこちらへ駆け寄つて来る。有力な情報を得たのか、二人の表情は明るかった。

「研究所の場所がわかったわ！」

「ホントか!？」

ミラルと青蘭はコクリと頷く。

「どうやらこの町の郊外にある森の中に、研究所はあるらしいんだ。お前達は何か有力な情報は手に入ったか？」

青蘭の問いに、ニシルは肩をすくめて見せた。

「全然……。変な殺人事件の話くらいだよ」

「それ、私達も聞いたわ。研究所と何か関係あるのかも知れないわね……」

ミラルの言葉に、青蘭は小さく頷いた。

「そうかも知れないな。とりあえず研究所へ向かおう」

「トレイズはどうするの？」

ミラルが問うと、チリーはニヤリと笑った。

「知るかよあんな自己中野郎。勝手にどっかで迷つてろっつーの！

俺らはさっさと研究所へ向かつて、王様助けようぜ」

「まあ、トレイズなら大丈夫だろう」

嘆息し、青蘭が呟く。

「とにかく、研究所へ急ぎましょー！」

ミラルに促され、三人はコクリと頷くと、郊外の森へと向かった。

「答える。王はどこにおられる？」

周りには四散した研究道具と倒れている研究員。薬品の臭いが漂う研究所の一室で、トレイズは右手で一人の研究員の胸ぐらを掴んで問いかけていた。

研究員は完全に怯えており、トレイズの問いに答えず、ブルブル震えながら首を横に振っている。

「言え。死にたいか？」

トレイズの左手には氷で造られた小振りな剣が握られていた。その氷の剣の刃先を研究の首元へ突き付け、トレイズは問うた。

研究員は首を振り、死にたくないと言え。

「だったら話せ。王はどこにおられる!？」

ダラリと垂らされていた研究員の右腕が上がり、人差指でこの部屋の間を指差した。

episode 17 「Chimera - 1」

「壊されてる……」

そう言っつてミラルは、目の前にあるドアの残骸を見つめる。

「俺達より先に誰かここに辿り着いたつて訳か」

ヘルテュラの郊外の森の中に、その研究所らしき建物はあった。

石造りの建物で、随分と整備されていないらしく、建物の壁には苔や蔦が張り付いている。

「多分トレイズだよ」

ニシルの言葉に、青蘭が頷く。

「そうだな……。とりあえず中へ入ろう」

青蘭に促され、チリー達は研究所の中へと入った。

「……地下か？」

研究員の胸ぐらを掴んだままトレイズが問うと、研究員は必死で首を縦に振った。

「そのこの隅に……地下への隠し通路がある。鍵なら私のポケットの中だ」

トレイズは答えもせず研究員の胸ぐらから手を離すと、乱暴に彼の白衣のポケットから鍵を奪い、まじまじと眺めた。

「この鍵で合っているか？」

「ああ、間違いない……。地下にアンタの探している『王』とやらがいるかは知らないが、研究所に何か隠されているとしたらそこしかない……」

「なるほどな」

呟き、トレイズは部屋の隅の、隠し通路がある場所へと歩み寄っ

た。その時だった。

「トレイズ！」

乱暴に部屋のドアが開き、中へと入って来たのはチリー達だった。

「……僕達より先に見つけてたんだね」

「お前らがノロいだけだ」

その発言にカチンと来たらしく、チリーがトレイズをギロリと睨む。

「誰がノロいつて……!？」

「待てチリー。落ち着け」

今にも殴りかかりそうな勢いで凄むチリーを、青蘭が制止する。

「トレイズさん、この研究所であつてるの？」

ミラルの問いに、トレイズは小さく頷いた。

「だがここに王がおられるかどうかはわからない」

そう言い、トレイズは足元の床の鍵穴を見つけると、先程研究員から奪った鍵を差し込み、回した。カチリと音がしたのを確認すると、トレイズは鍵穴の付いた床と普通の床との隙間を利用し、鍵穴のついた床を持ち上げた。すると、地下へと続く階段の姿が露になる。

「それは……」

驚嘆の声を上げるニシルを気にも留めず、トレイズは階段を降りて行った。

「……俺達も行くぞ」

チリーの言葉に、三人はコクリと頷き、チリー達は階段を降りて行った。

長い階段を数分程降りると、そこにはドアがあった。

上から赤い電球が、ドアを赤い光で照らしており、どこか薄気味悪かった。

「この上のやつでんきつてやつだよな……?」

赤い電球を指差しチリーが言うと、ニシルはクスリと笑った。

「電気も知らないの?」

「知ってるよ！ ただちょっと珍しいなって思ったただけだ。ニシルだつてでんきはあんまり見ないだろ」

「まあ、それもそうなんだけどね。テイテスで電気があるのって、城の中くらいの物だったし、僕らが使ってるのもランプだしね」

そんな二人に一瞥をくれ、嘆息するとトレイズはドアをゆっくりと開いた。

「あ、おい待」

中に入るトレイズの後を追おうとしたチリーは、不意にピタリと動きを止めた。

「……チリー？」

心配そうにミラルがチリーの顔を覗き込むと、チリーの顔は驚愕に歪んでいた。

「何だ……これ……」

牢獄。

その部屋は正に牢獄であった。

真っ直ぐ、次のドアへと続く一本道。その両脇にはいくつもの牢が並んでいた。そしてなにより、牢の中に閉じ込められている生き物に対して、チリーは絶句した。

「これって……？」

この世の生き物ではない。

獅子の身体に鳥類の翼、尾の代わりに蛇の頭。まるでいくつかの生き物を合成したかのような……そんな生き物が牢の中には閉じ込められていたのだ。

前述した獅子の化け物だけではない。他にも面妖な、様々な生き物が牢に数匹閉じ込められている。

「酷い……」

トレイズを先頭に、五人は奥へと進んで行く。なるべくここには長居したくない。五人全員が同じ思いであった。

「命を玩具にするなんて……っ！」

拳を握りしめ、ミラルが言い放った時だった。

ガチャリと。前方で牢の開く音がした。

「　　ッ!?」

牢の中から現れたのは大柄で筋肉質な男だった。上半身に何も衣類を身に着けておらず、剥き出しの二の腕には鍛え上げられた筋肉がついている。

男はスキンヘッドの頭をポリポリとかき、蓄えられた無精ひげをゆっくりと撫で上げると、チリー達の方へ視線を移した。

「上が騒がしいと思ったら……侵入者か」

男を一瞥し、素早く大剣を出現させ、チリーが身構える。

「良い反応だ。白髪の坊主……。お前さん、才能あるぜ」

「さんきゅーおっさん。で、退いてくれる?」

男はチリーの言葉を聞くと、ガハハハと豪快に笑った。

「冗談の才能もあるぜ坊主」

「……そうかい」

大剣を構え、男目掛けてチリーが駆け出そうとした時だった。

スツと。チリーの前に青蘭が立ち塞がる。

「お、おい……」

「俺がここで時間を稼ぐ。お前達は、先に行け」

小声で言うと、青蘭は男を睨みつけた。

「お、アンタが相手かい?」

青蘭は男の問いに答える代わりにニツと笑うと、男目掛けて高速で突っ込んだ。

青蘭の能力、身体能力の強化。

瞬時に男の眼前へ迫ると、青蘭は男の腹部に思い切り右拳を突き出した。

「が……ッ!」

男が呻くと同時に青蘭は一步退き、男の頭部目掛けて左回し蹴りを放つ。

青蘭の強烈な回し蹴りが男の頭蓋骨まで響き、鈍い音をさせて男はそのまま右の牢の中へ吹っ飛んだ。

そしてそのままその牢の中の壁に激突し、ドサリと倒れる。

「す、凄い……」

目を見開き、ニシルが驚嘆の声を上げる。

「早く行け！　今ので倒した訳じゃない！」

「感謝する」

小さく言い放ち、トレイズはスタスタと早歩きで奥のドアへと進んで行く。

「でも、青蘭はっ！」

「コイツを片付けた後で必ず追いつく！　だから先に行つててくれ！」

青蘭の言葉に、チリーとニシルはコクリと頷き、躊躇うミラルを促し、奥へと駆けて行った。

そしてトレイズを先頭に、四人はドアの先へと進んで行った。

「よし……」

しばらくドアの方を見つめた後、青蘭は倒れている男へと視線を移す。

「やるじゃねえの……」

ゆっくりと。男は立ち上がると、パンパンと身体に付着した埃を払う。

「必ず追いつくと約束したんで……。アンタには　倒れてもらおう！」

立ち上がった男の眼前へ素早く近づくと、青蘭は男の顔面を右拳で思い切り殴りつけた。

後ろへたたらを踏んだ男の腹部へ、追い打ちとばかりに青蘭は左拳を叩きこみ、一步退いて距離を取ると、男の頭部目掛けて右回し蹴りを放つ。

鈍い音と共に男の身体は左へ吹っ飛び、壁へ激突する。

「……焦り過ぎだぜ……ッ」

男は起き上がると、ニヤリと口元を動かした。

「お前さんの焦る理由……わかるぜ？　お前さんの能力……時間制

限付きの肉体強化だろ？」

能力を言い当てられ、青蘭の表情が一瞬驚愕に歪む。が、すぐに落ち着きを取り戻す。

「それがどうかしたか？」

「いや……何も……」

怪しげに男が笑う。

訝しくはあったが、こんなことを一々気にしている暇はない。時間制限が切れる前にこの男を倒し、チリー達に追いつかねばならない。

青蘭の制限時間　　感覚的には、十分と言ったところか。

「俺もそろそろ何かするかあ……」

男の言葉を気にも留めず、青蘭は男の眼前へと迫り、男の頭部目掛けて右足によるハイキックを繰り出す。が、その足は男の頭部へ直撃する前に硬い何かによって防がれた。

「　　ッ!？」

「さっき食った蟹の合成獣だな」

青蘭の右足を防いだのは、男の腕　　否、腕と同じ場所に存

在するだけで、それは人間の腕ではなかった。

赤く、硬い殻に覆われ、先にはトゲの付いた鋏があった。

正しく、蟹の腕だ。

危険を感じ取った青蘭は素早く右足を降ろし、バックステップで距離を取り、その腕を凝視する。

「食った生き物の特徴を得る……!　　そういう能力だよ俺ア」

ニヤリと笑い、男は右腕の鋏をジヨキジヨキと動かした。

「神力使いを食ったことはないんでね……。お前さんを食えば、お前さんの能力が手に入るかどうかわからんが……」

ニヤリと笑い、男は青蘭に右腕の鋏を向けた。

「俺の一部になる前に覚えとけ。俺はヘルマン。ここで合成獣

キメラ共の世話係をやってる者だ」

男 ヘルマンは顎を小さく動かし、アンタは？ と問うた。

「俺は青蘭……。お前らゲルビアの滅ぼした……。東国の生き残りだ」
ギロリと。青蘭はヘルマンを睨みつけた。ヘルマンはそれを大して気にした様子もなく、興味深げに青蘭を眺めている。

「へえ。お前さん、あの東国の……」

呟き、うんうんと頷くとヘルマンはニヤリと口元を歪めた。

「丁度良い……。東国の生き残り……。お前さんを殺せば、俺も世話係から隊長クラスに昇進だな！」

ヘルマンは鋏の刃先を青蘭に向け、勢いよく飛びかかって来た。

青蘭が素早く身をかわずと、ヘルマンの鋏は青蘭が先程まで立っていた地面を大きく穿ち、コンクリートで固められていた地面の破片が辺りに飛び散った。

ヘルマンは素早く身体を動かし、青蘭の方を向くと今度は鋏を突き出し、青蘭へ突っ込んで来た。

突き出された鋏を、青蘭は身を屈めて避けると、右拳でヘルマンの顎目掛けてアッパーを繰り出した。

青蘭の右拳はヘルマンの顎へ見事に直撃し、ヘルマンはたたたらを踏んだ。

「こちとら……。タフさが売りなんだよオツ！」

追い打ちをかけようとした青蘭目掛けて、ヘルマンは鋏を左へ振った。

青蘭は素早くバックステップで鋏をかわす。

「ちょこまかと……ッ！」

ヘルマンは右腕を少し引き、一步踏み出して青蘭目掛けて鋏を突き出した。

青蘭が身を屈めて避けると、ヘルマンの鋏は青蘭の背後の壁に直撃し、穿つ。青蘭の頭に、壁の小さな破片がパラパラと降り注ぐ。

「うおらア！」

ヘルマンはそのまま青蘭目掛けて鋏を振り降ろす。

青蘭は左へ転がって鋏を避け、素早くヘルマンの眼前へ近づき、ヘルマンの頭部目掛けて左回し蹴りを放つ。

回し蹴りはヘルマンの頭部へ直撃し、ヘルマンはそのまま右へ吹っ飛んで鉄格子へ激突する。

「あの鋏……なるべく喰らいたくないな……」

呟き、青蘭は起き上がって来るヘルマンの方へ視線を移す。

この男、異常にタフである。筋肉等から考えて、かなりの鍛錬を積んでいるのがわかる。それ故に、能力で強化された青蘭の攻撃を何度受けても立ち上がることが出来る。

厄介だな。

青蘭は小さく舌打ちした。

青蘭の能力は、一定時間内だけだ。簡単に見積もって十分程度。

それ故に素早く勝負を決めなければならぬ。が、ヘルマンのようにタフな人間が相手だと、能力が切れてしまう可能性がある。そうやってしまえばこちらが不利だ。能力に頼り、青蘭自身が鍛錬を怠っている訳ではないが、能力で強化された青蘭の攻撃を受け切れる程に鍛錬を積んだ相手と、能力無しで渡り合うというのは厳しいものがある。

「まだまだ行けるぜエ……」

ヘルマンは両肩を回し、ゴキゴキと音を鳴らすと、青蘭の方へ視線を移した。

「もうすぐ……時間切れかな？」

ニヤリと笑ったヘルマンの眼前素早く青蘭が近づき、顔面目掛け

て思い切り右拳を突き出す。しかし、ヘルマンの右腕に防がれる。ヘルマンは右腕で青蘭の右拳を弾くと、空いている左拳を青蘭目掛けて突き出した。

青蘭は突き出されたヘルマンの左拳を、頭をそらしてかわすと、身を屈め、ヘルマンの腹部を左拳で殴りつける。

ヘルマンは少しよろめいたが、すぐに体勢を立て直し、右腕を青蘭目掛けて左へ振った。

「しまっ　　ッ!？」

言いかけた時には既に遅く、ヘルマンの右腕は青蘭へ直撃し、青蘭はそのまま左へ吹っ飛び、鉄格子へ激突する。

鈍い音と共に青蘭の身体に激痛が走る。

「ガハハハハ！　やっとこさ直撃だア！」

ヘルマンは、立ち上がり右腕を押さえながらバックステップで距離を取る青蘭を眺めつつ豪快に笑った。

「右腕、やられちまったかア？」

ニヤリと。笑みを口元に浮かべ、ヘルマンが問う。

「さあな……ッ」

ギョツと。青蘭は痛む右腕を左手で握った。

折れている。もしくはひびが入っている。どちらにせよ、もう右腕が使えないのは明白だった。

それに気付いているのかいないのか、ヘルマンはガハハともう一度豪快に笑った。

「お前さんを殺して……昇進だッッ！」

ヘルマンは青蘭の眼前まで迫ると、右腕を左に振った。青蘭は素早く身を屈めて左に転がり、それを回避する。

破壊音と共に鉄格子が破壊され、棒状の鉄がその場に数本転がった。

あの腕をどうにかしなければ勝機はない。

ヘルマン自身は異常にタフだ。しかしそれでも、もうかなりのダメージを与えているはずだ。

問題はあの、右腕……。壁も、地面も、鉄格子をも問答無用で破壊するあの鉄。

ヘルマンは挟んで切るということはせず、殻に包まれているその部分の硬さと、ヘルマン自身の腕力を利用して打撃に使っている。甲殻類の甲殻の中身は非常に柔らかい。故に硬い殻で覆い、身を守っているのだ。

食べた生き物の特徴を得るヘルマンの能力から考えて、その特徴も変わらないだろう。あの殻の中身は柔らかいハズだ。だが、どうあの殻を破壊する？ 素手での攻撃では破壊出来ない。チリーの大剣なら破壊出来なくもなさそうだが、今ここにはいない。

「もう終わりかア？」

青蘭目掛けて、ヘルマンは右腕を斜めに振り降ろす。青蘭は右に転がり、右腕を避けると同時に転がっている鉄格子の、棒状の鉄を左手で一本掴む。

そのまま青蘭は牢の外に出ていた。

「そこに逃げても……狭いだけだツッ！」

蟹を どう食べるか？

殻の内側の、柔らかい部分を如何に多く引きずり出し、その味を楽しむか。殻の内側の柔らかい部分を、如何にして引きずり出すのか……？

「そうか……ッ！」

関節。

殻と殻との間に存在する 間接。蟹を食す際、関節を曲がらぬ方向へ折り曲げ、中の柔らかい部分を引きずり出す……。殻に比べ、関節は比較的柔らかいのだ。

ヘルマンの右腕にも当然、関節はある。殻と殻との間に存在する……。比較的柔らかい関節が。

「行くぜエーッ！」

ヘルマンは牢から出て来ると、青蘭目掛けて鉄を突き出した。

青蘭は右に転がることでそれを避け、ニヤリと笑んだ。

「何がおかしい!？」

ヘルマンの問いには答えず、青蘭は左手に持った棒状の鉄を、ヘルマンの右腕の関節、殻と殻の間にある比較的柔らかい部分へと突き刺した。

「がアアアアツ!!」

これは流石に効いたらしく、ヘルマンは絶叫した。

青蘭は更に深く鉄を関節へ突っ込み、そのまま貫通させた。青みがかつた体液が飛び散り、青蘭の顔を汚した。

青蘭は棒状の鉄から手を離し、絶叫し続けるヘルマンの背後へ回ると、思い切り前方へと蹴飛ばした。

ヘルマンはそのまま前方へ吹っ飛び、目の前の鉄格子の扉を破壊し、牢の中へと突っ込んで行く。

その牢の中に入っていたのは、獅子の頭に虎の身体をした如何にも獰猛そうなキメラだった。

ヘルマンは眠っていたキメラに激突する。

「ぐ……ウ……ツ!!」

ヘルマンは呻き声を上げつつも、右腕の関節に突き刺さった棒状の鉄を引き抜く。

更に多くの体液が関節から噴射され、キメラの体毛に降り注ぐ。

「グルルル……」

ヘルマンが激突した衝撃で、目を覚ましたキメラはヘルマンの方をジッと見つめている。

「そつだ……! あそこにいるアイツを殺せ! 餌だ! 食っても良い!」

左手で青蘭を指差し、ヘルマンが叫ぶが、キメラは寝そべったまま動かこうとせずにヘルマンの方をジッと見つめている。

「どうした!? 言う事を聞け!」

「グルルル……!!」

スツと。キメラが立ち上がる。

「そつだ……ツ! 良い子だア……ツ! さつさとアイツを殺して

「こおい！」

「グルル……ッ！」

小さく唸り、キメラは一步步ヘルマンの方へと歩み寄る。

「おい、どうした！？ 何故こっちへ来る！？」

悲痛な叫び声を上げつつ後退りするヘルマンを眺め、青蘭はクスリと笑った。

「どうやら、そいつの餌は俺じゃないらしいぜ」

「ま、待て…… やめろオオオオオオツツ！！」

絶叫し、あまりの恐怖のせいかヘルマンはその場で気を失った。

青蘭はヘルマンが気を失ったのを確認すると、素早く牢の中へ入り、キメラ目掛けて思い切り右回し蹴りを喰らわせた。

キメラは呻き声を上げてそのまま吹っ飛び、壁へ激突するとその場で気を失った。

「お前がキメラの餌になれ…… って言いたいところだが、命は助けてやるよ」

嘆息し、青蘭は牢の外へ出ると、奥のドアへと視線を移した。

「チリー達の元へ追いつかないと……」

痛む右腕を抑えつつ、青蘭はドアの方へと歩いて行った。

episode 19 「Machine body - 1」

青蘭がヘルマンとの戦闘を開始している頃、チリー達はドアの先へと進んでいた。

あのドアの先にはしばらく廊下が続いており、その奥にはドアがあった。

何も言わず、トレイズがガチャリとドアを開き、四人はその中へと入って行く。

「ここは……」

「どうやら、人体実験の部屋らしいな」

小さく、トレイズが呟く。

その部屋の周囲は、謎の液体で満たされているカプセルに囲まれていた。左右に数個ずつ、カプセルが設置されており、何も入っていないカプセルもあるが、中には人間らしき物の入ったカプセルも存在した。

「人体実験の部屋って……！ 命を何だと思ってるのよ！」

辺りのカプセルを見回し、ミラルが言い放った。その時だった。

「見て！」

ニシルの指差す方向。この部屋の中央へ三人が視線を移すと、床が動いているのだ。まるでスライドするかのように床がずれて行き、やがて巨大な長方形の穴が出現した。そして機械音と共に長方形の穴から何かがせり上がって来る。

「命を何だと思ってるのか……その問いに、我々科学者は答える義務がある」

しわがれた、老人の声が穴の下から響いて来る。

「っ！」

せり上がって来たソレを凝視し、ミラルは口元に手を当てて絶句した。

せり上がって来たのは手術台と一人の老人だった。その老人は一目で老人とわかる容姿なのだが、普通の老人とは違い、白衣の下からでもわかるような鍛え上げられた筋肉を持っている。

そして手術台。この手術台にこそ、ミラルが絶句した理由がある。乗せられているのだ。人間が。成人男性らしき人間が一人、その手術台には乗せられているのだ。既に絶命しているのか、男性はピクリとも動かない。

「お答えしようお譲さん。我々科学者は、命を『実験材料』としか見ていない。それ以上でも、それ以下でもない。我々科学者は発展のためなら我が身すら平気で差し出すさ」

ニヤリと。老人は口元で厭な笑みを浮かべた。

「ようこそ。私の実験室へ……。この部屋の主、グラウスが案内致そう……。とは言っても、この部屋と下の実験室だけなのだが……」

ペコリと。老人　　グラウスはチリー達に礼をした。

「おじいさん、その人……実験に使ったの？」

手術台を指差し、ニシルが静かに問う。

「うむ。先程まで実験をしていたところだ。やはり人間の身体を機械で強化するのは容易なことではないな……」

グラウスはポンポンと男性の身体を軽く叩く。

「殺したのか……ッ」

ギロリとグラウスを睨みつけるチリーに、グラウスは笑んだ。

「彼は科学の犠牲になったのだ……。彼は科学の役に立てたのだぞ？　光栄なことだと思わんかね？」

「狂ってる……」

チリーの隣で小さく、ミラルが呟いた。

「お前の実験結果などどうでも良い。単刀直入に聞く、王はどこにおられる？」

トレイズが問うと、グラウスはクスリと笑った。

「何がおかしい？」

「いや、別に……。ただ、お捜しの王様に出会った時、お前がどん

な顔をするのか想像してねえ……。後でデートに知らせておかないとな」

スツと。グラウスは親指で背後のドアを指差した。

「この奥だ。私の友人であるデイトと共に、お前達を待っているぞ……。だが、タダで通す訳には行かん」

グラウスは右手の人差し指を立て、言葉を続けた。

「一人……。神力使いを私の実験台としてここに置いて行け。それが条件だ」

「ふざけんな！ 誰もお前の実験台になんか」

チリーが言いかけた時だった。

そつと。ニシルの右腕が上げられる。

「ニシル!？」

「チリー、ここは僕に任せて。この糞ジジイ……。ぶっ飛ばさないと気が済まないから」

ニシルが手を上げていることを確認し、グラウスがニヤリと笑った。

「駄目よニシル！ 実験台なんて……っ！」

「僕が簡単に実験台になる訳ないじゃん。ジジイぶん殴って昏倒させて、すぐみんなに追いつくからさ。みんなは早く、王様を助けに行つて」

冗談っぽく笑うニシルに、トレイズが視線を移す。

「良いのか？」

「心配してくれるの？」

「……いや」

口元に笑みを浮かべ、トレイズは奥のドアへと視線を移した。

「ニシル、感謝する」

「どういたしまして」

冗談っぽくそう言ったニシルに背を向け、トレイズは奥のドアまで駆けて行く。

「ニシル……」

「何してんだよ二人共！ さっさとトレイズと行けって！ 僕は大丈夫だから」

ニツと笑ったニシルに、チリーはコクリと頷くと、右拳をそっと突き出した。

「絶対、追いつけよ」

「おう」

コツンと。チリーの右拳を、ニシルは自分の右拳で小突いた。

「行くぞ、ミラル」

「う、うん……。ニシル、気を付けてね！」

不安そうな顔をしながらも、ミラルはチリーと共にドアの方へと駆けて行った。

三人がドアの向こうへ行っただのを確認すると、ニシルはグラウスの方へと視線を移した。

「で、僕でどんな実験をするのかな？」

「神力使いの実験は経験が少なくて……。色々試してみたいことが山程ある」

「気持ち悪う。どうせ身体いじられるなら、美人のお姉さんが良いな」

「悪いがその望みは叶えられんな」

「それは残念」

肩をすくめ、ニシルはニツと笑う。

「さて、実験に移るぞ」

「出来るんならね」

スツと。ニシルは身構えた。

「やはり簡単にはいかぬか」

呟き、嘆息するとグラウスは右手をニシルへ向けた。

「ッ！？」

「実験は殺した後でも問題なかるう！」

何かが外れるような音がし、グラウスの右手首が不自然な方向へ曲がった。本来なら曲がらない方向……。上へ曲がり、グラウスの右

腕から手首が外れた。

手首のあった部分には円形の空洞が出来ている。

「粉々にはせんさ」

発射された。

グラウスの右腕にある円形の空洞から、小型のミサイルが発射されたのだ。そのミサイルは、真つ直ぐにニシル目掛けて飛んで来る。

「嘘でしょッ!？」

驚嘆の声を上げつつも、ニシルは横つ跳びにそのミサイルを避ける。

ミサイルはそのまま飛び、後ろの壁に直撃し、爆発音と共に爆散する。規模は小さかったが、まともに喰らえば重症となるのは明白であった。壁は小さく抉れ、破片をパラパラと落としている。

「無茶苦茶だ！ 腕からミサイルなんて！」

「これが科学の力」

「科学つてなんでもありだね！」

皮肉っぽく言うと、ニシルはグラウス目掛けて駆け出した。

グラウスは駆けて来るニシルへ右腕を向け、再度ミサイルを発射する。が、ニシルはそれを素早くかわし、グラウスの眼前まで迫る。かわされたミサイルは壁に直撃し、爆発音と共に爆散。

「本体を叩けばッ！」

ニシルは右足でグラウスの右腕を蹴り上げると、そのまま右手でグラウスの顔面へ裏拳を叩きこんだ。が、グラウスはピクリとも動かなかつた。それどころか、ニヤリと笑ってさえた。

「痛ッ」

声を上げたのはニシルの方だった。

左手で拳を押さえ、バックステップでグラウスから距離を取る。

「何これ……人間の硬さじゃない……ッ!？」

驚愕するニシルに、グラウスはニヤリと笑んだ。

「これが科学の力」

グラウスは、再度右腕をニシルへ向ける。

「私の身体はディートの協力で機械と化している……。頭部も金属で補強してあるのでな。生身の拳で殴れば、痛いのは当然ということだ」

そう言い、グラウスはニシル目掛けてミサイルを発射した。

とっさに身を屈め、ニシルはミサイルを回避する。背後で爆発音がし、ミサイルが爆散する。

「なるほどお……。機械の身体かあ……。それなら殴れば痛いのは当然だねッ！」

「そうだろうそうだろう」

「科学って何でもありだねッ！」

「そうだろうそうだろう」

数秒の沈黙……。が、すぐにニシルが勢いよく床を踏みつける。

「ふざけんなーッ！」

ニシルの叫びが、部屋中に木霊する。

機械で改造された身体……。そんな物を見せられたら誰だって驚く。おまけにその機械と今から戦わねばならないのだ。叫びたい気持ちもわからないでもない。

「どうだ？ お前もなってみるか？」

右腕を振り、グラウスがニシルにアピールするが、ニシルはその場に唾を吐き捨て、グラウスを睨んだ。

「誰がなるかッ！ そのふざけた身体、ぶっ壊してやる！」

ギロリと。ニシルはグラウスを睨みつけると拳を握りしめ、グラウス目掛けて突っ込んだ。

グラウスは右腕を元の形に戻すと、今度は左腕を前へ突き出した。「今度は何だッ!？」

グラウスの左手は機械音と共に引っ込み、右腕と同じような円形の空洞が出現する。しかし、今度はそれだけに止まらず、更に激しく機械音をさせながら、左腕の奥から何かがゆっくりと突き出されて行く。

「行くぞ」

グラウスの左腕に出現したのは、剣のような刃であった。

「ホント何でもありだね……ッ!」

ニシルはグラウスの眼前まで迫ると、右拳を顔面目掛けて思い切り突き出した。

グラウスは左手の刃の樋で防ぐ。すぐにニシルは拳を引き、左手でグラウスの刃に触れた。

「……何!？」

グラウスが驚愕の声を上げた時には既に遅く、グラウスの左手から飛び出していた刃は、音を立てて融解し始めていたのだ。溶けた刃は液体となり、ポタポタと床へ滴って行く。

グラウスは数歩引いてニシルから離れるが、既に左手の刃は使い物にならない程融解していた。舌打ちし、グラウスが刃を引っ込めると、左腕の先は再び円形の空洞となった。

「熱の能力か」

「まあね」

「研究しがいがある」

グラウスはニイツと笑うと、再び機械音と共に左腕の奥から何か突き出されて行く。

「穴でも掘る気……？」

ニシルは額に嫌な汗をかきつつ、グラウスの左手を凝視する。
先の尖った、螺旋状の窪みがあるソレは正しく
ドリルで
あった。

「採掘に便利だ」

科学者がいつ自らの手で採掘するのか、そうツツコミを入れる隙もなく、激しい回転音と共にドリルは回転を始めた。

あんな物を喰らえば一溜まりもない。

額にかいたじっとりとした汗を、ニシルは右腕で拭った。

「何、少々細切れでも研究には問題ない」

大アリだと思っただが、やはりツツコミを入れるような隙はなく、グラウスはドリルを構えると、ニシル目掛けて突っ込んで来た。

グラウスはニシルへ、ドリルを上から下へ斜めに突き降ろす。

ニシルが前方へ転がり、ドリルを回避すると同時に破壊音がし、ニシルが先程まで立っていた床が軽く抉れた。

ニシルはグラウスの背後へ回ると、殴りかかるうとしたがすぐに動きを止めた。

あのドリルで防がれたどうする？

手が、足が、あのドリルの凄まじい回転に巻き込まれたら………恐らく巻き込まれた部位はもう使い物にならない程ボロボロになるだろう。それ程凄まじい回転なのだ。

素手で戦うというのがそもそも無茶な話なのかも知れない。もしかすると自分は、この「熱」の能力発現で調子に乗っていたのかも知れない。出来もしないことを出来る錯覚し、ただ自分を窮地に追いやっただけなのではなからうか。

そこまで考え、ニシルは歯噛みした。あの時、調子に乗らずにチリーかトレイズに協力を上げれば良かったのだ。だが、今悔やんだところでもうにもならない。

ゆっくりと。グラウスがこちらを見る。

「外したか」

ドリルは尚も回転を続けている。

グラウスはニシルを見、そして己が左手のドリルを見、ニタリと笑った。

「お前……」

スツと。ドリルを前に突き出す。

「怖いか？ このドリルが……」

グラウスの問いに、ニシルは答えなかった　　否、答えられなかった。

ゴクリと生唾を飲み込み、グラウスのドリルを凝視する。

「逃げるか？」

その問いにも答えず、ニシルはそのドリルを凝視する。

怖い。あのドリルが。自分を優に殺害することの出来る

あのドリルが　　怖い。

激しい音と共に凄まじい勢いで回転を続けるドリル。見るだけで容易に、自分の身体が貫かれた場合を想像出来る。貫かれ、血肉を回転に巻き込まれ、辺りに飛び散らせながら倒れて行く自分の姿が、あのドリルを見るだけで想像出来るのだ。

怖い。あのドリルが恐ろしい。先程までであった余裕の一切は消え失せ、ニシルの表情は恐怖に引きつっていた。

気が付けば、ニシルは後退していた。

「そうかそうか。そんなにこのドリルが　　怖いかッ！」

グラウスは不意に語気を荒げると、左手のドリルを構えてニシル目掛けて駆け出した。

「うわ……うわあああッ！」

突き出されたグラウスのドリルを、ニシルは横っ跳びに避け、音を立ててその場に倒れ込む。

それを見たグラウスはニヤリと笑い、すぐにニシルの方へ方向を転換した。

「怖いか……」

いつの間にかニシルは地面に尻を付け、恐怖に表情を引きつらせ

たまま後退り始めていた。

「ひ……い……ッ！」

恐怖に身が竦み、まるで蛇に睨まれた蛙である。その目には、薄らと涙さえ浮かんでいた。

「気にするな。すぐに恐怖も感じなくなるさ」

ニヤリとグラウスは笑い、ゆっくりとニシルの方へと歩み寄って来る。

「嫌……だ……ッ」

このままグラウスが来れば、自分はそのドリルで貫かれる。血肉を撒き散らし、さながら肉塊が如き姿と成り果て、目の前の狂った科学者に余すことなく研究されるのだ。少し考えただけでも身の毛がよだつ。

逃げなきゃ。

ニシルの中で、そんな言葉が脳裏を過る。

逃げなくてはならない。

何から？

目の前の恐ろしい物から

現実から。逃げるのだ。恐怖か

ら、全てから。体裁も何も投げ出して、己が命のために全力で逃げなければ。

全てを投げ出す

背負っている物も？

捜さなくてはならない王様。

自分達を先に行かせるために、命を張った青蘭。

自分を信じて、先に行った仲間達。

それらを全て投げ出しても、逃げるのか？

否、断じて、逃げて良いはずがないのだ。

絶対、追いつけよ。

脳裏を過る、先程のチリーの言葉。その言葉へもう一度答えるかのように、ニシルは静かに頷いた。

ゆっくりと。ニシルは立ち上がる。

意を決した表情で、グラウスを見据える。

その顔に、先程までの　　一時の恐怖に怯え、情けなく引きつった顔はなかった。そこにあるのは覚悟を決めた者の顔があった。怖いのは、自分だけじゃない。チリーも青蘭も、無論トレイズも、目の前の敵と恐怖と、逃げ出そうとする自分……その三つと同時に戦っているのだ。

凄いと思った。自分には出来ないと思った。が、それと同時に自分もそうありたいと、ニシルはそう思った。

「戦いを制するのは……『覚悟』だ」

既に、グラウスは眼前まで迫って来ていた。

「恐怖は消えた……が、君が実験台となることには何ら変わりがない！」

グラウスが、ニシル目掛けてドリルを突き出した　　その時だった。

ピタリと。ニシルを貫いているハズのドリルは、ニシルの目の前で動きを止めた。

「馬鹿な……あり得ない……ッ！　神力使いは頭がおかしいのかッ！？」

素手でドリルを受け止めているのだ。

「おおおおおおおッッッ！！」

あまりの苦痛に絶叫しつつも、ニシルはドリルを掴み続ける。凄まじい回転に巻き込まれ、ニシルの両手は血を流す間もなく削られていく。が、ニシルの両手からは高熱が発せられている。金属製のドリルは高熱により、回転数と負けず劣らずの勢いで融解していく。「馬鹿じゃないのか……ッ!？」

グラウスが驚愕の声を上げた頃には、既にドリルはほぼ溶け切り、ドリルとしての用を成さなくなっていた。

「僕は……逃げない！ チリー達のように……戦う！」

ニシルはグラウスの左腕を掴むと、高熱を発し、その腕を融解させた。

「おおおおッ!?」

ポトリと。音を立ててグラウスの左腕はその場へ落ちた。

そしてニシルはそれを拾い上げ、驚愕に歪んでいるグラウスの顔を蹴り倒した。

「ぐおッ！」

そしてグラウスの上に跨ると、手にしたグラウスの左手の

ドリルとしての用は成さないが、先が尖っていて十分に凶器としては利用出来るその左手を、グラウスの腹部へ突き刺した。

破壊音と共にグラウスの左手はグラウスの腹部へと突き刺さり、腹部からオイルが飛び散り、中の機械が少しはみ出した。

「言つたる？ そのふざけた身体、ぶっ壊してやるって」

ニツと笑うと、ニシルはグラウスの左手を勢いよく更に深く突き刺した。そしてジタバタと暴れるグラウスの頭部を、思い切り右足で踏みつけた。

グシャリと音がして、グラウスの動きはピタリと止まった。恐らく今の衝撃でグラウスを動かしていた機械が壊れたのだろう。

ニシルは両手の平に激痛を感じつつも、安堵の溜息を吐くと、奥のドアへと視線を移す。

「みんなに追いつかなきゃ」

ニシルはゆっくりとドアの方へと歩いて行った。

暗い一本道の廊下を、三人は走っていた。次のドアまでは意外に遠く、先は中々見えてこなかった。

本当にこの先に、テイテスの王　アレクサンダーはいるのだろうか。グラウスは確かに「この奥で待っている」と答えた。しかし、それが真実である確証などどこにもない。むしろ偽りである可能性の方が十分に高い。

それでも、この奥にアレクサンダーがいる。そう仮定しなければ進めない。有力な情報はグラウスの言葉だけなのだから。

不意にピタリと。トレイズが足を止めた。それに釣られてチリーとミラルも足を止め、不思議そうな顔でトレイズへ視線を移す。

「どうしたんだよ？」

「一つ……お前達に謝らなければならないことがある」

小さく言い、トレイズは振り向き、チリーとミラルを真っ直ぐに見た。

「俺はお前達のことを誤解していた」

「誤解……？」

ミラルが問うと、トレイズはコクリと頷き、言葉を続けた。

「俺はお前達のことをただのクソガキくらいにしか思っていなかった。こうして島の外に出ているのも、単なる好奇心だけで王の捜索など二の次にしているような連中だと……勝手に思っていた」

だが、違うんだな。トレイズは小さくそう付け足した。

「トレイズさん……」

「トレイズで良い」

初めて、トレイズがチリー達へ微笑んだ。

「だったら、俺も謝らなきゃだな」

腕を組み、チリーはうんうんと何かを納得したように頷く。

「俺も、お前のことを自分勝手に融通の利かないクソヤローだと思

つてた。でも、違うんだよな。お前は、少しだけだけど俺達のことを仲間だと思つてて、青蘭やニシルにも、ちゃんと礼が言えるよな……そういう奴なんだよな」

チリーの言葉にクスリと笑い、トレイズはそつと手を差し出した。それを見、チリーもニツと笑い、その手を握った。

「王様を、絶対に助けだそうぜ」

「当然だ。お前に言われなくてもな」

二人は顔を見合わせてニツと笑い、手を離すと前を向いた。「進むぞ」

チリーの言葉に、トレイズとミラルはコクリと頷き、また走り出した。

しばらく進むと、やっとのことでドアが見えた。

「この先に……王様がいるのね」

ミラルの言葉に、隣でチリーがコクリと頷く。

「助けるぜ……王様を！ そしたら王様を連れて、みんなでテイテスに帰ろう。青蘭も連れてさ……。島の外で見て来たこと、親父に日が暮れるまで語ってやろうぜ！」

そうだな。と呟いて同意し、トレイズは微笑んだ。

「そうね。私も、おじさん達に黙って出ちゃったから……」
「行くぞ」

チリーの言葉に、二人がコクリと頷く。

そしてチリーはドアノブを握り、ゆっくりと回し、ドアを開けた。その先は、妙な部屋だった。

暗く、殺風景な部屋であった。飾りも何もない、石で出来た壁と床に囲まれた殺風景な部屋。よくよく見れば様々な拷問道具と思しき道具達が壁にかけられていたり、無造作に床へ転がっていたりした。

そしてこの部屋の中心　　大きな、ライオンでも入れるかのような檻が一つ置いてあった。暗くて中に何が入っているのかわか

らない。が、ガタガタと時折揺れるため、何かが入っていることは明白であった。

「王は……どこに？」

眩き、トレイズが辺りをキョロキョロと見回した。その時だった。

「ようこそ、僕の拷問部屋へ」

不意に、男の声が聞こえる。数歩足音が聞こえ、その声の主は闇の中からチリー達の前へ姿を現した。

「僕はデイト。君達侵入者のことは、上の研究員から聞いてるよ。デイトと名乗ったその男は、ニヤリと笑った。

小柄な体躯、全く手入れをされていないようなボサボサの頭、デイトは眼鏡の位置を右の人差し指でクイクイと直し、もう一度チリー達へと視線を移した。

「お前の名前なんて今まで食ったパンの枚数よりどうでも良いんだよ。俺達の質問にだけ答えろ。テイテスの王様はどこだ？」

チリーの問いに、デイトはククツと厭らしく笑う。

「何がおかしい？」

「いいや別に……」

デイトは神経質そうに眼鏡の位置を直す。

「いるのかいないのか、答えろ。死にたいのか？」

眉間にしわを寄せ、トレイズが問う。

そんなトレイズを見、デイトはクスリと笑った。

「さつきからテメエ何笑ってたんだ！？ 言いたいことがあるならハツキリ言えこの根暗眼鏡ッ！」

「根暗眼鏡とは心外だな……。確かに僕は根暗で眼鏡だけ……」

「ピツタリ当てはまってんじゃねーかッ！」

デイトはクスリと笑うと、傍にある大きな檻へよりかかった。

「会いたいかい？ 君達の王様に」

デイトの問いに、当然だ。とトレイズが静かに答える。

「そうだよねエ……。そのためにここまで来たんだもんねエ……」。

仲間を犠牲にしてまでさ」

「犠牲じゃねえ……ッ！ アイツらは、俺達を先に行かせるために……ッ！」

「犠牲になつたんだろ？ 認めるよ。否定する程卑劣なことじゃない」

チリーにそう言い、デイトは再度眼鏡の位置を尚した。

「そんなことより、会いたいんだろ？ 王様にさ。会わせてやるよ……。優しいだろ？ 僕ってさ」

デイトは微笑むと、檻に寄りかかるのを止め、檻の前へ立った。
「テイテスの王であり、そして天才科学者グラウスの失敗作

アレクサンダー君の登場だよ君達ッ！ 拍手で迎えたまえッ！」
パチンと。デイトが指を鳴らすと同時に、天井の電球が光り、
デイトの後ろにある巨大な檻を照らす。

光りに照らされ、檻の中に閉じ込められていた何かの姿がチリー
達の視界に飛び込む。

「え？」

小さな、驚愕の声。

突然過ぎて、叫ぶことさえままならない。

檻の中に閉じ込められていたのは 人だった。紛れもない

人間。一人の人間。

「嘘よ………っ！」

その場に、檻を凝視したまま驚愕に表情を歪めたミラルが膝を付
く。

「だって……この人は……何で………どうして………っ！」

チリーは、ミラルは、トレイズは この男を知っている。

随分前から、島にいる時から知っている。

同時に、捜し求めていた人物でもあった。

傷だらけの身体、その両腕と両足は、檻の中で鎖に繋がれていた。

美しい金髪は全て抜け落ちたのか、男の頭には毛が一本も生えていなかった。

上半身は衣類を一切身につけておらず、その傷だらけの身体を露にしている。

「嘘……だろ……ッ!？」

驚愕に顔を歪め、チリーが檻の中を凝視する。

「そつだッ! その顔だよッ! 僕はお前達のその顔が見たかった! 後世まで残したい程に傑作だッ! 写真に写しておきたい……。残念ながらカメラを持ち合わせていないがね」

驚愕で硬直する三人を見、デイトはニヤニヤと笑っている。

「こんなの……信じられる訳ないじゃないっ! 嘘よ! 全部出鱈目よっ! あり得るはずがないじゃないっ!」

金切り声を上げ、頬を両手で包み、ミラルが首を振りながら金切り声を上げる。

「おい、ミラル! 落ち着け!」

「いやっ! いやいや! 絶対嘘よっ!」

「ミラルッ!」

チリーの声は既に届いておらず、ミラルは尚も金切り声を上げながら首を振り続けている。

「俺だつて……信じられねえよ……ッ!」

「そつよ! 夢よっ! 全部夢よ!」

暴れるミラルを、チリーはそつと抱き寄せた。

「そつだ。夢だ……。だから、見なくて良い。お前は……もう見なくて良い」

ギョツと。震えるミラルの肩を抱き寄せる。抱き寄せているチリーの手もまた、震えていた。

「夢……」

「ああ。少し休んでろ」

カクンと。ミラルの肩から力が抜けた。

ミラルは、気を失っていた。

そんな彼女をそつとその場に寝かせ、チリーは再度、目の前の現実を見据えた。

この部屋の中心、檻の中で鎖に繋がれとその人物を、チリーは真っ直ぐに見据えた。

「貴方は……ッ」

沈黙していたトレイズが、口を開いた。

そして、檻を凝視し、決定的な一言を呟いた。

「王………ッ！」

一瞬、世界が壊れたように感じた。

episode 22 「Remodeled king - 2」

アレクサンダー。小国、テイテスの失踪した王。

そのアレクサンダーが、チリー達が捜していた王が、目の前にいる。変わり果てた姿でだ。

アレクサンダーはこちらを睨みつけ、歯を剥き出して唸っている。その姿に、過去の面影と風格は微塵も感じられなかった。

まるで 獣。

「おい……ッ！ どういうことなんだよッ！？ これはッ！？」

怒りを剥き出しにするチリーを鼻で笑い、ディートはアレクサンダーを指差した。

「こういうとき。テイテスから連れて来られた王、アレクサンダーは、王の求めるアレの在処を知らなくてね……。役にも立たないし、処分するのも面倒だから、グラウスが洗脳兵にしようとした結果、失敗して今の状態になったのが彼だよ」

「洗脳兵……だとッ」

グツと。拳を握りしめたチリーの隣で、トレイズが早歩きでディートの元へ歩み寄った。

凄まじい形相で睨みつけ、トレイズはディートの胸ぐらを掴んだ。

「元に戻せ……」

その声は、怒りに打ち震えていた。

「王を……元に戻せッ！」

叫ぶトレイズに、ディートはククツと笑って見せた。

「無理だよ。ばあーか」

次の瞬間、鈍い音がしてディートはその場に倒れた。

「トレイズッ！」

殴ったのだ。怒りで震えるその右拳で、トレイズはディートの顔を全力で殴ったのだ。

トレイズは倒れたディートの胸ぐらをもう一度掴み、持ち上げる。

「元に戻せッ！」

「無……理……」

もう一発。トレイズの拳がディートの顔面に直撃する。

ディートはそのまま吹っ飛び、後方の壁へと背中から激突する。

「……糞ッ！ 俺がいながら……ッ」

アレクサンダーの方へ視線を移し、トレイズは歯噛みする。

「何なんだよ……畜生ッ！」

ディートを先に殴られたせいもあってか、怒りをどこにぶつければ良いかわからず、チリーは足元を思い切り殴りつけた。

「こんなの……アリアかよ……ッッ！ 俺は……俺はどうしたら……ッ！」

歯噛みする二人を嘲笑うようにクスクス笑いながら、ディートがゆらりと立ち上がる。

「王様ア……テイテスの王様ア……ッ！ この僕を二度もぶつたそいつをさア……ぶつ殺してよオ……ッ！」

ニタニタと笑いながら、千鳥足でアレクサンダーの檻へと近付いて行く。

「貴様……ッ！」

トレイズを押し退け、アレクサンダーの檻の傍まで来ると、ディートは檻を開け、中へと入ると、白衣のポケットから鍵を一本取り出した。そしてその鍵を、アレクサンダーの右腕を繋いでいる鎖の鍵穴へと差し込む。

「洗脳だけは成功しててさア……。言う事だけは聞くんだよねエ……ッ！ 実験のため、毎晩町の愚民共を餌代わりに食わしたりもしてたんだよ……！ 実践だア！ アレクサンダー君ッ！」

「毎晩町の……まさかッ!?」
チリーの脳裏に、大通りで老人に聞いた話が過る。

毎晩、老若男女問わず一人は殺されている。

恐らく、ディートがアレクサンダーにやらせたのだろう。町の人達を、毎晩餌代わりにアレクサンダーに食べさせていたのだ。

ガチャリと音がして、アレクサンダーの右腕を繋いでいた鎖が外れる。

ディートは素早くその場から離れ、檻の隣まで来ると、トレイズの方へ視線を移し、ニヤリと笑った。

「さあアレクサンダー君！ ちょっと早いけど今日のご飯だッ！ そのロン毛を食っちまえエエ！」

右腕が自由になったアレクサンダーは、左腕を繋いだ鎖に手をかけると、勢いよく引き千切った。

両腕が自由になり、両足の鎖も同じように引き千切ると、咆哮した。

「オオオオオオオオオオオオオオツツ！！」

アレクサンダーの咆哮が、部屋中に響いた。

「王……何故このような……ッ」

ギロリと。アレクサンダーがトレイズを睨みつける。

「トレイズッ！」

危険を察したチリーが、素早く大剣を出現させ、構える。が、トレイズはチリーを制止した。

「来るなッ！ 王は……俺がッ」

「どうするつもりだトレイズッ！」

「俺が、俺の手で……王を、王の名誉のために……ッ」

殺す。

そう言い、トレイズは四つん這いでこちらを睨みつけるアレクサンダーへと視線を移す。

「貴方の名誉は……俺が守ります！」

「オオオオオオオオツ！」

アレクサンダーは一吠えすると、口を大きく開き、トレイズ目掛けて飛びかかって来た。

トレイズはそれを素早くかわし、着地したアレクサンダーへ右手をかざす。

「王……ッ」

その右手の前に、氷塊は出現しなかった。

「トレイズ！ 躊躇ってる場合じゃねえッ！」

「ッ！？」

チリーが叫んだ時には既に遅く、かざされたトレイズの右手には、アレクサンダーが噛み付いていた。

「ぐあ……ッ！」

激痛に呻き声を上げ、トレイズは噛み付かれた右腕を振る。思いの外簡単にアレクサンダーは腕から離れ、トレイズから距離を取った。

「く……ッ」

アレクサンダーの歯は、人間の歯とは思えぬ鋭さであった。まるで犬か狼。その鋭い歯で、トレイズの右腕は噛み付かれたのだ。

トレイズは服の左袖を引き千切り、右腕の傷口を素早く縛り、止血する。

「おい！ 大丈夫かッ！？」

安否を問うチリーの声には答えず、トレイズはアレクサンダーを凝視する。

「ハハハハハハッ！ 食われちまえ糞ロン毛エーッ！」

デイトはトレイズを指差し、ゲラゲラと笑うと、眼鏡の位置を右人差し指で直した。

「オオオオオオオッ！」

雄叫びを上げるアレクサンダーの前で、トレイズは左手を前に突き出した。

「貴方に刃を向けることを……どうかお許し下さい」

トレイズの左手で、徐々に氷がある形を成していく。

剣。氷によって構成された、長い剣がそこに形成されたのだ。

トレイズは左手で剣を握り、構えた。

「オオオオオオオッ！」

アレクサンダーは雄叫びを上げるとトレイズ目掛けて、大口を開

けて突っ込んで来た。

その口目掛けて、トレイズは勢いよく剣を突き出す。が、剣はアレクサンダーに刺さらなかった。

「噛んだッ!？」

チリーの叫んだ通り、アレクサンダーはトレイズの剣の刃先を、歯で止めていたのだ。そして更に強く剣を噛み、やがて氷によって構成されたその剣は、音を立てて折れた。

「俺の剣でも壊せない氷だぞッ!！」

「いや、ドウナイで使っていた氷は洗脳の副作用で硬度が底上げされていた……ッ!　だが、あの時より硬度が随分落ちているとは言え、俺の氷は歯で噛み砕かれるような硬度ではないハズだッ!」

トレイズは折れた剣を投げ捨て、アレクサンダーの方へ視線を移した。その時だった。

ガチャリと。チリーの背後でドアが開いた。

「ニシルと青蘭かッ!？」

チリーが振り向くと、そこにいたのはニシルでも青蘭でもなかった。

「お前……は」

大通りで、チリー達に道案内を頼んだあの少年であった。

「ふうん。侵入者の話を聞いて来てみたけど……。君だったんだ」

少年は興味深げにチリーを見、デイトの方へ視線を移した。

「何だお前はッ!？　勝手に僕の拷問部屋に入って来るな!」

少年を指差し、デイトは少年を睨みつけた。

「うるさいな……。ちょっと黙ってよ」

「何だとお前!　僕に向かって何なんだその態度はッ!」

「ああ、そっか。僕のこと知らないのか」

喚くデイトの方へと、少年はゆっくりと歩み寄る。

そしてそっと。少年はデイトの頭を掴んだ。

「何を……。!？」

「もう一度だけ言うよ?　うるさいから、ちょっと黙っててよ」

その二人の様子を、チリーとトレイズはおるか、アレクサンダーでさえもが凝視していた。

「僕に命令するなッ！ クソガキの分際でエ！」

怒鳴り散らすディートを一瞥し、少年はクスリと笑った。

「馬鹿だなあ」

次の瞬間、チリーとトレイズの顔は驚愕に歪んだ。

凄まじい破裂音と共に、ディートの頭部は爆ぜた。

ディートの頭部に爆弾が仕掛けてあったとは到底思えない。もし今が爆弾による爆発ならば、少年は無事では済まないだろうし、派手に炎が燃え上がっても良いハズだ。しかし、実際少年は無傷。炎など燃え上がらず、ディートは頭部だけが爆ぜ、残りの身体はドサリと音を立ててその場に倒れた。

「これは……………ッ！」

ディートの頭部は跡形もなく消え、頭部を失った首からは、ドクドクと大量の血が溢れ、その場に赤い水溜りを作っていた。

「ああ、快感……。何かが爆ぜると気持ちが良いね」

少年は恍惚とした表情で笑うと、尚も血を流すディートの身体を一瞥する。

「馬鹿だなあ……。静かにしておけば、別に殺す必要もなかったのに」

少年は微笑むと、チリーの方へと視線を移した。

「こんにちは」

「お、お前……………ッ」

「僕はライアス。チリー、だよな？ 聞ってるよ。ハーデンから」

少年　ライアスはニコリとチリーに微笑みかけた。

「殺しに来たよ。チリー」

episode 23 「Broken blade」

「どういうことだよ……ッ!？」

ギロリと。チリーはライアスを睨みつける。

「そのままの意味だよ。僕は君を殺しにきた。それ以上でも、それ以下でもない」

ライアスはニコリとチリーに微笑み、トレイズとアレクサンダーの方へ視線を移す。

「ああ、そっちは続けて良いよ。君らには用、ないから」

クスリと笑い、ライアスは再度チリーへ視線を移した。

「何で俺が殺されなきゃならないんだッ!？ 訳わかんねーよッ!」

「そうだね。僕にもわからない」

「な　ッ!？」

ライアスはポリポリと頭をかき小首を傾げた。

「でもね。ハーデンはチリーが邪魔みたい。よくわかんないけどね」

「ハーデンって……誰だ……?」

「王様だよ。ゲルビアの。知ってるでしょ?」

尚更訳がわからない。何故ゲルビアの王ともあるう人物が、神力使いとは言えたただの少年であるチリーを殺さねばならないのか。確かに島を出てから、ゲルビアからすれば害になるような行為ばかり行った。フェキタスでの基地壊滅、エリニアでの青蘭暗殺妨害、ドウナイでは隊長を一人撃退。しかし、王直々に命を狙われるようなことをした覚えはない。

不可解だった。

「もう良いからさあ……爆ぜてよ、チリー」

ジツと。アレクサンダーはトレイズを睨み続けている。いつ飛びかかって来るかわからないため、トレイズもアレクサンダーから目

を離さない。

「王……ッ」

スツと。トレイズはアレクサンダーへ右手をかざす。すると、トレイズの右手の前へ数個、大人の拳大程度の大きさの氷塊が出現する。

「オオオオツ」

アレクサンダーが唸り声を上げた　　と同時に、氷塊はアレクサンダー目掛けて発射される。

鈍い音がし、氷塊はアレクサンダーの身体に全て直撃する。

「オオツ!？」

悲鳴にも似た声を上げ、アレクサンダーはそのまま勢いよく派手に吹っ飛んだ。が、アレクサンダーは壁の方まで吹っ飛ぶと、空中で受け身を取り、両手両足で壁に着地するとそのまま壁で踏み込み、トレイズ目掛けて跳びかかって来た。

飛びかかるアレクサンダーを、トレイズは素早く避けるが、振られたアレクサンダーの腕までは避け切れず、胸部に爪による軽い擦過傷を受ける。

アレクサンダーは地面へ着地すると、すぐに方向を転換し、トレイズの方をギロリと睨んだ。

「オオオオオオツ!」

アレクサンダーは雄叫びを上げると、再度トレイズへ跳びかかって来た。トレイズは素早く身をかわし、アレクサンダーへ右拳で殴りかかる。しかし、アレクサンダーは身を屈め、トレイズの拳をかわした。

「ツ!？」

そして突き出されたトレイズの右腕に、アレクサンダーは勢いよく噛み付いた。

「ぐ……ッ!」

腕を振り、アレクサンダーを引き離すと、トレイズは数歩退き、アレクサンダーから距離を取った。

ゆっくりと。ライアスはチリーの方へと歩み寄って来る。その速度の緩さが、逆にチリーへ恐怖を与えた。

先程の現象から察するに、ライアスの能力は 触れた物を破壊する能力。でなければ、爆ぜたディートの頭部を説明することが出来ない。

チリーは大剣を出現させ、構えると、ゆっくりと歩み寄って来るライアス目掛けて駆け出した。

「お前の能力が触れた物の破壊なら……触れさせないッ！」

ライアスの眼前まで迫ると、チリーはライアス目掛けて大剣を斜めに振り降ろす。が、チリーの大剣は、ライアスの身体へ達する前に停止した。

「な ツ!？」

素手で。素手でライアスはチリーの大剣を止めていた。その手は無傷で、血すら滲んでいない。

よく見れば、大剣を止めるライアスの右手には、何やらエネルギーのような物が迸っていた。恐らく、物質を破壊する際に使用する神力だろう。それを放出せずに右手へ留めておくことで、チリーの大剣を止めているのだ。

「応用すればこんなことも出来る。早く離さないと、壊すよ?」

慌ててチリーは大剣をライアスの右手から離し、バックステップでライアスから距離を取る。

「……厄介だな。その能力……ッ」

「みんなそう言うよ。そしてその後、爆ぜて死ぬ」

ニコリと。ライアスは微笑んだ。

両手の平が痛む。この手では、ドアノブを握ることさえままならない。

ニシルは、ドアさえ開けられない自分の現状に齒噛みした。

「やっぱり無茶するんじゃないかな……」

嘆息し、これからどうするか思索しようとした時だった。

ガチャリと。後方でドアの開く音がする。

慌てて振り返ると、そこにいたのは右腕を押さえている青蘭だった。

「青蘭！」

青蘭は苦痛に顔を歪めつつも、左手を上げた。

そしてゆっくりとニシルの元へ歩み寄って来る。

「大丈夫？ 腕、折れてるの？」

「多分……な。それよりも、お前の両手の方が心配だよ」

青蘭の右腕を包むように差し出されたニシルの両手を一瞥し、青蘭は苦笑した。

「そう言えばさっき、変な奴がここを通らなかつたか？」

青蘭が問うと、ニシルはコクリと頷いた。

「通ったよ。アイツ……何者なんだろう。大通りで一度僕達に話しかけてきた奴なんだけどさ……。ここ通る時、チラリと僕の方見ると、微笑してそのまま奥に行っちゃったんだ。訳わかんなくて、ついついそのまま行かせちゃったけど……」

「敵なら……チリー達が危ないな」

コクリと。青蘭の言葉にニシルは頷いた。

「あ、そう言えば怪我しているとこ悪いんだけど……この手じゃこのドア、開けられそうにもないんだ。頼めるかな？」

「ああ、任せろ」

青蘭はドアの前まで歩き、左手でそのドアを開けた。

「チリー達は、この先か？」

「うん。王様も、この先にいるって」

二人は顔を見合わせコクリと頷くと、ドアの向こうへと歩いて行った。

凍らせる。

何らかの方法でアレクサンダーの肉体へ直接接触れ、凍らせることで動きを止める。もしかすると、一度気絶させれば自分のように自我が戻るかも知れない。

そこまで考え、トレイズは目の前のアレクサンダーへと視線を移す。

如何にしてアレクサンダーの肉体へ触れるか……簡単なことだ。

噛み付かせれば良い。

ディートの命令通り、アレクサンダーはトレイズを餌と認識している。故にアレクサンダーは噛み付いて来るのだ。そこを逆に利用する。

苦痛を伴うが、そんなことを一々気にしている場合ではない。

スツと。アレクサンダーへ右腕を突き出す。

「オオオオオッ！」

咆哮し、トレイズの思惑通りにアレクサンダーは大口を開けて跳びかかって来た。

ガブリと。アレクサンダーは突き出されたトレイズの右腕に噛み付いた。

「ぐ……ッ！」

呻き声を上げ、歯を食いしばってトレイズは苦痛に耐える。

そして左手で、アレクサンダーの身体に触れる。

「おおおおッ！」

凄まじい勢いでアレクサンダーの身体は凍っていく。次の瞬間には、アレクサンダーの身体は完全に凍り、その場にドサリと落ちた。

「ハア……ハア……」

力を使い果たし、息を荒げながらトレイズはその場に座り込む。

「チリー……」

そして眩き、ライアスと戦闘を続けるチリーの方へと視線を移した。

またしても、チリーの大剣はライアスの右手に受け止められる。すぐにチリーはライアスの右手から大剣を離し、舌打ちする。

「鬱陶しい……ッ！」

まるで遊ばれているかのようだ。

その証拠に、攻撃が当たらないためチリーは苛立ち、ライアスはそんなチリーを眺め、笑みを浮かべている。

「そろそろ……こっちから行こうかな」

クスリと笑みライアスはゆっくりとチリーの方へと歩み寄る。

あの手に触れられると……破壊される。

無意識の内に、チリーは後退していた。

「行くよ」

呟くように言うと、ライアスは右手を構え、チリー目掛けて駆け出した。

「ッ!？」

眼前まで迫り、チリーの頭部目掛け、ライアスは右手を突き出した。

すかさずチリーはそれを防ぐために大剣を盾のように構える。その大剣に、ライアスの右手が触れた。

その時、ガチャリとドアが開き、部屋の中へとニシルと青蘭が入って来る。

「チリー、トレイズ！」

二人が辺りを見回した

その時だった。

凄まじい破壊音と共に、ライアスの手によってチリーの大剣が砕けた。

砕けていく大剣をチリーは驚愕の目で見、そんなチリーを見てライアスはクスリと笑った。

「チリーッ！」

そのまま勢いに押され、チリーはその場にドサリと尻餅を付いた。
「やっぱり、気持ち良いよね………何か爆ぜると」

呆然とした表情でその手に握られた……破壊されずに残った大剣の柄を見つめるチリーを、ライアスは恍惚とした表情で見つめた。

episode 24 「Lost king」

「嘘……だろ……？」

破壊された大剣、目の前で微笑むライアス。チリーは信じる事が出来ず、ただ茫然としていた。

俺の剣が、壊された？

信じられない、信じたくない。しかし

現実。

「どうしたの？ もう終わり？」

まるで好物を食べ終わった後の子供のように、残念そうな顔でライアスはチリーに問うた。

「残念だなあ……」

呟き、ライアスは呆然とするチリーを一瞥すると、ドアの方へと歩いて行った。

「……どこへ行くつもりだ？」

ドアの前で、青蘭が、怒気を込めてライアスへ問う。隣にいるニシルも、怒りに表情を歪めつつライアスを睨んでいる。

「別に。飽きたから帰るだけだよ。それに、君達全員を相手にするのは、流石に僕でも無理だ。また遊んでね、チリー」

振り向き、チリーへ微笑むとライアスは青蘭を押し退け、ドアの向こうへと消えた。

「チリー！」

トレイズを含む三人が、未だに呆然としているチリーの元へ駆け寄る。

「いや……大丈夫だ。悪い。それより、王様は……」

チリーの言葉にコクリと頷くと、トレイズは先程凍らせたアレクサンダーの方を指差した。

「今は凍らせている……。もしかすると俺の時のように元に戻るかと思ってな」

「トレイズ、その腕は……」

問題ない。トレイズは青蘭にそう答えると、アレクサンダーの元へと歩いて行った。

「チリー、どういうこと？ 王様が何で凍らされてるんだよ？」

「ああ、お前らは今来たから知らないんだよな」

ニシルの問いにそう答えると、チリーはアレクサンダーについて説明した。

「そんな……王様が……」

信じられない、といった様子で、ニシルは呟いた。隣で青蘭も驚愕に表情を歪めている。

「チリー、ミラルは……」

倒れているミラルを一瞥し、ニシルが問うと、チリーは気絶しているだけだと答えた。

王 アレクサンダーは変わり果てた姿となっていた。

その姿に、一同は戸惑いを隠せない。少し相談したが、結局ミラルは起こさないことにした。これ以上、ミラルの心へ負担を与えない。

「下がっていてくれ。これから、この氷を解く。もしまだ王が正気に戻られていなければ、お前達に襲いかかる」

「その時はその時だ。トレイズ、俺達だって戦えない訳じゃない」

そうだな。青蘭にそう答えると、トレイズは氷へ アレクサンダーへと手をかざした。

「行くぞ……」

トレイズが言うと同時に、アレクサンダーを包んでいた氷は徐々に消えていく。数秒後には、アレクサンダーを包んでいた氷は消え失せ、生身のままアレクサンダーはその場に倒れていた。

「う……う……」

「ッ！？」

アレクサンダーが低い呻き声を上げたと同時に、トレイズは身構

える。だが、聞こえた人間らしい呻き声に気付き、洗脳が解けていることを悟った。

「王ッ！」

「……トレイズ」

トレイズ。と、アレクサンダーは確かに答えた。アレクサンダーの言葉に、四人の表情が明るくなる。

「詳しい話は帰りながらも……とにかく今は、テイテスへ帰りましょう」

微笑み、トレイズはアレクサンダーへ手を差し伸べた。が、アレクサンダーは首を横に振る。

「トレイズ、私は帰ることが出来ない」

「な　ッ!？」

アレクサンダーの言葉に、五人の表情が驚愕に歪む。

「な、何でだよ王様……ッ!　何で……ッ!？」

アレクサンダーはそう言ったチリーの方へ視線を移し、首を横に振った。

「私は、洗脳されていたとは言え、多くの罪なき人々を殺した。その上、助けに来たお前を……トレイズをも傷付けた」

それにな。アレクサンダーはそう付け足し、言葉を続ける。

「私の命は、長くない。度重なる人体実験の結果、私の身体は既にボロボロだ……。恐らく、テイテスへ戻るまでもたないだろう」

「そんな……ッ!」

悲痛な声を、ニシルは上げた。チリーは悔しそうに歯噛みし、トレイズは、何かを悟ったような表情でコクリと頷いた。

「だから、テイテスを……お前達に託す」

「テイテス……を？」

問うたニシルに、アレクサンダーはコクリと頷く。

「これから私がする話を、真剣に聞いてくれ。テイテスの……島の

存亡へ関わることだ」

「……わかりました」

トレイズは、静かにそう答えた。

「テイテスは……あの島は普通じゃない」

「普通じゃない……って、どういうことだ？」

「『核』と呼ばれる物質で……あの島は構成されている。『核』は島の中心に存在し、その『核』が周囲の物質を吸い寄せることによって、あの島は誕生したのだ。トレイズは、『核』を見たことがあるだろう？」

コクリと。トレイズは静かに頷く。

「『核』ってまさか……あの壊れてたやつ……か？」

「あ……。確かにあの森って、島の中心部だったよね……」
チリーとニシルは顔を見合わせる。

島の中心　あの森の中、破壊されていたあの黒い宝石のよ
うな物体。

「あの黒いのが……『核』？」

ボソリと。チリーが呟いた。

「そう。それが『核』だ。本来なら赤い色をしているのだが、私が攫われる際、ゲルビアの人間に破壊されてしまい、黒くなってしまうている……。『核』を破壊されたテイテスは今でこそ大丈夫だが、すぐに崩壊を始めるだろう……」

アレクサンダーの言葉に、四人は戸惑いを隠せない。色々と尋ねたいことはあったのだが、四人は口を挟まずに黙っていた。

「お前達……赤石を……探せ！」

そう言い、アレクサンダーは咳き込んだ。口元を押さえたアレクサンダーの右手は、真っ赤に染まっていた。

「内に……膨大な力を秘めた……赤い……石だ……。『核』は……元々赤石と……同じ存在だ……」

再度咳き込み、アレクサンダーは言葉を続ける。

「故に……赤石を……『核』の……代用品とすることが……出来る

……！ 頼む……島のために……赤石を探せ……ッ」

「……わかりました」

静かに、トレイズは呟いた。

「赤石は、必ず我々が島へ持ち帰ります」

トレイズの言葉にチリー、ニシルの二人……そして青蘭までもが真剣な面持ちで頷いた。

「それと……」

言いかけ、よろけたアレクサンダーの身体を、トレイズが素早く支える。

「ゲル……ビアに……気を付ける……」

ゲルビア帝国。

青蘭の祖国、東国を消し、トレイズとアレクサンダーを洗脳し、そして島の「核」を破壊した帝国。

四人の中に、ゲルビアに対する確かな怒りが芽生えていた。

「今……回の件のことも……ある。奴らは……これからお前達を……狙うだろう……怖ければ……島へ帰り……城の……者へ……私の言葉を……伝え、お前達は……島で元通りに……暮らせ」

咳き込みながらそう言ったアレクサンダーに、チリーは首を振った。

「任せてくれ。絶対に俺達の手で、テイテスを救う」

そうだよな。そう言ってチリーが全員に目配せをすると、ニシル、トレイズの二人は静かに頷いた。

「ありがとう……とう」

それともう一つ。アレクサンダーは付け加えるようにそう言うと再度咳き込んだ。

「ゲルビアの……王……ハーデンは……赤石を……」

そこまで言いかけ、ダラリと。アレクサンダーの首から力が抜けた。

「……王？」

揺さぶり、トレイズが問うたが、アレクサンダーは答えなかった。

「王様……ッ！」

悲痛な声を上げ、ニシルは今にも泣き出しそうな表情でアレクサンダーを凝視する。

「クソッ！ 何で王様が……ッ！」

涙をこらえるように、チリーは床を強く殴った。

そんなチリーの隣で、青蘭はやるせない表情でアレクサンダーを見つめていた。

「王……ッ！ 王ッ！」

何度も強く、トレイズはアレクサンダーを揺さぶったが、アレクサンダーは答えなかった。

まるで眠っているかのように安らかなアレクサンダーの顔は、数滴の涙で濡れていた。

「俺は……守れなかった……ッ！ 王を……ッ！」

トレイズの悲痛な叫びが、部屋の中で響いた。

e p i s o d e 2 4 「 L o s t k i n g 」 (後 書 き)

ここまでで第一部、完結です。

明日から引き続き第二部を投稿します。

episode 25 「Awakening blade - 1」

数百年前、「赤い雨」と呼ばれる現象が、アルモニア大陸ほぼ全土で起こった。

大陸全土に降り注いだ「赤い雨」、もしくは「神の雨」と呼ばれる謎の赤い液体は、幾つもの不可思議な現象を引き起こした。

そして、「赤い雨」を浴びた者の内大半が、不可思議な能力を手にした。

人はその能力を神の力

「神力」と呼んだ。

研究所での戦闘から数日……。ヘルテュラのとある宿で、彼らは傷を癒すため滞在していた。

青蘭はベッドに腰掛け、ギプスで固められている右腕をしげしげと眺め、ニシルは包帯の巻かれた両手の平をつついては痛い！と呻いている。そしてトレイズは、右腕全体に巻かれた包帯には目もくれず、険しい顔で何か考え事をしている。

「三人共怪我してるんだから……。しばらくはここに滞在して、傷を癒しましょう」

腰に手を当て、ミラルが心配そうに言う。すると、頭をポリポリとかきながら隣でチリーが仕方ねえなと呟いた。

「流石にこの怪我じゃ、このまま旅を続けるのは無理だね」

そう言って、ニシルは嘆息する。

「……そうだな。今は休んで、全員完治してから出発しよう。それで良いよな？ トレイズ」

そう言って、青蘭はトレイズの方へ視線を移す。

青蘭の言葉に、トレイズは何も言わずに頷いた。

「そういえば、トレイズは私達と来るの？」

コクリと。小さくトレイズは頷く。

「ああ。一人で動くよりは良い。それに、お前達なら足手まといにはならなさそうだ」

そう言つて、トレイズは腕を組んだ。

「意外だな。お前がそんなこと言うなんて」

そう言つてチリーが笑むと、トレイズは微笑し、見たままに判断しただけだ、と呟いた。

「そうかい」

そう言い、チリーはゆっくりと歩み寄るとトレイズへ右手を差し出し、ニツと笑った。

「とにかく、これからよろしくな」

「……ああ」

左手で、しっかりとトレイズは差し出されたチリーの右手を握った。そして互いに目を合わせ、微笑する。見れば、他の三人もトレイズへと視線を向け、微笑んでいた。

トレイズを、全員が受け入れた証拠である。

「それにしても、トレイズみたいに強い人が仲間になってくれるなら、チリーみたいに弱いのはいらないよねー」

クスクスと。チリーを見ながらニシルが笑う。それを見、チリーは何だと！？ と怒りを露にしながら拳を振り上げ、ニシルの方へ早足で近づく。が、「弱い」という言葉に反応し、チリーの脳裏にある映像が過る。

鳴り響く凄まじい破壊音。目の前で砕けていく 己の剣。

圧倒的なまでに己へと叩きつけられた 敗北。

やっぱり、気持ち良いよね……何が爆ぜると。

生々しく蘇る、ライアスの言葉。

ゆっくりと。振り上げていた拳を、チリーは降ろした。それを見、

ニシルは不思議そうに小首を傾げる。

「そう……だよな」

呟き、チリーはニシルへ背を向けた。

「チリー……どうしたの？」

心配そうにミラルが問うたが、チリーはその問いには答えず、部屋のドアへ歩み寄ると、ノブへと手をかけた。

「……どこに行くんだ？」

青蘭が問うと、チリーは振り返って青蘭へと視線を移す。

「悪い。ちよつと外の風に当たってくる」

そう言つて微笑すると、チリーは部屋の外へと出て行つた。

ボタンと音がし、ドアが閉まったのを確認すると、一斉に一同の視線はニシルへと写される。状況が把握出来ず、え？ え？ と三人の顔をニシルは交互に見ている。

「もしかして……僕のせい？」

自分の顔を指差し、ニシルが問うと、三人はほぼ同時に頷いた。

「でも変だな……。いつものチリーなら、あそこはニシルと小突き合いを始めるところなんだが……」

そうよね。と、ミラルは青蘭の言葉に頷く。

「アイツの剣は、砕かれた」

呟くように、トレイズが言う。砕かれた？ と問うたミラルにコクリと頷き、トレイズは言葉を続ける。

「お前は気絶して見ていないようだが、あのライアスとか言う奴との戦いで、チリーの能力　　あの大剣は砕かれた。恐らくだが、あれがアイツにとって初めての……圧倒的な敗北だったのだらうな」

そう言つて、トレイズは嘆息する。

圧倒的な、敗北。よくよく思い出してみれば、今までチリーがキリト以外の人間に負けたことなどあつただらうか。それも、圧倒的にだ。

今まで負け知らずだったハズが、ある日突然圧倒的な敗北を喫し

た時の気分は、一体どのようなものなのか……。ミラルには想像も出来ない。しかしそれでも、チリーの心に何か大きな穴のような物が空いたのではないか、それくらいは容易に想像出来た。

「……私、チリーの所へ行って来る」

そう言い残すと、ミラルは駆け足で部屋の外へと出て行った。

そんな彼女の後ろ姿を見、ニシルは青蘭達の方へと視線を移す。

「……やっぱり、僕のせい？」

気まずそうに苦笑するニシルに、青蘭とトレイズは静かに頷いた。

部屋を出て階段を降りると、ミラルは宿の広間へ向かった。

規模の小さな宿故、ロビーに人は少なかった。チリーは外の風に当たってくる、と言っていたので、ロビーにいる可能性は低かったが、ミラルはチリーの姿を捜し、辺りをキョロキョロと見回す。

すると、幾つかある席の一つに、白く長いボサボサの髪に包まれた頭を見つけた。どこにいても目立ってしまいそうなその後ろ姿は、紛れもなくチリーの物だった。

ミラルは、その後ろ姿にゆっくりと歩み寄ると、隣の席に座った。隣にミラルが座ったことに気付き、ピクリと頭を動かすと、チリーは隣のミラルへ視線を移した。

「外の風に当たってくるんじゃないかったの？」

微笑し、ミラルが問いかける。

「……気が変わったんだよ」

呟くようにそう言うと、チリーはミラルから視線を逸らした。

何かあったの？ と。そう問いかけたかったのだが、ミラルから目を逸らしたことから察するに、チリーはこのことに関して触れられたくないのだろう。

昔からそうだった。チリーは、触れられたくないことに関して問われると、必ず相手から目を逸らす。昔、ミラルがチリーの母親について問うた時もそうだった。チリーのお母さんって、見たことな

いけどどんな人？ というミラルの問いに、チリーは視線を逸らして関係ないだと、ぶっきらぼうに答えた。その時はあまりにぶっきらぼうな答えに多少腹を立てたものだが、その後キリトから、チリーの母親が既に亡くなっていることを聞き、何だかチリーに申し訳なくなつて謝りに行つたのをミラルは覚えている。

変わつてないなあ。そう思い、ミラルは再度微笑した。もう、あの質問をした時から何年も経っている。キリトとの修行で随分と強くなつたし、身体も大きくなった。なのに、変わつてない。それがミラルには嬉しく感じた。

「王様のこと、聞いたよ」

ミラルがそう言うと、チリーはミラルへ視線を戻し、表情を驚愕に歪めた。

「聞いたのか!？」

コクリと。ミラルは頷く。

「青蘭から、私が聞いたの。チリーは、『ミラルには黙つてる』つて皆に口止めしてたみたいだけど……。青蘭は、『やっぱり事実を知っておくべきだ』つて」

ミラルの言葉に、チリーは口籠る。

「心配、してくれたんだよね？」

そう言つて、ミラルは微笑んだ。

「そんなんじゃないよ……。お前に、また気絶されちゃ困るからなぶっきらぼうに答え、チリーはミラルから目を背けた。

その様子を、ミラルの言葉に対する肯定だと受け取り、ミラルはクスリと笑つた。

「確かにすごく怖かつたし、信じられなかった。だけど、それでも私は……。受け入れなくちゃいけない」

「……。島に戻つても、良いんだぞ」

目を背けたままチリーが言うと、ミラルは首を振り、嫌と答えた。「私が、自分で決めたことだから」

ミラルのその言葉に、チリーはゆっくりと視線をミラルへと戻し

た。真つ直ぐで、真摯な目が、チリーをしつかりと見据えていた。
「チリー達と、外の世界を見るって……王様を捜すって、私が決めたことだから。最後まで、私は一緒にいる」

駄目？ 不安気な表情で、ミラルはチリーへ問うた。

「強いな。お前は」

「え？」

ニツと。チリーはミラルに微笑んだ。

「変なこと言つて、悪かったな。島に戻っても良いだなんて……」

チリーの言葉に、ミラルは静かに首を横に振った。

「ううん。心配して言ってくれてるのは、わかってるから」

そう言つて、ミラルが微笑んだその時だった。

ガチャリと音がして、玄関のドアが開き、数人の男達がロビーの中へと入ってくる。

サングラスをかけ、厳しい恰好をした男達の中に、背の低い……まるで少年のような風貌の男がいた。その男は、カウンターまで歩み寄ると、従業員の男性におい、と声をかけた。

「ゲルビアのレオールだ。少し、聞いても良いか？」

ゲルビアという単語にピクリと反応し、チリーとミラルはほぼ同時にカウンターの方へと視線を移す。

「は、はい……。どうぞ……」

相手はまるで少年のような人物だというのに、ゲルビアという単語を聞いたせいか、男性は完全に委縮している様子だった。

「五人組が、ここに泊まっていないか？」

「五人組……と言いますと？」

「ガキを数人を含んだ五人組だ。そうだな……白い、ロン毛の奴がその中にいる」

レオールと名乗った男が、そう言つと同時に、従業員とミラルの視線がチリーの方へと移される。それに気付き、レオールもチリーの方へ視線を移した。

「……お前か」

眩き、レオールは微笑した。チリーは席から立ち上がると、レオールをギロリと睨みつけた。

「だったらどうなんだよ……？」

チリーが問うと同時に、レオールの両腕が、刃へと変わる。両腕で弧を描くように曲がった刀身が天上の電球に照らされ、キラリと光った。

一目で、神力使いだと判断出来た。

「研究所を壊滅させた五人組の一人……との報告が入っている。大人しく俺と来てもらおうか」

「はいそうですね、ってついて行くつもりですか？」

嘲るように、チリーが微笑すると、レオールは右腕の刃を構え、チリー目掛けて突っ込んで来た。

「行くぜ……ッ！」

チリーが身構え、大剣を出現させようとした。その時だった。

「え？」

短く、チリーが驚愕の声を漏らす。その隣でミラルも、状況が把握出来ずに表情を驚愕に歪めている。

その間にもレオールはチリーとの距離を詰め、チリー目掛けて右腕の刃を突き出した。

素早く、チリーは身をかわすが、その表情は驚愕に歪んだままだった。

「どういう……ことだよ……？」

本来なら、大剣が握られているハズの自分の右手をチリーは見つめる。

「剣が……出ねえ」

現れない。

今まで、当然のように容易く出現させていた大剣が、チリーの右手に現れないのだ。

大剣を出現させる　　そう強く思うだけで、大剣は出現していた。だが今は、どれだけ強く思っても、何度強く思っても、チリーの右手に大剣は握られなかった。

「神力は使わないのか？」

レオールの問いに、チリーは無理に微笑した。神力が大剣が使えないことを、レオールに悟られてはならない。

「お前と戦うのに、神力は必要ねえ。素手で十分だ！」
スツと。チリーは身構えた。

大剣が出せなかった頃と同じように、キリトと修行していた頃と同じようにチリーは身構えた。

あれ？

ふと、視線を降ろし、一瞥した自分の拳は　　震えていた。
寒さで震えている訳でも、怒りに震えている訳でもない。

怯えている？　俺が？

自問し、チリーはかぶりを振った。

あり得ない。戦いなど、何度も経験してきた。命を奪われるかも知れない戦いだって、島を出てから何度も経験したはずだ。今更、何に怯えるというのか。

それにも関わらず、チリーの拳は震え続けていた。

震えるな。怯えるな。敵を前にして震えることなどあってはならない。恐怖で怯えている者の拳など、これから戦う者の拳ではない。心の内でそう言い聞かせるが、身体は言うことを聞かず、震え続けている。

「……チリー？」

不安気に、ミラルが問う。しかし、チリーはそれには答えなかった。

「おい、お前ら。手は出すなよ」

後ろを見、レオールは男達に言う。すると、男達の内一人が、わかりましたと一礼する。

「お前、俺を見かけで判断しただろう……？ 子供のようだと思っただ中で嘲り、神力を使う必要がないと……そう判断しただろう」

チリーを睨むレオールの瞳に激怒の色が映る。

「なめやがって……！ なめやがって……ッ！ 絶対に殺してやる

ッ！ お前は、俺の前で屈服させてから殺してやるッッ！」

僕は君を殺しに来た。

殺すというレオールの単純な一言を引き金に、チリーの脳裏をライアスの言葉が過る。

そして脳内で蘇る、あの凄まじい破壊音。砕け散る剣。

砕け散る 闘志。

震えが、一層強まった。

「チリー！ 一体どうしたの!？」

先程から、レオールを前にして動こうとしないチリーの肩へ、ミラルは触れた。

「……ッ!？」

震えていた。

チリーの怯えが、恐怖が 震えを通してミラルに伝わった。

「チリー……震えて……」

小さく、ミラルが呟く。しかし、その呟きすら今のチリーには聞こえていないようだった。

「何故動かない……ッ！ 何故攻撃してこない……ッ!？ やっぱりお前……ッ」

馬鹿にしているだろ！ と、表情を怒りに歪めてレオールが叫び、

ギリりとチリーを睨みつける。

そしてすぐに両腕の刃を構え、チリーを殺さんと突っ込もうとした。その時だった。

ゆっくりと。玄関のドアが開かれた。ドアの開く音に反応し、チリーを含むその場にいた全員がドアの方へと視線を移した。

「あら、何事なのかしら？ 美しくない光景ね」

クスクスと。まるで嘲笑するかのようにながら、彼女はロビーへと入って来た。

おかつぱ頭の……美しい女性だった。背はすらりと高く、彼女が纏う雰囲気はまるで花か何かを思わせるような。そんな華麗さが彼女にはあった。着ている服はチリーもミラルも見たことがないような服で、ピンク色の……花柄のあしらわれた一枚の布を身体に巻き付けているかのような服だった。

「何だ貴様は!？」

レオルの部下らしき男達の一人が、女性の方へと歩み寄る。が、女性はそれを大して気にした様子でもなく、辺りをキョロキョロと見回している。

「この宿に泊まりに来ただけれど……。これはこの宿特有のもてなし方なのかしら？ 相変わらず大陸本土はよくわからないわね」
そう言って、女性は嘆息した。

「ふざけるな！ 私を無視しているのかッ!？」

彼女の目の前で、男が表情を怒りに歪める。

「無視？ ああ、いたのね貴方。存在価値がなくてわからなかったわ」

そう言って、クスリと彼女は微笑した。

存在感ではなく、存在価値。それがその男に対する侮蔑だと言うことは、考えなくてもわかった。

その言葉と仕草に憤慨し、男は女性目掛けて跳びかかって行った。女性は澄ました顔でそれを一瞥し、素早く身を屈めると、跳びかかって来る男の顎目掛けて右手で掌底を放つ。顎に掌底がクリーンヒ

ツトした男は、短く呻き声を上げると、その場に倒れ伏した。
倒れた男を一瞥し、女性は嘆息する。

「美しくないわね」

女性は一言そう言い放つと、カウンターの方を向いた。

「おい、お前」

その女性の背中へ、レオールが言葉を投げた。女性はカウンターの方へ向かおうとしていた足をピタリと止めた。

「その格好、東国の人間か？」

レオールがそう問うた瞬間、女性はレオールの方へ素早く視線を移した。

「貴方……ゲルビアの人間？」

女性の言葉に、確かな怒気が込められていた。

「そうだとしたら？」

「この場で 殺すわ」

その女性の一言に、レオールの背筋が凍った。

女性の言葉の中に込められた 激情と殺意。蛇に睨まれた

蛙の如く、レオールの動きはピタリと止まっていた。

「東国って……青蘭の……？」

小さな声でミラルが問うと、やっとのことでチリーは反応し、コクリと頷いた。

見れば、チリーの震えは既に止まっていた。

「ああ……青蘭だけじゃなかったんだな……」

ジツと。チリーは女性を見つめている。見惚れているというよりも、珍しいものを見ているといった様子だった。

「ま、まあ良い……。おい、白いの！」

刃と化していた両腕を元に戻し、レオールはチリーを右手で指差した。

「お前は必ず殺す。それまで首を洗って待っている！」

既に虚勢を張れる程に回復していたチリーは、レオールを嘲笑うかのように、完全に負け犬の台詞だなど微笑した。その様子を見、

レオールは一層怒りを露にする。

だが、すぐにレオールは倒れている男を放置したまま、他の男達と共に宿の外へと逃げるように出て行った。その様子を一瞥し、女性は嘆息する。

「怖かったんでしょう？」

ニヤリと。厭な笑みを浮かべ、女性はチリーへ視線を移した。

「誰が……怖かったって？」

凶星を指された……といった表情を薄らと顔に浮かべつつも、チリーは虚勢を張り、女性をギロリと睨みつけた。

「貴方が、あの男に、恐怖していたのでしょうか？」

ハッキリと。女性はチリーへと言い放った。ハッキリと凶星を指され、数秒　　チリーの動きは停止した。

「ちよつとアンタ！　何も知らないのにそんなこと言わないでよ！」
停止しているチリーの代わりとでも言わんばかりに、ミラルが女性へ怒りの声を上げる。

女性はチラーとミラルの方を一瞥するが、気にも留めず再びチリーへと視線を移す。

「敵を前にして怯えるなんて……美しくないわ」

チリーを嘲笑すると、女性はカウンターの方へ向かい、従業員と話し始めた。会話の内容から察するに、今日彼女はこの宿に泊まるのだらう。しかし、しばらくすると表情を険悪にし、カウンターテーブルに右の手の平を叩き付け、肩を怒らせながら早足で宿の外に出て行った。出て行く際、風呂の代わりにシャワーだけだなんて美しくないわ！　と文句を言ってるのが、チリーとミラルにもハッキリと聞こえた。

あの女性の言葉に　　チリーは一言も言い返すことが出来なかった。

怯えていた。レオールに 否、戦いに。

今まで、何も考えずに戦ってきた。自分は強いと、自分は負けな
いと、心のどこかで信じ込んでいた。

しかし叩きつけられた 圧倒的な敗北。

完全な、敗北。

破壊音が、砕ける剣が、笑うライアスが、チリーの脳裏に何度も
蘇る。

怖い。戦うことが、負けることが、傷つくことが……怖
い。

「なあ、ミラル」

小さく、チリーが言う。先程から様子がおかしいチリーを案じて
か、ミラルは心配そうな表情でどうしたの？ と答えた。

「もしかしたらさ……」

クルリと方向を変え、チリーはミラルへ背を向けた。そのチリー
の背中が一瞬、ミラルにはいつもの彼からは想像も出来ない程に儚
く見えた。

「島に戻った方が良いのは、俺の方かも知れないな」

「え？」

呟くように言い残し、チリーはロビーから部屋へと向かう階段へ
歩いて行った。

部屋に戻ったチリーは、自分のベッドの上に身を投げるようにして転がった。

資金不足故に、ミラル以外は全員同じ部屋というなんとも窮屈な部屋である。ベッドが二つしかないため、二人で一つのベッドを共有することになる。何が悲しくて男二人で同じベッドに寝なければならぬのか、と男性陣からは批判の声が多数上がったのだが、ミラルは良いじゃない、男同士なんだから間違っても起きないでしょ、と澄ました顔で答えていた。その時ミラルがボソリと、間違いが起きたら起きたでそれは別に構わないけど……と、薄ら頬を赤らめながら呟いていたのをハッキリと聞きとっていたのはニシルだけなのだが、それはまた別の話だ。

二つの内一つ、チリーと青蘭の二人で使うベッドの上に、チリーは大の字になって転がった。

青蘭はそれを気にする様子もなく、ベッドに腰掛けたまま何やら考え事をしている。

いつもなら何か一言、チリーに余計なことを言ってしまうようなニシルだが、今は黙ってチリーの様子をうかがっている。

先程の「弱い」発言でチリーが凹んでいるのではないかと考え、責任を感じているのだ。

今か今かと謝るタイミングをうかがいつつ、ニシルはチリーを見つめている。

ボタンとドアが開き、ミラルが中に入って来るが、チラーとチリーを一瞥するだけで、黙ったまま部屋の中央にある席へ座った。

「チリー、下で何かあったみたいだが、何だったんだ？」

不意に、考え事をしていた青蘭がチリーへ問う。

「……何で知ってたんだ？」

「少し、下で何かの倒れる音が聞こえたからな」

青蘭がそう言うと、ニシルはえ？ と驚嘆の声を漏らす。

「僕、何も聞こえなかったけど……。トレイズは？」

問いつつ、ニシルがトレイズへ視線を移すと、トレイズは聞こえたと小さく呟いた。

「もしかして僕……聴力落ちてんのかなあ……」

「いや、アイツらの聴力が良過ぎるんだよ」

ニシルの方へ視線を移し、そう言つてチリーは微笑する。

「あ、うん。そういえば……さっきはごめん」

申し訳なさそうに謝るニシルに、チリーは気にすんな、と笑った。

「それで、何があったんだ？」

青蘭の問いにチリーは小さく頷き、レオールが現れたことと、大剣が出せなくなっていたことを話した。

「剣が……出ない？」

ニシルの問いに、チリーはコクリと頷く。

「前は簡単に出てたのに、急に出なくなってたんだよ……。どうなつてんだ？」

訝しげに、チリーは自分の右手を見つめる。

「神力とは、使用者の精神と密接に関係している」

腕を組み、トレイズが低く言う。

「精神と？」

チリーが問うと、トレイズはああ、と頷いた。

「お前の能力のような戦闘に特化した能力は、『戦う』という意思に強く呼応する。恐らくお前の剣が出ないのは、この間のライアスとの戦いで砕かれたのが原因かも知れない」

トレイズの言葉で、チリーの脳裏にまたしてもあの時の光景が過る。

砕かれたのは 剣だけではなかった。

「俺は……アイツに、戦う意思を砕かれた……のか……？」

ブルブルと。チリーの右手は震えていた。

「怯えてるんだ……俺は……戦いに」

震えを押さえ込むかのように、チリーは右拳を握り締めた。
「チリー……」
不安気な表情で、チリーを見つめながらミラルは呟いた。

島に戻った方が良いのは、俺の方かも知れないな。

チリーの言葉が、ミラルの脳裏を生々しく過った。

チリーの右手が震えている。先程レオールと対峙した時と同じように。島や、仲間のために戦い、迷わず剣を振っていたチリーの右手が　今はあんなにも弱々しく震えている。

震えを押さえ込もうと、チリーが必死に右手首を掴んでいるのがわかる。しかし、チリーの震えは一向に止まらない。表情までもが恐怖に歪み始めている。

そんなチリーに、ミラルは声をかけることすら出来ないでいた。

「ライ……アス……ッ！」

ベッドから身体を起こし、震える右手を見つめながらチリーは呟く。

チリーの脳裏を過る、微笑するライアスの顔。見るも無残に頭部を破壊されたディート。そして砕かれた　　剣と闘志。

ライアスは確かに、チリーを殺しに来たと言った。あの手で触れた物を破壊するあの能力で。

自分の頭が、ライアスによって砕かれる映像が、チリーの脳内で再生された。飛び散る鮮血、弾け飛ぶ頭蓋骨、粉々になった脳は鮮血と共に辺りへ飛び散り、壁や床へと付着する。

「うわあああッ！」

頭を抱え、恐怖のあまりチリーは絶叫する。

「おい、チリー！」

ニシルや青蘭の声が聞こえるが、その一切を無視し、ただただ絶叫する。脳内で延々と流れ続ける映像に怯えて……。

あのチリーが、目の前で絶叫している。目からは涙を流し、表情を恐怖に歪め、頭を抱えたまま叫び続けている。

これ程までに、ライアスはチリーへ恐怖を与えたのか。

思えば、今まで戦えていたのがおかしいのかも知れない。チリーも、町を歩く少年達と変わらない、普通の少年なのだ。そんな少年が、これまで生死をかけた戦いへと身を投じていたこと自体が、普通じゃない。

「チリー……っ！」

そつと。ミラルはチリーへ歩み寄る。そんなミラルに気付いているのか気付いていないのかもわからないが、チリーは叫び続けている。

そんなチリーを、ミラルはそつと優しく抱き寄せた。

「大丈夫……。大丈夫だから……！」

まるで泣き喚く赤子をあやすかのように、ミラルは声をかけながらチリーの頭を撫でた。

「うわ……ああ……ッ！」

叫びは、いつの間にか泣き声へと変わっていた。

圧倒的な敗北による屈辱、戦いと 死への恐怖。それらが

チリーの中でない交ぜになり、それが慟哭へと変わっていた。

しばらくすると、チリーは眠りについていた。眠ってしまったいることを確認すると、ミラルはそつとチリーをベッドへ寝かせ、その寝顔を濡らす涙を、自分の服の袖で拭った。

「もう、落ち着いたみたい」

ミラルの言葉に、固唾を飲んで見守っていたニシル達は安堵の溜息を吐いた。

「チリー……大丈夫かな……」

不安そうに、眠るチリーを見つめながらニシルは呟く。

「相当シヨックだったみたいだな……」

そう言い、青蘭はチリーへと視線を移した。

「もしこのままなら、チリーはこの旅を降りなければならないかも知れない」

「ッ!?」

トレイズのその言葉に、全員の視線がトレイズへと集中した。

「本気で……言ってるの?」

ゆらりと。顔をうつむかせてニシルは立ち上がると、トレイズの眼前へと歩み寄る。

「この様子では、足手まといになるだけだ。島に帰らせた方が良い」

「おいトレイズ……何もそこまで」

青蘭が言いかけた時だった。

ニシルの、包帯に包まれた右拳が、トレイズの左頬へと食い込んだ。

トレイズは殴られた左頬を押さえ、何のつもりだ? とニシルへ低く問うた。

「ふざけんなッ! 僕は認めない……ッ! お前が何と言おうと、

僕はチリーと一緒に旅を続けるからな! 絶対にだ! チリーが戦えないなら、僕が二倍戦う! チリーを守らなきゃいけないなら、僕が守るッ! それで、文句はないだろ……!?!」

そう言い放つと、ニシルは肩を怒らせてドアの方へと早足で歩いて行く。

「どこに……行くの?」

恐る恐る、ミラルがニシルへ問う。

「頭、冷やして来る。絶対、誰も付いてくるなよ」

そう言い残し、ニシルは部屋を後にした。

乱暴に閉じられたドアを見、青蘭は嘆息するとトレイズへと視線を移した。

「何であんな言い方するんだ？ 島に帰らせた方が良かったのは、これ以上チリーを戦わせるのは危険だ……って、そういうことだろ？ 心配してるなら素直に言えば良いじゃないか」

青蘭が微笑すると、トレイズは視線を逸らしてフンと鼻を鳴らした。

「……悪かったな」

その日の夜、ミラルは中々寝つけずにいた。

怯えるチリーのことを、憤慨するニシルのことが、気になって仕方がなかった。

「これから、どうなるんだろう……」

チリーは、島に帰らせた方が良いかも知れない。トレイズと同じようにそう思う自分がいた。こんな危ない旅は、トレイズに任せてチリーとニシルと島へ戻った方が良いかも知れない。今までのように、楽しく過ごせていればそれで良いのではないか。ミラルはそう考えてしまっていた。

ポーっと。天井を見つめ、今日のことを思い出す。

そつと、チリーを抱き寄せた自分……。その時のことを思い出すと、ミラルの頬は一気に真っ赤に染まった。

「何であんなことしちゃったんだろ……」

チリーを落ち着かせるためとは言え、大胆なことをしたものだ。

そう言えば、私が泣いていた時……よくお母さんがあしてくれたなあ……。

「……え？ 私の……お母さん？」

ミラルには、テイテスに流れ着く以前の記憶がない。テイテスで

はおじさんとおばさんに育てられていたため、本当の両親の顔は覚えていない。しかし今ミラルは、確かに母に抱き締められた記憶を思い出したのだ。

しかし、どんな顔だったのかまでは思い出せない。

ボンヤリと。思い出せそうで思い出せない、もどかしい記憶。本当の母の顔。

天井を見つめたまま懸命に思い出そうとするが、思考はぼやけていくばかり。いつの間にか、ミラルは眠りについていった。

眠るミラルの枕元に、一人の少年のような男が立っていた。鍵を閉めていたハズのドアは、男の手によって開け放たれたままになっている。

「アイツを……屈服させる」

ボソリと呟き、男は持っている袋から縄を取り出すと、起こさぬようそっとミラルを縛った。口には猿轡をはめ、手足も動けぬようしっかりと縛った。

「おい」

男が声を発すると、扉の向こうから屈強な男が一人、中へと入って来た。

「運べ。宿の奴らは既に脅してある。普通に玄関から出て大丈夫だ」
「……わかりました。しかしレオール様、お言葉ですがこのようなことに何の意味が？」

男の問いに、レオールと呼ばれた男はニヤリと笑った。

「アイツを……あの白髪野郎を屈服させる。人質の前で、『許して下さいいごめんなさい』ってな」

そう言つとレオールは、ポケットから一枚の紙を取り出し、ベッドの上へ置き、行くぞと男を促し、部屋を後にした。

まただ。またこの映像だ。またこの映像が……。
夢なのはわかってる。既にこれは過去の出来事だ。
しかし生々しく、何度でも蘇る。眠っていても、目覚めていても、
碎ける剣。微笑するライアス。呆然とする。自分自身。
敗北の二文字が、チリーの中に叩きつけられた。

何度見れば、この映像から逃れられるのか。

ガバリと。勢いよくベッドからチリーは身体を起こした。額を拭くと、ベツトリとした厭な汗で濡れていた。

「チリー、随分うなされてたみたいだが、大丈夫か？」

隣で、青蘭がベッドに腰掛けていた。心配そうな表情で安否を問う青蘭に、チリーは大丈夫だと答えた。

「チリーも起きたし、ミラルも連れて食堂行こうよ。僕お腹空いちやっつさ」

そう言っつてニシルは笑うと、ベッドから出た。

何やら考え事をしているらしく、トレイズは無表情なまま、気まぐずそうな顔で自分を見ているニシルには反応を示さうとしなかった。

「ああ、そうだな。俺も何か腹減ったよ」

そう言っつて頭をポリポリとかき、チリーはベッドから出た。

「ミラルは俺が連れて来るよ」

「ああ、頼む」

青蘭が小さく頷いたのを見ると、チリーは部屋を後にした。

部屋を出、ミラルのいる隣の部屋の前で、ピタリとチリーは動きを止めた。

「ミラル……」

ボンヤリと。昨日のことを思い出す。

薄らとだが覚えている。ライアスへの恐怖のあまり泣き叫ぶチリーを、ミラルは優しく抱擁してくれたのだ。彼女から感じる温かさに安堵し、チリーはミラルの胸の中で眠りについたのだった。

今思い出すと、とてつもなく恥ずかしい。ミラルには感謝しているが、ニシル達の目の前であんなことを……。

どんな顔で会えば良いのかわからないが、自分が連れて来ると言ってしまった以上、今更部屋に戻る訳にもいかず、チリーはミラルの部屋のドアを軽くノックした。

コンコンというノックの音。そこから数秒待ったが、ミラルからは何の反応もない。

「寝てんのか……?」

訝しげな表情で、再度ドアをノックするが、ミラルからの反応はない。

「おいミラル。開けるぞー」

ドアノブに手をかけ、ガチャリとドアを開けると、チリーは部屋の中へと入った。

ミラルの部屋も、チリー達と同じ二人部屋なので、中はチリー達の部屋とあまり変わらない。

「朝食食いに行こうぜー」

しかし、ミラルからの返事はなかった。

すぐにチリーは部屋の中をキョロキョロと見回すが、ミラルの姿はない。

「いない……のか?」

妙なことに、ベッドの中はもぬけの殻だった。あのミラルが、先に朝食をとりに行くとも思えず、チリーは首を傾げてベッドを見つめる。

「……………」

ベッドの上に、一枚の紙切れが置いてあった。何か書いてあるよ
うなので、ミラルの書き置きかと思い、チリーはその紙切れを拾い
上げる。

「　　ッ!?」

内容を読み、チリーは絶句した。

「大変だッ!」

勢いよくドアが開き、チリーの声が部屋に響く。

「何?　どうかしたの?」

呑気な顔で問うニシルの元へチリーは駆け寄ると、先程の紙切れ
をニシルへ手渡す。

数刻、真剣な表情でニシルはその紙切れに書かれた文字を読み、
読み終わるとすぐに表情を驚愕に歪めた。

「ミラルが……攫われた……?」

「　　ッ!?」

全員の視線が、一瞬にしてニシルへと集められる。あまり周りの
ことへ反応を示さないトレイズさえ、ニシルの方をジッと見てい
る。

「レオールって奴からだよ。研究所跡のある森の中で、白い奴を待
ってるって。……白い奴?」

すぐに、全員の視線がチリーへと移される。

チリーのその白い髪は、正に「白い奴」と形容するに相応しかっ
た。

「アイツ……ッ」

ギュッと拳を握り締め、チリーは怒りで顔を歪めた。が、すぐに
その表情は怯えに変わる。

絶対に殺してやるッ!

脳裏を過る、レオールの「殺す」という言葉。

気が付けば、無意識の内にチリーの身体はブルブルと震えていた。
「…………チリー？」

不意に動きを止めたチリーの肩に、ニシルがそっと右手を乗せた。
「お前…………！」

震えが、ニシルの右手へと伝わった。

「…………悪い。俺じゃ駄目だ…………。行けない…………ッ」

ゆっくりとニシルの右手を肩から払いのけ、チリーはどこか諦めたような表情で、ベッドへ腰掛けた。

「怖いんだ…………。戦うのが…………。殺されるかも知れないって戦いが、俺は怖いんだ…………」

俺はもう、戦えない。そう呟き、チリーがうつむいたその時だった。

「おいバカチリ、ちょっとこっち向け」

怒気の込められた、ニシルの声が聞こえる。

ゆっくりとチリーが顔を上げると、そこには怒りで表情を歪めたニシルの顔があった。

「ニシル…………」

チリーの胸ぐらをニシルは勢いよく右手で掴むと、ニシルはチリーの頬を左手で殴りつけた。

一瞬何をされたのかわからず、チリーは左頬に痛みを感じながらも、呆然とニシルを見つめる。

「何だよそれ…………ッ！ ミラルが…………ミラルが攫われたんだぞッ！？」

呆然とするチリーの胸ぐらを掴んだまま、ニシルは更に語気を荒げて言葉を続ける。

「僕は…………青蘭やトレイズや…………お前みたいになりたいって思ったんだ！ どんな相手でも、どんな戦いでも、怯えることなく挑むことが出来るお前みたいに！ そのお前が何だッ！ 怖い？ もう戦えない？ 冗談じゃないぞッ！ そりやお前はライアスって奴に殺されかけたかも知れない…………怖い目にあっただかも知れない…………だけ

どそれが何だ！ 僕の知ってるチリーは、そんなことで怖気づくよ
うなヘタレ野郎じゃないッ！」

言い返す言葉もなく、チリーは呆然としたままニシルの言葉を黙
って聞いていた。そんなチリーへ、ニシルは畳み掛けるように叫ん
だ。

「お前は、何をするために島を出たんだッ!？」

ニシルのその言葉に、チリーの表情が一変した。

何をするために島を出たんだ？

自問し、答えを思索する。

王を、捜すため。既に王はいない。故に今の目的は、王の遺言通
り赤石を探し出し、島の危機を救うためだ。

決して 決して戦いへの恐怖に囚われるために、島を出た
訳ではない。

カッと。チリーの双眸が見開かれた。

「チリー、お前が行かないなら、僕が行くぞ……」

そう言ってニシルは背を向け、ドアへと歩み寄った。が、その肩
を、チリーはガツシリと右手で掴んだ。

「おい、ちよつとこっち向け」

チリーの言葉にニシルが振り返ると、チリーはすぐさまその左頬
へ右拳を叩き込んだ。

「な、何を」

言いかけ、ニシルはチリーの表情を凝視する。

先程までの恐怖に囚われた表情はなく、そこにはいつもの……ニ
ッと笑うチリーの表情があった。

「お返したこの馬鹿ニシルッ！」

「この」

ピタリと。やり返そうとして振り上げた右腕を、ニシルはそつと
降ろして微笑する。

「俺が行く……ッ！ 呼ばれてんのは俺だからな！」

そう言ってドアの方まで行き、ピタリと足を止めると、チリーは

振り返り、ニシルの方へ視線を移す。

「サンキュな。目、覚めたぜニシル」

ニシルはチリーに言葉では答えず、笑みを浮かべることで答えた。笑みの意味を察してか察せずか、チリーはすぐに駆け足で部屋を後にした。

チリーの姿が見えなくなったのを確認し、青蘭は嘆息すると、ニシルへと視線を移した。

「ニシル……手、無事じゃないだろ？ ホントは拳を握るのもやっとなんじゃないのか？」

凶星を指された、といった様子でニシルは微笑し、肩をすくめてみせると、大丈夫だよと答えた。

「トレイズ」

そう言っつて、ニシルはトレイズの方へ視線を移した。

「昨日は……ごめんね。ついカツとなつてさ……。謝る。何なら僕の顔に一発ぶち込んででも良い」

ニシルの言葉に、トレイズは微笑し、いやと答えた。

「俺の方こそ悪かったな。お前が俺に謝る必要はない」

トレイズの言葉に、ニシルはそっか、と答え、微笑んだ。

景色が、凄まじい勢いで切り変わって行く。

速く、もっと速く。ミラルの所へ……。それだけを考え、ひたすらチリーは森へ向かって走った。

何人もの通行人を追い越し、チリーは森へとひたすらに走り続ける。

「待ってるよ……ミラル！」

自分を急かすように呟き、チリーは更に足へ力を込めた。

ゆっくりと。閉じていた目を開ける。寝起き故か意識が朦朧としている。

最初に視界へ入るのは天井だと思っていたのだが、その予想は裏切られ、ミラルの視界へ飛び込んで来たのは雑草の茂る地面だった。状況が把握出来ず、キョロキョロと辺りを見回すと、数人の男達がこちらを見ていることに気が付いた。その男達の内、一人は昨日チリーに襲いかかって来た男だ。その男の周りの取り巻き達にも見覚えがある。

その男へ、どういう状況なのか問おうとしたが、問う前に身体の自由が効かないことにやつとのもので気が付いた。

腕も足も自由に動かせない。叫ぼうとしたが、言葉にならない声が出るばかりで、まともに叫ぶことが出来ない。口元へ視線を落とすと、口に猿轡がはめられていることに気が付いた。

「目を覚ましたか」

そう言っつて男　　レオールは、ミラルの方へと歩み寄る。

「おい、外してやれ」

レオールがそう指示すると、取り巻きの男達の内一人がミラルへと近寄り、口へはめられた猿轡を外した。

「ちよつとアンタ！　これ、どういふことなのよっ！」

キツと。ミラルはレオールを睨みつける。

「見た通りだ。あの白いのを誘き寄せるために、お前には餌になつてもらおう」

「餌ですって……っ！？」

ミラルは、縄で縛られていた。両手両足を縛られ、自由の効かない状態で、大木から吊り下げられていたのだ。

「チリーと戦いたいなら、直接チリーのそこへ行きなさいよ！　何でこんなこと……っ！」

ミラルの問いに、レオールは表情を一変させた。怒りに歪んだその表情は、昨日レオールがチリーに見せたものと同じ、激情に囚われた表情だった。

「アイツは……俺を馬鹿にしやがったんだ……ッ！俺を子供のようだと、心の内で嘲り、神力を使おうとしなかった……！こんな屈辱的なことがあるかッ！だからアイツは屈服させる！俺の目の前で、完全にな！」

「アンタ……っ！」

レオールの表情、声、仕草、そのどれもから異常な程の怒りを感じられた。恐らく、年齢に伴わない己の容姿をコンプレックスに思っており、昨日のチリーのはったりを「自分が容姿で判断され、なめられているのだ」と、そう受け取ったのだろう。

「アイツが来なければ、お前は殺す。まあアイツが来たとしても、俺がアイツを殺してその後お前も殺す」

ギロリと。レオールがミラルを睨みつけた。激情の内包されたその瞳に、ミラルはただならぬ恐怖を感じ取り、ゴクリと唾を飲み込む。

「チリーは……必ず来るわ」

ピシヤリと。レオールに対してミラルは言い放つ。が、チリーが来ると信じつつ、心のどこかで「来ないでほしい」という思いがあった。

昨日、チリーが見せた明らかな怯え。あの状態のチリーが、激昂しているレオールとまともに戦えるはずがない。

こんな奴にチリーが殺されるくらいなら、私が死んだ方がマシだわ。

気持ちが良い。

走るといふのは、こんなにも気持ちが良かったのか。

心の奥底から沸き上がる、確かな闘志。ミラルを攫ったレオール

を倒そうという意思。ここしばらく、心の奥底に封じられていた闘志が、今のチリーにはみなぎっている。

怖かった。恐ろしかった。戦いが、死が。

もう戦えないと思った。ライアスへの恐怖心に、囚われ続けるのだと……そう思っていた。

だが、違う。恐怖心に囚われ続けていては、一步も前には進めない。

お前は、何をするために島を出たんだッ!?

ニシルの問いが、心の内で蘇る。

「前に　進むためだッ!」

赤石を探すため、島を救うため、王の遺言を守るため、仲間を守るため。

気が付けば、レオールの待つ森は目の前だった。

森の中へ入ってすぐに、レオールの姿を見つけることが出来た。

こちらを見、微笑するレオール。その周囲を取り巻く屈強な男達。そして大木に縄で吊るされ、身動きが取れないミラルの姿。

「レオールウウウッ!」

怒りに表情を歪め、チリーがレオールを睨みつける。

「来たか……」

怒るチリーに一切の動揺を見せず、レオールはそう呟き、両腕を刃へと変化させ、ゆっくりとチリーの方へ歩み寄って来る。

「お前ら、絶対に手は出さな。そこに吊るしている女にもだ。俺がコイツを倒し、その女も俺が殺す。邪魔はするなよ」

レオールが振り向き、男達へそう指示すると、男達ははい、とだけ答えた。

「チリーっ! 駄目! 逃げてっ!」

チリーの姿を見つけ、ミラルは必死にそう叫んだ。

殺される。如何にチリーがキリトとの修行で鍛えられているとは言え、相手はゲルビアの神力使いだ。能力無しで、どうこう出来る相手じゃないハズだ。

「……逃がさないッ！」

レオールは刃を構えると素早くチリーとの距離を詰め、チリー目掛けて右腕の刃を振り降ろした。その時だった。

「ミラル……。誰が、どこに逃げるんだ……？」

鳴り響く、金属音。レオールの刃を防いだのは、チリーの大剣だった。

そう。出せなかったハズの、チリーの大剣だ。

「チリー……っ！ アンタ……！」

チリーは大剣を振り抜き、レオールの右腕を弾くと、右足でレオールの腹部へ前蹴りを喰らわせる。

蹴りに押され、レオールは数歩その場から後退する。

「やっと能力を出したか……ッ！」

両腕の刃を構え直し、レオールはニヤリと笑った。

「俺を本気にさせたな……！ 来いよクソガキ……ちょっとお前は悪戯が過ぎるぜ」

ニヤリと笑うチリーの口から放たれたその言葉は、レオールに対する明らかな挑発だった。

それを真に受けたのか、レオールはその瞳に激怒の色を映し、チリーを睨みつける。

「誰が……誰がクソガキだアアアッ……！」

叫び、レオールはチリー目掛けて斬りかかる。

横に振られた右腕の刃を、チリーは高く跳躍して回避すると、空中でクルリと回転し、レオールの背後へ着地した。すかさずレオールは振り向きざまに左腕の刃をチリー目掛けて振った。しかしその刃は、チリーの大剣によって防がれる。

「この……ッ！」

レオールはそのまま右腕の刃を下からチリー目掛けて振り上げた。チリーはその刃に素早く反応すると、横っ飛びにその刃を避け、すぐに体勢を立て直し、大剣を両手で持ってレオール目掛けて振り降ろす。

「その腕……ぶっ壊すぜ！」

しかし、腕ごと破壊するつもりで振り降ろされた大剣は、レオールの左腕によって容易く受けられた。

レオールはそのまま左腕を振り抜き、チリーの大剣を弾く。

「甘いんだよ白髪野郎がア！」

大剣を弾かれ、ガラ空きになったチリーのボディへ、レオールは右腕の刃を突き出した。

チリーは舌打ちすると素早く後退して、間一髪レオールの刃を避けた。

「中々の動きだな……！　だが、それだけじゃ俺には勝てない！」
レオールは両腕の刃を交差させ、チリーとの距離を詰めると両腕を同時にチリー目掛けて振り降ろした。

十字の斬撃。チリーは素早く身を屈め、その斬撃を回避する。

「な　ッ!?」

想定外の避け方をされ、驚愕の声を上げるレオールの腹部に、チリーは素早く右肘を打ち込んだ。その肘打ちは鳩尾に直撃し、レオールを一瞬怯ませる。

「オラアッ！」

レオールが怯んだ隙に、チリーは体勢を立て直し、左拳で思い切りレオールの顔面を殴り付けた。

「がア……ッ！」

そのままレオールは後方へ吹っ飛び、そのまま後ろの大木へと背中から激突する。

「っしや！」

ガッツポーズをし、チリーはミラルの方へと視線を移す。

「チリーっ！」

ミラルの表情は、チリーが戦えるようになったことへの喜びと、チリーが助けに来た喜びで溢れていた。

「待ってる。今降ろして」

チリーがそう、言いかけた時だった。

「おい、お前ら、やれ」

レオールから指示が出され、男達の内一人がミラルへと素早く近づく。

「ミラル！」

男はミラルを大木から降ろし、大木の幹へともたれかからせた。

「何をする気だ……ッ!？」

チリーの問いには答えず、レオールは素早くミラルへ近づくと、右腕の刃をミラルの首筋へ向けた。

「レオール……ッ!」

ギロリと。チリーの怒りに満ちた双眸がレオールを睨みつける。

「形勢逆転だ……!! この女が大事なら、その剣を捨てて俺の前に跪け! そして言え! ごめんなさい許して下さいってなア!」

言い放ち、レオールは笑みを浮かべた。勝利を確信した笑みだ。

「このクソ野郎が……ッ!」

何とでも言え。そう言っつてレオールは、刃を更にミラルへ近づけた。刃先が首筋に触れ、一筋の血が流れる。

「うっ……!!」

苦痛に、ミラルが表情を歪めた。

「ミラルッ!」

焦りを隠せないチリーを、嘲るようにレオールは笑った。

「さあ、その剣を捨て、屈服しろ!」

ギユツと左拳を握り締め、チリーはうつむいた。

「チリー! 駄目! こんな奴に屈服しないでっ!」

必死にそう叫ぶミラルを、レオールはギロリと睨みつけた。

「うるさいぞ女。黙ってる」

ミラルの命には代えられない。助けに来たのに、レオールを倒すためにミラルが殺されては本末転倒だ。
ミラルが死ぬのは嫌だ。

だが 負けるのも嫌だ！

ギユツと。大剣の柄を右手で握り締める。と同時に、自分の中で何かが目覚める感覚があった。

この湯水のように溢れて来る力の使い方を、チリーは既に知っている。

神力だ。この力で、ミラルを……！

「なあ、ミラル。俺さ……ライアスに負けてから昨日まで、『死ぬのが怖い。戦うのが怖い』って、そう思ってたんだ」

呟くように、チリーは自嘲めいた声で言う。

「笑っちゃうよな。この俺がだぜ？ 戦うのが怖いだなんてよ」

クスリと笑い、チリーはうつむいていた顔を上げた。

「だが、今は違う！」

真っ直ぐに、チリーの視線がレオールを捕らえた。

「全部だ……ッ！ 全部……お前も、島も！ 戦って、守ってやる

……俺が……ッ！ この剣でだッ！」

刺突の構え。スツとチリーは大剣の刃先をレオールへ向けた。

「だから……見てろッ！ これが……これが……ッッ！」

身体の中で溢れだす神力の放出先は、後方。

イメージは、レオール目掛けて大剣で突進する自分の姿。

大剣の柄から、膨大な量の神力が、まるでホースから勢いよく放たれた水の如く噴射された。

「これが俺の剣だアアアアアッッ……！！」

噴射された神力の凄まじい勢いで、チリーは大剣ごとレオール目掛けて突進する。

「な　　ッ!?」

レオールが驚愕の声を上げた時には既に遅く、チリーは眼前まで迫っていた。もうこの勢いは止められない。

すぐにレオールは突進してくるチリーを防がんと両腕の刃を交差させる。

だが、その程度ではチリーを止めることは不可能だった。

「うおおおおッ!」

叫びと共に、チリーはレオールの刃へと突撃する。

案の定、一秒たりともレオールはチリーを止めることが出来なかった。

「ふざけるなアアッ!」

レオールの両腕の刃は、チリーによつて砕かれた。チリーにレオールを殺す気はなかったらしく、刃を砕いた時点で大剣の柄から噴射されていた神力はピタリと止まった。

刃を砕かれはしたが、両腕に別状はないらしい。レオールの両腕は元へ戻っている。

命に別状はなかったものの、レオールは白目を向いたまま、その場で仰向けに倒れた。

「レオール様!」

男達は倒れているレオールへ駆け寄り、抱き上げると、逃げるのが最善の手と判断したらしく、その場から一目散に逃げ出した。

そんな男達を追いかけようとせず、チリーはミラルへと視線を移した。

「大丈夫か?」

そう言い、ミラルを縛っている縄をチリーは丁寧に大剣で切り、ミラルの両手両足を自由にした。

「……ありがとう」

立ち上がり、安堵の溜息を吐くと、小さくミラルは言う。

「ミラル……無事で良かった」

チリーがそう言いかけた時だった。

トンと。小さな音がして、ミラルの頭がチリーの胸元へ押し当てられた。

「……馬鹿っ！」

ミラルは右拳で、チリーの胸部を叩いた。

いつものミラルとは違う、その弱々しい一撃に、チリーは困惑の表情を見せた。

「心配したじゃないっ！ 馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿っ！ 怯えたまま、いつものチリーにもう戻らないかもって……心配してたんだからっ！ 馬鹿！」

あんまり馬鹿馬鹿言うなよ！ と、いつものように言い返そうとしたが、チリーの胸元を、ミラルの涙が濡らしていることに気付き、チリーは優しく微笑んだ。

心配、かけたんだな……。

心の内で反省し、チリーはミラルの背中に右手でそつと触れた。

「……悪かった」

一言謝り、チリーはミラルを抱き寄せた。

チリーの胸の中で、ミラルはえ？ と短く声を上げたが、すぐにチリーの胸の中へ顔を埋めた。

「もう……大丈夫だ」

優しくそう言って、チリーはミラルを一層強く抱き締め、その頭をなでた。

昨日、ミラルが自分にそうしてくれたように。

「お前やみんなに、ちゃんと勇気をもらったから」

だからまだ、戦える。みんなを守る。

そう、チリーは呟いた。

「……あ」

レオールとの戦いの翌日、チリー達が宿泊している部屋の中で、短く、ミラルが声を上げた。

「どうした？」

硬直しているミラルに、チリーが問いかける。

ミラルの手には、旅に必要な資金が入れてある財布が握られており、ミラルはその財布を開いたまま硬直している。

「どうかしたの？」

ニシルも、不思議そうにミラルへ問いかけ、ミラルの手元を覗き込んだ。

「お金、ないの」

一瞬、部屋にいた全員が、まるで時を止められたかのように動きを止めた。

ニシルは呆けた顔でミラルを見、青蘭は少し驚いた表情でミラルを見つめている。トレイズは表情こそ変えていないが、動きを止めてミラルを凝視している。

「盗まれたのかッ!？」

声を荒げたチリーに、ミラルは首を横に振る。その隣でニシルも同じように首を振っている。

「じゃあ一体」

言いかけたチリーに、ミラルは財布を手渡した。

「何だ、あるじゃねえか……」

「盗まれた訳じゃないの。ただ……」

チリーから財布を回収し、財布を振ってじゃらじゃらと音をさせてみせる。小銭ばかりが入っている、ということを示したかったの

だろう。

「旅を続けるにはちょっと厳しいのよ。これ」
つまり、お金が足りないのだった。

ニシル、青蘭、トレイズの負傷。それによりかかった治療費、更に、ヘルテュラの宿への長期に渡る滞在。どれもが出発当初は予想していなかった出費な上、目的が王の搜索から赤石の探索へと変わったため、当初の予定より長く旅をしなければならなくなってしまっている。故に、今の資金では旅を続けるのは厳しい状態となっているのだ。

チリーは一所懸命に両手を使ってお金の計算をし（しかし出来ない）、ニシルは財布を見つめながら溜息を吐いている。青蘭はどうしたものと、一人で思索し、トレイズは呆れてものも言えないといった様子だった。

「そう言えば僕ら、お金の管理は全部ミラルに任せてたから、気にしてなかったな……」

ニシルの呟きに、青蘭はコクリと頷いて同意を示した。

「この数日間、みんなの怪我や王様のこと、それにチリーのこととで精一杯だったから……。しばらくお金の計算、してなかったのよ……」

ガツクリと肩を落とし、そう言ってミラルは深い溜息を吐いた。

「……これからどうするつもりだ？」

静かに、トレイズが問う。その様子はどこか怒っているようにも見えたため、ミラルは肩をびくつかせた。

「お、王様のことを話して、テイテスから援助を受けられないかしら……」

「不可能ではない。だが、テイテスがあまり豊かではないのは知っているな？ これ以上の援助は、民の生活に支障が出かねない。それに、王の死がテイテスに伝われば、確実にテイテスは混乱に陥る。

出来れば避けたいところだ……」

が、やむを得ないな、とトレイズは付け足した。

「一度……島に戻る必要があるってこと？」

ニシルの問いに、トレイズはコクリと頷く。

「だが、王の死は伏せておくぞ。王の捜索が上手くいかず、資金不足に陥ったと……そう伝える。……ヘルテュラから船は出ているな？」

トレイズが問うと、ミラルはええと頷いた。

「ここからテイテスへ向かう資金くらいはあるわ……。どうする？」

「……一度、戻るしかないみたいだね」

そう答え、ニシルは深く溜息を吐いた。

「テイテスに戻る……か」

計算し切れなかったのか指を動かすのを止め、チリーは感慨深げにそう呟いた。

「青蘭、お前はどつする？」

「俺は……」

チリーに問いかけられ、青蘭は数刻口籠る。チリー達と旅を続けたいという思いもあるが、戻ったりせずにゲルビアへ向かい、今すぐにも復讐を遂げたいという思いもある。

すぐに答えることは、出来なかった。

「悪い。少し考えさせてくれ。元々俺の目的は、ゲルビアへの復讐だ……」

そう言つと青蘭は、腰掛けていたベッドから立ち上がり、部屋を後にした。

宿を出て、青蘭は適当に町の中を歩いていた。

様々な民家や店が建ち並び、その周辺を生き活きとした表情で人々が歩いている。そんな彼らの表情を見、青蘭は嘆息する。

何故自分は、彼らと同じように過ごすことが出来ないの

か。

出来ることなら、在りし日の東国で、彼らのように過ごしたい。復讐になど囚われずに、かつての仲間達と過ごすことが出来ればどんなに幸せか。

優しく、頼もしい兄。いつも自分の傍にいた幼馴染の少女。今はもう会えなくなった家族や友人のことを思えば思う程、青蘭の心は悲しみと、ゲルビアへの憎悪に囚われていく。

いつまで、自分は過去と復讐に囚われるのだろうか。復讐を遂げれば、この思いから逃れることが出来るのだろうか

答えは、まだ見出せなかった。

そんなことを考えながら歩き、喫茶店の前まで差し掛かった時だった。

「ちょっとだけで良いからよ。な？　ちょっと俺達に付き合ってくれよ」

柄の悪そうな男が、一人の少女に絡んでいた。

「でも……」

少女は右手から提げられた買い物袋を揺らしながら、おろおろとしている。青蘭の位置からだと後ろ姿しか見えないが、恐らく困惑した表情をしているのだろう。

「……え？」

青蘭は少女の服装を見、驚嘆の声を上げた。

花柄のあしらわれた赤い一枚の布を、身体に巻き付けているかのような服装。見覚えのある服装の少女を、青蘭は凝視した。

「その喫茶店で少し話するだけだからよ。な？」

男が、少女の肩へ乱暴に触れた。

少女は肩をビクンとびくつかせ、やめて下さいと悲痛な声を上げた。

「やれやれ……。小さく、青蘭はそう呟いた。

「おい、お前達」

気が付けば、青蘭は少女の傍まで歩み寄っていた。

「何だよお前は？」

険悪な表情で、男は青蘭に問うた。青蘭はそれには答えず、ギョリと男を睨みつける。

「わ、わかつたよ……。ちょっとナンパしただけじゃねえか……」
すると、青蘭の睨みに怯えたのか、男は不服そうにそう言いつつも少女から離れると、舌打ちをしてその場から離れて行った。

「大丈夫ですか？」

優しく、青蘭が少女に問うと、少女は青蘭の方へ振り向き、嬉しそうに微笑んだ。

「あ、ありがとうございます。買い物の帰りに変な人に絡まれてえ？」

青蘭の顔を見、少女は驚嘆の声を上げた。青蘭も、少女の顔を凝視したまま硬直している。

「……青蘭君？」

信じられないといった様子で少女が問う。

「伊織……？」

後頭部の低い位置で二つに縛られた長い黒髪、あどけない顔、そして聞き覚えのあるその声。青蘭は目の前の少女を　　伊織を知っていた。

喫茶店内の二人用の席へ、青蘭と伊織は座っていた。二人共注文した紅茶を少しずつ飲みながら、気まずい空気を保っている。

伊織は青蘭の顔を一瞥してはうつむく、という行為を何度も繰り返し、そんな様子を青蘭は若干困惑した様子で見つめている。

「なあ、伊織……」

青蘭が声をかけると、伊織はびくんと肩をびくつかせ、うつむかせていた顔を上げた。

「え、何？　どうしたの青蘭君！？」

伊織こそどうしたのかと、そう問いかけたかったが青蘭が聞いた

いのはそんなことではない。

「伊織、何で無事なんだ……？ 東国戦争の時に、殺されてしまったものだ……」

「青蘭君こそ、どうして無事なの？」

「俺は、兄さんに逃がしてもらったから……」

青蘭の言葉に、伊織はそっか、と小さく答える。

「私は、麗って人に助けられたんだ……」

「そう……か」

麗という人物のことなど、もう少し尋ねたいことはあったのだが、伊織がまたうつむいてしまったことから察するに、思い出したくないことを一緒に思い出してしまったのだろう。詮索するのは、今じゃなくて良い。

まずは、無事だったことを喜びたかった。

「詳しいことはわからないが、とにかく今は生きて再会出来たことを喜ぼう」

そう言っつて青蘭が微笑むと、伊織も顔を上げて微笑んだ。昔と変わらぬ、優しい微笑み。まさかもう一度見ることが出来るとは思っていなかった。

「そういえば青蘭君。腕、どうしたの？」

伊織に問われ、青蘭はギプスで固められた右腕を伊織へ見せた。

「ちよつと……な」

そう言っつて微笑する青蘭の右腕に、伊織はそつと両手を当てた。

「伊織？」

伊織は青蘭の右腕に手を当てたまま目を閉じ、少し待っててと咳いた。

訝しげな表情のまま数秒待つと、伊織の両手から温かな光が発せられた。

「……え？」

短く、驚嘆の声を上げつつ青蘭は伊織の両手を凝視する。伊織の両手から発せられた光は徐々に青蘭の右腕を包んでいく。

光がギプスの周りを包みこんで数秒、やっとのことで目を開けると、伊織は微笑んだ。

「これでもう、痛くないハズだよ」
「な……」

戸惑いの表情を見せる青蘭の右腕を、伊織は勢いよく机にぶつけた。

「痛ッ……くない……？」

ギプスで固められているとは言え、今のような衝撃を与えれば少しは痛いハズだ。が、不思議なことに青蘭は痛みを感じなかった。

伊織が発した光、そして伊織の発言から察するに、青蘭の腕は伊織の能力によつて治癒された。そう考えてもおかしくはない。

「伊織……お前……神力使い……？」

「……うん。使えるようになったのはつい最近だけ……」

なるほど。と青蘭は呟いた。青蘭の記憶が正しければ、伊織は昔神力使いではなかったハズだ。恐らく伊織は、東国から逃げ伸びた後、様々な経験をすることによつて神力を目覚めさせたのだろう……。

「青蘭君は、昔から使えたもんね……神力」

伊織の言葉に、青蘭はそうだなと答える。青蘭は、幼い頃から神力を使うことが出来た。それ故、周りの人間からよく迫害を受けていたものだ。

そんな彼の傍にいつもいてくれた幼馴染。それが今日の前にいる彼女、伊織だった。それが今日の前

懐かしい記憶を思い出し、青蘭は微笑んだ。

「懐かしいね……」

そう言つて微笑み、伊織は店内にある時計を一瞥すると、あ！と声を上げた。

「ごめん、そういえば私買い物帰りだったんだ！ 麗さん待たせてるから……また今度ね」

「あ、ああ……」

そう言つと伊織は慌しく立ち上がり、紅茶はおごるから！ と青

蘭の分まで支払いを済ませて店の外へと飛び出して行った。

「東国の人間が……俺以外にも生きてる……」

俺だけじゃない。

伊織が走り去って行った後のドアを見つめつつそう呟き、青蘭は安堵の溜息を吐いた。

ガチャリと。部屋のドアが開いた。

「お帰り」

ドアを開けたのが青蘭だとわかり、ニシルはそう声をかける。すると青蘭はすぐに、ただいまと答え、ベッドの上に腰掛けた。

「どこ行ってたの？」

「ちよつと、散歩にな」

そう答えた青蘭の口元から、微かな笑みがこぼれたのを、トレイズは見逃さなかった。

「……何かあつたのか？」

静かに、微笑しつつトレイズが問う。

「ああ……。古い友人に、偶然出会ったんだ」

青蘭の言葉に、古い友人？ とチリーが問うと、青蘭はコクリと頷いた。

「幼馴染だよ」

青蘭のその言葉に、その場にいた一同が目を丸くして青蘭を凝視した。

「幼馴染って……まさか……」

「ああ、東国のな」

チリーの言葉にそう答え、青蘭は微笑した。

「東国の生き残りって、青蘭だけじゃなかったの……？」

ニシルの問いに、青蘭はコクリと頷いた。と同時に、チリーとミラルが顔を見合わせ、二人同時に、あ、と短く声を上げた。

「おいミラル、青蘭にアイツの話、したか？」

チリーが問うと、ミラルは首をふるふると横に振る。

「話してないわよ。アンタのことで大変だったんだからね！」

それには言い返せず、チリーはううと小さく声を上げるだけだった。

「……何の話だ？」

青蘭が問うと、ミラルは東国出身と思しき女性が現れた時の話をした。不思議な服装をしていたこと、東国の者かと問われ、それを肯定する返事をしていたこと、ゲルビアへ尋常ではない程の怒りを向けていたこと。

青蘭はしばらく黙ったまま聞き、ミラルが話し終わると、なるほどと納得したような表情で呟いた。

「伊織が言っていた麗って人。その人のことかも知れないな」

青蘭の言葉に、ニシルは伊織？ と問う。

「ああ、さつき会った幼馴染の名前だよ」

「女の子？」

「ああ、そうだが……それがどうかしたか？」

「……彼女？」

ニシルの問いに、青蘭は少し間を空けてからいや、違うよと静かに答えた。

「反応つままないなあ……」

呟き、ニシルはふてくされたような表情でベッドの枕へ顔を埋めた。どうやら青蘭が慌てて否定するのだと思っていたらしい。

そんなニシルの様子に、ミラルは苦笑する。

「話を戻すけど、私達が会ったのはその麗って人なのかな……」

ミラルの言葉に、青蘭はコクリと頷く。

「かもな」

これで、三人。あの東国戦争で、青蘭は自分以外全滅したものだと思っていた。だが、違う。青蘭自身を含め、三人も生き残っていたのだ。

再び、青蘭は微笑した。

如何に活気のある町も、夜になれば厭になる程静かになる。

昼間の内は鬱陶しい程に人々が歩いてきたこの通りも、夜になれば

ば人の姿は見当たらない。見当たるとすれば、電灯に群がる蛾くらのものだった。

そんな通りを、一人の女性が歩いていた。

その女性は、あまり見ない服装をしていた。花柄のあしらわれた、一枚のピンク色の布を身体に巻き付けているかのような服だった。

「……おい」

低い、殺気の込められた男の声が、後ろから女性へとかけられた。しかし女性は、その声に別段気にした様子もなく、表情一つ変えずに首だけを動かし、後ろへと視線を移す。

「あら、誰かと思えば……」

後ろにいた男を見、女性はクスリと笑った。

後ろにいた男は、背の低い、一見少年と見間違えてしまいそうなそんな男だった。男の服は何故か所々破れており、随分とみずばらしく見えた。

「今日は一人？ 部下の皆様はどうしたのかしら？」

口元に笑みを浮かべ、女性が問う。すると男は怒りを露にし、女性をギロリと睨みつけた。

「うるさい……ッ」

「もしかして、あの白い子に負けた拳句、部下に見捨てられちゃったのかしら？」

「うるさいッ！」

凶星を指されたのか、男は語気を荒げる。

「俺が悪いんじゃない……俺が弱いんじゃない！ アイツらが情けないから負けたんだ！」

男の言葉に、女性は心底呆れた、といった様子で嘆息する。

「そんなことばかり言っているから、捨てられたのではなくって？」
嘲りの意味を込め、女性はもう一度クスリと笑った。

「お前を殺せば……東国の人間であるお前を殺せば、俺の力は証明されるッ！」

そう言うと同時に、男の右腕は刃へと変化する。

それを見、女性はすぐにそれが神力によるものだと判断した。

「今日は逃げずに向かってくるのね」

女性はそう言うと、懐からナイフのような刃物　　小刀を取り出した。

アルモニア本土にも幾つか伝わってきてはいはいるが、あまり知られていない東国の道具だ。それを好んで使う彼女は、やはり男の言う通り東国の人間なのだろう。

女性は小刀を鞘から抜き、右手で裏手に持つと、素早く身構えた。

「そんな物で……そんなちっぽけな武器で俺と戦うつもりか……ッ！　なめやがって……なめやがってエエッ！」

叫び、地団駄を踏むと、男は右腕の刃を構えて女性の方へと駆け出した。

「……美しくないわ」

呟き、眼前まで迫った男の右腕目掛けて小刀を　　一閃。

「……ッ……ッ……！？」

次の瞬間、男の右腕の肘から下は、ボトリと音を立てて地面へと落下していた。

地面に落下した途端に、男の右腕は刃から元の右腕の姿へと戻る。

一瞬、男は足元に落ちている右腕を見、驚愕に表情を歪めたが、すぐに笑みを浮かべる。

「ハハ……ッ！　ハハハッ！　何勝ち誇ってやがんだ……ッ！？」

ふざけやがって……俺の……俺の腕が、俺の腕が地面に落ちてる訳ないだろッ！？」

既に、男の表情は狂気に満ちていた。

切断された右腕からは大量の血が溢れ、男の肘の切断部からはポタポタと血が滴り落ちていた。

ドサリと。男はその場に倒れた。

それを一瞥し、女性は嘆息すると、倒れている男へ背を向けた

その時だった。

「……待てよ……ッ！　何背エ向けてんだよオ……ッ！　俺を見るよオ……俺をオオ……この俺をだよオ……ッ！」

残された左腕で、男はよろよろと立ち上がった。

女性は男の方を振り返ると、再び嘆息する。

「ふざけんな……ふざけんなアアツ！」

左腕を刃に変え、男が女性へと駆け出そうとした　その瞬間、

女性は素早く男の左腕を小刀で一閃　切り落とす。

「あああああアツ！」

両腕を切り落とされ、男はあまりの苦痛に絶叫する。やはり左腕も肘から下が綺麗に切り落とされており、ポタポタと音を立てて血が地面へと滴り落ちていく。

「哀れね……」

呟き、女性は小刀を鞘へ収め、再び己が懐へと戻す。

「あああアツ！　あああアツ！」

絶叫し続ける男へ、女性は一瞬哀れみの視線を浴びせた。が、すぐにキツと男を睨みつける。

「美しくない……美しくないわ貴方……っ！　せめて散る時くらい……美しく散りなさいっ！」

女性はそう言うと、男の足元の血へと手を当てる。すると、男の足元で水溜りを作っていた血が、まるで意思を持っているかのように動きだし　細く鋭い刃となって男の腹部を指した。

「アアツ！」

血の刃は男の腹部を貫き、その向こう側へと到達する。その衝撃で、男の身体は後ろへ反った。しかし、間髪入れずに背後から伸びた血の刃が、男の背中を指す。今度はその衝撃で、男の身体は前のめりになる。そしてその次の瞬間には、右から、間髪入れずに左から　前後左右から交互に血の刃が男の身体を貫く。

貫かれる旅に身体を反らすその姿は　さながら舞踊の如き姿だった。

既に男は絶命しているらしく、叫び声をもう上げなかった。

「汚い舞ね。所詮、貴方には美しさなど欠片もないようだわ」

呟き、女性が男へ背を向けると、血の刃は全て元の血液へと戻り、

地面へ滴り落ちる

と同時に、男はその場にドサリと倒れた。

その衝撃で、音を立てて血が数滴跳ねた。

伊織と出会った次の日の午前。伊織と出会った喫茶店へと歩いて行く。周囲では、昨夜この町のどこかで惨殺死体が放置されていたことばかり話している。近くを、武装したこの町の自警団らしき人達が、警備のためかウロウロしていた。そんな中、辺りを見回しても伊織らしき姿は見当たらない。

「ここに来れば会えるなんて、流石に虫が良過ぎるか……」

伊織のおかげで回復し、既にギプスを外している右腕を見つめつつ呟き、青蘭は嘆息する。

同じ場所に伊織が何度も現れるとは限らないし、この町にいつまで滞在しているのかもわからない……。そう言えば、あの時は会話らしい会話をあまりしていなかった。もっと伊織と、東国での日々について語り合いたかったし、今の仲間達　　チリー達のことも伊織に紹介したい。

伊織が生きている。

その事実が、復讐に囚われ苦しんでいた青蘭の心を、幾らか楽にしてくれていた。

「あ……」

短く声を上げ、青蘭は喫茶店の前でピタリと足を止めた。

喫茶店の前、一人の少女が壁に寄り掛かかり、しきりに辺りを見回している。まるで誰かを捜しているかのようにも見えた。

少女は青蘭が見ていることに気付き、視線を青蘭へと移すと、途端に表情を笑顔に変えた。

「伊織……」

伊織だった。伊織は青蘭に気が付き、すぐにこちらへと駆け寄って来る。

「青蘭君！」

伊織はすぐに青蘭の目の前まで来ると、上目遣いに青蘭を見、ニコリと微笑んだ。

自分の胸元くらいまでの身長の彼女が、すぐ傍でこちらを上目遣いに見ている。その事実が付き、青蘭は妙な恥ずかしさを感じた。

「い、伊織……どうしてここに？」

青蘭が問うと、流石に距離が近過ぎたことに気付いたのか、数歩下がってもう一度青蘭へ微笑んだ。

「昨日はちゃんと話せなかったから……今日またここに来れば、青蘭君にもう一度会えるかなって」

「……そっか」

そう言っつて、青蘭も微笑む。自分も同じ理由でこの喫茶店へ向かっていたなどは、恥ずかしくてとても言えない。

「今日は時間あるし、色々話そうよ」

そう言っつてそっと。伊織は俺の手を握った。

「え……」

青蘭が間の抜けた声を上げたことなど気にも留めず、伊織は青蘭の手を引っ張り、喫茶店の中へと入ろうとした。その時だった。

「伊織ちゃん！」

突如、二人の後ろから男の音がする。二人が振り返ると、そこには二人を凝視する一人の男がいた。

「み……光秀さん……」

呟き、伊織はやってしまったと言わんばかりの表情で嘆息する。

「お前……そこで伊織ちゃんと何してる？」

腰には刀。髪は後ろで一つに結われており、口元には無精髭が蓄えられている。

「ま、まさか……」

男を凝視し、青蘭は驚嘆の声を上げる。が、男はそれを気にも留

めず、青蘭の方を睨みつけている。

「たぶらかしやがったのか……伊織ちゃんを……ッ」

「ちよっと待ってよ光秀さん！ それは勘違」

伊織が言い終わらない内に、光秀は腰の刀へと手をかける。

「ぶっ殺す」

低く、男が言い放った。

ぶつ殺す。男の放ったその言葉からは、明確な殺意が感じ取られた。

「斬るぞ……」

ゆっくりと。鞘から刀が抜き放たれた。鞘から解放された刀は、日の光を浴び、刀身をキラリと光らせた。

「光秀さん！ やめて！」

伊織の声も、光秀と呼ばれたその男には届いていなかった。刀を構え、青蘭をギロリと睨みつけている。

一步、光秀が踏み出す。

来る！

そう判断し、青蘭は素早く身構えた。

「伊織、離れてて！」

不安そうに青蘭と光秀を交互に見る伊織を、自分の後ろへ追いやり、青蘭は光秀へと視線を戻す。

「伊織ちゃんに……触ってんじゃねえッ」

叫び、光秀は一気に青蘭との距離を詰め 一閃。青蘭目掛けて刀を横に振った。

「誤解です！ 俺は別に伊織をたぶらかしてなんか……」

バックステップで光秀の刀を避け、何とか弁解しようとするが、光秀は青蘭の言葉に一切耳を貸そうとしない。話し合っどころか、更に青蘭との距離を詰める。

この光秀という男、強い。

直感的にそう判断し、青蘭は神力を発動させる。身体の内側から力が沸いて来る感覚……。

光秀が、刀を青蘭の右肩目掛けて振り降ろす。青蘭は素早く状態を反らし、光秀の刀を避ける。そして横から、刀を持つ光秀の両手を、刀の柄ごと掴む。

「やめて下さい！」

光秀は青蘭の言葉には答えず、舌打ちするとすぐに青蘭の手を振り払い、青蘭から数歩距離を取る。

「神力使いか……」

ボソリと呟き、光秀は刀を鞘に収める。

一瞬、光秀が誤解していることに気が付き、武器を収めてくれたのかと青蘭は思ったが……どうやらそうじゃないようだ。

光秀は、先程から絶えず青蘭へ殺気を放っている。それに、刀を鞘に収めただけで、光秀はまだ構えを解いていない。

「なら、遠慮はいらねえな……！」

ギョツと。光秀が刀の柄を強く握った。その時だった。

「美しくないわ。光秀、やめなさい」

透き通るような、女性の声が辺りに響いた。瞬間、青蘭達どころか周囲に集まりつつあった野次馬達ですら、その声のした方向へと視線を一斉に移した。

「……麗」

彼女を見、ボソリと光秀が呟く。

そこにいたのはおかつぱ頭の、美しい女性だった。柄や色は違えど、伊織と同じような服装をしている。

麗と呼ばれた彼女は光秀を一瞥し、嘆息した後に青蘭へと視線を移すと、青蘭達の方へゆっくりと歩み寄って来る。

「伊織、彼は？」

「え、えと……この間話してた、青蘭君」

不意に麗に問われ、慌てて伊織は答える。

「そう。貴方が青蘭……。白蘭の弟さんね」

「ッ!?」

麗が口にした名前。白蘭という名前に、青蘭は動揺を隠せなかった。だがそんな青蘭の様子を、気に留める様子もなく、麗は

言葉を続ける。

「私は麗。もうわかっていているとは思っけれど、貴方と同じ東国の生き残りよ」

そう言い、麗はよろしくね、と青蘭へ右手を差し出した。

「こ、こちらこそ……」

表情に同様の色を見せつつも、青蘭はそつと麗の手を握る。

「光秀。いい加減青蘭へ殺気を放つのはやめなさい。往生際が悪いわね……美しくないわ」

そう言い、麗が光秀を睨みつけると、渋々光秀は構えを解き、麗の元へと歩み寄って来る。

「青蘭、単刀直入に言うわ。貴方、私達の仲間になりなさい」

視線を青蘭に据え、麗は言い放つ。

「お、おいマジかよ麗！　いくら生き残りとは言え、そんな得体の知れない奴を」

「光秀さんだつて、元々得体の知れないおっさんだつたじゃない！　そう言い放ち、伊織はプイツと光秀から視線を逸らす。

「そりゃないぜ伊織ちゃん……俺あまだおっさんつて歳じゃ……」
「で、どうなの？　青蘭」

光秀の言葉を遮るように、麗は青蘭へ問うた。

「……待ってくれ。話が急過ぎる。俺にだつて色々事情はあるし、何を目的として麗さんが俺を必要とするのかわからない」

青蘭の言葉に、麗はそれもそうね、と呟く。

「丁度良いわ。その喫茶店で話しましょう」

麗の提案に、一同はコクリと頷き、喫茶店の中へと入って行った。

喫茶店内は、それなりに人が多く、二人以上が一緒に座れる席は既に空いていなかった。

仕方なく四人は二人ずつ座ることにし、青蘭は麗と、伊織は光秀と同席する。伊織を見つめ、終始ニヤニヤしている光秀を麗がギリと睨むと、睨むなよ、と光秀は肩をすくめて見せた。

「美しくないわ。慎みなさい」

言い放ち、麗は静かにコップの水を一口飲んだ。

「……それで、麗さんの……いや、麗さん達の目的は？」

「赤石」

ボソリと。呟くように麗が呟く。

「ッ!?」

赤石、その単語に、青蘭は動揺を隠し切れなかった。

「そう、知っているのね。なら話が早いわ」

そう言っただけ微笑し、麗は口元で両手を組み、青蘭の目を真っ直ぐに見つめた。

「赤石の力で、東国を浄化する」

一瞬、麗の言葉が把握できず、青蘭は動きを数刻止めた。

「東国の……浄化……？」

青蘭の問いに、麗はコクリと頷く。

「ゲルビアの爆撃で、地獄と化した東国の地を浄化し、東国を再興する。そしてハーデンへの復讐を遂げる……それが私達の目的」

東国の再興。あの地獄と化した東国を、赤石の力で再興しようと言っただけか。

ゴクリと。青蘭は唾を飲み込む。

この麗という女性、これ程大それたことを平然と……まるでそれが可能であるかのように口にする。

「赤石の強大な力を聖杯で利用すれば、汚染された東国の地を浄化することは不可能ではないわ。後は人材を集め、私達の手で故郷を……東国を再興する」

今まで、考えてみたこともなかった。ただハーデンへの復讐を考

え、これまで旅を続けていた。その途中でチリー達と出会い、テイテスの事情に巻き込まれつつあった。ゲルビアの陰謀が関わっている限り、最終的にハーデンに行きつくだろうと高をくくり、このままチリー達とテイテスのために赤石を探す　　それでも良いと思っていた。

だが、本来の目的は何だ？

「どうなの青蘭。私達と、協力する気はあるのかしら？」

青蘭を真っ直ぐに見据え、麗は問うた。

「俺は……」

旅を続ける理由は　　ハーデンへの復讐。テイテスのためではない。

赤石の力で、東国の再興が出来るのなら、テイテスのためではなく……。

そこまで考え、青蘭は小さくかぶりを振った。

「……もう少し考えさせてくれ。明日までには、答えを出す」

「そう……。なら明日の正午、この喫茶店で待ってるわ」

「……ああ」

短く答え、青蘭は席を立ち、喫茶店を後にした。

ガチャリと。部屋のドアを開く。

「お帰り」

中に入った青蘭を見、ニシルが微笑む。それに青蘭はただいまと答え、いつものようにベッドの上へ腰掛ける。

「だぁーッ！　勝てねえ！」

突如、チリーが机を勢いよく叩く。その音に驚き、青蘭は机の上へと視線を移す。

机の上にはチェス盤と駒が置かれており、チリーとトレイズが向かい合うようにして座っていた。

「だからやめときなさいって言ったのに……。アンタじゃトレイズ

に勝てる訳ないでしょ」

そう言っただけでミラルが嘆息すると、チリーはうるせえと怒鳴りつけ、先程机を叩いたせいでバラバラになってしまっている駒を、チェス盤の上に並べ直す。

「……まだやるのか」

少し呆れた、といった様子でトレイズが問うと、チリーは当然、とぶっきらぼうに答えた。

「チリー、チェスはね。馬鹿向けのゲームじゃないんだ……」

チリーの肩へ手を置き、諭すようにそう言ったニシルの頭を、チリーは軽く小突く。

「だからって負けっ放しでいられるかよ！」

「何で僕が叩かれなきゃなんないんだよ!?!」

そう言っただけでニシルがチリーの頭を小突くと、負けじとチリーもやり返す。いつの間にか、二人の間で低次元な争いが始まってしまっていた。

そんな二人を一瞥し、青蘭、トレイズ、ミラルの三人はほぼ同時に嘆息する。

「ホント、やれやれね……」

そう言っただけで肩をすくめるミラルへ同意するかのようになり、青蘭は微笑する。

麗達に付いて行くと言うことは、彼らと離れなくてはならないという事だ。

チリー達を見つめ、青蘭はそんなことを考える。

ハーデンへの復讐、東国の再興、赤石の力、テイテスの危機、ゲルビアの陰謀……。

自分にとって本当に大切なのは、どれだ？

心の内で自問したが、答えを出すことを躊躇っている自分がいた。

三人の幼い子供が、森の中をずんずんと進んで行く。一際背の高い少年を先頭に、その後ろを二人の少女が付いて行く。

「どこへ行くの?」

栗色の、長い髪をした少女が問う。すると少年は振り向き、得意気に内緒、と答えた。

「そろそろ教えてくれても良いじゃない」

そう言ったのは、黒髪の少女だった。

「……もうすぐ着くよ」

しばらく歩くと、少年がピタリと足を止めた。

「どうしたの?」

黒髪の少女が問うと、少年は振り向き、ニツと笑った。

「着いたよ」

そう言って少年は数歩前に進む。

「……うわぁ」

栗色の髪の少女は、目の前に広がる光景を見た途端、感嘆の声を上げた。

「綺麗……」

黒髪の少女も、その光景に見惚れている。

「すごいだろ。兄さんに教えてもらった……俺と兄さんの、特別な場所」

そこにあるのは、小さな湖だった。木漏れ日が水面に反射し、美しく輝いている。周囲では鳥がさえずり、湖では優雅に魚達が泳いでいる。

「俺達と兄さんの……四人だけの秘密の場所だ」

そう言って少年が微笑むと、二人の少女も釣られて微笑む。

少年は思う。ずっとこのまま、こうしていたい。この美しい空間で、みんなと過ごしていたいと……。

そこで、映像はプツリと途切れた。

ゆっくりと。思い瞼をこじ開けると、最初に視界へ入ったのは天井だった。

「……夢、か」

随分と懐かしい夢を見たものだ。もう何年も前の映像だ。目をゴシゴシと擦り、青蘭はゆっくりと身体を起こす。

「あ、おはよう」

青蘭に気付き、そう声をかけたのはミラルだった。起床した彼女は、どうやらいつもの如くこちらの部屋へ来ていたらしい。

チリーとニシルはまだ気持ち良さそうに眠っていたが、トレイズは既に起床しており、腕を組んだまま黙っている。

「さつきトレイズと話してただけだね、テイテス行きの船へは、今日乗ろうと思うの」

「……え？」

確認するように青蘭がトレイズの方へ視線を移すと、トレイズは小さく頷く。

「青蘭がこれからどうするか聞こうと思うんだけど……先にチリー達を起こすわ」

そう言っミラルは、青蘭の隣で眠っているチリーを揺さぶる。

「いい加減起きなさい」

「お、おう……」

ミラルに揺さぶられ、何とか起きたらしく、チリーは眠そうに返事をする。チリーが起きたのを確認すると、ミラルはすぐにトレイズの隣で寝ているニシルの元へと歩いて行く。

「ニシル。起きなさい」

揺さぶると、ニシルは眠そうにうん、と唸っている。

「チリー……それは無理だよ……そんなに大きいの……入らないよ

……」

謎の寝言だった。

「……………えっ!？ ちょっとアンタ……………どんな夢を……………!」
ニシルの寝言を聞いた途端ミラルは赤面し、きゃーきゃーと騒ぎ始めた。

チリーは眠そうな顔でボーっとしており、青蘭とトレイズは騒いでいるミラルを見て嘆息している。

「だから……………入らないって……………バッグの中に、その荷物は入らないしんと。部屋の中に静寂が訪れる。ミラルはピタリと動きを止め、ニシルを凝視している。

やがて、ミラルはコホンと小さく咳払いをすると、再びニシルを起こし始めた。

チリーとニシルが起床し、まともな思考が出来る程に覚醒したのを確認すると、ミラルは改めて今日テイテスへ出発することを話した。

驚きはしたが、二人共納得し、今日中にテイテスへ向かうことを承諾した。

「それで、青蘭はどうすんだよ?」

「俺は……………」

このままチリー達と行くのか、麗達と行くのか。すぐには答えられず、青蘭は口を結んだ。

「青蘭?」

不思議そうに、うつむいて考え込む青蘭の顔をミラルが覗き込む。

「……………昨日、伊織にもう一度会ったんだ」

「伊織って、この間も言ってた幼馴染の?」

ニシルが問うと、青蘭はコクリと頷く。

「そしてその時に、麗って人にもあったんだ。多分、チリー達のことだ人は麗さんのことだ」

「……………それで、何か言われたのか?」

静かに、トレイズが問うと、青蘭はコクリと頷いた。

私達の仲間になりなさい。

麗の言葉が、青蘭の脳裏を過る。

「東国を再興し、ハーデンへの復讐を遂げるため、麗さん達の仲間になってくれて……言われたんだ」

「っ!?!」

青蘭のその言葉に、一同は息を飲んで青蘭の方を凝視する。

「赤石を見つけ出し、赤石の力で東国を再興するって……そう言われたんだ」

「赤石って……僕達が探しているのと同じ物？」

恐る恐るニシルが問うと、青蘭は答えにくそうに頷いた。

正直に言えば、麗と行動を共にしたい。伊織や麗と共に赤石を見つけ出し、東国再興のために全力を尽くしたい。

青蘭自身の願いは、ハーデンへの復讐と……東国の再興。テイテスのために赤石を求めるチリー達とは、根本から目的が違うのだ。だが、だからと言って、こんな所で彼らを裏切るような真似を、青蘭はする気にはなれない。

自分にとって本当に大切なのは、どれだ？

答えは

「何考えてんだよ」

不意に、先程まで腕を組んで黙って聞いていたチリーが口を開く。

「チリー……」

「良いか、よく聞いとけよ青蘭」

そう言って、チリーは青蘭を真っ直ぐに見据えた。曇りのない、真っ直ぐな目。

「んなモン、迷うまでもねえ。お前にとって大切なのは東国だろうが」

ピシヤリと。チリーは言い放った。

想定外。後ろから思い切り不意打ちを喰らわされたような気分だった。

「迷ってんじゃねえよ。お前がどっちを選ぼうが、俺達はそれを肯定する」

「そうだよな？ と、確認を取るようにチリーが問いかけると、ニシルとトレイズはコクリと頷く。ミラルは何か言いたげだったが、やがて観念したのか、小さく頷いた。

「私は、出来れば青蘭には行ってほしくない。だけど……こういうのは青蘭自身の意志が、一番大事だと思う」

そう言って、ミラルは寂しげに微笑んだ。

「……良いのか？ 麗さんの目的は赤石だ。敵対することに……なるかも知れない」

沈んだ表情で青蘭がそう言っていると、チリーはニツと笑った。

「構うかよ。もしそうだったら、そんな時の俺達は、ライバルだ」

「チリー……」

だから、気にすんなと、チリーは青蘭の背中を軽く叩いた。まるで、躊躇っている青蘭を後押しするかのように……。

「お前は、お前の道を行け。無理に俺達に付き合う必要はない」
今まで黙っていたトレイズが、静かにそう告げる。

「後で僕達と行けば良かった……って後悔しても遅いからね」

ニヤリと笑い、そう言ったニシルを見、青蘭は微笑する。

「みんな……ありがとう」

噛み締めるように、青蘭はそう言った。

その日の夕方。ヘルテユラの港から、出港して行く船を、青蘭は見送っていた。

チリー達を乗せ、テイテスへと向かう、船。もしかすると、自分も一緒に乗っていたかも知れない船。

ほんのわずかとも思える時間だったが、確かに青蘭と彼らは「仲間」だった。否、今もそれは変わらない。

「本当に、これで良かったの？」

不安そうに、隣で伊織が問うた。

「……ああ。これで良い」

まるで自分に言い聞かせるかのように、青蘭は答えた。

「別れの言葉は、言わなかったの？」

麗の問いに、コクリと青蘭は頷いた。

「何だつてわざわざ、出港してから見送りに来るんだよ？」

光秀の問いには答えず、青蘭はただ進んで行く船を見つめる。

名残惜しくないと言えば、嘘になる。

だが、これ以上迷う訳にはいかない。もう一度彼らの姿を見れば、また迷いが生まれるかも知れない。彼らと共に旅を続けていたい。

そんな思いも、確かに青蘭の中には存在するからだ。

「……青蘭君、泣いてるの？」

「……かもな」

伊織に言われて初めて気付いた。自分の頬を、涙が濡らしていること。

「泣いてんじゃねえかよ。ホントにこれで良いのか？」

光秀の問いに、青蘭は小さく頷いた。

「これで……良いんだ」

そう言つて、青蘭は船へ背を向けた。振り払うように。

「麗さん！」

もう、迷わない。

ハーデンへの復讐、東国の再興。それが青蘭の目的。これ以上の迷いは、許されない。否、許してはいけない。

「これから　　よろしくお願ひします！」

「ええ、よろしく」

小さく息を吐き、麗は静かにそう答えた。

episode 34 「Native place」

懐かしい景色だった。この港も、そこから見渡すことの出来る市場も。全てが懐かしく思えた。

トランクケースを引きずりながら歩いていた足を、ピタリと止めると、チリーはグツとのびをした。

「着いたな……テイテス！」

故郷　　テイテス。地面が、空気が、景色が、空でさえもが懐かしい。

テイテスを出てから二ヶ月程度、テイテスから離れていた時間はその程度だと言うのに、随分と懐かしく感じた。

「懐かしいね……。まさかこんな形で帰って来ることになるとは思わなかったけど」

そう言つて、ニシルは苦笑した。

「ホント……懐かしい。みんな元気かなあ……」

辺りをキョロキョロと見回しながら、ミラルは嬉しそうにそう言う。

トレイズは、何も言いこそしないが、どこか懐かしそうに辺りを見回している。

そう、彼らはテイテスへと帰つて来たのだ。

ヘルテユラで青蘭と別れ、旅の資金不足を解決するために、チリー達は旅を中断してテイテスへ一度戻ることを決めた。

悲しむ姿を見せなくなかったのか、それとも見なくなかったのか、青蘭はチリー達の見送りには現れなかった。

「ホントに、青蘭と別れて良かったのかな……」

城へ向かいながら、寂しげにミラルが呟くと、チリーは静かに、あれで良いと答えた。

「青蘭の目的は、俺達と一緒に旅することでも、テイテスのために赤石を探し出すことでもない。アイツは、アイツの目的を果たせば良いんだ……」

口ではそう言っているが、チリーの表情はどこか寂しげだった。

「とにかく、今はアグライさんのところに行こうよ。テイテスには時間がないんだよね?」

ニシルが問うと、トレイズは小さく頷く。

「ああ。少しでも早く赤石を手に入れなければ……」

嘆息し、トレイズは歩を早めた。それに合わせて、他の三人も同じように歩を早めた。

ヘルテュラから出発する際、事前にアグライへ連絡を入れていたため、チリー達はすぐに城の中へと案内された。

昼食がまだだったため、案内されている途中で、ミラルが止めるのも聞かずにチリーが、腹減った! と訴えたところ、チリー達はすぐに食堂へと案内された。

食堂へ入ると、長い机の一番奥に、アグライが座っていた。どうやらどの道食堂へ案内するつもりだったらしい。

「……話は聞いている。四人共座りなさい」

アグライに言われた通り、四人は順番に席へと着いて行く。

「ただいま。アグライさん」

ニシルがそう言うと、他の三人も同じようにアグライへ挨拶をする。すると、アグライはニコリと微笑んだ。

「ああ、お帰り」

それから数分すると、チリー達の元へ料理が運ばれて来た。トレイズはともかく、他の三人からすれば。今まで見たこともないような豪華な料理が目の前に並べられていく。

食欲をそそる料理の数々に、チリーは幸せそうに目を輝かせている。ニシルもニシルで、平静を装ってはいるが、その料理の豪華さ

には歓喜の色を隠せない。

「おいしそうね……」

ミラルはそう呟き、料理をジッと見つめる。

初めて見るような料理のハズなのに、何故か驚きを感じない。

自分の感情に違和感を覚えたが、大して気にすることもないだろうと高をくくり、このことについては自分の中で深く追求しないことにした。

「さあ、旅の後に疲れているだろう。ゆっくりと食べなさい」

「よっしゃ！ いただきます！」

歓声を上げ、ナイフとフォークを手に取ると、チリーはすぐに料理へ手を付けた。

食べ始めて数十分。ゆっくりと食べるミラルとトレイズを見つめつつ、チリーとニシルは不満の声を漏らしていた。

「早く食べるよー」

「僕達暇なんですけどー」

食べ始めてから数分で食べ終えた二人は、退屈そうに声を上げるが、トレイズはそんな二人に一切取り合おうとしない。それどころか、更に丁寧な食べているようにも見える。

「アンタ達の行儀が悪過ぎるのよ！ こういう料理は味わって、丁寧に食べなさいよ！」

「親父は『誰よりも早く、誰よりも多く！』っていつも言ってたぜ？」

得意気に、チリーがそう言うと、その正面でニシルがうんうんと頷く。

「……キリトさん……」

そう呟いて嘆息するミラルを見、アグライはクスリと笑った。

「まあ二人共、少し辛抱しなさい」

更に経つこと数分。やっとのことでミラルとトレイズは食べ終えた。二人が食べ終えたのを確認し、アグライがコホンと咳払いをすると、後ろで控えていた召使い達が、すぐにチリー達の食器を片づけていく。

「連絡の際に大抵のことは聞いているが、王はまだ見つからないのだね？」

不意に、アグライが問う。

「……いや、既に見つかっている」

「ッ！」

トレイズの言葉に、アグライが表情に驚愕の色を見せる。と、同時にチリーが勢いよく机を叩いた。

「おいトレイズ！ 伏せとくつつたのはお前じゃねえか！」

「いや、やはりアグライにだけは話しておくべきだろう。赤石の件も説明しなければならぬしな」

静かにそう答え、トレイズはヘルテュラでの出来事を、包み隠さずアグライへ話した。

アレクサンダーの死を聞いた時、アグライはまるでこの世の終わりかのような表情を見せたが、しばらくすると落ち着きを取り戻した。

「それで、赤石が必要なのか……」

コクリと。アグライの言葉に四人は頷く。

「実は、これから『核』について話そうと思っていたところだ。君達の言う通り、テイテスの『核』は破壊されている」

「そもそも、『核』って何なんですか？」

「良い質問だ。元々、私は破壊された『核』について説明しようと思っていた」

ミラルの問いに、アグライはそう答えると、そのまま説明を始めた。

数百年前、「赤い雨」と呼ばれる現象が、アルモニア大陸ほぼ全土で起こった。

大陸全土に降り注いだ「赤い雨」、もしくは「神の雨」と呼ばれる謎の赤い液体は、幾つもの不可思議な現象を引き起こした。

そして、「赤い雨」を浴びた者の内大半が、不可思議な能力を手にした。

人はその能力を神の力 「神力」と呼んだ。

そして、「赤い雨」の水滴は、一部結晶となり、個体として残った物が存在する。それが 赤石。膨大な量の神力を宿した、赤い石。

「その『赤い雨』ってのを浴びた者の遺伝子……それを受け継いでるのが、僕ら神力使いつてこと？」

ニシルが問うと、アグライはその通りだ、と頷く。

「そして赤石は神力の塊……か」

ボソリと。呟くようにトレイズは言う、この話と「核」の関連性は？ とアグライへ問うた。

「『核』は、結晶化した『赤い雨』の中でも比較的小型の、小赤石こせきせきから生成されている。『核』とは、小赤石をテイテスの初代王の神力によって変質させたものなのだ」

なるほどな。と、トレイズは呟く。

確かにそれが事実なら、アレクサンダーの言っていたことにも納得がいく。それなら、赤石を「核」の代用品としてしようすることは可能だ。

「でも、小赤石を『核』に変質させたのは、初代王の神力でしょ？ 赤石だけ手に入れても僕らじゃどうにも出来ないじゃん」

「いや、詳しくは知らんが、聖杯せいはいと呼ばれる赤石を受け入れるための器が存在する。聖杯は、赤石を自在に変質させることが出来る。お前達は、赤石を探すと同時に聖杯をも探さねばならない」

重々しく、アグライは告げた。

赤石の成り立ちなどについては、あまり把握出来ていない様子だったチリーだが、赤石と聖杯の二つを同時に探さねばならない、というのは理解出来たらしく、険しい表情でアグライの話を聞いていた。

「アグライ、テイテスが崩壊するまで後どれくらいだ？」

「長く見て……一年後だろう」

アレクサンダーと、同じ見積もりだった。

「赤石の在処について、何か知っていることはないんですか？」

ミラルが問うと、アグライは考え込むような仕草を見せた。

「私自身は知らないが、知っていそうな人物なら知っている」

「ホントか!？」

チリーの問いにコクリと頷き、アグライはゆっくり腰を上げ、立ち上がった。

「着いて来なさい」

そう言っ、アグライはゆっくりと歩き出した。四人は立ち上がり、先を歩いて行くアグライの後を歩いて行く。

アグライが向かった場所は、城の図書室だった。図書室に到着すると、アグライはゆっくりとドアを開き、中へと入って行く。

「赤石に関する本でもあるの？」

ニシルの問いに、アグライは微笑する。

「確かに、この図書館にはそんな本もあるかも知れないが、私がここへ君達を連れてきたのは、『知識の塊』へ赤石について聞くためだよ」

知識の塊？ 怪訝そうな顔をする四人に説明をせず、アグライはただゆっくりと図書室の中を歩いて行く。

「うわ、何だこれ……」

図書室の一角に、本の塊があった。様々な種類の本が無造作に積

まれ、一つの山を形成している。

「カンバー。出て来なさい」

その山へ向かって、アグライはそう言う山の方へと歩み寄り、本を少しずつどかしていく。まるで穴を掘っているかのようだった。

「まさかその中に……人が？」

ミラルが問うと同時に、本の山から人間の足が見えた。その光景に、一瞬ミラルは肩をびくつかせる。

「本は片付けるといつも言っているだろう」

呆れたようにアグライがそう言ったと同時に、本の山から人間の顔が覗く。

「すいません。後もう少しで、この図書室の本を読破出来そうなんですよ」

そう言って、本の山から現れた男は微笑んだ。

本の山から人間が顔を出す。このちよつと不思議な状況に、アグライを除く四人は呆気に取られた様子だった。

そんな彼らの様子も気にも留めず、顔を出した男 アグライにカンバーと呼ばれた男は、再び本の方へと視線を戻し、ひたすら読んでいる。

そんな彼の様子に、アグライは嘆息する。

「カンバー。客だ。読書を止めなさい」

「……」

「カンバー！」

ビクンと。アグライが怒鳴りつけると同時に、カンバーが肩をびくつかせる。

「お前に客が来た。読書を一旦止めなさい」

「……了解です」

カンバーはそう答えると、渋々持っていた本を、自分の真横に積んである本の上に置き、ゆっくりと立ち上がった。すると、彼の後ろで音を立てて本の山が崩れていく。

細身の、小柄な男だった。ニシル程ではないが、一般的な男性としては低めの身長で、全体的に細かった。しかし、痩せていて細いと言っよりは、しばらく何も食べていなくてやつれている……そんな様子だった。手入れしていないのか、短い髪はボサボサになっており、カンバーはそんな頭をポリポリとかき、眼鏡の位置を人差し指でクイクイと直した。

「ああ、初めまして。カンバーです」

カンバーがペコリと一礼すると、一同も頭を下げる。その後、四人は順番にカンバーへ簡単な自己紹介をした。

どうやらカンバーは全員の名前を知っているらしく、誰が自己紹介をしてもああ、貴方ですか、と言いたげな表情で頷いていた。

「国民名簿も読書の一環で読破してしまいました……。大抵の名前は覚えていますよ」

そう言っただけカンバーはニコリと微笑んだ。

「……変な奴だな」

「よく言われます」

苦笑するチリーに、カンバーはニコリと微笑む。

「それで、俺に用事があるんですね？」

カンバーの問いに、一同はコクリと頷く。

「赤石の場所を知っていると聞いてな」

腕を組み、低くトレイズがそう言っただけ、カンバーはしばらく考え込むような素振りを見せたが、すぐにああ、赤石ですか、と納得したように両手を叩いた。

「ええ、知ってます。正確には俺の友人が」

「ッ!?」

それぞれに、表情へ驚愕の色を見せる一同を見、カンバーは微笑んだ。

「世界大半を占めるとは言え、大陸はアルモニアだけではない……ということとはご存じですね？」

カンバーの問いに、チリー以外はコクリと頷く。唯一チリーだけは、マジで!? と驚嘆の声を上げていたが、説明するのが面倒らしく、誰もそれには反応を示さなかった。

「赤石は、他の大陸にあるってことですか？」

ミラルがそう問うたが、カンバーは首を横に振る。

「いえ、そうとは限りません。あくまで、赤石の場所を知っている人間が他の大陸にいるだけです」

「ふむ。お前にそんな友人がいたとは……初耳だぞ」

呆れたように、アグライが嘆息する。

「すいません。まさか『核』が破壊されるなんて思ってもいませんでしたから……。赤石の話は、必要ないかなと思ひまして」

「馬鹿者。そういう話は必要、不必要以前の問題だ。それに、『核』

と赤石はほぼ同一の存在……テイテスに関係あるに決まっているだろう」

「でも俺、『核』が小赤石だなんて最近聞きましたし、普通島が『核』で出来てるだなんて思わないじゃないですか。知らなかったんだから仕方ないです」

「うむう……」

小さく声を上げ、アグライは口籠る。そんなアグライの様子に苦笑しつつ、カンバーは話を続ける。

「俺の友人　つまり、赤石の場所を知る人間は、テイテスからは随分と遠い位置になりますが、イレオーネ大陸にいます」

「……イレオーネかあ……」

感慨深げに呟いたニシルに、ミラルは何かあるの？ と問うた。

「別に。何もないよ。言ってみただけ」

「アンタね……」

小さく溜息を吐き、ミラルは呆れた様子でニシルを一瞥する。

「イレオーネか……。確かに遠いな」

トレイズはそう呟き、嘆息する。話についていけないらしく、チリーはぶすつとした表情で本の山を眺めつつ、何だよイレオーネって知るかよばーかななどとボソボソ呟いている。

「チリーが拗ねた……」

「拗ねてねえ！」

そう答え、ニヤニヤ笑うニシルの頭をチリーは小突く。後はいつもと同じ流れで、二人の小突き合いが始まった。

そんな彼らを見、アグライは嘆息する。

「イレオーネ大陸か。どうするんだ？」

アグライが問いかけると、チリーとニシルはピタリと小突き合いをやめる。

「そんなの、聞くまでもないでしょ」

そう言っただけでニシルが、ね？ とチリーの方へ視線を移す。

「当然だ。イレオーネ大陸上等！ どこだか知らねえけど、そこに

赤石の手がかりがあるんだろ？ だったら何を迷う必要があるんだよ」

行くしかねえよな？ そう問うたチリーに、一同はコクリと頷く。「でも、イレオーネに行くなら、かなりの時間がかかるハズよ。船に乗るお金だつて馬鹿にならないし……」

「いや、その件については私に考えがある。任せなさい」

そう言つて、アグライは微笑した。

「カンバー、少し休暇を取れ。というかお前はいつも休暇みたいなものだが……」

「……クビ、ですか？」

恐る恐るカンバーが問うと、アグライは小さく首を横に振った。

「いいや、ただの休暇だ。図書室の管理は他の者に任せる、お前はイレオーネ大陸へ行け」

「イレオーネに……？」

カンバーが問うと、アグライはコクリと頷いた。

「そこにいるチリー達と共に、イレオーネ大陸へ……いや、赤石探しの旅へ行け」

「俺が、ですか？」

カンバーの問いに、アグライはそうだ、と小さく頷いた。

「イレオーネにいるのはお前の友人だろう？ どの国の……どの町にいるのかくらいはわかっているのか？」

「ええ、まあ……一応はわかります」

それなら尚更だ、とアグライは呟いた。

「チリー達だけでは、その友人の居場所はわかるまい。お前が同行し、彼らを案内してくれ。それに、図書室に籠り切りでは得意の体術も廃れるだろう？」

「まあ、それもそうなんですけど……」

カンバーは足元に散らばる本を一瞥し、逡巡するような表情を見せたが、すぐに諦めたように小さく頷き、嘆息した。

「……わかりました。同行しましょう」

「そうしてくれるか。助かる」

カンバーにそう答え、アグライはチリー達に異論はないな？と問うた。

「ああ」

アグライの問いに、チリー達はコクリと頷いた。

「それなら……決まりですね」

カンバーはそう呟くと、チリー達の元へゆつくりと歩み寄る。

「改めて自己紹介させていただきます。カンバーです」

「おう。よろしくな」

そう答え、チリーはそつと右手を差し出した。

カンバーはそれを見、ニコリと微笑むと、その右手を左手でゆつくりと掴んだ。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

握手を交わし、カンバーはもう一度ニコリと微笑んだ。

「ああ、カンバーさんみたいな頭の良い人が入ると、チリーの馬鹿さ加減が浮き彫りになっちゃう……ってもう遅いか」

「誰が馬鹿だ誰が！」

「お前だよお前」

怒声を上げるチリーを指差し、ニシルはクスクスと笑う。そんな二人の様子を見、アグライは本日何度目かもわからない溜息を吐いた。

「他の大陸すら知らない奴は、馬鹿以外の何者でもないよ」

「うるせえ！ あんま馬鹿馬鹿言っつとぶん殴るぞ！」

「暴力反対。この野蛮人めー」

「誰が野蛮人だこの小型人種チビ！」

「小型人種と書いてチビって読ますな！」

呆れた奴らだ、とトレイズは呟き、嘆息する。

「でも、楽しそうですね」

そう言っつて、カンバーはトレイズへ微笑んだ。それに釣られたのか、トレイズも微笑する。

「全くだ」

そんな会話を交わす二人をよそに、チリーとニシルは互いに罵り合っていた、低次元の域をまだ出てはいないのだが、そろそろ本気の喧嘩が始まりかねないので、ミラルが二人の間に割って入る。

「はいはいそこまで！ アンタら仲良くしなさいよね」

既に拳を握った右腕が、頭上まで上がっているチリーを何とか押さえ、ミラルはその場を何とか収める。

「とにかく、次の目的地は決まったな」

「コホンと咳払いし、アグライがそう言う。

「……だな」

未だに振り上げていた右腕を降ろし、チリーはそう答える。

「次の目的地は……」

そう言い、ミラルがその言葉の続きを求めるかのように、チリーの方へ視線を移す。その視線に気づき、チリーはニツと笑った。

「イレオーネ大陸だ！」

episode 36 「Your name - 1」

潮風が吹き、波の音が響く海岸の砂浜。そんな場所で、二人は戦っていた。

大剣を振るう少年はチリー、小振りなショートソードでチリーの
大剣を受け流しているのは、その父 キリト。

互いの剣が激しくぶつかり合い、波の音に混じって金属音を響かせている。

そんな二人の様子を、少し離れた場所で眺めながら、ミラルは微笑んでいた。

懐かしい。

昔……いや、本来なら昔と言う程古い話ではないのだが、何だかもう随分と昔のような気がする。

不意に、一際大きな金属音が辺りに鳴り響く。見ると、キリトのショートソードが空中で回転している。

「勝った！」

ニヤリと笑い、ショートソードが手から離れて狼狽しているキリトの眼前へ、チリーは素早く移動する。

「……俺の負け、か」

そう呟き、キリトは嘆息する。その表情はどこか満足気だったが、同時に悔しそうにも見えた。

「はい、そこまで！」

ミラルは足元に置いていたバスケットを抱え、チリーとキリトの元へと駆けて行く。

「おお、ミラル！ 見てたか今の！ 俺の勝ちだぜ！」

興奮気味の状態で、チリーはミラルに向かって親指を上へ突き立てた。そんなチリーの様子に、ミラルは微笑んだ。

「うん、おめでとう！」

そう言って、ミラルは抱えていたバスケットをチリーとキリトの

二人に見せた。

「ミラルちゃん、いつもすまないね」

「いえ、好きでやってるだけですから」

キリトにそう答え、ミラルはニコリと笑った。

いつもの大木の上、チリー達は三人で並んで座った。チリーはバスケットを見つめながら、今か今かと中身が取り出されるのを待っている。キリトは、そんなチリーの様子を呆れ顔で見ている。

「そんなに期待しないでよ。いつものサンドイッチなんだから……」
そう言って、ミラルはバスケットの中から二つ、サンドイッチを取り出すと、隣のチリーに手渡し、一つはキリトさんに渡して、と伝えた。チリーはサンドイッチを一つキリトに手渡すと、ミラルに向かつてニコリと微笑む。

「何言ってたんだよ。俺はその『いつものサンドイッチ』が食べたかったんだ。しばらく食ってねえしな」

そう言って、チリーは持っているサンドイッチにかぶりつく。

「おいしいんだから、もっと自信持って良いと思うぞ」

そう言って、キリトもゆっくりとサンドイッチをかじる。

「……ありがとう」

褒められ、ミラルは頬を赤らめると、嬉しそうにバスケットを抱き締めた。

サンドイッチを食べ切り、一息吐くと、キリトはそれにしても、と話を切り出した。

「チリー、お前随分と強くなったな……。見違えたぞ」

「まあな。もう親父には負けねえよ」

そう言って、チリーはニツと笑う。

「生意気なこと言いやがって……」

そう言って笑いながら、キリトは優しく、チリーの頭の上に右手を置いた。

「まあ、元々お前の身体能力だけは抜けてたからなあ……。お前に足りなかったのは、実戦経験だった。旅の中で、結構な数の死線をくぐり抜けてきたようだな」

言いつつ、キリトはゆっくりとチリーの頭をなでた。数秒なでられ、やがて恥ずかしくなったのか、チリーはキリトの右手を慌てて振り払う。

「ば、馬鹿親父！ 恥ずかしいだろーが！」

「親子だろ？」

キリトが微笑みかけると、チリーはそれもそうだが……。と呟き、やや頬を赤らめたまま少しだけ微笑んだ。

「そう言えば、ニシルはどこにいるの？」

不意に、ミラルが問う。

「さあ、一旦家には帰って来てたんだが、なんか『僕の出生の秘密を暴く！ じっちゃんの名にかけて！』とか訳わかんないこと言いながら出てったぜ」

じっちゃんの名にかけて！ と言うのはよくわからないが、出生の秘密……。ニシルは元々捨て子で、偶然見つけたチリーがキリトに伝えたところ、キリトが引き取って育てた。故に、キリトはニシルの實の親ではないし、チリーも兄弟という訳ではない。

それでも、二人は兄弟と大差ないと、ミラルは思う。喧嘩ばかりしているが、本当は誰より仲が良いことを、ミラルは知っている。そんな二人の関係が羨ましくて、ニシルをライバル視していた時期もあるくらいだ。と、そこまで考えてミラルは頬を赤らめた。

何で私がニシルをライバル視するのよ！ 何のライバルよ！

わかってはいても、素直には認められないのだ。

「チリー、お前達はいつまでここにいれるんだ？」

「アグライのおっさんが言うには、出発に準備が必要だから三日程

待ってくれよ」

赤石の在処を知るため、チリー達はイレオーネ大陸へ向かわねばならないのだが、イレオーネ大陸へ行くにはかなりの日数と資金がかかる。しかし、何やらアグライに考えがあるらしく、準備が必要なのでチリー達は三日程テイテスに滞在することになったのだ。

「カンバーさんはアグライさんの手伝いでしょ、トレイズは……どうしてるのかな」

「さあな。アイツのことだから心配ねえだろ」

チリーの言葉に、ミラルはそれもそうよね、と答えた。

島の中央に存在する森。中心にテイテスの「核」があるあの森の入口で、トレイズは一人立っていた。

木漏れ日が、物憂げな彼の表情を照らしている。

「王……」

思いだすのは、アレクサンダーの顔。テイテスの王であり、幼き日のトレイズを救った男。

あの日、自分が寄りかかっていた木の幹に触れ、嘆息する。今でも鮮明に思いだすことが出来る。あの時の虚無感、絶望感、濡れた木の幹から自分の服へとしみ込んで来る水。寒くて、冷たくて

寂しかった。

ゆつくりと、その木に寄りかかり、腰を下ろし、丁度あの日と同じ体勢になる。

上を見上げ、生い茂る葉の間から、太陽の光を見る。あの日とは正反対の天気だ。カラッと晴れていて、温かい。

大丈夫か？

思えば、安否を確認されたのはあの日が初めてだった。醜悪な両親によって傷付けられ続け、冷え切っていたトレイズの心に、温か

さを教えたあの言葉。

親が自分を産んだのは、単なる気まぐれだったらしい。大した意味もない、別に子供が欲しかった訳でもないのに、彼らはトレイズを生んだ。何故だか覚えている、生まれたての彼に向けられた視線は、冷めた視線だった。

物心ついた時には、既に疎まれていたのだとわかっていた。

「どうして子供なんか産んだ？ 面倒なだけだろう」

「折角貴方との間に出来たんだから、産んでみたくなっただけよ」
それだけの理由らしい。父はトレイズを見ればすぐに殴りつけたし、感情表現の下手なトレイズに、母が優しく接してくれたのは最初だけだった。

「何よこの子。折角私が遊んであげてるのに、表情一つ変えないわ。気味が悪い」

不器用なだけ、とは受け取ってくれなかった。次第に母までもがトレイズを邪魔者のように扱い始めた。

親と楽しそうに歩いている子供を見る度、嫉妬心で頭がどうにかなりそうだった。母に抱かれる子供、父とじゃれる子供、両親と手を繋いで幸せそうに帰路に着く子供。見れば見る程どうにかなりそうだった。

俺の前で、そんなに幸せそうに笑うな。

不意に怒りが込み上げ、一度だけ親と楽しそうに過ごす子供に、殴りかかったことがある。

悔しかった。

愛されていない自分と、愛されている他の子供。何だか無性に悔しくて、トレイズは殴りかかった。勿論向こうの親には怒られたし、両親にもこっ酷く叱られた。

「お前のせいで、俺が謝る羽目になっただろ！」

父はトレイズを怒鳴り、暴力を振るった。無駄だとわかりつつも、

母に助けを求めたが、母はトレイズを一瞥し、溜息を吐くばかりだった。

「何で産まれてきたのよ」

こっちが聞きたかった。どうして産んだのかと。

それからしばらくして、母が二人目の子を身籠った。父は産む必要はないと繰り返したが、母はこう言った。

「トレイズよりマシな子なら、どんな子でも良いわ」

母のそんな言葉に絶望を感じながらも、一つだけ希望があった。

これから産まれる弟、もしくは妹なら、自分を愛してくれるのでは、と。自分を兄と慕ってくれるのではないかと。

産まれてきたら、うんと優しくしてやろう。

母の腹部が大きくなる度に、トレイズはそんなことを考えていた。愛されないのなら、愛されるように愛を与えたい。せめて、これから産まれて来る子供にだけは。

それを支えに、必死で生きた。

何度も死にたいと考えたが、産まれて来る兄弟のため、必死で生きた。どんな言葉を浴びせられても、どんな暴力を振るわれても、必死で耐えた。

全ては 産まれて来る兄弟のため。

そうして待ち続け、産まれたのは弟だった。

嬉しかった。

自分を疎まない、唯一の肉親。

あまりに嬉しくて、ついつい母へ問うた。

「お母さん、その子の名前は？」

だが、母はトレイズの問いには答えたがらなかった。それどころか、心底嫌そうな顔でこう答えた。

「アンタには関係ない」

トレイズとその弟は、完全に隔離された状態で育てられた。父は弟に対しても酷かったが、母は弟だけは愛した。それが堪らなく悔しくて、何度も何度も壁や床を殴り付けた。

名も知らぬ弟は、兄をさしおいて母へ愛され続ける。愛そうと誓った弟に対して、トレイズは嫉妬心を抱いた。それでも自分に言い聞かせる。

弟は悪くない。

憎しみはなかった。あるのは、行き場のない嫉妬心。悔しくて悔しくて、仕方がなかった。

だが、弟が産まれてから数年後、母は病で倒れ、命を落とした。その頃には既に、トレイズは肉親に対して深く考えるのをやめた。

関係ない。あんな親、死んで当然だ。涙はこぼれない。

家には、トレイズと父、そして弟だけが残された。弟を愛していた母が消えたため、弟は子供を疎む父によって、ぞんざいに扱われた。

しかしそれでも、二人は隔離されたままだった。

そのまま数カ月が経ったある日のことだった。

その日は、豪雨だった。

その日、トレイズは父に頼み込んだ。

「弟に会わせてほしい。一度だけで良い」

無論、父はその要求を断った。それでもトレイズはしつこく食い下がった。弟に会わせてくれ、と。だが頼む度に父の機嫌は悪くなる一方だった。そして散々トレイズを殴った拳句、父はこう言った。

「元々俺にはどちらも必要ない！ お前らなど捨てる！」

母がいらない今、弟を守る者はいない。

弟も、捨てられる。

そう悟ったトレイズは、何とか阻止しようと父に頼み込んだ。だが父は一切聞かず、トレイズへ目隠しと猿轡を付け、抱え込んで手足を動けなくすると、雨の中外へ飛び出した。

ひたすらジタバタと暴れたが、父は止まらない。

そして、ドサリ。トレイズは放り投げられた。父の走り去る音。

慌ててトレイズは自由になった手で目隠しと猿轡を外したが、その

時には既に遅く、父の姿はなかった。

「とうとう、捨てられたか」

トレイズがいたのは森の入口。中に入っただけはいけないと、噂で聞いた森だった。この森に来るのは勿論初めてで、帰り方などわかるハズもなかった。傍の大木によりかかり、雲に覆われた空を見上げる。冷たい雨が、トレイズの顔を濡らした。

もう、どうでも良かった。このまま死ぬのも悪くないと、そう思ってしまった。

弟のことだけは気にかかるが、もうどうにもならない。父はどこからも捨てると言った。あの父が、同じ場所に弟を捨ててくれるハズがないし、そうするのならトレイズと一緒に連れて来たハズだ。

希望なんて、一つもない。あるのは絶望と虚無。濡れた大木の幹から、トレイズの服へと水が染み込んだ。

冷たい雨に、顔が濡らされる中、温かいしずくが、頬を流れた。

これから死ぬんだと思うと、涙が出てきた。

そんな時だった。

ピタリと。トレイズを濡らしていた雨が止んだ。否、雨粒が何かに遮られただけだ。

傘。トレイズを濡らしていた雨粒は、傘によって遮られた。

「王様、何をしてらっしゃるのですか？」

どこかから、老人の声が聞こえる。

傘の主は少し後ろを振り向くと、ちよつとな、と答えた。

すぐに傘の主はトレイズの方へ視線を戻し、こう問うた。

「大丈夫か？」

その瞬間、何故か涙が溢れた。

トレイズの目の前に立っていたのは、一人の男だった。

男はトレイズが泣いていることに気が付いたらしく、しばらくあたたふたとしていたが、後ろにいた初老の男と、何やら話し始めた。

どうせ、自分をどう処分するのか相談しているだけだろう。そう考えつつも、どこかで期待している自分がいた。

この人なら、自分を助けてくれるんじゃないか。何とかしてくれるんじゃないか。

そんな風に考える自分も、確かにいたのだ。

「……家はどこだ？ 連れてってやろう」

そう言って、男はトレイズへと手を差し伸べた。しかし、トレイズはその手を取らず、帰りたくない、と答えた。

絶対に帰りたくない。あんな家に帰るくらいなら、この場所で朽ち果ててしまう方がマシだ。トレイズはそう考えていた。

「ロベルト、出来れば連れて帰ってやりたいのだが……」

男が後ろにいる初老の男へ言うが、ロベルトと呼ばれた初老の男は首を横に振った。

やっぱり、駄目か。

自分はここで朽ち果てる運命なのだと、トレイズは悟った。最後に、優しい人間に会えただけでも、少しは良かったと言えるだろう。

「私はアレクサンダーだ。お前は？」

アレクサンダー……。それはこの国の王の名前だった。ただ同じ名前なのか、それともこの男が王なのか。トレイズにとってはどうでも良かった。

「トレイズ……」

呟くように答えると、アレクサンダーは屈み込み、トレイズへと背を向け、両手でトレイズを掴むと、その背中にトレイズを乗せた。

「王様……何を？」

ロベルトが、アレクサンダーへ問うた。

「トレイズ、君の家はどこだ？」

アレクサンダーの問いに、トレイズは答えず、首を横に振った。

「あの家に帰るくらいなら……死ぬ」

まあそう言うな、とアレクサンダーはトレイズへ微笑みかけた。

微笑みかけられた。この自分が、疎まれ続けた自分が、

微笑みかけられた。

その事実には驚愕し、トレイズはもう一度涙を流した。

「『帰りたくない』ということは、帰ることが出来る家があるということだな。教えてくれ、君の家はどこだ？」

気が付けば、トレイズはアレクサンダーに、家の場所も含めて全てを、包み隠さず話してしまっていた。

アレクサンダーはトレイズを背に乗せたまま、トレイズの家へと歩きつつ、時には相槌を打ちながら、トレイズの話の話を静かに聞いていた。

両親のこと、弟のこと、捨てられたこと……。

「トレイズ、いずれ正式に君の家へ案内を送るが、私の側近を決める選定試験がある。受けてみる気はあるか？」

側近……。その単語から察するに、やはりこの男は王なのだろう。アレクサンダー、テイテスの王。その側近を決める試験を、自分に受けると言っているのだろうか。

「それに合格すれば、私は君を正式に城へ招くことが出来る。城に住まわせることが出来るのだ」

「王様、流石にその年齢では……」

ロベルトの言葉には耳を傾けず、アレクサンダーは言葉を続ける。「試験の日まで必死に修行を積めば、合格することが出来るだろう。私にはわかる。何故なら君には、特別な力がある」

特別な力。何のことだろうか。皆目見当が付かないが、アレクサンダーが言うのだから真実なのだろう。

いつの間にか、アレクサンダーを心底信用し切ってしまった。

アレクサンダーはトレイズの家へ着くと、父と何やら話し合っていた。あの横暴な父が、ペコペコと頭を下げている姿が妙に滑稽だった。

アレクサンダーは一度その場を去ったが、数時間後にもう一度トレイズの家を訪れた。どうやら父が捨てたトレイズの弟を捜しに行ってくれていたらしい。しかし、見つからなかったと、トレイズに謝罪していた。

弟が発見されなかったと聞き、トレイズは落胆した。顔はおぼろげにしか覚えておらず、名前すら知らない弟のことだが、心底心配した。

結局、トレイズは元の家で暮らすことになった。あの父の元でだ。しかし、アレクサンダーが何か言い付けたのか、扱いは随分と良くなった。扱いだけ、だが。

最初の数カ月の内は、毎日のように必死になって弟を捜し続けたが、結局見つからず仕舞いだった。何度か父に名前だけでも教えてくれと頼んでみたが、意地になっているのか一向に教えてもらえなかった。

次第に時は過ぎ、数年が経った頃に、トレイズの元へ王の側近選定試験の案内が届いた。合格者は王の側近として、城で暮らすことになるのだという。

その試験のためだけに、トレイズは修行に明け暮れていた。師はいない、全て我流だ。それでも、自分は強くなったという確かな実感が、トレイズにはあった。

そして、王に言われた「特別な力」、色々と試している間に自分は氷を自在に操ることが出来るのだと理解した。最初の内は制御することが出来なかったが、訓練を重ねる内に、完全に制御出来る程成長した。

そして 合格。

神力と呼ばれるらしいトレイズの能力は、試験の中で高く評価された。トレイズの他にも、アグライと言う男等、合計三人が合格と

なった。

合格した当日、アレクサンダーはトレイズへこう告げた。

「君を、待っていた」

数年も前の、アレクサンダーからすれば、どうでも良かったもとれるようなあの日のことを、彼はしっかりと覚えていた。アレクサンダーは本当に、待っていたのだ。

「俺も、この日を待っていました」

跪き、トレイズは一礼する。そしてこの瞬間、トレイズは決めたのだ。

この方に尽くそう。と。

ゆっくりと。トレイズは目を開く。どうやら眠ってしまっていたらしい。

昼間だったはずが、既に辺りは夕焼け色に染まっていた。長く眠ってしまっていたようだ。

随分と、長い夢を見ていた気がする。古い、昔の記憶。

夢で昔の映像を見ることがあると、話に聞いてはいたが信じていなかった。だが、どうやらその話は本当らしい。

「……懐かしい」

ボソリと呟き、夢の内容を反芻する。

今でも、時々弟のことが気にかかる。彼は今どこで、何をしているのだろうか。名も知らぬ弟は今も、どこかで生きているのだろうか。

違う家庭で、幸せに暮らせているのだろうか。それとも、一人で生きているのだろうか。

せめて名前だけでも、知っておきたかった。

「何してんの？」

どこか呆れたように、でもどこか楽しそうに、誰かがトレイズへ問うた。

「……昼寝だ」

声のした方向へ視線を移し、ぶっきらぼうにトレイズは答えた。

「らしくないね」

「そうかもな」

トレイズが微笑すると、つられて声の主　ニシルも微笑する。

「トレイズは知らないと思うけど……僕ね、元々捨て子だったんだよ」

不意に、ニシルはそう言い、トレイズの隣へちょこんと座った。

「同じだな……」

「そうなの？」

ニシルの問いにトレイズはコクリと頷く。

「捨てられて、僕が呆然としているところをチリーが見つつけてさ、今の親……キリトさんが僕を拾ってくれた」

「キリトと言う男は、良い親だったか？」

「当然だよ、とニシルは答え、微笑んだ。

「前の親のことは、あまり覚えてない。お母さんは優しくかった気がするけど、どこか歪んでた気がするよ」

そう言っつて、ニシルは苦笑する。

「俺の両親も、歪んでいた」

「同じだね、僕達」

そうだな。そう言っつて、トレイズが微笑すると、ニシルがスツと立ち上がり、数歩歩く。丁度、トレイズに背を向けているような状態になった。

「僕はね、今日、自分がどこで産まれたのか、誰が本当の親なのか、確かめてきたんだ」

「……そうか」

それは本当に勇気が必要な行動だ。知らなくて良かった物まで、知ることになる。知らないままで良かったのに、知ってしまうことになる。それを承知で、ニシルは確かめたのだろうか。

「僕が捨てられた……雨が降るあの日、捨てられたのは僕だけじゃなかった」

「……」

一つの事実を、トレイズは仮定した。しかしすぐには口に出さず、黙ってニシルの言葉を待つ。

「違う場所でもう一人、捨てられてたんだ」

脳裏を過るのは、あの日の光景。雨の中呆然と座り込む、自分の姿。

「僕は顔も名前も知らなかったけど、そのもう一人は、捨てられるその日まで、ずっと僕の近くにいたんだ……。そいつのことが気になって、今日僕は、確かめてきた」

ゆっくりと。ニシルはトレイズの方を振り返る。

「隔離された状態だったけど、確かに僕には兄がいて、同じ日に捨てられていたんだ」

名も知らぬまま捨てられ、どこにいるかもわからなかった弟。彼は、ちゃんと優しい親に拾われていた。ちゃんと、生きていた。

既に　　傍にいた。

「初めまして、兄さん」

そう言って、弟は悪戯^{ニシル}っぽく笑った。

一瞬、トレイズは呆気にとられたような表情をしたが、すぐに微笑した。どこか安心したような、そんな微笑。

「言っとくけど、今ので最後だからな！　これまでの関係は崩さない。その方が、良いだろ？」

「……ああ。十分だ」

今ので、十分救われた。

弟は傍にいた。気付かない内に。

求めていた物は、既に手の中にある。

あの日の雨が、やっと止んだ気がした。

いつもの砂浜で、鳴り響いているのは波の音と金属音。昨日もやっていたと言うのに、チリーとキリトは今日も戦っている。

チリーは父と互角以上に戦えるのが嬉しいらしい。そしてキリトは、息子が実力を付けたことが嬉しいようだ。二人共随分と楽しげに戦っている。

そんな二人の様子を、少し離れた場所でミラルは見守っていた。いつもと、同じように。

だが、いつもと違うのはその隣にニシルがいることだろう。いつもならチリー達に混じって戦っているハズなのだが、今日はどういう訳か混じらず、ミラルの隣で同じように二人を眺めている。

「ねえ、ニシルは二人に混じらないの？」

ミラルが問うと、ニシルは小さく頷いた。

「面倒じゃん」

「いや、面倒って……」

「疲れるし、ここは親子の仲に水をさすのはどうかな……って」
そう言っつて、ニシルは肩をすくめて見せた。

「ニシルだって、チリー達とは家族みたいなものじゃない。遠慮すること、ないと思うな……」

ミラルがそう言つと、ニシルは首を横に振る。

「確かにそれはそうなんだけど……。ま、なんとというか。今日は気が乗らない」

ニシルは悪戯っぽく笑つと、ミラルが抱えているバスケットへ視線を移す。

「ねえ、それは？」

ああ、これね。とミラルはバスケットにかけられている布を取り、中をニシルへ見せた。

中に入っていたのは、サンドイッチだった。どうやらミラルのお

手製らしい。

「いつもいつもよく作るよ。僕だったら面倒でやめちゃうな」

「うん。でもね、私のサンドイッチ、チリーが喜んでくれるから」

チリーが？ とニシルが問うと、ミラルは嬉しそうに頷いた。

「昨日ニシルがいない時にね、二人にサンドイッチ持って行ったのよ。あんまりチリーが期待するから『期待しないで』って言ったら、何て言ったと思う？」

もったいぶるように、ミラルはニシルへ問うた。

「……何て言ったの？」

微笑し、ニシルが問うと、ミラルは待つてましたと言わんばかりに微笑んだ。

「チリーがね、『そのいつものサンドイッチが食いたかったんだ』って」

「あのチリーがねえ……」

あの時、そう言ってチリーは嬉しそうにミラルの作ったサンドイッチを頬張っていた。その時のことを思い出し、ミラルは嬉しそうに微笑んだ。

そんなミラルの様子を見、ニシルも微笑んだ。

「ミラルってもしかしてさ……」

「何？」

「チリーのこと好きなの？」

ニシルが問うた瞬間、ピタリとミラルの動きが停止した。流石にバスケットを取り落とすようなことはなかったが、停止したまま動かない。

数秒後、ミラルの顔はみるみる内に真っ赤になり、恥ずかしそうに、何言ってるのよ！ と怒鳴りつけた。

「そ、そんな訳ないじゃない！ サンドイッチのことは、喜んでもらえるのが嬉しいだけで……」

「じゃあ、嫌いなのか？」

ニシルがそう問うと、ミラルはすぐさま首を横に振った。

「え、いや……そういう訳じゃないんだけど……」

口籠るミラルを見、ニシルは悪戯っぽく笑うと、どうなの？と問うた。

「好きっていうか……その、大事な……友達……」

「ごめん。聞こえない。もう一回」

ニヤリと。ニシルは笑っている。

絶対わざとね。コイツ、私が困ってるのを見て楽しんでるんだわ……。

短く嘆息し、ミラルは呆れたように仕方ないわね、と呟いた。

「……好きよ。チリーのことが……。これで、良いでしょ？」

プイツとニシルから目を背け、ミラルが渋々そう答えると、ニシルはやっぱりね、と嘆息する。

「や、やっぱりって……」

「それ、気付いてないのチリーくらいだよ。トレイズはわかんないけど、青蘭は気付いてたし」

そう言い、ニシルは多分トレイズも気付いてるよ、と付け足した。それ聞いて、ミラルの顔はますます赤くなっていく。そんなミラルの様子を見、ニシルは何やら楽しそうに微笑している。

「チリーのどんなところが好きなのさ？」

「どんなとこって……」

ミラルは思索する。自分は何故、チリーのことを好きになってしまっているのか。

過去に特別何かあった訳ではない。旅の中で、何度も彼には助けられたが、それは理由にならない。ミラルがチリーを好きになったのは、旅に出る前の話だ。

「アイツ馬鹿だし、考え無しだし、口は悪いし、行儀悪いし、僕のことすぐ叩くし……」

指で数えつつ、ニシルはチリーの悪い点を並べていく。

「……でも」

途中で、ミラルが口を挟んだ。

「でもチリーは、真っ直ぐだから」

「真っ直ぐ?」

ニシルの問いに、ミラルはコクリと頷く。

「馬鹿だけど、真っ直ぐなの、アイツは。私が……ついっつかり好きになっちゃうくらいにね」

そう言い、ミラルはキリトと戦うチリーの姿を眺める。

真っ直ぐで曇りのないチリーの瞳は、しっかりとキリトを捕らえている。凜々しく、雄々しく、猛々しく、チリーは戦っていた。

ニコリと。ミラルは微笑んだ。

「そんなに……好き?」

「……うん。って何言わせてんのよ馬鹿!」

ニシルの頭を、ミラルは軽く叩いた。ニシルは痛そうに頭を押さえつつ、ミラルへ視線を据える。

「僕が　ミラルのことが好きだって言っても、ミラルはチリ

ーのことが好き?」

一瞬、ミラルは何を言われたのかわからず、間の抜けた表情でニシルを見つめていた。

「え……?」

しばらく、ニシルは真剣な眼差しでミラルを見つめていたが、すぐに視線を逸らした。

「ニシル?」

ニシルは肩をすくめて見せると、ミラルの方へ視線を戻す。

「冗談だよ。僕は年上が好きだから」

そう言って、ニシルは悪戯っぽく笑った。

「も、もう! ビックリしちゃったじゃないっ!」

再び、ミラルはニシルの頭を叩いた。それも、先程より強くだ。

「ごめんごめん」

叩かれた頭を痛そうに押さえ、ニシルは冗談っぽく謝罪の言葉を告げる。

微笑んではいるが、その瞳に憂いの色が見えたのを、ミラルは見逃さなかった。

テイテスに滞在して丁度三日。チリー達はアグライから呼ばれ、城へ来ていた。場所は室内ではなく、広い、城の庭だった。

特に何かある訳でもなく、芝生が生い茂っているだけの庭で、アグライの言う「考え」らしき物は見当たらない。

庭の中心にアグライ、その横にはカンバーが、そして彼ら二人の前に、チリー達四人が適当に並んでいる。

「おっさん。で、どうやって俺達はイレオーネに行けば良いんだよ？」

問うたチリーを小突き、失礼でしょ、とミラルが耳打ちするが、チリーは気にしていない様子だった。

「正直、君達をこのまま行かせるのは不安だ。命を失うことになりかねない」

「大丈夫だよ。トレイズもいるし、バカチリや僕だって、一応戦力にはなるし」

そう言ったニシルへ、バカは余計だとチリーが騒ぎ立てるが、それには誰も取り合わない。

「君達と共に送り出した、数人の兵士がいただろう？」
アグライの問いに、チリーとニシルはコクリと頷く。

「彼らは全員、消息を絶っている」

「ッ!?」

アグライの言葉に、チリーとニシル、そしてミラルの表情が驚愕に歪む。しかしすぐに、チリーは不敵に笑みを浮かべた。

「心配ねえよ。俺達なら」

そう言って、同意を求めるようにチリーは一同の顔を順番に見る。それに答えるように、一同は力強く頷いた。

「……頼もしいな」

小さく溜息を吐き、アグライは肩をすくめて見せた。

「それより、さっさとどうやってイレオーネに行くのか教えてくれよ」

「まあ待て。すぐに準備する。カンバー」

急かすチリーをなだめ、アグライがその声をかけると、カンバーはコクリと頷き、ポケットから何やらスイッチの付いた機械を取り出し、アグライへ手渡した。

「皆、少し離れてくれ」

機械を受け取ると、アグライはカンバーと共に数十歩下がる。それに倣い、チリー達も後ろへ数十歩下がる。

「では行くぞ」

カチリと。アグライはスイッチを押した。

「ッ!?」

不意にまるで地震でも起きたかのように地面が揺れ始める。アグライとカンバーを除く全員が、驚愕に表情を歪めていた。

「マジかよ……!!」

凝視しているのは、何の変哲もない芝生……だった場所だ。芝生だけが生い茂っていた地面がスライドし、その下にある空間を露にしたのだ。

揺れが収まる頃には、芝生の下に何が隠されているのか容易に見て取れた。

「流石にビックリだね……」

凝視しつつ、ニシルが驚嘆の声を上げる。

スライドした地面の下、その床らしき物は徐々に上がって行き、隠されていた巨大なソレを露にした。

「時代はこんなに進歩していたのか……ッ」

驚嘆の声を上げたチリーの目の前にあるのは、巨大な白い物体。瓜のような形をしたソレを凝視する一同を眺め、アグライはニヤリと笑った。

「飛行船だ」

白い、飛行船。飛行船としては大した大きさではないのだが、何よりチリー達を驚かせたのは、テイテスに、こんな飛行船を用意出来る程の財力があつたことだった。

「中に食料や資金を乗せてある。パイロットも含め、五人程乗組員もいるぞ」

「……よくこんな物を用意出来たな」

流石のトレイズもこれには驚いているらしく、表情を驚愕に歪めたまま呟く。

「島そのものの一大事だからな。なりふり構ってられないさ」

そう言つて、アグライは微笑した。

「ま、何にしても用意は整つたね」

ニシルがそう言つてニコリと笑うと、チリーはおう、と答え、飛行船を見つめる。

「さあ行くぜ……イレオーネ大陸に！」

コクリと。アグライを除く全員が頷いた。

とある宿の一部屋で、青蘭はベッドの上に腰掛けていた。

前に泊まっていた宿より高級な宿なので、布団の質は良く、部屋も広かった。更に、前のように一つの部屋へ四人が泊まっているのではなく、一部屋に二人なため、尚更広く感じる事が出来る。

青蘭の隣のベッドでは、光秀が後頭部で腕を組んで寝転がっている。目は閉じられているが、寝ているのかどうかはわからない。

先程チリー達の船を見送ってから、既に数時間が経過している。どうもまだ、慣れることが出来ない。

少し前……数時間前までは、一緒にいることが当然だったチリー達は、もう傍にはいない。これからまた会えるかどうかさえ、定かではないのだ。

これで良かったのか？

そう自問するが、答えはいつも同じだった。

これで良かったんだ。

この選択は、間違っていない。元々青蘭は、チリー達と旅していた訳ではない。ハーデンへの復讐を遂げるため、独りで旅を続けるつもりでいたくらいだ。

だから、これで良い。

頭ではそう理解しているハズなのに、どこかで後悔している自分がいた。チリー達と一緒に、旅を続けていたかった……復讐など忘れ、チリー達と共に、テイテスのために旅をするのも、悪くないと思えた。

それでも、自分は選んだのだ。ハーデンへの復讐を、東国の再興を。

これ以上、考えるのはやめておこう。今日はもう休みたい。そう思い、水を飲もうと青蘭が立ち上がった時だった。

トントンと。ドアが叩かれる。

ドアの方まで歩み寄り、鍵を開けると、ドアが開き、麗と伊織が部屋の中へと入って来た。

「邪魔するわ」

「お邪魔しまーす」

伊織は中に入ると、すぐに青蘭の方へ視線を移す。

「青蘭君だ」

まるで、宝物を見つけた子供のように、伊織はそう言って嬉しそうに微笑んだ。

「伊織……」

陰鬱とした気分を晴らしてくれるような、そんな笑顔に釣られ、青蘭も伊織へ微笑みかけた。

「お、伊織ちゃん」

ガバリと。光秀は身体を起こすと、伊織の方へ視線を向け、嬉しそうに微笑む。

そんな光秀に、伊織はこんばんは、と笑顔で返すと、青蘭が腰掛けていたベッドへ腰掛ける。

「麗さん、話があるって。青蘭君もこっち来て座ろうよ」

そう言っ手招きする伊織に、青蘭はコクリと頷いてその隣へ座った。そんな二人を見、光秀は顔をしかめる。

「青蘭…… テメエいつの間に伊織ちゃんとそんなに仲良く」

「光秀、美しくないわ」

光秀が言い切る前に、麗は光秀を軽く睨みつけ、ピシヤリと言いつ放った。委縮したのか、光秀はすまんと言った切り、黙り込んでしまった。

「青蘭、伊織の言う通り少し話があるのだけれど、良いかしら？」

「……ああ」

青蘭が頷くと、麗はそう、と小さく呟き、光秀が座っているベッドへ腰掛ける。青蘭は麗と向かい合うように、腰掛けていた場所の反対側へと腰掛ける。すると、伊織も付いて来て青蘭の隣へ座る。それを見、光秀が何か言いかけたが、麗に睨まれて黙り込んでしま

った。

「一応確認するけど、貴方は白蘭の弟よね？」

コクリと。青蘭は麗の問いに頷いた。

「なら、知っているかしら……？ 赤石の在処を」

「ッ！？」

真剣な眼差しで、麗は青蘭を見据える。

「白蘭の弟である貴方なら、知っている可能性が高いわ」

「ちょっと待ってくれ。何で兄さんの弟だったら、赤石の在処を知っている可能性が高いんだ？」

「白蘭は……赤石の在処を知っていた……。興味本位で何度か聞いたけど教えてくれなかったわ……」

白蘭の弟である青蘭なら、赤石の在処を知っているかも知れないと、そう考えたのだろう。だが、それは間違っている。何故なら青蘭は、赤石の在処など知らない。もし知っていたのなら、チリー達へ在処を教えているはずだ。

アレの在処を喋りさえすれば、命までは取らないよ？

あの時エトラが言っていた「アレ」とは、恐らく赤石のことだろうと、今になってようやく気が付いた。エトラは、青蘭が白蘭の弟だと知っていて、あんな質問をしたのだろう。

しかし、それより青蘭が驚いたのは、白蘭が赤石の在処を知っていたということだ。赤石の話など、青蘭は一度も白蘭から聞かされていない。

「どうなの？」

麗の問いに、青蘭は首を横に振った。すると、麗は嘆息し、そうと呟いた。

「知らないのね」

「……すまない」

ゆっくりと、青蘭は麗へ頭を下げた。

「マジかよ……」

先程まで黙っていた光秀が、やっとのことで口を開く。

「麗、だったらこれからどうすんだよ？ やっぱ最初の予定通り、アルケスタに向かうのか？」

「……そうなるわね。青蘭が知っていれば、アルケスタへ行く手間が省けたのだけど……」

アルケスタ 通称、知識の町。ありとあらゆる書物が、知識が、一つの町に収められているという、ゲルビア帝国内にある町だ。青蘭も名前くらいは聞いたことがある。

「白蘭は、貴方を逃がす時に何か言わなかったの？」

じゃあな。

脳裏を過つたのは、命を失う直前の白蘭の言葉だった。脳にこびりついて離れない、あの日の記憶。

「……特には、何も」

赤石の手がかりになるような情報は、与えられていない。それ以前に、当時の青蘭は赤石の存在すらよく知らなかった程だ。

麗は嘆息し、そう、と呟くと腰を上げた。

「なら、アルケスタに向かうわよ。あそこになら、赤石のことが何かわかるかも知れないわ」

麗の言葉に、一同はコクリと頷いた。

深夜、不意に青蘭は目を覚ました。これと言って理由はない、ただ、目が覚めてしまっただけのこと。眠りが浅かったのだろうか。

妙に喉が渴いていた。青蘭は身体を起こすと、ベッドの横にある水差しの中の水を、傍にあったコップの中に注ぎ、飲み干した。

喉が潤う心地良い感覚。口元についた水滴を右手で拭い、青蘭はベッドから出た。

どうにも、このまま眠れそうにはない。何故か目が冴えてしまっている。

疲労はあった。出来れば眠っていたかったのだが、こつも目が冴えていては無駄だろう。少し散歩でもしてこようと思い、青蘭は着

替えると、光秀を起こさないよう、静かに部屋を後にした。

部屋を出、階段を降りてロビーへ向かい、そのまま正面玄関から宿の外へと出る。

外は真つ暗な上、月は雲で隠れてしまっているため、電灯だけが明かりだ。

昔は、兄さんと夜中によく散歩に出かけたな……。

そんなことを思い出し、兄との思い出を反芻する。

夜中、眠れずに困っていた青蘭の元へ現れ、両親に内緒でこっそりと兄　　白蘭は青蘭を外に連れ出し、眠くなるまで辺りをうろついていた。

ただ散歩するだけだったが、その時にする兄との会話が、当時の青蘭にとってはたまらなく楽しかった。会話だけなら、別にわざわざ夜中に散歩してまでしなくても出来る。だが、夜中の散歩中にする会話は、どういう訳か格別だった。どうでも良い話題が、たまらなく楽しく思えた。両親に内緒、という背徳感が、妙に青蘭をワクワクさせてしまっていたのだろうか。

もし兄が生きていて、青蘭と共に旅をしていたら、どうなっただろう。

兄は止めただろうか。ハーデンへの復讐を誓う青蘭を。

兄はどちらを選択させただろうか。チリー達と行くのか、麗達と行くのか。

いや、それ以前に、白蘭が生きていたのなら、復讐のための旅になど出ず、白蘭と二人でひっそりと暮らしていたことだろう。

しかし、それは全てもしもの話だ。白蘭はいない。自分の目の前で、彼は命を落としたのだから。

嘆息し、青蘭は独りかぶりを振った。

いつまでも、いない人間のことを考えていても仕方がない。白蘭はいない、その事實は遠の昔に受け入れているはずだ。

「そろそろ、戻るか」

散歩をした訳でもない、ただ夜風に当たっただけだった。明日は恐らく、アルケスタに向かうのだろう。支障をきたす訳にはいかない。もう眠るべきだと考え、青蘭が宿へ戻ろうとした時だった。

トンと。青蘭の肩が叩かれた。

「ッ!?」

慌てて後ろを振り返ると、そこには一人の男が立っていた。

小柄な、平凡な容姿をした男だった。男の撫でつけられた髪から発せられる整髪料らしき臭いが、青蘭の鼻をついた。

「ああ、すいません。驚かせてしまいましたか。こんな時間に私以外の人が歩いていると言うのも珍しいものでして……。少し気になっただけです」

「そ、そう……ですか」

男ははい、とだけ答え、ニコリと微笑んだ。

「方向からして、同じ宿に泊まっているみたいですね」

「ええ、まあ……」

曖昧に答える青蘭に、男は再度微笑む。

「ここで会ったのも何かの縁、少し自己紹介でもしておきましょう……。私は、バルターと申します」

「俺は、青蘭だ」

青蘭が名乗ると、バルターと名乗った男は少し訝しげな表情を見せた。

「セイラン？　あまり聞かない類の名前ですね……。おっと失礼、失敬なことを申しました」

「……いえ、気にしないで下さい」

それから、二人は一言も会話をすることなく、宿へと戻った。バルターと別れた後、青蘭は部屋に戻り、着替えてすぐにベッドへ横たわった。

やはり疲れているらしく、数分としない内に青蘭は眠りについた。

アルケスタへと向かうため、麗と光秀は朝早くから出掛ける準備をしていた。汽車の時間の確認や、旅に必要な物で足りない物がな
いか等、色々と確認しなければならぬことがあるらしい。

麗は青蘭と伊織に、しばらくの間ヘルテュラの観光でもしておきなさい、と告げ、光秀は随分と不満そうだったが、麗に急かされて
渋々と二人で出掛けて行った。

「観光つて言ってもな……」

考え込むような表情をし、青蘭が呟くと、伊織は嬉しそうに良い
じゃない、と呟いた。

「行こうよ青蘭君。どうせ私達はしばらく暇なんだし」

ベッドに腰掛け、伊織は足をぶらぶらと揺らしている。

そんな無邪気な様子の彼女を見、青蘭は微笑すると、ベッドから
腰を上げた。

「そうだな。行こう。俺も少し息抜きがしたかったしな」

青蘭がそう言うと、伊織は表情をパツと明るくし、勢いよく立ち
上がった。

「それじゃ、決定だね！ 行こう、青蘭君！」

妙にはしゃいでいる様子の伊織を見、青蘭は再度微笑した。

アギエナ国とゲルビア帝国の境界の町、ヘルテュラ。町自体はそ
こまで大きくないものの、アギエナと貿易しているゲルビアの商人
等が大勢この町を訪れるため、町は随分と賑わっている。人口は多
く、アギエナ内の他の町と比べてやや過密気味な程だ。

そんなヘルテュラの名物は、時計塔。

随分と昔に建てられたらしく、歴史的に価値があるらしい。既に
この時計塔は時を刻んでおらず、中の床や壁も脆くなっており、入

ることが出来ない。

「で、伊織はその時計塔に行きたいのか？」

歩きつつ、青蘭が問うと伊織はコクリと頷いた。

「うん。中には入れないけど、せめて近くで見たいなあって」

そう言っつて、伊織は時計塔の方向へ視線を移す。現在地から時計塔までは結構な距離があるが、ここからでも時計塔は十分見える。

煉瓦造りの高い時計塔がそびえ立ち、この町の中でかなりの存在感を放っている。

「わかった。時計塔に行こう。多分この町には、もうしばらく来る機会がなさそうだしな」

ヘルテユラにある駅の時刻表の前、麗は立ち止まってそれを眺めている。その後ろでは、光秀が退屈そうな表情でボーッと突っ立っている。

「光秀」

不意に話しかけられ、少し反応が遅れたが、光秀はすぐに麗の方へ視線を移す。

「どうした？」

「青蘭のこと、どう思う？」

「どう思うって……」

腕を組み、光秀は唸りながら考え込むような表情を見せた。

「彼は本当に、赤石の在処を知らないと思う？」

鋭い目つきで、麗は光秀へ問うた。

「……さあな。ハッキリとは言えねえ。だが、俺はアイツが嘘を吐いてるとは思わねえな」

「あら、意外だね。彼の肩を持つのね」

麗のその言葉に、光秀は肩をすくめて見せる。

「伊織ちゃんと仲の良いアイツは確かに気に入らねえ。だが、アイツが嘘を吐くようなねじ曲がった人間じゃねえってのはわかってる

つもりだぜ。あんな真っ直ぐな瞳、そうそう拝めるモンじゃねえよ」
そう言って、光秀は微笑する。すると麗も微笑し、そうね、と
呟いた。

「麗、何で急にアイツを疑うんだよ？」

「少し、気にかかることがあったのよ。けれど疑うなんて、落ち着
いて考えれば我ながら美しくないわ」

そう言い、麗は嘆息する。

「気にかかること？」

光秀が問うと、麗は小さく頷いた。

「彼は、私の記憶が正しければ東国の王族なのよ。勿論その兄、白
蘭もね。白蘭だけが知っていて、青蘭が知らないって言うのが府に
落ちない……というのがさっきまでの私の考えよ」

「さっきまでの……ってことは、今は違うんだな」

「ええ。恐らく、王の後継者は白蘭だったのよ。だから白蘭は知っ
ていて青蘭は知らなかった……。そう考えれば済む話だわ」

「……まるで、東国と赤石が関係あるかのような口振りだな」

真剣な表情で光秀がそう言くと、麗はコクリと頷いた。

「確かゲルビアは、赤石を狙っていたわね」

「ああ。そうらしいな。奴ら、必死になって探してるらしいぜ。理
由がわかんねえけどな」

「理由……ね」

そう呟き、麗は右手を口元にやる。

「ゲルビアが赤石を狙ってるってのは、どうもわかんねえんだよな
……。さっきも言ったが、理由がわからねえ」

「……そうね。いくら赤石が強大な神力を秘めているとしても、ゲ
ルビアが必死になって探さなければいけないような物ではないわ。
赤石なんて無くても、ゲルビアは十分に富んでいる……。もし理由
があるとするれば、他国が赤石の力で、何か行動を起こすのを防ぐた
め……。もしくは研究目的ね。でも、後者はあまり考えられないわね」
「研究目的にしては、大がかりだったか？」

光秀の言葉に、麗はコクリと頷く。

「各地に搜索隊を派遣したり、先住民の地を制圧したり……やり過ぎよ。美しくないわ」

ゲルビアの、黒い噂は絶えない。特に最近は酷いものだった。赤石のために、先住民の地を制圧し、赤石の在処を吐くまで拷問を続けたら、更なる神力研究のため、自国のみならず他国からも神力使いを攫っては実験台にするなど、どれも一概には噂だと断言出来ないものばかりだ。ゲルビアならやりかねない、という意識が麗にも光秀にもあるのだ。それも無理はない。彼らの故郷、東国を滅ぼしたのは他でもないゲルビア帝国なのだから……。

「東国戦争……。アレが何故起きたのか、何故ゲルビアは東国を滅ぼしたのか……光秀、わかるかしら？」

「わかる……って答えても、お前は自分で言うんだろ？」

そう言っただけで光秀が口元を緩めると、それもそうね、と麗は微笑した。

「東国と赤石は、何らかの関係があるのではないかしら……」

「……それなら、東国戦争に説明が付くな」

ゲルビア帝国が、東国へ襲いかかった理由……そこに、赤石が何らかの形で関わっている可能性があるかと、麗は考えたのだ。

「それに、白蘭が赤石の在処を知っていた……という事実もあるわ」

「……確かに。だが、東国に赤石が関わってんなら、ゲルビアはとっくに手に入れてるはずだぜ？　なのに、奴らは未だに赤石を探している……訳わかんねえな。東国戦争は、奴らにとっちゃ無駄足だったのか……？　だとすりゃ、尚更許せねえな。関係もねえのに滅ぼしやがって……ッ」

「ゲルビアでも見つけれないくらいだから……アルケスタに行った程度じゃ、私達でもわからないでしょうね」

そう言っただけで、麗は嘆息する。

「まあ、何もしないよりはマシだろ。ゲルビアの探し方は大掛かりな分、案外細かい所まで確認してないかもだぜ？」

「……樂觀的ね」

「俺の性分だ」

そう言って、光秀は軽く笑った。

「それで、アルケスタ行きはいつ出るんだ？」

光秀がそう言つと、麗は時刻表へと視線を戻す。

「……」

「どうした？」

「今日は出ないみたいね」

「……」

しばし、沈黙した。

ヘルテユラの時計塔前。観光客が多く集まるその場所に、青蘭と伊織は到着した。

数十人の人間が、時計塔を眺めたり、写真に撮ったりと各々で楽しんでる。人が集まるのを良いことに、胡散臭そうな物を売りさばいている者もいる。

「近くで見るとすっごいねえ……」

「……そうだな」

時計塔を見上げ、感嘆する伊織に、青蘭はそう答えた。

間近で見る時計塔は壮観な眺めで、遠くから見るのとは大違いだった。カメラを持っていれば写真を撮れたのだが、生憎二人共そんな高価な物は持ち合わせていない。せめて絵でも描ければ、この凄さを麗達にも伝えることが出来るのだが、残念なことに二人共絵が得意な訳ではない。

「これ、麗さん達にも見せてあげたいね……」

「ああ。けど、午後には出発する予定らしいし……。カメラでも持っていれば良かったんだが……」

そう言つて嘆息する青蘭の肩を、伊織はトントンと叩いた。

「ん？」

「青蘭君！ あの人！」

伊織の指差した方向へ視線を移すと、そこには画家らしき男性が画版と筆を持ち、足元に絵の具等を置いて椅子に座っていた。彼の隣には看板があり、「時計塔の絵、描きます」と書いてある。

「値段もお手頃だし、頼んでみない？」

「ちよつと怪しいが……まあ良いか」

そう言つて苦笑し、青蘭は伊織と共に画家らしき男性の元へと歩いていく。

「すみません、時計塔の絵、お願い出来ますか？」

伊織がそう言つと、男性はニコリと微笑んだ。

「ああ。任せてくれ。代金は描いた後で構わない。気に入らなければ、払わなくても構わないよ」

そう言つと、男性は早速時計塔の方へ椅子を傾け、絵の具の準備をし始める。

「描き上がるまでに少し時間がかかるから、出来るまで少し待つてくれ」

「わかりました！」

上機嫌に返事をする、伊織はニコリと微笑んだ。

絵を待ち始めて数分。青蘭と伊織はしばらく時計塔を眺めたり、雑談をしたりと暇を潰していたのだが、次第に話題もなくなり時計塔を眺め続けるのにも飽きてしまっていた。

絶え間なく続いていた会話もやがて途切れ、二人の間に沈黙が訪れていた……その時だった。

ポンと。伊織の肩に背後から手が置かれる。

「っ！」

不意のこと故、驚いて伊織が振り返ると、そこに立っていたのはバルターだった。

「これは失敬。美しいお嬢さんがいたものでして、つつい肩に手

を……」

「え……意味わかんない……」
率直な感想だった。

訝しげに、伊織はバルターを見つめている。

「バルターさん……」

「おや、奇遇ですねセイランさん」

そう言っただけ微笑む青蘭とバルターを交互に見、伊織は知り合い？と青蘭へ問うた。

「ああ、昨日の夜散歩している時にちよつとな」

「……ふうん」

伊織はバルターのことを良く思っていないらしく（先程のことを考えれば当然とも言える）、未だに訝しげな表情でバルターを見ている。

「ああ、これと言って用があつた訳ではないので……。では、失礼させていただきます」

ペコリと一礼すると、バルターはゆっくりとその場を去った。二人はしばらくバルターの背中を見つめていたが、数秒で青蘭が嘆息する。

「……少し、休憩しないか？」

「うん。向こうでソフトクリーム売ってるし、それでも食べようよ」

「……そふとくりいむ？」

不思議そうに、青蘭は首を傾げる。

「え、青蘭君ソフトクリーム知らない？」

「ん、ああ……」

皆目見当が付かない。というのが正直な話だった。

「ええとね、ソフトクリームって言うのは」

伊織が言いかけた時だった。

「やれやれ、ソフトクリームも知らないとは……。相変わらず、他国の文化に疎いな、青蘭」

「ッ!?!」

不意に背後から声をかけられ、青蘭は素早く背後を振り返る。

「え……嘘……」

同じようにして振り返った伊織は、背後にいた人物を見、驚愕の声を上げた。青蘭に至っては、驚愕のあまりに声も出ない状態だ。

「久しぶりだな、二人共」

そこに立っていたのは、既に亡くなっているハズの青蘭の兄

ちやくらん
白蘭だった。

「兄……さん……！」

恐る恐る、その口にしてみる。すると、目の前の男　白蘭
は平然とした表情で何だ？ と問うてくる。

あり得ない。あり得るハズがない。

兄は……白蘭は既に死んでいる。その瞬間を、青蘭は目撃しているのだ。しかし、目の前にいるのは兄、白蘭だった。

青蘭よりも高い身長、耳を隠す程度に伸ばされた髪、優しそうな目つき……変装でここまで似るとは思えない、神力か何かで変身しているのか……？　だとしても、似過ぎている。姿形だけではない、雰囲気までもが白蘭そのものだった。青蘭が記憶している通りの、兄の物だった。

「青蘭君……これってどういう……？」

隣で、表情を驚愕に歪めたまま伊織が青蘭へ問う。

「わ、わからない……」

生きているハズがない。だとすれば、目の前にいる白蘭は偽物だろう……。しかし、そう判断することの出来ない何かが、目の前の白蘭にはある。彼は本物の白蘭だと、そう思ってしまうような何かが、彼にはあったのだ。

「……生きてるよ。足だつてあるだろ？」

優しく微笑み、白蘭はほら、と自分の右足を上げて見せた。

「本当に……兄さん……？」

「嘘吐いてどうするんだ？　俺だよ……白蘭だ」

そう言ってニコリと笑ったその表情は、正しく兄の物。既に、疑念は確信へと変わっていた。

「生き……てた……？」

コクリと。白蘭は頷いた。

「兄さんが……生きてた？」

もう一度、白蘭は頷いた。

「実の兄をいつまで疑う気だよお前は……」

呆れたように嘆息し、白蘭はもう一度微笑んだ。

「心配、かけたな」

今にも泣き出しそうなのを、必死に堪えている青蘭の肩に、白蘭はそっと右手を置いた。

「ソフトクリーム、食べるんだろ？ 一緒に行こうぜ。青蘭」

青蘭と伊織、そして白蘭の三人でソフトクリームを購入し、時計塔を眺めながら三人で食べた。

この三人が揃うというのは、もう随分と久しぶりで、三人の間にはどこか妙な緊張感が漂っていた。

「……それにしても兄さん、どうやって助かったんだ？」

不思議そうに、青蘭が問う。

あの日、白蘭は死んだハズだった。青蘭達を逃がした直後、背後から現れたゲルビア兵により、胸部を貫かれ、大量の出血をしながらその場で死んだハズだった。だが、今青蘭の隣には、その死んだハズの白蘭が、平然とソフトクリームを食べている。

「奇跡的にな。致命傷ではあったが、何とか生き延びた。それで、爆撃が始まるほぼ直前に東国から逃げたんだ」

「そう……だったんだ……」

「すぐに会えなくてごめんな。俺も、お前を捜してたんだぜ？」

そう言っつて、白蘭はポンと右手を青蘭の頭の上へ置いた。

「兄さん……」

優しく微笑む白蘭を見つめ、青蘭はそう呟いた。

「良かったね青蘭君……。白蘭さんが生きてて……。私も、嬉しいよ」
心底嬉しそうにはしゃぎながら、伊織は屈託なく微笑んだ。

「ああ、本当に……。良かった」

頭の上へ置かれた白蘭の右手、そこから伝わる温かみは確かに

兄の物。もう、疑う必要はない。

兄は、生きていた。そして今、目の前にいる。

「昔はよくこうして、三人で集まったなあ」

ペロリとソフトクリームをなめ、感慨深げに白蘭は呟いた。その言葉に、青蘭はコクリと頷く。

「そうそう。いつも青蘭君が私の家まで迎えに来てくれたよねー」
「……そうだったか？」

首を傾げて青蘭が問うと、伊織はそうだったよ、と答えた。

「そついやそつだよな。お前、俺と出かける時いつも『伊織も呼んで良い？』って聞いてきたしな」

「へえ、そうだったんだあ」

ニヤリと笑い、伊織は青蘭の顔を覗き込む。

「そうだった……かも知れない」
呟くように青蘭がそう言ったのを聞き、白蘭は豪快に笑った。それにつられ、伊織もクスリと笑う。

「も、もう良いだろその話は！」

「そう怒るなよ」

そう言い、顔の前で両手をついて白蘭はすまん、と謝罪の意を示す。そんな白蘭に嘆息しつつも、青蘭は微笑んだ。

「ねえ、白蘭さんのこと、麗さん達に伝えようよー！」

伊織のその言葉に、青蘭はコクリと頷いた。

「そつだな。麗さん達、驚くだろうな」

「そつだね」

そう言っつて、伊織はクスリと笑った。

「麗……？ あー、あの子か」

「兄さん、知ってるのか？」

青蘭の問いに、白蘭はコクリと頷く。

「ああ。お前らより一つか二つ上でな、よく俺に質問してきたもん

だ」

「例えば？」

「学問関係が多かったかな……」

懐かしそうに、白蘭はそう呟いた。

「麗さんも生きてるんだ。俺達、赤石の力で東国を再興するために、旅をしてるんだ」

その言葉を聞いた瞬間、ピクリと白蘭の表情が動いた。

「……そうか。で、麗はどこにいるんだ？」

「多分、宿に戻ってると思う。白蘭さんも一緒に行こうよ」

伊織がそう言うと、白蘭は小さく頷いて立ち上がる。

「よし、それじゃあ行こうか」

ソフトクリームも食べ終わり、三人が麗達が待っているであろう宿へと向かおうとした、その時だった。

「待って下さい」

後ろから、男の声が三人を呼びとめる。振り返ると、時計塔の絵を頼んだ画家らしく男が、完成した絵を抱えて立っていた。

「すっかり忘れるところだったな……。すいません」

ペコリと頭を下げ、青蘭は絵を受け取って代金を手渡す。

「わぁ、すごいね。写真みたい！」

絵を見、伊織は嬉しそうに顔の前で両手を叩いた。

「中々の物だな。記念か？」

白蘭が問うと、青蘭は小さく頷いた。

「麗さん達にも、時計塔を見せたかったんだよ」

なるほどな、と答え、白蘭は微笑んだ。

白蘭とそんな会話を交わす青蘭達を見、男が怪訝そうな顔をしていたことに、青蘭達は気が付かなかった。

宿へ向かいながら、青蘭と伊織は、白蘭と共に様々な昔話をした。東国での思い出を、三人で反芻した。

家族のこと、友達のこと、伊織のこと、いくら話しても話題が尽きることはなかった。

「そう言えば、兄さんが巨大な魚を釣ったことがあったよな？」

「あ、懐かしいねー。あの魚、私も間近で見てすっごく驚いたよ。だってあんなに大きい魚って滅多に見られないし」

「アレ、大きさの割にはおいしくなかったよな」

「だよー。ちょっと味が素気ないって言うか……」

そんな会話を、伊織と二人で続けつつ、不意に青蘭は問うた。

「そう言えば兄さんはどうしてヘルテュラに？」

問うてから数秒……白蘭からの答えはなかった。そればかりか、

白蘭の姿すら見えない。

「……あれ？」

伊織も不思議そうに小首を傾げ、辺りをキョロキョロと見回すが、白蘭の姿を見つけることは出来なかった。

「おかしいな……。さっきまで傍にいたはずなのに」

考え込むような表情を見せ、青蘭がそう呟くと、伊織はなんでだろうね、と不思議そうな顔で答えた。

「もしかしたら、先に宿に行ってるんじゃないのかな？」

伊織のその言葉に、青蘭は首を横に振る。

「それはないと思う。兄さんに、宿の場所を教えてない」

「あ、そっか……。じゃあ、どこに……」

再度辺りを見回したが、結局白蘭が見つかることはなかった。

二人が諦め、宿に戻ると既に麗達は帰って来ていた。既に昼食を済ませているらしく、麗は二人に、さっさと食べて来なさい、と素気なく言った。

「それより麗さん！ 兄さんがいたんだ！」

「……何ですって？」

麗の言葉に、青蘭はコクリと頷き、時計塔で白蘭に出会ったこと

を伊織と共に説明した。

麗はしばらく黙って聞いていたが、すぐに嘆息する。

「美しくないわ」

「何が……？」

キョトンとした表情で、青蘭が問う。

「本物のハズがないでしょう」

ピシャリと。麗はそう言い放つ。

「……何を根拠に？」

険しい表情で青蘭が問うと、その隣で伊織もそうですよーと不満そうに声を上げる。

「その白蘭……どんな姿をしていたの？」

「どんなって……昔と変わらない姿だ」

青蘭のその言葉を聞き、麗はもう一度嘆息する。

「そう、なら偽物ね。美しくないわ」

「偽物って……！」

「もうあれから何年経ったと思っているの？ 彼が昔と同じ姿のハズがないじゃない」

麗のその言葉に、青蘭はピタリと動きを止めた。そんな彼を見、光秀はやれやれと呆れたように呟き、肩をすくめる。

ポトリと。青蘭の手から時計塔の絵が取り落とされる。

「兄さんは……生きてる」

「貴方こそ、何を根拠に？」

冷たく、麗は言い放つ。

「……ッ！」

勢いよく、青蘭はその場から駆け出した。

「青蘭君っ！」

伊織は、部屋の外へ飛び出した青蘭を追いかけ、勢いよく駆け出した。そんな二人を止めようとして手を伸ばした光秀を、麗は右手

で制止する。

「おい、麗……」

「認めたくないだけなのよ。放っておきなさい」

麗の言葉に、光秀は逡巡した表情を見せたが、すぐに伸ばした手を降ろし、小さく溜息を吐いた。

「青蘭君！ 待って！」

後ろから伊織の声が聞こえる。しかし、青蘭は振り返りもせずそのまま走った。

本物のハズがないでしょう。

脳裏を過る、先程の麗の言葉。

白蘭が……兄が、偽物。そんなハズはない、そう信じていたい。

しかし、あの白蘭が本物である証拠はどこにもない。あるのは、偽物だという証拠のみ……。

もうあれから何年経ったと思っているの？ 彼が昔と同じ姿のハズがないじゃない。

麗の言う通りだ。もう、あれから何年も経っている。なのに、白蘭の姿が変わっていないハズがない。

何も変わらない物などない。青蘭自身も、勿論伊織も、あの日から随分と変わった。外見だけではない、内面もそれに伴って変わっている。だと言うのに、白蘭だけが、何も変わっていないハズがないのだ。

「兄さんが……偽物……」

思い出すのは兄の顔。優しく微笑んだ、当時と変わらぬ表情。そう、当時と変わっていないのだ。

「青蘭君！」

伊織はまだ追いかけてきている。だが青蘭は、振り向かなかった。振り向く余裕があるような、そんな精神状態ではなかった。

直接会って、確かめる。

もう一度、もう一度白蘭に会えばわかる。偽物かどうか……確認することが出来る。

どこにいるのかわからない。しかし、居ても立ってもいられず、宿を飛び出し、そのまま走った。

「うおツ!？」

不意に進行方向へ立ち塞がった男に、青蘭は勢いよくぶつかった。男はそのまま後ろへ尻餅を付き、青蘭も同じようにして後ろへ尻餅を付いた。

「青蘭君！」

青蘭の後ろを追いかけていた伊織が、やっとのことで追いつき、青蘭の元へ駆け寄る。

「なんだ、青蘭じゃないか」

青蘭がぶつかった相手は、白蘭だった。

「兄さん！」

「どうした？ 何血相変えてんだよ？」

微笑し、白蘭は言う。

「何かあったのか？」

「…………いや」

青蘭はかぶりを振り、ゆっくりと立ち上がる。すると、白蘭も同じようにして立ち上がる。

「兄さん、さっきはどうして急にどこかへ行ったんだ？」

「ああ、ちょっと急用を思い出してな…………」

申し訳なさそうな表情で、白蘭は後ろ頭をポリポリとかいた。

「兄さんを捜してたんだ。さ、麗さんの所へ行こう」

「ああ、そうだったな」

そう言っただけで微笑み、白蘭は小さく頷いた。

「…………伊織、行こうか」

「あ、うん」

後ろに白蘭を連れ、青蘭はゆっくりと歩き出す。その青蘭の隣を、付き添うようにして伊織が歩く。

「なあ青蘭、麗は…………綺麗になってるか？」

そう問いつつ、白蘭は青蘭との距離を数歩縮めると、ポケットの中へと手を伸ばす。

「ん、ああ。綺麗だよ」

「そつか。アイツ昔から結構美人だったからなあ……」

笑い混じりにそう答え、ゆつくりとポケットの中から鋭いナイフを、白蘭は取り出した。それを右手で逆手に持ち、また一步、青蘭へ近づく。

「成長した麗か……楽しみだな……」

音も立てず、ゆつくりと、ひっそりと、そのナイフを青蘭の

首筋へと……。

「兄さん」

ピタリと。白蘭はその手を止めた。

「そのナイフで……俺の首に何をするつもりだ？」

低く、そう青蘭は問うた。

問いには答えず、白蘭は数刻停止していたが、バックステップで青蘭から距離を取る。

「……浅はかだったかな」

そう言い、白蘭は肩をすくめてみせる。

「ああ。俺も、アンタもな」

振り返りもせず、青蘭はそう答えた。

「白蘭……さん」

悲痛な声で、伊織は呟いた。しかしその表情に、驚愕の色はなかった。

「兄さん、あえて質問させてくれ」

青蘭の言葉に、白蘭は答えなかった。しかしそれでも、青蘭は言葉が続けた。

「兄さんは、本当に『兄さん』なのか？」

しばしの、沈黙。

白蘭は黙ったまま、何も答えようとはしなかった。

「彼は偽物……という訳ではありませんよ。青蘭さん」
背後から、白蘭のものではない男の声が聞こえる。

「　　ッ!?!」

素早く、青蘭と伊織が背後を振り返ると、そこには薄らと笑いを浮かべたバルターの姿があった。

「……どうということだ?」

「確かに、お察しの通り本物ではありません。ですが、偽物という訳でもありません」

「お前の戯言に付き合っている程、俺は暇じゃない」

怒気の込められた青蘭の言葉に、バルターは肩をすくめて見せた。

「彼、白蘭は……貴方が生み出したのですよ?」

「な　　ッ!?!」

驚愕する青蘭を見、バルターはクスリと笑った。

「青蘭君が……生み出した……?」

青蘭の隣で、同じように驚愕に表情を歪めた伊織が、バルターへ問う。

「ええ、その通りです。青蘭さんが生み出した物であると同時に、貴女が生み出した物でもある」

そう言ったバルターの視線は、ハッキリと伊織を捉えていた。

「神力使い……!　しかし何故気付けなかつたんだ……?」

「当然ですよ。貴方が見ている幻覚から、私の神力が感じ取れる訳ないじゃないですか」

「幻覚……ッ!?!」

白蘭を一瞥する。白蘭は先程までと変わらず、ナイフを持ったままこちらをジッと見ている。睨んでいる訳ではない、見ているだけだ。

触れられた時の感覚もある、一緒にいて違和感もない。到底幻覚とは思えない……。が、幻覚とはそういうものだ。周囲から見れば違和感の塊、本人から見れば現実。幻覚とは、そういうものなのだ。伊織にも白蘭が見えているということは、恐らく伊織も青蘭と同じようにバルターの能力に影響を受けているのだろう。

「一体……いつ……!」

思索し、すぐに気が付いた。

ああ、すいません。驚かせてしまいましたか。

これは失敬。美しいお嬢さんがいたものでして、ついつい肩に手を……。

「……あの時かッ！」

ニヤリと。バルターが笑みを浮かべる。

「もしかして、時計塔の所で……触られた時……？」

肩を抱きつつ伊織が呟くと、バルターはええ、と答えた。

「あの時既に……俺はバルターの能力を受けていたということか……！」

夜、散歩に出かけた青蘭の肩へ触れたバルター。時計塔で、伊織の肩へ突然触れたバルター。この男、バルターは相手の体に触れることで、相手に幻覚を見せることが出来る能力……なのだろうか。

「それにしてもその幻覚……貴方の兄でしたか」

「それがどうした……ッ！」

「別に。ただ、貴方が今最も会いたい人間は、兄だったんですね」

そう言い、バルターはニヤリと笑んだ。

「ターゲット目標の人間に、その人間が最も会いたい人間の幻覚を見せる。油断しているところを殺させる予定だったのですが……。意外に早く気が付きましたね。まあ、そこのお嬢さんは都合が良いので、彼と同じ幻覚を見せましたが……」

ククツと笑い、バルターは動きを止めたままでいる白蘭の傍へ歩み寄り、その肩へ手を置いた。

「……酷過ぎるよ……。私も青蘭君も、ホントに嬉しかったんだよ！」

「なら感謝していただきたいですね。幻覚とは言え、会いたい人間に出会うことが出来たんですから」

その場に膝を付き、目を両手で覆って伊織は嗚咽し始める。そんな伊織を一瞥し、青蘭はバルターをギロリと睨みつける。

「ふざ……けるな……ッ」

強く拳を握り締め、更に強くバルターを睨みつけると、早足でバルターへ歩み寄ると、その胸ぐらを思い切り左手で掴んだ。

「感謝していただきたいだ……？ ふざけるなッ！ 俺達を弄びやがって……ッ……！」

「弄んだ……？ そんなつもりはありませんよ。私は、貴方達を効率良く殺そうと思っただけです」

そう言っただけでニヤリと笑ったバルターの顔面を、青蘭は渾身の力で殴りつけた。その際にバルターの胸ぐらを離れたため、そのままバルターは後方へ吹っ飛んで行く。

「おや……神力は使わなかったんですね……」

よるめきつつも、バルターは立ち上がる。

「一つ……質問をします。赤石の在処を……知りませんか？」

「赤石の……在処？」

コクリと。バルターは頷く。

「東国の王族である貴方なら……知っているのではないですか？」

麗も、青蘭へ赤石の在処について問うた。勿論青蘭は赤石の在処など知らない。白蘭は知っていたらしいが……。この男と言い、麗と言い、まるで赤石が東国と関係あるかのような口振りである。

「知らない。知っていたとしても、お前には教えない」

「でしょうね……」

「言いたいことはそれだけか？」

「ええ、これだけです」

そう答え、バルターは微笑する。

顔面に一撃入れられておきながら、この男の余裕は何なのだろう。

何か勝算があるのだろうか……。だが 関係ない。この男だけは、許すわけにはいかない。

神力を発動させ、素早くバルター目掛けて青蘭が駆けつけたその時だった。

「おっと」

青蘭の前に、白蘭が立ち塞がる。反射的に、青蘭は動きを止めた。

「ッ!?!」

「悪いが、お前の相手は俺らしいぜ」

そう言っつて、白蘭はナイフを構えた。

「青蘭さん……戦えますか？ 自分の、兄と」

邪悪に、バルターが微笑んだ。

逆手に持ったナイフを、白蘭はゆっくりと青蘭へ向ける。

「やるか？ 俺と」

ニヤリと。白蘭は口元に笑みを浮かべる。

答えることが……出来なかった。

わかっている。目の前にいる白蘭は

躊躇する必要はない。

偽物。戦うことに、

しかしそれでも、構えることすら出来ない青蘭が、そこにはいた。

「……やめて……！ もう……十分でしょ……？ 東国を潰して、お父さんもお母さんも、友達も皆殺して……もう十分じゃないっ！ これ以上……これ以上私達を苦しめないでっ！」

目に大粒の涙を浮かべた、伊織の悲痛な声が辺りに響いた。

「いえ、不十分です」

ピシヤリと。バルターは言い放つ。

「我らがゲルビアの国王、ハーデン様は完璧主義者……。生き残りなど許しません」

それに、とバルターは付け足す。

「まだ、貴方達から赤石の在処を聞いていません」

そう言ったバルターを、青蘭はギロリと睨みつける。

「知らないと言っているだろ……！ こっちが教えてほしいくらいなものだ！」

「おや、本当に知らないんですか？ 困りましたね……」

肩をすくめ、バルターは嘆息する。

「まあ、そうですね……知らないのなら……」

素早く、白蘭のナイフが青蘭目掛けて振り抜かれる。青蘭は間一髪でそのナイフをバックステップで避け、身構える。

「死んでいただきましょう」

「……幻覚で、人が殺せるのか」

「殺せないという証拠は？」

ない。

バルターの問いには答えず、青蘭は舌打ちする。それを見、バルターはニヤリと笑んだ。

「行くぞ……青蘭！」

白蘭は青蘭との距離を詰めると、青蘭の顔面へナイフを突き立てると、ナイフの刃先を青蘭へ振り降ろす。青蘭はナイフを持った白蘭の右手を、左手で掴み、白蘭のナイフを止める。そしてすかさず白蘭の顔面へ右拳を叩き込もうとし　ピタリと動きを止めた。

その隙を見逃さず、白蘭は左拳を青蘭の腹部へ叩きこむ。腹部に鈍い衝撃が走り、青蘭がよろめく。白蘭の右腕を掴む青蘭の左手が緩んだ隙に、白蘭は青蘭の左手を振り払うと、数歩後退した青蘭との距離を一気に詰め、ナイフを薙いだ。

青蘭はなんとかナイフを回避するが、やや反応が遅れたため、ナイフの刃先は青蘭の右肩を軽く裂いた。

赤い血が、青蘭の肩へ滲む。

「青蘭君っ！」

伊織の言葉に反応する暇すら与えず、白蘭は青蘭の頭部目掛けて右回し蹴りを繰り出す。青蘭は身を屈め、白蘭の右足を避け、距離を詰める。

白蘭は右手で左拳を押さえ、左肘を後ろへ突き出し、青蘭に避けられた右回し蹴りの勢いをそのままに、左足を軸にして身体を回転させる。突き出された左肘は、回転したことによって青蘭の頭部に直撃する。

鈍い音と共に青蘭がその場に倒れ、立っている白蘭の背後に青蘭が倒れている　という形になる。

「おや……神力は使わないのですか？」

薄らと笑みを浮かべたまま、バルターが問う。

青蘭は身体を起こし、バルターをギロリと睨みつけながらよろよろと立ち上がる。

兄に、神力を使えというのか。

否、兄ではない。バルターの神力が……己の願望が生み出した幻想。断じて、兄ではない。

だが、出来ない。偽物であろうと、兄の形をしたソレに攻撃することを、青蘭は無意識の内に拒んでいた。

「まあ良いです。楽に死んでくれるのならそれで」

そう言ったバルターを、今度は伊織が睨みつける。目に涙をためたまま、それでも気丈に、伊織はバルターを睨みつると、バルター目掛けて駆け出した。それに対して、バルターは白蘭を動かさなかつた。

「なんとまあ勇敢な」

眼前まで迫って来た伊織の腹部へ、バルターは右拳を叩き込む。

「うっ……」

短く呻き声を上げ、伊織はその場にドサリと倒れた。

「伊織ッ！」

伊織の元へ駆け寄ろうとした青蘭の右腕を、白蘭はガツシリと掴んだ。

「……兄さんッ！」

「悪いな青蘭。俺はこうい^{そんぱい}う幻覚だ。バルターの邪魔を、させる訳にはいかない」

どこか悲しげに、白蘭はそう青蘭へ告げた。

「さて、ついですすし、眠っている間に殺してしましましょう」

ゆっくりと。床に落ちた絵を拾い上げる。ソレに描かれているのは、この町、ヘルテュラの名物、時計塔。細部までしっかり描かれ、色付けされたその絵は、さながら写真のようだった。

しばらくそれを見つめた後、麗は嘆息する。

「……それは？」

そう問うた光秀に、麗はその絵を見せた。すると、光秀は小さく

感嘆の声を上げる。

「俺達のために……って訳か？」

「私に聞いてどうするの？」

「それもそうだな」

そう言い、後頭部で両手を組み、光秀はベッドの上で仰向けに転がった。

「心配か？」

光秀の問いに、麗は答えない。

「死んでるハズの白蘭を見たって言ってたな。そう言う妄想が幻覚になって、現実に現れる程伊織ちゃんも青蘭も、精神的に衰弱してねえハズだ。もし、アイツらが本当に白蘭を見たってんなら……」

「襲撃されている可能性があるわね」

「そういうこつた」

嘆息し、光秀はどうする？ と麗へ問うた。

「捜しに行くか？」

光秀の問いには答えず、麗はゆっくりとドアを開け、部屋の外へと出て行った。それを見、光秀は微笑むと、ベッドから出て麗の後を追った。

バルターはポケットからナイフを取り出すと、ゆっくりと伊織の首筋へと当てた。

「やめろッ！」

青蘭の言葉には答えない。バルターはニヤリと笑うばかりだった。

「どいてくれ！ 兄さん！」

静かに、白蘭は首を横に振った。

「だったら　！」

もうなりふり構ってられない。

例え、兄の姿をしようとも！

白蘭の顔面目掛けて、青蘭は右拳を放つ。首を傾け、それを避け

た白蘭の顎目掛けて、間髪入れずに青蘭は左拳でアツパーを繰り出す。それさえも回避し、白蘭は青蘭の肩を、両手でガツシリと掴んだ。

「ッ！」

白蘭は、青蘭の身体を一気に白蘭側へ倒し、その腹部へ右膝で蹴りを入れた。鈍い音がし、青蘭は小さく呻き声を上げ、その場へうつ伏せに倒れた。白蘭は屈んで、青蘭の身体を仰向けにすると、その上にまたがり、逆手に持ったナイフを振り上げる。

「じゃあな、青蘭」

そう一言呟き、白蘭はナイフを振り降ろ

「……え？」

さなかつた。ナイフの刃先が、青蘭の顔に刺さる直前で停止し、プルプルと震えている。

「兄……さん？」

「……」

白蘭は何も答えない。ただ、ナイフを振り降ろさず、その手をプルプルと震わせている。

「何をしているのです？」

怪訝そうな表情で、バルターが問う。すると、白蘭は不意に、ナイフをその場で放り投げた。

「ッ！？」

「青蘭、大事なことからよく聞いとけよ」

微笑み、白蘭は青蘭の耳元へ顔を近づける。

「……………」

「え？」

白蘭が耳元で何かを囁き、それを聞いた青蘭が表情を驚愕に歪める。

「恐らく今伝えたことが、今一番お前が求めている情報だ。そうだから？」

「兄さん……………」

「俺自身にも、俺が幻覚なのかそうじゃないのかわからない。だが……」

ニコリと。爽やかに微笑む白蘭。

「出来れば、偶然天から帰って来た、本物のお前の兄……だったら良いな」

「兄さ」

言いかけた、その時だった。

ザクリと。飛来したナイフが、白蘭の背中へ突き刺さる。

「兄さん！」

小さく呻き声を上げつつ、白蘭はゆっくりと倒れ込んで行く。

倒れつつ、白蘭の身体は徐々に薄れて行く。

幻覚が 消える。虚構は、現実へと還る。

「……………」

青蘭の身体へ倒れ込み、その姿を完全に消す寸前、白蘭は青蘭の耳元で、何かを囁いた。

「兄……さん」

身体を起こし、青蘭はそう一言だけ呟いた。まるで、夢から覚めたような……そんな表情だった。

「何故だ……何故私の幻覚が、私に意思に反した動きを……！」

青蘭は立ち上がり、表情に驚愕の色を浮かべたバルターを、静かに睨みつける。

「ナイフを投げたのは、お前か？」

「私の能力で創られた幻覚だ！ 私がどうしようとして勝手だろう！」

吐き捨てるようにそう言うバルター！

「だったら……」

青蘭がそう呟いた次の瞬間には、青蘭は駆け出していた。そして、あつという間にバルターとの距離を詰める。

「尚更、お前を許すことは出来ないッッ！」

一撃。目の前のバルターの顔面へ、右拳を叩き込む。

二撃。よろめいたバルターの腹部へ、左拳を叩き込む。

三撃。一步後退し、バルターの頭部へ右回し蹴りを喰らわせる。そのままバルターはその場に勢いよく倒れた。

神力を発動させた状態での攻撃だ。死んでいてもおかしくはない。そう思い、青蘭は倒れているバルターを一瞥した。その時だった。

「ッ!？」

徐々に、バルターの身体が薄れて行く。

「幻……覚……ッ!？」

青蘭が気付いた時には、既にバルターの姿は消えていた。どうやら……逃げられたらしい。

ドサリと。青蘭はその場に両膝を付いた。

兄の死を、二度経験した……。

ゆっくりと。青蘭は空を見上げた。

じゃあな。

耳元で囁かれた、兄の最後の言葉。

「兄さん……」

そう呟いた瞬間、今までせき止めていた感情が、一気に青蘭の中から溢れだした。

「うわあああああああ!」

咆哮し、青蘭はただ涙を流した。

「ハア……ハア……!」

必死で、駆けて行く。

まさかこんなことになるとは思わなかった。自分の創り出した幻覚が、意に反して動いた拳句、ギリギリまで追い詰められてしまった。

間一髪、幻覚で青蘭を騙し、逃げ伸びることは出来たが、見つかるてはまずい。ひとまずどこかに身を隠さなければ……。そう考え、バルターが走っている時だった。

彼の前方に、二人分の人影が現れる。

「…………お前だな？」

ゆっくりと。人影の内一人、男がバルターへ問う。

「何のことですか……？ 私は……急いでいるんですが……」
息を切らしながら言うバルター。

「しらはつくれる気？ 美しくないわ」

そう言い、もう一人の人影、女は嘆息する。

「ま、仕方ねえわな」

そう言った男の腰にある物を、バルターは知っている。文献などでしか見たことはないが、アレは東国の武器

刀。

ゆっくりと。男は刀の柄を右手で掴み、

「お前が悪い」

素早く抜いた。

その瞬間、男の刀から斬撃が放たれた。

比喻ではない、本物の斬撃が、男の刀から放たれたのだ。

凄まじいスピードで斬撃はバルターへと飛来する。

「な」

スパリと。バルターの身体は両断された。斬り口から真っ赤な鮮血を吹き出し、バルターの身体はその場へドサリと、二つ倒れた。

「やり過ぎたか？」

男が問うと、女は肩をすくめてみせた。

「いえ、むしろ美しいわ」

それを聞き、男は微笑する。

「相変わらずわかんねえな。お前の基準は」

呆れたようにそう言った男へ、女は微笑んだ。

ヴィカルド。イレオーネ大陸西端に位置する、観光地として有名な町だ。

そのヴィカルドの中に、カンバーの友人は住んでいるらしい。

飛行船により、テイテスを出発したチリー達は、最短距離でイレオーネ大陸のヴィカルドへと向かった。

「……何かおかしい」

「おかしいって、何がだよ？」

窓からヴィカルドを見降ろし、怪訝そうな表情で呟いたトレイズに、チリーが問う。

飛行船の中はあまり広くない。現在チリー達がいる客席、その奥にある操縦席。飛行船の後部には、食堂とチリー達と乗組員達の部屋が計五つと、必要最低限のものしかない。が、テイテスの経済状況をトレイズから聞いたところ、この設備はかなり無理をしているらしい。一体いつ頃からこの飛行船を用意していたのやら……。

それはさておき、トレイズの感じた違和感である。

「確かにおかしいですね……」

腕を組み、トレイズと同じように窓からヴィカルドを見降ろしつつ、カンバーが呟く。

「ヴィカルドってさ、僕ら行ったことないんだけど……」

そう言いつつ、ニシルは窓からヴィカルド一帯を一瞥し、怪訝そうな表情でカンバーへと視線を移す。

「砂漠に囲まれてたっけ？」

この飛行船の窓から見下ろすが出来る目的地　　ヴィカルド。

そこは、どういう訳か砂漠に囲まれていたのだ。

「いえ。ヴィカルドの周囲に砂漠はないはずです。イレオーネ大陸内に砂漠は存在しますが、そこはヴィカルドの周囲ではありません」

俺が前に来た時は違ったのですが……。と呟き、カンバーは嘆息

する。

「それって何年前の話なの？」

「確か三年程前です」

そう答え、カンバーは再度怪訝そうな表情でヴィカルドへと視線を移す。

「三年か……。カンバーが見ていない三年間で、一体何があったんだろ……」

うくと唸り、ニシルは考え込むような表情を見せたが、すぐに肩をすくめ、わかんないやと呟いた。

「考えても仕方なさそうだな……。ヴィカルドに降りて、町の人達に聞いてみようぜ」

チリーがそう言うと、ニシルはクスリと笑みをこぼす。

「確かに、チリーは考えても仕方ないよねー」

「どついう意味だ？」

「いや、だつてチリーってバカじゃん」

そう言って大笑いし始めたニシルを見、ミラルは嘆息する。

「上等だニシル！ ぶっ飛ばしてやるッ！」

眉間にしわを寄せ、チリーはニシルの元へ早足で向かうが、すぐにニシルはチリーから距離を取り、ニヤニヤと笑みを浮かべる。

「おい、その辺にしる」

ニシルとの距離を詰め、殴ろうと拳を振り上げたチリーを一瞥し、トレイズがピシヤリと言い放つ。

「着くぞ」

上から見るよりも、下で直に見た方がわかりやすい。

ヴィカルドの周囲は、確かに砂漠に包まれていた。

町は普通に機能しているようなのだが、その周囲は砂に包まれている。

「砂漠化していること以外は、前と同じようですね……」

周囲を見回しつつ、カンバーが言う。

「ヴィカルドの近くは砂漠化するような地域じゃなかったハズだ……。海も近いし、山脈の風下にある訳でもない……」

「雨の降らない地域って訳でもないですし……。一体何があったんでしょう」

まるでわからない、といった様子でカンバーは肩をすくめて見せた。そんなトレイズとカンバーの回話を聞きつつ、チリーはカンバーとは違う意味でまるでわからない、といった様子で肩をすくめた。

「まあ、とりあえずカンバーの友達とこ行ってみようぜ。赤石の在処も聞く必要があるし、ついでに聞けば良いじゃねえか」

楽天的な表情でチリーが言うと、カンバーはそうですね、と答え

た。
「ここで考え込んで仕方がありません。俺の友人の元へ向かいましょう」

「ねえ、カンバーの友人ってどんな人？」

「ああ、そう言えばまだ話してませんでしたね」

ニシルの問いにそう答え、カンバーは苦笑する。

「デニスと言う男です。俺みたいなのと違って、屈強で頑丈なナイスガイです」

「つまりマッチョなのね……」

やや嬉しげな様子で、ミラルが呟くと、ニシルは怪訝そうな表情でミラルを見る。

「何で嬉しそうなの……？」

「何か良いじゃない。マッチョって……。こう、男らしくて……」

うっとりし始めたミラルに、全員が苦笑した。

町の中は、地面が砂漠化していることを除けば普通の町と変わらない。

ヴィカルドの市場の中を、チリー達は歩いていった。様々な店が並んでおり、野菜や果物等が売られていた。が、水気の多い物は基本的に量が少ないか、売り切れとなっていた。

「喉乾いた……」

ボソリと。チリーが呟く。すると、その隣でニシルも同じように、喉乾いた、と呟いた。

「我慢なさい。喉が渴いてるのは、別にアンタ達だけじゃないのよ」

呆れ顔で、ミラルが諭すように二人へ言う。

「えらく乾燥してますね……。本当にここ、ヴィカルドなんですよか……」

不安そうにカンバーは嘆息する。

「……場所はあっているハズだ」

そう言っつて、トレイズは地図を取り出し、位置を確認する。

「地図的には、ヴィカルドはこの場所であってるんですけどねえ……」

そう言っつて、カンバーは額の汗を拭った。

そんな様子でしばらく歩き続けていると、カンバーはある家の前でピタリと足を止めた。

「皆さん。着きましたよ」

どうやらそこがデニスの家らしい。

「よっしゃ！ そのデニスって奴に水もらおうぜ！」

「うん、賛成。僕もう喉乾いちゃって、ミイラになりそうだよ」

そう言っつて、二人は家を眺めつつ安堵の溜息を吐いた。

「ええ、水くらいもらえるでしょう」

そんな様子の二人に微笑しつつ、カンバーは呼び鈴を鳴らした。

「……………変ですね」

数秒待つが、中から人が現れる気配はない。

「留守……………でしょうか」

呟き、カンバーはドアノブに手をかけ、回す。すると、驚く程簡

単にドアが開いた。

「おいおい、鍵かかってねえじゃねえか」

開かれたドアの奥を、チリーが覗き込む。と同時に、チリーは表情を一変させた。

「ッ！」

「どうしたの？」

中を覗き込んでいるチリーへ、ミラルが問う。

「お前ら……中、見てみる」

そう言っただけで退いたチリーの後から、ミラルやニシルも中を覗き込む。

「こ、これって……！」

家の中は、荒らされていた。中に入ってすぐ傍にある階段の手すりが、見事に破壊されており、木屑と化して床に散乱している。このことから、奥は更に酷い有様なのだと伺える。

「デニスに……何かあったんでしょうか……！」

不安げに呟いたカンバーを先頭に、チリー達は急いで家の中へと入って行く。

家の中は想像通り酷い有様で、家具等が荒々しく倒され、その内のいくつかは破壊されていた。まるで、何者かが家の中で暴れたかのような……そんな様子であった。

「一体……何が……」

チリー達がりビングへ入ると、不意にガタンと物音が聞こえる。

素早くチリー達が物音のした方向へ視線を移す。

「ひ……！」

そこには、机の下で蹲っている、小さな女の子の姿があった。

男が、椅子に縛りつけられていた。

殺風景な部屋、辺りはコンクリートで包まれており、絵の一つも飾られていない。

扉が二つ。奥へと続いているのであろう扉と、外へと続いているであろう扉。その内、奥へと続いているであろう扉から、大柄な男が現れる。

短く刈りあげた髪、白いロングコートを着た筋肉質な男だ。火のついた葉巻を咥え、男の傍まで歩み寄ると、身を低くして視線を合わせた。

「よう」

ニヤリと。厭らしい笑顔でその男は男へ声をかける。

「ここから……出せ」

「……デニス。テメエ自分の立場わかってんのか？」

デニスと呼ばれた男は、目の前の男を睨みつける。

「私を、娘の所へ帰せ」

そう言い放ったデニスの胸ぐらを、男は勢いよく掴んだ。

「いい加減にしろッ！ テメエが赤石の在処さえ喋りやあいつでも帰してやるよ！」

「それは出来ない」

眉一つ動かさず、そう答えたデニスの顔を、男は右腕で思い切り殴りつけた。勢いよく、デニスは椅子ごと後ろへ吹っ飛ばす。

男が、椅子ごと倒れているデニスの元へ歩み寄ろうとした時だった。ガチャリと扉が開く。

「ザハールさん。その辺にしといてやって下さいよ」

短い金髪を逆立てた、如何にも軽薄そうなサングラスの男が、部屋の中に入ってくる。ザハールと呼ばれた男は、その言葉を聞いて舌打ちをする。

「どうせ耐え切れずに喋りますよ、そいつ」

そう言って、男はクスリと笑った。それを見、ザハールはそれもそうだな、と呟くと、葉巻をその場に吐き捨てた。

「片付けとけ」

「はいな」

男はそう答えると、ザハールの吐き捨てた葉巻を拾い上げると、

扉の奥へと戻って行った。それと入れ違いに、今度は別の男が扉の奥から現れる。

「ワディムか」

「はい」

ワディムと呼ばれたその男は、ペコリとザハールへ一礼する。

誠実そうな顔立ちの、肩まで伸びた髪が特徴的な男だった。

数秒後、葉巻を捨ててきたらしい先程の男が、扉の奥から現れる。

「よし。お前ら、気晴らしに飲みに行くぞ」

「はい」

「はいな」

ワディムは無表情で、サングラスの男は嬉しそうに答えると、ザハールを先頭に、別の扉から部屋の外へと出て行った。

「もしかしてズラータちゃん……ですか？」

そう、カンバーが問うと、少女はゆつくりと視線をカンバーへ向ける。

「カンバーさん……？」

やや安堵した表情で少女に問われ、カンバーはニコリと微笑んだ。

「はい、カンバーです」

「カンバーさんっ！」

少女は机の下から這い出すと、すぐにカンバーへ飛び付いた。

「……お前、ロリコンだったのか」

「違います！ 何でそういう言葉だけは知ってるんですか貴方は！」

若干引き気味の表情で呟いたチリーを、カンバーはそう怒鳴り付けた。

とりあえずチリー達はお互いに自己紹介を済ませた後、散らかっているリビングを片付け、ソファの上に座った。とは言え、人数的に全員は無理なので、ジャンケンに負けたチリーとトレイズは立たままだ。

「ズラータちゃん、一体何があつたんです？」

カンバーが問うと、ズラータと呼ばれた少女は悲しげにうつむいた。

「お父さんが、連れて行かれたの」

「……ッ！ デニスが連れて行かれたんですか！？」

カンバーの問いに、ズラータはコクリと頷く。

「それで、家の中が荒らされていたのね……」

まだ誰かが暴れたのであろう痕が残るリビングを、ミラルは見回しつつ言う。

「それで、一体誰にです？」

焦り気味な様子でカンバーが問うと、ズラータはボソリと、ザハールと呟いた。

「ザハール？」

腕を組み、チリーが首を傾げる。

「去年、ゲルビアからこの町に来た領主だよ……」

「ゲルビア……！」

少女の言葉に、トレイズはそう呟く。

ヴィカルドは、ゲルビアの領土である。随分と昔の話だが、ゲルビアとの戦争で敗戦したヴィカルドは、ゲルビアの植民地となっているのだ。恐らくそのザハールと言う男が領主として現れる前にも、ゲルビアの領主がこの土地を支配していたのだろう。

「何でその領主が、デニスって奴を」

言いかけ、途中でハツとチリーは気付く。

「赤石か！」

チリーの言葉に、カンバーはコクリと頷く。

「そう考えるのが妥当でしょうね。むしろ、今までデニスが無事だったことの方が不思議です」

「ザハールは、来た時からお父さんが何かを知っていること、知ってたみたいで……。最初は月に一度のペースでうちに来てたんだ……」

それが段々エスカレートし、現在に至ったと言う。

「ズラータちゃん。俺が前に来た時から三年間、ザハールが来たこと以外に変わったことは？ 例えば、周りが砂漠になっていることについては、何か知りませんか？」

カンバーの言葉に、ズラータはコクリと頷く。

「周りの砂は、ザハールがやったの」

「ッ！？」

ズラータの言葉に、その場にいた全員が表情に驚愕の色を見せる。
「神力使いって訳だね」

ニシルが言うと、傍でトレイズが頷く。

「それで、ザハールはお水や果物を高い値段で売ってるの……」

「周囲を砂漠化して、水や果物等を高額で売りさばいて、それで多額の収入を得てるってこと……？」

ミラルの問いに、カンバーは恐らくそうでしょう、と答える。それを聞いた途端、勢いよく目の前の机が、チリーによって叩かれた。

「ふざけんなッ！　んな酷いことが許されるかよ！　その上……！」

チラリと。チリーはズラータの方へ視線を移す。

「デニスを攫って、こんな子供に寂しい思いさせやがって……ッ！」

チリーの怒りに呼応するかのように、その場にいるズラータ以外の全員が険しい顔付きになる。

「許さねえッ！」

怒りを露にしてそう叫ぶと、チリーは勢いよく駆け出した。

「ば、バカ！　どこに行くつもりよ！」

ミラルの止める声も聞かずに、チリーはそのまま家の外へと飛び出して行く。

ボタンと勢いよくドアの閉まる音が聞こえると同時に、ミラルは呆れ顔で嘆息する。

「もう、ホントにバカなんだから！」

「このまま飛び出したところで、ザハールの居場所はわかってないの……」

同じく嘆息し、ニシルは肩をすくめる。

ヴィカルドのとある酒場で、ザハールは二人の部下と共にワインを飲んでいた。

真っ赤なワインの注がれたグラスを、ゆっくりと口へ運んでいく。

「……良質な物を仕入れたな」

ザハールがそう呟くと、聞こえていたらしく、店主の男はありが

とうございます、と微笑んだ。

ザハールの隣では、同じようにサングラスの男とワディムが、ワインを飲んでいる。

「ネストル。飲み過ぎなのは？」

ワディムが問うと、ネストルと呼ばれた男は大丈夫大丈夫、と軽く答えた。

「金は腐る程あるんだからよ。ワインくらいケチケチすんなつもの。そう言つてネストルが豪快に笑うと、その隣でザハールも違いねえ、と豪快に笑った。それに釣られ、ワディムも笑みをこぼした

その時だった。

「そのワインのために、何人の人が苦しい思いをしてると思つてんだッ！」

ザハールと部下、そして店主しかいなかったハズの店内に、別の人間の怒号が響き渡る。

怒号の聞こえた方向、店の入り口へとザハール達は視線を移す。

「何だ、お前は？」

大して気にした風もなく、ワインを飲みつつザハールは白髪の少年　　チリーへ静かに問うた。

「んなこたあどーでもいいんだよ！ さっさと町を元に戻しやがれッ！」

「……ハッ！ 何を言うかと思えば……」

笑い飛ばし、ザハールはワインを一口、口に含む。

「この町の領主はこの俺だ。何をしようがテメエには関係ねえ」「なんだと……ッ！」

怒りを露にするチリーの前へ、素早くネストルが現れ、チリーを睨みつける。その表情に、先程までの軽薄そうな様子は一切感じられない。

「小僧。いい加減にしろよ？」

「いい加減にするのはお前らの方だろ。退け、そのふざけたグラスを叩き割るぞ」

チリーの言葉に、ネストルは表情を険悪にする。

「ザハールさん……。コイツ、殺つても良いツスカね？」

「まあ待てネストル。面白エじゃねえか。続けさせな」

殺意を発したネストルに、ザハールはそう言った。

「で、テメエはこの町を元に戻してえんだな？」

「当たり前だろッ！」

再び怒号を飛ばしたチリーを見、ザハールは豪快に笑う。

「だが、俺に戻すつもりはねえ。どうすんだ？」

ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、ワインを飲みつつザハールが問う。そしてザハールが顎でネストルへ合図すると、ネストルはコクリと頷き、チリーの前から退いた。

「お前をぶつ飛ばせば良いんだろッ!!」

大剣を出現させ、チリーは勢いよくザハールへと突っ込んだ。

「……神力使い……!?!」

大剣を振り上げ、ザハールの頭部目掛けて振り降ろした

その時だった。

「ハッ！ 無意味だッ！」

「ッ!?」

砂。

チリーの大剣を受け止めたであろうザハールの右手からは、パラパラと砂が零れていた。

「これ……は……ッ!?!」

大剣が、砂へと変えられたのだ。ザハールの神力により、砂へと変化した大剣はパラパラと音を立てて床へと落ちていく。その内一部位は、グラスの中へも落ちていった。

ザハールが触れた部分のみ、大剣が砂へと変えられている。

驚愕し、その場に停止しているチリーを見、ザハールが笑みを浮かべた時だった。

「チリーッ！」

勢いよく入口のドアが開き、店内へニシルとミラルが入って来る。
「仲間か」

呟き、ザハールは砂の混じったワインの入っているグラスを手で払い、床へと落とす。グラスは床で砕け、辺りに破片とワインを飛び散らせた。店主は一瞬驚愕の表情を見せたが、すぐに箒を用意し、グラスの破片を片付けに来た。

ザハールが立ち上がると、隣に座っていたワディムも同様に立ち上がる。

「ワディム、ネストル。行くぞ」

ザハールがそう言うのと、二人はコクリと頷き、ザハールと共に店を後にした。

「今の奴……もしかしてザハール？」

ニシルが問うと、チリーはコクリと頷く。

「……ああ」

大剣の残りを消し、チリーはザハールの出て行った方向、店の外を一瞥する。

「完敗だった……！」

ギユツと拳を握り締め、悔しそうに呟く。

「チリー、どうしてここにザハールがいるってわかったの？」

「いや、勘だけど……」

あっけらかんとした様子でそう答えたチリーに、ミラルは肩をすくめる。

「お前からこそ、何で俺がここにいると？」

「聞き込みしたんだよ。チリーの特徴はわかりやすいから、すぐに聞き出せたよ」

「なるほどな……」

そう言い、チリーは嘆息する。

「あの野郎……このままじゃ終わらせねえ……ッ！」
歯を食い縛り、チリーは悔しげにそう言った。

酒場を後にし、チリー達はデニスの家へと戻った。元より、ヴィカルドではデニスの家に泊めてもらう予定（本人の承諾は得ていないが）だったため、チリー達は一晚、デニスの家に泊まることにした。

タダで泊めてもらうのも忍びないので、荒らされた状態の家を全員で片付けた。とは言っても、チリーとニシルはほとんど遊んでいたのだが……。

ミラルとカンバーに、適当な夕食を振舞ってもらい、これからのことについて話し合うことにした。

「まずは、デニスを救出することが最優先です。ズラータちゃんのためにも」

カンバーの言葉に、一同はコクリと頷く。

「だがそこで問題なのが……ザハールか」

静かに、トレイズが言う。

「チリーさん。ザハールの能力、見当は付きますか？」

「……ああ。直接見てきたしな」

口惜しそうに答え、チリーは言葉を続ける。

「砂だ。砂の能力……。あの野郎、俺の大剣を砂に変えやがった……！」

ギユツと拳を握り締め、チリーはあの時のことを思い出す。

ハッ！ 無意味だッ！

ザハールに受け止められ、砂と化した己が大剣。それを呆然と見つめることしか出来なかった自分。あまりの悔しさに、チリーは拳を一層強く握り締める。

「砂、ですか。それなら、ヴィカルド周囲の砂漠化も納得がいきますね」

「でも、一人の能力でここまで出来るものなのかしら……」

小首を傾げてミラルが問うと、コクリとトレイズが頷く。

「……前に、暴走していた俺がドウナイを氷漬けにしたことがあっただろう？ それと同じで、神力は使い手によってはそれだけのことが出来る可能性がある……。あの時の俺は、単に実験で能力が底上げされていただけだったが……」

あの時のことを思い出したのか、そこでトレイズの表情に少しだけ影が差す。

「チリー、ザハールに暴走した様子や、洗脳されているような様子はなかったか？」

「……なかったな」

呟くようにチリーが答えると、トレイズは短く溜息を吐いた。

「ならザハールは、かなりの使い手だ」

トレイズの言葉に、一同はゴクリと唾を飲み込む……ただ一人、チリーを除いて。

「関係あるかよ……ッ！ あの野郎……ぶっ飛ばさねえと気が済まねえッ！」

怒りを露にし、チリーは怒号を飛ばす。すると、それと同時に近くでズラータが小さく悲鳴を上げた。

「おいチリー、なに興奮してんだよ。ちよつと落ち着け」

いきり立つチリーをなだめるように、ニシルはチリーの肩へ手を置いた。

「悔しいのはわかる。でも今はそれを露にするとこるじゃない……そうだろ？」

諭すように言うニシルへ、チリーは静かに頷き、視線をニシルの方へ向ける。

「……悪い」

「わかれば良いよ」

そう言って、ニシルは微笑んだ。

「とにかく、デニス救出するのなら、ザハールとの戦いは避けられませんか……」

カンバーの言葉に、一同はコクリと頷く。

「まずは、アジトを突き止める必要があるな」

「そうね。少し聞き込みをすればわかると思うわ」

ミラルの言葉に、カンバーはそうですね、と答える。

「明日、聞き込みを試みましょう。ザハールのアジトがわかるかも知れません」

夜。よく眠れずに目を覚ましたズラータが二階へ下りると、チリーがいないことに気が付いた。ズラータとミラルは同じベッドで寝、ジャンケンに勝ったニシルはデニスのベッドへ、残りの三人は一階の適当な位置で寝ることになっていたのだが、ソファの上で寝ているのはトレイズとカンバーの二人だけだ。気になって捜してみたが、チリーの姿は見えない。

外にいないのではないかと思い、ズラータは部屋に戻って上着を着込むと、今度はニシルが寝ている部屋……デニスの部屋へと向かった。

ニシルを起こさぬよう、クローゼットからデニスの上着を取り出し、ズラータは一階へ下りると、すぐに外へ出て行った。

案の定、ズラータの予想通りチリーはそこにいた。

家の前で、ボンヤリと空を見上げている。

「……寒い、ですよ？」

ズラータが後ろからそう声をかけると、チリーはゆっくりと視線をズラータへ向ける。

「よっ」

「あの、これ……」

陽気に返事をしたチリーへ、ズラータがデニスの上着を差し出すと、チリーはキョトンとした表情でその上着を見つめる。

「俺に？」

コクリと。ズラータは頷く。

「ありがとな」

チリーはニツと笑い、上着を受け取ると、ちよつとデカいな、などと呟きながらそれを着込んだ。

「何、してるんですか？」

「ちよつと眠れなくつてな」

そう答え、チリーは再度空を見上げた。

「さつきは驚かせて、悪かったな」

「あ、いえ……」

少しの沈黙。が、すぐにチリーは口を開く。

「なあ、ズラータ。お前、母親は？」

沈黙を破ったチリーの問いに、ズラータはうつむく。

「……いないよ。私が小さい時に、死んじゃったから……」

チリーはズラータへと視線を戻し、ニツと笑った。

「だったら、俺と同じだ」

「……え？」

短く声を上げ、ズラータはうつむかせていた顔を上げる。

「俺も、母親がどんな顔だったか思い出せないくらい前に、死んじゃってる」

切なげにそう言い、チリーは言葉を続ける。

「だから、わかるんだ。親父を攫われて、独りになったお前がどんなに寂しいか」

デニスを攫って、こんな子供に寂しい思いさせやがって……ッ！

昼間のチリーの言葉が、ズラータの脳裏を過る。

だからだ。ズラータの気持ちがかかるからこそ、チリーは耐えられなかった。ザハールのしたことへの怒りを、抑えきれなかった。

止める声も聞かず、飛び出してしまう程に。

優しい人だなと、ズラータは感じた。

荒々しく、乱暴な印象さえ受ける。それでも、その真っ直ぐな瞳の中に、優しさを感じ取ることが出来る。

「ズラータ。俺達に任せてくれ」

「チリーさん……」

スツと。チリーは星空へ手を伸ばす。

「必ず、お前の親父を助けだす。そして、この町を元に戻す」

ギユツと。まるで星を掴むかのように、チリーの拳は握られた。

「絶対だ」

そう言っつて、チリーはズラータへ微笑みかけた。

翌日、チリー達はザハールのアジトを突き止めるため、聞き込みを開始した。

ズラータを一人で家に残しておく訳にはいかなかったため、ミラルはデニスの家に残り、ズラータと共にチリー達の帰りを待つことになった。

効率良く聞き込みをするため、チリー達は二手に分かれることになった。チリーとカンバー、ニシルとトレイズの組み合わせだ。

「この砂つてさ、ザハールの能力なんだよね？」

足元をトントんと足で叩き、ニシルが問うと、トレイズは恐ろしくな、と答える。

「砂を出しているのか、それとも何かを砂に変えているのか……」

「チリーの話から考えれば、後者だな」

トレイズの言葉に、ニシルは短く頷く。

「これだけのことが出来るっつてのはすごいね……。勝てるかな、僕ら」

「……さあな。だが、最初から諦めていては、勝てる戦いにも勝てない」

トレイズがそう言った時だった。

「いいえ、諦めようが諦めまいが、貴方達はザハール様を倒せない」
不意に、男の声が響く。その男の姿を見た町の人々はざわめき、

慌ててその場を離れて行く。

「お前は……」

「……アイツ、ザハールの部下だよ。昨日、ザハールと一緒にいたところを見た」

ゆっくりと。ニシルとトレイズは身構える。

「答える。貴方達は何をしようとしている？」

男の問いに、ニシルとトレイズは答えようとしなない。

「まあ良い。どちらにせよ、貴方達からは私に対する明確な敵意が感じられる。すなわち」

神力を発動させたらしい。男の手には鉄製の、長い棒状の物が握られていた。

棍こんと呼ばれる棒状の武器だ。アルモニア大陸にはない武器、恐らくイレオーネ大陸の武器だろう。ニシルもトレイズも、文献くらいでしか見たことがない。

「私には、貴方達を倒す理由がある……！ 違うか？」

男の問いに、ニシルはニヤリと笑った。

「違うよ」

ゆっくりと。ニシルは両手の包帯を外し、その場へと投げ捨てた。傷痕は残っているものの、ニシルの両手は既に治っている。

「このワディム、全力で貴方達を排除する！」

ワディムと名乗った男は、勢いよくニシルとトレイズの方へと駆け出した。

それに応戦するため、トレイズは素早く右手をワディムへとかざす。氷塊を出現させる構えだ。

「……ッ!？」

しかし、出現しない。

トレイズの右手の前に現れるハズの氷塊は、一向に姿を見せない。「……トレイズ!？」

数秒経ち、やっこのことで氷塊は出現したが、かなりの小ささだ。まるでコルク栓のような、そんな小ささだった。

飛来したソレを、ワディムは鬱陶しそうに左手で弾く。容易く弾

かれたその氷塊は、地面へと落下し、じんわりと溶けていく。

「大気中の水分が……少な過ぎるんだ！」

絶望的なニシルの言葉とほぼ同時に、ワディムがトレイズの眼前まで迫っていた。

素早く、トレイズ目掛けてワディムの棍は突き出された。防ごうとするニシルの手も間に合わず、突き出されたワディムの棍はトレイズの腹部ヘドスリと直撃する。

「が……ッ！」

ワディムは棍を一旦引き、回転させると、先程トレイズ突いたのと反対側の先端を、よろめいたトレイズへ突き出す。

「トレイズッ！」

ガツシリと。トレイズ目掛けて突き出された棍を、急いで傍まで駆けて来たニシルが掴む。

「む……ッ！」

ワディムが顔をしかめた……。その時だった。何かが焼けるような音を立て、棍のニシルが掴んだ部分から煙が上がり始める。ニシルの神力によって焼かれていることに気が付いたらしく、ワディムはニシルの腹部目掛けて前蹴りを放つ。前蹴りが腹部へ直撃し、一瞬ニシルの手が緩んだ隙に、ワディムはニシルの手から棍を引き抜くと、バックステップで二人から距離を取る。

「氷の能力に……。熱の能力か……。熱の方はともかく、氷の方は問題ないな」

その言葉に、トレイズは口惜しそうに舌打ちする。

「僕だけで十分だよ。お前なんて……。ッ！」

そう言い、ニシルは勢いよくワディム目掛けて駆けた。それを迎撃するため、棍の間合いへ入ったニシルの頭部目掛けて、ワディムは棍を突き出す。ニシルは頭部を横に逸らし、ワディムの棍を回避すると、その棍を右手で掴もうとする。しかし、ワディムは掴まれる寸前で棍を振り上げると、今度はニシルの腹部目掛けてワディムは棍を薙いだ。

「おっとー！」

ニシルはすかさず前転し、棍を回避すると同時にワディムへ接近する。

「ッ！」

「もらった！」

素早く立ち上がり、ニシルは神力を発動させ、高熱を帯びた右手をワディムの顔面目掛けて伸ばした。その時だった。

「ッッ！！！」

伸ばした右腕を、ニシルはすぐに引っ込め、左手で掴む。

「ああああッ！」

突如右腕を掴み、絶叫を上げたニシルを、ワディムは怪訝そうに見る。

痛い！

想像を絶する激痛が、ニシルの右腕に走った。あまりの激痛に、ニシルは右腕をおさえてその場へ倒れ、のた打ち回る。

「ッッ……ッッ！！！」

「……ニシル！ どうした!？」

後方から、トレイズの声が聞こえる。それに答えることすら出来ず、ニシルはあまりの激痛に、絶叫し続ける。

「何だ……これ……ッッ！！！」

くつう。クツウ。苦痛。

右腕を駆け巡るのは「苦痛」という名の化け物。その化け物はニシルへ痛みを与えんと暴れ回り、踊り狂い、怒り狂う。化け物の思惑通り、ニシルの右腕は、これは危険だと脳へ信号くつうを送る。

「腕が……腕が引き千切られそうな……ッッ！！！」

明らかに、異常な状態だった。

「ニシル！」

異常を察し、トレイズは素早くニシルへ駆け寄る。

「く……ウ……ッ」

痛みが落ち着いたのか、のた打ち回っていたニシルは少しだけ動きを和らげる。

「大丈夫か!？」

「何……とか」

痛みが引いたらしく、ニシルは右腕を抑えたままゆっくりと身体を起こす。

「下がれ。既に負傷している人間と戦うつもりはない」

「うる……さい! 僕は、まだ……やれる……ッ」

よろめきつつも立ち上がり、ニシルは右腕を抑えたままワディムを睨みつける。

「そうか。なら止めはしない」

そう答え、ワディムは棍を構え直す。しかし、ワディムと対峙するニシルの前に、それを制止するようにトレイズが出る。

「トレ……イズ?」

「下がれニシル。俺が戦う」

「……ッ! 何言ってる……だ! お前今……能力使え……ないだろ!」

咆哮するかの如く、そう叫んだニシルの方へ、ゆっくりとトレイズは顔を向けた。

「もう……俺に大切な物を失わせるな」

トレイズの言葉に、ニシルは呆気に取られたような表情でトレイズを見る。

「トレイズ……」

そうしている内に、トレイズはニシルを押し、自分の後ろへやる。ニシルは抵抗しようとせず、そのまま数歩下がった。

失う訳にはいかない。

全てを諦め、死を望んでいた自分を救ってくれた王。その王を、トレイズは守ることが出来なかった。みすみすと死なせてしまった。

失ってしまった。

これ以上、失いたくない。大切な仲間を 弟を、失う訳には
いかない。今度こそ、守り抜くのだ。

俺の手で……！

「わかったよ……。任せた」

右腕を抑えつつ、ニシルはそう言っただけで微笑んだ。

「……ああ」

背を向けたままそう答え、トレイズはワディムを睨みつける。

「待たせて悪かったな」

「……いや」

ワディムはトレイズへそう答えると、棍を再び構え直す。それに
応じ、トレイズはスツと身構える。

「神力無しで戦うつもりか？」

「元より神力のみに頼るつもりはない。素手で十分戦える」

そう答えると、トレイズはワディム目掛けて駆けた。そのトレイ
ズへ、ワディムは棍を突き出す。トレイズは素早く身をかわして棍
を避けると、左手でワディムの棍を掴む。そしてそのまま勢いよく、
棍を引き寄せると同時にワディムの頭部目掛けて右肘を突き出す。

「ッ！」

ワディムは素早く棍を手から離し、右足をトレイズの方向へ踏み
込む。そのまま身体を回転させ、トレイズが掴んでいる棍を右手で
掴み、そのままトレイズの方へ身体を向ける。それに対し、トレイ
ズはすぐに掴んでいた棍を離すと、バックステップでワディムと距
離を取る。

「少しはやるようだな」

ワディムの言葉に、トレイズは答えない。

「神力を使えぬ相手には酷だが……。仕方あるまい」

呟き、ワディムは構えを解いた。

「……ッ!?」

「貴方達のような超常現象を起こすタイプ 超常系の能力に

比べ、私達のような武装系の能力者は劣って見える」

「……それがどうかしたか？」

トレイズの問いに、ワディムは微笑する。

「それ故かは知らないが、私達武装系能力者の武器には、ほぼ必ずと言って良い程に、特異な能力が備わっている」

「特異な能力……？」

ふと、チリーのことをトレイズは思い出す。

チリーも、ワディムの言う武装系の能力者だろう。まだ見たことはないが、ミラルの話によれば、神力を放出することによって凄まじい威力で相手へ突進することが可能らしい。それと同じように、ワディムの棍にも、特異な能力が備わっているというのか。

「……悪いな。使わせてもらうぞ」

ワディムがそう言った時だった。

「何……！？」

スウツと。ワディムの持つ棍が、徐々に姿を消していく。

「反則だろ……！」

後方で、ワディムの右手を凝視しつつニシルが言う。

「見えざる棍、それが私の能力」

まるで景色と一体化するかの如く、ワディムの棍は姿を消した。まるで空を掴んでいるかのようなワディムの右手を、トレイズとニシルは凝視する。

「ザハール様のためにも、私は貴方達を排除せねばならない。……」

悪く思うな」

そう言って、ワディムは見えない棍を構えた。

「行くぞ……！」

呟くようにそう言うと、ワディムはトレイズ目掛けて駆け、トレイズ目掛けて棍を振り上げる。

見えないが故の、一瞬の戸惑い。咄嗟に回避することは出来たが、見えない棍はトレイズの胸部をかすめる。

そのまま、ワディムは棍を斜めに振り上げる。

「ッ！」

直撃。

鈍い音と共にワディムの棍は、トレイズの腹部へ直撃した。

「ぐ……ッ」

呻き声を上げ、トレイズは後ろへよろめく。ワディムは身体をトレイズへ向け、畳み掛けるようにトレイズの腹部へ棍を突き出す。

痛む腹部を押さえつつ、トレイズはバックステップでその棍を避ける。

「……厄介だな」

「そうだろうな」

そう言って、ワディムは微笑した。

見えないというだけで、これ程までに厄介とは思っていなかった。幾度となく振るわれる不可視の攻撃。ワデイムの動きから察することとは出来るものの、全てを完全に避け切れる訳ではない。

「…………ツ！」

ワデイムが薙いだ見えない棍を、トレイズは右腕で受ける。そこからすぐに体勢を低くし、ワデイムの胸部へ掌底を繰り出す。ワデイムは素早く後退して掌底を回避すると、体勢を低くしているトレイズの頭部へ、棍を素早く突き出した。

見えない……………！

完全には回避出来ず、ワデイムの棍はトレイズの額をかすめる。ワデイムが一旦棍を引いた瞬間に、トレイズは素早く後退する。

「見えないんじゃ、避けることもままならないじゃないか！」

痛みが落ち着いたらしく、ようやくいつもの調子取り戻したニシルが、トレイズ達より後方で悪態を吐く。

「しかし、貴方も大したものだ。この見えない棍を、ここまで回避することが出来たのは、貴方とザハール様だけだ」

「…………ザハールと戦ったことがあるのか？」

「…………それが何か？」

何故ザハールとワデイムが、戦うようなことになったのか…………。問うてみたい気もしたが、トレイズはかぶりを振ってその考えを振り払う。今は、そんなことを気にしている場合ではないし、気にする必要もない。

「私とザハール様は、元々敵だったからな」

「何…………？」

「ザハール様がヴィカルドを訪れる少し前、フィメロラと言う町を訪れたことがある」

フィメロラ。イレオーネ大陸内にある小国だ。

「フイメロラには、棍の神力使いが、好き放題に暴れていてな……。その男を倒してのけたのが、あのザハール様だ」

「その神力使いが、貴様だと言うことか？」

トレイズの問いには答えず、ワディムは言葉を続けた。

「荒れていたその男へ、ザハール様はこう告げた『俺と来い』とな……」

その時のことを懐かしむように、ワディムは目を閉じた。

「ただただ荒れるだけだった私に、ザハール様は居場所を与えようとして下さったのだ」

「仕えるべき……主君、か」

大丈夫か？

脳裏を過る、あの日の光景。アレクサンダーと 使えるベ

き主君と出会ったあの日の光景。状況や環境は違えど、この男も同じなのだろうか。

居場所を失くした自分へ、居場所を与えてくれた主君……。その主君のためなら、何をすることも厭わない。

「そうか……」

呟き、トレイズは微笑する。

「貴様とは、もっと別の会い方をしたかった」

「私もだ」

二人、顔を見合わせて微笑する。それ以上、二人の間に言葉はなかった。ただ黙って、二人同時に身構える。

素早く、ワディムがトレイズ目掛けて駆けた。それを避けようとせず、トレイズは構えたままワディムを見据える。

トレイズへ棍が届く位置まで、ワディムが到達する。と同時に、ワディムはトレイズの腹部目掛けて棍を突き出す。

「トレイズッ！」

直撃。避けようとしなかったトレイズの腹部へ、ワディムの棍が直撃する。

「ッ!?!」

苦痛に表情を歪めつつも、トレイズは微笑する。

「貴方……ッ！」

ガツシリと。両手でトレイズは、ワデイムの棍を掴んでいるのだ。不可視と言えども、直撃した瞬間は、その位置を正確に知ることが出来る。他でもない、トレイズの触覚が、ワデイムの棍が腹部へ直撃したことを、トレイズの脳へ正確に伝えている。

しっかりと両手で固定した棍へ、トレイズは右足で強烈な膝蹴りを喰らわせる。メキリと嫌な音がして、見えない棍がトレイズによって折られる。と同時に、棍は姿を現していく。

両断された、ワデイムの棍。

トレイズは掴んでいるワデイムの棍の片割れを投げ捨てると、素早くワデイムの眼前へ接近する。

そしてワデイムの顔面目掛けて右拳を突き出し　ピタリと直撃する寸前で止めた。

「まだ……やるか？」

トレイズの問いに、ワデイムは首を振ると、持っていた棍をその場へ落とした。

「……いや、私の負けだ」

そう答え、ワデイムは嘆息した。その表情に、落胆の色はなかった。

特に弾んだ会話もなく、チリーとカンバーは町の中を歩いていた。別に会話が全くない訳ではない。そう、ない訳ではないのだ。

ただ、弾まない。何故ならこのカンバーという男、雑談は手早く切り、今回の件　ザハール関連の話題しか続けようとしな
いのだ。

生真面目。と言う言葉が妙に似合う。

「それにしても……明確な位置が掴めませんね」
嘆息し、カンバーが呟く。

「……だな。アジトの存在は確實っぽいけど、位置が聞きだせねえ……」

「どこかを隠れ蓑みのにしている……という可能性もあり得ますが……」
「隠れ蓑……ねえ」

呟き、腕を組んでチリーは思索する。

確かに、アジトの入口が簡単な場所に存在するとは到底思えない。それくらいはチリーにでもわかる。だとすれば、何かでカモフラージュしてアジトの入り口を隠している可能性が高い。

しかし、どこに……？ この町に来て日の浅いチリーには、怪しい場所など到底わかるハズもなく

「……あ」

「どうしました？」

短く声を上げたチリーへ、カンバーが問う。

「酒場だ」

「何がですか？」

「だから、酒場だよ」

「……要領を得ません」

カンバーにムツとした表情をされ、チリーはすまん、と小さく頭を下げる。

「あの時は勘で辿り着いたんだが、ザハール達、酒場にいたんだ」

「ああ、確かにそう言っていましたね」

コクリと頷き、カンバーは相槌を打つ。

「確証はないけど、あの酒場、行ってみる価値はあると思うぜ？」

「その酒場が、ザハールのアジトの隠れ蓑……ということですか？」

コクリと。チリーはカンバーの問いに頷く。

「なるほど……。あり得ますね」

深く頷き、カンバーは足を止める。

「行きましよう、その酒場に。チリーさん、案内して下さい」

「ああ」

ゆっくりと。グラスに注がれたワインを口に含む。その濃厚な香りを味わい、そして心地良いアルコールの快感に、ネストルは目を細めた。

「……遅いな」

ボソリと呟き、ネストルは店内の時計を見る。

「どうかされましたか？」

店主らしき男が、ワイングラスを丁寧に拭きながらネストルへ問うた。

「ワディムがそろそろ帰るハズなんだがなー。見回りが丁寧過ぎんだよアイツは」

そう言い、ネストルはもう一口ワインを口に含む。

「どーせ、ココがアジトだったのもバレやしねえし、第一ザハールさんに反逆しようなんて人間は、この町にやいねえよ」

そう言って、ネストルがニヤリと笑った時だった。

「良いこと聞かせてもらったぜ。グラサン野郎」

不敵な、少年の声が店内に響く。

ネストルが店の入り口へ視線を移すと、そこには昨日現れた白髪の少年　チリーと、眼鏡をかけた細身の青年　カンバ

ーが立っていた。

「あちゃー、口が滑ったか」

おどけて見せると、ネストルはクスリと笑う。

「まあ、始末すれば済むけどな」

「やってみるよグラサン野郎。そのグラサン、叩き割って生ゴミに混ぜて捨ててやるよ」

そう言って、チリーは笑った。

その言葉に対し、ネストルは顔をしかめる。

「相変わらず口が減らねえな……」

ネストルが身構えると、それに対してチリーも身構える。しかしそんなチリーを遮るように、カンバーは前へ出る。

「何だよ？」

怪訝そうな表情で、チリーは問う。

「この男は俺が相手をします。チリーさんは、奥へ行ってザールを……」

カンバーがそう告げると、チリーは黙ってコクリと頷き、奥へ向かって駆けた。

「行かせるかよ！」

怒号を飛ばし、ネストルはチリーへ右拳で殴りかかる。が、それを防ぐため、カンバーは素早くチリーの前へ出る。

「ッ！？」

鈍い音がし、カンバーの顔面へネストルの拳が直撃する。

「行って下さい……早く！」

眼鏡を砕かれ、その破片でカンバーは眉間に傷を負っている。その傷と、砕かれた眼鏡を押さえ、うつむいたままカンバーはチリーへそう告げた。

「お、おう！」

チリーは躊躇い気味にそう答えると、店主のいる奥の方へと駆けて行った。

「眼鏡が砕かれちゃあ何にも見えねえだろ」

カンバーを指差し、ネストルはケラケラと笑う。どうやら勝ったつもりでいるらしく、すぐにチリーを追おうとはしなかった。カンバーを嘲笑した後でも、十分に追えると判断したのだろう。

しかしその判断は、すぐに過ちだったと気付くことになる。

「ああ、これですか。問題ないです」

ゆらりと。カンバーが顔を上げる。眼鏡は既に外されており、壊れた眼鏡は右手に握られていた。

つうーっと。眉間の傷口から血が垂れる。

「これ、伊達ですから」

グシャリと。小気味良い音と共に、カンバーは右手で眼鏡を握りつぶした。

店内の、カウンターの向こう。そこにドアがある。恐らく、その向こうがザハールのアジトだろう。

カウンターを飛び越え、チリーがドアを開けようとドアノブへ手をかけると、その手を店主らしき男がガツシリと掴む。

「この先には通せんません」

チリーを睨みつつ、店主らしき男は言う。が、チリーはそれを意に介さぬ様子だった。

「うつせえハゲ！ どいてろ！」

次の瞬間、チリーの鉄拳が店主らしき男の顔面へと飛んでいた。鈍い音と共に鉄拳が直撃し、男は鼻血を噴きながらその場へドリと倒れた。

チリーらしい、強引なやり方である。

「よし、行くか」

呟き、チリーはドアを開けると、その向こうへ駆けて行った。

ちなみに、この店主らしき男……別にハゲではない。

スツと。カンバーは身構える。その姿を見、ネストルはサンングラスをゆつくりと外し、カンバーに対して身構える。

「そのヒョロい身体で、俺と戦おうつてのか？」

嘲笑を込めた声で、ネストルは言う。明らかな挑発だったが、カンバーの表情に、それに対する憤りの色は見られない。それどころか、どこか余裕めいたものさえ感じられた。

「見た目で判断すると痛い目を見る……親に習わなかったのですか？」

「悪いな、俺は親の言うことなんて聞かねえからな」

「だからザハールのような悪人の部下に成り下がるのですよ、貴方は」

「俺の勝手だろ」

「そうですね」

そう答え、カンバーは微笑する。

「では……行きますよ」

呟くようにそう告げると、カンバーは素早くネストルとの距離を詰め、ネストルの頭部目掛けて右回し蹴りを繰り出す。ネストルは体勢を低くしてそれを回避すると、カンバーの右足をガツシリと掴む。しかし、ニヤリと微笑んだネストルの顔面に、カンバーの左足が直撃。左足が直撃した際、ネストルの右手が緩む。その隙に、カンバーはネストルの右手から右足を抜き、ネストルの顔面を踏み台にして自由になった右足と共にそのまま跳躍する。そして空中でクルリと回転し、器用に着地する。

「ぐ……ッ」

呻き声を上げるが、ネストルは倒れない。体勢を立て直し、舌打ちするとネストルはカンバーを睨みつける。

「軽業師かよ！」

「さあ、どうでしょう」

カンバーの含み笑いを嘲笑と受け取ったのか、ネストルはカンバー目掛けて駆けると、カンバーの顔面目掛けて右拳を突き出す。しかし、カンバーはそれを軽々と右手で掴み、そのままネストルの右手を捻り上げる。

「ぐあああッ！」

ネストルの上げた悲鳴を、まるで意に介さぬかのように、カンバーはネストルの右手を捻り上げたまま、表情一つ変えない。

冷たい、目だった。まるで、ゴミでも見るかのような……そんな冷めた目で、カンバーはネストルを睨んでいる。少なくとも彼のこんな表情を、チリー達は知らないだろう。

「良いですか、俺の質問に対して真実だけ答えて下さい」

「く……ッ！ 誰が……ッ」

ゆっくりと。カンバーの手が、更にネストルの右手を捻り上げる。

「があああッ！」

「いけませんね……。親からもらった右手、大切にしませんと」

そう言ってニコリと微笑む。が、目は笑っていない。カンバーの目は、先程の冷めた目のまま、ネストルを睨み続けている。

「それとも、折っておきますか？ 俺は構いませんけど……」

「わ、わかった……！ 真実だけを答えるッ！」

ネストルが必死にそう叫ぶと、カンバーは少しだけ捻り上げている右手を緩める。

「では聞きましょう。この町を……ヴィカルドを神力を使って砂漠地帯にしたのは、貴方達で間違いありませんね？」

「あ、ああ……」

コクリと。ネストルは頷く。

「しかし、ザハールの神力だけで、町一つ分を砂漠地帯に出来るのは到底思えません……。チリーさんの話によると、ザハールの能力は恐らく『物質を砂へ変える』こと……違いますか？」

「いや、違わない……。ザハールさんの能力はそれで正しい」

「だとしたら、現在のヴィカルドの状況はおかしい……。周囲の土壌を砂に変えたところで、本当に雨の少ない砂漠地帯へ変わるはずがないんですよ」

土壌を砂へと変えたところで、その周囲は乾燥した砂漠地帯となる訳ではない。土壌が砂になるだけで、雨は降るし大気中の水分だつて変わらない。だが、現在のヴィカルドは明らかに砂漠地帯と化している。

「俺の……能力だ」
「貴方の？」

コクリと。ネストルは頷きつつポケットへ左手を忍ばせる。既に、ネストルの右手の捻りは随分と緩められている。

「ああ。かなり消耗するが、町一つ分の周囲の天候を操るくらいは出来る……。最初に地面を砂に変えて、あたかもザールさんが町を砂漠化させたかのように見せているだけだ」

ネストルのポケットから取り出されたのは、一本のナイフだった。そのナイフに、カンバーは気付いていない。

「なるほど……。それで雨が降らないまま数年経ち……」

カンバーが言いかけた時だった。
ドスリと。ネストルが左手首を使って投擲したナイフが、カンバーの腹部に浅く刺さる。

「ぐ……ッ」

呻き声を上げたカンバーの右手は、無意識の内に緩む。すかさずネストルは掴まれていた右手を抜き、素早くカンバーから距離を取る。

「馬鹿が……！」

ニヤリと。ネストルが笑む。そのネストルを、苦痛に歪んだ表情でカンバーは睨みつける。

「ざまアねえな」

そう言つてクスリと、ネストルは笑う。

カンバーの表情に、微かだが怒りの色が見える。しかし、それは

ネストルに向けられたものではなく、油断した自分への怒りのようだった。

「俺の腕も……鈍ったものですね……！」

吐き捨てるようにそう言い、カンバーは刺さったナイフを勢いよく抜くと、その場へ投げ捨てた。

ジワリと。腹部に血が滲む。だが傷は浅い。右手を掴まれていたせいと、利き腕ではないであろう左手で投擲されたのが幸いし、致命傷にはならない。

「天候を操作するために、神力は使えない……。が、負傷したお前を倒すくらいは俺にも出来るぜ……！」

そう言つてニヤリと。ネストルは不敵に笑った。

「……くらい……」

「ん？ 何だ？」

ボソボソと呟くカンバーの言葉が聞き取れず、ネストルは聞き返す。しかし、カンバーからの答えはない。苛立ちを感じたネストルが舌打ちした。その時だった。

素早く、カンバーがネストルの眼前まで迫る。

「な ツ！？」

「このくらいの傷、全盛期ではざらにありましたよ」

そう告げ、カンバーはネストルの腹部へ右拳を叩き込み、ニコリと微笑んだ。ただし、目は笑っていない。

「がア……ッ！」

呻き声を上げたネストルの首筋へ、カンバーは鋭く手刀を喰らわせる。そのままうつ伏せに倒れたネストルの上にまたがり、そのネストルの右手を捻り上げながらガツシリと掴み、先程カンバーへナイフを投擲した左手は左足で強く踏みつけ、動きを止める。

「……やってくれましたね」

冷えた怒り。芯まで冷え切った、冷たい怒りを、カンバーはその瞳に宿していた。不意打ちを喰らったことが、どうにも気に食わないらしい。

「まあ、ブランクのせいで俺の注意力が鈍っていたせいもあります
が……」

グツと。カンバーはネストルの左手を更に強く踏みつける。

「ぐアッ！」

「……死にます？」

静かに、カンバーは問うた。

「わ、悪かった……許してくれッ！」

ネストルが助けを請うた。その瞬間だった。

お願い……！ もう許して……っ！

不意に、フラッシュバックのように蘇る、過去の映像と音。耳に
残る、少女の声。

血溜まり。倒れ伏す人。必死に助けを請う、一人の少女。

まるで頭痛でもしたかのように、カンバーは左手で頭を押さえた。

「……危うく、スイッチが入るところでした……」

呟き、カンバーは嘆息する。

「良いですか、これ以上……無駄な抵抗はしないで、俺の質問にだ
け答えて下さい」

「わかった……約束する！」

どの道、この状況では何も出来ないだろう。素直に信頼し、カン
バーは問う。

「デニスは、どこにいます？ チリーさんが向かった先ですか？」

その問いに、ネストルは首を左右に振った。

「いや……別な場所に監禁してある……」

「別な場所……。他に、隠された入口があるんですね？」

コクリと。ネストルは頷いた。

「案内して下さい。良いですね？」

「……わかった」

渋々、ネストルは頷いた。

チリーが開いたドアの先は、下へと続く階段だった。薄暗く、天井に付けられている電球はチカチカと点滅しており、どうにも心許ない。足元に気を付けつつも、チリーは足早に階段を降りて行く。しばらく階段を降りていると、その先にドアが見えた。恐らく、奥へと続いているのだろう。チリーは迷わずにそのドアを開いた。その先は廊下。石の壁に石の床、まるで刑務所の中なのではないかと錯覚してしまうような殺風景さだった。とは言っても、チリーは刑務所の中になど入ったことはないの、単なるイメージなのだが……。

廊下はあまり長くない。左右にドアが二つずつ。青いドア、黄色いドア、オレンジのドア、そして黒いドア。ドアには文字が書いてあるが、チリーはそれを読もうとしなかった。

「……めんどくせえな」

吐き捨てるように呟き、順番にドアを見ていく。

「んー……。適当で良いか」

駄目だろうそれでは。などとツッコミを入れてくれる相手はいない。チリーは本能の赴くままに、黄色いドアを勢いよく開く。

「オラアーツ！」

勢いよくドアが開かれる。

「……ほう」

その奥には、豪勢なソファの上へドツシリと座り、火の付いた葉巻を啜えたザハールがいた。どうやら、チリーの勘は当たったらしい。

「よくここまで来たな、小僧。素直に寝てやろう」

「うるせえ！んなことより、さっさと町を元に戻せッ！」

チリーのその言葉に、ザハールは嘆息して肩をすくめると、ゆっくりと立ち上がる。

「仕方ねえ……。相手してやるよ、小僧」

ザハールの目が、真っ直ぐにチリーを見据えた。

身構えるとほぼ同時に、チリーは大剣を出現させる。しかし、既に臨戦態勢に入っているチリーとは対照的に、ザハールは座ったまま動こうとしない。あるうことが、チリーを嘲笑うかのように微笑している。

それを一瞥し、怒りに表情を歪めると、チリーは大剣を構えてザハール目掛けて駆けた。

「お前のように威勢の良い奴は……」

言いつつ、ザハールは啞えている葉巻へ右手で触れた。

「嫌いじゃねえ」

ザハールはそう言うと同時に、加えていた葉巻を右手で口から離し、チリー目掛けて投擲する。投擲された葉巻は、ザハールの手を離れた時点で砂の塊へと変化する。

「ッ!?」

砂の塊と化した葉巻は、一気にスピードを増し、まるで弾丸の如くチリー目掛けて飛来する。言うならば　砂弾。

素早くチリーは大剣を盾にし、砂弾を防ぐ。一瞬、大剣によつてチリーの視界が塞がれる。

砂弾を防ぎ、チリーが大剣を構え直した時には、既にザハールは眼前まで迫って来ていた。

「な　ッ!」

ザハールを振り払おうと、チリーは大剣をザハール目掛けて薙いだ。しかし、ザハールはそれを素手で受ける。と同時に、大剣は砂へと変化し、辺りへ飛び散って行く。

「無意味だッ!」

驚愕するチリーの胸ぐらを、ザハールは右手で勢いよく掴み上げ、左拳でチリーの顔面を思い切り殴りつけた。

「が　ッ」

鈍い音と共にチリーの呻き声。チリーはそのまま後方へ部屋の外まで吹っ飛ばされ、ザハールの部屋の正面にあった黒いドアへと背中から直撃する。

背中から全身を駆け巡る苦痛。チリーは歯を食いしばり耐える、よるけつつも立ち上がる。

しかし、チリーが構え直すよりも、ザハールが近づく方が早かった。

「ッ!？」

「ハッハア！ 楽しいな小僧ッ！」

心底喜んでいる そんな様子で、ザハールはチリーへ右足で強烈な前蹴りを喰らわせた。

チリーの腹部へ先程より強い苦痛が走ると共に、鈍い音がし、チリーは背中から黒いドアへ再度激突し、どうやら木製だったらしいドアを粉碎して中の部屋へと吹っ飛んで行く。部屋の中央辺りで何らかの障害物へ激突し、チリーはその場へ倒れ伏す。

「うおッ!？」

チリーの後ろで、何かが倒れると同時に、男の声が聞こえる。

苦痛に歯を食いしばりつつ、チリーはすぐに声のした方へ視線を移した。

「……………アンタは……………？」

短髪で、筋肉質な男だった。おじさんと言うよりはまだお兄さんと言った風貌だ。その男は、縄で椅子へ座らされたまま縛られていた。

チリーの問いに男が答えるよりも早く、部屋の中へザハールが入って来る。

「ようデニス。元気か？」

ニヤリと。厭な笑みを浮かべて、ザハールは男へ問うた。

「デニスって……………まさかアンタが！」

コクリと。デニスと呼ばれた男は頷いた。

男が頷いたのを見ると、すぐにチリーは男を縛り付ける縄へ手を

かけた。

「勝手なことしてんじゃねえ！」

ザハールはチリーの元へ歩み寄ると、デニスの縄を大剣で切ろうとするチリーの顔面へ、右足で前蹴りを喰らわせる。

「がア　ッ」

呻き声を上げ、チリーはその場へ仰向けに倒れる。

「退いてる。俺は今からこの小僧と遊ぶんだよ」

そう言うと、ザハールはデニスを乱暴に後方へ蹴り飛ばす。

「やめ……ろ……！」

呻くように言い、チリーは立ち上がる。

「何をだ？」

厭な笑みを浮かべ、ザハールはチリーの長い白髪を掴み、持ち上げる。

「ぐ……ッ！」

持ち上げたチリーの顔へ、ザハールは自分の顔を近づけると、再びニヤリと厭な笑みを浮かべる。

「悪いが、アイツが赤石の在処を喋るまでは、解放する訳にはいかねえんだ」

「何故お前が……赤石を……？」

チリーの問いへ、ザハールは当然だろ、と答える。

「俺はこれでもゲルビアの軍人でなあ……。国のためにも赤石の在処をハーデン様に伝えなきゃなんねえんだ……」

「お前……ゲルビアの人間だったのか……！」

「おうよ。ハーデン様のためにも頑張んなきゃなあ！」

そう言って豪快に笑うザハールを、チリーはきつく睨みつける。

「冗談だ。赤石は……俺が手に入れる！」

そして！ とザハールは付けたし、言葉を続ける。

「赤石の力で、俺が世界を手に入れるッ！」

鼓膜が痛む程の音量で言い放ち、ザハールは豪快に笑った。ザハールの笑い声が響く中

その顔へ、チリーは唾を吐き捨てた。

「絶対渡さねえ。お前なんかにはッ！」

負けじと言い放ったチリーを、ザハールは冷めた視線を向け、その場へ投げ捨てた。

「ぐあッ！」

地面に勢いよく激突し、チリーは苦痛の声を上げる。

「テムエ……誰に唾吐いてんだ……？」

倒れているチリーを見降ろし、ザハールは冷たく言い放った。

ネストルの腕を背に回し、右手で捻り上げたままカンバーはネストルを立たせた。

「さあ、案内して下さい。デニスはどこです？」

「そう急かさなくてくれよ、すぐ連れて行く」

そう言っただけでネストルがニヤリと笑ったのを、後ろにいたカンバーは見えない。

「中にいる仲間に、内側から開けてもらわねえと入れねえんだ……。連絡して良いか？」

「ええ、構いません」

カンバーがそう答えると、ネストルはポケットの中に入った小型の機械を取り出した。

これは、緊急連絡用の機械だった。ボタンを押すと、ザハールとワデムの持つ同じ機械へ信号が発信される。その信号は、ボタンを押した者の現在地を知らせることが出来る。これを押したということ、押した者の身が危険な状態にあるという証拠だった。

ワデムの手を借りる。それがネストルの狙いだった。

元より、これから向かう場所へデニスは行かない。デニスが監禁されているのは、先程チリーが向かった場所だ。

ニヤリと。ネストルは笑みを浮かべつつボタンを押した。

「よし、OKだ。外へ出よう」

「……デニスはこの店の中にはいないということですか？」

「ああ」

そう言つて、ネストルはコクリと頷き、店の入口へと歩いて行く。それに、ネストルの右手を掴んだまま、カンバーはゆっくりとついて行く。

ワディムのことだ。すぐにこちらへ駆けつけるに違いない。

再度笑みを浮かべ、ネストルはドアを開けた。

「……………」

「どうしました？」

ドアを開け、すぐに立ち止まって沈黙したネストルへ、カンバーは問う。

「あ、いや……何でもない」

おかしい。ワディムならもう近くまで駆けつけているはずだ。

舌打ちし、ネストルは辺りを見回すが、ワディムらしき者は見当たらない。

機械の故障で呼べなかったのかとも考えたが、それはないだろう。これまで、壊れるような扱いはしていない。

「……………おや？」

カンバーが声を上げる。

来たか！

ネストルはほくそ笑んだ。が、ワディムらしき人物は未だ見当たらない。

「カンバー！」

「ニシルさんに、トレイズさん！」

こちらへ駆け寄って来るのは、ワディムではなくニシルとトレイズだった。

「あれ、そいつは？」

傍まで駆け寄ると、ニシルはネストルへ視線を移し、カンバーへ問うた。

「俺が倒しました。どうやらデニスは別の場所に監禁されているらしいので、今から案内してもらおうところです」

「……………どうということだ？」

静かに、トレイズが問う。

「カンバー。僕達が戦ったワディムって人は、その酒場の地下にいるって言うってたんだけど……………」

ギクリと。ネストルの肩がびくついた。

「へえ、そうなんですか……………。おかしいですね」

ゆっくりと。ネストルはカンバーの方へ視線を移す。

その表情は、微笑んでいた。が、目が笑っていない。

先程から何度も浴びせられている、冷たい視線。ああ、どうやらネストルはまたカンバーを怒らせてしまったらしい。

「どうなんです？」

静かに、カンバーはネストルへ問うた。

「え、あ……………いや……………」

ネストルが冷や汗を感じると同時に、彼の右手はカンバーによって強く捻り上げられた。

「ぐあああッ！！！」

ニコニコと微笑んだまま、カンバーは右手を捻り続ける。

「無駄な抵抗はしないと……………約束しませんでしたっけ……………？」

ギリギリと捻り上げた後、カンバーは素早く左手でネストルの首筋へ手刀を打ち込む。

「がッ！」

苦痛に声を上げ、ネストルはその場へ昏倒した。カンバーはネストルの右手を離すと、両手をパンパンとはたいた。

「さて、中に入りましょうか」

「う、うん……………」

ニシルとトレイズは表情に驚嘆の色を表しつつ、頷いた。

よるめきつつも、力強く、チリーは立ち上がる。そして睨みつける。敵を　　ザハールを。

「そんなに死にてえのか……小僧ッ！」

頬に付着したチリーの唾を拭いさり、ザハールは吠えた。自分へと吐き捨てられた唾を明確な挑発と受け取り、ザハールは怒りに表情を歪めている。

ゆっくりと。チリーは大剣の刃先をザハールへと向けた。

「　　勝っ！」

曇りのない、真っ直ぐな瞳。勝利だけを見つめる、真っ直ぐな視線。

「ほざけエッ！」

ザハールはチリーから距離を取ると、すぐに床へと手を付いた。

「ッ!?」

次の瞬間、ザハールの触れた部分から徐々に、床は砂へと変化していく。これがザハールの能力……物質を、砂へと変化させる能力。そしてその変化した砂を

「くたばれッ！」

操る能力。

ザハールの足元の砂は、大人の拳大程の塊となり、宙へ浮く。宙へ浮いた砂の塊は鋭く変形し、ドリルのような形を形成する。

その砂弾は、真っ直ぐにチリーへと飛来した。

「だアッ！」

大剣を薙ぎ、チリーは砂弾を砕く。そして素早くザハール目掛けて駆けて行き、高く跳躍する。

「高い　　ッ！」

驚愕の声を上げたザハールの頭上へ、チリーは勢いよく大剣を振り降ろした　　が、その大剣は砂によって防がれる。

「何ッ!?」

咄嗟に身を屈めたザハールは、地面の砂へと手をつけていた。それにより、ザハールは砂を操り、チリーの大剣を防がせたのだ。ザハールの頭上で、砂がまるでバリアのようになって浮いている。それにより、チリーの大剣は防がれているのだ。

「おおおッ!」

雄叫びを上げ、そのまま突っ込もうとするチリー。

「無意味だア!」

そこへ、砂弾。地面から砂の塊が飛来し、チリーの腹部へと直撃する。

「ぐああッ!」

空中で仰け反り、そのまま後方へとチリーは吹っ飛んで行く。

「コイツ……本当に人間か……? 今の跳躍力……!」

怪訝そうに呟くザハールをよそに、チリーはゆっくりと立ち上がる。

「まだ……まだだッ!」

キツと。チリーは前方のザハールを睨みつける。

「小僧が……ッ!」

負けじと、ザハールもチリーを睨みつける。

「俺に盾突くなアアッ!」

地面に手を付いたまま咆哮し、ザハールは再び砂弾を出現させる。先程の砂弾とは比べ物にならない程の量だった。

「終われエーッ!」

無数の砂弾は、一斉にチリー目掛けて飛来していく。

「おおおオオッ!」

雄叫びと共に、飛来した砂弾の内幾つかを、大剣を薙ぐことによって砕く。しかし、砂弾は更にチリーへと飛来する。

「ガアッ!」

避け切れず、チリーの左腕へ砂弾が直撃する。それによって生まれた隙に、砂弾は何十発もチリーの腕へ、足へ、腹部へ、顔面へ、

直撃していく。

「あああああッ!!」

あまりの激痛に吠えるチリーを一瞥し、ザハールはほくそ笑んだ。
「ハッハア! 俺の勝ちだ小僧ッ!」

砂弾を撃ち終わり、ザハールはゆっくりと立ち上がる。

「が……ア……ッ」

ドサリと。その場へチリーが倒れ伏した。

「ハア……ハア……!!」

今の砂弾でかなりの体力を消耗したのか、ザハールは息を切らし
ている。

肩で息をしつつ、倒れ伏すチリーの元へ歩み寄ろうとした時だっ
た。

「チリーッ!」

ザハールの背後　つまりこの部屋の入り口から声が聞こえ
る。

ザハールが振り返ると、そこにいたのはニシル、トレイズ、カン
バーの三人だった。

「デニス!」

カンバーは傍で縛られたまま倒れているデニスを発見すると、す
ぐにその傍へ駆け寄った。

「大丈夫ですか?」

「まあ、命は……な」

カンバーの問いに、デニスは無理に笑みを作ってそう答えた。

「お前……チリーに何をした……?」

ギョツと拳を握り締め、低く、顔をうつむかせたままニシルがザ
ハールへ問う。

「片付けただけだ」

平然と、ザハールはそう答えた。

「片付けた……だと……ッ!??」

身を乗り出し、ニシルが殴りかかろうとした時だった。

「手エ出すんじゃねエツ！」

「　　ッ!?」

よろよると。倒れていたチリーが立ち上がる。あれだけの砂弾を喰らい、既にボロボロのハズだというのに、よろめきながらもチリーは立ち上がる。

その瞳から、闘志は微塵も消えていなかった。それどころか、先程よりも強い意思を感じることにさえ出来る。

「小僧……ッ！」

対峙する、二人の視線。

「これは……俺の戦いだ……ッ！」

スツと。チリーは大剣の刃先をザハールへと向ける。

刺突の構え。

身体の奥そこから、湯水のように溢れ出ようとする神力。

「待てよ……今、思いつきり暴れさせてやるからよオ……ッ！」

それは、誰に向けられた言葉だったのか。

己か、己の神力か。

描くイメージは、ザハールへと大剣で突進する自分の姿。止まる

ことなく、突き進む。その手に、勝利を掴むまでは。

「喰らいやがれエエエエツッ！」

大剣の柄から、一気に膨大な量の神力が放出される。その神力の勢いで、チリーはザハール目掛けて突っ込んで行く。

「小僧がアアアツ!!」

いくつもの砂弾が、チリー目掛けて飛来する。が、そのどれもが今のチリーの前では無力に等しい。チリーに直撃した砂弾は、全て砕かれ、ただの砂へと戻り地面へ落下する。

「クソがア！」

ザハールの前に出現したのは、巨大な砂の壁だった。

「ぶっ壊すッ！」

咆哮。そしてチリーは、そのまま砂の壁へと突進して行く。
「おおおおオオオツ！」

チリーの大剣が、砂の壁へと直撃した。しかし、壁は簡単には崩れない。チリーを押し返さんと、ザハールが全力で神力を送っているのだ。

「負けるかよオオオオツツ！！」
更に勢いを増す、チリーの神力。しかし負けじと、ザハールの神力も勢いを増していく。

そんな二人の様子を、四人は固唾を飲んで見守っていた。
誰も言葉を発することなく、ただ黙って、瞬きすることすら惜しんで二人の戦いを見守っていた。
まるで、彼らの義務が、最後まで見届けることだとも言わんばかりにだ。

「押し勝つツ！」

同時に叫び、二人の神力は更に勢いを増す。

「だアアアアツツ！！」

まるで削られているかのように、砂が辺りへ飛び散り、壁へ直撃してピシピシと音を立てる。

「ッ！？」

ザハールが、驚愕に表情を歪めた。

「俺が……押し負ける……ッ！？」

焦り、戸惑い、憤り。様々な感情で歪んだザハールの顔にも、ピシピシと砂が飛び散る。

そして 壁は砕かれた。

「馬鹿……な……ツツ」

神力を出し切ったのか、ザハールはそのまま仰向けに倒れていく。

ドサリと音を立てて倒れたザハールの前には、神力の放出を止めたチリーが、威風堂々と立っていた。

「俺の……勝ちだ」

ニツと。チリーが笑みを作った。

「チリー！」

そんなチリーの元へ、ニシルとトレイズ、カンバーと、解放されたデニスが駆け寄って来る。

「ホント無茶苦茶するよなお前って。そのボロボロの姿見たら、またミラルに怒られるよ」

そう言っつてクスリと笑うニシルへ、チリーはそうかもな、と笑って答えた。

「それが、話に聞いたお前の剣……か」

呟き、トレイズは微笑する。

「まさか一人でザハールを倒すなんて……見直しましたよチリーさん」

「おう……っつて、見直したってことは今までどう思ってたんだよ！怒号を飛ばすチリーへ、カンバーはクスリと笑った。

「……ありがとう。君達には、感謝してもし足りない」

そう言っつて、デニスはペコリと頭を下げた。そんなデニスへ、チリーは気にすんな、と微笑んだ。

「とにかく……！」

グツと拳を握り締め、チリーは思い切り突き上げる。

「俺の勝ちだアツ！」

豪快にそう叫び、チリーはそのまま後ろに倒れ込んだ。

「チリー！」

慌ててニシルは駆け寄ったが、チリーの顔を見、すぐに肩をすくめる。

「どっした？」

「……寝てるだけみたい」

問ったトレイズへそう答え、ニシルは笑うと、倒れているチリー

をやや乱雑に背負った。

「さあ、帰ろう。ミラルとズラータちゃんが待ってる」
ニシルの言葉に、三人は微笑み、コクリと頷いた。

チリーが目を覚ますと、そこはベッドの中だった。ゆっくりと身体を起こすと、全身に痛みが走る。

「痛……！」

辺りをキョロキョロと見回すが、部屋には誰もいない。下の階から騒ぐような声が聞こえている。そこに皆はいるのだろうか。

「……」

静かに、気を失うまでの出来事を反芻する。ザハールのアジトへ向かい、そこでザハールと出会って……戦った。満身創痍になりつつも、なんとか勝利をもぎ取った。かなり無茶したのを思い出し、全身が痛む理由がわかった。ザハールの砂弾を喰らい過ぎたのだ。

嘆息し、声の聞こえる方へ向かうため、痛む身体を鞭打って立ち上がる。が、すぐにドスンと音を立ててベッドの上に座り込む。今はまだ、動かない方が良さらしい。

「目、覚めた？」

不意に、声が聞こえた。すぐにチリーが声のした方向へ視線を移すと、そこにはミラルが立っていた。

「……ミラル。みんなは？」

「リビングにいるわ。デニスさんが帰って来たお祝いだって」

「な……！？俺も混ぜ」

勢いよく立ち上がろうとして腰を上げる。しかし、すぐに痛みを感じて、チリーはその場に蹲ってしまふ。

「もう、無理しちゃ駄目じゃない」

呆れ顔でそう言うと、ミラルはチリーの元へ歩み寄り、チリーへ背を向けた。

「……ん？」

そのままミラルはゆっくりとしゃがむ。

「ほら、さっさと乗んなさい」

頬を赤らめたままそっぽを向き、ミラルはぶっきらぼうにそう言った。

「大した意味はないからね……！ アンタだけのけ者にするのは忍びないから、つ……連れてって……あげるわよ」

「……ありがとな」

そう言っただけで微笑み、チリーはミラルの背に負ぶさった。

少女の背に乗せられるというのは、どうしようもなく気恥かしいものだが、そうでもしないと動けない。それに、折角のミラルからの好意だ。受け取るに越したことはない。

しかし

「重いわね」

ボソリとそう呟いたミラルにじゃあ降ろせば良いだろー、と冗談半分にチリーが答えたところ……

「わかったわ」

本当に一回降ろされた。

結局背負い直してもらい、チリーはミラルと共にリビングへと向かった。

長机の周囲に椅子を並べ、取り囲むようにしてニシル達は座っていた。机の上には様々な料理が並べられており、香ばしい香りを放っている。

「やっと起きたかバカチリ」

ミラルに背負われたチリーを見、ニシルがそう言っただけで笑う。

「うっせえチビニシ」

負けじと言い返してから笑うチリーを、ミラルはニシルの隣の空いている椅子に座らせる。そしてチリーの隣に、ミラル自身も座る。「そろいましたね」

カンバーの言葉に、一同はコクリと頷くと、手元のグラスを手取る。

「乾杯！」

ヴィカルドがザハールから解放された記念であり、デニスが戻って来た記念でもある。

競うように、二人は料理を頬張っていた。チリーが肉を三枚口に入れると、それに応じてニシルは四枚口の中にねじ込む。どう考えても口に入り切らない量の肉を、チリーとニシルは無理矢理口になじ込んでいく。カンバーとデニスは苦笑い、ミラルとトレイズは呆れて嘆息し、ズラータは楽しげにそんな二人を見ていた。

「チリーさん」

チリーが肉を飲みこんだのを確認し、ズラータはチリーへ声をかける。

「んあ？」

グラスの中のジュースを飲みほし、チリーは間の抜けた声で返事をする。

「その……お父さんを助けてくれて……ありがとうございます」

そう言って、ズラータはペコリと頭を下げた。そんなズラータを、チリーは照れ臭そうに見た後、ニツと彼女へ笑いかける。

「約束を守っただけだ」

グツと。チリーはズラータへ親指を突き立てた
その時だった。

「もらったア！」

素早く、ニシルがチリーの前に置いてある皿から、ハムを一枚奪い去る。

「あ、汚エ！ それ俺んだろ！」

「近くにあるだけで、別にお前のって訳じゃないだろー」

すぐにハムを口の中へ運び、おいしそうに食べつつ、ニシルは言う。

「ホント……アンタ達は……」

呆れて、ミラルが肩をすくめた。

一通り料理を食べ終わると、チリー達は今後のことについて話すことになった。チリーが気を失っている間に、テイテスに関する説明は済ませてあるらしく、デニスは快く応じてくれた。話を始める際、ズラータには退室してもらうことになった。ズラータはしばらく退室を渋っていたが、デニスに優しく諭され、仕方なく部屋の外へ出た後、どこかへ遊びに出掛けて行った。

「赤石の在処……だったね」

デニスの言葉に、カンバーは静かに頷いた。

「ええ。確か知っていたハズですよ」

コクリと。デニスは頷く。

「簡潔に言おう。赤石は 東国にある」

デニスを除く、その場にいた全員の表情が、驚愕に歪んだ。

「東国って……ゲルビアに滅ぼされた……あの国、ですか？」

ミラルの問いに、デニスは静かに頷く。

「経緯はわからないが、赤石は東国が所持し、管理していた物だ」

「東国に赤石……ってことは……！」

そう言っただけでニシルがトレイズへ視線を向けると、トレイズはコクリと頷いた。

「ゲルビアが東国を襲った理由にも、説明が付くな」

赤石を所持する東国。赤石を欲するゲルビア。

東国の所持する赤石を得るため、交渉に失敗したであろうゲルビアは、無理矢理にでも赤石を得るために東国を襲った……と考えれば、東国戦争の説明は付く。

「誰だッ!？」

不意に声を荒げ、トレイズはドアの方へ鋭く視線を向ける。

「きゃっ」

声を上げ、ドアの向こうから顔を出したのはズラータだった。

「ズラータ……。外に出ていなさいと言っただろう」

「ごめんなさい、お父さん」

しゅんと肩を落とすズラータ。

「……すまん」

決まりが悪そうな顔をし、トレイズは呟くようにズラータへ謝罪する。

「とにかく、外に出ていなさい」

デニスという言葉にコクリと頷くと、ズラータはすぐに家の外へと出て行った。

「すまないね」

デニスの言葉に、カンバーはいえ、と答え、そのまま言葉を続けた。

「……話を戻しますね。東国に赤石があるのなら、何故ゲルビアはまだ赤石を探しているんです？ あれだけやれば、赤石を奪うことは出来たはずですし、何よりゲルビアが未だに赤石を探している意味がわかりません。東国にあるとわかつていいるなら、東国を調査すれば良いじゃないですか」

カンバーの言葉に、トレイズが頷く。

「赤石は、東国の地下へ厳重に隠されている。それに、ゲルビアは東国が赤石を所持していることは知らなかった。あくまで、在処を知っているだけだと思っていた」

「それで、口を割らない東国を滅ぼした……って訳だね」

呟き、ニシルは嘆息する。

「でもそれはおかしくないか？ 口を割らせたいなら、全滅させちゃ駄目だろ」

そう言ったチリーへ、デニスを除く全員の視線が一斉に浴びせられる。デニス以外の誰もが心底驚いた、といった表情でチリーをジト目で見ている。

「な、何だよお前ら……」

「チリーが……チリーが話し合いの途中でまともなことを言ったわ……」

口元に手を当て、何か恐ろしい物でも見るかのような様子で言う。

「お前、ホントにチリー……?」

疑惑に満ちた表情で、ニシルはチリーへ問う。

「馬鹿な……!」

信じられない物でも見た、といった表情で、トレイズは呟く。

「敵の罠でしょうか……」

真剣な眼差しで、カンバーは思索を始めた。

「……お前ら酷過ぎ」

ボソリと。チリーが呟いた。

「確かに彼の言う通りだ」

一度静まり返った空気を、元に戻すかのようにデニスは口を開く。

「勿論、ゲルビア……ハーデンは東国の王族を数人捕虜にしたという話を聞いている。拷問して口を割らせるために」

だが、と付け足し、デニスは言葉を続ける。

「彼らは恐らく、全員が死を選んでいる」

「な　　ッ!?」

驚愕に表情を歪ませた一同をよそに、デニスは言葉を続ける。

「他国の者に秘密を明かすくらいなら、死を選ぶ。それが彼らの考え方だ」

想像するに難くはなかった。捕らえられた時点で、舌を噛み切つて自らの命を絶つ彼らの姿……。

ゴクリと。一同は生唾を飲み込んだ。

「でもそんな重要な事実、どうしてデニスさんは知ってる訳?」

ニシルの問いに、デニスは、中々鋭い質問だ、と呟き、言葉を続けた。

「デニスと言うのは偽名でな。私の本名は、ゆきなり幸成。東国の、王族の人間だ」

「……カンバーはこのこと知ってたの？」

ニシルの問いに、カンバーはコクリと頷く。

「ズラータちゃんは、彼が東国から逃げ伸び、ヴィカルドへ住むようになってから出来た娘さんなんだそうですねよ」

カンバーの言葉に、デニスは小さく頷く。

「話を戻すぞ。今も東国の地下には、赤石を守るために数十人程の人間がいる。私が彼らに連絡を付けておこう」

「デニス……。アンタ、何で俺達にそこまでするんだ？ 赤石のことだって、喋ればアンタ自身が危ないんだぜ？」

怪訝そうな顔でチリーが問うと、デニスはそんなことか、と呟く。「私の命の恩人、カンバー。そして私を助け、ズラータに会わせてくれた君達の頼みだ。それに、いつまでも赤石を隠し続けてもいずれば見つかる。奴らに見つかる前に君達が手に入れて、君達の島のために、使ってくれ」

そう言って、デニスはニコリと笑った。

「そっか……」

満足げに呟き、ゆっくりとチリーは立ち上がる。立ち上がる際、また身体が痛んだらしく、痛ッ！ と声を漏らしたが、それでも立ち上がる。

「次の行き先は？」

待つてましたとでも言わんばかりに、ミラルが問う。すると、チリーはニツと笑ってこう答えた。

「東国だッ！」

先程トレイズに怒鳴られ、デニスに諭されたズラータは、すぐに家の外へと出ると、ザハールがアジトにしていた酒場へと向かった。酒場へ着くと、彼女はポケットからトランシーバーを取り出し、

何やらカチャカチャと操作し始めた。ズラータくらいの年頃の少女が、トランシーバーを扱うとはどうにも考え難い。不自然な光景だ。案の定、彼女はズラータではなかった。

トランシーバーを耳に当てると同時に、ズラータの輪郭が、骨格が、服が、何もかもが別の人間へと変わっていく。中肉中背の、耳を覆い隠す程度の長さの金髪の男だった。男はニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、トランシーバーへ向けて言葉を発する。

「赤石の在処がわかりました……ええ、東国です。はい、僕も向かいます。ザハールは……はい、始末しておきます。元々あまり信用出来ませんでしたし……」

それからしばらく話し込んだ後、男はトランシーバーの電源を切る。

そしてニヤリと笑みを浮かべ、酒場の奥……チリーの倒したザハールが縛られている場所へと向かった。

ヘルテユラの港で、小舟が用意されていた。荷物を含めても人が四人入る程度の、やや窮屈そうな小舟だ。既に荷物がつんである。

「青蘭君。信じて良いのね？」

麗の問いに、青蘭はコクリと頷く。

「灯台下暗し……ってことか」

呟き、光秀は嘆息する。

「でもこれで、次の行き先が決まりましたね」

そう言っつて、伊織が微笑むと、麗はコクリと頷く。

「あの兄さんが、本当に兄さんだったのか……判断することは出来ません」

でも、と付け足し、青蘭は言葉を続ける。

「信じたい」

「そうね。では、行きましょう」

嘆息し、麗は海の向こうへ視線を移す。

東国。ゲルビア帝国によって滅ぼされた、極東の国。独自の文化を持ち、豊富な資源に恵まれており、王政でありながらも、民主に近しい政治により保たれている治安。陳腐な言葉で言い表せば、素敵な国。

だが 滅びた。ゲルビアの手によって。

ただ広がる焦土。焦げ付いた大地に、植物は見当たらない。地を這うのは異様に肥大化した芋虫。否、芋虫の原形を辛うじて留めてはいるが、それは芋虫と呼べる生物ではなかった。

芋虫の身体に、蜘蛛の如き八本の脚が付いている。ソレはその脚でもぞもぞと歩き、前面に付いている口で、傍にいた同じ種類の虫を食い散らかす。

足元で繰り広げられるそんな光景を一瞥し、金髪の男は鼻を鳴らすと、ソレらを右足で踏みつぶす。気色の悪い、生物を潰すという感覚。その感覚を大して気にした様子もなく、男は隣にいる男へ声をかけた。

「後どのくらいだ？」

それは目的地まで、という意味だろうか。隣にいる男はすぐ傍です、と答え、前へ進み始める。その男の目の前を、巨大な鳥が過つて行く。

「うわあッ！」

驚愕し、後ろによるめいた男の肩を、金髪の男は素早く支えた。

「気を付ける。他のメンバーの二の舞になるぞ」

「は、はい……」

申し訳なさそうに答え、男は気を取り直して前へ進んで行く。

しばらく歩くと、二人は瓦礫の山を発見する。

「焼き尽くされていない、数少ない建造物の一つです」

男の言葉に、金髪の男はコクリと頷く。

「過去の地図によると、ココに寺があったことになっています」

「なるほど。なら、その寺の地下に入口が？」

「ええ。他に後二つ入口が確認されています。行きますか？」

男の問いに、金髪の男は首を横に振った。

「いや、入口は違えど到達地点は同じハズだ。錯乱のための入り口なら、そこまで入念に隠す必要もないハズ。どれも、本物の入り口と見て間違いない」

そう言つて、金髪の男は比較的小さな瓦礫を一つ、拾い上げる。

「他の建造物とは材質が違うのか……？ どちらにせよ、地下への入り口が隠されていた建造物の瓦礫だけが、この焦土の中で残っているのには意味があるハズ」

「ええ。入り口の隠されていた場所は、全て何らかの跡があります。ゲルビアの投下したLB235は、全てを焼き尽くしたハズです。で、何かあると見るのが妥当かと覆われます」

「中には入ったのか？」

「いえ、ニコラス様は、一般兵は中に入るなと」

「なるほど……」

金髪の男はゆっくりと頷く。

「そういえば、地下の存在を知り、東国へ向かっている人間はどれくらいいる？」

「はい、少々お待ち下さい」

男はそう答え、ポケットから一枚の紙を取り出し、読み上げる。

「青蘭を含む、東国の生き残り達。例の実験体を含む、テイテスの人間達」

「テイテス……。ああ、あの役立たずの王の所か」

クスリと。嘲笑するかのように金髪の男は笑みを浮かべる。

「『核』を利用した酔狂な土地に住んでるモンだから、赤石の在処くらい知ってると思っただがなあ……。攫い損だった……。わざ

わざと脅しに『核』まで破壊してやったつてのに……」

「はあ……」

「得したのは実験体を求めていたイカレ博士共だけだしな」

そう言つて、金髪の男は嘆息する。

「青蘭とか言うのは、テイテスの奴らと交流があつたよな？」

「はい。エトラの報告によれば、白髪の少年と共闘していたそうです」

「白髪の……ああ、ザハールを倒した奴か」

ポンと胸の前で手を打ち、金髪の男はクスリと笑つた、

「簡単に始末出来れば良いんだがなあ……。おお、そうだ」

何か閃いたらしく、男は嫌らしい笑みを浮かべる。

次の瞬間、男の金髪がまるで生き物の如く動き始めた。否、動いているのではない、伸びているのだ。整っていた金髪は手入れされていないような、ボサボサの状態になり、徐々に色を失っていく。

背も少しだけ縮み、男は既に原形を留めぬ姿となっていた。

「あー、こんなモンか」

声まで変わっているらしく、発声練習をするかのように男は声を発する。

「よし、中に入る。入り口を教えてください」

「わかりました。ディルク様、くれぐれもお気を付けを」

ディルクと呼ばれた男は、コクリと頷いた。

焦土の中を、ひたすらに歩いてきた。

窮屈な船旅を一週間程度続け、既に疲れ切つているというのに、到着してからほぼ毎日歩きつ放しである。食事と睡眠を除いての話だが。

嘆息し、青蘭は空を見上げた。

暗雲が立ち込めており、朝なのか夜なのかもわかり辛い。あの頃、美しい日差しが大地へ降り注いでいた頃の面影は、もうない。

「おい、まだなのかよ？」

不満げに、光秀が青蘭へ問う。

「過去の地図で言えば、もうすぐです。いくら爆撃で焦土と化したとは言え、地形まで大幅に変わることはないはずですよ」

「光秀、これくらいは耐えなさい。美しくないわ」

冷たく言い放つ麗を見、光秀は嘆息する。

「あ、見て下さい！」

不意伊織が声を上げ、前方を指差す。一同が慌てて伊織の指差す方向へ視線を移すと、前方から巨大な鳥がこちらへ飛んで来ている。普通の鳥では考えられないサイズの鳥だ。数は 一二匹。

「光秀さん！」

「わかつてらァ！」

その鳥は、低空飛行しており、青蘭達の頭くらいの高さを飛んでいる。素早く青蘭は鳥目掛けて駆け、跳躍する。

神力によつて底上げされた青蘭の身体能力は、通常のソレを遥かに凌駕する。鳥の上へ飛び乗り、そのまま地面へ叩き落とす。そして右拳を鳥の頭部へ思い切り叩き込む。

奇声を発し、鳥はその場でピクリとも動かなくなる。

「行くぜ……」

腰の刀の柄へ手をかけ、光秀は前方の鳥を見据えたまま、身構える。

「そらよッ！」

掛け声と共に、光秀は勢いよく刀を鞘から抜き放つ。と同時に、鋭い斬撃が鳥目掛けて放たれる。

凄まじい勢いで放たれた斬撃は、鳥を両断。分断された鳥の身体は、血を流しながらその場へ落下する。

それを確認し、光秀は刀を鞘へ戻す。

「お疲れ様、青蘭君」

傍へ駆け寄り、そう言つて微笑んだ伊織に、青蘭は微笑み返す。

「伊織ちゃん、俺も頑張ったよー」

ブンブンと手を振り、アピールする光秀だったが、伊織は取り合
わなかった。

「御苦労だったわ、光秀」

ポンと。光秀の肩に麗の手が置かれる。

「ん、ああ。それにしても……悲惨だな」

「ええ。美しかった私達の土地……まさかこんなことになるなんて
悲しげに嘆息する麗に、光秀はニツと笑いかける。

「まあ、それを元に戻すために俺達は戻って来たんだ。あんまり悲
観すんなよ」

「……そうね」

表情を少しだけ明るくし、麗はコクリと頷いた。

それからしばらく、青蘭達は歩き続けた。

この東国の地下に、赤石が隠されている。青蘭達がそれを知った
のは、もう一週間以上前のことだ。

ヘルテュラへ現れた刺客、バルター。彼の出現させた幻影は、青
蘭の兄 白蘭げんえいの姿だった。しかし、どういう訳か白蘭の記憶
を持っていた白蘭は、死ぬ直前、青蘭へ赤石の在処を囁いた。

どうということなのか、青蘭自身にもわからない。あの白蘭は、バ
ルターによって青蘭自身のイメージから生み出されたものだ。なの
に、青蘭の知らないことをあの白蘭が知っているはずもない。だが、
それ以外に、青蘭達は有力な情報を持っていなかった。そして駄目
元で到着したのがここ、東国跡である。

「……ココです」

ピタリと。地図から目を離し、青蘭が言う。

「瓦礫……何でだ？ 他の建造物は全部焼き尽くされてるってのに
不思議そうに言い、光秀は小さな瓦礫を一つ拾い上げる。

「入り口を探しましょう」

麗の言葉に、一同が頷いた時だった。

「おい、入り口って、これか？」

瓦礫の陰で、光秀が言う。すぐに青蘭達が向かうと、光秀の足元にはポツカリと四角い穴が空いていた。階段があり、明らかに地下へ続いているような感じだ。

「え、何で開けっ放しなんですか……？ もっところ、隠蔽されていないと、逆に怪しいですよ！」

伊織の言葉に、青蘭はコクリと頷く。

「だが、場所はココで合ってる。一応入ってみよう」

「……そうね。それに、私達より先に誰かがココへ辿り着いた……という可能性もなくなはいわ」

「……そうですね」

考え込むような仕草をした後、青蘭はすぐに四角い穴の中へ入り、階段を降りて行く。

「私達も行きましょう」

麗の言葉にコクリと頷き、麗を先頭に伊織と光秀も中へと入って行く。

階段の下は、寺院の本堂のようになっていた。傷付いた仏像を心に、破壊された小さな仏像が倒れている。

「……ッ!?」

煌びやかな装飾品は全て碎かれている。左側には襖があり、何者かが暴れたためか一部破れている。襖とは別に、奥の方にどこかへと続く道が見えるが、今はそれよりも、目の前で倒れている坊主頭の人物を心配するべきだ。

口元から血を流し、男は苦しそうに呻き声を上げている。

「大丈夫ですか!？」

青蘭達は慌てて坊主頭の男へ駆け寄る。

「クソ……! 誰がこんなことを!」

悪態を吐いた光秀に、坊主頭の男が何やら呟き始める。

「……の……少年……」

「少年……?」

聞き返し、青蘭は坊主頭の男の口元へ、耳を近づける。

「白髪の……少年……」

「白髪……!？」

一瞬、青蘭の脳裏をチリーの姿が過ったが、青蘭は首を振り、その考えを否定した。

伊織の能力で坊主頭の男を治療し、適当な場所へと横にする。

「おい、向こうの部屋に布団が一式あった。青蘭、このおっさんを運ぶの手伝ってくれ」

「わかりました」

青蘭はコクリと頷き、光秀と共に坊主頭の男を向こうの部屋、襖の向こうへ運び込んだ。襖の向こうは座敷になっており、その中心には既に光秀の敷いた布団が用意してある。青蘭と光秀は坊主頭の男を布団の中に寝かせる。

「……………」

麗と伊織も中へ入り、坊主頭の男の傍へ正座する。

「傷は治したので、命に別条はないハズです……………。とりあえず、目を覚ますのを待ちましょう」

伊織の言葉に、一同はコクリと頷いた。

「……………」

ゆっくりと。坊主頭の男が目を開ける。

「大丈夫ですか？」

坊主頭の男はゆっくりと身体を起こし、小さく頷いた。

「…………… すまない」

「いえ、気にしないで下さい。それより、何があつたんです？」

青蘭の問いに、坊主頭の男は答えにくそうに顔をしかめた後、襲撃された、と答えた。

「…………… 襲撃？」

「ああ。そう言えば自己紹介がまだだったな、私は法然^{ほつねん}。赤石の守護を任された者の一人だ」

「…………… ツ!？」

法然と名乗った男を除く、全員の表情が驚愕に歪む。

「では、やはりここに赤石が？」

麗の問いに、法然はコクリと頷く。

「赤石は、東国が所有している。だが、悪用されて世界が混乱するのを防ぐため、我々は赤石を地下へ隠した……」

「……だから、後継者である白蘭は知っていたのね……」

呟き、麗は嘆息する。

「それで、ココを襲撃したというのは？」

「白髪の、少年だった」

「白髪」

再び、青蘭の脳裏を過るチリーの姿。しかし、白髪の少年を、青蘭がチリーしか知らないだけのことであり、白髪の少年は少数かも知れないが世界中捜せば他にいない訳ではないはずだ。チリーであるという証拠はない。その上、チリーはこんなことをしないという確信が、青蘭の中にはある。

「……どんな少年だ？」

「髪の長い少年だった。ボサボサの髪の毛で、荒々しい雰囲気を持っていた」

一致　　しなくもない。チリーの姿と。しかし、首を左右に振って青蘭はその考えを否定する。

「突然現れ、私を殴り倒した後に暴れ、奥へと進んで行った……。不覚だった……！」

口惜しそうにそう言って、法然はギュッと拳を握り締める。

「法然さん……。頼みがあります」

真摯な眼差しを、青蘭は法然へ向けた。

「奥にある赤石……。俺達に使わせて下さい」

青蘭の言葉に、法然はしばらく考え込むような仕草を見せたが、すぐにコクリと頷く。

「え、そんな簡単に……。信じて良いんですか……？」

驚嘆の声を上げる青蘭に、法然はニコリと微笑む。

「見たところ君達は東国の人間のようにだ。それに、君の場合は目を見ればわかる」

ジツと。法然は青蘭の相貌を見つめる。

真っ直ぐな、曇りのない双眸。

「私達の目的は、焦土と化したこの土地を浄化し、東国を再興することです。そのためには、赤石が必要なんです」

麗の言葉に、法然はコクリと頷いた。

「私のことはもう良い。先程の部屋の奥へ向かってくれ。中は入り組んだ洞窟になっている……。侵入者対策の罫にも注意してくれ。それと……」

真剣な表情で、法然は言葉を続ける。

「あの白髪の少年を、止めてくれ」

法然の言葉に、一同はコクリと頷いた。

「ああ、それと……」

その場を立ち去ろうとする青蘭を、法然が引き止める。振り返った青蘭を見、法然は前方を指差す。

「アレは……」

刀。鞘に収められた、厳かな何かを感じる刀。それを、法然は指差している。

「持つて行ってくれ。きつと君の助けになる」

法然の言葉にコクリと頷き、青蘭は刀を手を取った。

「……ありがとうございます」

美しい、女性だった。長く黒い髪の先端辺りを白い布で結んでいる。チリー達の見たことのない服装で、どこか麗の服装と似ているようにも見える。服の色は赤と白で構成されており、下は真っ赤で上は真っ白。白く長い袖が美しかった。

彼女は膝の前で手を組み、ジツとしたままチリー達の方を見ていた。

デニスが言うには、赤と白の服を着た女性が案内してくれる、とのことだった。上空から彼女を見つけたチリー達は、適当な位置で飛行船を止め、彼女の元へと向かったのだった。

「お待ちしております。幸成から話は聞いています」

感情の込められていない口調で、彼女は言う。

「私は桐香きりか。この東国で、赤石の守護を任されている者の一人です」
表情を変えず、桐香と名乗った女性はペコリと頭を下げる。

「一人……？ 他にも、赤石を守護する人間がいるということですか？」

カンバーの問いに、桐香はええ、と小さく頷く。

「ねえ、アレ！」

不意に、ニシルが上空を指差して叫ぶ。

「デカイ……なんだありゃ!？」

ニシルの指差す方向を見、チリーは驚愕の声を上げる。

巨大な鳥が、チリー達の方目掛けて急降下してくるのだ。チリーは素早く大剣を出現させると、高く跳躍する。

「うらアッ！」

鳥と同じ高さまで跳躍し、チリーは鳥目掛けて大剣を薙いだ。大剣は直撃し、鳥の身体は真っ二つに切り裂かれる。

チリーは大剣を消すと、地面へ着地した。チリーが着地すると同時に、ドサリと音を立てて二つに分かれた鳥の身体が地面へ落下する。

「よっし」

グツと。ガッツポーズをしてチリーは満足げに笑う。

「相変わらず人間離れしてんなあ……アイツ」

チリーを見、ニシルは肩をすくめて見せる。

「キリトさんと同じ修行してたんだから、ニシルも出来るんじゃないの？」

ミラルの問いに、ニシルは首を横に振った。

「無理無理。アイツがおかしいんだよ。キリトさんだってあんなに

跳べないよ」

そう言つて、ニシルは嘆息する。

「……ゲルビアの爆撃の副作用で、突然変異を起こした鳥類か……。気味の悪い」

吐き捨てるように言い、トレイズは鳥の死体を一瞥する。

「……では、案内致します」

別段鳥を気にした様子もなく、桐香は静かにそう言った。

「ええ、お願いします」

カンバーの言葉に、桐香はわかりました、と呟き、焦土の中を歩き始めた。

大した会話もなく、桐香を先頭にチリー達は焦土の中を歩き続けていた。

桐香は寡黙な人物らしく、質問されても素気なく答えるのみで、それ以上会話を続けようとはしなかった。ただ淡々と、目的地に向かって歩き続けている。

「ニシル。暇だ」

チリーの言葉に、ニシルはコクリと頷く。

「だね。超退屈。そっぴやチリーさ、傷はもう良いの?」

ニシルの問いに、チリーはニツと笑った。

「大丈夫に決まってるんだろ、あれくらいの傷。治るのに三日もいらねーよ」

「……お前おかしいよ絶対」

そう言つて、ニシルは嘆息する。

「確かに、チリーさんの身体能力は全体的に異常な気もしますね……」

チリーを見、カンバーは考え込みつつそう言う。

「そっぴや?」

「ええ。ザハールと戦っている時だって、あれだけの攻撃を受けて

まだ戦えるなんて……普通なら倒れます」

カンバーの言葉に、ニシルとトレイズが頷いて見せた。

「でもまあ、悪いことじゃねーだろ」

「……ちよつとは疑問に思えよ」

気楽な様子のチリーに、ニシルは呆れ顔でそう言った。

「……着きました」

ポツリと。桐香が呟く。

「ここは……」

水溜り。一言で言えば、水溜りだった。大き目の窪みの中に、汚い水が溜まっている。その傍にはまるで死体のような、枯れ果てた木が生えている。

「ここです」

その木の根元へ、桐香はゆっくりと歩み寄り、砂をはらう。すると、はらった砂の下に小石が二つ、深く埋まり込んでいた。桐香はそれをつまみ、ゆっくりと左に移動させる。

「ッ!?」

その部分の地面が、スライドしていき、一つの四角い穴が現れる。その先には、階段がある。

「ここが、入り口です」

「おー！」

ニシルが驚嘆の声を上げる中、ミラルはブルブルと震えていた。寒さに震えているのとは違う、何か恐怖に怯えているかのような……そんな震え。

「ミラル……どうした？」

不安げに、チリーは震えているミラルへ問うた。だが、ミラルは答えない、ブルブルと震えたまま、黙りこくっている。

「……ミラル？」

「……ある……」

ポツリと。ミラルが呟く。

「私……ここに来たこと……ある……」

「な　　ッ!？」

暗雲立ち込める空のどこかで、雷鳴が鳴り響いた。

「おいミラル！ どういうことだよ！」

震えるミラルの肩を掴み、チリーが声を荒げる。しかし、ミラルは首を横に振るばかりで、答えようとしない。

「ここは東国だぞ！ 何でお前が……」

言いかけ、チリーは何かに気付いたかのように表情を一変させる。まさかお前、テイテスに来る前の記憶が……？

小さく首を横に振り、ミラルはチリーの言葉を否定した。

「うまく思い出せない……。でも私、確かにここに……。来たことある」

「ということは過去に、東国へいたことがある……。ということになるよね。ミラルつてもしかして、東国の人？」

ニシルの問いに、ミラルは首を横に振った。

「うん。そういうんじゃないと思う」

「落ち着いたか？」

トレイズの問いに、ミラルは小さく頷いた。

「ごめんなさい。もう大丈夫」

「……気にするな」

静かに、トレイズはミラルへそう言った。

「ミラルさん、貴女は過去の記憶がないと聞きましたが……。今ので何か、断片的にでも思い出せましたか？」

そうカンバーが問いかけると、ミラルは小さく頷く。

「……うん。ここ、前はもっと綺麗な場所だった。綺麗な湖で……小さな魚とか泳いで……木漏れ日が反射して、とにかく綺麗な所だった……」

ミラルのその言葉に、桐香は無表情だった表情をピクリと動かす。「何故、貴女がこの場所を？」

桐香からの、初めての質問だった。しかし、ミラルは首を横に振

った。

「ごめんなさい。詳しいことは私自身にもよくわからないの」

「……そうですか」

再び無表情になり、桐香はそれだけ答える。

「では地下へ向かいますよう」

桐香の言葉に、一同は静かに頷いた。

階段を降りると、すぐに襖があった。襖とは別に、奥へ続いているのである。道もある。

「赤石はこの奥です。ちなみにこの襖の先は私の生活する場所です。見ますか？」

桐香の問いに、トレイズは静かにかぶりを振った。

「そうですね。では、奥へどうぞ。入り組んでいる上、罨がいくつか仕掛けられていますので、十分注意して下さい」

「わかりました」

カンバーは桐香にそう答え、奥を見据える。

「かなり奥までありそうだな」

「チリーのアホさ加減より果てしないね」

「ニシル程小さいと、これだけデカい洞窟の中じゃどこにいるのかわからなくなるぜ」

「頭が悪いチリーはすぐ迷いそうだね。そして罨にかかって死^{デス}」

「小型人種は無意味に素早いからな。どんな罨でも避けれそうで羨ましいぜ全く」

「死^{デス}」

「小型人種^{チビ}」

「死死死死ウ！」

「小型人種^{チビ}小型人種^{チビ}小型人種^{チビ}小型人種^{チビ}イ！」

ムキになって言い合うチリーとニシルの頭を、ミラルは呆れ顔で小突く。

「いい加減にしなさい！」

「……はい」

声を荒げたミラルに渋々頷き、二人は小さく頷いた。

「……とにかく、奥へ進みましょう」

「……少しは気を引き締める、二人共」

トレイズに軽く睨まれ、委縮する二人だった。

桐香に別れを告げた後、上下左右岩に包まれた道を五人はひたすらに歩いていった。生物はあまり見当たらず、時折妙な虫が岩の上を這っているだけだった。

岩の中には見たことのない鉱物が混じっているらしく、明るい光を放っていた。

「妙に明るいわね」

辺りを見回しつつミラルが言うと、チリーは小さく頷く。

「洞窟なら、もっと暗いと思ってたんだけどなあ」

「この鉱物……見たことはありませんね……」

光を放っている鉱物に、右手でそつと触れつつ興味深そうにカンバーはそう言った。

しばらく歩いていると、途中で道が二つに分かれていた。

「分かれ道、だね」

ニシルの言葉に、カンバーは軽く頷く。

「ここは二手に分かれるべきでしょう。どうやって分かります？」

「奇数だからな……。二人と三人だ」

チリーの言葉に、カンバーは頷く。

「能力のないカンバーとミラルは同じ組に出来ない……。カンバーはある程度戦えるようだ……」

トレイズの言葉に、カンバーはコクリと頷く。

「はい。神力使いはともかく、生身の相手なら基本的に負けるつもりはありません」

「なら、カンバーと神力使いが一人の組。そしてミラルと神力使いが二人の組み合わせになるな。どう決める？」

「じゃんけん」

トレイズの問いに、ニシルはそう即答した。

「まあ、それでも良いが……」

納得はしたが釈然としない、といった様子のトレイズだった。トレイズとしてはもう少し緊張感がほしかったようだが、どうもチリーやニシルがその思いを知ることにはなさそうである。

右の道を、ニシルとカンバーは選んだ。

じゃんけんの結果、ニシルとカンバー、チリーとトレイズとミラル、という組み合わせに決まった後、適当に左右どちらかの道を選んだ。

「それにしても畏、ないね」

「そうですね。もっと張り巡らされてるかと思いましたがよ」

そう答え、カンバーは歩きながらも辺りを見回す。

「もしかすると、そうやって油断させておいて、更に奥の方で畏にかけられたり……」

「あり得なくはないです。まあ、警戒を怠るなってことですね」

そうだね、と答え、ニシルは軽く微笑んだ。その時だった。

カチリと。ニシルの足元で妙な音がする。

「カチリ、だつて」

「多分それ、何かのスイッチですよ」

「何のスイッチだろうね」

とぼけて笑うニシルと、その横で徐々に青ざめていくカンバー。

「畏ですね」

「そだね」

二人で顔を見合わせる。笑っていたニシルの顔も、徐々に青ざめていった。

そして、ゴトン。そんな音がして、ニシルとカンバーの足元は不意に消えた。

「わあああ！」

二人の叫び声は、徐々に下へと消えていった。

ドスンと。鈍い衝撃。

「痛た……」

痛む腰をさすりつつ、ニシルは身体を起こした。

「気を付けて下さいよニシルさん……」

不満げに声を上げつつ、カンバーもその隣で身体を起こす。

「ここは……？」

キョロキョロと、二人は辺りを見回した。先程までの道と打って変わって広い空間で、地面も平坦だった。周りには岩の壁があり、二つ程どこかへ続く道があった。無論、辺りにはあの鉱物が照らしているため、明るい。

「アンタらも落ちたのかい？」

不意に、背後から声が聞こえる。慌てて二人が振り返ると、そこには一人の女がいた。

あまり美しいとは言えないが、長い黒髪。顔の所々にはシワが見られ、中年くらいの女だと言うことがわかる。

「おばさん、誰？」

ニシルの言葉に、女は顔をしかめた。

「誰がおばさんだいッ!？」

「そりゃ、僕でもカンバーでもないから、おばさんがおばさんですよ？」

悪戯っぽく笑って見せたニシルを、女はキツく睨みつける。

「カンバー! このおばさん怖いよ!」

「……貴方が怒らせたんでしょう」

呆れ顔で、カンバーは嘆息する。

「それで、貴女は何者ですか？」

真剣な表情で、カンバーは女へ問うた。すると、女はフンと鼻を鳴らす。

「おやアンタら、そう言えば見ない顔だね。どこの隊に所属する兵だ？ 一般兵は中に入るなど言っておったハズだよ」

女の言葉に、二人は表情をピクリと動かす。

「このおばさん、まさか……」

「ええ、貴方の推測で間違いないでしょう。恐らく、ゲルビアの者です」

カンバーのゲルビアという言葉に、女は反応を示した。

「もしかしてアンタらは、報告にあつたガキ共かい？」

女の言葉を聞いた途端、二人は素早く女から距離を取る。

「へえ、こんな弱そうなガキとヒョロいのがエトラやゲイラを……ねえ」

ちなみに、エトラとゲイラを倒したのはこの二人ではないのだが、それについてとやかく言うつもりは二人にはないらしい。

「弱そうなガキの方が、ババアよりマシだよ。若いからね」

そう言つてクスリと笑つたニシルを、女は先程より一層強く睨みつけた。

「誰にババアだなんて言つてるんだいッ!？」

ぞわりと。女の長い髪が逆立つた。

「ッ!？」

その異様な光景に、ニシルとカンバーは息を飲んだ。

「始末させてもらうよ……」。ガキは生意気だけど、ヒョロい方はアタシ好みだねえ……」

女の言葉に、カンバーは怖気を感じ、ブルツと身を震わせた。

「ねえカンバー。これつてさ、僕がこの間『年上の方が好み』つて言つたからかな？」

「違つと思いますが、もしそうだったら俺は貴方を恨みますよ」

嘆息し、カンバーは女を見据える。神力を感じるため、恐らくあ

の女は神力使い。察するに 髪を操るのだろう。

「いくら年上つて言っても限度があるよ……。こんな二十も三十も年上のババア、おまけに性格悪そうなんだもんなあ……。ババア、アンタ良い姑になるよ。って、結婚出来そうにないから姑にもなれそうにないけど」

嫌味っぽく笑い、ニシルはそう言い放った。

攻撃的な視線が、ニシルとカンバーへ向けられた。二人はゴクリと唾を飲み込み、目の前の女へ視線を据える。

「結婚……出来ないだって……？」

低い、地の底から聞こえて来るような声だった。二人は同時に肩をびくつかせる。

「このダニエラが、結婚出来ないだってエ!？」

一斉に、ダニエラと名乗った女の髪が逆立った。逆立った髪は、まるで触手のようにうねうねと蠢いている。

「滅相もないッ!」

反射的にそう答えたのはニシルだった。

「さつきと意見が違うじゃないですか!」

「だって怖いよカンバー! このババ……お姉さん!」

ババアと言いかけたニシル目掛けて、ダニエラの髪が束になって襲い掛かる。バックステップでニシルはそれを避け、ダニエラを凝視する。

「媚売ろうつたつてもう遅いよクソガキ……!」

あの髪、シンプルでいて、意外と厄介かもしれない。伸縮自在な上、一度縛られれば死ぬまで絞め上げられるだろう。

「チリ毛にしてやるよ」

ニヤリと微笑したニシル目掛けて、再度髪の束が襲いかかる。ニシルはその髪の右手で束をガツシリと掴み、右手から熱を発する。

「ぐっ……!」

右腕に感じる、苦痛。しかし、ヴィカルドでワディムと戦う際に感じたもの程ではない。

チリチリと焦げる音がして、ダニエラの髪は焼き切られた。

「ッ!?」

ダニエラは表情を驚愕に歪め、髪を一旦元の長さに戻す。

「神力使い……」

「そゆこと」

右腕の苦痛は表情に出さず、ニシルはニヤリと笑った。

トレイズがいなければ、チリーはとつくの昔に死んでいた。

左の道を選んだチリー達は、順調に奥へ進んでいた。しかし、ト
ラップの数が思いの外多く、常に細心の注意を払わなければならな
い状態だった。

「チリー、そこにスイッチがある」

「え？ あ、おう」

踏み出しかけた右足をずらし、別の場所へ踏み込む。数刻沈黙し、
何も起こらないことを確認して三人は安堵の溜息を吐いた。

「チリー、もうこれで三回目なんだけど」

「いや、お前らすご過ぎ。俺普通」

「妙に出っ張った岩とか、すぐくわかりやすいのばかりじゃない。

何で気付かないのよアンタは」

短く嘆息するミラルを、チリーは不満げに見つめていた。

「とにかく進むぞ。チリー、気を付ける」

「わかったよ」

ぶつきらぼうにチリーが答え、先へ進もうとした時だった。

ゆっくりと。前方から何者かの足音が響いて来る。

「おい、トレイズ！」

「わかってている……」

三人は耳をすましつつ、前方へと視線を据える。足音の進行方法
は、こちら。何者かが、こちらへと近づいて来ているのだ。

徐々に、人影がこちらへ近付いて来る。三人は更に神経を集中さ
せた。

自分達の他に、この洞窟内に誰かがいる。それは、自分達の他に
赤石の在処を知った者がいる、ということだ。

「足音と話声が聞こえると戻って戻ってみれば……」

そう言ったのは、こちらへと近づいて来た人影だった。背の高い男で、トレイズと同じくらい長身である。肩まで伸びた髪を後ろで一つに縛っているその男は、チリー達を一瞥し、ニヤリと笑った。

「ふむ。まさか報告通り、本当にガキ共とはな」

嘆息し、男はこちらへゆっくりと歩み寄って来る。咄嗟に、チリーとトレイズは身構えた。

「お前達の目的も、赤石……か」

ボウツと。男の右手に炎が灯った。

「ッ!?」

男の右手に灯った炎は、メラメラも燃え盛り、辺りに火の粉を散らしている。

「神力使い……か」

ボソリと呟くトレイズを見、男はニヤリと笑みを浮かべた。

「そういうことだ。これ以上お前らに、ゲルビアの邪魔をさせる訳にはいかん」

「やっぱゲルビアか……」

呟き、大剣を出現させたチリーを、トレイズは右手で制止した。

「トレイズ……?」

「チリー、ミラルと先に行け。コイツは、俺が相手をする」

「お、おい……トレイズ!」

躊躇うチリーに、トレイズは微笑する。

「大丈夫だ。すぐに追いつく」

チリーは表情に多少逡巡の色を見せたが、やがてコクリと頷いた。

「ミラル、行くぞ」

「え、あ……うん」

表情に戸惑いの色を見せつつも、ミラルはチリーに手を引かれ、奥へと進んで行く。

洞窟の奥へとチリー達が進んで行ったのを確認し、トレイズは嘆息した。

「何故追いかけない？」

トレイズの問いに、男はフンと鼻を鳴らした。

「この洞窟の中にいるのは、何もこのエルヴィンだけじゃない。わざわざ追いかけるより、俺はお前と遊びたくてね」

クスリと笑う、エルヴィンと名乗った男を、トレイズはギロリと睨みつける。

「……追いつくと約束したんでな。早々に終わらせる……！」

スツと。トレイズは右手をかざす。すると、右手の前に大人の拳大程度の氷塊が数個出現し、男目掛けて飛来する。

「氷……か」

炎の灯った右手を、男は地面へ着いた。すると同時に、男の前に巨大な炎の壁が出現する。

「ッ!？」

飛来した氷塊は、炎の壁に直撃し、溶けていく。

「なにも、炎が右手にだけ灯る訳じゃない。お前が出現させた氷を自在に操るように、俺も炎を操ることが出来るって訳だ」

「……相性の悪い……」

口惜しげに、トレイズは呟いた。

洞窟の中を、畏に警戒しつつ、青蘭達はひたすら進んでいた。

発光する謎の鉱物により、洞窟の中は異常なまでに明るかった。

「でも良かったあ、明るくて」

「だな。暗いと畏にもかかりやすいし……」

そう答えた青蘭に、伊織は違うよ、と首を横に振った。

「だって私、暗いの苦手だし……」

照れ臭そうに言った伊織を、青蘭は微笑ましく感じていた。

「大丈夫だよ伊織ちゃん……どんなに暗い所でも、この光秀が君を……」

言いかけ、光秀は麗の視線に気が付く。

「美しくないわ」

散々睨め付けた挙句、麗は短く嘆息すると光秀から視線を逸らし、洞窟の奥へと進んで行く。

「ああ、おい！　ちよつと待ってくれよ麗！」

慌てて追いかける光秀を無視したまま、麗はスタスタと先へと進んで行く。その足取りは、どこか怒っているようにも見えた。

そんな二人の様子を見、青蘭が嘆息した時だった。

光秀の足元でカチリと音がする。

「……え？」

間の抜けた声を上げる光秀。流石にこれには反応し、麗が光秀の方を振り返った。その時だった。

「な　っ！？」

麗の足元が、ガコンという音と共に穴へと変わる。

「ちよ、おい！　麗！」

光秀の押したスイツチは、光秀の足元ではなく、麗の足元の罫を作動させるものだったらしい。

慌てて助けようと駆け寄ったが、麗はそのまま下へと落下していく。

「麗！　麗ッ！」

穴に向かって叫ぶが、返事はない。

「麗さん！」

青蘭達もすぐに穴まで駆け寄ったが、既に麗は穴の中。自分が罫を作動させたことに責任を感じているらしく、光秀はガツクリと肩を落とした。

「畜生……！　迂闊だった……ッ！」

地面へ拳を叩き付け、口惜しそくに光秀は齒軋りをする。

「麗さん……死んだりしていなければ良いけど……」

不安げに、伊織が呟く。

「わからない。とりあえず、進んだ方が良いかも知れない。どこかに、下へ続く道がある可能性だってなくはないハズだ」

そこまで言い、それに……と青蘭は付け足し、言葉を続ける。

「法然の言っていた、白髪の少年のことも気にかかる。ここで立ち止まる訳には……」

言いかけた青蘭の胸ぐらを、光秀は勢いよく掴んだ。

「だからって、麗を見捨てるってのによよ！」

「そうは言ってますせん！ 俺は、ここで全員が立ち止まる訳にはいかないと言っているんです！」

光秀は舌打ちすると、すぐに青蘭の胸ぐらを離し、嘆息する。

「……悪い。元はと言えば、俺が迂闊だったせいだしな……」

「いえ……」

青蘭は服を整え、嘆息すると洞窟の奥を見据える。

「この穴。俺の神力を使えば飛び越えることが出来ます。二人共、こっちへ来て下さい」

青蘭の言葉に小さく頷き、二人は青蘭へ歩み寄る。その二人を、青蘭は両腕でガツシリと抱える。

「お、おい。伊織ちゃんはともかく、俺は重くねえか？」

「……大丈夫です」

そう答え、青蘭は高く跳躍し、穴を跳び越えた。

「……すごい」

伊織がそう呟いた次の瞬間には、青蘭は穴の向こうへ着地していた。やはり重かったのか、息を切らしている。

「降ろし……ますよ」

二人が頷いたのを確認し、青蘭は二人を地面へそつと降ろす。

「おい、大丈夫か？」

光秀の問いに、青蘭は大丈夫です、と答え、一息吐く。

「奥へ、行きましょう」

青蘭の言葉に、二人はコクリと頷いた。

言葉もなく、ただ淡々と洞窟の奥へ進んで行く。

麗の不在が、青蘭達に精神的な負担を与えているのだろう。伊織は不安げに辺りを見回し、光秀はガツクリと肩を落としている。そして青蘭は、麗がいないことを忘れ去ろうとしているかの如く、必死に平静を装った状態で奥へと突き進んでいる。

「俺が……」

ボソリと呟き、光秀は沈黙を破った。

「俺が、もう少し慎重に行動していれば……」

ギョツと拳を握り締め、口惜しげにそう言った光秀の方を、青蘭は静かに振り返る。

「もしこのまま……麗が死んだりしたら……ッ！」

「そう、悲観的にならないで下さい」

「悲観的になるなって……お前、なんでそんな冷静
光秀が言いかけた時だった。」

勢いよく青蘭は右腕を振り、岩石の壁を砕く。その光景に、光秀は呆気にとられていた。

「これが冷静に……見えますか……？」

抑制していた感情が、抑え切れずに溢れ出した。そんな様子だった。

麗の安否が心配で、どうしようもなく不安なのは、なにも光秀と伊織だけではない。しかし全員が動揺しては、先には進めないのだ。

青蘭は再び前を向き、洞窟の奥へと一歩踏み出す。

「……行きましょう」

コクリと。その後ろで二人は頷いた。

伸ばされた髪の毛の束を、ニシルは右腕でガツシリと掴み、一気に焼き切る。すると、すぐさま左から別の束がニシル目掛けて伸ばされる。バックステップでそれを避けるが、髪の毛の束は更にニシル目掛けて伸ばされる。

「しつっこい！」

悪態を吐きつつ、ニシルはその束を左手で掴んだ。その時だった。

「うわッ！」

シュルリと。ニシルの右足にダニエラの髪が巻き付いた。

「髪は女の命……。焼いた代償、払ってもらっからねえ！」

ダニエラの髪に引つ張られ、ニシルはズルリとバランスを崩す。

「ニシルさん！」

カンバーが声を上げた時には、ニシルは髪によって上空へ逆さまに吊り上げられていた。

「釣れた釣れたア」

ニヤリと。ダニエラが笑みを浮かべる。

「クソッ！ 降ろせばバア！」

罵倒するニシルの口元へ、ダニエラの髪が巻き付く。

「黙りなクソガキ！」

髪に阻まれ、ニシルの言葉はくぐもった呻き声にしかならなかった。

せめて口だけでも自由にしようと、ニシルは右手を伸ばすが、その右手にもダニエラの髪が巻き付き、動きを止める。

「よし、次はそのヒョロいのの番だねえ……。アンタの場合、アタシと一緒に来るってんなら……」

「謹んでお断りさせていただきます」

ペコリと頭を下げると、すぐにカンバーはダニエラ目掛けて駆ける。

「ッ!?」

そして、ニシルの右足へ巻き付いている髪目掛けて、右手で手刀

を叩き込む　　が、カンバーの手刀は容易く弾かれる。

「やはり、これくらいでは無理……ですか」

呟き、カンバーは素早くダニエラから距離を取る。

「どうしてもアタシとやるってのかい……。残念だねえ」

嘆息し、ダニエラはカンバーの足目掛けて素早く髪を伸ばす。カンバーがバックステップで髪を避けると、髪は更に伸び、カンバーを追尾する。

「切りがない……ですね」

舌打ちしつつ、周囲を走り回ってカンバーは髪を回避する。

「もう一束ア！」

背後より迫り来る髪から逃げるカンバーの進行方向へ、もう一束の髪がカンバー目掛けて伸ばされる。カンバーは横っ跳びにそれを避けるが、髪は二束共カンバー目掛けて伸びて行く。

「ナイフでもあれば……ッ」

口惜しげにそう言ったカンバーの左足へ、髪がシュルリと巻き付く。

「しまっ……たッ！」

次の瞬間には、カンバーもニシルと同様に、逆さの状態で吊るし上げられていた。

「かわいいねえ……」

釣り上げられたカンバーを、恍惚とした表情でダニエラは見つめている。それを一瞥し、カンバーは表情に嫌悪の色を見せたが、ダニエラはカンバーの表情など意に介さぬ様子だった。

「タップリとかわいがってあげるよオ……」

ダニエラがそう言った瞬間、カンバーは身の毛がよだつような感情に襲われた。

ニシルは口を塞がれたまま、モゴモゴと何か口を動かしているが、声にはならない。ジタバタと身体を動かしても、ダニエラの髪にキツく縛られているため、全く身動きが取れない状態だった。

「殺すつもり……ですか？」

カンバーの問いに、ダニエラは首を左右に振った。

「そのクソガキはともかく、アンタを殺すようなことはしないよ。アンタはアタシの……」

最後の方は小声だったため聞こえなかったが、何か口くでもないことを口走ったのは明白だった。

状況は絶望的だった。

拘束されたニシル、吊り上げられてほぼ何も出来ない状態のカンバー。やろうと思えば、ダニエラは今すぐにもカンバーを拘束することが出来るだろう。この状況を打開する方法は、今のところ思いつかない。

昔のように、ナイフでも持ち歩いていれば……！

心の中で悪態を吐くが、だからと言ってどうこうなる訳ではない。だが、ダニエラにカンバーを殺すつもりはないらしい。どう言う訳かカンバーはダニエラに気に入られているようで、ニシルは殺されても、カンバーだけは殺されずに済みそうではある。断言は出来ないが、可能性は高い。

ナラ、生キ残レルジヤナイカ。絶望的ジヤナイ。

「それは……駄目です……ッ！」

呟き、必死に首を横に振ってその考えを否定する。

合理的な、自分の命を優先した考え。それはもう、昔の考え方だ。今の……カンバーの考え方ではない。

無理スルナヨ。オ前ハ今スグニデモ、ソイツヲ見捨テテ敵側ニツケバ良イ。

「出来ない……！」

合理的ニ考エロヨ。自分ノ命ガ、大事ダロ？

カンバーの中で響くそれは、誰の声だったか。

「黙っているッ！」

頭の中で響く声へ、一喝するかのようにカンバーは叫ぶ。その声に、ニシルとダニエラは驚いたような表情を見せたが、ダニエラはすぐに、意に介さぬ様子でニシルへと視線を向ける。

「まあ良い。まずは、アタシを馬鹿にしたそのクソガキ……死んでもらおうかッ！」

ニヤリと。ダニエラが笑みを浮かべた時だった。

「美しくない。全く……美しくないわ貴女」

不意に聞こえる、透き通った女性の声。咄嗟に、その場にいた全員が声のした方向へ視線を向ける。この場所から、洞窟の奥へと続くであろう二つの道の内一つ。そこから、一人の女性がこちらへ歩いて来るのだ。

「貴女は……？」

怪訝そうな表情で問うたカンバーを、大して気にする様子もなく、彼女はこちらへ歩いて来る。

「個人的に気に入らないわ、貴女。美しくない」

ピシャリと。麗はダニエラに言い放った。

嘆息しつつも、洞窟の奥へと進んで行く。幾つかの別れ道を適当に進みつつ、青蘭達は洞窟の奥へとひたすら歩いていた。青蘭を含む全員の表情に、疲労の色が見える。

その上、麗は不在だった。下へと続く道は見当たらず、ただ青蘭達は奥へと進んでいた。疲労と不安のためか、伊織の足取りは徐々に重くなっていく。

「伊織、大丈夫か？」

青蘭の問いに、伊織は小さく頷いた。

「……平気。大丈夫だよ」

無理をしているのは明白だった。だがそれを指摘する者はいなかった。

「……………？」

不意に、青蘭が足を止める。

「どうした？」

「あそこ、誰かいませんか？」

目を凝らしつつ、青蘭が指差す方向へ光秀が目を向けると、確かに誰かの人影が見えた。長い髪をした、後ろ姿である。

「もうちょっと近付いてみましょう」

ゆっくりと、青蘭は人影に近づいていく。徐々に、そのシルエットは明確になっていく。

人影の正体は、少年だった。白く、ボサボサの長い髪をした少年。青蘭にとっては見覚えのある後ろ姿。

「ッ!?」

息を飲み、その後ろ姿を青蘭は凝視する。

「おい青蘭。あれって、まさか法然の言ってた……」

コクリと。青蘭は光秀の言葉に頷いた。

まさか、あり得ない。その後ろ姿が、あの少年のものだと確信するのになんか時間はかからなかった。

そして、恐る恐る呟いてみる。

「……チリー？」

ゆっくりと。その少年はこちらを振り返った。

「よっ」

「お前……!!」

振り返ったその顔は、間違いないくチリーだった。

「久しぶりだな」

ニツと。チリーらしきその人物は、青蘭へ笑って見せた。

目の前で笑うチリーを凝視し、青蘭は呆然とその場に立ち尽くしていた。

白髪の、少年だった。

青蘭の脳裏に、法然の言葉が蘇る。

法然を襲撃した少年の特徴は、全て目の前のチリーと一致している。チリーが……襲撃の犯人なのだろうか？ 疑う理由に、法然の証言は十分過ぎた。

伊織はキョトンとした顔でチリーを見ており、光秀は訝しげな表情で知り合いか？ と青蘭に問うてくる。

「ええ。俺が麗さん達に出会う前、一緒に旅をしていた仲間です」
それより、と光秀に向けていた視線をチリーへ移し、青蘭は言葉を続けた。

「何故ここに？」

「当然だろ。赤石のためさ」

「目的は同じ……」。

「他の皆は？」

「ああ、先に行ってるよ」

洞窟の奥を指差し、チリーは軽く笑った。どうも不自然だ。だがその姿形、声に至るまで彼はチリーそのものだった。

「なあチリー、一つ質問して良いか？」

「なんだよ？」

「法然さん……この洞窟の入り口を守っていた人を、襲撃したのはお前か？」

真っ直ぐに、チリーの目を見据えて問う。

「ああ、そうだな。俺だ」

「な　　ッ！？」

あっけらかんとした様子で答えたチリーに、青蘭は表情を驚愕に

歪めた。

青蘭の隣で、スツと光秀が身構える。

「あんまり邪魔だったもんで、軽くボコつといた。文句あるか？」

「……大アリだ！ チリー、お前はいつから」

言いかけた青蘭の顔面に、チリーの右拳が食い込んだ。

「青蘭君っ！」

仰け反った青蘭の傍に寄り添い、悲痛な声で伊織が叫ぶ。

「テメエ……どういっつもりだ？」

ギロリと。光秀がチリーを睨みつける。が、チリーは意に介さぬ様子で鼻を鳴らす。

「うるせえよ、おっさん」

吐き捨てるように言い放ち、怒る光秀を放置したままチリーは青蘭へ歩み寄る。

青蘭は、まるで状況を把握出来ていなかった。

殴られた？ チリーに……？

チリーに……かつての仲間殴られたという現実を、直視出来ずに青蘭は呆然としていた。

「来ないでっ！」

チリーの前に、伊織が両腕を広げて立ち塞がる。

「何だよ。俺に用か？」

「……ふざけないで！ 青蘭君の友達なんですよ！？ どうしてこんなこと……っ！」

そう言った伊織の胸ぐらを、チリーは勢いよく掴んだ。

「っ！？」

「うるせえよ」

そのまま投げ捨てるように、チリーは伊織乱暴に突き飛ばす。

「きゃっ」

小さく悲鳴を上げ、伊織はドサリとその場に倒れる。

「伊織ッ！？」

「伊織ちゃんッ！」

青蘭と光秀の声に、伊織は大丈夫、と小さな声で答える。

「大丈夫か!？」

光秀の問いに、伊織は起き上がってから小さく頷いて答えた。しかし、すぐに痛っ！と小さく声を上げる。見れば、伊織の手の平に軽い擦り傷が出来ていた。

「大丈夫、大した傷じゃないから……」

問題は、傷の大小ではない。

ギロリと。青蘭はチリーを睨みつけた。

「どういうつもりだ？」

「どうって、こういうつもりだ」

「ふざけてるのか？」

「そうかもな」

そう言っつて、まるで嘲るように笑みを浮かべたチリーの顔面に、青蘭は思い切り右拳を叩き込んだ。直撃し、チリーはその場で軽く仰け反る。

「痛え痛え」

「お前……ッッ！」

怒りを露にし、青蘭は更に強くチリーを睨みつける。

「このクソガキ……ッ！ いい加減にしやがれッ！」

刀の柄に手を置き、抜刀寸前の状態で、光秀はチリーを睨みつけた。

「おっと。こんなことしてる場合じゃねーな」

チリーは呟くと、青蘭達に背を向けた。

「おい、どこへ行くつもりだ……」

「赤石の所」

青蘭の言葉に、チリーは振り返りもせず答えると、そのまま洞窟の奥へと駆け出した。

「待てッ！」

慌てて、青蘭と光秀はチリーを追いかける。その後ろを、不安げな表情で伊織もついていく。しかし、意外に早かったため、すぐに

チリーの背中は見えなくなっていく。青蘭が神力を使おうとした頃には、二つに分かれた道のどちらかへ、チリーは姿を消していた。

「クソツ……ッ！ ふざけやがって！」

悪態を吐き、光秀は足元の小石を思い切り蹴飛ばした。

「チリー……！」

眩いた青蘭の瞳には、怒りの色が浮かんでいた。

ギロリと。ダニエラは麗を睨みつける。が、麗はダニエラの視線など気にも留めていないようで、済ました顔でニシルとカンバーの方へ視線を向けた。

「大丈夫そうには見えないけれど、一応聞いておくわ。大丈夫かしら？」

「全然大丈夫じゃない、ですね」

そう答え、カンバーは嘆息する。

「アタシのどこが……美しくないって言うんだい……？」

怒気を込め、ダニエラが問う。

「全て」

平然と言つてのけ、麗はクスリと笑つてそのまま言葉を続けた。

「容姿、性格、話し方、能力……いえ、その能力だけで言えば、貴女以外の女性なら美しく使えそうだわ」

「ふざけるなッ！ アタシは、アタシを馬鹿にする人間が一番嫌いなんだよッ！」

そう言うつやいなや、ダニエラは髪のを束を麗目掛けて伸ばす。しかし、その髪が麗へ到達するより早く、麗は懐から小刀を取り出し、鞘から引き抜くとそれを逆手に持つ。

「絞め上げてやるわッ！」

しかし、ダニエラの思惑通りに事は運ばない。麗は小刀で素早く、伸ばされたダニエラの髪を切り落とす。

「手刀はダメでも、刃物は有効なんでしょうか……。それとも、ア

レは特別切れ味の良い物？」

思わず考察を口に出すカンバーへ、麗は技術と切れ味、と短く答えた。

「髪は女の命……！ それを切っておいてタダですむと思うなよ……ッ！」

「いくらでも伸びるのでしよう？ 減るものじゃないわ。それに、そんな美しくない髪を切った程度で罪に問われるなんて……。むしろ散髪代をいただきたいものだわ」

不服そうにそう答えた麗目掛けて、何束もの髪が伸ばされる。その全てが、麗を絞め上げんとして伸ばされている。

「美しくないわ」

呟き、一振り、二振り、三振り。一振りごとに麗は髪を切り落としていく。まるで舞うかのようなその動作に、ニシルとカンバーは言葉を失ったまま（ニシルに関しては喋れないため、失うものもないが）見惚れる。

「早い……ッ！」

「能力に頼り過ぎね。美しくないわ。少しは自己を」

言い終わらない内に、麗は素早くダニエラの眼前まで迫っていた。「な……ッ……ッ……！」

表情を驚愕に歪め、ダニエラは伸ばした髪を、麗の元まで動かそうとするが、次の瞬間　麗は小刀を、ダニエラの首目掛けて薙いでいた。

「高めなさい」

先程の言葉の続きを麗が言い終わる時には既に、ダニエラの首は身体から分離していた。

麗は小刀を軽く振って血を落とし、カチンと音をさせて左手に持っていた鞘に小刀を収めた。

血を撒き散らしながら宙を舞う首は、^{ダニエラ}何か言いたげに口をパクパ

クさせていたが、当然言葉にはならず、そのまま地面へ落下する。と同時に、ニシルとカンバーを縛っていた髪は解け、ニシルとカンバーはその場へ落下する。

グチャリと。厭な音。苦痛と恐怖に歪んだ表情を死化粧とし、ダニエラは息絶えた。

ドサリと音を立て、ダニエラの胴体は、首の断面から大量の血を噴き出しつつ、その場に倒れた。

それを一瞥し、麗は嘆息する。

「痛た……」

眩きつつ、ニシルは立ち上がる。その近くで、カンバーも眼鏡の位置を直しつつ立ち上がる。

「……助かりました。ありがとうございます」

「助けたつもりはないわ。けれど、助かったと思ったのなら、お礼を言つて正解ね」

カンバーへそう答え、麗は鞘に収めた小刀を懐へと収める。

「随分と惨いね……。まあ、僕も人のことはあまり言えないけどさ」
グラウスの死に様を思い出しつつ、ニシルはそう言つてダニエラの死体へと歩み寄つた。

「一度僕も殺しているとは言え、慣れたくないよ。人間の死には」
眩き、ニシルは嘆息する。ニシルの言葉を聞き、カンバーは一瞬表情を暗くしたが、すぐに表情を変え、とにかく助かりました、と呟いた。

「それより貴方達、何者なの？」

「えっと……。ちよつとこの洞窟の赤石に用事がありました……」

麗の問いに、そう答えかけたニシルを、麗は軽く睨め付ける。

「赤石？」

「ええ、まあ。貴女こそ、一体……？」

カンバーの問いに、麗は私も赤石に用事があるのよ、と答えた。

「あのさ、目的が同じなら、ちよつと提案があるんだけど」

ニシルの言葉に、麗は鋭い目付きで何？ と問うた。

「僕とカンバーは、畏にかかつてここに落ちちゃったんだけど……」

「不服だけど、私もそうよ」

「おお、丁度良い」

ポンと。嬉しげにニシルは相槌を打つ。

「上に戻るまでさ、僕らと一緒に行動しようよ。不必要に争いたくないし、上に戻ってから別行動取れば良いじゃん」

ニシルの言葉に、麗はしばらく考え込むような仕草を見せたが、すぐにそれもそうね、と呟く。

「貴方達に私と争うつもりがないのなら、それで良いわ」

「じゃ、決まりだね。カンバーもそれで良い？」

ニシルの問いに、カンバーはコクリと頷いた。

各自お互いに自己紹介をした後、三人は麗が出て来たのと別の道へと進んで行った。

燃え盛る炎が、飛来する氷塊を凄まじい勢いで溶かしていく。

大量の氷塊を、各方向から同時にエルヴィン目掛けて発射するも、エルヴィンは自分の周囲に炎の壁を出現させることで全ての氷を防いだ。

舌打ちし、トレイズは右手をかざす。すると、その右手で氷が徐々にある物へと形成されていく。

「……ほう」

それを一瞥し、エルヴィンは興味深げに声を上げた。

それは、剣。細く長い、氷によって形成された剣。

「……行くぞ」

呟き、トレイズはエルヴィンへ、その剣で切りかかる。エルヴィンは余裕の表情でそれを回避し、トレイズの顔目掛けて右手をかざす。

次の瞬間には、エルヴィンの右手の前に大人の拳大程度の火球が出現していた。その火球は、トレイズ目掛けて勢いよく発射される。舌打ちしつつ、トレイズは顔を逸らして火球を回避する。その際、髪の一部がかすったらしく、トレイズの耳元で髪の毛の焼ける小さな音がした。

トレイズは数歩後退し、すぐにエルヴィン目掛けて剣を刺突する。

「剣とは言え、所詮は氷」

呟き、エルヴィンは剣の刃先へ、自分の手の平を向けた。

「ッ!?!」

エルヴィンの右手の平で燃え盛る、高熱の炎。それは、突き出されたトレイズの剣を徐々に溶かしていく。

すぐにトレイズは剣を手から離し、エルヴィンから距離を取る。

「とことん、相性が悪いようだな」

険悪な表情で呟くトレイズを一瞥し、エルヴィンはニヤリと笑み

を浮かべる。

「炎と氷。まあ、相性は最悪だろうな」

そう言っつて、エルヴィンは右手を軽く薙いだ。すると、その軌道上に小型の火球が数個出現する。

そして次の瞬間、全ての火球が一斉にトレイズ目掛けて飛来する。

防ぎようがない……！

飛来する火球の内、幾つかは回避することが出来たが、その内二、三個はトレイズの身体へ直撃する。

「……あ……ッ……！」

苦痛。恐らく直撃した部分は軽い火傷になっているだろう。小型の物だったのは幸いだ、もし大型の火球を喰らっていたら、大火傷は避けられなかっただろう。

この氷の能力で、エルヴィンの炎へ対抗する方法は……？

瞬時に頭の中を回転させ、思索する。普通に氷で攻撃しても無意味だ。あの炎で溶かされる。

ニシルと戦うくらい、こっちが不利だな。

心の内で呟き、嘆息する。相手はニシルではない。ニシルの能力は熱。身体の各部位から高熱を発する能力。それに対してこの男、エルヴィンの能力は炎。炎を出現させ、自在に操る能力……。

「……そうか」

エルヴィンは、ニシルのように身体の各部位から、熱を発することが出来る訳ではない。あくまで自分と同じ、手等を利用して操ることしか出来ないハズだ。

スツと。トレイズは右手をエルヴィンの頭部目掛けてかざす。

「……？」

訝しげな顔をするエルヴィン。トレイズはそれを無視し、右手の前に氷塊を出現させる。

「何をするかと思えば……」

フン、と鼻を鳴らし、エルヴィンはトレイズを嘲笑した。

トレイズの形成する氷塊は、徐々にその大きさを増していく。い

つもの二倍、否、三倍以上。その巨大な氷塊を、トレイズはエルヴィンの頭上目掛けて勢いよく発射した。

「サイズが違おうが、無駄なことだッ！」

エルヴィンは頭上の氷塊目掛けて右手をかざし、火炎を放つ。勢いよく放たれた火炎は、巨大な氷塊を溶かしていく。

「俺は熱いぞ？」

ニヤリと笑みを浮かべたエルヴィンに、トレイズもニヤリと笑みを返す。そしてゆっくりと、エルヴィンの元へ歩み寄る。

「まだ足掻くか！」

頭上へ向けていた右手を、エルヴィンがトレイズへ向けた時だった。

「馬鹿が」

トレイズが呟くと同時に、水と化した氷塊が、まるで雨のようにエルヴィンへと降り注ぐ。

「な……ッ！」

そっと。トレイズはエルヴィンの身体へ触れた。

「凍え死ね……ッ！」

トレイズがそう言うと同時に、エルヴィンの身体は凄まじい勢いで凍らされていく。

「貴様より、ニシルの方がよっぽど熱い」

そう呟き、トレイズがその場へ座りこんだ時には、既にエルヴィンは一つの氷塊と化していた。

そっとトレイズは、先程の火傷の位置へ右手で触れる。すると、その部位に小型の氷が出現し、幹部を冷やしていく。他の部位も同じように、氷で冷やしていく。

「……追いつくのは、まだまだ先になりそうだ」

独り呟き、トレイズは嘆息した。

ミラルに何度も忠告されつつ、チリーはミラルと共に奥へと進んでいた。

相変わらずチリーは何度も罨にかかりかけ、その度にミラルのひん響しやくを買っていた。

「トレイズ……大丈夫かな」

不意に、ミラルが不安げに呟く。

「大丈夫だろ。アイツはやたら強いからな」

ニツと笑ってそう答えたチリーに、ミラルは嘆息する。

「気楽ね……。心配じゃないの？」

「そりゃ俺だつて心配だ。けどな、一々気にしてたんじゃ先に進めねえ」

そうだろ？ と問いかけるチリーに、ミラルは小さく頷いた。

「俺達が見るのは後ろじゃねえ、前だ。トレイズだつて、それはわかつてるハズだぜ」

だから。そう付け足し、チリーは言葉を続ける。

「進むぜ」

「……うん」

そう答え、ミラルが頷いたのを確認し、チリーが一步踏み出そうとした時だった。

「待った！」

ピタリと。ミラルの言葉に従い、チリーは足を止める。チリーの足元には、やや不自然に出っ張った四角い岩。

「進むのも良いけど、罨にはかからないようにね」

「……そうだな」

嘆息し、チリーは別の場所へ踏み込んだ。

それからしばらく、チリー達は洞窟の奥へと進んでいった。ミラルの努力もあつてか、罨にかかりかける回数は徐々に減っていった。「ここ、どのくらい奥まで続いているんだろ……」

「だな。相当奥に隠されて」

チリーが言いかけた時だった。

「ねえ、あれ」

不意に、ミラルが前方を指差す。すぐにチリーは、ミラルの指差す方向へ視線を向ける。

「あそこ、誰がいるわ」

「……ゲルビアか？」

目を凝らし、チリーとミラルはその人影を凝視する。ゆっくりと、人影はこちらへと歩み寄って来る。

チリーはミラルを自分の後ろに追いやると、素早く身構えた。

「あれ……？」

短く声を上げ、ミラルはチリー横へ出る。

「お、おい！ 下がってるよ！」

「え、でもあの人影……」

再度、ミラルは人影を指差す。

長身の、どこかで見た覚えのある青年だった。その青年は、歩みを止めることなくこちらへと近づいて来る。

徐々に、青年の顔が明確に見えてくる。

「まさか……」

構えを解き、チリーは驚嘆の声を上げた。

「青蘭！」

チリー達の方へ歩み寄って来たのは、青蘭だった。

長身に、端正な顔立ち。確かに彼は、かつてチリー達と共に旅をしていた青年、青蘭であった。

すぐに、チリーとミラルは青蘭の元へ駆け寄った。

「久しぶりだな！ お前も来てたのか！」

「……まあな」

嬉しそうにはしゃぐチリーに、青蘭は微笑む。

「あれ、青蘭の仲間か？」

「さっきまで一緒だったんだが、はぐれてしまった」

ミラルの問いにそう答え、青蘭は肩をすくめて見せた。

「なんだよ、お前らしくねえな」

茶化すように笑いつつ、チリーはそう言った。釣られて、青蘭も表情に笑みを浮かべる。

「まあいいや。お前が合流するまで、一緒に行動しようぜ」

「そうね。色々話もしたいし」

笑顔でそう言った二人に、青蘭は首を左右に振った。

「それより、二人に聞きたいことがある」

「何だよ？」

不意に、青蘭は表情を一変させ、真剣な表情で二人を見つめる。

「お前達、目的は赤石か？」

「……当たり前だろ！俺達は今、赤石を探すために旅してんだぞ？お前だって知ってるハズだ。何でそんなこと聞くんだよ？」

語気を荒げるチリーの隣で、ミラルはどうしたの青蘭？と不安げに問うている。

「いや、確認しただけだ」

そう言って、青蘭は二人から距離を取る。訝しげな表情で青蘭を見つめる二人に対して、青蘭は身構えた。

「ッ！？」

二人の表情が、同時に驚愕で歪んだ。

「お前らが、俺の敵かどうかの確認を……な」

敵を見据える冷たい視線で、青蘭は二人を見据えていた。

「敵って……何言っただよ……？」

表情を驚愕に歪め、恐る恐るチリーが問うた。すると、青蘭は薄らと笑みを浮かべる。

「俺もお前も、別々の目的で赤石を求めている。なら、敵対するのは当然だろう？」

なるほど、理に適った理屈ではある。しかし、敵と言う言葉がチリーには納得いかない。彼は　　青蘭は、短い間とは言え共に旅をした仲間の一人だ。しばらく離れていたとは言え、簡単に敵対宣言をされるとは思えない。思いたくない。

「どうしたの、青蘭……？」

やや怯えた目で、そう言ったミラルへと青蘭は視線を向ける。

「どうもしないさ。ただ、俺とお前達は敵同士……。それだけだ」

「青蘭……。テメエそれ本気で言っただのか……？」

頭に来たらしく、表情をしかめてチリーが問う。

「ああ。俺は本気だ。冗談でこんなこと、言う必要がないだろう」
そう言っ、青蘭はゆっくりとチリーへ歩み寄り　　チリーの顔を思い切り殴りつけた。

「……ッッ……！？」

仰け反り、困惑した表情でチリーは顔を抑える。

「これが証拠だ」

ニヤリと。青蘭が笑みを浮かべた。

「ちよつと青蘭っ！　何するのよ!？」

チリーの前へ出、ミラルはキツと青蘭を睨み付ける。

「敵を殴って、何か問題があるのか？」

そう、青蘭は平然と言っただけだ。

「何ですって……!？」

「退け！」

勢いよく、振られた青蘭の右腕が、ミラルの顔面へ食い込んだ。

「な　　ッ!?」

チリーが驚愕に表情を歪めると同時に、ミラルは派手に吹っ飛び、岩壁へ頭部を強かにぶつける。

「ミラルッッ!!」

グッタリとしたまま、ミラルはそのまま動かない。頭部からは、ダラリと赤い血が流れ出ていた。

次の瞬間、チリーは身体中の血が頭へ上ったかのような錯覚をした。

「つと。やり過ぎたか」

「青蘭ッッ!!」

瞳孔の開いた目で青蘭を睨み付け、怒号を上げてチリーは勢いよく青蘭の胸ぐらを掴んだ。

「テメエッ!　今自分が何やったかわかってんのかッ!?　ふざけんじゃねえぞクソ野郎がアッ!!」

凄まじい剣幕でまくし立てるチリーを、然程気にする様子もなく、青蘭は鼻を鳴らした。

「女一人くらいで、やかましい」

その一言で、チリーの頭の中は一瞬でドス黒い感情で埋め尽くされた。

「ふざッけんアッ!!」

掴んでいた胸ぐらを離し、チリーは青蘭を思い切り殴りつけた。

鈍い音と共に、青蘭は後方へ派手に吹っ飛んでいく。

「ぶっ殺してやるッッ!!」

瞬時に、チリーは大剣を出現させると、倒れている青蘭目掛けて素早く駆け付けた。そして跳躍すると、大剣を倒れている青蘭目掛けて振り降ろす。

「チッ」

舌打ちし、青蘭はゴロリと転がって大剣を回避する。

チリーの振り降ろした大剣は、轟音と共に地面を砕いた。と同時

に、すぐにチリーへ視線を青蘭へ向ける。

「逆上しやがって……！」

悪態を吐くと、青蘭はすぐにチリーへ背を向け、その場から走り去って行く。

「待てッ！ ふざけんなテメエッ！」

追いかけたが、青蘭はその先にある、二つに分かれた道のどちらかへ逃げていた。どちらへ行くか迷っている間にふと我に返り、チリーは追いかけることよりもミラルの安否を確認することを優先すべきだと気付く。

「青蘭……ッ！ 青蘭ッッッ！！」

怒りと憎しみを込めて、かつての友の名を、チリーは叫んだ。

ミラルの元いた場所へ戻ると、ミラルはまだ岩壁にもたれかかったままだった。すぐに駆け寄り、ミラルの身体を揺さぶる。

「おい！ ミラル！ しっかりしろッ！ おいッ！」

激しく揺さぶるべきではない。しかし、怒りと焦りでチリーは正常な思考を失っていた。

「ん……」

ゆっくりと。ミラルが閉じられていた口を開けた。

「ミラル!?」

ミラルの目はゆっくりと開かれ、チリーを捕らえる。

「あれ、チリー……？ 私……」

キョロキョロと辺りを見回し、ミラルは首を傾げる。

「お前、大丈夫なのか……？」

「大丈夫って、何が？」

心配そうに問うチリーへ、ミラルはキョトンとした表情で問う。

「何って、頭………え？」

血がない。先程、確かに彼女の頭部から流れ出していたハズの血は、どういう訳か姿を消している。それどころか

ミラルの頭部には、傷そのものがない。

学のないチリーでも、このくらいは当然わかる。これは絶対におかしい。

「えっと確か……青蘭が変で、私……殴られたの？」

不思議そうに、ミラルはそう問うた。恐る恐る、チリーはミラルの後頭部　　傷があったハズの場所へそっと触れた。

「え、何……？」

やはり、ない。傷口などそこには存在しなかった。その代わりに手の甲で感じた、岩壁へ付着した液体へ触れた感覚。そっと、チリーはミラルの後頭部から手を離し、手の甲を見る。

「　　ッ!？」

付着していたのは、血だった。

「ねえ、何があったの？」

ゆっくりと立ち上がり、ミラルは服についた土や砂を両手で払う。彼女の背後には、血の付着した岩壁。

それを見、チリーは確信する。

ミラルは怪我をしなかった訳ではないのだ。

では、何故？ 何故ミラルは無傷で、平然と立っていられるのか。思索してみるが、到底答えなど見つかるハズもなく、チリーは嘆息する。

「お前はさつき、青蘭に殴られたんだ」

「え……？ 青蘭……に？」

そう言っつて、ミラルの不可解な傷口のことで一度頭から消えていた、青蘭への怒りが再びチリーの中で沸き上がる。

「アイツ……ッ！」

グッと拳を握り締め、青蘭の言葉を反芻する。

どうもしないさ。ただ、俺とお前達は敵同士……。それだけだ。

「それだけ……だとッ……！」

思い切り、握り締めた右拳を岩壁へ叩き付ける。岩壁に、拳一つ分の穴が穿たれた。

普通なら、彼の体格からは考えられない怪力。しかし、今のチリーとミラルには、それを気にする程の精神的余裕は存在しなかった。裏切られた。仲間だと思っていた青蘭に、こつも容易く裏切られたのだ。

「ごめん、私のせいで……」

それはどういう意味か。殴られたことに対する謝罪か、気絶したことに対する謝罪か。

「何でお前が謝るんだ……？」

呟くようにそう言い、チリーは洞窟の奥へ視線を向けた。青蘭の走り去った、その先へ。

「アイツ……ッ！ 絶対に許さねえッ！」

まるで、慟哭。チリーの頬は、悔し涙で濡れていた。

ニシル達は、長い坂道を上っていた。まるで山道のような傾斜で、正直苦痛だった。しかし、上っているということは上へ向かっているということだ。上へ、赤石のある場所へと向かうルートへ戻るためには、行かなければならない道だった。

「チリー達、大丈夫かな」

ボソリと。ニシルが心配そうに呟く。

「大丈夫でしょう。トレイズもついてますし、滅多なことにならないと思います」

「まあ、そうだろうけどね……」

そんな会話をしていると、不意に前を歩いていた麗がこちらを振り返る。

「チリー……。青蘭がよく口にしていた名前ね」

「青蘭が？」

ニシルの問いに、麗は小さく頷いた。

「ええ。自分を助けてくれた、命の恩人だと、誇らしげに語ってたわ」

命の恩人……。エリニアでの、仮面の男と戦った時のことだろう。当時神力を使えなかったニシルは、仮面の男との戦いには参加していない。

「そしてその仲間も、みんな良い奴らだ、とこれもまた誇らしげだったわ。まるで私達のこと不満みたいじゃない、美しくないわ」

あまり表情に変化は見受けられないが、麗の表情は微かに拗ねたようにも見えた。それに気付き、まるで彼女の素を見てしまったかのような気分になり、ニシルは微笑する。

「青蘭……と言いますと、俺がこの旅に参加する前、一緒に旅をしていた人物ですよね？」

「うん」

カンバーへそう答え、ニシルは言葉を続ける。

「良い奴だったよ、本当に。僕らのまとめ役みたいな立ち位置だった気がするよ。今じゃトレイズとカンバーがやってくれてるけどね」

そう言って、ニシルは懐かしそうに微笑んだ。

それからしばらく、カンバーと青蘭について話していると、徐々に坂道が平坦に変わっていく。上へ辿り着いたのだろうか。

そのまま少し歩くと、道は完全に平坦になっていた。

前方は岩壁。どちらが奥へ続いているのか、先程まで下にいたニシル達にはわからない。

「どうするカンバー？ 僕の直感には左へ行けと喚いている」

「喚く程必死なんですな、貴方の直感」

呆れ気味にそう言い、カンバーは左へ行きましょう、と呟いた。

「そう。私は右へ行くわ。ここでお別れね」

そう言って、麗は別れの言葉すら口々に言わず、右へスタスタと進んで行った。

「それじゃ、僕らも行くこうか」

ニシルの言葉に、カンバーはコクリと頷き、左の道へと歩いて行った。

二つに分かれた道の、左を選んでチリー達は先へ進んでいた。

青蘭との一件が原因で、チリーの機嫌は最悪で、あれから一言も会話をしないままチリー達は歩いていった。

流星のチリーもいい加減、畏の避け方がわかって来たらしく、もうミラルが忠告する必要はなくなっていた。そのせいで、余計に沈黙は深くなっていく。

裏切られた。否、元々目的は別々だ。こうなるのは当然だったのかも知れない。

チリー達はテイテスのため。青蘭達は東国のため。赤石を求める目的はそれぞれ違うのだ。ゲルビアとチリー達が敵対するのは、理由は同じ……。

「クソ……ッ」

沈黙を破り、チリーは悪態を吐く。

「ねえチリー……。本当に、青蘭は私を殴ったの？」

「ああ。俺の目の前でな……」

脳裏を過る、ミラルが殴られた瞬間の光景。再び怒りが込み上げ、チリーは拳を強く握り締めた。

「許せねえよ……ッ」

仲間だと、思っていた。目的は別々になろうとも、仲間であることに変わりはないと、そう信じていた。

もう、青蘭のことを考えるのはやめた方が良く。そう思い、チリーはかぶりを振った。

これ以上苛々しても仕方がない。今は、ゲルビアや青蘭達よりも早く赤石の在処へ辿り着くことの方が先決だ。

「ミラル、急ぐぞ」

「……うん」

ミラルが頷いたのを確認し、チリーは歩を早めた。

しばらく進んでいると、唐突に開けた場所へ出た。チリー達の出
て来た通路の他に、この場所へと続いている通路が、左右に一つず
つ存在していた。

「あれ……」

ミラルが指差す方向。チリー達の正面には、巨大な、古めかしい
扉が存在した。

「まさかこの奥に……」

呟いたミラルを見、チリーは小さく頷いた。

「行くぞ……」

緊張した面持ちでチリーが言うと、ミラルはコクリと頷いた。

ゆっくりと。二人で扉へと近づいて行く。その時だった。

「待つてよ」

不意に聞こえる、少年の声。慌ててチリー達が声のした方向へと
視線を向ける。

右の通路から、ゆっくりとその少年はこちらへ歩いて来る。

肩まで伸びた髪を、後ろで一つに縛っている、どこか中性的な外

見をした少年……。

「久しぶりだね、チリー」

ライアス
少年はチリーを見、ニコリと微笑んだ。

「……トレイズ！」

ニシル達がしばらく進んでいると、岩壁にもたれかかっているト
レイズを発見した。ニシル達はすぐに、トレイズの元へと駆け寄る。

「大丈夫!？」

心配そうにそう言ったニシルへ、トレイズは頷いて見せる。

「なんとかな」

「火傷、ですか？」

カンバーが問うと、トレイズは小さく頷いた。

「その奴にやられてな」

トレイズの指差した方向には、氷漬けにされたエルヴィンの姿があった。

「す……」

驚嘆の声を上げ、ニシルはそつと氷塊エルヴィンへ触れる。ひんやりとした、冷たい感触。

「よっ」

ニシルの掛け声と共に、ニシルの右手から高熱が発せられる。右腕が痛むが、それを気にせずニシルは氷塊を溶かしていく。

「ニシル……？」

氷塊を溶かし切ると、ドサリと音を立ててその場へエルヴィンが倒れた。それを一瞥し、トレイズは不思議そうな表情でニシルを見る。

「いや、凍ったままここに放置するのは惨いかなあって。死ぬよりキツイよ、多分」

そう言っつて悪戯っぽく笑うニシルを見、トレイズは微笑する。

「ニシルさん。どうやら俺達は、奥へ向かうどころか逆走していたみたいですね」

「……だね。そう言えばトレイズ、チリー達は？」

先へ言った、とトレイズは答えてゆつくりと立ち上がる。

「もう良いんですか？」

「ああ。むしろ休み過ぎたくらいだ。行くぞ」

トレイズの言葉に二人は頷き、トレイズを先頭に奥へと進んで行く。

しばらく進んで行くと、道が二つに分かれていた。

「片方は、僕達がさつき通った道だよな」

ニシルの言葉に、カンバーはコクリと頷く。

「ええ。もう片方の道を行きましょう」

「そうだな」

トレイズがそう答えたのを確認し、カンバーは左の道へと進んで行く。その後ろを、ニシルとトレイズは付いて行った。

ギロリと。チリーはライアスを睨みつけた。それに対してライアスは、然程気にする様子もなく、余裕たっぷりな表情でチリーを見ている。

「この間は世話になつたな……！」

チリーの脳裏を過るのは、己の剣が砕かれる瞬間。しかし、もうその光景に怯えはしない。

もう、心だけは負けない。

「変わったね」

呟き、ライアスは笑みを浮かべる。

「うん、強くなった。前にあつた時よりずっと」

どこか嬉しげに、ライアスはそう言った。

「私達に何の用よ……？」

ミラルの問いに、ライアスはクスリと笑う。

「正直、僕に赤石とかは関係ない。ハーデンが喜ぶなら持って帰るけど、赤石に関して僕は何も言われてない。関係ないんだよ」

でも、と付け足し、ライアスはチリーを真っ直ぐに見据えると、言葉を続けた。

「僕がここに来たのは、チリーを殺すため」

ニヤリと。笑みを浮かべるライアス。

「さあ、この間の続きをやるう」

ライアスがそう告げた途端、チリーはすぐにミラルを自分の後ろへ追いやった。

「ミラル、退いてろ」

「う、うん」

チリーの言葉に大人しく従い、ミラルはチリーの後ろへと退いた。
「前は勿体なくて壊さなかったけど、今度は容赦しない」

「人を玩具みてえに言いやがって……！ 来いよ、玩具は主人に反逆するぜ？」

ニヤリと笑い、チリーは身構えると同時に、右手に大剣を出現させる。

「前より力を感じる……。本当に、強くなったね」

そう言っただけでライアスは右手をかざす。すると、その右手で何らかのエネルギーらしきものが迸り始めた。

神力。神力使いとしてのライアスの能力は、触れた物を破壊すること。ライアスの右手で迸っているソレは、そのための神力だろう。

素早く、ライアスはチリー目掛けて駆け出し、その右手をチリーの顔面目掛けて突き出した。チリーは顔を逸らして右手を避けると、ライアス目掛けて大剣を薙いだ。しかし、ライアスは左手でその大剣を止める。見れば、ライアスは左手にも神力を迸らせていた。放出されずに留められた神力が、チリーの大剣を阻んでいる。

「チッ」

舌打ちし、チリーはすぐに大剣をライアスの左手から離し、バツクステップでライアスから距離を取る。そしてすぐに、ライアスへ駆け寄り、両手で大剣を振り上げる。

「らアッ！」

掛け声と共に大剣を振り降ろすが、ライアスは素早く左へ身をかわして大剣を回避する。そのまま振り降ろされた大剣は、轟音と共に地面を少し砕いた。

大剣へ一瞥もくれず、ライアスは横からチリーの頭部へ右手を突き出す。

「喰らうかよ！」

チリーは方向を転換し、右手を大剣から離すと、ライアス目掛けて横に右拳を振った。その右腕を、ライアスは右手で掴む。

「壊すよ？」

「……ッッ！」

すぐに、チリーは右足でライアスの腕を蹴り上げる。蹴り上げられ、ライアスは無意識の内にチリーの右腕を持つ右手を離れた。すかさず、チリーは右腕を引っ込める。

「危ねえ……」

右腕を見つつ何度か縦に振り、無事であることを確認すると、チリーは再び大剣でライアスへ切りかかる。

斜めに振られた大剣を、ライアスは後退してかわすと跳躍し、大剣を踏み台にして更に跳躍する。そして上空から、チリーの頭部目掛けて右手を突き出す。

ライアスが踏み台にした際、一時的に大剣の重量は増した。その結果、不意に重量の増した大剣を持っていられず、チリーの両手は緩み、大剣はチリーの手を離れ、その場へ音を立てて落ちた。

「クソ……ッ！」

チリーは大剣を持っていないまま、大きくバックステップすることでライアスの右手を回避する。

そして聞こえる、凄まじい破壊音。ライアスの右手は地面に触れ、放出した神力が地面を大きく抉った。

「惜しかったなあ」

残念そうに呟き、ライアスはチリーを見据える。

「チリー！」

心配そうに、後方でミラルが叫ぶ。

「へえ、彼女？」

笑みを浮かべ、ライアスが問う。

「うるせえよ。テメエには関係ねえだろ」

チリーが睨むと、ライアスはそうだね、と小さく頷いた。

「あれ、剣は出さないの？」

傍に転がっているチリーの大剣を見、ライアスはクスリと笑った。ライアスの言葉には答えず、苦虫を噛み潰したかのような表情で、

チリーは舌打ちした。

「ああ、そうか」

ゆっくりと。ライアスは大剣を拾い上げる。

「二つ同時には出せないか」

嫌らしい笑みを、ライアスは浮かべた。

ジツトリと。チリーの額を厭な汗が流れた。

二つ同時には出せないか。

正に、ライアスの言う通りである。チリーは、大剣を二つ同時に出すことは出来ない。

破壊された後、もう一度出現させることは可能だが、大剣がその場に残っているのではどうにもならない。自分の手を離れた状態では、消すことも出来ないのだ。

ライアスに、大剣を踏み台にされたあの時、うっかり手放すのではなく即座に消しておけば、何も問題はなかったのだが……。

「へえ、これが君の剣……」

大剣で、地面をコンコンと叩きつつ、興味深げにライアスは大剣を眺めている。

「これ、壊すと君は出し直すよね。だから」

軽い動作で、ライアスは大剣を自分の後方へ投げ捨てる。大剣は音を立て、ライアスの後ろで落下した。

「これは壊さない」

「素手で戦えつてか……」

「そういうこと」

ニコリと。ライアスは笑みを浮かべた。

「チリー……！」

心配げに声を上げ、ミラルはチリーの方へ駆け寄ろうと一歩踏み出す。しかし、足音でそれに気付いたチリーは振り向かず、ミラルを右手で制止する。

「来るな……！ 来るんじゃない……」

ライアスの能力。触れた物を破壊する能力は、あまりに危険過ぎる。迂闊にミラルを近寄せる訳にはいかない。ライアスの能力は相応な破壊力を持っている。あの両手に、ミラルを触れさせる訳には

いけない。邪魔とあれば、ライアスはミラルを容易に殺すだろう。

「……ッッ……！」

一瞬、チリーの脳裏を過る悲惨な映像。ライアスの能力で、頭部を粉碎されるミラルの姿……。

その映像をかき消すように、チリーはかぶりを振ると、ライアスの方へ視線を戻した。

大剣が使えないとなると、素手でライアスと戦わなければならない。あの、破壊の能力と素手で戦うのだ。

ゆっくりと。チリーは額の汗を拭う。

「僕だつて素手だし、丁度良いんじゃないかな」

「お前程危険な素手は見たことねーよ」

「それもそうだね」

チリーの言葉にクスリと笑みを浮かべ、ライアスはチリー目掛けて駆け出した。そして素早く、チリーの顔面目掛けて右手を突き出す。チリーは伸ばされたライアスの手首を左手で弾き、ライアスの右手の軌道を逸らす。

右拳を握り、ライアスの腹部目掛けて突き出そうとし ち

リーはピタリと右拳を止めた。

掴まれる。このまま右拳を突き出せば、ライアスの左手に掴まれ、拳ごと腕を破壊されるのは明白だった。素手で戦うには、ライアスはあまりに危険な相手だ。

チリーが戸惑った隙に、ライアスはチリーの顔面目掛けて左手を伸ばす。チリーは体勢を低くして左手を回避すると、右足でライアスの足を払う。

「ッッ」

一瞬驚いたような表情をし、ライアスはその場へドサリと背中から倒れる。が、その体勢からチリー目掛け、右足を突き出した。

チリーは舌打ちしつつ、バックステップでライアスの右足を避ける。その隙に、ライアスは立ち上がり素早く体勢を立て直す。そしてチリー目掛けて駆け、右手をピクリと動かした。

来る！

咄嗟にそう判断し、チリーが横へ逸らした時だった。

ニヤリと。ライアスは笑みを浮かべると同時に、チリーの腹部目掛けて右足で蹴りを繰り出す。

「フエイントツ!?」

右手の動作はフエイント。チリーがそう気付いた時には既に遅く、ライアスの右足はチリーの腹部へ食い込んでいた。

「チリーっ!」

後方から、ミラルの声が響く。それを意に介さぬ様子で、ライアスは笑みを浮かべたまま足を戻し、体勢を崩したチリーの頭部目掛けて左手を突き出した。

「ツツ!」

腹部へ走る激痛に耐えつつ、チリーは必死に首を後方へ逸らし、ライアスの左手を回避する。

「避けた……!」

この回避を好機と見たチリーは笑みを浮かべると、体勢をやや低くし、ライアスの左手目掛けてアッパー気味に右拳をぶち込んだ。

「あッ……ツツ!」

ライアスの左手に走る激痛。不自然に曲がった左手を、驚愕の表情で見つつライアスはすぐにチリーから距離を取る。

「蹴りのお返しだ……ツ!」

「……割に合わないね……!」

左腕を右手で押さえ、表情を苦痛で歪めながらライアスは吐き捨てるようにそう答えた。

「大剣ぶっ壊されたお返しもある」

「大剣だけで許してあげたんだ。感謝しなよ」

「上からもの言ってるんじゃないよ。腕、もう片方ぶち折ってやろうか?」

そう言って、チリーはニヤリと笑った。

「遠慮しとくよ」

そう答え、ライアスはチリー目掛けて駆け出した。

神力の進む右手が、チリー目掛けて伸ばされる。チリーはそれを危なっかしい動作で避けている。

ライアスは左手を負傷しているのにも関わらず、左手を使わないこと以外に、動きに変化はない。

「チリー……！」

胸の前で両手を握り合わせ、不安げにミラルは呟いた。

チリーはキリトとの修行で、素手の先頭に慣れてはいるものの、ミラルから見た感じではどこか戦いにくそうだ。

ミラルは、ライアスの後方にある大剣へ視線を向ける。

大剣がないせいで、チリーは苦戦している……？

ライアスの能力は、見たところ触れた物を破壊する能力。そんな能力相手に、素手で戦うのはかなり厳しいものがある。武器でもあれば少しは安全なのだが、チリーは今武器である大剣を失っている。

あの大剣、なんとか私の手でチリーへ届けられないかしら……？

チリーはライアスからの攻撃を防ぐので手一杯だ。とてもじゃないが、大剣を回収しに行く余裕などなさそうだ。しかし、大剣がなければこのまま苦戦し続けることになる……。

「私が……やらなきゃ……！」

自分を勇気づけるように、一人ミラルは頷く。そして、そつと一歩踏み出した。

ライアスは戦闘に集中している……気を付ければ、気付かれずに大剣に近付ける！

決して気付かれてはいけない。気付かれれば、ライアスはすぐにもミラルを殺すために向かって来るだろう。

本当は、何もしない方が良いとわかっている。それでも、何か役に立ちたかった。いつも自分を守ってくれる少年を

チリー

を、どんな形でも良い、助けて。どんなことでも良い、役に立ちたい。

「が……ッ！」

不意に聞こえる、チリーの呻き声。見れば、チリーの頭部にライアスの回し蹴りが直撃していた。

ドサリと。チリーはその場へ倒れる。

「お返し」

「割に合わねえな……」

「そんなことないでしょ？ こっちは腕折れてるし」

呟いたチリーへ、左手をぶらつかせながらライアスはそう言った。

「だから、そりゃ大剣ぶつ壊されたお返しもあんだよボケ」

悪態を吐きつつ、チリーは立ち上がると笑みを浮かべた。

そんな様子を見、ミラルは一層大剣をチリーのために回収しなくてはならない、と感じた。破壊の能力に警戒しつつ素手で戦う

それは、戦いの経験がないミラルにでもわかる程、戦い辛い状況だ。せめて、少しでも楽に出来れば……

そう思い、ミラルは大剣へ向かってそろそろと歩き出した。

先程の蹴りで、口の中が切れている。チリーは口内の血を、唾液と共に足元へ吐き捨てた。そして薄らと血の付いた口元を拭う。

すぐにでも攻撃を仕掛けたい気分だが、やはり迂闊には攻めることが出来ない。あの右手に、腕か足を掴まれれば一巻の終わりだ。

かと言って、防戦一方なのは性に合わない。

どうしたものかと思案するが、一向に良い案は浮かばない。

せめて、大剣が手元に戻れば……！

舌打ちし、ライアスの後方へ視線を向ける。そこには、ライアスによって投げ捨てられた己の大剣が落ちている。

「剣、使いたい？」

「いらねえよ、お前相手なら」

「嘘ばっかり」

強がるチリーへそう言うと、ライアスはクスリと笑みをこぼし、
駆け出そうとする　　が、

「っと」

ピタリと足を止め、ライアスは後ろへ振り向いた。

「　　っ!?!?」

そこには、大剣へと忍びよるミラルの姿があった。既に、大剣は
ミラルの目と鼻の先である。

「ミラルッ!」

チリーが叫ぶとほぼ同時に、ライアスはミラルへ素早く近寄る。

「邪魔、しないでよね」

一切の感情を表さない、冷たい表情でライアスはそう告げた。ミ
ラルは驚愕と恐怖で動けないらしく、一言も発さないままその場で
震えている。

「困るんだよね、そういうの」

神力の迸る右手を、そっとライアスはミラルへ向けた。

「碎け散れ……!」

ライアスが、ミラルの頭部へ右手で触れかけた　　その時だ
った。

「ミラルに手エ出してんじゃねエよツツ!!!」

飛び蹴り。全力で駆けたチリーは、跳躍するとライアス目掛けて
飛び蹴りを繰り出したのだ。不意を突かれたライアスは、避けるこ
とが出来ず、チリーの飛び蹴りを後頭部へモロに受けた。

「が……ツツ……!?!?」

その場へうつ伏せに倒れるライアスへ一瞥もくねず、着地したチ
リーはすぐにミラルの元へ駆け寄る。

「大丈夫か!?!?」

「え、あ……うん……。あ、ありがとう……」

「ありがとう、じゃねえよ！ 無茶しやがってッ！」
ミラルの両肩を両手で握り、揺さぶるようにしてチリーはそう言った。

「ご、ごめんなさい……」

謝るミラルに、チリーは嘆息すると近くに落ちている大剣を拾い上げる。

「でも、ま……」

大剣を握り締め、確かめるように縦に振った後、よろよると起き上がってくるライアスへと視線を向ける。

「助かったぜ、ミラル」

ミラルを自分の後ろへ押しやり、身構えるとチリーはニッと笑った。

ゆっくりと。チリーは大剣を構える。少しの間離れていただけに、柄を握り締めるその感触は随分と懐かしく感じられた。確かめるように何度も柄を握り直し、チリーはニヤリと笑みを浮かべる。「仕切り直しだな……！」

立ち上がったライアスは、そう言ったチリーをギロリと睨みつけた。

「今のは腹が立った……かな」

呟くようにそう言ったライアスの瞳には、殺意の色が宿っていた。しかし気圧されることなく、チリーは不敵に笑った。

「悪いが、いつまでもお前と戦ってる訳にはいかねえんだ……！」

「僕は、いつまでかかるうとも、君を殺さなければならぬ」
そう言った後、ハーデンのために、とライアスはボソリと付け足した。

「ミラル、下がってる」

ミラルがコクリと頷き、数十歩後退したのを確認すると、チリーはライアスへ大剣の刃先を向ける。

「……！」

チリーが構えたのは、刺突の構え。それを見た瞬間、すぐにミラルはこれからチリーが何をしようとしているのか把握する。

「今度は、絶対負けねえ」

今にも暴れ出しそうな勢いで、身体の奥底から溢れる神力。

もう二度と、砕かれはしない……！！

心の中で硬く誓い、神力を大剣へと集中させる。

「へえ……驚いたよ。それだけの神力があるなんて」

嘆息した後、ライアスは神力の迸る右手を突き出し、チリー目掛けて一気に駆け出した。

「その剣じゃ、僕の能力には勝てない……！」

「そう思ってたのは」

チリーが言いかけると同時に、大剣の柄からは膨大な量の神力が放出される。その凄まじい勢いで、大剣はチリーごとライアス目掛けて突っ込んで行く。

「テメエだけだアアアツツ!!」

チリーは凄まじい勢いでライアス目掛けて突っ込んで行く。が、それを阻んだのは神力の迸るライアスの右手だった。

「な!?」

チリーの大剣を破壊せんとして放出される、ライアスの神力。しかし、神力の勢いが拮抗しているのか、チリーの大剣は破壊されない。しかし、激しい音を立てつつチリーの突進はライアスの右手によって阻まれていた。

「砕くツ!!」

「貫くツ!!」

二人が叫ぶと同時に、互いの神力が更に力を増した。地面が、岩壁が、漏れ出した神力によって抉れていく。その様子を見、ミラルは息を飲んだ。

「す、すごい……」

お互い一步も譲らない。互いの力は互いの間で激しくぶつかり合っていた。飛び散る神力が、お互いの身体を傷付けた。

凄まじい威力で、大剣がライアス目掛けて突っ込んで来る。神力を破壊の力を宿した右手で、ライアスはその大剣を防ぐが、チリーは少しも勢いを落とさない。そればかりか、徐々に勢いを増していく程だ。

負けじとライアスも右手に力を込める。

強い……!!

素直に、そう感じた。少し前までは、自分より劣っていると判断していたチリーが、自分より強い力でこちらへと突進して来るのだ。

破壊の能力　それは、ライアスを一度も敗北させることはなかった。それ程までに強大で、それ程までに強い力。

その、最強であるハズの自分の能力が今、一人の少年に敗れかけている。否、敗れる訳にはいかない。

「僕は……ッ……！」

表情を一層険しくし、更に右腕へ力を込める。すると、少しだけチリーが後方へ押されるが、すぐにチリーは更に力を込めて押し返す。

「負けない……ッ！」

ハーデンの、ために。

何故戦うのか。一度、誰かに問われたことがある。

兵士でもない自分が、神力使いというだけでハーデンに従い、言われた通りに戦い、敵を殺害する。そんなライアスを、不思議に思ったゲルビア兵の一人が、ライアスにそう問うたのだ。

その問いに、ライアスは常にこう答えている。

ハーデンのために。

そう、王のために、だ。

行くあてのない自分を、ハーデンは必要だと言ったのだ。邪魔なだけだと感じていた力を、「才能」だと言ってくれたのだ。

唐突に脳裏を過る、過去の映像。

血にまみれた部屋、立ちすくむ自分。その手は、赤く紅く染まっていた。

僕はただ、両親に触れただけなのに。

強大過ぎる力の覚醒は、当時のライアスにはあまりにも早過ぎた。コントロール出来ない力は、己の力とは言わない。

神力使いとして覚醒したライアスは、触れた物を容赦なく破壊し尽くした　両親さえも。

訳もわからず呆然と立ち尽くしているライアスの元へ、破壊音を聞き付けた野次馬達がそろそろと群がり、口々に何かを言っていた。それでも、ライアスはただその場へ立ちつくすばかりだった。

やがて彼の元にはゲルビア兵が現れ、野次馬達は取り払われた。両親を殺した自分は、捕まるのだろうか。そんな風に考えていたライアスの元へ姿を現したのは、他でもないハーデンだった。

「君のその力は、才能だ。使いこなせれば、この国の役に立つ」

そう言つて、ハーデンはライアスの右手を取った。破壊することを恐れ、すぐにライアスはその手を振り払おうとしたが、ハーデンの手は破壊されなかった。

「私と来なさい。ライアス」

それ以来、なし崩し的に城で暮らしていたライアスは、やがてハーデンに対して感謝の念を抱くようになっていた。

両親を殺した、この悪魔のような力を、ハーデンは才能だと言い、認めてくれた。

そういう風に考えるようになっていた。

「だからッ！」

過去の映像を振り払うかのようにかぶりを振り、ライアスは負傷した左手をチリー目掛けて突き出す。

「負けられない……ッ！」

ライアスの力が、更に強まった。

「ぐ……ッ」

左手を突き出したライアスの力が、強まった。拮抗していた力のバランスは崩れ、チリーの身体は大剣ごと少し後ろへ押し出される。

「俺には……お前がそこまでする理由がわからねえ」

呟き、チリーは真っ直ぐにライアスを見据える。

「今のお前の表情見りゃわかる……。お前も、何か抱えてんだらうなって、それくらい俺にだって想像がつく」

でもな、と付け足し、チリーは強く大剣の柄を握り締める。

「だからって、俺が負けて良い理由にはならねえ！ テメエには絶

対勝つツツッ！」

大剣の柄から、更に強く神力が放出された。

「な　　ッ!?」

驚愕に表情を歪めているライアスの神力は、チリーの神力によって相殺されていく。少しずつ、ライアスの両手はチリーの神力に押されるように曲がっていく。チリーの突進を、防ぎ切れなくなった証拠だ。

「僕が……負け　　」

ライアスが言いかけた時には既に、ライアスの神力は完全に相殺されていた。

ピタリと。大剣の柄から、神力の放出が止まると同時にライアスはその場へ仰向けに倒れていく。

ドサリと音を立て、ライアスはその場へ倒れた時には、チリーは大剣をその場から消していた。

「ハアツ……ハアツ……ッ」

荒い呼吸をしつつ、チリーは倒れているライアスへ視線を向ける。

「止め……刺さないの……?」

倒れたまま、チリーへ視線を向けないままにライアスは問うた。

「既に倒れた相手に……止めがいんのかよ……?」

「ここで倒さないと……また、襲い掛かるよ」

「そんな時は……そんな時だ」

ドサリと。チリーはその場へ腰を降ろした。

「チリー！」

戦いが終わったことを確認したミラルは、すぐにチリーの元へ駆け寄った。

「甘いね」

「甘さ」

「命取りだ」

「それでも、良い」

嘆息し、チリーは上を見上げた。

「お前を殺す気にはなれなかった」

静かにそう答えたチリーに、ライアスは薄らと笑みを浮かべた。

つい先ほどまで敵対していたチリーに、今はわずかだが友情さえ感じられるような……そんな感情を抱いていた。

「やっぱり、甘いよ」

「それでも良いさ」

クスリと。二人は笑みを浮かべた。ライアスは身体を起こし、チリーと目を合わせる。そしてもう一度、二人で少しだけ笑った。

全身に疲労感がある。大剣による突進は、チリーの体力を必要以上に浪費するらしい。

すぐにも横になりたい気分だったが、そういう訳にもいかない。チリーと、チリーは巨大な扉へと視線を向けた。恐らく、赤石はあの扉の先にある。既にゴールは目の前にある。

「っと」

ゆっくりと立ち上がり、チリーは服についた土を手で払う。

「奥に行くの？」

「ああ」

ライアスへそう答えると、チリーはゆっくりと扉へと歩いて行く。

「行くぞ、ミラル」

「う、うん」

ゴクリと生唾を飲み込み、緊張した面持ちでミラルはチリーの後ろを歩く。

「邪魔、しないんだな」

ライアスへ背を向けたままチリーが呟くと、ライアスはクスリと微笑する。

「疲れてるからね」

「そうかい」

振り向かず、チリーは笑みを浮かべた。

ゆっくりと。洞窟の中を進んで行く。進んでいるのか、戻っているのかもわからないような状態だが、今は進む以外に選択肢は存在しない。

青蘭達は無事だろうか。そんなことを考えたが、すぐに麗はかぶりを振った。

彼らなら、大丈夫。

彼らは、強い。青蘭も光秀も、ちょっとやさつとでやられるような人間ではないし、何より彼らの傍には伊織がいる。ある程度の傷は彼女の能力で治すことが出来る。

心配はいらないだろう。

そんなことを考えつつ奥へと進んでいると、何やら人影が見えて来る。背の高い人間が二人、少女のような人影が一人。

念のため、懐から小刀を取り出ししておき、ゆっくりと彼らへ歩み寄って行く。

一步。二歩。三歩。近付くにつれ、彼らのシルエットは明確になっていく。

「麗ッ！」

三人の内一人の男が、麗の方を振り返って表情を驚愕に歪めた。すぐに彼が光秀だと気付いた麗は、小刀を懐の中へ戻す。

「無事だったんですね！」

少女は伊織、そしてもう一人の男性は青蘭だった。彼らは麗を見るやいなや、嬉しそうに表情を明るくした。

「心配、かけたわね」

そう言って嘆息する麗に、伊織は全くです、と少しおどけた様子で答える。

「どこか怪我、ないですか？」

伊織の問いに首を横に振ると、麗はギロリと光秀を睨みつけた。

「光秀……」

「わ、悪い……。俺が……。迂闊だった……。いや、迂闊でした……」

麗の迫力に、完全に委縮している光秀は申し訳なさそうにペコペコと何度も頭を下げた。

「……まあ良いわ。光秀には後で償ってもらおうとして……」

クスリと笑った後、麗はすぐに青蘭の方へ視線を向ける。

「何かあったのかしら？」

「……」

答えようとしない青蘭に、麗は嘆息するとまあ良いわ、と呟いた。「話したくないのなら後で良いわ。それより、奥へ進みましょう」麗の言葉に、三人はコクリと頷き、洞窟の奥の方へと歩いて行った。

巨大な扉の前、チリーとミラルはその扉の迫力に息を飲んで木製の、頑丈そうな扉だ。やろうと思えば破壊出来なくもないが、今のチリーにそんな体力は残っていない。

「この奥に……赤石が……？」

「多分、な」

ミラルの問いにそう答え、チリーが扉へ手を伸ばしたその時だった。

「おや、先客がいましたか」

「ッ！？」

不意に、男性の声が洞窟内に響いた。

慌ててチリー達が声のした方向へと視線を向けると、そこには背の高い男性が一人、余裕ありげに笑みを浮かべたままそこに立っていた。

背が高いと言うよりは、細長いと表現した方がしっくり来る程に細い男で、彼の黒髪は短く刈り込まれている。目が細く、まるで閉じているのではないかと思う程に糸目だった。右手にはトランシーバーのような物を持っており、先程まで通話していたかのように耳に当てている。

「ニコラス……ッ！」

男を見、立ち上がると同時にライアスはそう呟いた。すると、ニコラスと呼ばれたその男はニコリと微笑む。

「おや……その様子だと……」

ニコラスはトランシーバーをポケットへしまうと、ゆったりとした動作でライアスの元へ歩み寄り、ライアスの顔を覗き込むと再び

笑みを浮かべた。

「貴方、負けました？」

クスリと。ニコラスは微笑する。

「……ッ」

答えず、口惜しげに顔をしかめるライアスを見つめ、ニコラスは厭らしく笑う。

「その能力だけが取り柄でしたのに……それすら敗れてしまっては……良いとこないですねえ……。ゴミですねゴミ」

「僕が……ゴミ……ッ!？」

ライアスがギロリとニコラスを睨み付けると、ニコラスは笑みを崩さぬまま、そうです、と静かに答えた。

「それに貴方、ハーデンに利用されてるだけですし」

「利用……? 違う、僕はハーデンに恩返しをしているだけだ」

「馬鹿ですか貴方。脳みそがゴミで出来てます？」

問いには答えず、ライアスはすぐに立ちあがるとニコラス目掛けて右手を突き出した。その右手には神力が迸っている。

「私からすれば、ゴミですよゴミ」

頭部目掛けて突き出されたライアスの右手を、ニコラスは容易に回避すると、その右手をガツシリと掴んだ。そしてそのまま右手ごとライアスの身体をニコラス自身の方へ近づけ、ライアスの腹部に膝蹴りを喰らわせる。

「ぐ……ッ!」

呻き声を上げ、ライアスはその場に膝を吐き、苦しげに咳き込み始める。ニコラスはそのライアスの肩を掴み、ゆつくりとライアスを立ち上がらせると、まるで人形か何かを捨てるかのように、右へ放った。

「テメエ……ッ!」

チリーはニコラスを睨み付けると、すぐに大剣を出現させてニコラスへと駆け出した。

「怒りに任せて突撃……。ゴミの如く価値のない行動です」

「ゴミゴミツツせエんだよガリガリ野郎がアツ！」

勢いよく大剣を振り上げ、チリーはニコラスの頭上目掛けて振り降ろす。

「ゴミをゴミと呼んで、何か問題でも？」

チリーの大剣を、ニコラスは右手で受ける　　と同時に、チ

リーの大剣はその場から一瞬にして姿を消した。

「な……ツツ……！？」

驚愕に表情を歪めつつも、チリーはバックステップでニコラスから距離を取り、再び大剣を出現させる。

「うらアツ！」

掛け声と共に、チリーはニコラス目掛けて大剣を薙いだ。しかし、それもニコラスの手によって受けられ、それと同時に大剣は姿を消す。

「どうなつてんだ……ツ！？」

「何で……消えるの？」

後方で、口元に手を当ててミラルが呟く。

「どんな能力も、無効化されればただのゴミです」

「誰がゴミだつて……！？」

チリーは構え直すと、すぐにニコラス目掛けて殴りかかった。大剣は出現させても意味がないと悟り、素手での戦闘に持ち込むつもりなのだ。

しかし、ライアスとの戦闘で疲労したチリーに、まともな戦いが出来るハズもない。チリーの拳は、容易くニコラスによって避けられる。そしてニコラスは素早くチリーの腹部へ右拳を叩き込む。

「が……ッ！」

「チリーっ！」

苦しそくに呻き声を上げ、その場へ膝を付いたチリーの元へ、ミラルはすぐに駆け寄る。

「その様子ですと、まだ気が付いてないようですね……」

ニコラスは体勢を低くすると、苦悶の表情を浮かべるチリーの顔

を覗き込む。

「『白き超越者』、やはり赤子から育てたのは失敗でしたか……」

「超越者……？」

チリーが問うたが、ニコラスは答えようとしなない。ただ意味深げに笑みを浮かべているだけだった。

「超越者って……どういうことだよ……？」

よろめきつつも立ち上がり、チリーは再度ニコラスへ問いかけた。
「さあ、何でしょうね」

微笑した後、ニコラスはミラルの方へと視線を向けた。

「な、何よ……？」

チリーを庇うようにチリーの前へ出ると、ミラルはチリーを守るかのように両手を大きく広げた。

「人間というのは、髪型や服装で随分と印象が違うものですね」

ミラルを眺めつつ、ニコラスはそんなことを呟いた。訳がわからず、ミラルは顔をしかめる。

「道理で気付かない訳です」

ゆっくりと。ニコラスはミラルへ歩み寄って行く。警戒し、身を縮めるミラルへ、ニコラスはニコリと微笑んだ。

「探しましたよ　　姫様」

ピタリと。その瞬間、ミラルの中で時が止まった。

episode 65 「New people」

「姫……様……？」

蒼白な顔で、ミラルはニコラスの言葉を繰り返す。それに対して、ニコラスはニコリと微笑んで頷いた。

「ゲルビア帝国第一王女ミラル……それが貴女様です」

ペコリと。ニコラスは丁寧にミラルへ礼をした。

「何言つてんだ……？ ゲルビア帝国第一王女……」

困惑した表情で、チリーはミラルへと視線を向ける。ミラルは蒼白な表情のまま身体を硬直させて動こうとしない。ミラル自身にも、何が何だかわからない状況なのだろう。

「王であるハーデン様、そしてその妻である王妃シルフィア様の間に生まれた帝国の姫君……。シルフィア様とよく似たそのお顔、間違いありません」

「お父様……お母様……」

呟き、ミラルは頭を両手で押さえる。

「うっ……！」

「ミラルッ！」

慌ててミラルの傍へ駆け寄り、チリーは安否を問うた。しかし、ミラルは頭を押さえたまま呻き声を上げるばかりだった。

シトシトと。焦土へ雨が降り注ぐ。乾いた地を、汚れた雨が濡らしていく。

濁った、黒くも見える雨粒。それを浴びていることを意に介さぬ様子で、大男が焦土の中を歩いていた。その隣には、金髪の男が歩いている。

「デイルク、後どのくらいだ？」

「もう少し……かな。連絡通りなら、ニコラスは既に赤石の場所へ

到着しているハズだ」

大男の問いに、デイルクと呼ばれた男はそう答える。

「お前、地下で何をしていた？ 赤石を探すのはニコラスやダニエラ達の仕事だ。お前は今回、地下に行く必要はなかったハズだぞ」

「ちよつと野暮用でね……。そう言えばフォスカー、今回東国へ来た帝国の人間の中に、『化け物』は何体いる？」

デイルクの問いに、フォスカーと呼ばれた大男は嘆息する。

「私と、ニコラスの二人だ。それよりデイルク、我々のことを『化け物』などと呼ぶな」

「『化け物』は『化け物』だろう。俺みたいなただの人間にとつちや、お前らは立派な『化け物』だよ」

「化け物」という単語を強調しつつデイルクはそう言うと、手に持っている機械の画面へと視線を向ける。

「ココだ」

「了解」

短くそう答えると、フォスカーは体勢を低くし、右腕を振り上げた。

太い、右腕だった。細身の女性のウエスト程あるような、太い右腕だ。無論、左腕も同様に太い。無駄な肉のない、筋肉質な両腕だった。

「良いかデイルク」

瞬時に、振り上げられたフォスカーの右腕が変化する。先の尖った、螺旋状の窪みが存在するそれは　　ドリルだった。

フォスカーの右腕は、瞬時にドリルへと変化したのだ。

「我々は」

右腕のドリルは、音を立てつつ凄まじい勢いで回転を始める。それを見、デイルクは肩をすくめた。

化け物染みた能力だ。

心の中でそう呟き、デイルクは嘆息する。

「新人類だツツ！」

勢いよく、フォスカーは右腕のドリルを地面へ突き刺した。

まるで濁流。

凄まじい勢いで、まるで濁流の如く流れ込んで来る。映像が、情報
報が 記憶が。

長く押し留められてた記憶と言う名の流れは、ミラルの頭の中へと激しい勢いで流れ込んで来る。

頭痛。頭を抱え、うずくまり、呻き声を上げるが頭痛は止まるどころか激しくなるばかりだった。頭痛が激しくなるにつれて、流れて来る記憶の量も増して行く。

「ミラルッ！ おい、ミラル！」

うずくまるミラルの肩を掴み、チリーが揺さぶっている。しかし、それに答えることも出来ない。それ程までに頭痛は酷かった。

「私……はっ……！」

辿り着くのは、たった一つの真実。

流れ込んで来た 否、蘇ったのは過去の記憶。

私は、ゲルビア帝国第一王女……ミラル。

ドサリと音を立て、その場にミラルは倒れた。

「おい、しっかりしろよ！ おいッ！」

倒れたミラルを揺さぶり、必死に声をかける。が、ミラルは目を閉じたままだった。息はしている。死んではない。気絶しているだけだろう。

「テメエ……ミラルに何をした……ッ!?」

チリーの問いに、ニコラスはクスリと笑みをこぼす。

「いえ、私は特に何も……」

「ミラルがゲルビアの王女って……どういうことだ……!?」

「そのままの意味ですよ。理解力がゴミレベルですね貴方」

ニコラスが嘲笑すると同時に、チリーは怒りに顔を歪めると大剣を出現させる。しかし、それが無意味なことだとすぐに悟った。チリーの大剣は、どういう訳かニコラスに触れた時点で姿を消してしまう。

どんな能力も、無効化されればただのゴミです。

恐らく、ニコラスの能力は「能力を無効化する」能力。チリーの能力であるこの大剣は、ニコラスには通用しないだろう。そう思い、チリーは大剣を消した。

「テメエ、何者だ……？ ミラルの何を知っている？」

「私ですか？ 私は」

その瞬間、扉の向こうで轟音が鳴り響いた。

不意に鳴り響いた轟音に、ニシルは肩をびくつかせた。

「な、何だ……？」

「この先からだな」

トレイズはあくまで冷静にそう答え、洞窟の奥を見据える。

「すぐ近くです……。急ぎましょう！」

カンバーの言葉に、二人はコクリと頷く。カンバーは二人が頷いたのを確認すると、すぐに駆け出した。その後ろを、ニシルとトレイズも駆けて行く。

「え、今の……何ですか？」

突如鳴り響いた轟音。伊織は不安げに麗達へ問うた。

「……近いわね」

麗の言葉に、青蘭は小さく頷く。

「妙な胸騒ぎがするな……急ぐぞ！」

光秀の言葉に三人は頷くと、洞窟の奥へと駆け出した。

「赤石に……何かあったのかも知れない」

ボソリと。青蘭は呟いた。

唐突に、ニシル達は開けた場所に出た。前方には巨大な、古めかしい扉があり、その扉の付近でミラルが倒れている。そのすぐ傍には、険しい表情のチリーが。そしてそのチリーの視線の先には、細身の男が悠然と立っていた。細身の男の後方には、ヘルテュラの研究所でチリーと戦っていた少年がうずくまっている。

更に

「青蘭!？」

左の通路からは、青蘭が現れたのだ。その後ろには麗、そして他にも二人、ニシルの見たことのない人物が二人。恐らく青蘭の仲間だろう。

青蘭はニシル達の存在に気付いたようだが、すぐにチリーの方へ視線を移し、険しい表情で見つめている。

チリーが暴れていないことから察するに、倒れているミラルは無事なのだろう。恐らく、気絶しているだけだ。

しかし、状況が把握出来ない。先程の轟音はこの辺りから聞こえてきた。あの轟音はチリー達が起こしたものだろうか。

「今の轟音……何なんだ!？」

ニコラスへ、チリーが問う。

「おや、到着したようですね」

ニコラスがそう言うと同時に、すぐ傍で轟音が鳴り響いた。

「ッ!？」

チリーだけでなく、この場所に来ていたニシル達や、青蘭達までもがその光景に絶句した。

扉が、破壊されている。

「ニコラス、赤石は手に入れたぞ」

扉を破壊したのは、一人の大男だった。その大きさ、青蘭を凌ぐ高身長な上、硬い筋肉によって横幅も大きい。その男の太い右腕は、ドリルだった。回転を続けていたドリルは徐々に回転を緩め、やがてその回転を止める。すると、大男の右腕はドリルから人間の腕へと変化　否、戻っていく。

「受け取れ」

大男は左腕に握っていた何かを、ニコラスへと放った。

紅く、赤く光沢するその物体は紛れもなく

「大切な赤石なんですから、もう少し丁寧に扱いなさい。ゴミですか貴方は」

「……すまない」

謝罪する大男を気にもとめず、ニコラスは受け取った物体

赤石をまじまじと眺める。鶏の卵大程の、赤い石。

「これが……赤石」

ニコラスが呟くのとほぼ同時、動き出そうとしたチリーより素早く動き、ニコラスの元へと駆けて来たのは青蘭と麗だった。

青蘭は素早く持っていた刀を鞘から抜くと、ニコラス目掛けて薙いだ。ニコラスは後退してでそれを回避し、ニヤリと笑みを浮かべる。

「　　かわした!?!」

「能力を使ってその程度のスピードですか……。ゴミ能力ですね」

呟くニコラスの眼前へ、青蘭より遅れて到達した麗が右手を赤石へと伸ばす。が、その右手を、ニコラスは右手で払い落とす。

「　　つつ!」

小さく声を上げ、麗はすぐにその右手を引っ込める。その右手は、やや不自然に曲がっている。麗は怪訝そうな表情で、その右手を見つめている。

「麗さんッ!」

「気にしないで、それより早く赤石をつ!」

麗の言葉に頷き、青蘭がニコラスへと駆けるが、その行く手を大

男に阻まれる。

「ニコラス、行くぞ。ディルクが待っている」

「そうですね」

ニコラスがコクリと頷くと、大男は体勢を低くする。その背中へ、ニコラスは飛び乗った。

「逃げんのかッ!？」

チリーの言葉に、ニコラスは笑みを浮かべる。

「ええ。逃げます。今回の目的は、赤石を手に入れることだけですから『白き超越者』と姫君に関しては、また別件ですので」

「さっきの一撃……異常だわ。貴方、何者なの？」

右腕を押さえつつ、麗はニコラスへ問うた。

「私　いえ、我々ですか。我々は……」

新たな人類。そう呟き、ニコラスは言葉を続け

「ニュービーブル新人類です」

静かに、そう答えた。

「新……ニュービーブル人類……?」

「アルケスタに行けば、わかるんじゃないですか?　特に貴方は……アルケスタへ行っておくべきです」

そう言ったニコラスの視線の先にいたのは、チリーだった。

「ニコラス、喋り過ぎだ」

大男の言葉に、ニコラスは失礼、とだけ答える。

大男は右腕をドリルへ変化させると、近くの岸壁へと突き刺す。

ドリルは凄まじい勢いで回転を開始し、岩壁へと穴を開ける。ここから穴を掘って逃げるつもりだ。

「逃がすかッ」

氷塊を出現させ、トレイズがニコラスへ飛ばすのと、

「ふざけんじゃねえぞッ!」

抜刀し、光秀がニコラスへ斬撃を飛ばすのは同時だった。

「駄目だッ！ 意味がねえ！」

チリーが叫んだ時には既に遅く、氷塊と斬撃はニコラスへ触れた途端消滅した。

「ッ！」

「それでは」

目を見開き、驚愕しているトレイズと光秀に対して笑みを浮かべ、ニコラスが手を振ると同時に、大男は右腕のドリルで、勢いよく穴を掘り始め、その奥へと駆けて行く。

「待ちやがれッ！」

チリーが叫ぶ頃には、既にニコラス達は穴の向こうへと姿を消していた。

「そんな……な……赤石が……」

ペタリと。ニシルがその場へ膝を付く。その表情には、絶望の色が映されていた。

「奪われた」

新人類を名乗るニコラス達に、彼らの赤石きせきは奪われた。

重い足取りで、元来た道をチリー達は戻っていた。

結局、地上へと逃げたのである。ニコラス達を追うことは出来なかった。ライアスも、いつの間にかどこかへ逃げたようだ。

気絶しているミラルはカンバーが背負い、一同は元来た道を戻っていた。

誰一人として会話することなく、ただひたすらに歩いていた。チリー達だけではなく、青蘭達もその道へ同行している。

重い沈黙が、彼らの中で保たれていた。特にチリーと青蘭は、隣にいなから険悪な雰囲気醸し出している。光秀と伊織も、何か言いたげな表情でチリーを睨んでいる。

その状況を理解出来ず、ニシルとカンバーは訝しげな表情で彼らを見ていた。トレイズの表情にあまり変化はないが、一応は気にしているのだろう。彼らの方をジッと見ている。

ピタリと。チリーと青蘭の視線が合った。互いが互いをギロリと睨みつけたまま、歩みを止めてしまっている。

「……………どうしたの？」

耐え切れず、ニシルが問いかけるが、二人は答えようとせずに見み合っていた。

「……………チリー」

ボソリと。呟くように、しかし確かな怒気を込めて、青蘭は言った。

「何だよ……………？」

一層強く、チリーは青蘭を睨みつけた。

「後で話がある」

「話もクソもねえ。今ここでぶん殴ってやりてえくらいだ」

「奇遇だな。俺も同じ気分だ」

「そっかよ……………ッ！」

語気を荒げ、構えるとチリーは大剣を出現させた。それに対し、青蘭も素早く身構える。

「ちよ、何やってんだよ二人共ッ！」

慌てて、仲裁しようとするニシルが二人の間に入るが、二人共構えを解こうとしない。それどころか二人共がニシルを睨み付け

「退け、ニシルッ！」

「邪魔だッ！」

ほぼ同時に怒鳴られ、ニシルは顔をしかめる。

「うっさい単細胞生物共ッ！ 落ち着けて言ってるんだよ！」

その様子を見、トレイズは嘆息するとニシルへと歩み寄り、その頭を軽く小突いた。

「落ち着け。お前が怒ってどうする」

「……ごめん」

ニシルが引き下がったのを確認すると、トレイズはチリーと青蘭を交互に見る。

「チリー」

「……わかったよ」

舌打ちし、チリーは大剣を消した構えを解いた。それを一瞥し、同じように青蘭も構えを解く。

ライアスとの戦闘の疲れが出ているらしく、チリーは呼吸を荒くしている。それを見、伊織はそつと近づくと、チリーの身体に両手で触れた。すると、伊織の両手から温かな光が発せられ、チリーの身体を包み込んでいく。

「……伊織ッ！」

チリーは自分の身体から、徐々に疲労感が抜けていくのを感じた。「どうせ後で喧嘩するなら、条件は同じ方が良いでしょ？」

伊織の言葉に、青蘭は苦々しげな表情で頷いた。

「……ありがとよ」

ボソリとチリーはそう言ったが、伊織は答えなかった。チリーに對して、伊織も怒っていない訳ではないらしい。

伊織はすぐにトレイズへ歩み寄り、痛そうにトレイズが右手で押さえている患部を見つめる。そしてゆっくりとトレイズの右手を退け、その患部へ両手で触れた。すると、先程と同じように伊織の両手から光が発せられる。

「これは……」

「傷、治しておきました」

伊織がニコリと微笑むと、トレイズは小さくすまない、と呟いた。「いえ、気にしないで下さい」

その後も、微妙な雰囲気を保ったまま一同が歩いていると、やがてチリー達が洞窟へと入って来た入り口へと辿り着いた。

チリー達の足音に気が付いたのか、襖がゆっくりと開き、中から桐香が顔を覗かせた。

「お帰りなさいませ」

襖の外へ出ると、桐香は無表情なまま頭を下げた。

「……ただいま」

それに対して答えたのは、カンバー一人だった。

「……その奥、入れてもらっても良いですか？ ミラルさんを休ませたいのですが……」

カンバーの言葉に、桐香はコクリと頷き、襖を開けた。

一同は、青蘭達が法然を寝かせた部屋と同じような座敷へと案内された。桐香はテキパキと布団を敷くと、すぐにミラルを横たわらせた。

ミラルはすうすうと寝息を立てており、苦しそうな様子は見られない。その様子に、チリーは安堵の溜息を吐いた。

「さて、これからどうしま

カンバーが言いかけた時だった。

「青蘭ッ」

ギロリと。チリーは青蘭を睨み付ける。

「表出る」

「……わかった」

正に一触即発、と言った様子であった。その様子を見、どうしたものかとカンバーは首を傾げる。

「二人共、とりあえず落ち着いて下さい……。一体何があったんですか？」

カンバーの問いに、二人は答えようとしなかった。ただ睨み合い、無言で互いの怒りをぶつけあっている。

「行くぞ」

短く、チリーは告げると、外へ向かって歩き出す。その後ろを、青蘭は静かに付いて行った。

ギュッと。青蘭は刀の柄を握り締めた。

許せない。

洞窟でのことを謝罪するどころか、チリーはこちらへ対して明らかに怒りを向けていた。

「謝るつもりはないようだな」

「そっちこそ」

振り返りもせず、チリーはそう答えた。

グツと。拳を握り締め、チリーは顔をしかめた。

ぶっ飛ばす。

ミラルをあんな目に合わせておいて、謝るところかチリーを睨みつけた青蘭へ、チリーは激しい怒りを感じていた。

「謝るつもりはないようだな」

静かに、後ろで青蘭がそう言った。

謝るべきなのはそっちだろ！

それに、こちらは謝罪を要求されるようなことをした覚えはない。

「そっちこそ」

確かな怒りを込め、チリーは振り返らずにそう答えた。

ゆっくりと階段を上り、チリー達は地上へと出た。しばらくぶりに地上へ出たことへ、心地良さを感じるが、二人にとっては、そんなことよりも怒りの方が勝っている。地上に対して、感慨を覚える暇はなかった。

しばらく周囲を見渡し、青蘭は何か言いたげな表情を見せたが、すぐに前へゆっくりと進み始めた。その後ろを、チリーは静かについていく。

地上では、雨が降っていた。

濁った、黒くも見える雨が渴いた大地へ止め処なく降り注いでいる。

雨が、チリー達を濡らした。

階段のあった場所から少し離れ、チリーと青蘭は距離を取って向き合った。

「テメエをぶつ飛ばす。理由は言わなくてもわかってんだろうな」

ギロリと青蘭を睨み付け、チリーは言い放つ。

「お前の態度を見て判断した。俺は、お前を許すつもりはない」

「同感だ」

「やはりな」

沈黙。

聞こえるのは、雨の降り注ぐ音のみだった。

チリーが身構えると同時に、チリーの右手には大剣が握られた。

それとほぼ同時に、青蘭はゆっくりと鞘から刀を抜き、その場へ鞘を投げ捨てた。

「青蘭ツツツ！」

「チリーッッッ！」

ほぼ同時に叫び、そして駆け出した。

青蘭目掛けて振り降ろされた大剣を、青蘭は刀で受け、弾く。バツクステップで距離を取ろうとしたチリーとの距離を詰め、青蘭はチリーの腹部へ回し蹴りを繰り出す。チリーは足を上げて回し蹴りを防ぎ、後退する。

上げていた足を下ろすと同時に踏み込み、青蘭へと大剣を横に薙いだ。青蘭は高く跳躍し、一度大剣の上へ着地して踏み台にするとチリーの頭上でくるりと回転し、チリーの背後で着地する。

「ッ！」

青蘭の能力。それは発動中、身体能力を格段に上げることだった。素早くチリーは振り返るが、青蘭は既に、チリーを斬らんと刀を振り上げていた。

舌打ちし、チリーは横つ跳びに刀を回避すると、すぐに体勢を立て直し、青蘭へ横から大剣で斜めに切りかかる。

青蘭は素早く刀でチリーの大剣を受け流し、チリーの頭部目掛けて裏拳を繰り出す。

鈍い音がし、チリーの顔面に青蘭の裏拳が食い込む。

「が……ッ！」

能力によって強化された青蘭の一撃。チリーは派手に後方へ吹っ飛んだ。

「クソがッ！」

悪態を吐き、チリーは立ち上がるとすぐに体勢を立て直す。しかし既に、青蘭はチリーの目の前まで迫って来ていた。

青蘭の薙いだ刀を、チリーは大剣でなんとか受け、弾く。それによって空いた青蘭の腹部へ、チリーは右足で思い切り前蹴りを喰らわせた。

「ぐッ……ッ！」

呻き声を上げ、青蘭は後方へよろめいた。

「チリー……ッ！」

憎しみすら込められているように聞こえる、青蘭の怒りの声。

「青蘭ッ！」

青蘭を睨み付け、チリーは負けじと声を荒げた。

「チリー、お前は俺が『敵対することになるかも知れない』……そう言った時、何て答えたか覚えているか？」

「覚えてるさ……」

正に今がその時。

かつて仲間であった二人は、今正に敵対していた。

「お前の言う通り、俺達は……」

「『宿敵だ』」

同時に、二人はそう言った。

episode 67 「Hostility - 2」

深い眠り。眠りの中、脳は記憶を整理する。

チリーのこと。ニシルのこと。自分を育ててくれた人達のこと。キリトのこと。トレイズのこと。カンバーのこと。青蘭のこと。

テイテスに、漂着する前のこと。

濁流のように流れ込んで来た記憶。今はゆったりと流れ、整理されていく。

自分が何者で、どこから来たのか。何があったのか。鮮明とは言えないまでも、思い出すことは出来る。

本当の両親のことも。

アルド。

支離滅裂とも言える程に混在した映像の中、ミラルは呟いた。それは誰の名だったか。

アルド。

追い求めるかのようにもう一度呟くが、答えなど返ってくるハズはない。

何故なら、アルドは

ゆっくりと。ミラルは閉じていた目を開いた。

最初に視界に入ったのは見覚えのない天井。未だ朦朧とする意識の中で、ミラルは声を聞いた。

「行くぞ」

怒気の込められた、少年の声。それがチリーの物だと気付くのに、数刻とかならなかつた。足音が聞こえ、チリーがこの場を去つただと理解する。

「ああもっ！ 訳わかんないよッ！」

ニシルの怒号が聞こえると同時に、ミラルの意識は徐々に明確に

なっていく。

そもそも何故、自分は気を失っているのか。

探しましたよ 姫様。

脳裏に蘇る、ニコラスの言葉。

ああ、そうだ。思い出したのだ。その時に一度意識を失って……。

「ミラルさん？」

目を開けているミラルの顔を、カンバーが覗きこんだ。カンバーはミラルが目を覚ましていることに気が付き、ニコリと微笑んだ。

「ミラルさんが目を覚ましました！」

「ミラルが！？」

すぐに、ニシルがミラルの元へ近寄る。

「みんな……」

呟き、ミラルはゆっくりと身体を起こした。

「……無事で良かった」

腕を組み、微笑を浮かべつつミラルを見てトレイズが呟いた。そんなトレイズに、ミラルは微笑む。

「ごめんね、心配かけて」

「まったくだよ……。でも、ホント無事で良かった」

そう言って、ニシルは安堵の溜息を吐いた。

「あ、そういえば……聞かせてもらえますか？」

カンバーは麗達の方へ視線を向け、静かに問うた。

「貴方達とチリーさんの間に一体何があったんですか？」

「むしろこつちが聞きたいくらいです。どうしてチリーさんはあんなことを……？」

そう問い返した伊織に、カンバーは目を見開いた。

「それ、おかしい……」

ボソリと。呟いたミラルへ、一同の視線が集中する。

「私とチリーはずっと一緒に行動してたのよ？ 確かに青蘭には会ったけど、チリーは何も悪いことなんてしていないはずよ」

「そんな……。私と青蘭君だって、一緒に行動してました。青蘭君

に何かしたのは、むしろチリーさんの方です」

二人の意見の食い違い。ニシルはキョトンと首を傾げた。

「とりあえず、何があったか説明してくれよ」

ニシルの言葉に、二人は静かに頷いた。

しばしの沈黙。ミラルと伊織の話を交互に聞き、その場へ沈黙が訪れた。

「チリーと青蘭、二人の行動に矛盾が生じているわね……」

腕を組み、そう言っただけ沈黙を破ったのは麗だった。

チリーとミラルは、洞窟に入ってから常に同一行動を取っていた。それは青蘭と伊織も同様だった。

故に、あり得ない。ミラルの知らない間に、チリーが青蘭を殴ったことも。伊織と光秀の知らない間に、青蘭がミラルを殴ったことも。どちらもあり得ないのだ。

「不可解だな」

呟き、トレイズは嘆息する。

「彼らが二人ずついるとは思えませんし、ミラルさん達の出会った青蘭さんも、伊織さん達の出会ったチリーさんも、本来なら取るはずのない行動を取っています」

カンバーの言葉に、光秀はコクリと頷いた。

「まるで誰かが、青蘭とそのチリーとか言うのを争わせようとしているって感じだな」

そう言っただけ、光秀は顔をしかめる。

「ってことは、誰かがチリーや青蘭に化けて、それで二人を争わせるように仕向けた……ってことになるのかな」

ニシルがそう言っただけ同時に、ミラルは立ち上がる。

「ミラル？」

「私、止めて来る！」

そう言い残し、ニシルの止める声も聞かずに、ミラルは部屋の外

へと飛び出して行く。その後を、慌てて伊織も付いて行く。

「い、伊織ちゃん!？」

更にその後ろを、光秀も追いかけて行く。

そんな様子を眺め、麗は深く溜息を吐いた。

「……私達も行きましょう」

激しくぶつかり合う大剣と刀。周囲に鳴り響くのは、その金属音と雨の音。

互いが互いを、怒りに満ちた表情で睨み合う。

「テメエは……ミラルをぶん殴った……ッ！」

「お前は、伊織を傷付けたッ！」

「だから」

振り降ろされたチリーの大剣を、青蘭は刀で受け止める。互いに、一歩も譲らない。大剣と刀を接触させたまま、二人は叫んだ。

「許す訳にはいかないッ!!」

黒く濁った雨の中、二匹の雄が雄叫びを上げた。

「待って！」

不意に響く、少女の声。すぐに、チリーと青蘭は声のした方向へ視線を移す。

「青蘭は悪くない! これ以上戦わないでっ！」

「あア!？ コイツはお前をぶん殴ったんだぞ!？」

完全に頭に血が上っているらしく、チリーも青蘭も先程の二人の発言におかしな点があることに気付いていない。

チリーは伊織を傷付けていないし、青蘭はミラルをぶん殴ってないのだ。

「青蘭君! 落ち着いて！」

ミラルの後ろから、伊織の声が響く。青蘭はそれに動揺したのか、

大剣を受け止める刀の力が弱まった。

伊織の後ろには、麗達やニシル達もおり、不安げな様子でミラルと伊織を見ていた。

「私達の所へ現れたのは、チリーさんじゃない……！」

「何……？ ふざけるな、アイツは間違いなく」

青蘭が言いかけた時だった。

彼らのすぐ傍に、ゆっくりと飛行船が降りて来る。チリー達の乗っている、あの飛行船だ。

「トレイズさん！」

飛行船の中から、乗組員の一人が飛び出して来ると、チリーと青蘭を訝しげに見つつもトレイズの元へと駆け寄って来た。

「……どうした？」

「良かった……無事だったんですね……」

そう言つて、乗組員の男は安堵の溜息を吐く。

「東国に、ゲルビア兵がいるのを見かけたんですよ！ それで、トレイズさん達に何かあったらまずいと思って……」

「それで、ここまで来たのか」

コクリと。男は頷いた。

「ありがとう。助かった。あの馬鹿は俺が止めるから、飛行船のままで運んでくれ」

「え、あの馬鹿って……」

トレイズはチリー達へ一瞥くると、ゆっくりと彼らの元へ歩み寄る。

「何だよお前らッ！ コイツはミラルを」

そう言いかけたチリーの肩へ、トレイズはそっと触れる。すると、雨で濡れていたチリーの身体はすぐにトレイズの能力によって凍らされていく。

「な」

言葉を言い切らぬ内に、チリーの身体は硬い氷に包まれてしまっていた。

「トレイズ……!!」

何故邪魔をするのか、そう言いたげな視線で睨みつける青蘭の顔を、トレイズは躊躇いなく殴り付けた。

「落ち着け。お前の敵は、チリーじゃない」

「何を……」

言いかけ、青蘭は伊織達へ視線を向ける。

「貴方らしくもない。美しくないわ」

そう言って、麗は静かに溜息を吐いた。

「運んでくれ」

トレイズがそう告げると、乗組員の男は小さく頷き、氷に包まれたチリーの身体を担いだ。

トレイズが運ぶのを手伝おうと手を差し出すと、男は小さく首を横に振った。

「このくらいの重さなら、私一人で大丈夫です」

「……そうか」

頷き、トレイズは男の後ろを付いて行く。

「乗るぞ」

「乗るって……飛行船に？」

ニシルの問いに、トレイズは小さく頷いた。

「これ以上ここにいない必要はない。アルケスタへ向かうぞ」

「……そうですね。青蘭さん達は、一緒に乗って行きますか？」

カンバーの問いに、麗はいいえ、と答える。

「やめておくわ。今の青蘭とその彼を同じ空間においておくと、何をしでかすかわかったものじゃないもの」

正論だった。

「では、乗りましょう」

釈然としない気分のまま、トレイズ達は飛行船へと乗り込んだ。

ぶすつとした表情で、チリーは窓の外を眺めていた。随分と機嫌が悪いらしく、先程から足でコツコツと床を踏みならしている。そんな様子のチリーを見、ニシルは静かに溜息を吐く。

「いい加減機嫌直せよ……。トレイズがあそこで止めなきゃ、お前と青蘭は……」

「アイツの話はすんじゃねえッ！」

凄まじい剣幕で、チリーは声を荒げた。

「青蘭は悪くないらしいし、そんなに怒ることないだろこのアホチリ！」

「アホはどつちだアホチビニシル！」

「チビもアホも余計だこのスーパー若白髪！」

「スーパーってなんだスーパーって！ この永遠の十代（肉体だけ）！」

「野生児！」

「豆サイズ！」

互いに罵倒し始めた二人を一瞥し、嘆息するとカンバーは二人の間に割って入る。

「そこまでしておいて下さい。ここでもめても意味がありません」

カンバーの言葉に、チリーは何か言いかけたが、周囲の視線に気づいたのか途中で口をつぐみ、また不機嫌そうに窓の外へ視線を移す。

飛行船へ乗り込み、東国を出発したチリー達はひとまずこれから先のことを話し合うため、ニシルとトレイズの部屋へと集まったのだった。

東国での戦いの疲れや、赤石を奪われたショックからか、全員の表情はどこか暗い。聖杯をゲルビア側が所有していないため、チエ

スで言えばまだチエツクメイトというわけではないが、既にチエツクをかけられているような気分だった。

部屋に集まったのは良いが、話し合いが始まる気配はない。全員が口を閉ざしたまま、何かを考え込んでいる。

「……ねえ」

不意に、ミラルが静寂を破った。

「これから先のことを話す前に、私言わなきゃいけないことがあるの」

「どうした？ 改まって」

静かに、トレイズが言う。

「私、東国で昔の記憶が戻ったの」

「な　　ッ!？」

一番反応を示したのは、窓の外を眺めていたチリーだった。

「昔の記憶って……テイテスに来る前の記憶か!？」

静かに、ミラルは頷く。

探しましたよ

姫様。

チリーの脳裏を過る、ニコラスの言葉。ミラルの記憶が戻ったのは、恐らくあの後気絶した時だろう。

「……話せる？」

ニシルの問いに、ミラルは頷いて肯定の意を示した。

「私は……ゲルビア帝国第一王女、ミラル」

そう名乗り、ミラルは語った。

過去、彼女の身に起きた全てを

ゲルビア帝国。アルモニア大陸の大半を支配する大帝国で、世界で最強の国と言っても過言ではない。圧倒的なまでの武力、財力、

資源、領土。そんな大国の姫君として、ミラルは生まれた。

男子が生まれないため、ミラルはゲルビア帝国の次期後継者として教育を受けていたが、それはミラルにとって苦痛なことではなかった。ミラルは大体のことをある程度こなすことが出来たし、教育係の者達もミラルに対して優しく接していた。父にも愛され、母にも愛され、家臣からも愛されていた上に生まれにも恵まれていたミラルは、陳腐な言葉で言えば「幸せ」だった。

「良いかミラル、王に必要なのは『民』と『風格』だ」

それがミラルの父でありゲルビア帝国の王、ハーデンの口癖だった。民あつての王、風格あつての王。それがハーデンの考え方だった。故にハーデンは第一に民のことを考える。民に危険が迫れば全力で民を守る、そんな王だった。

ミラルはそんな父を心底尊敬していた。ハーデンのような王になれるのなら、どんなことでも頑張れる（時々サボったりもするが）、それくらいにハーデンを尊敬していた。

「お母様、今日はね、お父様とお話したの」

ゲルビア帝国の首都、パンドラの中央へ位置するゲルビア城。その城の中にあるミラルの母　シルフィアの寝室へ、ミラルは訪れていた。

広い部屋だった。普通の民家なら三部屋分とも言える広さの部屋で、その中には豪華なベッドや拾いバスルームが存在する。そのベッドに母であるシルフィアと共に、ミラルは腰掛けていた。

「そう、良かったわね。どんなお話をしたの？」

優しく笑みを浮かべ、シルフィアは問うた。

「えっとね、私の背がちょっと伸びてね、お父様が『やっぱりミラルはシルフィアのように美しくなるだろうな』って、頭なでてくれたの！」

心底嬉しそうに、足をパタパタと動かしながらミラルはそう答え

た。そんなミラルの栗色の髪を、シルフィアはそつとなでる。

「まあ、あの人つたら……」

口元を右手でそつと隠しつつ、シルフィアは上品に笑った。

美しい、女性だった。ミラルと同じ、長い栗色の髪は流麗で、絹のように美しい。ドレスに包まれたプロポーシヨンの良い肢体と、上品に笑うその顔は実年齢より彼女を十歳程若く見せる。王妃でなければ今頃かなりの人数からプロポーズされていることだろう。

「私、お母様みたいになれる？」

無垢な瞳で、ミラルは問うた。

「そうね、私よりもつと綺麗になるわ」

「ホントに？」

「ホントよ」

「嘘じゃない？」

「私が嘘吐いたこと、ある？」

ニコリと微笑んでそう問うたシルフィアへ、ミラルは小さく首を左右に振った。

「ねえ、今日お母様と寝て良い？」

「良いわよ。枕、取って来なさい」

「うん！」

元気良く答えると、ミラルは走ってシルフィアの寝室を出て行った。そんなミラルの背中を見つめ、シルフィアは愛おしげに微笑んだ。

「まだまだ、甘えんぼさんね……」

シルフィアがそう呟くと同時に、トントンと寝室のドアが叩かれる。

「私です。王妃様」

「どうぞ」

シルフィアがそう言うと、ガチャリと寝室のドアが開かれる。中へ入って来たのは、一人の男だった。赤く長い髪を、後ろで一つに

縛っている。細身だが、引き締まった筋肉の付いた体型の男だった。男は、ゆっくりとシルフィアの前へひざまずく。

「アルド、ふざけるのはやめなさい。二人切りの時は、そんなことしなくても良いのよ」

クスリとシルフィアが笑うと、アルドと呼ばれた男は立ち上がり、肩をすくめて見せた。

「ちょっと久々に話に來ただけだ。すぐ帰るよ」

「そう。もう少しゆっくりして行っても良いのよ？」

シルフィアの言葉に、アルドはおどけた表情で首を左右に振る。

「近衛部隊の隊長とは言え、夜中に王妃様の寢室に長いこといるんじゃない、変な噂が立つちまうだろ」

「それもそうね」

「それにしても……」

そう言つて、アルドは何かを思い出すように天井を見上げる。

「お前がハーデンの嫁になって、もう十年くらい経つたな」

「……そうね」

「前は、ただの兵士の娘だったつてのに……大出世だな」

「大出世……ね」

アルドの言葉を繰り返し、シルフィアは自嘲染みた笑みをこぼす。

「一目惚れしたハーデン王子様からいきなり求婚だもんなあ。正直、どうかしてると思うぜ俺ア」

「……あの人を悪く言わないで、彼はとても良い人で　良い王よ。それに、貴方が遅いのが悪いのよ」

どこか寂しげな表情で、シルフィアはアルドから目を逸らす。そんなシルフィアの両肩を、アルドは不意に両手で掴んだ。

「　っ！？」

驚くシルフィアに何も言わず、アルドはそのままシルフィアを抱き寄せる。

「ホント……遅かったよな」

「アルド……」

眩き、シルフィアの表情はほころびかけたが、すぐに我に返ったのかアルドを両手で突き離す。それに抵抗せず、アルドはシルフィアの両肩を離した。

「やめて」

「……………」

「私は……もう……………」

再びアルドから視線を逸らし、シルフィアは何か言いたげに口を動かしたが何も言えずにアルドから手を離した。

気まずい、沈黙。

「お母様」

その沈黙を破るかのように、寝室のドアはミラルの声と共に叩かれた。

「入りなさい、ミラル」

すぐにシルフィアはドアへ視線を向け、優しく声をかける。すると、ドアは勢いよく開かれ、枕を抱えたミラルが中へ駆け込んで来る。

「あ、アルドだ！」

アルドの姿を見つけると、ミラルは嬉しげに微笑んだ。そんな彼女を見、アルドは優しく微笑むと身を屈めたミラルと視線を合わせた。

「こんばんは、姫様」

「ミラルで良いつていつも言ってるのに……………」

「そうはいかねえよ。姫様を呼び捨てになんか出来ねえ」

しかし、敬語ではなかった。

「お母様とお話してたの？」

「おう。姫様がかわいくなっただな、って話をしてたんだよ」

「本当！？」

笑顔で問うミラルへ、アルドは本当だ、と答えつつミラルの頭へ手を乗せて優しくなでた。

「それでは王妃様、姫様、私めはこれにて……………」

おどけた表情で一礼すると、アルドはシルフィアの寝室を後にした。

アルケスタ。ゲルビア帝国内にある、別名知識の町と呼ばれる町だ。あらゆる書物や知識が詰まった町、特にアルケスタに存在する大図書館は世界最大規模の蔵書量だ。その中に、この世の全ての書物が詰まっていると言っても過言ではない。

そんな、調べ物をするのに最適なアルケスタには、ゲルビア帝国直属の研究所がいくつも建てられている。

このゲルビア帝国立遺伝子研究所も、その内の一つだった。

「博士、どうかね？ 研究の方は」

地下へと降りるエレベーターの中、ゲルビア帝国国王　ハーデンは隣にいる白髪の女性へ問うた。

「ええ、陛下の支援のおかげで順調です」

女性はあまり表情を変えずにそう答えた。

若い、女性だった。髪はこれでもかと言う程真っ白だというのに、彼女の年齢はせいぜい二十代真ん中辺りだろう。

「そうか……」

ハーデンが満足げに答えるのとほぼ同時に、エレベーターは停止し、目的の階まで辿り着いたことを知らせるチャイムが鳴り響く。

「到着しました」

「よし、案内してくれ」

女性は静かに頷くと、開いたエレベーターのドアの向こうへゆっくりと進んで行く。その隣を、静かにハーデンが歩く。

真っ暗な廊下だった。足元の電球以外に光はなく、少し気を抜けば今にも転びそうだ。部屋は一つも見当たらず、どこか不気味な雰囲気を持った廊下だった。

「この先にいるのか？」

「はい。この奥の部屋のカプセル内で造られています。現在、九割方完成している状態です」

「もうそんなにか！」

ハーデンの言葉に、女性は静かに頷く。それを見、ハーデンはニコリと微笑んだ。

「そうか……そうか……！」

「無礼を承知で質問させて下さい。陛下、何故このような研究を？心底嬉しそうに呟くハーデンへ、女性は怪訝そうな顔で問うた。

「ふむ……」

その問いへ、ハーデンは気分を害した様子はなかった。その様子に、女性は密かに胸をなでおろす。

「好奇心だよ。人類が人類を造り出すことで、我々は新たな境地へ辿り着ける。それに、この実験は神力研究の進歩ともなる」

「貴重な小赤石を、この実験に使っても良かったのでしょうか……」
「構わないよ。神力の塊である小赤石……それを体内に宿す生命がどんな力を得るのか……君だって気にならないわけではないだろう？」

ハーデンの問いに、女性はコクリと頷いた。

一人の研究者として、興味がないと言えば嘘になる。

「……着きました」

会話をしている内に、一つの扉の前へ来ていた。ドアの上には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた電灯が光っている。

女性は白衣のポケットから鍵を取り出すと、ドアの鍵を開ける。

「入るぞ」

「はい」

ドアを開け、女性はハーデンと共にドアの向こうへと入って行く。部屋の中央には巨大なカプセル。その下にはカプセルに繋がっているコードが大量に張り巡らされていた。カプセルの中は青白く光っており、中に入っている物がなんなのか、暗い部屋の中でも明確にわかる。

「見れば見る程そっくりだな……」

カプセルを見、ハーデンは満足げに頷く。

「陛下の遺伝子を使用したから……」
女性も、満足げにカプセルを見つめる。

中に入っているのは、眠っているハーデンそっくりな男だった。

ある日の午後、ゲルビア城付近の酒屋をアルドが訪れた時だった。どういふ訳か、隅の方の席にちよこんとミラルが座っていた。いつものドレス姿ではなく、どこで手に入れたのか庶民の着ているような動きやすそうな格好で、ミラルはコップ一杯のジュースを少しずつ飲んでいた。彼女がミラルだと気付いたのはアルドだけらしく、他の者はミラルを見ても、酒屋に女の子が一人？ と訝しげな顔をする程度で、大きな反応は示さなかった。

アルドは嘆息すると、すぐにミラルの元へ歩み寄った。ミラルはアルドへ気がついたのか、視線をアルドへ向けたがすぐに視線を逸らす。

「ひーめっさま」

ミラルの向かい側の椅子へ腰掛け、気軽に声をかける。

「……姫じゃないもん。ただの庶民だもん」

「へえ、じゃあどちら様で？」

「あ、アルドには関係ないもん！」

「何で庶民が俺の名前呼び捨てなんだよ」

「あ」

しまった、とでも言わんばかりに表情を変えたミラルを見、アルドはクスリと笑みをこぼす。

「またサボりか？」

「……だって、楽器なんて女王になると関係ないじゃない」

「そりゃそうだ」

ミラルの言葉にそう言って笑い、アルドはミラルの頭の上にそっ

と手を置いた。

「でもな、関係はなくても意味はある。この世に意味のねえものなんてそんなにねえんだ。やっておいて、損はないと思うぜ？」

「……うん」

コクリと頷くが、ミラルは城に帰ろうとはしなかった。無理矢理帰すのもかわいそうな気がしたのか、アルドも無理に帰そうとはせず、そのまま談笑した。

「ねえ、そういえばアルドはどうしてここに？」

「俺か？ 俺はちょっと人を待っててな」

アルドがそう言った時だった。酒屋のドアが開き、一人の男が店内に入ってきて来る。その男を見、アルドは満足そうに微笑んだ。

「来た来た」

男もアルドの方へ視線を向けると、微笑してこちらへ歩み寄って来る。

「久しぶりだな、白蘭」

アルドがそう言うと、白蘭と呼ばれた男はああ、と頷いた。

「白蘭さん！」

「やあ姫様……っておいアルド、こんな所に何で姫様がいんだよ」
ミラルへ笑顔を向けた後、すぐに呆れ顔でアルドを見る白蘭。

「サボりだつてよ」

「冗談っぽく笑いながらアルドが言うと、白蘭は溜息を吐く。

「まあ、良いか」

「そうそう、気にすんな」

そう言って、アルドは白蘭の右肩を叩きながら笑った。

白蘭。というのはアルドの友人で、東国出身の青年だ。こうしてたまに遠路遙々ゲルビアに来ては、アルドに会いに来ている。

「それにしても、お前の能力は便利で良いねえ。神力？ だったっけか？」

白蘭はコクリと頷く。

「結構ややこしかったけど、『物体の中の物体を別の物体の中へ移す』で合ってるか？」

「ああ。そんな感じだ。まあ、移す対象は液体とかでも大丈夫かどうかだな」

二人は納得して頷き合っているが、ミラルにはさっぱりわからない。

「どっついうこと？」

「例えば、ですよ」

白蘭はそう言っつて、水の入っているアルドのコップを自分の傍に寄せる。そして隣に、自分のコーヒーが入っていた空のコップを置いた。

「こっちの物体……つまりコップの中に入っている水を、その隣の物体……この空のコップの中に移すことが出来ます」

そう言っつて、白蘭はコップへ手をかざすと、目を閉じる。と同時に、かざした白蘭の手から光が発せられる。

「っ！」

ミラルが驚いて目を丸くした頃には、既にコップの中に水は入っつておらず、代わりに空だったコップの中へ水が入っていた。

「ま、こっついうことです」

そう言っつて笑うと、白蘭はコップの中の水をグイッと飲み干す。

「あ、テメエそれ俺の水だろーが！」

「細かいことは気にすんな。水なんてタダだろ」

「まあそうだけだよ……」

どこか不服そうな表情で、アルドは店員を呼んで水をコップの中へ注がせる。

「でも、それだつたら手で入れれば良いじゃない」

「姫様、この能力の使い道は何もコップの中の水をカップへ入れることじゃありません。要は『物体の中の物』であれば良いんです」

「……っつとっつとっつ」

「家という物体の中の物……つまり人間を、別の家という物体に移すことも出来ず」

「え……！」

「今日だって、俺は俺の家からゲルビアにある別荘へ自分を移すこととどこまで来たんです」

それには何か夢を感じたのか、ミラルはホントに！？と目を輝かせた。そんな彼女を見て微笑ましく思ったのか、アルドは優しく笑みを浮かべた。

「つつーかお前ぶつちやけ最強だよな。敵の内臓を敵の身体から別の物体の中に移しちまえば負けねーじゃんよ」

「馬鹿言え。そんなに簡単な話じゃない。こういう移動が出来るようになったのだからつい最近の話だ。理論上は可能だが、今の俺じゃ出来ない。最初なんて、さっきやって見せたコップの水を移す程度のことしか出来なかつたんだぞ」

「世の中そんなに甘くないってことかイ」

「そういうことだ」

クスリと笑みを浮かべ、白蘭は席を立った。

「ん、もう行くのか？」

「ああ。ここにはしばらく滞在するつもりだから、別荘で荷物の整理しないといけないんだ」

「能力で一旦帰りゃ良いだろ？」

「いや、正直言うとそんな移動が出来る程力が残ってないんだ」

苦笑しつつ、白蘭はそれじゃあな、と手を振って酒屋を後にした。

「おし、んじゃ姫様も城まで帰ろうぜ」

「えー」

不満そうなミラルをやや強引に、城まで連れて行くアルドであった。

episode 70 「Roots - 3」

ニューヒープルプロジェクト

新人類計画。それがゲルビア帝国立遺伝子研究所で秘密裏に進められているプロジェクトの名前だった。

世界には、神力と呼ばれる常人では持ち得ぬ稀有な能力が存在する。「赤い雨」と呼ばれる、数百年前に起きた異常現象。その際の赤い雫は超常的な力を持ち、それを浴びた者に神力が与えられた。新人類計画とは、神力を持つ稀有な人間を一から創り出す計画。神に背く行為だと、誰かが言った。

神の領域に、我々人間が辿り着くことは冒涇でしかない。

理屈はわかる。しかしそれでも、好奇心には逆らえない。王でさえハーデンでさえもがそのことをわかりながらもこの計画を研究所に決行させたのだ。

所詮人間は好奇心の塊だ。例え禁忌と知りつつも、好奇心の赴くままに研究を続ける。それが人間だ。

そしてパチリと、カプセルの中の男は目を開けた。

ゆっくりと。研究所内の、自室の椅子に腰掛ける。ここ最近眠っていないせい、驚く程に眠たい。

後ろでまとめていた白く長い髪を解き、その女性は深く溜息を吐いた。

「ニューヒープル……」

ボソリと女性が呟くと同時に、トントンとドアがノックされる。「ラウラ、俺だ」

ドアの向こうから聞こえる男の声にピクリと反応し、ラウラと呼ばれた白髪の女性は入って、と短く答えた。

中に入って来たのは、背の高い男性だった。長く伸ばした神を、後ろで一つにし合っている。彼の手には、小さな赤ん坊が抱かれて

いた。

「キリト……」

ラウラは男を見てそう呟き、次に彼の手の手の中にある赤ん坊へ視線を向ける。

「お前の子だ」

「違うわ」

「違う……?」

「私のDNAを持っているだけよ」

そう言ったラウラを、キリトと呼ばれた男は切なげな表情で見つめる。

ラウラが静かにキリトへ歩み寄ると、キリトはそつと赤ん坊をラウラへ差し出した。ラウラは赤ん坊を受け取り、優しく抱いた。

ラウラと同じ、白髪の赤ん坊は、ただ静かにラウラの腕の中で眠っていた。

「陛下は?」

「下にいるわ。完成したニューピープルと話がしたいんだそうよ」

「出来るのかよ、会話なんて」

「出来るわ。彼は陛下そのものと言っても過言ではないわ。陛下と同じレベルの知識や能力は備えている」

「加えて、神力か」

キリトの言葉に、ラウラは小さく頷いた。

「体内に小赤石を宿しているから、ただの神力ではないハズ」

「……そんな重てえモンが、この子の中にも……か?」

キリトはそう言って、赤ん坊の頭をなでた。

その小さな身体の中に、小赤石などという神力の塊が入っているかと思うと、キリトはどうにもやるせない気分になるのだった。

巨大なカプセルの置かれた地下室に、ハーデンは来ていた。そこには、ラウラを除く全ての研究員がそろっていた。

ハーデンはカプセルを真剣に見つめ、その後ろでは研究員がカプセルの解放を今か今かと待っている。

「さあ目覚めろ！ 我が兄弟！」

ハーデンの言葉と共に、カプセルの中の男はパチリと両目を開いた。研究員達からすれば、それは二度目の目覚めであった。

「……………」

目を開けた男は何も言わず、ただハーデンを見つめている。

「どうした？ 何か喋ってみてくれ」

「……………お前か」

ボソリと。呟くように、カプセルの中から男は言った。

「私を創ったのは、お前か？」

「いや、創ったのは私ではない。しかし、私と同じ遺伝子を持ち、同じ姿をした君は私の兄弟だ」

「そうか」

どうでも良い、とでも言わんばかりの表情で男は呟き

「同じ姿は世界に二ついらんだろう」

破壊音と共に、カプセルの中から腕を出した男は、いつの間にか手にしていた剣で、ハーデンの身体を貫いた。

「か……………は……………ツツ……………！ 何をツ……………ツ！？」

破壊された部分から、ドボドボとカプセル内を満たしていた液体が流れて行く。

剣で突き刺されたハーデンの身体から血が流れ、床へ流れる液体と混ざり合う。

「陛下ッ！」

研究員達が叫んだ頃には、既に男はカプセルを破壊して外へ出ていた。

「ふむ……………」

首を左右に曲げ、ゴキゴキと音を鳴らすとニヤリと笑みを浮かべた。

「うわあああー！」

研究員達は悲鳴を上げ、ドアの方へと駆け出す。が、ドアへ近づいた研究員の身体へ、何かが巻き付いた。

「こんなことも出来るのか」

それは、髪だった。

長く伸びた男の黒い髪が、研究員の身体へ巻き付いているのだ。

一人だけではない、全員の身体へ、男の髪が巻き付いている。

「た、助け」

研究員が言い終わらない内に、男は巻き付けている髪で研究員達を同時に絞め上げた。ゴキゴキと厭な音がして、先程まで逃れようと暴れていた研究員達が一斉にぐったりと動きを止める。

「何故……こん……な……ッ!？」

男の足元で、呻きながらハーデンが問うた。

「合理的に考えて、目撃者は全員消しておくべきだろう」

「そうじゃ……ッない……ッ」

「ああ、お前のことか。さっきも言ったろう？ 同じ姿は世界に二つもいらん」と

それにな、と付け足し、男は言葉を続けた。

「お前はぬるい。お前の望む世界は、お前のやり方では生まれない。男が髪を元に戻すと同時に、巻き付かれていた研究員達は一斉にドサドサと床へ落下していく。

そして男は先程の剣を出現させ、ゆっくりと倒れているハーデンへその刃先を向けた。

「お前の思う共存は不可能だ。私は、全人類を統一する」

全人類の共存。それがハーデンの望みだった。不可能だなんてことは、ハーデン自身にもわかってしている。しかしそれでも、夢見ずにはいられなかった。無意味な争いの存在しない世界。全人類が共存出来る、そんな世界。

「さらばだ我が兄弟。これからは私が」

ザクリと。剣はハーデンの身体を貫いた。しばらく痙攣するかのよう動いていたが、やがてハーデンは完全に動きを止める。

「私が、ゲルビア帝国国王、ハーデンだ」

「何だこの音……!?」

突如、研究所全体に響き渡り始めた不快な音に、キリトは首を傾げる。

「警報音……!? どうしてっ」

ラウラがそう言うと同時に、白衣のポケットに入れていた小型の無線機がノイズ混じりの音を発し始める。すぐに、ラウラは無線機をポケットから取り出した。

『博士、逃げて下さい!』

「モーリッツ……? その声は、モーリッツね!? 何があったの!?」

『逃げて下さい! 陛下が……陛下がッ』

というモーリッツの言葉と同時に、無線機の方こうからザクリと何か突き刺さる音が聞こえる。

「モーリッツ!?!」

彼からの返事はなかった。

聞こえたのは無線機の転がり落ちる音と、何者かの足音。ラウラは、すぐに状況を理解した。

「まさか……あのニューピープルが……?」

「どうなっているのかわからんが、逃げるぞラウラ!」

「え、ええ……!」

キリトに手を引かれ、ラウラは赤ん坊を抱いたまま、すぐに研究所から逃亡した。

その日以来、ラウラ博士とキリトの姿を見た者はいなかった。

人造生命暴走事件。それがあの日、ゲルビア帝国立遺伝子研究所で起きた研究員死亡事件の呼び名だった。

秘密裏に造られていた人造生命体が暴走し、研究員達を殺害。研究の進行状況を確認しに来ていたゲルビア帝国国王ハーデンは、人造生命を殺害することで無事一命を取り留める。

研究所でチーフをやっていたラウラ博士はもう一体の人造生命と共に消息不明。帝国兵の一人であるキリトと共に走っている姿を見かけたとの情報もあるが、真実か否かは定かではない。

研究所で行われていた研究は、ゲルビア帝国首都パンドラで別の研究所を設立することで再開され、ゲルビア帝国立遺伝子研究所は封鎖された。

そしてあの日以来、ゲルビア帝国国王ハーデンは、まるで人が変わったかのように性格が変わってしまったという。

明らかな違和感。

研究所で起きたあの事件以来、シルフィアは夫　ハーデンに違和感を抱き続けていた。事件前との明らかな態度の違い、まるで中身だけそっくり別の人間にでもなってしまったかのようなだった。

何があったのか、何度も言及したがハーデンは話を逸らすばかりで一向に答えようとしなかった。

国王の変化を感じ取った者は少なく、国民に至っては何ら変化を感じていないかのようなだった。側近の者達も違和感を抱いてはいるものの、然程気にしていない様子だった。

この違和感に、何らかの危険性を感じ取ったのは、妻である自分だけなのかも知れないと、シルフィアは感じた。

シルフィアが違和感を抱き始めてから数日後、シルフィアの寝室へ訪れたミラルは不安そうな表情でシルフィアへ抱き着いた。

「どうしたの……？」

シルフィアが問うと、ミラルは不安そうな表情のままゆっくりと顔を上げる。

「最近……お父様、変」

「っ！」

ミラルのその言葉に、シルフィアは表情を変えた。

自分の抱いていた違和感を、ミラルも抱いていたのだ。王、ハーデンに対する違和感を……。

「何だか、最近のお父様、怖い」

圧倒的威圧感。今までのハーデンは、王の風格こそあったものの、周囲に威圧感を与えるような王ではなかった。王としての風格を持ちながらも、どこか親しみやすい印象すら受けるような……そんな男だった。

しかし、今のハーデンは違う。彼の放つ威圧感周囲に人を寄せ

付けない、それでいてどこか、人を惹きつけるカリスマ性を感じる。王としてはそれでも問題ないが、人間としては全くの別人だ。

ミラルの怖いという印象は、シンプルでわかりやすく、的を射ていた。

「……そんなことないわ」

そつとミラルを抱き寄せ、シルフィアはその頭を優しく撫でた。不安を与えたくない。そんな一心で、シルフィアは嘘を吐いた。

本当はシルフィア自身が一番感じていることだ。

今のハーデンに対する、恐怖。

ハーデンが変わってしまったのは、あの事件以降……。一体何があつたのか、シルフィアには想像も付かなかった。

あやしている内に、ミラルはシルフィアのベッドで眠り込んでしまった。小さな寝息を立てるその無垢な少女の寝顔に、そつとシルフィアは触れた。温かく、愛おしい温もり。例え何があるうとも、ミラルだけは守ろうと、シルフィアは誓った。

そんな時だった。コンコンと小さく、部屋のドアがノックされた。「俺だ」

その声は、アルドの物だった。すぐにシルフィアは、どうぞ、と声をかける。正直なところ、ここ最近ハーデンの異変のせいで心細く感じていたシルフィアにとって、アルドの訪問は心の支えとも言えた。

アルドはドアを開けると、すぐにシルフィアの座っているベッドの傍まで歩み寄る。

「……寝てるのか」

アルドはミラルへ視線を向け、呟いた。

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「ああ。寝ていてくれた方が良い」

「ミラルに聞かれたくない話？」

シルフィアの問いに、アルドは静かに頷いた。

「お前はとっくの昔に気付いているかも知れないが、陛下の様子、お

かしくないか？」

その問いに、シルフィアの表情が変わった。

アルドも、自分と同じ違和感を抱いていたのだ。

「上手く言えないが、何かこう……雰囲気が違うくないか？」

「……ええ」

静かに、シルフィアは首肯する。

「陛下に、何かあったのか？」

「……わからない。私にも、勿論ミラルにも……。ミラルも、あの人の様子がおかしいのは感じていたみたい」

そう言って、シルフィアはそつとミラルの頬へ触れる。

「なるほどね……。妻と娘が同じように言っんなら、陛下の様子がおかしいのは俺の気のせいじゃないってことか」

「アルド……私、何だか厭な予感がするの……。あの人に、何かあったんじゃないかって……」

不安そうな表情を見せるシルフィアに、心配するな、と声をかけることがアルドには出来なかった。何故なら彼自身もまた、シルフィアの言う「厭な予感」を感じ取っていたからだ。

「ううん……」

眠そうな声を上げ、ミラルがゴロリとベッドの上で寝がえりを打つ。

「おっといけねえ、起こしちまうかな」

アルドはばつが悪そうに後ろ頭をポリポリとかくと、嘆息した。

「心配だったから様子見に來ただけだし、そろそろ帰るわ」

そう言って、アルドが部屋を出ようとドアへと向かった時だった。ガチャリと。部屋のドアが開いた。

「ッ！？」

驚いてアルドが身構えると、ドアを開けたのはハーデンだった。

「陛下……下……？」

驚愕で目を丸くしたまま、アルドは呟いた。

「ほう。近衛兵とは言え、人の妻の部屋へ深夜に訪ねるとは……」

ギロリと。鋭い眼光がアルドを見据えた。すぐに、アルドはその場へひざまずく。

「も、申し訳ありません。陛下」

圧倒的な威圧感だった。これ以上睨まれば、身がすくんでしまふかのような、そんな視線だった。

「シルフィア、こんな時間に男を部屋に連れ込むな」

「いえ……私が訪ねたのです……」

頭を下げたまま、アルドは答えた。

「ほう、貴様が？ たかが近衛兵の分際で王妃の部屋をか？」

ハーデンは鋭い視線でひざまずいているアルドを見降ろし、その頭へ右足を乗せた。

「っ！」

驚愕に表情を歪めるシルフィアをよそに、ハーデンはグツとアルドの頭を踏みつける。

「申し訳……ごさいま……せんッ……」

屈辱と苦痛。その二つに表情を歪めつつも、アルドは謝罪の言葉を口にした。しかし、ハーデンはそれには動じず、何度もアルドを踏みつける。

「やめて下さいっ！ 最近の貴方……変ですよ！」

座っていたベッドから立ち上がり、シルフィアがそう叫ぶと同時に、ピクリとハーデンの表情が変わった。

「変……私がか？」

そう問い、シルフィアがコクリと頷いたのを確認すると、ハーデンは少し考え込むような仕草をし

「どこか？ どのように？ どう変なのだ？ それはいつもの私と違うということか？ 具体的に話してみる」

アルドを踏みつけるのを止め、ハーデンはすぐさまシルフィアの眼前まで迫った。

心底そのことが気になっている……といった表情だった。まるで鳥が何故飛ぶのかと、母に問う子供のように。

呆気に取られ、シルフィアはしばらく何も言えずにいた。そんなシルフィアの顔を、ハーデンは食い入るように見つめている。

「まるで……別人のよう」

ボソリと。呟くような声でシルフィアはそう言った。その言葉に、ハーデンはニヤリと笑みを浮かべた。

「そうか、気付いたか……。流石は『私』だ。良い女を妻にしている」

それはどういう意味なのか。自画自賛、それとも

「ではお前は、私はお前の知っているハーデンでなく、ハーデンそっくりな姿をした別の何かだとでも……言いたいのか？」

「そ、そういうわけでは……」

圧倒され、シルフィアは数歩後退するが、すぐにベッドへつまずき、ベッドへ座り込む形になる。

ゆっくりと。ハーデンはシルフィアへ手をかざした。

「　　ッ！　シルフィア、離れるッッッ！」

咄嗟に危険を察知したのか、凄まじい剣幕でアルドが叫んだ。その時には、既に遅かった。

「……っ!？」

ザックリと。胸元へ突き刺さっているのは、黒い大剣だった。大剣は無惨にも身体を貫き、赤い血を滴らせている。

「シルフィアアアアッ！」

周囲へ飛び散った鮮血。ベッドへと滴り落ちる真っ赤な血。聞こえるのは掠れた呻き声と、滴り落ちる血の音だけだった。

シルフィアの身体は、無惨にも貫かれていた。

「なん……でっ……!？」

掠れた声で問うシルフィアに、ハーデンは答えようとしなかった。ただ無表情なまま、シルフィアの苦しむ姿を眺めている。

「テメエ……何やってんだアアッ！」

「王に対して『テメエ』……そして先程は王妃を呼び捨て……。如何なものかな」

激昂するアルドの方を振り向き、表情を変えぬまま、ハーデンはそんなことを言った。

「お父様……お母……様……？」

不意に聞こえる、少女の声。

「ミラル……ッ！」

「何で……？」

母の帰り血を顔に浴び、啞然とした表情で、ミラルは母を見つめていた。

父が、母を殺す姿を。

ゆっくりと。ハーデンはミラルへと視線を向けた。

ミラルは母を凝視したまま、ピクリとも動こうとしない。

「まるで別人のよう、か。ふむ……。ミラル、お前もそう思っていたのか？」

大剣をシルフィアの身体へ突き刺したまま、ハーデンはミラルへ問うた。しかし、ミラルは何も答えず、ただひたすらにシルフィアを凝視している。

「ミラル……ル……逃げ、て……」

掠れたシルフィアの声。苦痛で指の一つも動かせないハズなのに、震えるシルフィアの右手は、ミラルへと伸ばされている。

「アルド……ミラル……を」

「ふむ。答えられないか」

ハーデンはミラルへ冷たい視線を向けると、シルフィアから大剣を引き抜いた。

「うっ……!!」

「シルフィアッ!」

引き抜くと同時に再び血が溢れ出し、シルフィアはベッドの上に横たわる。シートを真紅に染め、ゲルビアの王妃は息絶えた。

「お母……様？」

ミラルの言葉に、横たわるシルフィアは何も答えない。ピクリとも動かない。

死という概念に初めて触れた少女は、訳もわからぬまま母の身体を揺さぶる。

「お母様! お母様!」

何度揺さぶってもシルフィアは起き上がらない。ただ、ミラルの手がシルフィアの血で汚れていくばかりだった。

不安、恐怖、悲しみ。ミラルの中でない交ぜになったそれらの感

情は、やがて一滴の涙となって目からこぼれ落ち、母の死体を濡らした。

血と混じり合う、涙。

そんなミラルとシルフィアの姿を、アルドは何も言えずに見つめていた。

「ああ、そうか。死んだか」

まるで、何も感じていないかのような口調だった。ハーデンはシルフィアへ一瞥をくれ、微笑する。

「脆い……脆いな人間ッ！」

そう言って、ハーデンは豪快に笑い始めた。

「デメエ……ッ」

アルドはハーデンへ接近すると、その胸ぐらを勢いよく掴んだ。

「自分が何やってんのかわかってんのか!？」

「殺した。シルフィアを。それ以上でも、それ以下でもなかるッ」

「デメエは一体……何なんだよッ!? 本物のハーデンはどこだッ!??」

「私か? 私は……」

ハーデンが言いかけた時だった

「何事ですか!??」

勢いよくドアが開き、数人の兵士が部屋の中へと入る。

そして 驚愕。

目の前で広がる異常な光景に、兵士達は言葉を失った。

泣きじゃくる王女、息絶えた王妃。そして、王の胸ぐらを掴む、

アルド。

「この男だ」

静かに、ハーデンが言った。

「我が妻を殺し、今度は私に掴みかかって来たのだ」

「な ッ!??」

一瞬で、兵士達の視線がアルドへと集まる。

弁解しようにも、信用されないのは目に見えていた。王が相手で

は、まず勝ち目がない。

「クソッ」

悪態を吐くと同時に、アルドはハーデンを離し、ミラルへと駆けよる。

「ミラルッ！ 逃げるぞ！」

アルド……ミラル……を。

シルフィアからアルドへの、最後の頼み。何としてでも、ミラルを逃がす。

「えっ……？」

泣きながら戸惑うミラルを抱き上げると同時に、アルドは兵士達を押しつけて部屋を飛び出した。

「他の者達にも伝える。あの男　アルドが王妃を殺し、姫を連れ去って逃げたと」

「はい！」

兵士達がそう答えたのを確認し、ハーデンは薄らと笑みを浮かべた。

ミラルを抱きかかえたまま、ひたすらに走っていた。体力はある方だったが、少女とは言え人間を一人抱えたまま、それも後ろから追われているというプレッシャーの中で走り続けるのは心身共に楽ではなかった。

何とか城の外へ出ることは出来たが、どこへ逃げれば良い？　アルド自信はともかく、ミラルだけでもどこかへ逃がさなければならぬ。

国内では、すぐにハーデンに発見されるだろう。ではやはり、国外か？

しかし、その考えにアルドはかぶりを振った。

この時間帯に船が出ているとも思えない。

振り返ると、何人もの追ってがこちらへ来ている。このままでは到底逃げ切れそうにもない。

「クソッ！」

「ねえアルド！ どこに行くの！？ お母様は……」

言いかけ、ミラルは閉口する。「死」という決定的な言葉を、口にしたくなかったのだろうか。

国外へ逃がす。国外……東国……？

「白蘭だ！」

すぐにアルドは方向を変え、白蘭の別荘へと向かった。

白蘭の能力なら、瞬時に東国へ移動することが可能なはずだ。白蘭の話では、明日には東国へ帰ると言っていた。恐らく、移動出来る程能力が回復したということだ。

東国へ、ミラルを連れて行ってもらうしかない。

「あ、ヤベエ……土産買ってねーじゃん俺」

ボソリと。荷物をまとめながら白蘭は呟いた。

木造の、小さな別荘だった。比較的少ない荷物をソファの上にとっかりと乗せ、その隣に白蘭も座りこむ。

「買って来るって約束しちゃったもんなあ……」

そう呟き、白蘭は物憂げに嘆息する。

ゲルビアへ行く前日、一緒に行きたいと駄々をこねる弟に、お土産を買って来る約束で引き下がってもらったというのに、白蘭はお土産のことなどすっかり忘れていた。

「アイツ、怒るかな……」

弟の怒る姿を想像し、白蘭がクスリと笑みをこぼした時だった。勢いよく、玄関のドアが叩かれた。

城下町から少し離れた場所に、白蘭の別荘はあった。何とかここ

まで走ってこれたが、流石にこれ以上は厳しい。

アルドは、すぐに玄関のドアを激しく叩いた。

「クソ！ 早く出るよッ！」

振り返れば、既に兵士達は近くまで追って来ている。

「おい、俺だ！ アルドだッ！」

「何だ、アルドか？」

叫ぶと同時に、ドアの向こうから声が聞こえる。

「白蘭！ 開けてくれ！」

「緊急事態か！？」

すぐに、白蘭はドアを開けた。しかしその頃には既に、すぐ傍まで兵士達が迫って来ていた。

「白蘭！ ミラルを頼む！」

「ミラルって……姫様！？ ってかお前、何で兵士に追われてんだよ！？」

「説明する暇はねえ！ 今すぐミラルを逃がせ！ 東国へ連れて行くんだ！」

「逃がせて……アルドは！？」

白蘭の問いに言葉では答えず、アルドは後ろの兵士へチラリと目をやる。その動作で、白蘭はアルドの意思を理解する。

「ふざけんな！ お前も中に入れ！」

白蘭がそう叫んだ時には既に遅く、兵士達はアルドを取り囲んでいた。

素早く、兵士達はアルドへ銃を向けた。

「白蘭！」

アルドは叫ぶと同時に、ミラルを白蘭へ渡す。

「姫様ッ！」

兵士達が駆け寄ろうとするが、それを止めるかのようにアルドは両手を広げた。

「白蘭、ミラルを頼む」

「……ああッ！」

アルドの背中に、彼の決意を感じた。

白蘭はすぐに、ドアを閉める。

「貴様……王妃様だけでなく、姫様にまで……ッ！」

「うるッせえんだよ犬共が」

ボソリと。呟くようにアルドは悪態を吐いた。

後ろでは、ミラルの声と共に何度もドアが叩かれる音がしている。

「アルド！ アルド！」

必死なミラルの声を、あえて聞かぬよう、アルドは目の前の兵士達へ集中する。

「そこを退け！ 退かねば」

「撃てよ糞共。もう悔いはねえ」

いや、悔いはあるかな、と小さく付け足し、アルドは自嘲気味に笑みを浮かべた。

「アルドー！」

「じゃあな。姫様」

銃声が、鳴り響いた。

「アルドっ！ アルドっ！」

勢いよくドアを叩き続けるが、ドアの向こうから返事はない。

「姫様！」

白蘭の止める声も聞かず、ミラルは必死にドアを叩き続けた。

脳裏を過るのは、横たわるシルフィアの姿。ミラルは直感的に理解していた。

アルドが、これから死のうとしていることを。

ミラルを、助けるために。

「アルドー！」

何度も何度も、ドアを叩き続ける。やがて、ミラルの手には薄らと血が滲み始めた。痛みには耐えながらも、何度もミラルはドアを叩き続けた。

やがて、銃声が鳴り響いた。

ドサリと。ドアに何かもたれかかる音。

「アル……ド……」

ペタリと、その場にミラルは膝をついた。

「姫様！」

荷物を背負った白蘭が、ミラルを抱きかかえる。それとほぼ同時に、白蘭の身体は光に包まれる。

「姫様ア！」

ドアが開き、中へ兵士達が入って来る頃には、既にミラルと白蘭は姿を消していた。

空虚な日々を送っていた。

あの日以来、与えられた一室にただ閉じこもっているだけの生活を続けていた。食事もほとんど取らず、人と会話することもなく、ただ虚ろな表情のまま日々を過ごしていた。

楽しかった日々は、美しかった日々は、もう戻らない。そう理解して、ミラルは何かを考えるのをやめた。何かを思い出すのを、止めた。

思い出せば辛くなるだけ。

優しくかった父と母も、アルドも、もういない。

畳と呼ばれる独特の臭いを持った床の上、ミラルは膝を抱えて座ったまま、動かない。ただ虚ろな目をしたまま、目の前の障子を見つめ続けている。

「お母様……」

ボソリと呟く。

もう考えないと、思い出さないと決めたのに、ミラルの頭の中で何度も蘇る母の姿、そして 最期。

漆黒の剣に貫かれ、大量の血を流しながら、最後まで自分の身を案じて死んだ母。

「アルド……」

ミラルを助けるため、自身の命を代償にしたアルド。

そして 父。諸悪の根源とも呼べる父は、ミラルの知る父ではなかった。

「おい昼飯ですよーっ」と

ガラリと。障子が開いた。

「……………」

「姫様、どうぞ」

中に入って来た白蘭が持っていたのは、お盆の上に乗せられた食

事だった。

この国 東国の料理は、ゲルビアの物とは全く違う物だったが、口に合わない物ではなかった。もっとも、今のミラルには味を楽しむ余裕などないのだが。

「姫様、この部屋から一度も出て」

「やめて」

ピシャリと。ミラルは言い放った。

「私はもう、姫様なんかじゃない。敬語も嫌、姫様って呼ばれるのも嫌」

思い出してしまうから。

あの日々を思い出して、涙が溢れるから。

「……そーかい。んじゃミラル、お前この部屋から一度も出てないだろ？」

「コクリと。ミラルは頷いた。

「^{かわや}厠に行ってるどころくらいしか知らねえし……風呂くらい入れっの」

「いい……もう、いい。出てっつてよ……一人にして」

「いや、そりゃ無理だ」

白蘭は肩をすくめてみせると、お盆をミラルの前に置いて後ろの障子を指差した。見れば、障子の向こうに人影が見える。

「客だ。お前に会いたいっつてよ」

「会いたくない。ご飯だけで、十分だから」

「まあそう言っつなよ。俺の弟だ」

「白蘭……の？」

おう、と頷き、白蘭は微笑んだ。

「入って良いぞー」

白蘭がそう言っつと、障子がガラリと空き、中へ一人の少年が入っつて来る。背の高い、穏やかそうな少年だった。白蘭に似た顔立ちで、やや戸惑い気味の表情をしてミラルの方を見つめている。

「お前が話してみたいっつていうから頼んだんだぞ。ほら」

白蘭はそう言うと、少年の後ろに回ってトンと背中を押した。

「そんじゃ、俺はこれで」

そう言っつて、白蘭は部屋の外へ出て行ってしまった。

「……」

しばしの、沈黙。

やがて、少年はえらくかしくまった動作で、ミラルの前に正座をする。ミラルは料理にも手を付けず、少年の方をジッと見つめた。

「あ、あの……青蘭、です」

ペコリと。青蘭と名乗った少年は頭を下げた。

「敬語は、やめて」

静かにミラルがそう言うと、青蘭はごめん、と申し訳なさそうにうつむいた。

「えつと……」

「ミラル。ミラルで良い」

口籠る青蘭へ、ミラルはそう告げると、箸を手に取り、お盆の上の料理を食べ始めた。

最初は上手く使えなかった箸だが、白蘭に教わることでミラルはある程度は使えるようになっていた。ややぎこちない動作で、焼き魚や米を口に運んで行く。

ミラルに取っつて、楽しかった食事は、今は作業でしかない。

「あ、ちよつと食べるの待って」

青蘭がそう言うと、ミラルはピタリと箸を止める。それを確認すると、青蘭は部屋の外へ慌しく出て行った。

しばらく待っている、ミラルと同じようにお盆の上に料理を乗せて青蘭は部屋の中へやって来た。

「一緒に、食べよう」

どこか恥ずかしそうにそう言った青蘭に、ミラルは返事をしなかった。

静かに、青蘭は先程と同じ位置に正座する。

青蘭が食べ始めたのを見て、ミラルは再び箸を動かし始めた。

静かな、食事だった。だが、どこか温かい。

誰かと一緒に食べることが、こんなにも温かいのだということ、ミラルは思い出した。父と、母と、談笑しながらした夕食も、こんな風に温かかった。

やがて食べ終わり、青蘭はお盆を持って立ち上がる。

「それじゃあ、また」

どこか気まずそうな表情でそう言って、青蘭が部屋を出ようとした時だった。

「待って」

不意に後ろから、ミラルの声がする。

「ありがとう」

青蘭が振り返ると、そこには空虚な目をした少女はいなかった。薄らとだがその目に、光が戻っているように見えた。

「また、来て……」

ミラルの言葉に、青蘭は笑顔で頷いた。

「それじゃあ、また夕食で」

「あ、それと……お風呂の場所、教えて」

「うん。付いて来て」

この国の入浴は、ゲルビアとは違った。ミラルが一番驚いたのは、シャワーが存在しないことだった。浴槽は木で出来ており、浴槽から湯を風呂桶ですくい、身体にかけて汚れを洗い落とす。

身体を洗い終え、ゆっくりとミラルは浴槽へ浸かる。これまでの疲れが、ゆっくりと癒されて行く。温かい湯の中で、ミラルはボンヤリと反芻する。

「うっ……うっ……」

浴槽に、何粒もの涙がこぼれ落ちた。

あの日以来、ミラルと青蘭は毎食食事を共にするようになっていた。やがてその中へ白蘭も混じり、三人で食事をするのが日課になっていた。そうして行く内に、冷え切っていたミラルの心は、徐々に温められていく。

白蘭の家の人々に、ミラルは非常に良くしてもらっていた。

着物と呼ばれる東国の服は着辛いだろうということ、わざわざ大陸本土から輸入されたミラルの着やすそうな服を用意してもらっていたり、過去を話しながらないミラルを詮索しようとしなかったり……そんな優しさに触れ、ミラルは心を開くようになっていた。

こんな日々が永遠に続けば良い。ミラルはそう、思い始めていた。

王座に座り、静かに男は杯を傾ける。

「陛下、如何にいたしましょう」

男　ハーデンの前では、一人の男が跪いている。

「赤石の在処を、彼らが知っていると言うのか？」

ハーデンの問いに、男は跪いた状態のままはい、と頷いた。それを見、ハーデンは薄らとだが口元を釣り上げる。

「しかし、誰一人として一向に口を割ろうとしません」

「金では動かぬか」

「はい……」

「ふむ……」

と、ハーデンは考え込むような仕草を見せる。しばらく考え込み、ハーデンはニヤリと笑みを浮かべた。

「何か、お考えが？」

男の言葉に、ハーデンは静かに頷いた。

「攻め込め」

驚く程平坦な声で、ハーデンはそう言った。その言葉を聞いた男は、表情に驚愕の色を隠せずにいた。

「攻め込む……のですか……東国に？」

「ああ。他にどこに攻め込むと言うのだ？」

ハーデンの問いに、男は口籠る。

「しかし東国は平和主義であり、中立国であって
構うものか」

「条約を破ることになります」

男のその言葉に、ハーデンはフン、と鼻をならした。

「他の国まで敵に回すことに……」

「敵に回ったところで、弱小国がどれだけ集まろうと我が帝国には及ばぬわ！」

そう言つて、ハーデンは豪快に笑つた。

確かに、ハーデンの言う通りだ。東国やその他の国が敵に回ったところで、アルモニア大陸最大の国であるゲルビア帝国には到底及ばない。人員、資源、戦力、国土、その他様々な要素ですら、ゲルビア帝国に勝る国は大陸内に存在しないと云つても過言ではない。

「東国など、足元にも及ばぬ」

「では……」

「兵は少数で良い」

「！？」

男は、表情を驚愕に歪めた。

「最初に小型の爆弾で威嚇し、少数で攻め込ませて重鎮だけ捕えろ。吐かぬなら LB235を落とせ」

「な ツー！？」

「そのために少数にするのだ。兵士ごと吹き飛ばしても被害が少ないように、な」

ハーデンの言葉に、男は寒気すら覚えた。

聖杯、と呼ばれる杯が存在する。それは赤石と呼ばれる神力の塊を受け入れ、自在に変質させることでその力を利用するために存在する。しかし、杯とは名ばかりで、実際にどのような形状をしているのかを知っている者はいないと言っても過言ではない。

聖杯は、東国の神力使いによって生成された物だ。聖杯の力、赤石を受け入れ、変質させる力を利用するには、人体に宿す必要がある。その聖杯を人体に宿し、代々受け継いでいるのが、東国の王族だった。

そして現聖杯保持者は 白蘭である。

「聖杯保持者は、外的要因では絶対死しない……いや、死ねないの方が正しいか」

そんなことを呟き、自室の布団の中でうつぶせの状態で寝転んだまま、白蘭は持っている本のページを開く。

簡素な部屋だった。布団を入れておく押し入れ、何か書き物をする時のための机、他に目に着くものと言えば、掛け軸くらいのものであろうか。

既に日は落ち、屋敷の中の者もほとんど寝てしまっている今、部屋の中で行燈（東国で使われている明かり、東国には電気が通っていない）を点けて本を読んでいるのは白蘭くらいのものであろう。

白蘭が読んでいたのは、聖杯に関する書物だった。

東国の王族として、己が背負った聖杯という運命。何故か再確認したくなったのである。

赤石も聖杯も、東国が所持し、保護している。

赤石は存在こそ世界中で知れ渡っているものの、その在処だけは極秘とされており、東国内でも王族の一部の者しか知らない。東国の地下に、赤石が隠されているという事実を……。

そこまで考え、白蘭は嘆息すると行燈の火を消した。

本を閉じ、枕元へそつと置き、仰向けになって眠りについた。

翌朝、白蘭は青蘭によって起こされた。ユサユサと身体を揺らされて目覚めた白蘭は、眠そくな顔のまま青蘭へ視線を向ける。

「……どした？」

「どしたじゃないよ兄さん！ 今日俺達の作った船、見てくれるって約束だろ？」

青蘭の言葉を聞き、白蘭は頭をポリポリとかきながら、あー、と間の抜けた声を上げる。

「そついやそつだったな」

「ミラルも、見に行くって」

「ほう……」

青蘭の後ろには、すっかり元気になっているミラルの姿があった。ゲルビアから連れて来た当初は、死んだような目をしていて彼女とも打ち解けたらしく、引きこもっていた彼女も最近はお外に出るようになってる。

「船……ねえ」

「船が完成したら、食料積んで持って行って、外の世界を見てくる」青蘭がそんなことを言い始めたのは、もう数カ月も前のことだった。ミラルが屋敷に来たことで、外の世界への興味が沸いたのだから。神力による怪力を活かし、青蘭は自らの手で一艘の木船を作り上げたというのだ。所々職人に手伝ってもらったらしいが……。その船で、外の世界を見ろというのだ。

「しかしまあ、木船一艘作るたあ、中々やるじゃねーの」

「違つよ、三艘だ」

「三艘……？」

「俺と、伊織と、ミラルの分」

指を降りつつ、青蘭は誇らしげにそう言う。

「おい……俺のは……」

「兄さんは神力で行けるだろ」

「あ……」

確かにそうだった。

「とにかく、見に来てよ」

「しょうがねえな」

そう呟き、白蘭は起き上がった。その段階で、白蘭の能力は一度行ったことのある場所であれば、ランダムに移動するため大変厄介なことを思い出す。とりあえず今は気にしないことにした。

その後朝食を済ませ、着替えた白蘭は、渋々青蘭達に着いて行くことにした。面倒ではあったが、興味が全くない訳ではない。弟の作った物だ、少し楽しみでもある。

屋敷の者に一声かけ、玄関の戸を開いた時だった

不意に聞こえる、耳をつんざくような轟音と、爆風。

その正体は何なのか考える暇もなく、白蘭達は吹き飛ばされ意識を失った。

次に意識を取り戻した時、聞こえたのは金属同士が勢いよくぶつかり合う音だった。刀による戦闘。白蘭にはそう聞こえた。

「どうなってんだ……!!」

呟きつつ、目を開いて身体を起こす。目を開けた瞬間、広がっている光景に白蘭は驚愕した。

「これ……は……ッ!？」

薄暗く曇る空の下、建物の木片が散乱していた。見れば、周囲には倒れている人間が何人もいる。手遅れの者や、気絶しているだけ

の者。

そして各地で、他国の兵士思しき人間と、東国の男達が刀で戦っていた。銃を所持している者もいるらしく、銃声もどこからか聞こえて来る。

すぐに、戦争なのだ和理解した。

だとすれば、先程の轟音と爆風は爆弾による物……。

「クソッ！ どうなって」

青蘭と、ミラル。

白蘭は聖杯を保持しているため、外的要因では死なない。故に、爆弾の直撃で聖杯ごと身体を粉々にでもされない限り、死ぬことはない。だが、青蘭とミラルは違う。二人は生身の人間だ。

「青蘭！ ミラルーッ！」

呼びかけるが、返事はない。

「クソッ！」

悪態を吐き、周囲を歩き回る。

「ッ」

目の前で戦闘を繰り広げていた東国の男が、槍に突き刺された。目の前でドサリと倒れた男の顔を確認する暇もなく、槍を持った兵士は白蘭目掛けて槍を突き出す。

白蘭は素早く槍を回避すると、兵士との距離を詰める。腹部へ右拳を叩き込もうと考えたが、鎧ごしでは効果がなさそうだ。

故に、顔面へ叩き込む。

「かは……ッ！」

呻き声を上げ、兵士はその場へ倒れ込む。

「クソ……！ 二人はどこへ……？」

そう呟いた時だった。

「うう……」

不意に聞こえる呻き声、見れば、傍でミラルが倒れていた。木片の下敷きとなり、頭から血を大量に流している。

「ミラルッ！」

すぐに駆け寄り、木片を強引に退かせて声をかける。が、返事はない。呼吸はしているようだが、出血量が尋常ではない。命が後数分と持たないのは、明白だった。

「クソ……！ 何でこんな……ッ！」

母の死、父の裏切り、そして信頼していたアルドの死……。自国を出、東国へ来てやつと落ち着いていたというのに、今度はこんな理不尽な形で命を失う……。あまりにも、残酷で、無惨。

「なんとかならねえのかよ……！」

苦しむミラルを見、白蘭は歯噛みする。アルドが、命を張って助けたこの少女を、悲惨な目にはかりあっているこの少女を 何とかして助きたい。

「……聖杯」

ボソリと呟き、自分の胸に手を当てる。

保持者を死なせないため、全ての傷を自動で癒すこの聖杯。この聖杯を、何とかミラルへ移せないだろうか。

本来、聖杯の移動は保持者が寿命で死んだ際に行われる。その聖杯を、白蘭が生きたまま移動させることは 可能だ。

白蘭の体内にある聖杯を、能力でミラルの中へ移す。

体内の物体の移動は、まだ試したことはない。だが、なりふり構ってられない。ミラルを救うためにも、やらなければならぬ。

例え、二度とこの能力が使えなくなっても良い、それ程までの覚悟だった。

「行くぞ……！」

胸に手をかざし、意識を集中させる。この聖杯を、ミラルへ

「ぐ……ッ！」
苦痛。本来なら無理に等しい行為だ。負荷がかかるのは当然とも言える。

「おおおおおッ……！」

痛みを誤魔化すかのように咆哮する。すると、白蘭の手から光が発せられる。その光は徐々に強くなって行く。

「ハアツ……ハアツ……」

光が収まると同時に、ミラルの傷がみるみる内に回復して行く。

「やった……か……ッ」

どうやら成功したらしい。激しい疲労感の中、白蘭は安堵の溜息を吐いた。

「白……蘭……?」

ミラルは目を開くと、不思議そうな表情でそう問うた。どうやら状況を理解していないらしい。

「そこら辺に爆弾が落ちて、お前が死にかけて……あー！ 説明してる場合じゃねえ！ とにかく、死にかけたお前に、聖杯を移したんだ！ それでとりあえずお前は一命を取り留めてる！」

「聖杯……?」

それにしても、説明している余裕がある程、兵士の数は少ない。戦闘もごく少数で、隊列を組んだりしている訳でもない。少人数での乱戦、と言った感じだ。

不可解だった。

「兄さん！」

声のした方へ視線を向けると、そこにいたのは青蘭だった。どうやら無事だったらしく、傷だらけではあるがミラルのような目には遭っていないようだ。

その青蘭の様子に、白蘭は安堵の溜息を吐いた。

「逃げよう、兄さん！ アイツら、ゲルビアの兵士だ！」

「ゲルビア……?」

ピクリと。ミラルの表情が動いた。

「ゲルビア……? 何だつてゲルビアが東国を……?」

「わからない。でも、逃げるしかない！ 俺の作った船は無事だ！」

青蘭が飛ばされた場所は、丁度船が置いてある付近だったらしい。その船で、青蘭は逃げようと言うのだ。

「……わかった。行くぞ！」

ゲルビアという言葉に、動揺したままミラルを連れ、青蘭と共に白蘭が走りだそうとした時だった。

「青蘭ッ！」

先頭を走っていた青蘭の前に、槍を構えたゲルビア兵士が現れる。兵士の傍には、殺したのであるう東国の男が倒れている。

「ッ!?」

兵士は既に槍を構え、青蘭に突き出さんとしている。

「クソッ！」

勢いよく、白蘭の手によって青蘭は突き飛ばされた。

「兄さ」

青蘭が言いかけた時だった。

グサリと白蘭の胸に突き刺さる、兵士の槍。

ドクドクと血は溢れだし、地面へ滴り落ちる。

「白蘭っ！」

辺りに響く、ミラルの悲痛な声。それとほぼ同時に、青蘭はペタリと地面に膝をついた。

「白蘭！ 白蘭っ！」

ミラルによって、繰り返し叫ばれる白蘭の名。

「……行け」

グツと槍を掴み、白蘭はミラルへ告げた。

「青蘭と、逃げる……」

引き抜かせぬよう、青蘭達へ襲いかからぬよう、白蘭は力強く槍を握った。

「くッ！」

槍を引き抜かんと兵士は力を込めるが、白蘭は一向に槍を離さない。

「兄……さん……ッ！」

悲痛な涙声で、青蘭は膝をついたまま白蘭を見つめた。それを一喝するかのように、白蘭は青蘭を睨み付ける。

「行けよツツツ！」

胸部に槍を突き刺され、死にかけている人間とは思えぬ威圧感だった。

「早……く……ッ！」

「……ッ……ッ！」

青蘭は目に涙をためたまま逡巡するが、やがて意を決して立ち上がる。

「ミラルッ！」

駆け出し、ミラルの手を引いて勢いよく船の置いてある場所へ向かって駆け出した。

「ッ！ おい！」

兵士の呼ぶ声など聞かず、青蘭はミラルと共に駆けて行く。

その二人の背中を見、白蘭は薄らと笑みを浮かべる。

血は止まらない。聖杯は既に体内にはない。勢いよく、口から血を吐き出した。

「なるほど……な……」

アルドも、こんな気分だったのだろうか。我が身を犠牲にし、大切な物を守り抜いた満足感。

ゆっくりと。槍が引き抜かれた。

「じゃあな……」

誰に言うでもなく、白蘭は独り、呟いた。

嵐が過ぎ去り、聞こえるのは波の音だけ。傍にいたハズの少年は、嵐に巻き込まれ、どこか遠くへ行ってしまった。

独り、少女は泣いた。

ユラユラ揺れる小舟の中、少女は一人横たわる。

ここがどこかもわからぬまま、自分が誰なのかもわからぬまま。
ただ、横たわる。

揺れる小舟の中、心の安息を求めた少女は、己の記憶に蓋をした。

辛い記憶に、蓋をした。

いつもより広い部屋だった。

東国を出、アルケスタへと到着したチリー達だったが、到着した頃には既に日が落ちており、アルケスタの大図書館の閉館時刻がとつくに過ぎてしまっていたため、宿で一泊してから翌日、大図書館で調べ物をするようになった。

一度テイテスに帰る前までは、資金不足故に安い宿しか借りれなかったが、テイテスから旅の費用として資金を与えられたため、今までより遥かに良い宿を借りることが出来た。

二人で一部屋ずつ（ミラルは一部屋）、部屋一つにベッドが二つ設置されているため、チリー達男性陣は初めて宿のベッドを一人一つずつ与えられたことになる。このことに関して、チリーとニシルは大はしゃぎであった。

部屋も今までより広い物で、シャワールームまで設置してある。今まで安宿で耐えてきたチリー達にとっては至れり尽くせりだった。そして今、明日の予定について一度全員で話し合うために、トレイズとカンバーの部屋へとチリー達は集まっていた。

「アルケスタ大図書館の開館時刻に合わせて、明日は出発しましょう」

静かに、ベッドに腰掛けたカンバーは皆に聞こえるようにそう告げた。

「ニューピープル……か」

ボソリと。トレイズが静かに呟いた。

「あのドリルの大男と、もう一人のヒョロい奴のことだよな」

ニシルの言葉に、チリーはコクリと頷いた。

ニューピープル
新人類です。

チリーの脳裏に、ニコラスの言葉と姿が鮮明に蘇る。人を越えた身体能力を持ち、相手の神力を無効化する能力を持った男。チリー

の大剣を、トレイズの氷を、光秀の斬撃を一瞬にして無効化したあの能力。現段階では、対策方法はない。その事実にも、チリーは齒噛みする。

「赤石は奪われましたが、まだ俺達に希望がないわけではありませんせん」

そう言つて、カンバーはそうですね？ とミラルへ視線を向けた。

「……うん」

頷いて、ミラルはそつと自分の胸へ触れた。

「ミラルの中に……聖杯……。ゲルビアに気付かれれば、確実に前は狙われることになる」

トレイズの言葉に、ミラルは不安げな表情を見せる。が、それをかき消すように、チリーは快活な表情で言い放った。

「だったら、守りゃ良い。難しいことじゃねーよ」

チリーの言葉に、トレイズはそうだな、と微笑した。

「……ありがとう」

胸に手を当てたまま、ミラルはニコリと微笑んだ。

聖杯。東国戦争の際、一度死にかけたミラルを救った杯。白蘭の体内へ宿されていた聖杯は、白蘭の能力によってミラルの体内へと移された。聖杯については、あらかじめカンバーが調べていたらしく、ある程度は把握出来た。

聖杯保持者は、外的要因では死ぬことが出来ない。つまり、ミラルは聖杯をその身に宿している限り、寿命以外で死ぬことが出来ないのだ。

それを聞いたチリーは、東国の地下洞窟での一件をやつと理解した。偽の青蘭に殴られ、頭部を負傷したハズのミラルは、目を覚ました頃には傷痕一つなかった。それはつまり、聖杯保持者故なのだろう。

「僕らは聖杯。ゲルビアは赤石。とりあえず五分五分だよな」

「ああ。後は俺らがゲルビアから赤石ぶん取りゃ勝ちつてことだ！」
チリーとニシルに、カンバーはそうですね、と静かに同意する。

「ですが、国としてのゲルビアは強大。それに、ニューピープルと呼ばれる人を越えた存在。今までのように、ただの神力使いが相手……とは考えない方が良いでしょう」

青蘭や麗を軽くあしらうニコラスの姿が、ミラル以外の全員の脳裏を過った。

「ニューピープルに関しては謎な部分が多過ぎますね……。まあ、それを明日調べるのですが……」

ニューピープルに関してわかっていることは、あまりにも少な過ぎた。

人間以上の身体能力を持つこと、そしてニコラスとあの大男以外にも存在するということ。

「そして恐らく、ニューピープルと呼ばれる奴らは全員神力使いだろう」

「だろうね……。ねえ、トレイズが攫われて研究対象にされたことがあったよね？」

「ああ」

「もしかすると、ゲルビアの行っている神力研究って、ニューピープルと関係あるんじゃないかな……」

ニシルがそう言つと、トレイズはかも知れないな、と静かに答えた。

「神力使いを、生み出す研究……？」

ニシルの一言に、その場にいた全員が話についていけないかったチリーですら戦慄した。

「そう言えば、飛行船はどこ行つたんだ？」

しばらくの沈黙の後、不意にチリーが思い出したように問うた。

「……降りる時に説明したハズなんだが……。アイツらは一度テイスへ戻つて報告がてら物資の調達だ」

「だから降りる時荷物も一緒だったのか」

納得した表情でそう呟いたチリーを、全員が呆れ顔で見つめた。

チリー達を乗せていた飛行船は、テイテスへと向かっていた。テイテスからイレオーネ大陸、そしてそこから更に東国、そして東国からゲルビアへ……当初の予定以上の長旅だったため、物資は勿論燃料も不足した状態に陥っていた。

「ふう……」

暗い海の上を飛ぶ飛行船の操縦席、操縦士の男、エーベルは嘆息した。腕時計を見、交代まで後一時間だということを確認すると、エーベルは自分に渴を入れるかのようによし、と呟いた。

交代前にたつぷりと眠ったハズなのだが、やはり夜は少し眠い。これだから夜間は……と悪態を吐いたところで、どうにもならない眠気に抗いつつ、欠伸をしながら操縦するしかないのだ。

「眠てえ……」

呟き、大きく欠伸をした時だった。

「エーベルさん！」

勢いよく、操縦席のドアが開かれる。突然のことに、エーベルの眠気は途端に吹っ飛んだ。

「どうした……？」

「敵機です！」

「敵機だと……？」

狼狽した表情でエーベルが問うと、男は焦った様子でコクリと頷いた。

非常事態。敵機に襲われることなど、エーベルはおろか、アグレイ達ですら想定していなかった。テイテスの経済的な問題上、万が一という不確定な要素で飛行船を武装させることは出来なかった。故に、敵機への対策は

「降参か、退避……」

だが、この飛行船はそれ程速く移動出来るわけではない。退避は不可能に等しいだろう。

「何機だ？」

「一機です……それも、戦闘機」

「戦闘機……ッ！」

男の言葉に、エーベルは表情を驚愕に歪めた。

「向こうは戦闘する気満々じゃないか……ッ！」

「ど、どうします……？」

男が問うた、その時だった。

轟音と共に飛行船本体は激しく揺れた。

「ッ!？」

エーベルと男はよろめき、壁に手をつく。揺れが収まると同時に二人が嘆息すると、続けざまにもう一発撃たれたのか、飛行船は轟音と共にもう一度激しく揺れた。

「攻撃……されている……ッ！」

エーベルが驚愕している間にも、次々と飛行船は衝撃を受け、揺れ続ける。

「落ちるぞッ！」

エーベルが船が下降していることに気付いた頃には、既に遅かった。

既にこの飛行船は、破壊されていた。

エーベルが時刻を確認してから三十分程度経った頃には、既に飛行船は海へと沈んでいた。

海へ沈んだ飛行船を確認するかのように、飛行船を撃ち落とした戦闘機は周囲を旋回していたが、やがてゲルビア帝国の方角へと飛び去って行った。

とある場所で、一人の男が立っていた。金髪の、男だった。

男はポケットから、ノイズのような音を鳴らし始めたトランシーバーのような通信機器を取り出し、耳に当てる。

『ディルク様、指示通り、撃ち落としました』

通信機器から聞こえるその言葉に、ディルクと呼ばれた金髪の男はニヤリと笑みを浮かべた。

「そうか。よくやってくれた」

それだけ答えると、ディルクは通信機器の電源を切った。

全て、計画通り。

テイテスの飛行船が東国を発つ際、乗組員の一人に化けたディルクは人知れず船内に乗り込む。その後アルケスタで降り、飛行船の移動先を予め戦闘機で待機させておいた仲間へ連絡。そして飛行船を撃ち落とすことで、テイテスの連中の機動力を奪う。

まふまと、ディルクの計画通りに進んだのだ。

「そして、聖杯」

船内で耳にした情報。

「奴らの中に 聖杯保持者が存在する……！」

ニヤリと。ディルクは笑みを浮かべた。

episode 76 「Library」

知識の町、アルケスタ。大陸で……否、世界で最も巨大な図書館を有する街であり、それ故に「知識の町」と呼ばれる。世界中の知識や書物が、この街一つに詰まっているといっても過言ではない程に、アルケスタの大図書館の蔵書量は凄まじかった。

その大図書館へ、チリー達は訪れていた。

様々な建物が並ぶ街の中でも、圧倒的存在感を放つ大図書館。恐らく、アルケスタ内にある建物の中では最も巨大と言っても差支えないだろう。

大図書館は何人も人間が出入りしており、まだ早朝だというのに既に沢山の人間が入れ替わり立ち替わりに入出入りしている。

そんな大図書館に、チリーは圧倒されていた。

「デケエ……こん中、ほとんど本なんだろ……？」

「はい。アルケスタ大図書館は世界一の蔵書量を誇っており規模も世界最大ですこの大図書館の本を閲覧するためだけに世界各国から研究者達がまるで磁石に吸い寄せられるかの如く集まっていますその上この大図書館は一般人でも入ることが出来る上閲覧禁止や閲覧制限のある本が存在せずこの大図書館にある本は全て読み放題ですがしかし残念ながら盗難を防ぐためこの大図書館内の本は借りることが出来ず嚴重に警備されていますが問題ありません何故ならこの大図書館にこもり続ければ良いのですそういった研究者のために食事や入浴や宿泊など様々なサービスがあるためこの大図書館に泊まり込みで研究をする研究者が後を絶たず……」

いつものカンバーからは考えられない程の速度で、カンバーは息継ぎすらせずに大図書館に関する情報を述べ始める。あまりの勢いに圧倒され、いつもは表情を変えないトレイズすら驚愕した様子でカンバーを見つめていた。

「ちょ、ちょっとストップ！ カンバー！」

「……更にこの大図書館には考古学的に価値のある古代の文書の複製本が存在しなるとそれを閲覧することすら可能なのです心躍りますね心躍るでしょう正に知識の世界正に本の世界この大図書館こそが世界で最も価値のある建物だといっても問題ないでしょうこの大図書館でなら俺は一生を終えても良いと思っと思っています死ぬまでこの大図書館の中にも良いと思っっていますしかし残念なことに人間の寿命は短くこの大図書館に蔵書される本全てを閲覧することは不可能でありそれを可能にするためには不老不死の法を会得しなければなりませんそうか赤石を使えば良いのか赤石を利用することによって不老不死の法を得ることは恐らく可能あの強大な力を持つてすれば不老不死となり大図書館の本全てを閲覧することが可能になるということ……」

「ストップストップ！ 変な方向に行っちゃってるから！ このままだとカンバー僕らの敵になっちゃうよ！？」

ニシルの言葉はまるでカンバーの耳に入っていないらしく、カンバーは減速するどころか更にスピードを増して大図書館について……否、新たな野望について語り続けている。

「もう！ 落ち着いて！」

次の瞬間、ミラルのゲンコツがカンバーの頭上に叩き落とされた。鈍い音がして、カンバーはその場でよろめく。倒れかけたカンバーの身体は、トレイズが慌てて支えた。

「……………ハッ！ 俺は一体……………何をしていたんでしょうか……………」
正気に戻ったのか、先程の衝撃でずれた眼鏡を直しつつ、カンバーは訝し気な表情で呟いた。

「……………戻ったか」

そんなカンバーを見、トレイズは安堵の溜息を吐いた。

「何だったんだ……………」

チリーは呆気に取られた様子で、呆然とカンバーを見つめている。「すいません。大図書館を前にして興奮してしまいました」

興奮というより、暴走に近い。

「あ……」
カンバーが声を上げると同時に、カンバーの鼻から一筋の血が流れる。

興奮による、鼻血だった。

アルケスタ大図書館の中は、正に本の世界だった。
エントランスで受け付けをし、奥の図書館へ入るとそこにあるのは大量の本棚とそれに収められた本。そして机に大量の本を山積みにした研究者らしき人達だった。

壁が見えない程に設置された本棚。円筒型のこの部屋は、壁に沿うようにして螺旋階段と本棚が設置されていた。螺旋階段では様々な人々が本棚の前で本を立ち読みしているため、上るのは少し厄介そうだった。恐らく、机が研究者達によって占拠されているため、立ち読みせざるを得ないのだろう。

この部屋だけでも凄まじい本の数だというのに、ここはまだ「第一図書館」だった。

どうやらこの大図書館には「第十二図書館」まで存在するらしい。一階がエントランスと第一～第五図書館。二階が第六～第十図書館。三階が宿泊施設等と第十一～十二図書館。という風になっているらしい。

この中からニューピープルに関する本を探すのは非常に困難だと思われた。

受け付けで聞いてみたところ、研究書や研究者のまとめたレポート等は第一図書館に蔵書されているとのことだった。ニューピープルに関する本があるとすれば、第一図書館だろう。

「こう、本ばつかだと頭痛くなりそーだぜ……」

「チリーは馬鹿だもんね。本は厳しいよね」

「うっせえ小型人種！」

「いつつもそれだよな？ 他に何かないの？ 語彙だよな、語彙が少ないんだよね？ そうだね？ チリー？」

「誰だよお前は！？ どっかで聞いたようなうぜえ口調で喋んな！」
怒鳴るチリーの肩を、ミラルがトントンと叩く。

「ねえ、ちよつと」

「あア？」

「見て」

ミラルが指差した方向は、研究者達が本を読みふけている机の方だった。

「げ……」

ギロリと。いくつもの視線がチリー達を睨みつけていた。殺気すら感じるその視線に、チリーはたじろいだ。

「す、すいませんでした！」

ふかぶかと、チリー達は頭を下げた。

第一図書館で本を探し始めること一時間。ニシルは螺旋階段に座り込み、もう無理、と弱音を吐いた。

「大丈夫？」

本を片手にミラルが問う。

「あんまり。でも僕よりアイツのがヤバいと思う」

ニシルが指差した方向には、非常に間の抜けた顔でダウンするチリーの姿があった。本を片手に階段の上に倒れ、ピクピクと痙攣している。そんなチリーの上を、本を持った人達が邪魔そうに表情を歪めながらまたいで行く。

「あちゃー……」

見ていられない、といった様子でミラルは右手で片目を塞ぐ。

「おい。バカチリ大丈夫かー」

ニシルの声も届かないのか、チリーは痙攣しながらブツブツと何

か呟いている。

「駄目だね。チリーはもう使い物になんないよ……」

ニシルは溜息を吐くと、チリーの元へ歩み寄り、チリーの持っている本を元の本棚へ戻す。

「おい、生きてるかー」

「本とかマジ勘弁……」

呟き、チリーはその場で気を失った。

そんな彼らとは対照的に、カンバーはチリー達より遙か先で本を閲覧していた。片っぱしから本を手に取っては戻し、ニューピープルに関する本を探している。トレイズも負けず劣らずの速度で、本を探している。

それから更に数時間後、カンバー以外の四人は三階のレストランで食事を取っていた。

図書館でのダメージを回復するかのようになり、チリーは凄まじい勢いで食べ物をお口の中へと運んでいる。

ちなみに、四人はカンバーも誘ったのだが、その時のカンバーの言葉が……

「いえ、お腹いっぱいです。本で」

という常人からすれば明らかに常軌を逸していると判断出来る一言だったため、そのまま図書館に残してレストランへ向かうことになった。

「カンバーじゃないと無理じゃない？ あの中で本を探すのは」

そう言ったニシルに、トレイズは静かに頷いた。

「かも知れない」

黙々と作業していたものの、流石にトレイズにとっても厳しかったらしい。

「ふあんふおふあふあふいふあんふえん！ （本とかマジ勘弁！）」

「はいはい、食べ終わってから喋りなさい」

チリーを適当にあしらいつつ、ミラルは嘆息する。

「ミラル、お前から聞いた話だと、確かアルケスタには研究所がなかったか？」

トレイズの問いに、ミラルはコクリと頷いた。

「ええ。確かあったわ。あの研究所で事件が起きて以来、お父様は変わってしまった……」

「その研究所、ニューピープルと何か関係があるかも知れないな」
トレイズの言葉に、ニシルはなるほど、と感嘆の声を上げた。

「調べに行ってみる価値はあるよね」

「確か、閉鎖されているだけでまだ取り壊されていないはずよ」

「なら行ってみようよ。本を探すよりマシ……じゃなくて、何か有力な情報があるかも知れないし」

ニシルがそう言うと、そうだな、とトレイズは頷いた。

「んじゃ、行ってみようぜその研究所。俺はやっぱり本で調べるより、そーいうのが性に合うしな」

ニヤリとチリーは笑みを浮かべ、使い終わったフォークとナイフを皿の上へ置いた。

ゲルビア帝国立遺伝子研究所は、既に閉鎖された研究所だった。中に事件を起こした人工生命体が閉じ込められているため危険、という名目で未だ取り壊されることなくアルケスタに存在し続けている。研究所付近には立ち入り禁止を示すロープが張られていたが、チリー達は大して気にした様子もなくそれらを乗り越え（もしくはくぐり）、研究所の中へと入っていった。

相談の末、チリー、ミラル組とニシル、トレイズ組に分かれることとなった。

「これ、動くかな……？ ボタンが一つしかないっていうのも気になるし……」

奥の方で、エレベーターを発見し、ミラルは思案顔でエレベーターを見つめる。エレベーターの傍にはボタンのついたパネルが存在するが、ボタンは下を示す矢印の描かれたものだけで、他のボタンは一切ついていない

「さあな。とりあえず動かしてみよーぜ」

唸りつつ考え込むミラルとは対照的に、あまり考えようとせず、チリーはボタンへ手をかけた。

「あ、アンタ！ 迂闊に押したら」

ミラルが言い終わるより先に、チリーはボタンを押していた。

「押しちまっただぜ」

「押しちまっただぜじゃないわよバカー！」

得意気な笑みを浮かべるチリーの頭に、ミラルがゲンコツを喰らわせるのと、エレベーターのドアが開くのはほぼ同時だった。

「動いた……」

「痛ってーな……動いたから良いだろー」

ブスツとした表情でチリーは呟いたが、ミラルは適当にあしらい、エレベーターの中へ足を運ぶ。それに、チリーも付いて行く。

「矢印が下だったってことは、地下に行くってことかしら」
「だろーな。この研究所、外から見た感じだと二階とかはなさそうだったしな」

そうね、とミラルがチリーの言葉に賛同するのとはほぼ同時に、エレベーターのドアはゆっくりと閉じた。古い上に整備されていないため、当然といえば当然なのだが、あまり調子は良くないらしい。ドアが閉じてしばらくすると、エレベーターは降下を始めた。

一分と経たない内にエレベーターは停止し、ドアがゆっくりと開いた。

薄暗い廊下だった。

足元の電球が明かりになっているため、辛うじて歩ける廊下だ。明かりとなつている電球すら光が弱いため、少しでも気を抜けば転んでしまいそうな程の暗さだった。

「行くぞ」

「う、うん……」

あまりの暗さに多少怖気づきつつも、ミラルがゆっくりとチリーの後を付いて行く。しかし途中でピタリと、チリーは歩を止めた。
「どうしたの？」

スツと。チリーはミラルの方へ右手を差し出す。

「繋ぐぞ。狭いから大丈夫そうだが、見失うと困るだろ？」

「だ、大丈夫よっ！ 別に……そんなことしなくたって……」

頬を赤らめて手を振って拒否するミラルの姿は、前を向いているチリーには見えない。

「そっか。お前が大丈夫なら良いや」

そう答えると、チリーは呆気なく手を戻す。

その様子にやや慌てつつ、ミラルはチリーの右手を握った。

「ん？」

「ま、まあ……アンタを見失うのは困るから……」

そう言って再び頬を赤らめるミラルの手を、チリーは強く握り返した。

しばらく廊下を歩いて行くと、チリーの足に何かが当たった。

「何だ……?」

訝しげな表情でチリーは足元へ視線を向ける　と同時に、絶句する。

「チリー……?」

「見るな!」

後ろからチリーの足元を除きこもつとするミラルに、チリーは制止の声をかけたが既に遅く、ミラルの視線はチリーの足元へ向けられていた。

「何……これ……っ!??」

左手を口元に手を当て、チリーの手を握ったままミラルは後ずさる。

チリーの足元に転がっていたのは、白骨化した死体だった。白骨化したその死体の右手には、トランシーバーらしき機器が握られていた。

恐らくこの研究所の研究員の一人であろうことは容易に想像出来た。

「……行くぞ」

静かにそう告げ、前へ進むチリーの手を、ミラルは一層強く握り締めた。

しばらく進むと、開け放たれたままになっているドアへ辿り着いた。その先は明かりがなかったが、薄暗い廊下を歩いて来ていたため、二人の目は随分と闇に慣れていた。

やや緊張した面持ちで、二人はその先へと歩いて行く。

「ミラル、見えるか?」

「うん。なんとか……」

部屋に入り、最初に目に入ったのは巨大なカプセルの破片だった。何かが入っていたのだろうそのカプセルの周囲には様々なコードが張り巡らされていた。

そして部屋の入り口付近には、何体もの白骨化した死体が放置されていた。

「これは……」

あまりに凄惨な状況に、ミラルは目を背けた。

カプセルの前にも、白骨化した死体が横たわっていた。他の死体は白衣を身に着けているが、その死体だけはまるで王族のような衣服を身に着けていた。

ゆっくりと。二人はその死体へと歩み寄る。

「この服……」

「見覚えがあるのか？」

コクリと。チリーの問いにミラルは頷いた。

「お父様が、よく着てた……」

その死体の首には、銀色のロケットペンダントが提げられていた。ミラルは身を屈め、そのペンダントを手に取った。

「ミラル……？」

チリーの言葉には答えず、ミラルは恐る恐るそのペンダントの中を開いた。

「っ！」

その中に収められた写真に、ミラルは絶句する。その様子に気が付き、背後からはチリーはその中を覗き込む。

写真に写っていたのは、優しく微笑んでいる男女。そして、その真ん中には、栗色の髪をした小さな女の子が写っていた。

紛れもなく、幼い頃のミラルの姿であった、

「これって……お父様が……大切にしてた……」

震える手でペンダント持ったまま、ミラルは呟いた。

白骨化した、王族のような衣服を身に着けた死体。そしてその死体の首に提げられていた、ミラルの父　ハーデンの持ち物。

「この死体って……まさか」

ゴクリと。チリーは唾を飲み込んだ。

「お父様……！」

そこに横たわる死体は、ミラルの父でありゲルビア帝国国王ハーデンの物だった。

「お、おい！　ちよつと待てよ！　意味わかんねえじゃねえか！

もしそれがハーデンの死体なら……なら、今ゲルビア帝国で好き勝手やってるハーデンは何者なんだよ！　偽物だっつーのかよ!？」

「わかんない……わかんない……けど……」

嗚咽混じりに、ミラルはそのペンダントを握り締めた。

「私は……この人が……お父様だと、思う……」

「ミラル……」

ミラルの思いは、チリーでも察することが出来た。

自分の正体がゲルビア帝国の王女だと知り、自分達の敵が父親だと知った時、ミラルがどんな思いだったか。口にも、態度にも出しはしないものの、ミラルがどれ程複雑な心境だったかを、チリーですら少なからず察することが出来た。

そして今も。

父の死体の発見。それは、現在のゲルビア帝国国王であるハーデンの存在を真つ向から否定するものだった。

優しい父は死に、代わりにそっくりな何者かが父になり替わっている。この事実、ミラルの父が変貌し、あのような人間になったのではないと証明するための重大な証拠でもあった。

父の死を悲しむべきか。父の無罪を喜ぶべきか。

ミラルの中でない交ぜになった感情は溢れだし、涙となってこぼれ落ちた。

「お父っ……様っ……!!」

ペンダントを握り締め、嗚咽混じりに父を呼ぶミラルを、チリー

はそつと抱き締めることしか出来なかった。

ニシルとトレイズはチリー達と別れた後、各研究室を探索していた。

しかし、大した成果は得られない。設置されている機械は軒並み動作せず、情報を得ることが出来ない。資料等も、研究に関連するものではあっても、ニューピープルに関して詳しく書かれた物は存在しなかった。

所長室。

その部屋を最後に、ニシルとトレイズは合流場所である入口へと戻ることになった。

所長室の中は実に簡素で、必要な物以外は一切置かれていない、というような様子だった。

ここにある物も、他の部屋にある物と大差がなく、二人は嘆息する。

「何にもないね。チリー達の方へ行けば良かったかも」

冗談めいた笑みを浮かべるニシルに、トレイズはだな、と微笑した。

「ちよつと休まない？」

そう問いはしたものの、ニシルはトレイズの返事を待たずに傍にあった、この部屋の主が使っていたであろう椅子へ腰掛ける。

「その白衣のポケットの中も、一応調べておけ」

トレイズはそう言って、椅子にかけられている白衣を指差した。

「うん。何もなければうけどねー」
半ば諦め気味の表情で、ニシルは白衣のポケットの中へ手を突っ込んだ。

「お、何か入ってる」

白衣の中に入っていた物を、ニシルはやや乱暴に引っ張りだした。
「手帳……かな？」

ニシルの手に握られていたのは、一冊の手帳だった。

「この所長の物が……」

「こ、これ……！」

手帳を眺めていたニシルが、突如として表情を一変させる。

「どうした？」

すぐに、トレイズも手帳へ視線を移す。

「この名前って……」

手帳の表紙には、「ラウラ」と書かれていた。

音を立てて、写真立てが床へ落下した。

すぐにキリトは写真立てを拾い上げる。落下の衝撃で、写真立てのガラス部分が砕けており、そのせいでキリトの指に小さな破片が突き刺さっている。キリトの指には、薄らと血が滲んでいた。

写真に写っているのは若き日のキリトと、その隣で赤ん坊を抱いている白髪の美しい女性だった。

家族の、写真。

あの子を、チリーを外の世界に出さないで。きっと苦しむことになる。約束して、チリーをこの島で育て続けるって。

それが、死ぬ前にキリトがラウラと交わした約束だった。

結果的に、その約束は破られた。チリーはキリトを倒し、ニシル、ミラルと共に外の世界へと旅立ったのだ。

「チリー、ニシル……」

二人の「息子」の名を呟き、キリトは嘆息する。

嫌な予感が、していた。

地下室を出、チリー達が待ち合わせ場所に到着する頃には、ミラルは既に泣き止んでいた。待ち合わせ場所にはチリー達より早くニシルとトレイズが到着しており、一冊の手帳を真剣な表情で眺めながら待機していた。

「あ、二人共。何か見つかった？」

「ああ……ちよつと、な」

言葉を濁すチリーに、ニシルは訝し気な表情を見せる。

「良いの、チリー。私が説明するから」

思い切り泣いて吹っ切れたのか、ミラルは淡々と地下で発見したハーデンの死体について二人へ説明した。説明しながらミラルは首

から下げたペンダント　本物のハーデンが身に付けていたあのペンダントを、しっかりと握りしめていた。

「……なるほど。ということは、現在ゲルビア帝国の王として君臨するハーデンは全くの別人、ということになるな」

「そうだね。それだと、ハーデンが事故以来人が変わっちゃったっていうのも納得がいくね」

うんうんと納得したように頷くニシルへ、ミラルはそうね、と相槌を打った。

「そっちは何か見つかったのか？」

チリーの問いに、ニシルは真剣な表情で頷くと、先程トレイズと共に眺めていた手帳をチリーへ差し出した。

「手帳……？」

「ああ。この研究所の所長室で発見したものだ」

チリーはその手帳をしばらく眺め　そして表情を一変させた。

「おい……何だよこれ……」

「チリー？」

手帳を持つ手をブルブルと震わせながら、驚愕の表情を見せるチリーの後ろから、ミラルはその手帳を覗き込んだ。

「こ、これって……」

ラウラ。

手帳には、そう書かれていた。

「冗談ならこの辺にしとけよ……ッ！」

「冗談なんかじゃないよチリー。その手帳には、最初っからそう書いてあった。僕らは何もしてない」

手帳に書かれているその名前は紛れもなく　チリーの母、ラウラのものだった。

「何でお袋の名前が……こんなところに……ッ！？」

チリーが幼い頃　まだニシルと出会ってすらない頃に、チリーの母、ラウラは命を落としていた。チリーとキリトが見守る中、ラウラは静かに息を引き取ったのだと、チリーはキリトに聞かされて

いる。

「中は、見たの？」

ミラルの問いに、ニシルは静かに首を左右に振った。

「この手帳が所長室にあったということは、ラウラという女性はこの研究所の所長だったということになる」

「お袋が……ゲルビアの研究者……？」

静かに告げたトレイズへ視線を向け、チリーはそう問うた。

「もしこの研究所がニューピープルと関係あるのなら、チリーの母さんはその研究に携わってたってことになるよね」

「名前が同じだけかも知れねえ！」

そう怒鳴りつけるチリーへ、トレイズは一枚の写真を差し出した。

「所長室で発見した写真だ」

そこに写っているのは、紛れもなくチリーの母、ラウラの姿であった。その隣には、現在より若いキリトの姿がある。

間違いなく、この手帳の持ち主はチリーの母だった。

「嘘……だろ……？」

信じられない、といった表情で、チリーは写真を凝視する。

チリーの心境は、想像に難くなかった。

亡くなっている自分の母親が、現在自分達が敵対しているゲルビアの研究者だった上に、ニューピープルの研究に携わっていた可能性がある。

ショックを受けるのも、当然だった。

「中……見ようぜ」

呟くようにそう言って、チリーはトレイズへ手帳を差し出した。

「わかった。俺が読もう」

ゆっくりと。トレイズは手帳を開いた。

ここに、^{ニューピープル}新人類計画に関するレポートを書いていきたいと思う。レポートとは名ばかりの雑記だが、個人用なので問題ない。

新人類計画とは、ゲルビア帝国が所持する小赤石を利用し、膨大な神力を持った新たな人類を創り出す計画である。

小赤石とは、数世紀前の「赤い雨」により生成された小さな赤石であり、赤石程ではないが内に膨大な神力を秘めている。

研究の結果、小赤石及び赤石は人体に宿すことで効力を発揮することが判明しているが、通常の肉体では拒絶反応を起こすことが判明している。恐らく、聖杯と呼ばれる赤石を利用するための杯は、人体に宿された物だと推察出来る。

拒絶反応は小赤石、及び赤石に限った物ではなく、神力そのものが人体とは相容れない力であることも研究でわかっている。神力の力が強ければ強い程、その力は肉体と拒絶反応を起こし、身体機能を奪う可能性があり、最悪の場合死に至る場合すらある。

この新人類計画では、小赤石の膨大な神力に耐え、拒絶反応を起こさない肉体を一から創り出す計画とも言える。この研究の成果次第では、小赤石を使わずとも強力な力を持った人間を一から創り出すことも可能になると考えられる。

二体のニューピープルの創造が決定された。一体は陛下の要望により、陛下と同じ姿をした成人男性のニューピープル。もう一体は、所長である私の遺伝子を使い、赤ん坊のニューピープル。どちらも体内に小赤石を宿している。

研究は滞りなく進行。

この研究の終了後、恐らく我々は小赤石を宿さないニューピープルの研究に取りかかるだろう。ニューピープルの身体スペックは常軌を逸しており、人類を超越した存在となるだろう。特に小赤石を

宿したこの二体は、「究極のニューピープル」となり得る。

我々は彼らを、髪の色にちなんで陛下の姿をしたニューピープルを「黒き超越者」、赤ん坊のニューピープルを「白き超越者」と呼ぶ。

二体のニューピープルから膨大な神力の反応。どうやら小赤石の拒絶反応に耐えることが出来たようだ。この段階で既に彼らは完成したと言える。

近々、陛下が視察にいらっしゃるようだ。

「黒き超越者」をご覧になった陛下は随分とご満悦だった。陛下は、この研究を我々にさせている理由を「好奇心」だと仰った。

考えてみれば、我々研究者は全員その「好奇心」の塊のようなものだった。

二体のニューピープルが完成する。

明日、陛下が完成したニューピープルをご覧になるためにこの研究所を訪れることになっている。

「黒き超越者」は、陛下の元へ。そして「白き超越者」は私の元で預かることになっている。

キリトと、「白き超越者」の人間としての名前について話し合ったが、良い案は浮かばなかった。

記述は、そこで止まっていた。恐らくこの後、例の事件が起きた

のだと考えられる。

しばらく、静寂が訪れた。

手帳に記された真実に、誰もが驚きを隠せなかった。

白き超越者。

聞き覚えのある言葉に、チリーは表情を歪めた。

「白き超越者」、やはり赤子から育てたのは失敗でしたか……。

あの時、赤石の眠る東国の地下洞窟で聞いた、ニコラスの言葉がチリーの脳裏を鮮明に過った。

あの時確かに、ニコラスはチリーのことを「白き超越者」と呼んだ。そのことをミラルも覚えているのか、チリーを見つめたまま驚愕の表情を浮かべている。

「何だよ……『黒き超越者』と『白き超越者』って……!」

吐き捨てるように、ニシルが言った。

「体内に……小赤石……それって、テイテスの『核』レベルの力を体内に宿してることじゃないか……! それも、こないだのニユーピープルより強いんだろ……? そいつら二体って……ッ」

ギョツと。ニシルは拳を握り締めた。

「化け物じゃないか……ッ!」

化け物。

その一言がチリーに、まるで鋭い剣のように突き刺さった。

「化け……物……?」

確かに、チリーさんの身体能力は全体的に異常な気がしますね……。

東国で、カンバーに言われた言葉がチリーの脳裏を過る。

常軌を逸した身体能力を持つ、究極のニユーピープル。ラウラの遺伝子によって生まれた赤ん坊 白き超越者。チリーの、異常な程に高い身体能力……。バラバラだったピースが、まるでパズルのように重なり合い、一つの結論へと辿り着く。

「そっか……俺……」

チリーの身体が、ブルブルと震えた。

「化け物だったんだ」

自嘲めいた言葉が、チリーの口から漏れた。

episode 79 「Not alone」

「あ、おい、チリー！」

ニシルの呼ぶ声も聞かず、チリーは研究所を飛び出した。ミラルとトレイズの声も聞こえたが、それを振り切るかのように走り出した。

俺が、化け物……！

知りたくなかった。知らなければ良かった。

普通だと思っていた。テイテスで生まれ、普通に育てられたただの少年だと思い込んでいた。

しかし、違った。

「俺は……ッ」

体内に小赤石を宿す、究極の存在。人類を超越した新人類。（ニュービーブル）

人間じゃない。

人間を越えた身体能力、体内に秘められた膨大な量の神力。

化け物。

「『白き超越者』……ッ！」

それが、チリーの正体だった。

町の中を三人で捜し回ったが、チリーは見つからなかった。

研究所を飛び出したチリーを追いかけていたのだが、町の中に入った途端に見失ってしまったのだ。

「どこ行っちゃったのよ……」

辺りを見回してチリーを探しつつ、不安げな表情でミラルは呟く。

「ごめん、僕のせいだ……」

嘆息し、ニシルはしゅんとうなだれた。

化け物じゃないか……ッ！

あの時言った自分の言葉が、チリーを傷付けた。そういう風に、ニシルは考えていた。

チリーが「白き超越者」だとニシルが知ったのは、チリーが飛び出した後だった。ミラルは洞窟でニコラスがチリーに対して「白き超越者」と言っていたことをニシル達に話したのだ。

ニューピープルの研究所の所長だったラウラ、ラウラの息子であるチリー、ニコラスの言葉、チリーの身体能力。チリーが「白き超越者」だと結論を出すには、十分な事実だった。

「一度図書館に戻るぞ」

「何でだよ!? チリーはまだ見つかってないんだぞ!」

静かにそう言ったトレイズに、ニシルは声を荒げた。

「搜索を止めるわけじゃない。カンバーの手を借りるだけだ。人数は多い方が良い」

「あ、そっか……ごめん」

「いや、気にするな」

謝るニシルにそう答え、トレイズは嘆息する。表情の変化こそ乏しいが、彼なりにチリーを心配している証拠だった。目に見えて冷静さを欠いているニシルとは対照的に、トレイズは努めて平静を装っていた。

「チリー……!」

ギョツと。ミラルは拳を握り締めた。

図書館内へ戻ると、カンバーは変わらず本を読み続けていた。午前中より、本棚十本分程先の本棚の本を読んでいたが……。

本へ熱中し続けるカンバーから何とか本を取り上げ、ミラル達はカンバーを連れて宿へと戻った。戻る途中、しばらくカンバーは名残惜しそうな顔をしていたが、チリーが失踪したことを話すと、事の重大さを察したらしく、カンバーは真剣な表情に切り替わった。

「それで、この手帳が研究所の所長であるラウラさんの物なんですね？」

トレイズとカンバーの部屋で、カンバーは自分のベッドへ腰掛けると、ミラル達へそう問うた。

「ああ。そしてラウラは……チリーの母だ」

トレイズのその言葉に、カンバーは表情を一変させた。

「チリーさんの母親が……ゲルビアの研究者……ですか」

そう呟き、カンバーは手帳を開く。そしてそこに書かれた文字を、一字一句逃すことなく真剣に熟読する。

数分の沈黙の末、読み終わったカンバーは手帳をトレイズに手渡し、静かに嘆息する。

「これで、チリーさんの身体能力や、ザハールとの戦闘で見た打たれ強さにも説明がつかますね……」

カンバーの言葉に、ミラル達はコクリと頷く。

「僕が悪いんだ……。『化け物』だなんて……言つべきじゃなかった……！」

拳を握り締め、歯噛みするニシル。

「とにかく、チリーさんを捜しましょう。町の外には出ていないハズです」

カンバーの言葉に、全員が静かに頷いた。

日は既に落ち始めていた。次第に暗くなっていく景色に、チリーは自分の心情を重ねた。

化け物。

その言葉が、チリーの脳内から片時も離れようとはしなかった。思う度に、悲しさとも悔しさとも取れないような感情が溢れ出す。

自分は母から生まれたのではなく、母によって創られたのだ。血

など、誰とも繋がっていない。キリトでさえ、義理の父と大差がない。

独りだった。

創られた化け物である自分は、独りきりだった。

「いや、独りじゃねえな……。化け物の、仲間だ」

能力を無効化し、不敵に笑うニコラス。巨大な腕のドリルで地面を掘る、あの大男。そして 元凶である現在のハーデン、「黒き超越者」……。チリーは彼らと同じ、「化け物」だった。「化け物」の中でも、ハーデンと並ぶとびっきりの化け物。それが、自分の正体だった。

もう、皆の元へは戻れない。否、元々いるべきではなかったのだ。化け物と人間が、相容れるはずがない。強過ぎる力は、やがて周囲を破壊する。最初から、交わるべきではなかったのだ。

自分の全てが人と違って見えた。

顔も、髪も、手も、足も、こうして今思考を続けている脳も……人間じゃない。

いつの間にか辿り着いた路地裏に、チリーは座り込んだ。建物の隙間から、月光が差している。いつの間にか日は完全に落ちてしまっていたらしい。

周囲にはゴミが散らかっており、周囲の壁には様々な落書きがあった。

「この汚い場所で、化け物は化け物らしく静かに死ねば良い」
ボソリと。チリーは静かに呟いた。

「チリー」

声が、聞こえた。

あれからどれ程の時間が経っているのかわからない。どうやらいつの間にか眠ってしまったようだった。

目を開け、声のした方向へ視線を向ける。

「ッ！」

「チリー、捜したのよ……」

そう言っただけ微笑んだのは、ミラルだった。

「帰ろう？ 皆待って」

チリーへ手を差し伸べ、ミラルが言いかけた時だった。

「来るなッ！」

勢いよく、ミラルはチリーによって弾かれた。

「え……っ？」

弾かれた右手を見つめ、啞然とするミラルをチリーは鋭く睨み付けた。

「余計なお世話なんだよッ！ 頼んでもねえのに捜しに来やがって！ 何が帰ろうだよ！ ふざけんなッ！ 俺には……俺には」

チリーの言葉は、途中から嗚咽混じりになっていた。

拳を握り締め、チリーはミラルから視線を逸らしてうつむいた。

「帰る場所なんて……最初からねえんだよ」

温かな滴が、チリーの目からこぼれ落ちた。

「化け物なんか構ってねえでどっかに行っちゃえよ！ 独りにしてくれよ……ッ！ どうせ俺は……独りだ……！ 親すらいない、

創られたただの化け物なんだよ……ッ！」

しばらく、その場に静寂が訪れた。チリーはうつむいたまま顔を上げず、ミラルは黙ったままチリーを見つめている。

「早く……どっか行けよ……」

沈黙を破り、チリーは静かにそう言った。

「チリー」

ミラルの言葉に、チリーは反応を示さない。うつむいたまま、ただ黙っている。

「チリー、顔上げなさい」

どこか怒ったような口調で、ミラルはそう言った。

「うるせえ。どっか行けっさつきから」

顔を上げ、チリーが言いかけた時だった。

次の瞬間、チリーの頬へミラルの平手打ちが直撃した。

乾いた音が、路地裏の中で響いた。

「アンタの……アンタのどこが独りなのよっ!？」

ミラルのその言葉に、チリーは怒鳴ろうとした口をつぐんだ。ミラルのその言葉に込められた思いを、感じ取ることが出来たからだ。母は目の前で殺され、父は化け物になり替わられ、大切にしていた人は自分を逃がすために命を落としている。そんなミラルの言葉だからこそ、チリーは重く受け止めることが出来た。

俺なんかより、ミラルの方がよっぽど独りじゃねえか…

…!

「同情したような顔しないでっ! 私は、独りなんかじゃない!」

「ミラル……」

「おじさんとおばさんもいる! ニシルも、トレイズも、カンバーも、青蘭だって……それに……チリーが、アンタがいるから……っ!」

目に涙を溜め、嗚咽混じりになりながらもミラルは言葉を続ける。「だから私は、独りなんかじゃない! アンタは……」

アンタは、どうなの? そう問うて、ミラルは泣きじゃくり始めた。溢れ出る涙を拭いながらも、ミラルはチリーを真っ直ぐに見据えていた。

「俺は……」

本当に、独りなのか? 自問すると同時に、何人もの顔がチリーの脳裏を駆け巡る。

キリト。ニシル。トレイズ。カンバー。旅の仲間や、腹が立って仕方がないハズの青蘭。そして ミラル。

今まで自分を支えてくれた、助けてくれた人々の笑顔が、チリーの心を満たしていく。

受け入れられなくなっただけだった。

自分が化け物だと、受け入れられなかった。だから独りだなんて思ひこんで、死のうとして、支えようとしてくれる人達を遠ざけて……。

最初からわかっていたはずだった。

独りでも、一人でもないこと。

「アンタは…… チリーよ……」

呟くように、ミラルは涙を拭いながら言った。

「化け物だろうと人間だろうと関係ない……。 チリーは、チリーじゃない」

化け物である前に。

人である前に。

チリーだった。

「チリーがチリーだってことに、変わらないじゃないの……！」

それは、存在の肯定だった。

自分が化け物だと、いてはいけない存在だという否定を打ち消す、肯定の言葉だった。

「ミラル……」

辛いのは、誰だ？ 自分だけか？ 遠ざけられた相手は、辛いといとも思っただのか？

自問を繰り返し、チリーはかぶりを振った。

「俺は……」

チリーが、言いかけた時だった。

「チリー！」

聞き慣れた声が、チリーの耳に届いた。視線を向けると、そこに立っていたのはニシルだった。その後ろには、トレイズとカンバーも立っている。

三人共が、どこか安心した表情でチリーへ視線を向けていた。

「…… 捜したぞ」

そう言って、トレイズは安堵の笑みを浮かべる。

「見つかって良かったです……」

カンバーはそう言って、胸をなで下ろした。

「チリー……その……」

言いにくそうにどもった後、ニシルは意を決したかのように表情を変えた。

「ごめん。化け物だなんて」

独りでは、なかった。

心配してくれる人がいる。仲間がいる。それなのに遠ざけて、独りだと思いこんで。

俺は、馬鹿だ。

いつも言われるが、今日程自分を馬鹿だと思ったことはない。

「……気にすんなよ」

そう答え、チリーは笑みを浮かべた。

そしてゆっくりと立ち上がる。

「チリー……？」

「ありがとな、ミラル。ありがとな……皆」

ミラルとニシル達へ交互に視線を向け、チリーは大きく息を吸い込んだ。

「俺はッ！ ニューピープルでも、『白き超越者』でも、化け物でもねえ！ 俺は」

声高らかに叫ぶ。自分を。己という存在を。

「俺は俺だッ！ チリーだッ！ 文句あるかこの野郎ッッ！」

チリーの言葉に、その場にいた全員が笑みを浮かべた。

「……ないわよ、馬鹿」

トンと。ミラルは自分の額を、チリーの胸元へ当てた。

episode 79 「Not alone」 (後書き)

ここまでで「The Legend Of Red Stone」
第二部完結です。

恐らく第二部で伏線のほとんどが回収されたと思います。(え、何
これ意味わかんないけど? って部分がありましたら是非感想欄
へ)

これからしばらく連載を休止し、その後第三部の連載を開始しよう
と思っています。

これからも、「The Legend Of Red Stone」
をよろしくお願いいたしますm) (m

episode 80 「Revenge - 1」

赤石。数百年前、大陸に降り注いだ「赤い雨」の結晶である赤石は、内に強大な神力を秘めており、神力の塊と言っても差し支えない。その力を利用するために、聖杯と呼ばれる杯が存在する。赤石は、聖杯の中へ入れることで初めてその力を自在に操ることが出来るのだ。

赤石と聖杯。この二つを手中に収めれば、世界を手にする事さえ可能だと言っても過言ではない。

赤石の伝説「The Legend Of Red Stone」

……。

アルケスタの宿屋に、チリー達は未だ滞在していた。ニューピールと、究極のニューピール、いくつかの疑問をアルケスタで解消したチリー達は一度テイテスへと帰った飛行船を待っていた。物資の調達のために帰っただけなので、もう既にアルケスタへ戻ってきていても良い頃なのだが、チリー達がアルケスタを訪れてからもう一週間近く経つというのに、どういうわけか一向に飛行船は戻ってこない。

チリー達は、暇を持て余していた。

チリーとニシルは退屈そうにベッドへ寝そべっており、トレイズとミラルは部屋に置いてあるチェスで真剣勝負を繰り広げている。カンバーはたまに部屋に戻っては来るものの、アルケスタに来てからほとんどの時間を大図書館で過ごしている。恐らく、アルケスタで最も時間を有意義に使っているのはカンバーだろう。

「チエツクメイトだ」

コトリと、駒を動かす音がした。トレイズが笑みを浮かべると同時に、ミラルが落胆した表情で小さく溜息を吐いた。

「駄目ね……全然勝てない……」

「いや、ここ数日で随分強くなった。もう少しやれば俺にも勝てるようになるハズだ」

ガツクリと肩を落とすミラルへ、トレイズは柔らかな表情を浮かべた。

出会って間もない頃は表情の変化が乏しかったトレイズだが、いつの間にか仲間内では笑顔を見せるようになっていた。今の彼に、最初の頃のような近寄り難い雰囲気はないと言っても良いだろう。

「チエスか……暇潰しになるなら僕もやってみよっかなあ」

「やめとけやめとけ。クソゲーだぜアレ」

興味深そうにチエス盤へ視線を向けるニシルへ、チリーは呆れたような表情で言い放つ。

「チリーの頭が弱いだけだろ。僕ならもうちょっと上手くやれるね」
「！」

「誰の頭が弱いつて……？」

「お前のその白い頭だよ」

「ちっせー分頭に色々詰まってるんだなチビ小型人種」

「そうだね。頭空っぽにしてまで大きくなりたいとは思わないよ」

「詰まってるモンが脳味噌とは限んねーしな。意味ないものが詰まった頭な上にチビとかやってらんねーよ」

ギラギラとした視線で睨み合う二人を見、ミラルはまた始まった……と呟いて嘆息する。最近、この二人の喧嘩はレベルが上がっているように感じる。前は少し罵り合った後はすぐに小突き合い、という流れだったのだが、最近は今のようになんげな言葉でお互いを罵り合うようになってる。暴力には発展しないものの、ギスギスした空気が非常に心地悪い。

「はいはいそこまで。退屈で苛立ってるからって、イライラを二人

でぶつけ合うのはやめなさい」

「だってよオ……………」

不満げに、チリーが言葉を漏らした時だった。

突如として部屋のドアが乱暴に開けられ、部屋の中へ五人の兵士が入り込む。武装した彼らは銃をこちらへ向け、ピタリと制止した。

「何なのよアンタ達……………っ!？」

ミラルの言葉には答えず、真ん中の兵士がチリーの寝そべっているベッドへと歩み寄り、ギロリとチリーを睨みつけた。

「ンだよ……………?」

「チリーだな?」

「だったらどうだってんだよ」

身体を起こし、負けじと睨み返すチリーへ兵士は銃を向けた。

「ゲルビア帝国国王から直々に殺害命令が出ている」

「な　　ッ!？」

兵士の言葉に、その場にいた全員が驚愕した。

「嘘でしょ……………!?!？」

口元に手を当て、ブルブルとミラルは震え始めた。ニシルやトレイズも、表情に驚愕の色を隠せない。

「……………上等じゃねエか」

不意に、チリーは不敵な笑みを浮かべた。

「……………何イ?」

兵士が言葉を発すると、チリーの蹴りが兵士の銃を蹴り上げるのはほぼ同時だった。

「　　ッ!」

虚を突かれた兵士が目丸くしたのを見、チリーは薄らと笑みを浮かべて兵士の腹部へ右拳を叩き込んだ。

「貴様ッ!」

一斉に、銃口がチリーへと向けられた。

「げ……………」

チリーが呟くと同時に、四つの銃口から同時にチリーへ向けて弾

丸が放たれた。

「チリー！」

ミラルの声は、金属音でかき消された。

「……………ツ……………神力使い……………！」

兵士の一人が、口惜しそうに舌打ちする。

「危ねえなコラ」

咄嗟に大剣を出現させたチリーは、その大剣に身を隠すことで全ての弾丸を防いだのだ。チリーの身の丈程もある大剣は、身を隠すには十分な大きさだった。

「うらアツ！」

声を上げると同時に剣を消し、チリーはベッドから跳び上がって兵士の一人へ跳び蹴りを喰らわせた。叫び声を上げて昏倒する男の傍では、ニシルとトレイズの手によって他の兵士達が一人、また一人と倒されていく。

わずか数分の内に、五人の兵士は全滅させられていた。

「直々に殺害命令って……………どういうことだよ……………！」

「さあな……………。だが、これ以上この宿にはいられないな」

トレイズの言葉に、チリー達は静かに頷いた。

適当に会計を済ませ、部屋の中に気絶した兵士達を残したままチリー達は宿屋を後にした。

「なるほどね……………」

宿屋を出た後、建物や壁の所々に張られているポスターを見つつニシルは呟いた。

「道理で視線を感じるわけだぜ……………」

指名手配と大きく書かれたポスターに、チリーの顔写真が大きく貼られていた。いつ撮られたのかはわからないが戦闘中に撮られたらしく、写真のチリーは大剣を構えていた。

「見つけた際は殺害、もしくは拘束……………穏やかじゃないね」

静かに呟いたニシルへ、チリーは静かに頷いた。

「とにかく、顔を隠さないと……」

「……そうだな。顔がバレている以上、このまま晒しておくのはまずい」

ミラルの言葉に頷きつつ、トレイズは静かにそう言った。

ミラルとトレイズは、チリーの顔を隠すためのロープを買うために雑貨店へ向かった。ニシルは万一のことを考えてチリーと共に店の前で待機していた。

「クソ……何でこんな面倒なことに……」

悪態を吐きつつ、チリーは嘆息する。

「ライアスって奴がチリーを殺そうとしてたよね？」

「ん、ああ。こないだ返り討ちにしてやったけどな」

「ライアスもハーデンから命令を受けてたみたいだし、ハーデンにとってチリーは相当邪魔みたいだね……」

強力な神力使いであるライアスを向かわせてまで、チリーを殺そうとしているハーデンはライアスが失敗したのを知り、こうして国中に命令を出したのかも知れない、とニシルは考えた。そしてチリーが邪魔だとされている理由は恐らく

「究極のニューピープル」

「……」

体内に小赤石を宿し、膨大な神力をその身に宿す究極の存在。『白き超越者』として力を持つチリーを、ハーデンは脅威だと感じているのだろう。そしてそのハーデンもまた　チリーと同じ究極のニューピープル、『黒き超越者』だった。ライアスにチリー殺害の命令を下したのも、チリーを早い段階で始末しようと考えた結果なのだろう。

「上等だ……ッ！　ライアスだろうがクソ兵士共だろうがまとめて相手になつてやる……！」

拳を握り締め、吐き捨てるようにチリーはそう言った。どうやら、恐れも怯えもないらしい。その様子に、ニシルは安堵の溜息を吐いた。

「……………ん？」

ふと、ニシルは歩いている一人の少女に目を奪われた。

悪く言えば存在感のない、良く言えば儂げな少女だった。背はニシルよりも低く、黒いセミロングの髪が風になびいている。その姿に、ニシルは一瞬見惚れた。

「ニシル？」

背後から声をかけられ、肩をびくつかせつつ慌てて振り返ると、そこには買い物すませたミラルとトレイズがいた。手には旅人が身に着けているような、防寒用のローブがあった。フードを被れば顔全体を隠せるような薄茶色のローブだった。

「ほらチリー、これ着て」

「うわ、無茶苦茶暑そう……………」

不満気な表情を見せつつも、チリーはミラルからローブを受け取り、洪々と着込んだ。

「……………少し怪しげだが、これで一応顔は隠せるだろう」

フードを深くかぶったチリーを見、トレイズは静かにそう言った。「なんかこう、黒魔術とかやってそうな格好だね」

茶化すようなニシルの言葉に、チリーは何も言い返さず、ただ嘆息するばかりだった。

とある建物の上から、チリー達を双眼鏡で観察している二人の男がいた。男達の内一人は、中性的な顔立ちで、長い金髪が風になびいている。チリーを見つめるその顔は、尋常ではない憎しみによって醜く歪められていた。そしてもう一人は小柄な男で、仮面をつけ

ているせいでどんな顔をしているのかわからない。しかし彼もまた、チリーへ対して憎しみの視線を向けていることは雰囲気から察するに間違いないだろう。

「君は今随分と怒っている、そうだね？　ゲイラ？」

「……答えるまでもないだろう」

ゲイラと呼ばれた男は、ぶっきらぼうにそう答えた。

「それよりも、そのうざったい喋り方をやめろ、エトラ」

エトラと呼ばれた仮面の男は、仮面の奥でクスリと笑みをこぼす。

「それは無理な相談だね？　そうだね？　ゲイラ？」

エトラの言葉に、ゲイラは舌打ちし、改めて双眼鏡を覗き込み、チリーへ視線を向ける。ローブを着込んでしまったせいでわかりづらくなったが、ローブを着込む前から観察していたゲイラ達にとってはあまり関係のないことだった。

「僕も君も、あの少年を殺したい……そうだね？　ゲイラ？」

「……そうだな」

ニヤリと。ゲイラは笑みを浮かべた。

ローブ購入後、チリー達は大図書館の宿泊施設に泊まることになった。館内での争いごとは禁止されている上にセキュリティが万全なため、最も安全だと判断したからだ。しかし、いくらローブで顔を隠しているとは言え、万が一の襲撃を避けるためにチリーは事実上の外出禁止。常にミラルかトレイズがチリーを監視している状態となった。ちなみにカンバーは、出発が決まるまではひたすら図書館で本を読み続けることにしているらしく、少しの睡眠時間と食事時間以外は常に読書しているという、常人には理解し難い状態になっている。

部屋から逃げ出そうとするチリーを、ミラルとトレイズが監視している間、ニシルは暇潰しにアルケスタ内を散歩していた。大した理由も目的もなく、ただ散歩するだけ。

そんな時だった、ニシルが彼女を目にしたのは。

儂げな、少女だった。ニシルよりも背の低いその少女は、雑貨店の入り口前でどうすれば良いのかわからない、といった様子で財布を片手に周囲をキョロキョロと見回していた。

「あの子って……」

先日、ニシルが見かけたあの少女だった。

「……ねえ」

近寄り、後ろから声をかけると少女は肩をびくつかせた。

「は、はい……」

やや怯えた様子で、少女はニシルの方を振り返り、ニシルの姿を見ると少しだけホツとしたような表情を見せた。ニシルが同年代くらしいに見えたからだろう。

「どうかしたの？」

ニシルの問いに、少女は雑貨店を指差した。

「あの店で買い物……してみたいんですけど……やり方がわかんない」

く……」

悲壮な表情でそう言った彼女を見、ニシルは思わず吹き出した。そんなニシルの様子に、少女は訝しげな表情を見せる。

「な、何で笑うんですか……？」

「いや、ごめんごめん。良いよ、教えてあげるから中に入ろう？」

そう言ってニシルが微笑むと、少女は少しムツとした表情のままコクリと頷いた。

少女が雑貨店で購入したのは、小さなロケットペンダントだった。あんまり値段の高くないもので、銀色の卵型のペンダントだった。同じものを二つ買った少女は、店を出た後嬉しそうにペンダントを眺めている。

「……はい」

不意に、少女は持っていたペンダントの内一つをニシルへ差し出した。どうということかわからず、ニシルはキョトンとした表情でそのペンダントを見つめる。

「これ、お礼です」

「え、いいよ。他の人のために買ったんじゃないの？」

「いえ、二つ買ったのは貴方にあげるためでしたから」

ニコリと笑った少女の表情を見、ニシルは照れ臭そうに笑うとそのペンダントを受け取った。

「そついえは名前、言っただけじゃなかったよ。僕はニシル、君は？」

「私は……エルゼです」

エルゼと名乗った少女は、そう言って屈託なく笑った。

「敬語で喋らなくて良いよ。僕ら、そんなに歳違わなそうだし」

ニシルがそう言うと、エルゼはそれもそうだね、と微笑んだ。

「それにしても、買い物の仕方知らないなんて……どこかのお嬢様？」

ニシルが少し茶化すように問うと、エルゼは首を小さく左右に振

った。

「私、物心ついた時からほとんど入院生活だったから……。世間のこととか、全然知らなくて……」

「そうだったんだ……。ごめんね、笑ったりして」

「うん、ちよつとシヨックだった」

エルゼは冗談っぽく笑うと、持っているペンダントへ視線を向けた。

「これと同じようなペンダント、他の患者さんが持っていて……。これに写真入れてたら、一人でいてもちよつとは寂しくないかなあって」

「それで、そのペンダントが欲しかったんだね」

コクリと。エルゼは頷いた。

「それで……写真ってどうやって撮るの？」

小首を傾げて問うてくるエルゼに、ニシルはそんなことだろうと思った、と笑みをこぼした。

その後ニシルとエルゼが向かったのは写真屋だった。ペンダントのロケットへ入れるための写真を、ニシルはエルゼと二人で撮影した。

「……僕で良かったの？」

写真屋を出、店の前でニシルが問うと、エルゼは小さく頷いた。

「お母さんがいるけど、お母さんを連れてくるわけにはいかなかったから……」

「何で？」

「私、病院抜け出して来たから……」

「……アクティブだね」

そう言っつて、ニシルは苦笑した。

写真の現像には一日かかるらしく、写真の受け取りは翌日となった。ニシルとエルゼは明日もう一度会う約束をして、その日は別れ

た。

そんなニシルとエルゼの姿を、とある建物の上から双眼鏡で観察する者達がいた。先日、チリー達を見つめていた二人組の男 エトラとゲイラであった。

ゲイラは風になびく美しい金髪を悩ましげな表情でかきあげつつ、目から双眼鏡を話すと隣の仮面の男 エトラへと視線を向けた。

「あの少女……美しいな。美しい僕に相応しい少女だと思わないか？」

「そうかな？ そんなことよりも、その傍にいる少年のことを気にするべきだよな？ そうだね？ ゲイラ？」

エトラに言われて初めて気づいた、といった様子でゲイラは少女の傍にいる少年へと視線を向ける。

「……彼がどうかしたのかい？」

「知らないんだね？ そうだね？ ゲイラ？」

「……勿体ぶつてないで説明しろよ」

言葉に怒気を込めたゲイラに、エトラは仮面の下でニヤリと笑みを作る。

「彼は、チリーと一緒にいる少年だよ？ チリーを誘き寄せるのに使えるかも知れないね？ そうだね？ ゲイラ？」

なるほどな、とゲイラは呟くと再び双眼鏡を覗き込み、少女へと視線を向けた。少年と親しそうに話すその少女を見た後、ゲイラは双眼鏡を目から離してもう一度エトラへ視線を向けた。

「そんな面倒なことをするより、直接チリーを誘き出す作戦を考えた方が早いと僕は思うんだが……」

「彼を人質にとつて、チリーをなぶる方が面白いよね？ そうだね？ ゲイラ？」

エトラの言葉に、ゲイラはそれもそうだ、と答え、小さく笑みを浮かべた。

宿へ戻ると、チリーが縛られていた。

「おうニシル、お帰りー」

縛られて手足が動かせない状態でベッドに転がされているというのに、チリーは平然とした表情でそう言った。

縛られているチリーの隣には、ミラルが座っている。

チリーとミラルを交互に見、ニシルは一つの答えに辿り着く。

「邪魔してごめん。僕、二人とは結構長い付き合いだったけど、そういう趣味があったなんて知らなくて……」

「ニシルそれ誤解だから！」

「ミラルもチリーもそういうのが好きだったんだね……」

慌てて弁解するミラルの隣では、チリーがそういうのって何だ？と間の抜けた表情でキョトンとしている。

「……チリーが脱走しようとするから縛っているだけだ」

静かにそう言ったのは、ベッドに腰かけていたトレイズだった。

「だってよー……」

不満げに声を洩らすチリーへ近寄ると、トレイズはゆっくりと縄を解き始める。

「別にミラルに嗜虐趣味しやくちゆうみがあるわけでも、チリーに被虐趣味があるわけでもない」

さりげなく二人をフォローし、トレイズは小さく嘆息した。

「良かった……」

安堵の表情を浮かべるニシルを見つつ、ミラルは呆れたような表情を浮かべ、もう、と一言呟いた。

「……もう脱走しねーから縛るのはもう勘弁してくれ」

縄へ視線を向け、心底嫌そうな顔をするチリーを見て、ニシルはチリーとミラルに変な趣味がなかったことを再確認し、安堵の溜息を吐いた。

「そついやお前、どこ行つてたんだ？」

「ん？ ああ、ちよつとね。大した用じゃないというか、用はなかつたんだ……。まあ、散歩だよ散歩」

「散歩かー」

良いなあ、と羨ましそうに呟いて、チリーは自由になつた手足をいつぱいに広げてベッドの上へ倒れ込む。手足を自由に動かせるのが相当嬉しいのか、そのまましばらくベッドの上でチリーはジタバタと暴れ始めた。それを止めることもなく、ミラルはチリーを微笑ましそうに見つめていた。

「……お前の顔も向こうに知られているだろう。チリーのように殺害命令が出ていないにしても、あまり出歩かない方が良い」

「……そだね」

短く答えてニシルは微笑むと、ゆっくりと自分のベッドへ寝転んだ。そしてチリー達に背を向け、彼らに見えないようにポケットからエルゼにもらつたロケットペンダントを取り出して見つめつつ、エルゼの顔を思い出す。

「エルゼ、かあ」

チリー達に聞こえない程小さな声で、ニシルは呟いた。

翌日の午後、ニシルとエルゼは写真屋で昨日の写真を受け取った。予め店員に頼んでおいたため、写真はペンダントにはめることが出来るように切り抜かれている。写真屋を出、エルゼはそれを嬉しそうにしばらく眺めた後、ニコリとニシルへ微笑みかけた。

「ありがとう」

「でも、ホントに僕で良かったの……？」

「うん。お母さんと先生以外だと、私に関係のある人ってニシル君だけだから」

お父さんは？ と聞きかけて、ニシルは口をつぐんだ。一度も「お父さん」と口にしなかったということは、既にエルゼの父は

「お父さんはね、私が生まれる前に死んじゃったみたいなの」

まるでニシルの心の内を察したかのようなタイミングで、エルゼはそう言った。

「だから私の中の世界は、お母さんと先生と、それからニシル君だけ」

そう言ってエルゼは、切なげな表情でもう一度写真へ視線を移した。

「まだ知り合ったばかりだけど、ニシル君は私にとって初めての友達ってことになるの」

「へえ。それは光栄だけど、尚更僕で良かったのか不安になるよ」

そう言って冗談っぽく笑うニシルに釣られて、エルゼはクスリと笑みをこぼした。

ニシルが部屋へ戻ると、ベッドの上に転がっているチリーから羨ましげな視線で見つめられた。どうやらチリーは今日も一日中外に出られなかったらしく、ローブは昨日かけてあった場所から少しも

動いていないようだった。

「お前またどっか行きやがって……俺も連れてけよな……」

「無理。まだ何も言っていないのにミラルから『絶対ダメ』とでも言わんばかりの目で見られてるし、僕もチリーを外に出すことは賛成出来ないよ」

ニシルの言葉に、チリーはクソ！ と悪態を吐くと、退屈そうにベッドの上を転がった。

「あれ？ ニシルそれ、どうしたの？」

ミラルが指差したのは、ニシルが首に下げているロケットペンダントだった。ニシルはそのことに気付くとすぐにしまった、といった様子でペンダントを右手で覆うが既に遅く、その場にいた全員の視線がニシルのペンダントへと向けられる。

「あ、いや……何でもないよ」

「ンだよ、何でもないってことはねーだろ」

チリーの言葉には答えず、ニシルはトイレ行って来る、とだけ伝えると、まるで逃げるかのように部屋の外へと出て行った。

「何だありゃ？」

首を傾げるチリーに、ミラルはさあ？ とだけ答えて同じように首を傾げた。

その次の日の午後も、エルゼと会う約束をしていたニシルは待ち合わせ場所 写真屋の前へと来ていた。

しかし、数十分程待つて見てもエルゼはその場所へ現れなかった。もしかすると病院から抜け出せなかったのかも知れない、とニシルが考えを巡らせていると、写真屋の中から先日ニシルとエルゼの写真を撮ってくれた店員の男が顔を出した。

「あの、すいません……」

「は、はい？」

不意に話しかけられ、やや声を裏返らせてニシルはそう答えた。

「貴方がここに来たら、これを渡すように頼まれたんですが……」
男がニシルへ差し出したのは、一通の手紙だった。

「これは　ッ!?」
書かれていた内容に、ニシルは戦慄した。

「こんな所に僕を呼び出して、どういふつもり？」

今は閉鎖されている、ゲルビア帝国立遺伝子研究所の付近に存在する林へ、ニシルは着ていた。笑みを浮かべながらも言葉に怒気を込めるニシルの前には、長い金髪の男が立っていた。中性的な顔立ちをしており、文句なしに美青年と呼べる風貌であった。

「どうもこうも、手紙は読んでくれたんだろう？」

「ふうん。手紙の内容が冗談なら、許しても良いかなーって思ったんだけど……冗談じゃないみたいだね……」

ギロリと男を睨みつけ、ニシルはポケットから先程店員から受け取った手紙を取り出し、それを男に見せつけるようにビリビリと破いて足元へ捨てた。

「エルゼを返してくれる？　どこの誰だか知らないけど、こんな姑息な手段で誘き寄せるなんて……」

簡単に言っと手紙の内容はこうだった。少女を返して欲しければ、ゲルビア帝国立遺伝子研究所付近の林へ来い。

あまりにありきたりな文面に、普段のニシルなら腹を抱えて笑いそうなものだったが、事情が事情だったため、笑えるような心境にはなれなかった。

「あの少女ならすぐに返すさ」

パチンと。男が指を鳴らすと同時に、傍の木の上から一人の男が飛び降りる。その男は一人の少女を抱えているというのに、驚く程身軽な動作で着地すると、ニシルの方へ顔を向けた。

「お前　ッ！」

ニシルにはその顔……否、その仮面に見覚えがあった。

「もう、チリーったらいつまで寝てるつもりなの……?」

嘆息し、ミラルはチリーの寝ているベッドへと歩み寄る。チリーはベッドの中に潜って眠っているらしく、毛布は大きく盛り上がっている。

「もう、チリーってば」

毛布をはぎ取った瞬間、ミラルは絶句した。

「どうした?」

自分のベッドへ腰かけて考え事をしていたトレイズが静かに問う。しかし、ミラルは返事をしなかった。仕方なくトレイズは腰を上げ、ミラルの傍へ歩み寄る。

「……ミラル?」

トレイズはチリーのベッドを覗き込み……そして小さく溜息を吐いた。

「アイツ……!」

毛布のはぎ取られたベッドには、チリーが使っているトランクケースが置いてあり、その上に一枚の紙切れが置いてある。紙切れには乱雑な字で「ちよつと旅に出ます」と書かれていた。間違いなくチリーの字である。

「逃げたか……」

呆れ顔で、トレイズが嘆息した。

「久しぶりだね? そうだね? 少年?」

「エリニアにいた仮面男……ッ!」

その仮面の男は、かつてニシル達がアギエナ国のエリニアに滞在していた際に出会った、青蘭を付け狙っていた暗殺者の神力使いで、チリーと青蘭の手によって倒された男だった。

仮面の男が抱えている少女は、紛れもなくエルゼだった。どうや

ら気絶しているらしく、グツタリとしたままピクリとも動かない。
「その子……離してくれるかな……？」

険しい表情でニシルがそう言うと、仮面の男は良いよ？ と静かに答えた。

「ただし、君が代わりに人質になるのが条件だよ？ 交換条件だね？ 少年？」

「僕が人質に……？」

訝しげな表情で問うたニシルへ、金髪の男がそつだ、と答える。

「僕達の目的はチリーだからね……君を囷に、彼を誘き寄せる作戦さ」

金髪の男は意味もなく悩ましげに自身の前髪をかきあげ、ニコリと微笑んだ。

「僕とゲイラの目的はチリーをなぶり殺すことだよ？ だから君が人質として必要ということだよ？ わかるね？ 少年？」

ピクリと。ニシルの表情が変わった。

「さあ、大人しく僕の所へ来てくれ。大丈夫、僕達はチリーに復讐さえ出来ればそれで良い。君へ必要以上に危害を加えるつもりはないよ」

ゲイラと呼ばれた金髪の男の言葉に、ニシルはギュツと拳を握りしめると、薄らと笑みを浮かべた。しかしその笑みは口元だけで、目は少しも笑っていないかった。

静かな怒気が、ニシルから発せられた。

「僕も……なめられたモンだね……」

「ッ！？」

先に何かを感じ取ったのは仮面の男だったらしく、エルゼを抱えたまますぐにバックステップでニシルから距離を取った。

「少年……神力使いだね？ そつだね？ 少年？」

仮面の男の問いには答えず、ニシルはすぐさまゲイラへと殴りかかった。ゲイラは素早く身をかわすと、何のつもりだい？ とニシルへ問うた。

「上等だよ……僕に喧嘩売ったこと、後悔させてやるッ！」

ニシルが身構えたのと同時に、ゲイラも身構えた。

「エトラ、その少女を君の能力で木に縛り付けてくれ」

エトラと呼ばれた仮面の男は小さく頷くと、少女を後ろの木の幹へよりかからせた。

「少年と戦うつもりだね？ そうだね？ ゲイラ？」

そう言いつつ、エトラがエルゼへ右手の平をかざすと、その手の平から鉄製のワイヤーが伸び、エルゼの身体へと巻き付いた。その結果、エルゼはエトラのワイヤーによって木に縛り付けられた状態になる。

「何？ エルゼの命が惜しかったら降参しろとか言うつもり？ どこまでお前らひきよ」

「勘違いするな。そういうわけじゃない。僕は君とそういうのはなしで戦うつもりだ」

え、とエトラが短く声を上げたが、ゲイラはそれを意に介さぬ様子で再び身構えた。

「へえ……そりゃ……」

徐々に、ニシルの右手が熱を帯びていく。その熱によって、ニシルの右手の周囲に陽炎が立ち昇る。

「助かるよッ！」

勢いよく、ニシルはゲイラへ熱を帯びた右拳を突き出したが、その右手はゲイラに届くことなく空を切った。

「なッ!?」

「目に焼き付けておくが良い……。僕の美しさを」

その背中には、翼が生えていた。本来人間なら持ち得るハズのない、鳥の如き翼が、ゲイラの背中には生えていたのだ。翼をゆつくりとはためかせ、ゲイラは宙に浮いていた。

「翼……!!」

「……これを見てくれ」

ゆっくりと。ゲイラは宙に浮いたままニシルへ背を向けた。

ゲイラの両翼の付け根の片方にだけ、生々しい傷痕が残っていた。まるで、何か刃物を突き刺したかのような傷痕だった。

「この傷は……チリーとかいうあのクソガキが付けたものだ……ッ」
不意に、ゲイラの語気に憎しみが込められた。

「あの……クソガキ……ッ！」

静かにこちらへ身体を向けたゲイラの表情は、これでもかという程憎しみでゆがんでいた。先程までの美しい顔立ちを憎しみに歪め、ゲイラは拳を握りしめた。

「僕の顔に傷を付けただけじゃ飽き足らずッ！ 僕の背中にまで傷を付けたんだッ！ この僕の美しい身体にだぞ！？」

吐き捨てるように怒鳴り、ゲイラは許せない、と憎々しげに呟いた。

「だから君には人質になってもらう……。僕の身体を傷付けたあのクソガキを、死ぬ程後悔させてから殺してやるッ！」

激情を露わにするゲイラとは対照的に、ニシルは笑みを浮かべていた。

「何がおかしい！？」

「チリーにはお前なんかじゃ勝てないよ。今度は別の部分を傷つけられるのがオチだ」

「貴様……なめた口を……ッ！」

瞬間、ゲイラの両翼から鋭利な羽がニシル目がけて射出された。

ニシルは素早く羽を避けると、ゲイラ目がけて駆け、そして跳躍する。チリー程跳べるわけではないため、ゲイラの顔や腹部には到底届かない。しかし、足を掴んでやることぐらいは出来る。

ガツシリと。ニシルはゲイラの足を右手で掴んだ。

「おおおおッ！」

ニシルが声を上げると同時に、ゲイラの足を掴むニシルの右手から高熱が発せられた。肉の焼け焦げるような音と臭いと共に、掴まれたゲイラの右足が凄まじい勢いで焼けただれていく。

「く……アアアアッ！！！」

絶叫し、すぐにゲイラは足をバタつかせてニシルを振りほどく。ニシルは勢いよくその場へ落下し、尻もちをついたが、その表情は満足げに微笑んでいた。

「あああッ！ あああッッ！」

苦痛の声を上げ、ゲイラは焼けただれた自分の右足を両手で押さえる。

「……………何てことをッ！」

「僕の美しい身体に傷を……………ってかい？ ナルシストもいい加減にしとかなないと嫌われるよ？ 僕はもう既にお前のこと大ッ嫌いだけどね」

余裕のある笑みを浮かべたニシルへ、ゲイラは憤怒の視線を向けた。その顔は怒りと憎しみで異常な程に歪められており、パツと見た感じでは誰だかわからない程にその顔は歪められていた。

「許さない…………… お前も、チリーも、絶対に許さないッ……………！」

「感情的になるのは良くない、そうだね？ ゲイラ？」

エトラは落ち着かせるつもりで言ったのだから逆効果だったらしく、ゲイラはギロリとエトラを睨みつけた。

「うるさいッ！ それに、その鬱陶しい喋り方はやめると言ってるだろう！」

ゲイラの怒声に、エトラは仮面の下で静かに嘆息した。

「お前のことは……………原形を留めぬ程グチャグチャにして殺してやる……………ッ！」

「おお、怖い怖い。でもね、怒ってるのはお前だけじゃない」

ギロリと。ニシルはゲイラを睨みつけた。

「このままじゃ激情に溺れて冷静な判断を失うね？　そしてそのまま負けるのがオチだね？　そうだね？　ゲイラ？」

対峙する二人を眺めつつ、エトラがゲイラへそう言ったが、聞かえていないのかゲイラはニシルをひたすら睨み続けている。その様子に、エトラは仮面の奥で小さく溜め息を吐いた。

チラリと。縛っている少女へ、エトラは目を向ける。気を失ったままではあるが、縛られて苦しいのか苦悶の表情を浮かべている。

「少年？」

エトラがニシルへ視線を向けると、ニシルはすぐにエトラの方へ顔を向けた。

「大人しく降参した方が良い……そうだね？　少年？」

エトラは仮面の奥でニヤリと笑みを浮かべると、右手の平から伸びる、エルゼを縛っているワイヤーを引っ張った。きつく締め上げられたワイヤーが、エルゼの身体に食い込んだ。

「うっ……！」

「エルゼッ！」

苦しそうな声を上げるエルゼの元へ駆けだしたニシルの目の前に、素早くゲイラが降り立った。

「どこへ行くつもりだ」

「退けよナルシスト」

キツとゲイラを睨みつけるニシルをよそに、ゲイラはエトラへ視線を向けた。

「余計なことはするなエトラ」

「僕達の目的はあくまでチリーであって、その少年ではない……そうだね？　ゲイラ？」

「それはそうだが……！」

口惜しそうな表情を浮かべ、ゲイラは舌打ちすると再びニシルへ

と視線を向けた。

「僕としては不本意だが……彼女のためにも、君は人質になるべきだ」

やや口惜しそうな表情を浮かべたまま、ゲイラはニシルへそう言った。

僕は君とそういうのはなしで戦うつもりだ。

口惜しそうなゲイラの表情と、戦う前にゲイラが言った言葉から察するに、現在の状況はゲイラとしても不本意なのだろう。エトラはともかく、ゲイラにはエルゼを傷つけるつもりがないと、断言は出来ないがそう推察することが出来た。ニシルは縛られたエルゼを見、もう一度ゲイラへ視線を移す。自分が実行しているわけではないとはいえ、卑怯な手を使ってしまっていることが心苦しい、といった様子でゲイラはうつむいていた。

「おい仮面野郎！ エルゼは関係ないだろ！」

「僕達には関係なくても君には関係ある……そうだね？ 利用する条件としては十分だと思うよ？ そうだよね？ 少年？」

「く……ッ」

疑問符を繰り返し、仮面の奥で笑みを浮かべているであろうエトラの顔面に、ニシルは拳を叩き込みたいと心底感じた。しかし、下手に動けばエルゼはあのまま締め上げられて……途中まで想像して、ニシルはかぶりを振った。

「わかっ……たよ。わかった、僕が人質になれば良いんだろッ！

クソ！ 言う通りにしてやるからエルゼを」

そう、ニシルが言いかけた時だった。

「諦めてンじゃねエよ」

まるで吐き捨てるかのように、ニシルの隣でそんな言葉が聞こえた。

「え」

ニシルが声の主へ視線を向けるよりも先に、その少年は颯爽と駆け抜け、エトラの眼前まで迫った。

「お出ましたね？ そうだね!？」

「相変わらずうるッせエんだよクソがッ!」

アッパ―気味に繰り出された少年の右拳が、エトラの腹部へ直撃する。のけ反ったエトラの顔面へ、少年は続けざまに左拳を叩き込む。

メキメキと音を立てて仮面は砕け、エトラはそのまま後方へ吹っ飛んだ。

「チリー……ッ!」

憎々しげなゲイラの言葉に、少年は振り返らぬまま笑みを浮かべた。

「ようニシル。大丈夫か？」

ニシルの方へ振り返り、チリーはニツと笑みを浮かべた。

「大丈夫だよ、問題ない……ってお前抜け出してきたのか!？」

「おう、ちよつとなー」

ニヤリと再び笑みを浮かべると、チリーは右手を突き出した。すると、チリーの手の中に剣の柄が形成されていく。やがてそれは伸びていくようにして、大剣の形を形成していく。一秒と経たない内に、チリーの右手には彼の身の丈程もある大剣が握られていた。

「そオらよッ!」

掛け声と共に、チリーはエルゼを縛るワイヤー目がけて大剣を振り下ろす。すると、エルゼを縛っていたワイヤーはいとも容易く切り裂かれ、解放されたエルゼはその場へドサリと倒れた。

「エルゼ!」

チリーはすぐにエルゼを抱き起こすと、木の幹に寄り掛からせるようにして座らせた。

「これで心配ねーな？」

チリーの言葉に、ニシルはおう、とだけ短く答えた。

「おーい仮面野郎、生きてるかー?」

チリーの言葉に、エトラは答えなかった。

「ンだよ、もう倒れちまったのか……」

見れば、エトラは気絶していた。チリーに仮面ごと顔面を殴りつけられて吹っ飛ばされ、そのまま気絶してしまっただろう。

「んじゃ、後はテメエだな」

チリーとニシルの視線が、一斉にゲイラへと集まった。すると、ゲイラはすぐに空高く飛翔し、チリーとニシルを上空から睨みつけた。

「エトラがやられたところで、僕には関係ない……！ 僕の美しい身体を傷つけたお前ら二人には、どちらにしろ死んでもらうッ！」

そう、ゲイラが叫ぶと同時に、ゲイラの身体はゴキゴキと音を立てて骨格ごと変形していく。

「マジかよ……」

ニシルが驚嘆の声を上げた頃には、既にゲイラは巨大な鷹へと変化を遂げていた。

「おいニシル、跳べるか？」

「は？ 何言ってるんだよ」

「アイツんとこまで跳べるかって訊いてんだよ」

チリーの言葉にニシルは首を左右に振った。

「お前じゃあるまいし、僕はあんなとこまで跳べない」

「んじゃ跳ばしてやるよ」

ニツと笑みを浮かべたチリーへ、ニシルは首を傾げて見せた。

「何でだよ。わざわざ僕が行かなくても、チリーが自分で跳んで行けば良いだろ！」

ニシルの言葉に答えず、チリーはチラリとエルゼの方へ視線を向けた。エルゼは既に目を覚ましており、状況がわからないままに辺りをキョロキョロと見回している。

「そうもいかねえだろ。お前が始めた戦いだ。お前が決着着ける」

それは、ニシルの活躍をエルゼに見せたかったのか、それとも言葉そのままの意味なのか、ニシルにはすぐに判断出来なかった。し

かしそれでも、ニシルは小さく頷いた。

「おっし行くぜ」

身を屈め、両腕を前へ突き出したチリーの両腕に、ニシルはすぐに両足を乗せて身を屈めた。

「「せー！ のッ！」」

掛け声と共に、チリーは勢いよく両腕を振り上げた。と同時に、ニシルはゲイラ目がけて高く跳躍する。

『ッ！？』

突如として自分と同じ高さまで跳躍したニシルを見、鷹^{ゲイラ}は驚愕の表情を浮かべる。

「おおおッ！」

ニシルはゲイラの両翼へ両手で跳び付くと、そのまま一気に両手から熱を放出した。両腕に激痛が走ったが、それでもニシルは構わず放出し続ける。

『ああああアアアッ！』

苦悶の表情を浮かべ、空中でのたうち回るようにしてゲイラは地面へと急降下していき、やがて音を立てて地面へ落下した。

「ニシル！」

チリーが近寄ると、そこには焼け焦げて翼が使い物にならなくなったまま気絶しているゲイラと、満足げな表情を浮かべているニシルの姿があった。

ゲイラの身体をクッション代わりにしたのか、ニシルはほぼ無傷だった。そのことに、チリーは安堵の溜め息を吐いた。

「ニシル君……！」

すぐに駆け寄ってくるエルゼの姿を見、チリーは微笑すると、何も言わず静かにその場を去っていった。

「チリーの奴……！」

その背中を眺めつつ、まるで悪態を吐くかのようにニシルはそう呟いたが、その表情は晴れやかだった。

「ホントに良かったの？ そのエルゼって子に何も言わなくて」
ミラルの言葉に、ニシルは小さく頷いた。

「うん。言い辛いしね」

そう言っただけでクスリと笑うと、ニシルは首にかけたロケットペンダントを開いた。中の写真に写っているのは、嬉しそうに笑うエルゼと、どこか表情の硬いニシルの二人だった。ニシルは感慨深げにそれをしばらく眺めた後、静かにそのロケットペンダントを閉じた。

「チリーさんの顔が知られている以上、顔を隠しているとは言え汽車は使えませんね……」

「歩きか……」

そう言っただけでなだれるチリーへ、カンバーは仕方ないですよ、と苦笑しつつ答えた。

「飛行船が戻らない以上は、俺達だけで行くしかない。野宿の覚悟は、出来てるな？」

トレイズの問いに、ミラル以外の三人はすぐに頷いた。ミラルは躊躇していたが、しばらくして渋々頷いて見せた。

「じゃ、行こうか。目指す場所は」

言いかけ、何かを期待するような視線でニシルがチリーへ視線を向けると、チリーはニツと笑った。

「ゲルビアの首都、パンドラだ！」

豪華なドレスに身を包んだ少女が、城のテラスから城下を眺めていた。月光に照らされる街並みを眺め、少女へ小さく微笑んだ。

栗色の髪をした、かわいらしい少女だった。釣り気味の目からは

強気そうな印象を受けるが、彼女の纏う雰囲気は淑やかだった。肩の辺りで切り揃えられている髪は夜風になびき、一層美しく見えた。「あらお父様、いつからいらしたんですの？」

少女の問いに、後ろにいた初老の男はさっきからだ、と答えた。

「ミラル、街並みはどうだ？」

「美しいですわ……これが、私とお父様の街……」

「そうか。それは良かった」

そう言って微笑した男の方を振り返り、少女は少しだけ顔をしかめた。

「お父様、私とお父様が二人切りの時はミラルだなんて呼ばないで下さいまし」

「おお、そうだったな……」

男は微笑むと、少女の隣へと歩み寄った。

「私の娘　　ミレイユ」

男の言葉に、ミレイユと呼ばれた少女は小さく笑みを浮かべた。

「ハアツ……ハアツ……！」

男の荒い息遣いが、深夜の町に響いた。男の表情は、町の静けさから考えると違和感を覚える程に切迫しており、もうこれ以上走れないとでも言わんばかりの表情だったが、男は必死に走り続けた。

中年くらいの男性で、恰幅が良いとも言えないが、均整の取れた肉体とも言えない体つきをしている。かけている眼鏡は、髪を伝ってたれてきたのであろう汗で濡れていた。

その男の後ろを、ゆっくりと歩いて追う男がいた。細身で背が高く、腰まで伸ばされた長い黒髪が、彼の顔全体を覆っていた。長い前髪の隙間から、瞳を覗かせ、ゆっくりと男は歩いている。傍から見れば、追いかけているとは思えない程に緩慢な速度だった。

「クリストオ……鬼ごっこはいつまで続けるつもりだア……？」

ニヤリと笑みを浮かべ、男はそんな言葉を吐いた。

「渡す……わけには……ッ！ この」

この、疑似聖杯を。

荒い呼吸と共に、クリストと呼ばれた中年男性はそんな言葉を吐き出した。

窮屈な船旅の末にヘルテュラへ戻った青蘭達は、東国へ行く前の予定通りにアルケスタへと向かった。聖杯の所在は依然として不明、赤石はゲルビアの手に渡ったとなれば彼らの行く先は自然とゲルビアへと定められる。元々東国を滅ぼした憎きゲルビアだ。赤石の件がなくても、青蘭達には復讐するだけの理由がある。それに青蘭の

元々の目的地はゲルビアだ。行き先自体には、特に支障はない。

アルケスタへ到着後、青蘭達は大図書館の宿に宿泊することになった。安全な上に、宿泊費もあまり高くない。

「おい、この写真って……」

アルケスタを歩いていて、一番目立ったのが町中に張られたポスターだった。そこに映っているのは己の身の丈程もある大剣を構えた、白い長髪の少年。

「チリー……」

ポソリと。ポスターを見つめつつ青蘭は呟いた。

「アイツ、指名手配って……何かやらかしたんじゃないのか？」

そんな光秀の言葉に、伊織はムツと顔をしかめた。

「違うと思いますよ。この間のだって誤解だったんですし」

ね、青蘭君、と伊織は青蘭へ同意を求めたが、青蘭は何も答えず、ポスターを睨みつけた。そして無言のままポスターをはぎ取り、険しい表情のままその場でビリビリと破り捨てた。

「……美しくないわ」

呟いた麗の言葉に耳も傾けず、青蘭は大図書館へ向かって一人歩き始めた。その後ろを、不安そうな表情で伊織がついていき、更にその後ろを麗と光秀は嘆息しつっついて行くのだった。

アルケスタ大図書館内の宿で適当な部屋を二部屋借りた青蘭達は、一度青蘭と光秀の部屋に集まっていた。麗と光秀が今後のことについて話し合っている中、青蘭は陰鬱な表情のままベッドに腰かけていた。チリーとの一件がまだ気になっているらしく、青蘭は東国を出てからずっとこんな調子だった。

「大丈夫？」

うつむいている青蘭の顔を覗き込み、伊織が問うと、青蘭は大丈夫だ、と呟くような声で答えた。

「あ、そうだ！ ちょっと散歩にでも行かない？ 折角だから観光

ついでに」

青蘭は顔を上げ、いや、いいと断ろうとしたが、伊織のその提案が自分を気遣ったのことでと気づき、小さく頷いた。

「……そうだな。少し息抜きでもしよう」

青蘭のその言葉に、伊織は表情を明るくした。

「じゃあ、ちょっと市場に行ってみない？ 買い物するわけじゃないけど……」

「ああ、行こう。すいません麗さん、ちょっと伊織と行ってきて良いですか？」

青蘭がそう訊くと、麗は構わないわ、と静かに答えたが、光秀は顔をしかめた。そして青蘭に何かを言いかけたが、すぐに麗の美しくないわ、という言葉によって制止され、閉口する。

念のために青蘭は日本刀を腰に差すと、伊織と共に部屋を出て行った。

様々な店が並ぶ市場を、青蘭と伊織は歩いていた。伊織は珍しい物を見つけると嬉しそうにはしゃぎ、青蘭はその様子を見て表情をほころばせる。そんなことを繰り返しながら、二人は市場を歩いていた。そうしている内に、暗かった青蘭の表情は少しずつだが明るくなっていき、笑う回数も増えていった。

「それにしても…… 大変なことに、なっちゃったよね」

とある喫茶店の外席で紅茶を飲みつつ、伊織は呟くようにそう言った。

「大変なこと？」

「うん。だって本当なら私達、今頃は東国で、皆と一緒に……」

言いかけ、伊織はうつむいた。そんな伊織にどう声をかければ良いのかわからず、青蘭は口ごもった。

「あ、ごめんね！ 青蘭君を元気づけようと思って外に出たのに……」

「いや、気にしないでくれ。それより伊織……ありがとう」

青蘭のその言葉に、伊織はえ？ と短く声を上げた。

「助かった。本当に。伊織がいなきゃ、今頃俺はまだ宿で沈んでたよ」

それは青蘭の本心だった。東国でのチリーとの一件、赤石をゲルビアに取られたこと、様々な悪いことが重なり、沈んでいた青蘭をすくい上げてくれたのは、伊織だった。今回のことだけではない。伊織はことあるごとに青蘭を気遣い、笑顔をくれた伊織に対して、青蘭は心から感謝していた。

伊織はしばらく茫然とした表情を浮かべていたが、すぐに頬を赤らめた。

「別に、大したことじゃないよ……私はただ……」

伊織が言いかけ、恥ずかしそうに青蘭から顔をそむけた時だった。

「ハアツ……ハアツ！」

一人の男性がこちらまで駆けてきて、青蘭達の座っている席の傍で勢いよく倒れた。空席だった青蘭達の傍の席は、男が倒れるのに巻き込まれて机や椅子が倒れ、悲惨な状態になっている。男や机の倒れる音に驚いた他の客達は、一斉に男の方へ視線を向けた。

「な……何っ!？」

伊織は表情を驚愕に歪め、倒れている男へ視線を向けている。その傍で青蘭は目を丸くして、男を凝視していた。

男は中年くらいの男性で、恰幅が良いという程ではないが、均整がとれているとは言えない体つきをしており、汗をダラダラと流しながらその場へ倒れている。

男はしばらく倒れたままだったが、やがて勢いよく顔を上げた。

「追われている！」

唐突に、男はそんなことを叫ぶように言った。

「お、追われてるって……」

「クリストオ……」

青蘭の言葉を遮るかのように、倒れている男とは別の男の声が後

方から聞こえた。

声のした方向へ青蘭が視線を向けると、そこには細身で高身長
の男がいた。真っ黒な髪をまんべんなく腰まで伸ばしており、彼の顔
は髪で覆われている。男は長い前髪の間隙から鋭い眼光を覗かせ、
青蘭の傍に倒れている男を見ていた。

「奴だ……ッ」

クリスト、と呼ばれた倒れていた男は立ちあがると、男を指差し
てブルブルと震えた。

「そろそろ、鬼ごっこは終わりにしようぜエ……」

ニヤリと。男は前髪の奥で笑みを浮かべると、こちらへ歩み寄り
つつ右腕を横に広げた。

「まさか……ッ！」

神力使い、と青蘭が口にするよりも先に、男の右手に大鎌が形成
されていく。黒く、禍々しい装飾のされたその大鎌は、男の身の丈
程もあつた。

「きゃああああっ！」

男の姿を見て、客の一人が悲鳴を上げた。それにも構わず、男は
大鎌を振った。それも、まだこちらへ近づき切らないままに、だ。
当然、大鎌は届くはずがなかったのだが

「ッ!?」

大鎌は、まるでゴムのようこちらへと伸びてきたのだ。

「伏せてッ！」

青蘭の言葉と共に、伊織やクリスト、何人かの客は伏せたが、立
ったままだった客の内数人は、振られた大鎌に巻き込まれて首を狩
られた。数人分の首が、切断部分から大量の血を流しつつ宙を舞い、
ポトポトと音を立てて地面へ落ちた。

ほとんど反射的に青蘭は抜刀し、刀で大鎌を防いだ。

「ほオ……」

その青蘭の動きに、男はニヤリと笑みを浮かべる。

「伊織、大丈夫か!？」

青蘭の問いに、伏せていた伊織は小さく頷く。

「貴方は!？」

「わ、私も大丈夫だ……」

青蘭は安堵の溜め息を吐くと大鎌を弾き、悲鳴を上げながら逃げ惑う客達の間を駆け抜け、男へと接近した。男は大鎌を元の長さへ戻すと、青蘭へ視線を向けて再び笑みを浮かべた。

「おおッ!」

声を上げ、接近した青蘭が男へ刀を振り下ろすと、男はそれを素早く大鎌で受ける。と同時に、男は青蘭へ顔を勢いよく近づけた。

「東国の武器かア! 面白エ……面白エぞおいイ……!」

狂っている。と、青蘭は直感的に理解した。青蘭を、刀を見る目が、おかしい。戦いを、刃を、殺戮を求めているようにしか見えな
いその瞳は、青蘭にとっては不快で仕方がなかった。

「お前は一体……!？」

青蘭の言葉には答えず、男は大鎌で刀を弾いた。その勢いで後退した青蘭へチラリと視線を向けた後、男は周囲を見回し、小さく嘆息した。

「興ざめだなア……おいイ」

逃げ惑う人々を見つつ、男はそんなことを呟くと、青蘭へ背を向けた。

「ッ! 待て!」

喫茶店の周囲に集まり始めた人々に紛れて、男の姿は見えなくな
った。

「何なんだ……一体……」

そう呟きつつ、青蘭は歯噛みした。

喫茶店での騒動の後、青蘭と伊織はクリストを連れて宿の部屋に戻っていた。クリストにはシャワールームで汗を流させ、光秀の代えの服を着させて、光秀のベッドに寝かせている。疲れがたまっていたのか、クリストは礼を言うとすぐに眠りについてしまった。

「……ジェノだな」

喫茶店で襲いかかってきた男の特徴を話すと、しばらく考え込むような表情を見せた後に光秀はそう呟いた。

「知ってるんですか？」

「噂だけは、ね」

青蘭の問いに、光秀の代わりに麗が答える。

「ゲルビアの死神。変幻自在の大鎌で首を狩る悪魔のような男……って噂を、東国にいた時に一度聞いたことがあるわ」

変幻自在の大鎌……。伸縮自在の大鎌は確かに変幻自在と言えるだろう。そしてあの男の風貌も、死神と呼ぶに相応しい。

面白エ……面白エぞおいイ……！

男 ジェノの言葉と表情を思い返し、青蘭は怖気を感じた。あれ程までに狂った雰囲気を持った男を、青蘭は知らない。戦闘を、殺戮を、刃を、血を、狂気を、心の奥底から求めているかのような生まれつきの戦闘狂。一度刃を交えただけでそこまでわかる程に、ジェノは狂っていた。

「問題なのは、ジェノ程の男に、そこで眠っている彼がどうして狙われているのか……ね」

麗の言葉に、光秀は静かに頷いた。

「どうもただ事じゃねえなこりゃ……」

ポリポリと後頭部をかきつつ、光秀は呆れ顔でそんなことを言った。

「この人、すぐくボロボロになってまでジェノって人から逃げた

みたいです……」

眠っているクリストを神力で治癒しつつ、伊織は不安げな表情を浮かべた。

「それだけの何かを、彼が持っているということね」

「ジェノがゲルビア側の人間……ってことを考えると、赤石……もしくは聖杯関係って考えるのが妥当ですね」

コクリと。麗は青蘭へ頷いて見せた。

「彼から何か、有力な情報を得られるかも知れないわね……」

麗の言葉に、その場にいた全員が頷いた。

刃と刃がぶつかる音。肉を切った感触。血の温かさ。返り血をなめとった時の味。響き渡る断末魔の叫び。それらの記憶を反芻し、男は ジェノはニヤリと笑みを浮かべた。感触、声、味、死体、死の臭い。五感全てをフルに活用して感じた死は、戦いは、ジェノにとってこれ以上ない程に至高にして究極の娯楽だった。

そして今日、刃を交えたあの青年。瞬時にジェノの大鎌が伸びると理解し、周囲への警告をしつつ抜刀しての防御。身震いする程に強^{うま}そうな手練^{えい}だった。

「東国の武器かア……」

あの青年が使っていた武器を、ジェノは生で見るのは初めてだった。東国で使われている「刀」と呼ばれる武器だと言う知識は持っていたが、実際に見たのはこれが初めてだった。

極上の手練^{えい}が使う、刃を交えたことのない武器。考えただけでジェノは高揚感に満たされた。

戦闘狂。と、誰かがジェノのことをそう言った。その言葉をジェノは否定しようとは思わなかったし、むしろ適切とさえ感じた。

「楽しみだア……」

クリストを狙う以上、恐らくあの青年とは再び戦うことになるだろう。恐らくあの青年は、これからクリストと行動を共にするだろうし、クリストはあの青年へ護衛してくれと頼むだろう。

命令通りクリストを狙っていれば、いずれはあの青年と戦える。そこまで考え、ジエノは再び笑みを浮かべた。

「疑似聖杯？」

青蘭がクリストの言葉を繰り返すと、彼は静かに頷いた。

クリストを助けた翌日、目を覚ました彼は青蘭達の、状況を説明してほしいという要求に快く応じてくれた。

「疑似聖杯と言うのは、赤石を受け入れ、変質させてその膨大な神力を利用するための器、聖杯の模造品だ」

「聖杯を……模造したというの!？」

声を荒げた麗に、クリストはあくまで冷静な態度で頷いた。

「ゲルビアの国王、ハーデンは先日、赤石を入手した」

クリストの言葉に、彼を除く全員の表情が険しく歪められた。青蘭達の脳裏を、赤石を奪われた瞬間の映像が過っていた。

「その赤石の神力を利用するには聖杯と呼ばれる器が必要だったが、未だに所在不明。そこで陛下は、聖杯を模造しようと考えられたのだ」

「それが、疑似聖杯……」

伊織が呟くと、クリストは小さく頷いた。

「何人ものニューピープルの神力と、我々研究者の技術によって、疑似聖杯を造り出すことには成功した。成功したのだが……」

クリストは険しい表情を見せつつ、言葉を続けた。

「私は思ったのだ。陛下はゲルビアという大国を持ちながら、これ以上何のために力を欲すると言うのか……。私は陛下に、赤石の力

を与えるのは危険だと判断した」

「ゲルビア国王、ハーデンの目的。それは依然として不明なままだった。ゲルビア帝国と言う、大陸どころか世界最大とも言える大国を持ちながら、赤石に秘められた膨大な神力を彼が欲する理由。これ以上彼が、何を求めているというのか。それは青蘭達には勿論、クリストにもわからなかった。」

「それで、結局疑似聖杯はどうなったんだ？」

光秀がそう問うと、クリストはここだよ、と自分の胸を叩いた。

「疑似聖杯は、私の体内にある」

「ッ！？」

青蘭達は驚愕に表情を歪め、クリストを凝視した。

「実験として私を器に、疑似聖杯を造った。研究の結果わかったことなのだが、神力を扱うことが出来るのは人類、もしくはそれに準ずる生命体だけだ。故に聖杯だけで赤石を受け入れても神力を扱うことは出来ない」

「だから聖杯は人間の体内になければならない？」

クリストの言葉を続けるかのように問うた麗へ、クリストはそうだ、と答えた。

「ジェノが……ゲルビアが狙っているのは私の中の疑似聖杯だ。私を生け捕りにし、赤石の器として利用するためにな。私は陛下に……いや、ハーデンへ赤石の力が渡るのを恐れ、疑似聖杯を身に宿したまま逃亡したのだ」

これで合点がいった。クリストがジェノ程の男に追われていたのには、彼の体内にある疑似聖杯が原因だったのだ。彼が必死に逃げる理由も、ジェノがクリストを追う理由にも、これで説明がつく。

「疑似聖杯を造ることが出来たニューピープルの神力使いは、疑似聖杯が完成した後に死亡している。そして、彼と同じ神力を使えるニューピープルをもう一度創り出すことはほぼ不可能に等しい。何

故なら彼とその能力自体、偶然創り出されたものだから……」

つまり、もう一度疑似聖杯を造り出すことは実質不可能。ということになる。

「なるほど……ね」

「恐らくもうじき私もあの白髪の少年のように、指名手配されることになるだろう」

白髪の少年、という言葉に反応し、青蘭は表情を変えた。

「知り合いか？」

「……ああ」

「私は、あの少年が悪人だとは思わん。写真だけでも十分にわかる。あれだけ真つすぐな目をした少年のどこが犯罪者に見えるだろうか……。恐らく彼は、ゲルビアにとって何かしらの脅威になるか……。それとも何か情報を持っているのか……。どちらにせよ、私は彼が悪人だとは思わん」

個人的な見解だがね、と付け足して、クリストは微笑んだ。

「ジエノはその……ニューピープルとか言う奴なのか？」

「いや、彼は人間だ」

光秀の言葉にそう答え、クリストはジエノのことを思い出したのが表情を強張らせた。

「……貴方を保護しても良いわ」

そう言った麗へ、クリストは本当か！？ と強張らせていた表情を少し明るくして問うた。

「ただし条件があるわ。貴方の疑似聖杯を、東国復興のために使わせること」

「構わん」

クリストがそう答えると同時に、青蘭達は驚愕の表情を見せた。

「おい、そんなに簡単に答えて良いのかよ!？」

「ハーデンの手に渡らなければそれで良い。それに君達が赤石の力を悪用するようなら 自ら命を絶つただけだ」

クリストが嘘を吐いていないのだと、青蘭は直感的に判断した。

彼の目は、本気だ。赤石を悪用させないためなら、彼は本当に自ら命を絶つだろうと、容易に想像出来る程に、彼の目は本気だった。その覚悟の強さに、青蘭はゴクリと生唾を飲み下した。

「それともう一つ　貴方が知っているニューピープルの情報を、全て吐き出しなさい」

「……良いだろう」

静かに、クリストは頷いた。

ニューピープルの成り立ち。彼らが全員神力を持つこと。人間を超越した身体能力を持つこと。知っている全てを語ったクリストは、己が運命の全てを麗達に委ねることに決めた。それ以外に生き残る術はないし、何より今頼れるのは彼らしかいなかった。

どうするにせよ、自分が命さえ絶てば赤石の力が悪用される可能性は減る。それだけは確かだった。

そんなことを考えつつ、クリストは青蘭と光秀の部屋でベッドに横たわっていた。床で良いと言っているのに、青蘭という青年は自分のベッドに寝てくれと何度も頼んでいた。他人が床で寝ている中、自分だけベッドで寝ているのは忍びなくて眠れないのだそうだ。故に今彼は、野宿用の寝袋にくるまって床で眠っている。

ジェノに狙われている。という不安感が、クリストの安眠を妨害した。助けられた直後は何も気にせずただひたすらに眠ったが、今思えばよく眠れたものだと思う。

嘆息しつつ、クリストが窓に視線を向けた　その時だった。

「よオ」

不意に、窓の外にジェノの姿が見えた。恐らく大鎌の先端を屋根に引っ掛けているのだろう、ジェノは右手で大鎌の柄を握り締め、ぶら下がるようにして窓からこちらを見ていた。

「開けるよオ……」

恐怖に震えつつ、青蘭達を起こすことも出来ぬまま窓を開けると、ジエノは笑みを浮かべた。

「閉鎖された研究所があるだろ、そこに来いイ……」

ただし、と付け足し、ジエノは左手で眠っている青蘭を指差した。

「ソイツを連れて二人だけで来い、わかったかア？」

「誰がそんな要求を……」

「良いのかア？ この町の人間の首、狩っちまってもよオ？」

ジエノはニヤリと嫌らしい笑みを浮かべると、クリストの返答を待たずにじゃあなア、と言い、身体を後ろへそらした。その勢いで屋根に引っ掛けていた大鎌が外れ、ジエノは地面へと急降下していく。その途中、ジエノは壁を勢いよく蹴って建物から離れると、空中でクルリと回転する。そうすることで勢いを殺し、ジエノは地面へ無事に着地した。

そして窓から啞然とした表情で見つめているクリストへ視線を一度だけ向けると、その場を立ち去って行った。

彼の目的はクリストの持つ疑似聖杯、そして 青蘭との戦闘。

「戦闘狂が……ッ」

侮蔑の意味を込めてそう吐き捨てると、クリストは慌てて部屋を飛び出していった。

「閉鎖された研究所があるだろ、そこに来いイ……」

突如聞こえた声に気がついて青蘭は目を覚ました。しばらく誰かとクリストが話していたが、やがてクリストは部屋の外へ出ようとした。呼び止めようとしたが、そう思った時には既にクリストは部屋の外に出てしまっていた。

あの慌て方は普通じゃない。そう感じた青蘭はすぐに着替えると、年のために刀を腰に差した。光秀を起こすかどうか少し迷ったが、自分だけで十分だろうと判断し、光秀を起こさずに青蘭は部屋を出た。

美しい、三日月だった。まるで鋭利な刃物を思わせるようなその形に、伊織は少しの間見とれていた。静かに輝くその美しさとは裏腹に、狂気も感じられる。美しさと狂気、その二つが絶妙に絡まり合い、月は幻想的な雰囲気醸し出す。そんな風に考えた後、伊織はクスリと笑みをこぼした。

「いつもはこんなこと、考えないのにな……」

気持ち昂ぶっているのだろうか。やはり眠れなかったのは、気持ちが昂ぶり過ぎていたせいなのかも知れない。

ベッドで眠りにつこうと目を閉じても、中々寝付けなかった伊織は、気分転換をするために外に出て月を眺めていた。昨日からずっとこんな感じで、昨日なんかはベッドに入ってから一時間近く眠れずにいた。

今日も眠れそうになかったため、伊織は図書館の入り口付近で静かに月を眺めながら夜風に当たっていた。

助かった。本当に。伊織がいなきゃ、今頃俺はまだ宿で沈んでたよ。

昨日聞いた青蘭の言葉が、伊織の頭の中から片時も離れない。伊織がいなきゃ。他の誰でもなく、伊織自身を青蘭が必要としてくれていたのが、伊織にとってはたまらなく嬉しかった。ニューピールがどうだとか、疑似聖杯がどうだとか言う話がどうでも良く感じてしまう程、伊織の頭の中ではその時の青蘭のことばかりを繰り返して反芻していた。

あの時伝えるべきだったのか、それとも伝えなくて正解だったのか。恋愛感情は今自分達に必要な、必ずそれはこの旅の中で邪魔になる。頭では理解出来ていても、どうしても抑えきれずにいる自分がもどかしかった。

いや、もしかすると旅の邪魔になることよりも、今の関係を壊してしまうことを恐れているのかも知れない。

三日月のように欠けたまま、満たされることのない関係。

何がしたいんだろ、私。

内心そんなことを呟き、伊織は小さく嘆息した。その時だった。え……っ？

勢いよく図書館入り口のドアが開かれ、血相を変えたクリストが伊織の隣を走り去って行った。声をかけようとしたが、声をかける暇もなく、クリストは猛スピードで駆けて行った。

「クリスト……さん？」

啞然とする伊織の後ろで、もう一度ドアの開く音がした。

「伊織！」

「せ、青蘭君っ！？」

振り返ると、クリストと同じように血相を変えた青蘭の姿があった。

「クリストさん、通らなかつたか！？」

「クリストさんなら、今血相を変えて……」

「どっちへ行つた！？」

そう問われ、伊織がクリストの走って行った方向を指差すと、青蘭はありがとう、とだけ言い残してすぐにその方向へ走り出した。

「あ、ちよつと待って！ 私も行く！」

凄まじいスピードで駆けて行く青蘭の背中を、伊織は必死に追いかけた。

立ち入り禁止を示すロープが張られている研究所の前で、ジェノは目を閉じて待っていた。極秘の研究をしていたためか、研究所は林の奥に存在するため、研究所の周りは木々で囲まれている。研究所の周りには塀があり、その周囲にロープが張られている。研究所の前は伐採されたのか木々がなく、開けた土地になっていた。ジェノはロープの先の、塀に寄り掛かるようにして立っている。

「来たぞ……」

クリストがそう言うと、ジェノは目を開き、前髪をかき分けてクリストへ視線を向け、クリストの姿を確認すると、ニヤリと笑みを浮かべた。が、すぐにその表情から笑みは消える。

「あア……？」

ジェノは短く声を上げ、キョロキョロとクリストの周囲を見回す。

「おいイ……アイツはどうしたア……」

「お前の目的は私の持つ疑似聖杯だけのハズだ。彼は関係ない」

「あア……？」

ギロリと。ジェノは長い前髪の間からクリストを睨みつけた。

怯み、クリストは少しだけ後ずさる。

「テメエ……」

呟くように、ジェノがそう言った瞬間、彼の手には大鎌が握られていた。回避しようとクリストが動くよりも先に、ジェノが大鎌を振る。振られた大鎌は伸び、刃先をクリストの首筋ギリギリまで接

近させたところでピタリと止まった。

「連れて来いっつっつたるうがよオ……ふざけんじゃねえぞオ……！」
怒気の込められたその言葉に、クリストは委縮した。それにも構わず、ジエノは大鎌の刃先をクリストに近づけたまま、ギロリといっそう強くクリストを睨みつけた。

「覚悟は出来てんだろオなア……」

「良いのか？ 疑似聖杯ごと私が死んでも……！」

「知るかよオ……ッ！」

大鎌を一度クリストから離し、勢いをつけてクリストの首目がけてジエノが大鎌を振った。その瞬間だった。

金属音と共にジエノの大鎌は防がれる。

「君……ッ」

「クリストさんっ！」

クリストの背後から駆けよってくる少女の 伊織の音が聞こえる。

「ッハアツ！ 待ったぞ小僧オツ！」

大鎌を元の長さに戻すと、ジエノはニヤリと笑みを浮かべ、先程大鎌を防いだ青年へ視線を向けた。

「クリストさん、大丈夫ですかッ！？」

刀を構え直し、青蘭がそう問うた。

「な、何故ここに……！」

「それは俺達の台詞です！ 何で勝手にジエノの所なんか……ッ！」

「すまない、と謝罪の言葉を述べ、クリストはうつむいた。

「伊織、クリストさんを頼む」

青蘭の言葉に、伊織はコクリと頷くと、クリストと共に青蘭より後方へと駆けて行った。

「楽しませるよオ……小僧オツ！」

心底嬉しそうな声音で、ジエノは声を上げると大鎌を青蘭の首目がけて振った。青蘭はすぐに刀で受け、弾くと同時に、青蘭は神力

を発動させた。

身体中に力のみなざる感覚に、青蘭は思わず笑みを浮かべた。能力は、一時的な戦闘力の強化。神力によって強化された足で、青蘭はジエノの元へ駆けた。

「面白エぞオツ！」

狂った笑い声を上げながら、ジエノは大鎌を今度は逆方向から青蘭の首目がけて振った。青蘭は前進しつつも即座に跳躍し、大鎌を回避する。

「ッ！」

青蘭の跳躍力に、流石のジエノも少しだけ驚愕の表情を浮かべる。青蘭は大鎌の上に一度着地すると、それを台にして前進しつつ更に跳躍する。

「おおおおッ！」

上空からジエノへ刀の刃先を向け、青蘭は勢いよく降下する。

「ッハア！」

ジエノはどういうわけか歓喜の声を上げると、降下してくる青蘭とその刀の刃先を右に身をかわして回避する。

「ッ！」

ザクリと。青蘭の刀が地面に突き刺さった。

「良いぞ小僧オ……！面白エ！」

青蘭が地面に突き刺さった刀を素早く抜くのと、ジエノが大鎌を元の長さに戻すのはほぼ同時だった。

「おおおおアッ！」

声を上げつつ、ジエノ目がけて横に振られた青蘭の刀は、元の長さに戻ったジエノの大鎌によって防がれる。

「来いイ……来いイ……！」

ニヤニヤと笑みを浮かべたままそう呟くジエノ目がけて、青蘭は何度も何度も刀を振る。右、左、上、下、様々な方向からジエノ目がけて振られる刀を、ジエノは凄まじい反応速度によって大鎌で防ぐ。

能力で強化した速度に、ついてきている……！？

今までチリー以外に、武器と武器での戦いで青蘭の動きにまともについてきた人間は、一人もいなかったため、青蘭は表情に驚きの色を見せた。

驚愕する青蘭とは裏腹に、ジエノは笑みを浮かべたままだった。

「ニューピープルか……ッ!?」

「違エよオ……!!」

そう言うと同時に、ジエノは大鎌を大きく振って青蘭の刀を弾いた。刀を弾かれ、がら空きになった青蘭の腹部に、ジエノは前蹴りを繰り返す。

「ぐッ……!!」

呻き声と共に、青蘭は後退するが、すぐに刀を構えなおす。

「良いなお前エ……名前は何……」

「……青蘭」

呟くように青蘭が答えると、ジエノはニヤリと笑みを浮かべた。

「覚えとくぜエ……今までで一番、強い手練^{うま}だったってなア……!!」

そう言った時のジエノの瞳に、青蘭は戦慄した。

ジエノのその笑みは、瞳は、驚く程に狂っていた。ニューピープルではない、ただの人間であるはずなのに、ジエノの瞳は常人ではあり得ぬ色を映しているように見えて仕方がなかった。

勝てるのか……コイツに……！

そんな疑念が脳裏を過ると同時に、青蘭の額を嫌な汗が流れた。

「来ねエならア……」

スツと。ジエノが身構える。

「こつちから行ってやるよオ！」

ジエノは素早く駆け出し、青蘭目がけて大鎌を振った

「ッ！」

が、それは青蘭の首に刃先が触れる直前でピタリと止まり、そのまま青蘭より後方へと大鎌は伸びて行く。その時には既に、青蘭は回避の動作を取っていた。

「アホがア！」

先程の一振りがフェイントだと気づいたのは、青蘭が身を屈めた後だった。

凄まじい勢いで大鎌は縮み始め、身を屈めている青蘭目がけて戻ってくる。

「くッ！」

素早く反応し、青蘭は振り返ると同時に刀で大鎌を防いで一瞬間を稼ぐと、背中から身を投げ出すようにして地面へ倒れる。すると、大鎌は青蘭の上を通り過ぎて元の長さへと戻っていく。

「やるじゃねエかアツ！」

狂った笑みを浮かべたジエノは、元の長さに戻った大鎌を振り上げ、倒れている青蘭へ刃先を向けて振り下ろす。青蘭は寝返りを打つようにしてそれを回避した。

ザックリと大鎌が地面へ刺さっている隙に、青蘭は立ち上がった

態勢を立て直すと、接近してジェノへ斬りかかる。しかし間一髪ジェノは大鎌を抜くと同時に。青蘭の刀を大鎌で防ぎ、弾いた。そしてたたらを踏んだ青蘭へ、ジェノは大鎌を薙ぐ。が、素早く青蘭は跳躍し、大鎌を回避する。

「チイツ」

先程のように踏み台にされるのを防ぐためか、ジェノは大鎌を構え直してバックステップで青蘭から距離を取る。と同時に、青蘭は地面へ着地した。

「面白エ……面白エなアおいイ……！」

最高に楽しい、とでも言わんばかりの表情でジェノは高笑いし始めた。月明かりに照らされ、夜空を仰ぎつつ奇声にも似た笑い声を上げるジェノの姿は、どうしようもなく狂って見えた。青蘭でさえもが、息をのんで何も言えなくなる程に、その姿は狂気に満ちていた。

「お前も楽しいだろオ……そうだろおいイ……ッ！」

狂気で表情を歪めると、ジェノは大鎌を青蘭の首目がけて左へ薙いだ。と同時に、大鎌は伸びていく。すかさず青蘭は刀で大鎌を受けようとすが

「なッ！」

ぐにやりと。大鎌が曲がった。青蘭が刀で受けようとした反対側から、青蘭の首へ大鎌の刃が迫る。

「ッハアッ！」

ジェノがそんな声を漏らすのとほぼ同時に、青蘭は身を屈めた。

「厄介だ……ッ」

間一髪大鎌を回避した青蘭は、下から刀を振り上げるようにして大鎌の柄を切った。思いの外容易に大鎌の柄は刀によって切られ、ポトリと音を立てて刃の部分が地面へ落ちる。

前に、チリーの大剣が破壊されたことがある。その際チリーは、圧倒的敗北感を植え付けられ、しばらく神力を使えなかった……。あまり想像は出来ないが、この男も、大鎌を使い物にならなくされ

れば、少しは動揺を見せるかも知れない　そんなことを青蘭が考えていた矢先だった。

「やるじゃねえかア……」

動揺するどころか笑みを浮かべると、ジエノは一度大鎌を消し、再び大鎌をその右手の中に出現させる。

「再発動……ッ!?」

「そんなに珍しいことじゃねえだろオ……そんなに驚くなよオ　なアッ!」

青蘭が驚愕に表情を歪め、動きを止めている隙に、ジエノは大鎌で青蘭の首ではなく　青蘭の刀目がけて薙いだ。

「しまっ」

「青蘭君っ!」

青蘭が声を上げた頃には既に遅く、青蘭の持っていた刀は伸ばされた大鎌によって弾き飛ばされる。刀は宙を舞い、その刀身に月光を反射させつつ、音を立てて地面へ落下する。

「来るな、伊織!　麗さん達を」

後方から、青蘭の元へ駆けよってくる伊織を、青蘭が制止しようとしたその時だった。

「楽しかったぜエ……」

呟くようにそう言うと、ジエノは大鎌を一度元の長さに戻すと、思い切り振り上げた。

「じゃあなア……」

「伊織ッ!　来るなアアアッ!」

青蘭がそう叫ぶのと、目の前で鮮血が舞うのはほぼ同時だった。

「いお……り……」

青蘭の表情が、みるみる内に蒼白になっていく。そんな青蘭の顔を、赤い血が汚した。

「あア……?」

ジエノですら、驚愕で表情を少しだけ歪めている。

「そん……な……」

彼女の手が、震えながらもそつと青蘭の頬に触れた。細く華奢なその手が、青蘭には消えてしまいそうな程に儚く見えた。

「伊織……伊織……ッ！」

青蘭をかばうようにして、伊織の背中にジエノの大鎌が突き刺さっていた。

大鎌の刃は伊織の背中を貫通し、胸部から突き出ている。彼女の着物は真つ赤な血で染め上げられ、鮮やかに赤く染まっていた。

「青蘭……君……っ」

倒れかける伊織の身体を、青蘭は慌てて抱き止めた。抱き止めたその華奢な身体は、青蘭が思っているよりもずつと軽かった。

「伊織……何で……ッ！」

青蘭の言葉に伊織が答えるよりも先に、伊織の身体から大鎌が抜かれた。

「……うっ」

呻き声と共に伊織の身体から血が噴き出し、再び青蘭を赤く汚した。

「興醒めだなアおいイ……」

ジエノは険悪な表情を見せると、大鎌を元の長さに戻した。

「青蘭……君……大丈夫……夫？」

かすれかけた声でそういつつ、伊織は顔を上げて青蘭へ視線を向けた。

「伊織……何で、こんな……」

触れている彼女の身体が、徐々に冷たくなっていく。

死が、彼女に迫っているのだと青蘭はすぐに理解した。

「おい！　しつかりしろ……伊織！」

必死な表情で声をかける青蘭とは裏腹に、伊織は傷口から血を大量に流しながらも、どういうわけかニコリと微笑んで見せた。

「良か……つたあ……私、青蘭君の助けに、なれた……んだね……」
途切れ途切れに、かすれた声で伊織はそう言って、その細い両腕で青蘭の肩を抱き寄せた。青蘭の胸に顔を埋め、伊織は暖かい、と呟いた。触れ合った彼女の身体から伝わる体温が冷たくて、青蘭は少しでも温めようと伊織を抱きしめる。すると、伊織は幸せそうな笑みをこぼした。

「私ね……ずっと、青蘭君のこと……好きだった、よ？」

伊織の言葉に、青蘭は耳を疑った。

「伊織……何、言って……」

伊織は青蘭の胸から顔を離すと、今にも消えてしまいそうな笑顔を浮かべて、青蘭の顔を見上げた。

「やっと、……やっと、言えた……」

そんな伊織の様子に、青蘭は何て言葉をかければ良いのかわからず、ただ戸惑った。徐々に冷たくなっていく彼女の身体を抱いたまま、青蘭は幸せそうな伊織の笑顔を見つめ続けることしか出来ずいた。

「ずっと、ずっとだよ……ずっと好き、だった……小さい時から……」

まるで、最期の言葉。

出し惜しみしたくない。これが最期。そう言わんばかりの声音で、伊織は言葉を続ける。

「ねえ、そんな顔……しないで」

青蘭の頬にもう一度触れ、伊織は青蘭へ微笑みかけた。

「私……幸せだよ？ 大好きな……青蘭君の胸の中で……死ねて……」

伊織のその言葉に、青蘭は血相を変えた。

「死ぬとか言うな……ッ！ 伊織が死ぬなんて……」

考えられない。青蘭がその言葉を紡ぐとすると、伊織はそれを制止するかのように青蘭の唇へ人差指で触れた。

「ありがとう、青蘭君」

最後にもう一度だけ微笑んで、伊織は目を閉じた。

冷えた彼女の体温は、もう戻らない。青白くなってしまった彼女の顔は、三日月によって美しく装飾された。

彼女の口から吐息が漏れることはもうない。青蘭に唇に触れていた手は、力を失ってだらりと肩から垂れ下がる。華奢な彼女の身体は、青蘭へともたれかかった。

伊織は笑顔のまま、息を引き取った。

「伊織……おい、嘘だろ……返事してくれよ……」

ピクリとも動かない、伊織の冷たい身体を青蘭が揺さぶるが、一切の反応を示さない。

「伊織……伊織イツ！」

返事など、あるはずもなかった。

「うわあああああああああッッ！」
嗚咽混じりの咆哮が、辺りへ響き渡った。

「終わったかア……？」

退屈そうな声音で、今までの一部始終を何も言わずに眺めていたジエノが問うた。

「ジエ……ノ……！」

青蘭の瞳が、ジエノの姿をしつかりと捕えた。

「ッ！」

その眼差しに、ジエノは戦慄する。が、すぐにニタリと笑みを浮かべた。

「良い顔だア……良い目だなアおいィ……目が狂^わってんじゃねえかア……」

ジエノのそんな言葉に、青蘭は表情を醜く歪めた。原型すらとどめぬ程に歪められたその顔は、最早人の顔とは言えない程に憎しみに満ちていた。

「私の……せいだ……」

ボソリと。呟くように後方でクリストはそう言つと、ポケットから一本のナイフを取り出すと、自分の喉へその刃を向けた。

「私がいるから……疑似^{こんなもの}聖杯があるから悲劇が生まれるッ！」

「テメエまさかア……ッ！」

焦りの表情を見せるジエノに、クリストはニヤリと笑んで見せた。「死ぬ気かア……ッ!？」

ジエノの言葉に、クリストは笑みをこぼした。

「そつだ。疑似聖杯がお前達の物になるくらいなら、私は死を選ぶ……」

向けられた刃は、徐々に喉元へと近づいていく。

「良いのかア……？ この町の間人、全員の首を狩ってもオ……」

「それは不可能だ」

クリストはピシヤリと断言すると、青蘭へチラリと視線を向けた。

「さらばだ……ッ！」

その言葉と共に、クリストは自分の喉へそのナイフを突き立てた。全く躊躇する様子すら見せないクリストに、ジェノですらその表情を驚愕に歪めた。

「クリストさんッ……！」

一目で即死だとわかる出血量。ナイフの突き刺さった喉から大量の血液を垂れ流し、クリストはその場に崩れ落ちた。

「あア……ッ！ ふざけんじゃねえぞオツ！」

ジェノは怒りを露わにすると、クリストの死体目がけて大鎌を伸ばす。そして何度も何度もクリストの死体を大鎌で突き刺していく。

「クソがア……ッ」

ジェノはクリストから大鎌を抜くと、元の長さに戻し、舌打ちする。そして再び青蘭へと視線を向けた。その時だった。

「あア……？」

ジェノのポケットから、ノイズのような音が流れ始める。すぐにジェノは、ポケットからノイズ音の元……トランシーバーに似た機械をポケットから取り出した。

『ジェノ、戻れ』

機械から聞こえる声に、ジェノは顔をしかめた。

「あア？ 擬似聖杯はどうすんだア……って、アイツはもう擬似聖杯ごと死んじまったがなア……」

『……そうか。まあ良い、既にクリストは不要になっている』

機械から聞こえるその声に、青蘭は眉を動かした。

『聖杯保持者候補が見つかった……戻れジェノ。陛下がお呼びだ』

ジェノは小さく嘆息したが、やがてわかったよオ、と不満げに答えた。

「聖杯保持者だと……！」

その言葉に反応した青蘭へ、ジェノは舌打ちしつつ視線を向けた。『今から迎えをよこす……。他に誰かいるのか？』

「あア、ちよつとなア……」

決まり悪そうにそう答えて機械をポケットの中にしまつと、ジェノは研究所の方へ視線を向けると、大鎌を研究所の屋根目がけて伸ばした。そして大鎌が研究所の屋根に引っかかったのを確認すると、ジェノは大鎌を元の長さに戻し、その勢いで屋根の上へとジェノは上った。

「ジェノ……ッ！」

伊織の亡骸を抱きかかえたまま、研究所の屋根の上に立つジェノを睨みつける青蘭を、ジェノは静かに見下ろした。

「一応帰って帰ってとくかア……」

ジェノは気だるそうな表情を見せた後、クリストの死体目がけて大鎌を振った。振られると同時に伸びた大鎌はクリストの身体へと突き刺さる。

「何を……」

青蘭が言葉を紡ぎ切るより先に、ジェノはクリストの身体が突き刺さったままの大鎌の長さを元に戻した。まるで釣りあげるようにして大鎌を振り、スタボロになったクリストの身体を宙に舞わせ、自分の手元へ落した。

「重てエなア……」

舌打ちしつつ、ジェノがクリストの身体を片手で背負った。その時だった。

「ッ！」

空の彼方から、ジェノの頭上へと青蘭が見たことのない巨大な飛行物体が飛来した。ソレは蜻蛉とんぼのような形をしており、羽の代わりに巨大なプロペラが付いており、凄まじい勢いでグルグルと回転している。恐らく、あのプロペラで飛行しているのだらう。飛行物体はジェノの頭上でピタリと制止すると、ドアらしき部分が開き、中からロープのはしごが降ろされる。

「テメエとの勝負は一旦お預けだア……それまで精タイ……」
俺のことでも憎んでろオ。

そう言い残して笑みを浮かべると、ジェノははしごをしっかりと

掴んだ。

「ジエノッ！」

青蘭の言葉にジエノが答えない内に、飛行物体は轟音をさせながら飛び去って行く。

「ジエノ……」

ボソリと。呟くように青蘭は口にした。

見上げた夜空にはいくつもの星が輝いている。青蘭にはまるで、輝きを失った星への当てつけのように見えた。

青蘭が抱きかかえるその細い身体は、もう二度と動くことはない。苦しかったハズなのに、痛かったハズなのに、青蘭の腕の中で、伊織は安らかな表情を浮かべていた。

彼女の白い頬に、そっと触れる。

そこに当然温かみはなく、生を失った死だけが残っていた。

ポトリと。温かいしずくが、伊織の頬へ落ちた。

「ジエノ……ジエノオオオオオオオツツッ！！」

妖艶に輝く三日月が、二人だった一人を照らした。

夜明けと共に、青蘭は宿へと向かった。まだ誰もいない町の中を、独り静かに歩いていく。冷え切ってしまった彼女の身体が、抱き抱えている青蘭の両腕を冷やした。

「見えるか、伊織……。綺麗だろ？俺達はいつも寝ている時間だからわからなかったけど、夜明けってこんなに綺麗なんだ……」

まだ昇り切っていない太陽の光が、一人を照らした。

「この景色、皆で見たかったよな。麗さんと、光秀さんと、それから……兄さんと」

皆で、見たかったよな。

同じ言葉をもう一度呟き、青蘭は自嘲気味に笑った。

「好きだよ」

立ち止まり、青蘭は静かにそう言った。

「俺も、好きだ」

安らかな笑みを浮かべたまま、ピクリとも表情を動かさない彼女の顔へ、そっと自分の顔を近づける。

「伊織のことが……俺も……好き……だ……」

温かいしずくが、冷たい頬を濡らしていく。

「ありがとう……伊織……」

そっと。冷たい唇に、青蘭は自分の唇を重ねた。

さよなら。小さな声で、そう告げた。

「何でだッ！ 何でお前がいながら……ッ！ おい、聞いてんのかッ！」

突き飛ばされ、背中から青蘭は壁に激突した。が、青蘭は特に反応を示さなかった。虚ろな目のまま、ただ茫然と光秀を見つめている。

青蘭達が宿泊している宿の、青蘭と光秀の部屋で光秀は激怒していた。

戻ってきた青蘭の抱き抱えている伊織の亡骸に涙し、そして怒りの声を上げたのだ。

「何で守れなかったッ!？」

光秀の怒声が、青蘭の心に深く突き刺さった。が、青蘭は表情を変えようとしなかった。

「やめなさい……光秀……」

青蘭達へ背を向けたまま、震える声で麗はそう言った。

「でもよ……でもよオツ！」

青蘭のベッドへ横たわる伊織の亡骸へ視線を向け、光秀は嗚咽混じりに、まるで叫ぶように声を上げた。

「何でだ……何で死ななきゃならねエ……何で伊織ちゃんが……ッ！」

「ほんと、何でなんでしようね」

無表情なまま、青蘭は呟くようにそう言った。と同時に、光秀は青蘭の胸ぐらを思い切り掴んだ。

「テメエ……ふざけてんのか……ッ！」

「ふざけてませんよ。本当に、わからないんです」

抑揚のない声でそう言つて、青蘭は言葉を続けた。

「どうして伊織が死ななきゃいけないのか、どうして兄さんが死ななきゃいけなかったのか、そもそも、どうして俺達がこんな目に遭わなきゃいけないのか、全然、何もわからないんです。光秀さんだつて、そうでしょう？」

光秀は言葉を失った。そしてしばらく黙り込んだ後、やや乱暴に青蘭の胸ぐらを放した。

「だから俺、決めたんです」

不意に、青蘭の声に怒気が込められた。

静かに立ち上がり、青蘭は乱れていた服を両手で整えた。

「必ずジエノを……そしてハーデンを……殺すって」

光秀を見ているハズの青蘭の瞳には、憎しみの色だけが映し出されてきた。黒く、ドス黒く。

「陛下ッ！」

城下を見下ろす国王　ハーデンの元へ、一人の召使いの男が息を切らしながら駆けてくる。ハーデンの元へ来るまで全力で走ってきたらしく、男は肩で息をしていた。そんな男へ、ハーデンはどうかしたか？ と表情一つ変えずに問うた。

「はい……姫様が……ッ」

「ミラルが？」

そう問い返すハーデンに、男ははい、と答えると、言葉が続けた。姫様が……お一人で城の外へ……！」

男のその言葉に、ハーデンは眉をピクリと動かした。が、すぐにニヤリと笑みを浮かべる。

「ほう。籠の中は飽きたか」

呟くようにそういうと、ハーデンは小さく溜息を吐いた。

「お転婆なところは変わらん……」

ハーデンは鼻で笑うと、召使いの男へ放っておけ、と告げた。

「ですが……ッ」

「放っておけ」

男はまだ何か言いたそうな顔をしていたが、やがて諦めたかのようにわかりました、とだけ答えた。

「そろそろ奴らも近い、か」

城下に広がる町　パンドラを見渡しつつ、ハーデンはそんなことを呟いた。

アルケスタを出たチリー一行は、野宿を繰り返しつつ何とかアク

タニアと呼ばれる町へ辿り着いていた。アルケスタで手に入れたゲルビア帝国の地図を利用し、ハーデンのいるパンドラへ向かう最短ルートを割り出したカンバーのおかげで、チリー達はアルケスタからアクタニアまで思いの外早く辿り着くことが出来た。

アクタニアからパンドラまでの距離はそれ程ないため、もうパンドラは地図上では目と鼻の先だった。しかし、野宿続きで疲労している身体を休めるため、チリー一行はアクタニアへ少し滞在することに決めたのだが

「もう、何で宿がどこもいっぱいなよ！」

噴水広場のベンチに座り込み、ミラルはそう悪態を吐いた。

「まあ落ち着けて。別に良いじゃねえか野宿でも」

「アンタはそれで良くて、私は野宿じゃ休まらないのよ！」

ミラルに怒鳴りつけられ、少しだけ萎縮するチリーを見、ニシルは嘆息した。

「だよねえ……。ふかふかじゃなくても良いから、そろそろ僕もベツドで寝たいよ……」

ニシルのその言葉に、ミラルは深く頷いた。

「「はあ……」」

同時に肩を落として溜息を吐いたニシルとミラルへ目をやり、トレイズは確かにな、と呟くような声で言った。

「少し違和感がありますね……」

「違和感って、何がだよ？」

深くかぶっていたローブのフードを外し、キョトンとした表情でチリーはカンバーへ問うた。

「おい馬鹿チリ！ フード外すなって！」

慌ててニシルはチリーの背後へ回り、チリーの頭へフードをかぶせた。

「鬱陶しいんだよこれ！ 前が見えにくいしよオ！」

「お前は今ゲルビア中から狙われてるんだぞ！？ ただでさえ僕ら、不法入国者だつてのに……」

ニシルは呆れた様子でチリーを見、小さく溜息を吐いた。

「それで、違和感の話ですけど……。さっきから宿が全ていっぱいというのは、少し変じゃないですかね？」

カンバーの言葉に、トレイズは静かに頷いた。

「ああ、別に観光地でも何でもないこの町で、宿の部屋が空いてないというのは少し違和感があるな。旅人が来ているにしろ、部屋が全て埋まる程来ているとは考え難い」

「それに何だか、宿の人僕らに冷たくない？ 客に対する態度だとは思えなかったよ……」

先程の店主の態度を思い出しつつ、ニシルはそう言った。

部屋を借りようとした彼らに対して、どこも空いてないよ、とだけぶっきらぼうに答えた店主の態度は、確かに客に対する態度とは思えない。

「ううん……とりあえずもう一度、今度は手分けして宿を探してみましようか」

カンバーの提案に、一同は仕方なく頷いた。

宿を探すため、一向は三つに分かれて行動することになった。チリー、ニシルのペアと、ミラル、カンバーのペア、そしてトレイズは一人。じゃんけんで決まったため、チリーとニシルという真面目に宿を探すかどうか、非常に心配な組み合わせが生まれてしまったが、抗議するミラルをニシルが説得し、結局そのままの組み合わせで宿を探すことになった。

「めんどくせえ……もう良いじゃねーか野宿で……」

町の中を歩きつつ、不満げにそう漏らすチリーへ、ニシルは呆れた表情で嘆息する。

「僕やミラルはお前と違ってデリケートだから、野宿じゃしっぴかり休めないんだよ」

「何だと……？ じゃあ俺はデリケートじゃないってのかよー！」

「お前のどこがデリケートなんだよ。デリケートの『デ』の字もないじゃん、野生児もどき」

「誰が野生児もどきだ!」

「お前の他に誰がいるんだよ馬鹿チリ」

「アホのニシルには言われたくねーな」

「ああ、アホなだけの僕ならまだしも……アホな上に馬鹿なチリはもう救いようがないね」

「アホ過ぎて背が伸びないとは、可愛いそんな奴だなお前は」

「アホと背が低いのは関係ないだろ!」

「ああそうか。だよな、だったらアホで馬鹿な俺の背が伸びるわけねーもんな」

ポンポンとニシルの頭を右手で軽く叩きつつ、チリーはニヤリと笑みを浮かべた。

そんなチリーの言葉には答えず、ニシルは前方を訝しげな表情で見つめていた。

「ん、どうした?」

「いや、アレ……」

ニシルが指差した方向から、一人の少女が勢いよく走ってきていた。そしてその後ろには

「うわ、何だありゃ……」

五人のガラの悪そうな男達が、少女を追いかけるように 否、追いかけて走っていた。

「な、何なんですの貴方達っ!」

息を切らしつつ、少女は声を上げたが つまずいてその場へ倒れ込んだ。倒れている少女へ追いつくと、男達はピタリと足を止めた。そんな状況だというのに、周りを歩いている人々は、チラリとだけ視線を向けはしても、見てみぬフリをしてその場を通り過ぎていく。そんな様子を見、チリーは素早く少女の方へ駆け出した。

「あ、おいチリー!」

ニシルの声も聞かず、チリーは少女の方へと駆けて行った。

「お嬢ちゃん……俺らにあんなこと言つといてただですむと思うなよ……？」

眉間にしわを寄せ、鼻にピアスを付けた男が屈み込んで少女へ右手を伸ばした。その時だった。

「お、おいッ！」

茶髪の男が、その鼻ピアスの男へ声をかけた……頃には既に遅く、男の顔面にはチリーの右拳が食い込んでいた。チリーの拳をモロに喰らった男は、そのまま後ろへ吹っ飛ばされ、ドサリと倒れた。

「何だテメエは……？」

ギロリと。スキンヘットの男がチリーを睨む。が、それを意に介さぬ様子で、チリーは不適に笑みを浮かべた。

「ぶっ殺すぞクソガキッ！」

「やってみるよおっさん」

挑発するようにそう言つたチリーへ、スキンヘットの男は勢いよく殴りかかった。しかし、チリーは男の拳が自分の顔面へ到達するよりも速く、男の腹部へ右拳を叩き込んだ。呻き声を上げつつ怯む男の顎に、チリーは駄目押しとしても言わんばかりに、左拳でアップパ―を喰らわせた。

ノックダウンしたスキンヘットの男を一瞥し、チリーは他の男達へ視線を向ける。先程までのチリーの戦いぶりから、チリーにはかなわないと察したのか、男達は後ずさりし始めていた。

「そ、その嬢ちゃんが悪いんだぜ……？俺らのこと下賤な……何たらとか言うから……さ？」

言い訳しつつ後ずさりする茶髪の男を、チリーは軽く睨みつける。そんなチリーの背後から

「死ねコラァ！」

肥満体の男が殴りかかる。が、チリーはまるでそれを見抜いていたかのように、振り返らず男の太った腹部へ肘打ちを喰らわせる。ぐっ……」

そしてそのまま振り返りざまに、チリーは男の顔面へ右回し蹴り

を放つ。チリーの回し蹴りが直撃した男は、鼻から血を吹きつつその場へ仰向けに倒れた。

それを見、残っていた二人の男は、仲間を助けようとはせずに背を向けて逃げ出した。

「ふう……」

嘆息するチリーの元へ、少しだけ離れた場所で見守っていたニシルが駆け寄ってくる。

「おい、何で来なかったんだよ」

「いや、チリーだけで片付きそうだったしさ。それよりその子……」
チラリと。ニシルはうつ伏せに倒れたままの少女へ視線を向ける。
栗色でセミロングの、綺麗な髪をした、平凡な服装の少女だった。
チリーは少女へ近づいて屈み込むと、大丈夫かーと彼女の身体を揺さぶりつつ声をかけた。

「だ、大丈夫……ですわ」

少女は倒れたままそう答え、ゆっくりと身体を起こし、チリーの方へ顔を向けた。

「な　ッ！」

少女の顔を見ると同時に、チリーは驚愕の声を上げる。

「え、何、どうし　え……ッ!？」

少女の顔を覗き込むと同時に、ニシルもチリーと同じように驚愕の声を上げた。

「チリー様……?　もしかして、チリー様ではなくって!？」

鼻先に土が付いたままの少女の顔が、パアツと明るくなる。

「お前は……一体……」

何なんだ、とチリーが問うよりも先に、少女はチリーの身体へ思い切り抱きついた。

「お会い出来て光栄ですわっ!」

少女の顔は、ミラルと瓜二つだった。

「結局、どこも空いてなかったわね……」

溜息を吐きつつ、ミラルはベンチへ座り込んだ。ミラルとカンバーは、空いている宿を探していたのだが、どこも同じで「どの部屋もいっぱいだ」とぶっきらぼうに答えられてしまった。

探し疲れたミラル達は、一旦待ち合わせ場所の広場で休むことにしていた。野宿続きな上に宿が見つからないせいで、ミラルとカンバーの表情には疲労の色が伺える。

「まるで口裏を合わせているかのようですね……」

ミラルと同じように溜息を吐きつつ、カンバーはミラルの隣へ座った。

「ねえカンバー……アレ」

不意に、広場の中央にある噴水の方へ視線を向けたミラルが、隣に座っているカンバーの右肩を叩く。

「何です？」

「あの人……すごく綺麗」

ミラルの指差した先には、一人の女性がいた。彼女は踊り子のような露出の多い服装をしており、両手には扇子を持っていた。

「ッ！」

その彼女の姿に、カンバーは眼鏡の奥の瞳を驚愕の色に染めた。

そんなカンバーの様子には気付かず、ミラルは女性をうっとりとした表情で見つめている。

彼女は背中まで伸ばした長い金髪を舞わせながらクルリと回転し、両手の扇子を開く。そしてそのまま華麗に、彼女は舞い始めた。

軽やかな動きでステップを踏み、扇子と金髪を舞わす彼女の姿は、同じ女性であるミラルから見ても魅力的な程に、美しかった。

広げられた扇子は、まるで翼を開いた孔雀の如き美しさだった。

足。腕。足首。手首。首。腰。彼女のどの部分の動きも、軽やか

で美しく、見るものを魅了する。いつの間にか、彼女の周りには人が集まっていた。

「すごい……」

驚嘆の声を上げるミラルの隣で、カンバーは目を見開き、舞い続ける女性を凝視していた。

「リエイ……」

ボソリと。呟くように、カンバーはそう言った。

「あ、終わっちゃった……」

舞い終えた女性は扇子を閉じると、ペコリと一礼した。そんな彼女へ、集まっていた人々が盛大な拍手を送っている。カンバーの隣では、ミラルも彼女に対して惜しみない拍手を送っていた。

「間違いありません……」

勢いよく、カンバーは立ち上がる。すると、女性はカンバーに気がついたのか、チラリとカンバーの方へ視線を向け　一瞬、驚いたように顔を少しだけ歪めた。

「リエイツ！」

カンバーが、彼女の元へ駆け寄ろうとした時だった。

「おい！　ミラル！　カンバー！」

二人の方へ、チリーとニシルが駆け寄ってくる。が、チリーとニシルの二人だけではなく、彼らの後ろには一人の少女がいた。

「チリーさん、ニシルさん……」

二人の方へ目をやり、彼らの後ろにいる少女に、カンバーは訝しげな視線を向けた。が、すぐにカンバーは先程の女性がいた方向へ視線を向ける。

しかし、そこには既に彼女の姿はなかった。集まっていた人々も、少しずつ散り散りになっていく。どうやら彼女は、もうこの広場を立ち去ったようだった。

小さく溜息を吐き、カンバーは再びチリー達の方へ視線を向けた。「スゲー奴にあったんだよ！」

興奮気味の様子で、チリーは後ろにいる少女を指差した。

「スゲー奴って、その後ろにいる女の子のこと？」

ミラルのその問いには、ニシルがチリーの代わりにうん、と答え
た。

「あの、私……」

少女はそう言いつつ、チリー達の前に出て来る。そんな彼女の顔
を見、ミラルはえっ、と声を上げた。

「ミレイユ、と申します」

鏡を見ているかのような錯覚に、ミラルは襲われた。ミレイユと
名乗った目の前の少女は、髪型こそ少し違うものの、それ以外はミ
ラルと瓜二つだったからだ。目元も、鼻も、口元も、寸分違わず同
じ顔であるように見える程、彼女はミラルとソックリだった。ミラ
ルが毎朝手鏡で見ている顔と、何ら変わりがないのだ。

「私、チリー様にお会いするためにこの町へ来たんですのっ！」

そう言つて頬を赤らめると、ミレイユはすぐさまチリーへと抱き
ついた。

「ちょ、お、うわッ」

その声を上げてはいるものの、チリーはまんざらでもなさそうに
口元を釣り上げている。

「ちょ、ちょっとアンタ！ 何してんのよー！」

「スキンシップですわっ」

怒りの声を上げるミラルに対して、しれっとそう答えたミレイユ
は、チリーの胸に顔を埋めると幸せそうに言葉にならない声を上げ
た。

「す、スキンシップって……いいから離れなさいよ！」

ミラルの言葉には答えず、ミレイユはひたすらチリーの胸へ頬ず
り続ける。

「アンタも……デレーっとした顔してないで、何とかしなさいよっ
！」

「え、何を？」

呆けた顔でそう答えたチリーの右足を、ミラルは立ち上がるのと

ほぼ同時に踏みつける。

「痛エツ！ 何すんだよツ」

「アンタこそ何してんのよっ！」

そんな三人の様子を眺めつつ、カンバーはわけがわからない、とても言わんばかりの表情で嘆息する。

「ニシルさん…… どういうことなんですか？」

カンバーの問いに、ニシルはさあ、と肩をすくめて見せる。

「僕にも何が何だか……」

ミレイユ、と名乗った素性不明の彼女は、チリーのことを知っているらしく、出会ってすぐにチリーへ抱きついた。何でも、チリーに会うためにこのアクタニアへ来たらしいのだが……彼女は何故チリーがアクタニアへ来ていることを知っているのか、そもそも彼女は何故、チリーのことを知っているのか。わからないことだらけだというのに、彼女はニシルがいくら質問しても答えず、ただひたすらにチリーへ擦り寄っているのだった。

「クソ……なんかすごい腹立つなあ、あの光景」

チリーに抱きつくミレイユ、それを見て顔を真っ赤にして怒るミラル、そしてまんざらでもなさそうなチリー。ニシルは無意識の内に、眉間にしわが寄っていた。

「わけがわかりませんね……」

リエイのことも。と付け足し、カンバーは再びベンチへ座り込んだ。

「あ、トレイズだ」

そうこうしている内に、彼らの元へトレイズが歩いてくる。

「宿が見つかったぞ」

「え、ホントに!？」

嬉しそうにそう言ったニシルに、トレイズはああ、と小さく答え

た。

「町の隅にあるボ口宿だが、まあ野宿よりはマシだろう」

「うん、マシ！ かなりマシ！ じゃあ、ベッドで寝れるんだよね

!？」

興奮気味のニシルに、トレイズは微笑しつつ小さいがな、と答えた。

「それより……」

訝しげな表情をし、トレイズはチリーとミレイユの方へ視線を向けた。相変わらず先程と同じようなやり取りが繰り返り広げられており、チリーは痛がったり嬉しがったりと、表情が目まぐるしく変わっていつている。

「うん……とりあえず説明は宿に行きながらで良いかな……？」

「……ああ」

確かにその宿は、トレイズの言う通り「ボロ宿」だった。アクタニアの隅の方にある宿で、泊まっている客はチリー達を除けばゼロ。建物自体があまり大きくなく、部屋の数も少ないようだった。ある程度手入れはされているものの、やはり所々老朽化しているように見える。そんな宿の中に、五人用の部屋があるというのだから、少し驚きだった。てっきり、二、三人しか入れない部屋が何部屋もあるだけなのかと、チリー達は思っていたのだが、この宿は五人部屋や八人部屋など、大人数で泊まれる部屋ばかりだった。

「で、この五人部屋にしたのね」

綺麗にはあるものの、お世辞にもフカフカとは言えないベッドの上に腰掛け、ミラルはそう言った。

「ああ。それよりも……」

チラリと。トレイズはミレイユの方へ視線を向けた。

「一緒に泊まるつもりか？」

トレイズの問いに、ミレイユは当然ですわ、としたり顔で答えた。

「ここ、五人部屋なんだけど」

冷たく言い放ったミラルには反応しようともせず、ミレイユは別のベッドに腰掛けているチリーへ再び抱きついた。

「って人の話聞きなさいよ！」

「チリー様もふもふ」

「もふもふじゃないわよ！　そうやってすぐチリーに抱きつくのやめなさい！」

怒鳴るミラルとは裏腹に、チリーはデレーっとした表情で天井を見つめている。

「もふもふかあ」

「アンタも……ふざけたこと言っていないでその子から離れなさいっ！」

再び繰り広げられるチリー争奪戦に、ニシルは呆れ顔で、今日何度目ともわからない溜息を吐いた。

「チリー、僕らからの話は聞いてくれそうにないから、チリーからその子に色々聞いてみてよ」

「ん、ああ。それもそーだな」

ニシルの言葉にそう答えると、チリーは抱きついてくるミレイユを一旦身体から離れた。

「なあ、お前一体何者なんだ？　何で俺のこと知ってたんだ？」

「私ですか？」

キョトンとした表情でそう問い返すミレイユに、他に誰がいるのよ、とミラルが悪態を吐く。

「チリー様のことは、お父様からお聞きしましたの。我がゲルビア帝国にあだなす不届きな輩だと、お父様は仰いました」

「その、お父様ってまさか……！」

ニシルの言葉に、ミレイユはコクリと頷いた。

「はい、私の父……お父様は、ゲルビア帝国国王、ハーデンですわ」

その瞬間、その場にいた全員が驚愕に表情を歪めた。

父親は、ゲルビア帝国国王ハーデンだと、確かにミレイユはそう言った。そのことに誰よりも驚いていたのは、他でもない、ミラルだった。

「ちょ……ちょっと待ってよ！ 私、妹なんて……」

知らない。と、咳くようにそう言って、ミラルはうつむいてしまった。

「当然ですわ。私、あなたの妹ではありませんもの」

「でも、ミラルは一人娘で、お母さんは……」

言いかけ、途中でニシルは口をつぐんだ。

「ええ、お父様の奥様……シルフィア様は亡くなられています。私は」

一瞬、言葉を紡ぐミレイユの表情が暗くなる。が、ミレイユはそのまま言葉を続けた。

「私は、王女^{ミラル}の代用品ですわ」

代用品。そう言った時のミレイユの表情は、これまでの言動や行動からは想像も出来ない程に暗く、沈んでいた。そんな彼女に何て声をかければ良いのか、チリーにもニシルにも、トレイズにさえわからなかった。

数刻の沈黙。しかし、カンバーのなるほど、という言葉がその沈黙を破った。

「ミラルさんはゲルビアにとっては、女王として跡を継いでもらわなければならない存在……そのミラルさんがいつまでの行方不明、というわけにはいかないでしょう……」

カンバーの言葉に、ミレイユは小さく頷いた。

「だからお父様は、孤児院で王女^{ミラル}そっくりの私を見つけて」

「養子にし、ミラルの代わりに王女として扱った、というわけか」

ミレイユの代わりにそう言葉を続け、トレイズは静かにそう言っ

た。

「でも、ミレイユは何でここに？」

ニシルが不思議そうに問うと、ミレイユは先程までとは打って変わって表情を明るくし、チリーの方へ視線を向けた。

「……俺？」

キョトンとした表情で己を指差すチリーに、ミレイユははい、と満面の笑顔で答えた。

「私は、チリー様に会うためにアクタニアまで来たんですのっ！」
そう言っつて、抱きつこうとするミレイユを、チリーは素早くかわした。

「ちよ、ちよっと待てよ。お前ゲルビアの王女だろ？ 俺はお前の敵で、お前は俺の……」

敵だ。と言おうとして、チリーは言葉を止めた。

「関係ありませんわ」

笑顔のまま、ミレイユはそんなことを言うと、チリーの頬へそつと右手で触れる。

「私、チリー様に一目惚れしましたの……」

頬を赤らめながら、そう言っつて、ミレイユは恥ずかしそうにうつむいた。

「は………？」

チリーが硬直するのと、一同が沈黙するのはほぼ同時だった。そんな一同を意に介さぬ様子で、ミレイユは両手を両頬にあて、キヤーキヤーとわめきながら恥ずかしそうに首を左右に振っている。

「一目……惚れ……？」

啞然とした表情で呟くニシルに、ミレイユははい、と微笑んで見せた。ミレイユのその笑顔に、ニシルは何とも言えない表情になった後、恐る恐るミラルの方へ視線を向ける。

「わ……」

ミラルの顔を見、ニシルは小さく声を上げた。怒っているのか、泣きそうになっているのかもわからない、それこそ「何とも言えな

い」表情のまま、ミラルは硬直したままチリーとミレイユを凝視していた。

そんなミラルの様子に、トレイズはコメントし辛そうに顔をそむけ、カンバーは眼鏡の位置を直しつつ苦笑していた。

そんな中チリーは、「一目惚れした」などと初めて言われたせいで、何をどうすれば良いのかわからない、と言った表情のまま固まっていた。その傍でミレイユは未だに頬を赤らめてキヤーキヤーとわめいている。

「……ふーん」

不意に、ミラルが口を開いた。

「……ミ、ミラル……？」

「そーなんだ」

ニツコリと。ミラルはチリーの方へ微笑みかけた。

しかし、目が笑っていない。その目に、チリーは戦慄を覚えた。

「へー……」

ゆっくりと、チリーの方へミラルは歩み寄り

「お幸せにっ！」

一瞬だけ泣きそうな表情になった後、チリーの右頬へ平手打ちを叩き込む。

パシン。と、乾いた音が部屋に響いた。

「ちょ、ミラル……!?!」

ニシルの声に返事もせず、ミラルはベッドの中へ潜り込むと、そのまま出て来なくなってしまった。

重い沈黙が、部屋の中に訪れた。

ミレイユがチリー達の前に現れたその日の夜、結局ミラルは眠ってしまっただけで、ベッドの中から出て来ないままだった。ベッド

が五つしかないため、色々なことを考慮すればミレイユを寝かせるのはミラルのベッドが最適だったのだが、この状況ではミラルに頼み事など出来るハズもなく、色々心配事はあるものの、ミレイユはチリーのベッドと一緒に眠ることになった。最初の内は、チリーも恥ずかしがって拒否していたが、やはりまんざらでもないらしく、デレーっとした表情で、ミレイユと同じベッドで寝ることにしていた。

そんなチリーの様子に、呆れて何かを言う元気もなくなったニシルと、同じように呆れているトレイズ、そしてただ苦笑するカンバの三人は、気まずい雰囲気のまま各々のベッドで眠りにつくのだった。

そして深夜。チリーの隣で眠っていたフリをしていたミレイユは、全員が寝静まったのを視線だけで確認すると、音を立てずに身体を起こした。

お父様のために。

心の内で呟き、ミレイユは服の中に隠し持っていたナイフをそつと取り出し、チリーの寝顔へ視線を向ける。手足を広げて、いびきをかきながら無防備に眠るチリーに、ミレイユはニヤリと笑みを浮かべると、チリーの身体へまたがった。

お父様が、認めてくれるなら……っ！

ゴクリと生唾を飲み込み、ミレイユはナイフの刃先を、チリーの喉元へ向けた。

そしてゆつくりと、ナイフをチリーの喉元へ振り下ろし突き刺す直前でピタリと止めた。

ミレイユの脳裏を、チリーに助けてもらった瞬間の映像が過つたのだ。周囲の人々が見て見ぬフリをする中、誰よりも速くミレイユの傍へ駆けつけ、助けてくれたチリー。

一目惚れした、というのも、油断させるための嘘ではないのかも知れない。そう自覚し、ミレイユはそつとナイフを収めた。

「私には……出来ませんわ……」

泣きそうな声で呟いて、ミレイユはチリーから降りると、静かにチリーの隣で眠りについた。

ミレイユの一連の行動を視線だけで見ていたカンバーは、ミレイユが眠ってしまったのを確認すると、安堵の溜息を吐いた。カンバーの隣のベッドで寝ていたハズのトレイズも、ミレイユのことには気付いていたらしく、トレイズとカンバーは複雑な表情で互いに視線を送り合った。

「『白き超越者』の仲間と思しき連中を見たわ」

ミレイユがチリーへナイフを向けていたのと同時刻、アクタニアのある場所で、金髪の女性がそんなことを呟いた。

「……それは本当かい？」

女性の言葉に、一人の青年がそう問うた。青年、というよりはまだ少年っぽさの残る顔立ちだったが、彼の放つ雰囲気はおよそ少年のものではなく、どこか殺気じみたものが感じられた。

「だってよ。ニコラス、聖杯保持者の目星はついてんのか？」

先程の青年とは別の男が、隣にいる細身の男　ニコラスへそう問うた。ニコラスは微笑しつつ、ええ、とだけ答えた。

「『白き超越者』がいるってことは……」

グツと。青年が拳を握り締める。そんな青年に、ニコラスは微笑みかけた。

「ええ、そうですね。貴方の目的　」

「兄さんがいる」

静かに、しかし確かな憎しみを込めて、青年は呟いた。そんな青年に、金髪の女性は一瞬だけ悲しそうな視線を送ったが、彼女はす

ぐにかぶりを振り、青年から視線をそらした。

「場所は特定出来ているのかい？」

青年がそう問うと、男は首を左右に振った。

「そこまではまだわかんねえな。だが、この町にいることだけは確かだ。それに……」

男はニヤリと笑みを作ると、そのまま言葉を続ける。

「この町から、アイツらはそう簡単には出られねえ」

男がそう言うと、青年はそうかい、とだけ答え、少しだけ笑みをこぼした。

「僕の目的は兄さんだけだ。後は……アンタらの好きにしてくれ」

「言われなくてもそうするつもりですよ。『白き超越者』と聖杯保持者にしか、私は用がありませんしね」

他はゴミです。と付け足し、ニコラスはクスリと笑った。

「で、聖杯保持者は結局どいつなんだ？」

「まだ推測の域を出ていませんが」

言いつつ、ニコラスは数枚の写真を取り出し、その場にいる全員へ見せる。そこに映っているのは、白髪の少年、背の低い短髪の少年、長髪の青年、眼鏡をかけた青年、そして栗色の髪をした少女。

ニコラスは少女の写真以外を収め、彼女です、と呟いた。

「恐らく彼女が 聖杯保持者です」

ミラルの写真を手には、ニコラスはニヤリと怪しげに微笑んだ。

「……まあたやってるよ……」

チリー達とミレイユが出会った翌日の昼間、昨日と変わらずチリーとミレイユはベッドへ腰掛けてひつつき合っていた。チリー様チリー様と連呼しつつ、何度もチリーへ抱き付くミレイユと、それに対してまんざらでもなさそうに鼻の下を伸ばすチリー。そしてそれを見て、顔を真っ赤にしながらがなり立てるミラル。ミレイユと出会ってからたった一日で、その光景はニシル達にとって当たり前前の光景となってしまうていた。

「何考えてんだらうね……あの子」

呆れ顔でミレイユを見つめつつニシルがそう言つと、その傍でカンバーとトレイズは複雑そうな表情を見せた。

「本当、わかりませんね……」

静かにそう答え、カンバーは嘆息する。

私には……出来ませんわ……。

カンバーの脳裏を、昨晚の出来事の映像が過る。ミレイユが敵なのか味方なのか、カンバーは判断しかねている。それはトレイズも同じらしく、ミレイユに対して何とも言えない表情を向けたまま、考え込むように閉口している。

昨晚の出来事を知らないニシルは、カンバーとトレイズの見せる表情に対して首を傾げたが、まあ良いか、と呟くとベッドへ寝転がった。

「だからっ！ いい加減にしなさいってば！」

チリーにすり寄るミレイユの身体を、無理矢理チリーから引き離し、ミラルは眉間にしわを寄せてそう言い放った。

「あら、何を怒っているのかしら？」

まるで挑発するようなミレイユの物言いに、ミラルの怒りのボルテージは上がっていく。

「おいおい、喧嘩はやめよーぜ」

喧嘩の原因が自分であるというのに、しれっとそんなことを言ったチリーを、ミラルはギロリと睨みつける。

「アンタは黙ってなさい」

その剣幕に気圧され、黙り込むチリーへ視線を向けると、ミレイユは目を細めた。

「チリー様……どうかお気になさらないで下さいまし……あの女のことなんて言うことなんて」

「誰のことよ『あの女』って」

「あら、いましたの？」

「さつきからずー……っといたわよ！ 馬鹿にしてんのっ！？」

怒りを露にするミラルと、余裕のある笑みを浮かべてミラルをこけにするミレイユ。どう見ても、ミレイユの方が一枚上手であった。

「……何回目だと思う？」

ベッドに転がったままミラルとミレイユを眺め、ニシルはトレイズへ問うた。

「……四回目か？」

「残念、今朝から通算六回目の喧嘩だよ」

ははっ、と他人事のように笑い（実際他人事なのだが）、ニシルは片手を広げて見せた。

「とうとう片手じゃ数え切れなくなっちゃったよ」

ニシルのその言葉に、トレイズは小さく嘆息した。

ニシル達がそんなやり取りをしているとは知らず、ミラルとミレイユの喧嘩はドンドン激化していった。

「チリー様あ……ミラルが……ミラルがあ」

「何でチリーに泣きついてんのよっ！ ていうかさつきから何度も離れなさいって言ってるでしょ！」

ミラルの言葉に、ミレイユはニヤリと笑みを浮かべると、ミラルの方へ視線を向けた。

「どうしてですか？」

「え……？」

「どうして私がチリー様から離れないといけませんの？」

ミラルがチリーに対して好意を抱いていることに、気付いているらしく、ミレイユはわざとらしくそんな質問をミラルへ投げかけた。

「それ……は……」

言い淀むミラルを見、ミレイユは勝ち誇ったような笑みを浮かべて再びチリーへと抱きついた。

「キチンとした理由もないのに、チリー様から離れなければならならいなんて、意味がわかりませんわ。ねー、チリー様っ」

語尾にハートマークでもついているかのような甘ったるい声音で、ミレイユはチリーへ同意を求めた。

「え、あ、うーん……」

後頭部をポリポリとかきつつ、困ったような声を上げてはいるものの、チリーの表情は緩み切っていた。

「ま、まあ良いじゃねえか、な？」

緩い笑顔を向けつつ、チリーがミラルへそう言った
瞬間
だった。

「……………わよ」

嫌な空気が、部屋中に立ち込めた。

うつむいてしまったミラルを見、流石にこれはまずい、とニシルが身体を起こした時には、既に遅かった。

「……………ミラル？」

恐る恐るそう言ったチリーに対して顔を上げると、ミラルはキッとチリーを睨みつける。その瞳には、大粒の涙がたまっていた。

「もうっ！　いって言うてんのよ！」

大声を上げると、ミラルは立ち上がるとチリーへ背を向けた。

「あ、おいッ！」

チリーの止める声も聞かず、ミラルは部屋の外へと飛び出していた。
った。

「な、何なんだよ……ッ」

不満そうな表情で悪態を吐くと、チリーはベッドへ寝転がった。そんなチリーに、ミレイユを除くその場にいた全員が呆れ切った視線を向けた。

「今のは完全にチリーが悪いね」

「俺かよ」

深い溜息を吐きつつニシルが言った言葉に、チリーは不満そうにそんな言葉を返した。

「そうですね。チリー様は何も悪くありませんもの」

「そっか。じゃあ君が悪い」

すました表情のミレイユに冷たい視線を向け、ニシルはそんなことを言い放つ。そんなニシルの態度に、チリーは顔をしかめた。

「どっちだよ!?!」

「どっちもだよ馬鹿ッ!」

「俺のどこが馬鹿だっつーんだよ!」

「お前の頭のとっぺんからつま先まであますことなく馬鹿だよ馬鹿ッ!」

チリーは身体を起こすと、ニシルを睨みつけた。それに対して、ニシルも負けじとチリーを睨み返す。そんな二人の視線の間に入り、二人をなだめるようにカンバーは冷静になって下さい二人共、と落ち着いた声音で二人へ告げた。

「でも確かに、さっきのはチリーさんが悪いと思いますよ」

「ンだよ……カンバーまでそう言うのかよ……」

ふてくされるチリーへ、カンバーは苦笑する。

「トレイズもか?」

チリーの問いに、トレイズは腕を組んだまま答えなかった。が、トレイズがチリーへ向けている視線は、お前が悪い、とでも言わんばかりの視線だった。

「あーもう! わーったよッ! 捜しに行って来るよッ!」

面倒そうにそう言って、チリーはミラルを捜しに部屋を出て行った。ミレイユはそんなチリーの背中を見つめていたが、やがて寂し

そつに視線を逸らした。

袖で涙を拭いながら、ミラルは町の中を歩いていた。どこをどう歩いてきたのか自分でもわからないため、今自分のいる場所がどこなのかも把握出来ていない。

馬鹿みたい。

胸の内で、ミラルはそう呟いた。

明らかに泣いている彼女へ、誰か声をかけるものがいても良さそうなのだが、周囲を歩く町の人々は皆一様にミラルから視線を逸らしている。まるで、そこにミラルがいないかのような扱いだっただ。

どうして私がチリー様から離れないといけませんの？

「そんなの……決まってるじゃない……っ」

再び溢れ出す涙を拭いっつ、ミラルは独り呟いた。

「気付いてよ……馬鹿……」

小声でそう言っつ、ミラルはその場へしゃがみ込んだ。どうせ誰も気にしじゃない、そんな投げやりな考えが、ミラルをそうさせた。

しゃがみ込んで数分、いい加減顔を上げようとミラルが思ったその時だった。ミラルの前に、一人の男が立ち塞がった。顔を上げ、ミラルはその男へ視線を向ける。

面長の男で、背はそれ程高くない男だった。男はミラルの顔を確認すると、ニヤリと笑みを浮かべた。

「誰」

問いかけ、ミラルは直感的に身の危険を感じ取った。男がミラルに何かしようとしているのを、ミラルは肌で感じ取ったのだ。

すぐにミラルは立ち上がり、男へ背を向けて走り出した。が、
「どこへ行く？」

いつの間にか、男はミラルの前に再び立ち塞がっていた。まるで

瞬間移動でもしたかのような男の速さに、ミラルは息を呑んだ。

「嫌っ

」

叫ぼうとミラルが口を開けた瞬間、ミラルの腹部へ男の右拳が食い込んだ。ミラルは小さく呻き声を上げたが、やがてその場へ倒れ伏してしまった。

男はミラルが気絶したのを確認すると、ミラルの身体を両手で抱えると、自分の右肩へ乗せる。その際、ミラルの履いていた靴が片方、地面へ落ちたが、男はチラリとだけ視線を向けはしたものの、無視するように靴から視線を逸らした。

目の前で少女が殴られたというのに、周囲の人々は一切気にしていない様子だった。そればかりか、男へ対して敬意の目を向けているかのようにさえ見える。

「戻るか」

ボソリと男が呟いた。と同時に、男の姿はどこかへかき消えてしまった。

ミラルの靴だけが、その場へポツンと残った。

もうっ！　いって言ったのよ！

あの時ミラルが見せた表情を思い出しつつ、重い足取りでチリーはミラルを捜していた。

チリーには、未だに自分がミラルに対して、何か悪いことをしたのだという自覚はなかったものの、薄らとではあるが申し訳なさを感じてはいた。自分が悪いとは思わないが、ミラルには申し訳ないその妙な心境が、ミラルを捜して歩くチリーの足取りを重くさせていた。

「何だつてんだよ……」

ふてくされた表情でボソリと呟き、チリーはミラルの姿を捜す。が、一向にミラルの姿は見当たらない。もう既に宿へ戻っていて、入れ違いになってしまっているのではないかと考えたが、今は少し、チリーにとってあの場所は居心地が悪かった。

モヤモヤとした何かが自分の中に立ち込めている。スッキリしないその気分は、ミラルが見つからないというのもあいまって、次第にチリーを苛つかせていく。

そして思わず、チリーが舌打ちした時だった。

「……ん？」

足元に、靴が片方だけ落ちているのを見つけた。訝しげに凝視し、身を屈めてそれを拾い上げ

「な　ッ」

チリーは表情を一変させた。

部屋のドアが勢いよく開かれ、血相を変えたチリーが部屋の中へ駆け込んでくる。何事かと問わんばかりの表情で、ニシル達はチリーを見たが、やがてチリーが持っている靴に気付き、表情を変えた。

「その靴って……ッ！」

ニシルの言葉に、チリーはコクリと頷いた。

「ああ、ミラルの靴だ」

「……どこかに落ちていたのか？」

腕を組み、眉間にしわを寄せたままトレイズが問うと、チリーは小さく頷いた。

「ああ、市場の辺りに落ちてた」

「何かあったんでしょうか……？」

訝しげな表情でそう言つて、カンバーはチリーへ歩み寄り、ミラルの靴を凝視し、間違いなくミラルさんのものですね、納得した様子で頷いた。

「まさかアイツ……攫われたんじゃ……ッ」

「うん、その可能性、高いと思うよ。ここゲルビアだし……」

アクタニアはゲルビアの国内……敵地なのだ。いつどのタイミングで、チリー達の内の誰かが襲われてもおかしくない。

「ハーデンは既に赤石を持っている……何をするつもりかはわからんが、奴が赤石の力を使うのに、必要なのは後聖杯だけだ。聖杯保持者のミラルが攫われたということは……」

「やはり、ハーデンの手の者でしょうね」

トレイズの言葉を続けるようにしてそう言つたカンバーへ、ちょっと待つてよ、とニシルが制止の声を上げた。

「ハーデン達はミラルが聖杯保持者つて知らないハズだろ？ 何でミラルが攫われるんだよ……！ 聖杯保持者でもなければ、アイツらにとってミラルはもう必要ないハズじゃないか！ 僕らを誘き寄せるのが目的ならわかるけど……」

「でも、攫われた以外に考えらんねエ……ッ！」

拳を握り締めつつ、チリーは怒気の含まれた声でそう言つた。

「とにかく、今度は全員で手分けして捜した方が良くかも知れませんね」

カンバーの言葉に、ミレイユを除く全員が頷いた その時だっ

た。

「別に、捜す必要なんてありませんわ」

すました表情で、今まで黙っていたミレイユが口を開いた。

「彼女、どう見てもこのメンバーの中では足手まといでしたわ。強いわけでも、何かしら能力があるわけでもありませんし、ただワガママなだけですわ」

「お前」

ミレイユに対して何か言い返そうとニシルは口を開きかけたが、チラーとチリーを一瞥し、ニシルは息を呑んだ。

「そんな足手まといよりも、この私を連れて旅をした方が」

「おい」

瞬間、勢いよく、ミレイユの腰掛けているベッドに、チリーの拳が叩き込まれた。

「え」

「お前さつきから何言ってるんだ」

うつむいているため、表情を見ることは出来なかったが、長い白髪に隠されているチリーの表情が、怒りに歪んでいることは声音と雰囲気だけで十分過ぎる程に伝わっていた。

「アイツは……ミラルは……今までずっと一緒にいた、大切な仲間なんだよ……ッ！ それに足手まといだとかワガママだとか、ンなモンは一切関係ねエ……ッ！ アイツは俺の……俺達の大切な仲間だ……アイツを捜しに行く理由は、それだけで十分だろ」

チリーから発せられる怒気に、ミレイユは身を震わせていた。自分がとんでもない失言をしてしまったのだと思い知らされ、ミレイユは今にも泣き出しそうな表情を見せながら震えていた。

「ごめんな……さい」

ミレイユの言葉に返事をせず、チリーは顔を上げるとすぐにミレイユへ背を向けた。

「捜してくる」

「あ、おいッ！」

ニシルの制止の声も聞かず、チリーは部屋を飛び出して行った。その後ろを、今まで震えていたミレイユが慌ててついていく。ミレイユが小さく、羨ましい、と呟いたことには、誰も気付かなかった。

暗い、どこかの部屋で、ミラルは目を覚ました。意識が朦朧としていて、何がどうなっているのかハッキリと理解することは出来なかったが、今自分が何かに鎖で張り付けられているのだということは、感覚で理解出来た。

「ここ……は……」

闇になれない目を必死に動かし、そこがどこなのか理解しようと周囲を見回す。が、わかったのは自分が鉄のようなもので出来た十字架に張り付けられていることくらいだった。

両手両足には、枷をつけられており、張り付けられた状態のまま動かすことが出来ない。

「どういうことなのよっ！」

ミラルが悪態を吐いたと同時に、部屋の明りが付けられた。

まるで正方形の立体の中にいるかのような四角い部屋で、壁も床も天井も真っ白に塗りがたくられている。一面に広がる白い世界に、ミラルが訝しげな表情を見せていると、ガチャリとドアが開き、部屋の中に何者かが入ってくる。その何者かに視線を向け　ミラルは驚きの声を上げた。

「アンタは……っ！」

見覚えのある、男だった。

ライアスを一撃で黙らせ、チリーの大剣を無効化し、トレイズ達を軽くあしらった長身瘦躯の男

「お久しぶりです、姫様」

「ニコラス……！」

東国の地下洞窟で出会った男、ニコラスがにこやかな笑みを浮かべてそこに立っていた。

「お元気だったでしょうか？」

「元気も何も、どういうことなのよこれは！」

「元気そうで何よりです」

ミラルの言葉には取り合わず、ニコラスは再び笑みを浮かべると、部屋の壁際に立つ十字架へ張り付けられた状態のミラルへと歩み寄る。

「どうして私をこんな所に……っ！」

「そんなこともわからないなんて、貴女の理解力はゴミレベルですか？ その頭の中にはゴミでも詰まってるんですか？」

人を食ったような表情でそう言っつて、ニコラスはフン、と鼻を鳴らした。

「貴女が、聖杯保持者である可能性があるからですよ」

ニコラスのその言葉に、ミラルは表情を変えた。

「貴女達五人の中に、聖杯保持者がいる………というのを聞きましてね」

両腰に両手を当て、小さく嘆息しつつニコラスはそのまま言葉を続ける。

「一応貴女達のことを調べて見たんですよ」

「私達を……？」

はい、とニコラスは静かに答える。

「『白き超越者』であるチリー、能力者であること以外は特に何も無いニシルとトレイズ、そして元暗殺者であるカンバー………」

「カンバーが……元暗殺者！？」

今の穏やかな彼からは少しも想像出来ないような情報に、ミラルは耳を疑った。

「貴女以外の四人は、どのような経歴を持っているのか容易に調べることが出来ました………が、ゲルビアから逃亡した後の貴女について

は何もわからなかったのです」

ゲルビアを白蘭と共に、東国で東国戦争に巻き込まれた後、テイエスへと小船で漂流……確かに、どれも記録には残らない経歴だった。

「ですから、五人の中で聖杯保持者である可能性があるのは……貴女一人だけなんですよ」

そう言つて、ニコラスはポケットからナイフを取り出し、それをミラルへ見せた。

「それは……？」

恐る恐る問うたミラルへ、ニコラスはナイフを左右に振って見せつけると、クスリと笑みをこぼした。

「聖杯保持者は、その凄まじい力で傷ついた宿主の身体を瞬時に治癒するときいています」

ニコラスのその言葉と、彼の持っているナイフに、ミラルは背筋を悪寒が走るのを感じた。

「まさか……」

「その、まさかです」

嫌らしい笑みを浮かべるニコラスを、ミラルは震えながら凝視する。正確にはニコラスではなく、ニコラスの持つナイフを、だ。

「貴女が聖杯保持者かどうか……確かめる必要がありますね」

ナイフの刀身が、明りに照らされてキラリと光った。

「嫌……嫌あ……」

ミラルの悲鳴に、ニコラスはそれが快感とでも言わんばかりの笑みを浮かべた。

「嫌あああああつー！」

甲高い悲鳴が、部屋中に反響した。

ミレイユと共に飛び出したチリーを捜して、ニシル達三人は既に日の落ちた町の中を走っていた。既に暗くなっているせい、外を歩いている人間はニシル達以外には一人もいないようだった。

「アイツ……どこ行っただよ……？」

「ミラルさんの靴が落ちていた場所にも戻っただんでしょか……」
メインストリートへ到着したところで一旦足を止め、キヨロキヨロと周囲を見回しながらそう言ったニシルに、カンバーは眼鏡の位置を人差し指で直しつつそう答える。

「それにしてもこの町……どうにも雰囲気を変だな……」

訝しげにトレイズがそう言うと、カンバーはそれに対して静かに頷いた。

「宿のこともそうですし、まるで俺達を敵視しているかのよう……
……そんな雰囲気を感じます。今だって、視線を感じますし……」

「そだね……何か嫌な感じだよ、この町」

ニシルはそう言って嘆息し、額の汗を右手で拭った。

「町全体が敵、ですか」

カンバーがそう呟いた。その時だった。

「その通りだ」

「ッ!？」

突如、カンバーの目の前に一人の男が出現する。歩いてきたのも、走ってきたのでもない、無論、上から降ってきたわけでも下から湧いてきたわけでもない、唐突にその男はカンバーの前に姿を現したのだ。

トレイズより頭一つ分程小さい男だった、面長の顔に笑みを浮かべ、男はカンバーの頭部掛けて右回し蹴りを放つ。

カンバーは咄嗟に反応し、左腕でその蹴りを防いで弾き、男からバックステップで距離を取る。

「貴方は……？」

「ん、俺か？」

悠然とした笑みを浮かべ、自分を指差すその男を、トレイズの鋭い視線が射抜いた。その視線に気付き、男はすぐにトレイズの方へ視線を向ける。

「貴様は……ッ」

「ああ、お前テイテスの……」

トレイズを指差し、納得したように頷いた男へ右手をかざし、トレイズは容赦なく氷弾を放った。が、氷弾が発射された方向には、既に男の姿はなかった。

「焦るなよ」

「な　ッ!？」

不意に背後から聞こえる男の声に、トレイズは驚愕の声を上げつつすぐさま振り向いた。男は何もせず、トレイズに対して悠々と笑みを浮かべて見せているだけだった。

「瞬間……移動……ッ!？」

目を丸くしつつそう言ったニシルに、男はその通り、とおどけた様子で答える。

「俺も一応神力使いでね……瞬動のマリオンとは俺のことさ」

マリオン、と名乗ったその男に、トレイズは先程よりも一層鋭い視線を向けた。

「やはり貴様……王を攫った二人の内の一人かッ！」

「久しぶりだなあ、お前何てんだっけ？　まあいいか、お前の名前なんかどーでも」

嘲るように笑みをこぼした後、マリオンはチラリとカンバーへ視線を向けた。

「ここから真っ直ぐ進んでいけば町外れに雑木林がある。そこにちよつとした建物がある……姫さんはそこにいるぜ」

「姫さん　ミラルさんのことですかッ!？」

カンバーの言葉に、マリオンはああ、とだけ答えて頷く。

「何でそんなこと教えるんだよ!？」

「お前はともかく、その眼鏡君にどうしても会いたいつて奴がいてな……。そいつがそこで待ってる。それに、いったところでニコラスにぶっ殺されるだけだよ、お前は」

「ニコラス……アイツがいるのかッ!」

ニューピープル
新人類です。

東国の地下洞窟で出会ったニューピープル……相手の能力を無効化する能力を持つあの男が、その建物にいる、というのか。

「カンバー……!」

ニシルに対して、カンバーはコクリと頷いて見せる。

「トレイズさん、ここをお任せしてもよろしいでしょうか?」

申し訳なさそうにそう言ったカンバーへ、トレイズは微笑を浮かべた。

「元からそのつもりだ……行け」

二人へ顎で合図すると、すぐにトレイズはマリオンへ視線を戻した。

「ありがとうございます」

「サンキュートレイズ!」

トレイズへ礼の言葉を告げると、ニシルとカンバーは急いで町外れの雑木林へ向かって走り出した。その背中を見送ることもせず、トレイズはマリオンを睨み続ける。

「テイテスでの借り……返させてもらっぞッ!」

瞬間、トレイズの手に氷の剣が形成される。冷たく、美しいその透き通った剣に、トレイズの瞳が映り込む。決意に満ちたその瞳は、復讐の色を宿しているようにも見えた。

「行くぞ」

静かに告げ、トレイズはマリオン目掛けて切りかかった。

ミラルの靴が落ちていた場所に、チリーとミレイユは辿り着いていた。何か他に手がかりがないかと思い、チリーはこの場所を訪れたのだが、どうやら何もなしらしく、チリーは小さく舌打ちをする。「クソツ……何もねえな……」

周囲を何度も見渡しつつ、ロープのフードを外し、チリーはそう悪態を吐いた。

「そんなに、大切ですか？」

不意に、チリーの後ろにいたミレイユが口を開いた。

「あ？ 何がだ？」

そう問い返して、すぐにチリーはそれがミラルのことだと気がついた。

「ミラルのことか……」

静かに、ミレイユはチリーの言葉に頷いた。

「大切だよ。スッゲー大切だ。俺にとっても、皆にとっても」

ニツと笑みを浮かべてそう答えたチリーへ、ミレイユは切なげな視線を向けたが、すぐに視線を足元へ落とした。

「……羨ましいですわ」

「ミラルがか？」

小さく、ミレイユは頷いた。

「私には……私のことをそんな風に思ったださる相手なんて……いませんもの」

そんなことねえだろ、と言いかけたチリーの言葉を制止するかのように、ミレイユはそのまます言葉を続けた。

「所詮私は偽物。王女ミラルではなく養子ミレイユですわ。偽物なんか、愛されるハズがありませんもの……。お父様だって、そう……。私をミレイユとしてではなく、王女ミラルとしてしか見て下さらないの……」

私は、代用品。そう呟いて、ミレイユは更に言葉を続ける。

「ミレイユなんてどこにもいませんわ……。いるのは本物ミラルと、偽物ミラルだけ……」

今にも消え入りそうな声音でそう言ったミレイユの頭に、チリーはポンと自分の右手を置いた。そこから感じたチリーの温もりに、ミレイユは少しだけ表情を明るくし、チリーへ視線を少しだけ向けた。

「関係ねえよ。お前はお前だろ」

「私は……私？」

ミレイユの問いに、チリーはおう、と頷いて見せる。

「本物とか偽物とか、関係ねーだろ。お前はミレイユで、ミラルはミラルだ。大体お前から別人じゃねーか……お前は代用品^{ミラル}じゃなくて、ミレイユだろ？」

チリーのその言葉に、ミレイユの頬を涙が伝った。

「そんな……っそんなっ……こと……」

言われたことありませんわ。チリーには聞こえないような小さな声で、ミレイユはそう呟いた。思わずボロボロとこぼれ落ちる自分の涙を、ミレイユは必死になって袖で拭うが、袖が涙で濡れるばかりで、涙は一向に止まろうとしなかった。

「お、おい……泣くなよ……」

突然泣き始めたミレイユに、チリーはどうすればわからず困惑した様子を見せた。が、すぐに表情を一変させ、ミレイユを自分の後ろに追いやって身構える。

「テメエら……」

チリーがそう呟いたのとほぼ同時に、建物の陰から何人もの兵士や町民達がぞろぞろと現れ、あつという間にチリーとミレイユの周囲を取り囲んでしまった。

「何だ……何なんだテメエらはアツ!？」

そう問うたチリーへ、チリーの正面にいる兵士は表情一つ変えずに銃口を向けた。

「ッ！」

すると、一斉に他の兵士達も銃を構え、チリーへ銃口を向ける。町人達も、フライパンや斧、様々な鈍器や凶器を構えてチリーへ冷

たい視線を向けている。

「チリーだな」

「だったらどうだってんだ!? あア!? 先にこっちの質問に答えやがれツ! テメエら一体何なんだツ!？」

チリーの言葉には、誰一人として答えなかった。ただただ冷たい視線を、チリーに浴びせ続けるだけだった。

「ンだよだんまりかよ……ふざけやがって……ッ!」

神力を発動させて大剣を出現させるべく、チリーは右手を前に伸ばした

「やめておけ」

が、それを制止するように正面の兵士はそう言い、銃を構え直した。

「我々の発砲のほうがかえり早い。貴様は包囲されている」

「テメエら……俺を殺して賞金もらおうって口かい?」

「我々アクタニアの民一同、国王陛下から直々の命を受け 貴様を殺害する」

兵士の言葉に、チリーはギシリと歯軋りをする。

「道理でおかしいと思ったぜ……最初ハナっからこの町全部 敵だったってことかよ。」

そう呟き、チリーは拳を握り締めた。

「ッもう！ 何なんだよさつきから！」

目の前の兵士を殴り倒し、すぐさま背後のエプロンを付けた中年男性へ目を向け、ニシルは中年男性へ右肘を叩き込む。中年男性が呻き声を上げてその場へ崩れたのとはほぼ同時に、剣を持った兵士がニシルへ切りかかってきた。

「くそ……ッ！」

避けきれない。そう判断したニシルは、神力で高熱を帯びた右手を剣へと突き出した。右腕へ激痛が走ったが、ニシルは齒を食い縛ってそれに耐える。

兵士の持っていた剣はドロリと融解し、液化して地面へポタポタと落ちていく。そんな光景を前にし、呆気に取られているその兵士の顔面に、ニシルは容赦なく左拳を叩き込んだ。

「何でこんなに……ゲルビア兵達が……！」

「兵士だけじゃありません！ 町の人々も混じっています」

殴りかかってきた青年を殴り倒しつつ、カンバーはニシルへそう言った。

「チリーならともかく……何で僕達まで……？」

「もう長いことあのメンバーで旅をしていますからね……俺達の顔が向こうに割れていても、おかしくはないです」

最後の一人になった兵士に対して、カンバーは事もなげに裏拳を叩き込み、小さく溜息を吐いた。

「宿屋の人や、町の人達が妙に冷たいのは多分、元々彼らが俺達を『敵』と見なしていたからでしょう。遅かれ速かれ、こうして襲撃をかけるつもりだったのかも知れません」

「ミラル誘拐説……有力かもね。コイツらが襲ってきたのと、ミラルが消えたのが同じくらいってのがどうも引っかかるよ……。もしかするとコイツら……」

「ミラルさんを、俺達に奪還させまいとしている、ということですか？」

ニシルの言葉を続けるようにしてそう言ったカンバーへ、ニシルはコクリと頷いて見せた。

「とにかく、雑木林へ急ぎましょう。ミラルさんが心配ですし、それに」

そこの眼鏡君にどうしても会いたいって奴がいてな……。あの時のマリオンの言葉を反芻し、カンバーは顔を強張らせた。

俺に……会いたい人？

ふと、昨日の昼間に見た金髪の女性の姿がカンバーの脳裏を過った。

「とにかく、急ぎましょう」

カンバーの言葉にニシルが頷いたのを、確認すると、カンバーは足元に倒れる兵士や町民を避けつつ、再び走り始めた。

町外れの雑木林の中に、確かにその建物はあった。歪に見える程綺麗に整った正方形の白い建物で、木々が立ち並ぶその風景と、その建物はあまりにも不釣り合いだった。

そしてその建物の前に、二人の男女が立ちはだかるようにして立っていた。

ニシルとカンバーは、建物の場所へ辿り着くと同時に、その二人を凝視しつつピタリと足を止めた。

一人は、長く美しい金髪を持った女性で、踊り子のような露出の多い服装をしている。昨日の昼に、カンバーとミラルが見かけた女性だった。

そしてもう一人は

「まさか……貴方……ッ」

表情に驚愕の色を映すカンバーを見、その青年は小さく口元を釣り上げた。短髪の、あまり特徴のない顔立ちをした青年だった。青

年　　というよりは、あどけなさの残るその顔はどちらかという少年に近い。風に短い黒髪を舞わせつつ、青年はカンバーへ視線を向けたまま動かそうとしなかった。

「久しぶりだね。何年ぶりかな」

「カンバー……知り合い？」

そう問うてきたニシルへ、カンバーは何も答えない。ただひたすらに、青年を凝視している。

「リエイも挨拶しなよ。お前の大好きな男ヒトたる？」

どこか皮肉めいたものが込められた口調でそう言いつつ、青年は隣にいる女性　　リエイに対して顎で合図した。

「……カンバー……」

ボソリと。呟くような声量でそう言ったりリエイの表情は、どこか寂しげであった。

「リエイ……」

お互いの名前を呼び合ったカンバーとリエイを交互に見、青年はフンとつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「ねえ、カンバー！　　どういふことなんだよ！　　何でコイツら、カンバーのことを……」

「懐かしいな、昔はこうしてよく三人で会ったよね」

まるでニシルの存在を無視しているかのような青年の発言に、ニシルは顔をしかめた。

「クルス……」

「ねえ、兄さん」

そう言って笑みを浮かべる青年　　クルスに、ニシルは表情を驚愕に歪めた。

「がッ」

鳩尾に拳を叩き込まれ、呻き声を上げるトレイズに、マリオンはニヤリと笑みを浮かべると、すぐさまトレイズの前から姿を消し

「またか……！」

瞬時にその背後へ現れた。

「遅エ！」

背後から蹴り飛ばされ、トレイズは前へつんのめる。が、踏み止まると同時に振り向き、マリオンへと右手をかざす。瞬時に形成された氷弾は、マリオン目掛けて発射されたが、その頃には既にマリオンはその場からかき消えていた。

舌打ちし、トレイズはバックステップで後退すると、その右手に氷の剣を出現させる。

「弾でも剣でも無駄だよバーカ！ お前じゃ俺は捕らえられない！」

トレイズの前方に現れたマリオンは、余裕の表情を浮かべつつ、トレイズへそんな言葉を浴びせた。トレイズはその言葉に答えようとせず、険しい表情を浮かべてマリオンへ剣できりかかる。

「だから意味ないって」

だが、トレイズの剣がマリオンへ当たる直前で、マリオンはその場から姿を消した。

「ッ」

即座に振り向き、身構えるトレイズだったが、トレイズの予想に反して、そこにマリオンはいなかった。

「なんちゃって」

おどけた声音が、トレイズの背後から響く。その声にトレイズが振り向いたのとほぼ同時に、トレイズの頬へマリオンの拳が食い込んだ。その強烈な一撃に、トレイズはそのまま吹っ飛び、数メートル先で倒れた。

「やめときなっつて」

肩をすくめてそう言ったマリオンを意に介さぬ様子で、トレイズ

はすぐに立ち上がると同時に、左腕を横に振る。すると、氷弾が数個出現し、マリオン目掛けて飛ばされた。が、やはり氷弾がマリオンへ近づいた時には既に、マリオンはその場から姿を消していた。「おおおおッ！」

しかしトレイズは即座に、舞うようにして剣を振り、その場で一回転した。自分の四方のどこかにマリオンが現れて反撃してくると予想したのだろう。しかし、その予想は外れることになる。

「上だ」

「ッ!?」

突如上空から聞こえる声に、トレイズは上を見上げると、そこには右足をこちらへ突き出しつつ急降下してくるマリオンの姿があった。すぐにトレイズは後退し、マリオンの右足を回避する。

着地したマリオンは、舌打ちをしたのはものの、その表情は悠然としていた。

「……厄介だな」

呟き、トレイズはマリオンを睨みつけた。

マリオンの能力は、瞬間移動。どの程度の範囲が有効なのかはわからないが、マリオンは好きなタイミングで、好きな位置に瞬間移動することが可能なようだった。恐らく、テイテスで王アレクサンダーを、誰にも気付かれることなく城の外に運び出したのはこの男だろう。

トレイズの瞳に、憎しみの色が映し出された。

「やめとけよ。お前の能力じゃ、俺には太刀打ち出来ない」

「それはどうか……」

小さく笑みを浮かべ、トレイズが再び左腕を広げ、神力を使おうとした。その瞬間だった。

「……ッッ……ッ！」

突如、トレイズの両目に激痛が走った。両目を押さえ、その場で悶え始めるトレイズに、マリオンはクスリと笑みをこぼした。

「何だ……これはッッ……！」

筆舌し難い苦痛に、トレイズは掠れた声で言葉を紡ぐ。

「拒絶反応」

ボソリと。咳くようにしてマリオンはそう言った。

「神力とは元々、人体とは相容れない物。その神力が強力であればある程、人体と拒絶反応を起こし、身体機能を奪う可能性が高くなる」

マリオンの言葉に、トレイズはアルケスタの研究所で見た、ラウラの手記を思い出す。

神力の力が強ければ強い程、その力は肉体と拒絶反応を起こし、身体機能を奪う可能性があり、最悪の場合死に至る場合すらある。

あの手記に書かれていた「拒絶反応」とは、このことだったのだ。もしそうなら、ヴィカルドでの戦闘中、ニシルに起こったことにも納得がいく。

ニシルが激痛を訴えていたのは、拒絶反応のせいだったのだ。考えて見れば、ニシルの神力 熱の能力は非常に強い。ニシルの話によれば、鉄でさえ一瞬で溶かしてしまう程の熱量を発することさえ出来るらしいのだ。ラウラの手記と、マリオンの言葉が本当なら、拒絶反応が起きないわけがない。

そしてついに、トレイズにも拒絶反応が起こった、ということらしい。

「お前の場合は目か」

マリオンはそう言いつつ、トレイズへ近寄り

「がアッ……！」

トレイズの腹部へアッパー気味に右拳を叩き込んだ。

「目どころか、全機能を停止させてやるよ」

ニヤリと。マリオンが笑んだ。

ナイフからポタポタと滴る血が、床を赤く汚す。ナイフを持つ右手はだらりと脱力した状態でさげられており、彼の　まるで生き物ではないかのような、感情の込められていなかった瞳には「戸惑い」という感情が数年ぶりに映っていた。

「お願い……！　もう許して……っ！」

悲痛な、目の前の少女の声。普段なら耳を貸すハズのないその声に、その時彼はどうしてか耳を傾けていた。

「殺さないで……」

誰をだ？

その少女をか？

チラリと。少女から目をそむけて、傍に横たわる物言わぬ屍へ視線を向ける。鋭利な刃物で急所を一刺し、十秒と経たない内に生命活動を絶やしたソレが、瞳孔の開いた瞳でこちらを見ているかのような錯覚を覚えた。

殺さなければならなかった。

それが仕事だった。

殺すことは、生きること。他者を殺すことで、生きる糧を……金を手に入れる。

汚れた仕事だ。そんなことは始める前からわかっていたことだ。

「お父さんを殺して……私を殺して……次は、誰を殺すつもりなの……？」

その少女の問いに答えることなど、出来ない。ターゲットの選択は自分には出来ないし、する必要はない。クライアントの要求通りに殺し、糧を得る。それだけの簡単な仕事で……単純な生き方だ。「確かにお父さんは悪い人だった……だけど、殺すことないじゃない……っ……ねえ、もう許してよ……っ」

涙ながらに懇願する彼女の声を拒絶するかのように、そっとかぶ

りを振る。そしてナイフを、少女へ向けた。

「兄さん？ 兄さんって……おいカンバー、コイツって……」

困惑した表情で問うてくるニシルへ、カンバーは静かに頷いた。

「ええ、彼は……クルスは、真正正銘……俺の弟です」

カンバーの言葉に、ニシルは表情を驚愕に歪めつつ、カンバーとクルスの顔を交互に眺めた。カンバーが眼鏡をかけているせいでわかりにくいだが、確かに兄弟らしい……どこか似通った顔をしている。「ああそうだよ。僕は兄さんの、カンバーの弟だ。依頼達成率十割、死神と呼ばれた最強の暗殺者……カンバーのね」

「伝説の暗殺者って……ッ！」

クルスの言葉に驚きつつも、ニシルはどこか納得をしていた。東国の地下洞窟でダニエラとの戦闘になった際、神力を持つダニエラに軍配が上がってはいったものの、単純な身体能力でだけなら、明らかにカンバーの方が勝っていた。神力を持たない中ではトップクラスの強さを誇っているとんでもないカンバーの実力を知るニシルからすれば、クルスの語ったカンバーの経歴に違和感さはほど覚えなかった。

「……昔の話です」

カンバーは短く嘆息をしつつ、これ以上そのことには触れないでほしい、と言わんばかりの表情を浮かべた。

「それで、わざわざ俺の過去を仲間にバラすためにこんなところにいるわけではないでしょう？」

カンバーが眼鏡の位置を右人差し指で修正しつつそう問うと、クルスは頷く代わりに笑みを浮かべ、ナイフを取り出すとカンバーの足元へ投げてよこした。

「僕はアンタを殺してアンタを越える……。そのため^{ニシル}に依頼者の依

頼に依じてこんなところまで来たんだからね」

「ニコラス……！ ではやはり貴方達の目的は聖杯と」

「『白き超越者』の殺害。でもそれらについてはもう心配ない。聖杯保持者は既にニコラスの手中にあるし、『白き超越者』も直に殺される」

クルスのその言葉に、先程まで黙っていたニシルは表情を一変させて声を上げた。

「チリーに……チリーに何かしたのか!？」

「僕からは直接何もしていない。ただ、この町全アクタニアてを相手に、未だ超越を終えてない彼が勝てるとは思わないけどね」

「やっぱこの町全部、敵だったのかよ！」

ギユツと拳を握り締めるニシルへ、クルスはクスリと笑みをこぼした。

「さあ兄さん、やろうか久々に……兄弟喧嘩」

もう一本ナイフを取り出して身構えたクルスを見、カンバーは顔をしかめた後そっと、足元のナイフを拾い上げた。

「カンバー！」

カンバーの援護に向かおうと、ニシルが足を動かした……その瞬間、ニシルを射抜くような視線が捕らえた。

ピタリと足を止め、ニシルは自分に向けられた視線へ己の視線を合わせる。

「邪魔はさせない……って顔だね。そんな顔より、笑ってた方が良いんじゃない？ 折角美人なんだし」

「軽口はやめて。私、空気の読めない人って好きじゃないの」

「嫌われちゃったね」

おどけた様子で肩をすくめて見せるニシルへ、視線の主　リエイはキユツと唇を結んだ。

「私とクルスの役割は、貴方達の足止めよ」

「そっか。じゃあちよっと足、止められてみようかな」

スツと。ニシルが身構えたのを確認すると、リエイは優雅な動作

で両手を広げ　その両手に一つずつ、扇子　否、鉄扇を出現させた。

それが能力だと、ニシルは瞬時に理解した。

ニシルが何か言おうと口を開くよりも速く、リエイはニシルへと接近し、右手の鉄扇を素早く開くと、ニシルの腹部目掛けて薙ぐ。

ニシルは即座にそれをバックステップで回避したが避け切れず、ニシルの服に切れ目が入る。

「刃……ッッ」

鉄扇の先端が鋭利な刃となっていて、判断するのに、服の切れ目は十分過ぎる証拠だった。

リエイはその体勢のまま左足で一步踏み出してニシルへ接近すると、左手を振り上げると同時に鉄扇を開き、それをニシルの頭頂部目掛けて振り下ろす。それを更に後退することでニシルが回避したのとほぼ同時に、リエイは右足を左足の前へ運び、その右足を軸にすることで

「ッ！」

回転し、その勢いそのまま右手を　鉄扇をニシルへと薙いだ。鋭い鉄線の先端が、ニシルの腹部を切り裂く。瞬時に回避の動作を取ったため、致命傷にはならなかったものの、まるで舞つかのような華麗な動きに、ニシルは驚きを隠せなかった。

「……すごいね」

リエイから数歩距離を取り、左手で腹部を押さえつつそんなことを言ったニシルに対して、リエイは表情を歪めた。

「ありがとう。だけど貴方の軽薄な態度は、ハッキリ言って好きになれないわ」

「そっか。残念」

あくまでおどけた様子を見せるニシルに対して、リエイは怒りを隠せない。

「降参するなら今の内よ。私の舞いは、確実に貴方を切り刻む……無残にね」

「へー、優しいんだ。心配してくれるんだね」

「……っ！ 見たでしょ！ さっきの動きを！ 貴方じゃ避けきれない…… 貴方は確実に……」

「勘違いしてるとこ悪いけどさ」

リエイの言葉を制止するかのようにそう言って、ニシルはそのまま語を継いだ。

「僕が『すごいね』って言ったのは、君の動きのことじゃない」

「っ！」

「いや、厳密に言つと動きのことなのかな」

「何が言いたいの……？」

曖昧に言葉を濁すニシルに対して苛立ちを隠せないリエイに対して、ニシルは挑発するかのようになり笑みを浮かべた。

「そんな迷ってる状態で、よくあそこまでの動きが出来るよね、ってこと」

ニシルがそう言った瞬間、リエイはまるで鳩が豆鉄砲でも喰らったかのような表情を見せた。まるで、自分から「凶星です」とでも言っているかのようなその様子に、ニシルは小さく口元を釣り上げた。

「私が……迷ってる……？」

「迷ってるよ。目でわかる」

それに、と付け足し、ニシルはそのまま言葉を続けた。

「本当に君が僕を殺すつもりなら、わざわざ『降参するなら今の内』だなんて情けをかけるようなことは言わないはずだ」

「それは……っ」

「君は迷ってる。ここからは僕の憶測だけど、君はこの戦いを僕と君との戦いだけじゃなく、カンバーとクルスの戦いも、望んでいない」

凶星だね？ と問うニシルに答えず、リエイは顔をそむけた。

「貴方に……何がわかるの……？」

「わからないよ。だから憶測」

顔をそむけたまま問うたりエイに、ニシルは先程までの少しおどけた様子とは違う、真剣な表情でそう答える。

「これは……罪滅ぼしよ」

ボソリと呟いた。と、同時に、リエイはニシルとの距離を詰め

「ツとツ！」

再び右の鉄扇を薙ぐ。ニシルは後退してそれを回避すると、下からニシル目掛けて振り上げられかけているリエイの左腕を右手で掴んだ。

「　　っ！」

左腕を止められたことに、一瞬リエイは驚きの表情を見せたものの、すぐに右腕を動かそうとするが、その右腕もいつの間にかニシルの左手によって掴まれていた。

「キレが……悪くなってるよ」

ニヤリと。ニシルが笑みを浮かべた。

ナイフとナイフの、激しくぶつかり合う音が辺りに響いた。振り下ろされたクルスのナイフを、カンバーがナイフで受け止めたのだ。クルスはナイフを防がれるのとはほぼ同時に一歩後退し、カンバーの頭部目掛けて左足で回し蹴りを繰り出す。カンバーは素早く身を屈めると、右手に持っていたナイフを左に持ち替え、右拳をクルスの腹部へと突き出す。が、クルスは右腕でカンバーの右拳を防ぐと、高く上げていた左足で前へ踏み込み、空いてる左拳でカンバーの顎目掛けてアッパーを繰り出したが、カンバーは上半身ごと頭を右にそらし、クルスのアッパーを回避する。

「ッッ！」

アッパーを回避されるとは思っていなかったらしく、クルスの目に驚愕の色が映る。カンバーはそれに目を向けようとせず、左拳を振り上げて腰だけを右へひねり、その勢いで、まるでボールを投げるかのような動作で上からクルスの顔面目掛けて左拳を振り下ろした。が、クルスは身をかわしてそれを回避し、今度は右足で回し蹴りをカンバーの腹部目掛けて放った。

「ぐ……ッ！」

左拳を振り上げたことでガラ空きになっていたカンバーの胸の左側に、クルスの回し蹴りがクリーンヒットし、傍にあった木の幹まだ吹っ飛ばされた。

幹に右半身が激突し、苦痛に表情を歪めるカンバーの元へ、クルスが悠然とした態度で歩み寄っていく。

「まだまだ……兄さんの実力はまだそんなものじゃないハズだ……」。

それに――

カンバーが回し蹴りを回避した後……カンバーは右手に持っていたナイフをわざわざ左に持ち替え、素手になった右手でクルスを殴ろうとしたのだ。クルスにはそれが許せない。

手加減されている……！

あの時ナイフを突き出していれば、ガードされはしても確実にダメージを与えることが出来たはずだ。それなのにカンバーは……

「僕を馬鹿にしているのかッッ」

木の幹によりかかるようにして倒れているカンバーの顔面目掛けて、クルスは前蹴りを容赦なく放つ。

しかしクルスの予想に反して、カンバーはそれを避けようとしなかつた。

「え……」

カンバーの後ろ頭が幹と足に挟まれて鈍い音を立てると同時に、カンバーのかけていた眼鏡が音を立てて割れた。

「クル……ス……」

額からダラリと血をたらしつつ、カンバーは呟くようにそう言つてニコリと微笑んだ。

「気は……すみましたか？」

「……ッッ……ッ……ああアアッ！」

カンバーのその言葉に一瞬戸惑うような表情を見せたが、やがてクルスは言葉にならない呻き声を上げ、その顔を激怒の色に染めた。「馬鹿にするのもいい加減にしるオオオオ！」

雄叫びが如き声を上げると、クルスは先程と同じように右足で前蹴りをカンバーの顔面へ放つ。そしてそのまま狂ったように何度も何度も何度も何度も、クルスはカンバーの顔面をその右足で踏みつける。既にカンバーのかけていた眼鏡はグチャグチャに壊れ、原型を留めぬ姿でポトリと地面へ落ちた。

気は……すみましたか？

「何がッ……何がッ……」

先程のカンバーの笑顔を脳裏に過らせつつ、クルスは尚もカンバーの顔を踏み続ける。

「何が気はすみましたか？ だ……ッ！ ふざけるなアアアアッ！」
もう何度目ともわからない蹴り……これで最後までも言わんばか

りに渾身の力を込め、カンバーの顔面へ放った。その時だった。

ガツシリと。クルスの右足はカンバーの右手によって掴まれる。「もうやめましょう、こんなこと……。でないと俺は、弟である貴方に本気を出さなくちゃいけないよ」

クルスの右足を掴んだままそう言ったカンバーの言葉が、更にクルスを激怒させた。

「いつまで上から目線なんだ……！？今の僕らは兄弟なんかじゃない……対等だ！そして僕は今から、お前を越え」

クルスが言い終わるより先に、カンバーはクルスを、掴んでいる右足ごと突き飛ばした。

そしてカンバーは立ち上がると、そのまま呆気なく仰向けに倒れたクルスへ、チラリとだけ視線を落とした後、スツと身構える。いつの間にかナイフは右手に。それも逆手に持ち替えられていた。

「そんなに言うなら相手になろうか」
口調の違い。雰囲気の違い。殺気の違い。
無意識の内に、クルスは身震いした。

「ハアツハアツ……」
視力が回復しないまま、トレイズはマリオンからの攻撃を受けつづけていた。

頭部。腹部。肩。足。様々な部位へ執拗なまでの打撃ダメージを与えられ、既にトレイズの身体はボロボロだった。ハッキリとはわからないが、左腕からは折れているかのような激痛さえ感じる。

それでも立ち続けるトレイズに、マリオンは少しではあるものの驚嘆の意を隠せずにいた。

「よくやるよ、アンタ。まだ見えないんだろ？」

マリオンの問いに、トレイズは答えない。ただ息を荒げたまま、折れているであろう左腕を右腕で押さえている。

「反撃も出来ない、これ以上の激痛を恐れて能力は使えない……そんなんでよくやるよなあ……」

言いつつ、マリオンはトレイズへ歩み寄り

「ホントッ!」

トレイズの胸部目掛けて右足で強烈な前蹴りを放った。

そのままトレイズは後方へ吹っ飛び、ドサリと音を立ててその場へ倒れ伏す。

「あの……何だっけ？ アレク何とか？ あの王様の仇取るんだって？」

嘲るようにそう言って、マリオンはそのまま言葉を続けた。

「アイツ、イカレ博士共に改造されたんだっけ？ 写真で見たけどスツゲ アホ面になつてたよなあ……」

「黙れ……」

呻くようにそう答えたトレイズに対して、マリオンは嘲りの笑みをこぼす。

「あの面で一国の王だつてんだから、最高に笑えるよなあ」

「黙れと……言っている……」

使い物にならない左腕をダラリと下げ、トレイズは無理に立ち上がると、見えない目でマリオンがいるであろう方向をギロリと睨みつけた。

その視線がピタリとマリオンに一致し、マリオンは少しだけ表情を変えた。が、すぐに、トレイズにまだ視力が回復していないことに気が付き、再び表情に余裕を取り戻す。

「じゃあ、黙らせてみるかい？」

笑みを浮かべる。と同時にマリオンはトレイズへ接近し、その右拳をトレイズの顔面目掛けて突き出した。が、その右拳はマリオンの予想を大きく外れ、あろうことか見えていないハズのトレイズによって止められた。

「な……ッに……ッ!?」

「少し考えればわかることだ。この状況、何ら変わらない」

グツと。掴んだマリオンの拳をトレイズは握り締める。彼の瘦軀からは想像しがたい握力に、マリオンは顔をしかめ、すぐに右拳をトレイズの右手の中から引っこ抜き、数歩距離を取る。

「暗闇と同じだ　　何も見えないという点では、今の状況は暗闇と何ら変わらない」

そして俺は、暗闇での戦い方を知っている。

心の内でそう呟き、トレイズは左腕をダラリと下げたまま、右腕だけで身構える。既に両目の痛みは引いている。後は視力の回復を待つだけだ。視力が戻るまで

「防御続けるのみ……ッ」

先程よりも焦りの見える表情を見せるマリオンが繰り出す、腹部への右回し蹴りを、トレイズは左足で防御する。

王の護衛。いつ如何なる時でさえも、外敵から王を護衛まもるその仕事は、決して簡単なものではなく、その仕事を完遂するために行われる訓練もまた、想像を絶する。暗闇での戦闘など、暗殺者を相手にすることを想定すれば、当然に等しい。

故に。だからこそ

「何故だ……何故防ぐことが出来る……何故防御出来る……!?!」

何も見えない状態で、相手の気配を察知して攻撃を防御することなど、トレイズにとってはさほど難しいことではなかった。

両目の激痛、その上能力も使えない状態で、更に視界を奪われたことによって生まれる焦燥感。それらが先程のトレイズから冷静さを奪っていた。

だがそれは、先程までの話。

「だったら」

不意に、感じていたマリオンの気配が消える。そのことにトレイズが表情を変えたのと、背後からマリオンの蹴りがトレイズの背中へ直撃するのはほぼ同時だった。

「見えてても防げない攻撃なら、気配もクソもねえだろ」

「見えずとも、今のマリオンがほくそ笑んでいることは明白だった。いや、もう十分だ」

準備は、整った。

眩くように付け足して、トレイズは背後へ振り向き、しっかりとマリオンへ視線を向けた。

「まだ完全ではないが、十分だろう……」

まるで目が覚めた直後であるかのような、ぼやけた視界ではあったものの、トレイズの目はしっかりと敵を見据えていた。

「見えたところで関係ない……お前は俺を……」

「捕らえられない、か？」

痛む左腕を押さえつつも、トレイズは不適に笑みを浮かべると、右手を左腕から離し、大きく広げた。

「何を」

言いかけ、マリオンは変化に気がついた。

パキパキと音を立て、マリオンの足元が凍り始めているのだ。今は地面が凍るような季節ではない。そもそも、この地域で地面が凍るような寒さなどあり得ない。しかし地面は今、凍り始めていた。

「試してみるものだな……」

トレイズとマリオンの足元は完全に凍りつき、やがて氷は二人の周囲に壁を形成し始める。そのあり得ない状況に、マリオンは同様に隠せずにはいた。

「こんな……こんな馬鹿げた神力……！」

「拒絶反応を起こす程だ。これくらい出来ねば……」

損というものだろう。

上下左右二人の周囲全てが、分厚い氷の壁によって覆われていた。

「何だ……何なんだこれは……!？」

周囲に生まれた分厚い氷の壁。トレイズとマリオンのいるその場所は、まるで氷の部屋。正方形の氷の部屋に、マリオンはトレイズと共に閉じ込められる形になっているのだ。

「……確かに凄まじい神力だ……これ程のものを創り出すとはない……だが！」

ニヤリと勝ち誇った笑みを浮かべるマリオンだったが、トレイズは表情一つ変えないままマリオンへばやけたままの視線を向けている。

「俺には関係ない。こんな場所に、俺を閉じ込めることは出来ない！」

マリオンがそう言った瞬間、トレイズの前からマリオンは姿を消した。

瞬間移動。マリオンはその能力で、この氷の部屋から脱出したかのように見えた。

「無駄だ」

ボソリと。呟くようにトレイズがそう言ったのと、瞬間移動して外に出たハズのマリオンが、再びトレイズの前に現れたのはほぼ同時だった。

「阻まれた……ッ!？」

「高密度の俺の神力によって生み出された氷の壁は、貴様の神力を阻む」

脱出不可能。トレイズの神力によって形成された氷は、外に出ようとするとマリオンの神力を阻み、その脱出を防ぐ。マリオンの神力が根本的な意味でトレイズを越えない限り　マリオンでは、この部屋を出ることは出来ないのだ。

「そんな……そんな馬鹿げたことが……ッ!」

言いつつ、マリオンは再び姿を消し

「あつてたまるかアア！」

トレイズの背後へ現れ、トレイズに殴りかかった
間だった。

その瞬

ザクリと。マリオンの身体に何か突き刺さる。背中から刺さったソレは、マリオンの胸部を貫通し、その鋭い先端を外気にさらした。

「な……に……」

マリオンの背後の氷の壁から、鋭く尖った氷柱が突き出されていたのだった。マリオンは、トレイズがこの氷の部屋を出現させた理由を理解した。

「捕らえられない俺を……氷柱^{コレ}で確実にしとめる……ためか……ッ」
口から大量の血を吐きつつそういうマリオンへ、トレイズは背を向けたまま表情一つ変えずにフンと鼻を鳴らした。

「この俺の視界全てが氷の領域であり……俺の領域だ……ッ！」

その言葉と同時に、トレイズとマリオンを覆っていた氷の壁は、マリオンに突き刺さっていた氷柱ごと砕け散り、いつの間にか跡形もなく消え去っていた。

血を流しながら、その場にドサリと倒れているマリオンを一瞥し、トレイズは小さく溜息を吐くと、その場へ膝から崩れた。

「流石に……ダメージを受け過ぎたか……」

呟き、その場へトレイズはドサリと倒れ伏した。

四方八方から銃口を向けられた状態で、チリーはどうにも出来ずに歯噛みした。自分だけなら跳躍することで銃弾を避けることが出

来る自信があつたが、体重の軽そうなミレイユとは言え、人間一人を抱えた状態でここまで跳躍出来る自信はなかった。

それに、向こうはチリーがニューピープル……それも『白き超越者』と呼ばれる究極のニューピープルであることを知っているはずだ。チリーの身体能力は想定内　跳躍したところで、それを想定されていたら終わりだ。確実に撃たれる。

せめて一人なら……この状況を打開することが出来た。

「天下のゲルビア様も無様なモンだぜ……こんなガキ一人殺すのに雁首そろえてよオ……」

「ただのガキではない。『白き超越者』は大型の猛獣を殺すつもりで行け　そうニコラス様は仰っていた」

向こうは、チリーのことをガキだとなめていない。なめられるよりは気分が良いが、向こうがこちらをなめている、という隙に付け込めそうにないのが、この状況では痛い。

「それに、俺の後ろにいんのはテメエらの国の姫だろ……？　お前らが一斉に撃てばコイツは……」

「レプリカの姫など人質に取っても意味はないぞ。我々は既に、ニコラス様からその姫が単なるレプリカであることを聞いている。そして陛下からも直々に許可をいただいている」

兵士の言葉に、ミレイユは表情を驚愕に歪めた。

「邪魔になるようなら、殺してしまつて構わんとな」

兵士その言葉に対して、ミレイユが何かを言おうとするよりも先に反応を示したのは　チリーだった。

「ふっざけんじゃねえッ！　レプリカだと……殺してしまつて構わねえだと……！？　テメエらは……テメエらの王が何言つてんのかわかつてんのか！？」

「お前は、新しい道具を手に入れた時、古いものを取っておくのか？」

「物じゃねえッ！　ココにいるミレイユも、テメエらが連れ去つたミラルも、物じゃねえんだよッ！　道具と一緒にすんな！」

怒りを露にして怒鳴り散らすチリーへ、兵士達は銃を構え直す。その音に、チリーは肩をびくつかせた。

「もう良い。話していても仕方がない……撃て」

チリーの正面にいる兵士がそう命じた　とほぼ同時に、一斉にチリーの周囲を囲んでいた兵士達の、銃の引き金が引かれた。

「ッ！」

乾いた銃声が周囲に鳴り響き、チリーの周囲を取り囲むいくつもの銃口から、一斉に弾丸が発射される。

死を、予感した。

一気にチリーの脳裏を、同時にいくつもの思考が駆け巡る。

こんなところで死ぬのか！？

まだミラルを助けてねえ！

赤石だってまだ取り返してねえ……！

ゲルビアまで……ハーデンのどこまで後もう少しだって

のによオ！

せめてミレイユだけでも助けねえと！

どうにかならないのか！？

俺もミレイユも、どっちも助かる方法は！？

もう駄目だ、撃たれちまう！

もう、終わりかよ。

瞬間、チリーの身体は勢いよく押し倒された。

「な　ッ!?」

視界が低くなり、チリーの体勢は一気に崩れ、その場へドサリと仰向けに倒れる。そんなチリーに覆い被さるようにして

「チリー様っ！」

ミレイユが、弾丸を全身に浴びていた。

腰に。胸に。足に。腕に。肩に。頭に。ほぼ全身に弾丸を浴びせられ、ミレイユは血を流しながらチリーへ覆い被さっていた。

「何だよ……それ……」

呆気にとられた様子で、目を見開いたまま呟くチリーに、ミレイユは苦痛に対して表情を歪めようとせず、ニコリと微笑んだ。

「何……!?!」

兵士達にとつても思いもよらない行動だったのか、兵士達も動揺を隠せないままうろたえていた。

「何……やっつてんだよ……」

ポタリと頬にこぼれ落ちた、彼女の赤いしずくに生暖かさを感じつつ、チリーは呟くような声でミレイユへそんなことを言った。

「良かった……た……」

「良かったって……何がだよ……これの何が良いんだよ……」

「無事で」

そう言つて、ミレイユはチリーへ抱き付くようにしてその場へ崩れた。その血にまみれた華奢な身体を、チリーは慌てて受け止めると、身体をゆっくりと起こした。

「私は……お父様の道具でも……ミラルの……代用品でも……ない……」

「何言つてんだよ……もう喋るんじゃねえよ……ほら、すぐ治療出来るよと連れてってやるから……」

「私は……ミレイユ」

ポトリと。赤いしずくに混じつて、透き通ったしずくがこぼれ落ち、チリーを濡らした。

「チリー様だけが認めてくれた……」

「おい……しっかりとしろよ……目も閉じようとしてんじゃねえよ!」
必死にそう叫んでミレイユの身体を揺さぶるチリーに、ミレイユはもう一度微笑んだ。

「私は、ミレイユ……」

冷たい、血に濡れた両手が、チリーの両頬に触れた。ミレイユは

最後の力をふりしぼるかのように両手でチリーの顔を、自分の顔へ近づける。

冷たい唇が、チリーの唇へ触れた。

「忘れないで」

唇を離し、それだけ呟いて　ミレイユはそっと、閉じかけていた目を完全に閉じた。

「お、おい……何……寝てんだよ……」

震える唇が、震えた声を紡ぎ出す。

「目エ……開けるよ、おい……」

揺さぶり、頬を軽く叩いても、ミレイユは目を開けようとはしなかった。先程までチリーの頬に触れていた冷たい両手は、今は力を失ってダラリと下げられている。

「おい……起きろって……おい……!」

震えるチリーの語気が、徐々に大きくなっていく。しかしどんなに揺さぶっても、彼女の身体は受動的にしか動かない。

徐々に、チリーの表情から血の気が引いていった。

冷たい彼女の身体と、無数の弾痕と、流れ続けている血が、チリーへ現実を突きつけた。

「おい……ふざけんな……おい……ッ!」

どれだけ呼びかけても、答えがないのは明白だった。

「おい起きろよ……起きろって……」

忘れないで。

そう言った彼女の名前を、チリーは怖くて呼べずにいた。呼べば気付くことになる。その名を呼んでも、もう誰も応えないのだと。

チリーは気付きたくなかった　否、既に気付いているながら、懸命に気付かないフリをした。

しかしそれでも、呼ばずにはいられなかった。確かめずにはいられなかった。

「なあ……ミレイユ……」

その言葉には、誰も応えない。ただ静寂だけが、チリーへと返った。

「あ……ああ……うあああああああッッ！」

慟哭が、静寂の中で響き渡った。

鋭い一撃が兵士の顔を、原型を留めぬ程に歪めた。容赦なく叩き込まれた拳が顔を破壊し、兵士は呻き声を上げながらその場へ倒れ伏す。

「撃てエツ！」

兵士の一人が倒されたことに動揺しつつも、兵士の内一人がそう全体へ命ずる。すると、チリーへ向けられていた銃口から先程と同じよう、一斉に弾丸が発射された。

「あああああああッッ！」

素早く、横たわっている彼女を両手に抱き、チリーはその凄まじい跳躍力で全ての弾丸を回避する。まさかミレイユを抱いた状態であそこまで跳べるとは想定していなかったらしく、兵士達は表情を驚愕に歪めた。

お会い出来て光荣ですわっ！

「テメエらア……ッ」

一人の兵士の頭の上へ、蹴りを入れる形で一度着地すると、そのままチリーはもう一度高く跳ねる。

私は、チリー様に会うためにアクタニアまで来たんですのっ！

「テメエらアアアッ！」

チリーは上空でミレイユを思い切り上へ投げると、今度は地面へ着地し、その場にいた兵士へ殴りかかる。引き金を引かせるよりも早くノックダウンさせ、チリーは銃を持つ者から順に、手当たり次第に一撃でノックアウトさせていく。

私には……私のことをそんな風に思っ
て下さる相手なんて……
いませんもの。

「テツメエエエエらアアアアアッッ！」

落下する彼女を見事にキャッチすると同時に、空いている両足で

兵士達を蹴り倒していく。

「このクソガキがアツ！」

不意に、チリー目掛けて一発の弾丸が放たれた……が、チリーはミレイユを左手だけで抱き抱えると、右手に大剣を出現させ

「こんなモンで……こんなモンでエエエツ！」

チリー様だけが認めてくれた……。

「この俺を止められるとツ！ 思うなアアアアツ！」

あるうことか、その弾丸を切り裂いたのだ。

究極のニューピープルであるチリーへ備わっている、人間を越えた身体能力。激情によって極限まで引き出されたソレは、通常のチリーの身体能力を遥かに陵駕する。

「ツだアアアアツ！」

すぐに大剣を消し、空いた右拳で先程チリーへ銃を撃った兵士を殴り倒す。

もう、誰にも止められない。何人いようが、何発弾丸を用意しようが、殺すどころか止

めることすら出来ない

それが今の、チリーだった。

忘れないで。

うずたかく積み上げられた人の山……その頂点に、チリーは肩で息をしながら立ち尽くしていた。

「……許さねエ……」

生暖かく、透き通ったしずくが、チリーの目からこぼれ落ち、冷えた彼女の身体をほんの少しだけ温めた。

「テメエらだけは……テメエらゲルビアだけはなアツ！」

夜空を仰ぎ、チリーは再び 慟哭した。

圧倒されていた。

その俊敏な動きに。その巧みなナイフ捌きに。その鋭い殺気に。とてもじゃないが目で追いきれる速度ではなかった。先程の倍否、四倍。この男の身体能力こそが、人体の限界なのではないかと錯覚する程に、その動きは常軌を逸していた。

これが……これが兄さん……の……本気……！

ナイフの刃が、クルスの頬を掠めた。

クルスの頬から薙がれた血が、カンバーの頬を赤く汚した。カンバーはそれに対して表情を変えず、まるで機械のような瞳でクルスへ視線を向け直し。クルスの顎目掛けてカンバーは回し蹴りを放った。

見事に顎へ直撃したカンバーの右足は、見事なまでにクルスの脳を揺さぶった。

「が……ア……ッ！」

ドサリとその場へうつ伏せに倒れたクルスの身体を、カンバーは転がして仰向けにすると、その喉元へ素早くナイフを突きつけた。

やっぱ……勝てないか。

心の中でそう呟き、死を覚悟してクルスは目を閉じた。クルスの予想に反して、突きつけられていたナイフは振り下ろされなかった。

そつと閉じていた目を開けて見れば、そこには震える右手を左手で抑え、顔をしかめているカンバーの姿があった。

殺スベキダ。ソノ女八全テヲ見テイタ。

脳裏に響く己の声に、カンバーは初めてかぶりを振った。

これまではずっと従ってきた。ずっとそうしてきた。

ターゲットは速やかに殺害。目撃者も速やかに殺害。残るのは死体と 虚無感。

命を奪うことに躊躇はない。命を奪うことこそが仕事だ。そうしなければ生きていけない、そうすることでしか生きていけない。不器用な生き物になってしまった。

だからこそこのナイフは、振り下ろすべきだ。

既に目を閉じ、覚悟を決めている少女。馬乗りの体勢で、喉元へナイフを振り下ろせずにいるカンバー。ただ静かに時だけが流れていく。

「もういいから……早く殺してよ……」

先程まであんなに許しをこらえていた。先程まであんなに生へしがみついていた彼女は、今はもう生を手放し、己が命をカンバーへと差し出している。

「早く、殺して」

アア、ソウスルツモリダ。

「でも、許さない」

呟くような声音で紡がれたその言葉が、じつくりとカンバーの中を流れていく。

許さない。少し耳を澄ませばどこでも聞けるような、ありふれているとさえ言えるその言葉が、これ程までに……まるで言葉の如く重みを持つなどは、カンバーはその瞬間まで思いもしなかった。「死んだって許さない」

怖かった。恐ろしかった。自分の戦力の、十分の一にも満たぬこの少女のたった一つの言葉。その「許さない」の一言が、カンバーにはたまらなく恐ろしかった。

取り返しのつかないことをしてしまったのだと、これでもかという程に実感させられた。

初めて、命を奪うことに後悔を感じた。

以来、彼は刃を捨てた。

「怖いんですよ……奪うのが……。これ以上、俺には奪えない……」
そこに先程までの鋭さはなく。そこに先程までの殺気はなく。そこに先程までの死神はなく……。

存在あるのは、ただの青年だった。

「幾度も奪ってきました。老若男女人種問わず、幾度も命を奪ってきました……生きるために」

独白し始めるカンバーに対して、クルスは何も言葉を発することが出来ないまま黙り込んでいた。

「クルス……貴方は、後悔したことがありますか？」
命を、奪ったことに。

カンバーの問いに、クルスは答えられないままだった。

ただ静かな時が訪れた。

いつの間にかニシルとリエイも動きを止め、カンバーとクルスの方を凝視したままにいる。

「兄さんに……兄さんに、何があったかは……知らない」

しばしの沈黙の末、クルスは閉じていた口を開いた。

「ただ……羨ましかった……。兄さんの才能に嫉妬して、兄さんの持っているもの欲しくて……僕は……」

ただ、嫉妬していた。

そう付け足して、クルスはそのまま語を継いだ。

「それなのに兄さんは……僕の欲しかったものを全部投げ捨てて、僕らの前から姿を消した。才能も、地位も、金も……リエイも」

その言葉に反応したのはカンバーではなく、ニシルと共に遠巻きにカンバー達を見つめていたリエイだった。

「私がクルスを……一人にした。三人で一つだった輪を、二人と一人に 二つの輪にしてしまった」

これは……罪滅ぼしよ。

リエイが口にした言葉の意味を、ニシルは理解した。憶測に過ぎないが、彼らの間に何があったのか……ニシルは把握しつつあった。自分の望む物を全て持った兄への嫉妬……弟は、^{クルス}兄を越えること^{カンバー}でそれを乗り越えようとした。兄以上の存在になることで

「……帰りますから」

そつと。突きつけていたナイフを投げ捨て、カンバーはニコリと微笑んだ。

「全てが終われば、きっと帰りますから」

無意識の内に、クルスは涙を流していた。もう何年ぶりともわからない涙に、クルスは戸惑いの色を隠せないまま、それでもカンバーへ 兄へ視線を向けた。

ああ、そつか。全部飾りか。

「だから、リエイと二人で待っていて下さい」

口にした理由は何もかも、所詮飾りでしかなかった。僕は……僕はただ……

「兄さんに、帰ってきてほしかった」

嗚咽交じりに、クルスはそう言った。

自分の足元に出来ている血溜まりに、彼女は　ミラルは戦慄した。あれから何分経ったのか、何時間経ったのかもわからないが、これだけの量の血液が、自分の身体から流れ出していたのかと思うと、恐ろしかった。

しかし、最も恐ろしかったのは

「死ね……ないの……？」

己が身体だった。

何度ニコラスに切りつけられようと、どんな場所を傷つけられようと、ミラルの身体は瞬時に再生する。首を切り裂かれても、手首を切られても、心臓を貫かれても……。

どれだけの苦痛を味わっても、どれだけの量の血液を体外に流しても、その身体は一度も死ぬことはなかった。

死ねない。それがどれ程恐ろしいことなのか、ミラルは身をもつて痛感した。

「やはり、死にませんか」

表情を変えずにそう呟き、ニコラスは手に持っていたナイフを再び、ミラルの首に突き刺した。

「っ！」

当然のように生じる激痛。その激痛にミラルが表情を歪めたのが、もう何度目なのかわからない。

ニコラスがナイフを抜くと同時に、大量の血液がミラルの喉から溢れ出し、足元の血溜まりを広げた。

「保持者の身体を瞬時に再生させる聖杯……実に興味深いですね……。これに比べれば他の研究対象なんてゴミですねゴミ」

そんなことをニコラスが呟いている間に、激痛が徐々に和らいでいき、ミラルの喉の傷が塞がっていく。その様子を眺めつつ、ニコラスはさも楽しそうに笑みをこぼした。

「次はどこにしますか？」

「……最低」

「泣き叫ばないのですか……？ 最初のようない」

ミラルへ顔を近づけ、ニタリと厭な笑みを浮かべるニコラスを、ミラルはキツと睨みつけた。

「気に入りませんねえ……」

「チリーは……くる……」

「来ませんよ」

ニコラスのその言葉に、ミラルは顔をうつむかせた。

「来る……わよ……っ」

「来ませんよ絶対。何度言ったらわかるんですか……？ もしかしなくても貴女、理解力がゴミですかあ？」

絶対、来る。

彼は必ず現れる。自分を助けるために、絶対来てくれる。そう信じることで、ミラルは精神を支えていた。何度も苦痛を味わい、絶望した彼女を支えているのは他でもない、チリーの存在だった。彼が助けに来ると信じることで、瓦解しかけている自分の精神を必死に支えているのだ。

「絶対来るって……言ってるでしょばっかっ！」

嗚咽混じりに、ニコラスへそう叫んだミラルへ、ニコラスは冷めた視線を送った後、小さく溜息を吐いた。

「来たところで何になりますか？ 彼では私には勝てない」

「それでも……来る……絶対来るっ！ 来なきゃ……」

ガチャリと。ドアの開く音がした。

「来なきゃひっぱたいてやるんだからっ！」

瞬間、ミラルの瞳に、あるシルエットが映った。

「ほう……」

白い、ボサボサの長髪。強い意志の込められた真っ直ぐな瞳。頬

に残る涙の跡……。

「もう……っ……遅かったじゃない……ばかつ」

まるでタガが外れたかのようにボロボロと涙をこぼすミラルを見、その後ニコラスへ視線を向け、少年は　チリーは憤怒に表情を歪めた。

「ミラルに……何してやがったアアアアツ！」

雄叫びが、部屋全体に満たされた。

コイツを頼む。それだけ言い残して、チリーは建物の中へと入っていった。

冷たい少女を　ミレイユを抱えたまま、ニシルは悲しそうに目をミレイユからそむけた。

「一体……何があつたんだよ……」

ミレイユの死。それはニシルにとつても十分衝撃的だったが、それよりも驚かされたのはチリーから感じる神力だった。

能力を使用していない状態で、あそこまでの身体から溢れているのを見るのは今までで初めてだった。

異常としか言えないチリーの膨大な神力。ニシルは、知らずそれに戦慄していた。

「チリーさんの中に誰も入るなつて言いましたけど……心配ですね」

「でも僕とカンバーは負傷してるし、足手まといになるかも知れないのは確かだよ。それに僕は、能力を無効化されちゃうとニューピール相手には太刀打ち出来そうもないしね」

嘆息しつつそう言ったニシルへ、カンバーはそうですね、と深く頷いた。

「あの子……何なの……？　究極のニューピールとは聞いていたけど、あんな……あんな規格外の神力……」

「わかんないよ……。チリーがあんな状態になってるの、僕も初めて見たし」

心底驚いている。といった様子でそんなことを言ったりエイに、ニシルはそう答えた。

「兄さん、やつぱり僕らも……」

「やめておきましょう、クルス。ニシルさんの言う通り……足手まといになるだけです」

建物の中へ入っていきこうとしたクルスを制止するカンバーに、クルスはやや不満げな表情を見せたが、やがて納得したように頷いた。

ミラルの足元に溜まっている、普通ではあり得ない量の血液。所々破れ、血の滲んでいるミラルの服。そして、ニコラスの手に握られている血のこびりついたナイフ。チリーは、それらを見て瞬時に、ここで何があつたのかを理解した。

「テメエ……ッ！」

拳を握り締め、歯をギリギリと軋ませながら怒りを露にするチリーへ笑みをこぼし、ニコラスは適当にナイフを投げ捨てた。

「聖杯の持つ回復力の実験です。すごいとは思いませんか？ これだけ殺しても、一度も彼女は死ななかつた！ 何度やっても飽きま

ー

言い終わるよりも先に、ニコラスへ接近してきたチリーの拳が、ニコラスの顔面に食い込んでいた。

チリーの全力が込められた右拳は、ニコラスをそのまま後方へ吹っ飛ばす。ドサリと音を立てて仰向けに倒れたニコラスの方へ、チリーは右手をかざした。

「ふざけたことベラベラ喋ってんじゃねエよこのクソ野郎が……ッ」
チリーのかざされた右手の中に、柄が形成され、やがてそれは伸

びていくようにして大剣の形を形成していく。一秒とかがらず、チリーの右手には大剣が形成されていた。

「まったく……」

眩き、ニコラスはゆっくりと立ち上がり、チリーの方へ視線を向けた。

「人の話を聞く耳もないとは……ゴミですね」

「テメエみてえな腐り切った野郎は人じゃねえ！」

「おや、貴方も人じゃないハズですが？」

ニコラスがそう言うやいなや、チリーは大剣を構えてニコラス目掛けて駆け出した。

「んなことは関係エねエエエツ！」

跳躍し、降下と共にニコラスの頭上へと大剣を振り下ろす　　が、だから無駄ですって」

ニコラスが右手を伸ばし、チリーの大剣へ触れた瞬間、チリーの持っていた大剣は跡形もなく消え去った。

「　　ッ！」

着地し、バックステップでニコラスから距離を取ると、チリーは身構えた。

「全ての神力は、私の前では無に帰る……お忘れですか？」

悠然とした笑みを浮かべたニコラスを見、チリーは歯噛みしたが、すぐにニコラスへと接近する。

「だったら素手だ！」

顔面へと向けられた、渾身の力を込めたチリーの右ストレートを、ニコラスは表情一つ変えずに首を動かして回避すると、右拳をチリーの腹部目掛けて突き出す　　が、チリーはそれを左手でガツシリと掴むと、その右腕目掛けて右膝を思い切り叩き込もうとしたが、ニコラスの右拳はチリーの左手を抜け、右膝を回避する。

そしてニコラスはチリーの顔面目掛けて勢いよく右回し蹴りを放った。

回し蹴りの直撃したチリーの顔面は大きく歪められ、そのまま右

へと吹っ飛ばされ、ドサリと音を立てて倒れた。

「チリーっ！」

ミラルが叫ぶのと、チリーがよろめきつつも立ち上がったのはほぼ同時だった。

「徒手空拳でもかなわないということをし、その身にじっくりと刻み込んであげましょう……」

「上等だ……やってみるヒョロ男おがア！」

対峙するチリーとニコラスに、ミラルは不安を感じずにはいられなかった。

能力を無効化する上、徒手空拳でもチリーより一枚上手のニコラスに、チリーが勝利する姿が、ミラルには思い浮かべることが出来なかった。

彼の勝利を信じたい。そう思う一方、圧倒的なまでの二人の実力差を、ハッキリとミラルは理解していた。

先程右回し蹴りをくらった際に口の中が切れたらしく、チリーの口の中で血の味がしていた。チリーは顔をしかめると、すぐに唾液と一緒に口の中の血を床へ吐き出した。

「品の無い……」

「テメエに品だの何だの言われる筋合いは」

キツと前方のニコラスを強くにらみつけ、チリーは勢いよく駆け出した。

「ねエツ！」

そして高く跳躍すると、上からニコラスへ殴りかかる。ニコラスは何ら表情を浮かべず、殴りかかってきたチリーの右腕をガツシリと掴むと、そのままチリーの身体を床へと思い切り叩きつけた。

「がアツ……！」

ニコラスの瘦躯からは考えられないその腕力に驚くよりも先に、チリーの全身へ激痛が走った。

背中から床へ勢いよく叩きつけられたチリーの身体は、その衝撃で少しだけ跳ねる。そこへ容赦なく、ニコラスの前蹴りが叩き込まれた。

「弱過ぎる」

そのまま吹っ飛び、ゴロゴロと床を転がって倒れ伏すチリーへ冷たい視線を向けると、ニコラスはそう呟いた。

「チリー……！」

ミラルの悲痛な声に応えるかのように、チリーはよろめきつつも立ち上がり、ニコラスを睨みつけると、ニコラスへ右手をかざした。

「……貴方の理解力、ゴミ以下のおようですね」

「うるせえ、黙ってる」

ピシヤリと言い放ち、チリーは出現させた大剣を、とある形に構

えた。

「っ！」

その構えに、ミラルは表情を変えた。

過去に二度、彼女はチリーがその構えをするのを見ている。レオールとの戦いの時、ライアスとの戦いの時……彼が見せたその構えは

「その腹の立つ面ア……歪ませてやる！」

刺突の構え。チリーはスツとニコラスへ大剣の刃先を向けると、ぶるりと小さく身震いした。

それは武者震いか、それとも、これすら通用しなければ、勝つ手段はもうないに等しい、ということへの恐怖か……それは、本人にすら定かではなかった。

全身からあふれ出る、滂沱たる神力に、チリーは思わず笑みを浮かべた。

負けるハズがねえ。

まるで自分に言い聞かせるかのように心の内でそう呟き、チリーは改めてニコラスへ視線を向けた。曇りのない、澄んだ真っ直ぐな瞳を。

「……ほう」

チリーから感じる神力に、ニコラスは柳眉をひそめた。その量が尋常ではないことに気が付いたのだろう。だがその表情に、焦りや恐怖などといった感情は、一切映されなかった。

「行くぜ……ッ」

神力を大剣へ集中させ、チリーはそう呟いた。

思い描くのは、止まることなく突き進む自分。どんな障害があろうとも打ち砕き、突き進む自分の姿。

「だアアアツらアアアツ！」

そして次の瞬間には、チリーの大剣の柄から凄まじい量の神力が一気に放出され、その勢いによりチリーは凄まじい速度でニコラスへと突進していく。

それに対してニコラスは避けようとせず、それどころか両手の平をチリーへと突き出し

「無に帰る」

そう、呟いた。

「帰るかよボケエエエッ！」

チリーが怒号を飛ばしたのと、大剣の刃先がニコラスの手の平へ触れたのはほぼ同時だった。

ニコラスの能力 相手の能力を無効化する能力は、完全にチリーの神力を無効化しはしなかったものの、突進するチリーの大剣を…… 凄まじい量の神力を、見事にその場で押し止めたのだ。

「勝負はこつからだ…… そうだろオオオツ！？」

「勝敗の決まっているものは、『勝負』とは言いません」

惜しみなく神力を放出し、ニコラスへと突き進むチリー。しかしその突進を、ニコラスは己が神力で押し止めている。力が拮抗しているせいか、二人共その場から一步も動かないまま、神力と神力のぶつかり合う轟音だけが部屋の中に鳴り響いていた。

「おおおおオオオツ！」

チリーが咆哮すると同時に、大剣の柄から放出される神力は更に勢いを増した が、ニコラスは表情を変えないまま、両手の平でチリーの突進を止めている。

「何ッ」

驚愕の色を隠せないチリーに対して、ニコラスは嘲笑うかのよう
に笑みを浮かべる。

「『究極のニューピープル』、究極とは名ばかりですね…… この程度とは」

そんな言葉と共に嘆息するニコラスへチリーが再び咆哮し、それと同時に大剣の柄から放出される神力の勢いは増していく
しかしそれでも、ニコラスは動くどころか表情すら変えなかった。

「私にかかれば貴方の能力なんて」

「嘘…… でしょ……？」

凄まじい勢いで放出されていたチリーの神力が、徐々に消えていくのがミラルにも理解出来た。チリーの突進からは先程までの勢いが、消えていく。

「ゴミですね」

ニコラスがそう言ったと同時に、大剣から放出されていた神力もろとも、チリーの手握られていた大剣は姿を消した。

「嘘……だろ……ッ!？」

ドサリと。ニコラスの目の前で倒れるチリーを見下ろし、ニコラスはクスクスと笑みをこぼした。

「この程度ですか」

ニコラスはうつ伏せに倒れるチリーへ歩み寄り　その頭を、右足で思い切り踏みつけた。

「ぐッ!」

苦痛と屈辱、それらを同時に味わいつつも、疲労とダメージで反抗することすらままならない自分に、チリーは齒噛みした。

「この程度で私と戦おうとは……片腹痛いですねえ」

「テ……メ……ッ」

何か言い返そうとするチリーの頭を右足で踏みつけて固定し、ニコラスは更に左足で蹴りをくらわせると、痛みに呻き声を上げるチリーを、愉悦に満ちた表情で見下ろした。

「やめて……」

呟くようなミラルの声を、まるで無視するかのようにニコラスは、チリーの頭を踏みつける右足へ更に力を込める。

「やめてっ……!」

今にも泣き出しそうなミラルのその声を、ニコラスはまるで楽しむかのように聞き、再び笑みをこぼした。

「もうやめてえっ!」

そう叫んだミラルへ、ニコラスは待つてましたと言わんばかりに

振り向いて視線を向け

「やめてあげません」

ニタリと嫌らしい笑みを浮かべて、そう答えた。

「ふざけんじゃ」

立ち上がろうと、床へついたチリーの右手へ、ニコラスはすかさず左足で蹴りを浴びせる。そしてチリーを踏みつけるのをやめると、身を屈めてチリーの長い白髪を右手で掴み、持ち上げるとチリーの顔を自分の顔へ近づけた。

「今、どんな気持ちですかあ？」

嘲笑するニコラスへ、チリーが唾を吐きかけようと口へ唾液を含んだ瞬間　ニコラスの平手打ちがチリーの頬へ直撃する。

「小汚い。品がない。ゴミですねぇホント」

ニコラスは「ゴミ」でも投げ捨てるかのようにチリーの頭から手を離すと、ドサリと床へ落ちたチリーの腹部へ蹴りを浴びせた。

「冗談じゃねエ……！」

屈辱と苦痛。それに対してチリーは怒りを露にするが、その顔はニコラスの蹴りによって歪められる。

頭部。腹部。脚部。様々な部分に打撃を加えられ、チリーの身体は既にボロボロの状態だった。どこか折れていてもおかしくないような激痛を感じる上、意識までどこかへ飛んでしまいそうな程だった。

口を開く余力すら残されておらず、聞こえるのは楽しそうなニコラスの笑い声と、悲痛なミラルの声だった。

口の中に広がる血の味。吐き出そうにも、そんな力すら残っていない。

成す術なし。ニコラスへ対抗する力は、既にチリーには少しも残っていないかった。

「やめてっ！　やめてえっ！」

既に嗚咽交じりになっているミラルの声に、ニコラスは一言も答えない。高笑いしながら、ただひたすらにチリーへ暴行を加えつづける。

折角、助けてもらった命なのによオ。

途切れつつある意識の中で、チリーはミレイユの顔を思い浮かべた。

自分を助けるために、命を落とした少女。

仇を、取るんじゃないかったのか。

ミラルを、助けだすんじゃないかったのか。

己への問いかけに、答えることすら出来ない程にチリーの意識は朦朧とし始め

「おやあ、おねん寝ですかあ？」

チリーは、意識を手放した。

倒れたまま動かなくなったチリーを見下ろし、ニコラスはチリーの生死を確認するかのようにチリーの身体を踏みつける。何度か踏みつけ、チリーが何の反応も示さないことを確認すると、ニコラスは薄らと笑みを浮かべた。

「嘘でしょ……ねえ！ チリー！」

ミラルの声に、チリーは反応を示さなかった。

「ねえ、返事してよ！ ねえってばあつ！」

「無駄ですよ。彼はもう終わりました。貴女の声には答えない」

嘲笑するかのような声音で、そんなことを言うニコラスへ視線すら向けず、ミラルはただひたすらにチリーを呼びつづける。が、返ってくるのは静寂と、嘲笑うニコラスの声だけだった。

「起きてよ……起きなさいよ……馬鹿っ！」

既に涙混じりになりつつミラルの声は、叫ぶ度に弱くなっていく。押し寄せる絶望に、ミラルは自分が押し潰されるかのような錯覚を覚えた。

「さようなら。『白き超越者』……」

別れの言葉を告げ、ニコラスはポケットからトランシーバーに似た携帯端末を取り出し、ボタンを操作するとそれを耳に当てた。

ごうごう。ごうごう。

真っ白な世界に、彼は……チリーは横たわっていた。慌てて立ち上がって辺りを見回すが、あるのは真っ白な空間だけで、他には何も存在しなかった。

まるで、無。

足元を見てみても、地面があるのかどうかすらわからない。首を傾げつつ、チリーはこれまでの出来事を反芻し　表情を一変させた。

「ニコラスッ！」

そう叫び、辺りを再度見回すが、ニコラスの姿はなかった。能力を無効化され、体力の尽きた状態でニコラスと戦い　いや、あれ程一方的なものを戦いと呼べるのだろうか。成す術なく、ただひたすら攻撃を受け続けるだけの……あの状態が。歯噛みし、チリーは薄らと理解する。

俺、死んだのか。

ミラルを助けることが出来ないまま。

ミレイユの仇を取ることが出来ないまま。

テイテスを救うことが出来ない、まま。

「ンだよ。終わっちまったのかよ」

ゴロリと。チリーはその場へ仰向けに寝転がった。

全て、終わってしまった。そう考えて諦めると、どこか清々しささえ感じられる。

もう、戦わなくて良い。

もうあんな、生きるか死ぬかみたいな状況にならなくてすむ。

もう終わった。もう諦めて良い。やれることは　やった。

「ごめんな、皆」

ニシル。トレイズ。カンバー。青蘭。そして　ミラル。仲間の顔を思い浮かべ、チリーがそんなことを呟いた……その時だった。

「そんな所で、何をしていますの？」

不意に聞こえた少女の声に、チリーは跳ねるようにして身体を起こした。

「お、お前……!!」

何もなかったハズの真っ白な空間に、一人の少女が姿を現してい

た。チリーの目の前にいるその少女　ミレイユは、チリーを見て唇をきつく結んだ。

「何でお前、こんな所に」

言いかけて、すぐに気が付く。やはり自分は、死んだのだと。既に命を落としているミレイユに再び会うことが出来たのは、自分が死んで……死後の世界に来たからなのだ、チリーはそう理解した。「あん時は、ありがとな。もう今はこうして死んじまったけど、スゲー感謝してる」

照れ臭そうに笑みを浮かべつつ礼を言うチリーに対して、ミレイユは少しも表情を緩めなかった。

「何だよ。何でそんな顔してんだよ」

チリーの言葉には答えず、ミレイユは小さく溜息を吐いた。

「まったく。こんな男を助けて死んだのかと思うと、やってもらえませんわ」

「ああ？　どういうことだ!？」

顔をしかめて語気を荒げるチリーに、ミレイユは呆れたような表情をうかべた。

「私が好きになったのは……殉じても良いと思えたのは、すぐに諦めるような……そんな情けない男ではありませんわ」

「ふざけんな！　どうしろっつーんだよ！　もう死んでんだぞ!？」

「……」

「諦めさせるよッ！　もう無理なんだよ！　素手でも勝てねえ、剣も通用しねえ、もうどうにもなんねえんだよ！　俺にこれ以上、どうしろって」

チリーが言葉を言い切る前に、ミレイユの平手打ちがチリーの頬を強く叩いた。

「な」

動揺を隠せずにいるチリーを、ミレイユは薄らと涙を浮かべた瞳で強く睨みつけた。

「ミラルを……助けるんじゃないかなかったですの!？」

ミレイユはチリーの胸ぐらを思いり切り掴むと、自分の顔をチリーへ近づけた。

「私が助けた貴方の命は、こんなものでしたの!?!? こんな所で諦めて、無駄にするような……そんな命でしたの!?!？」

呆気にとられているチリーへ、ミレイユは更に言葉を畳み掛ける。

「生きて! 私に分までその命で! そして勝って! お父様に貴方の、運命につ!」

俺の、運命……。

心の中でミレイユの言葉を繰り返し、チリーはミレイユの瞳を真っ直ぐに見据えた。

「そう、その瞳ですわ」

真っ直ぐな瞳。

一点の曇りのない、その先にある勝利だけを見据えたその瞳。

ミレイユはチリーの胸ぐらから手を放すと、ニコリと微笑んだ。

「後は、任せましたわよ」

「お前 ツ!」

ミレイユの姿が、徐々に薄れていく。真っ白なこの世界へ少しづつ溶けていくミレイユへ、チリーは手を伸ばした。

掴んだのは、空。

「おい、ミレイユ! おいッ!」

後は、任せましたわよ。

もう一度だけ同じことを呟いて、ミレイユはその場から姿を消した。

パチリと。閉じられていた瞳は開かれた。
頬に残る、ミレイユに叩かれた時の感触。

ミレイユ……。

最後に彼女が見せた笑顔を思い浮かべると、知らず知らずの内に
チリーの頬を涙が伝った。

生きて！ 私の分までその命で！

「ああ、生きてやるさ」

そして勝って！ お父様に 貴方の、運命につ！

「勝ってやるよ……絶対になッ！」

ユラリと立ち上がったチリーへ、ミラルとニコラスの視線が一瞬
にして集中した。

「チリー……チリーっ！」

歡喜の声を上げるミラルへ、チリーは言葉では答えず薄らと笑み
を浮かべることで答えた。

「どこにそんな体力が？」

携帯端末をポケットに仕舞い、そう問うたニコラスに対して、チ
リーは得意げに笑って見せた。

「こんな所ですよ……やられてたまるかってんだよ……なあ？ そ
うだろ？」

ミレイユ。

最後にそう付け足し、チリーはニコラスへ右手をかざした。

「馬鹿の一つ覚えですか。ホンツトにゴミですねえ。それは私には
意味がない」

しかしチリーは、ニコラスの言葉を無視するかのように、今度は
左手をニコラスへかざした。

何でもやれそうだ！ 馬鹿みたいに力が溢れてくる気が
する……身体の奥底にまで沈んでいる何かを、引っ張り出せそうな
気がする……！

自然と、笑みがこぼれた。

「テメエにも見せてやるから、よよく見とけ」

そう、チリーが言い放った瞬間だった。

「これは……ッ！」

チリーの全身を、突如として眩い光が包み込んだ。

「これが……これが……ッ！」

チリーの右肘から先が、徐々に大剣の刃先へと変化していく。その様子にミラルとニコラスが呆気に取られている内に、同じような変化がチリーの左腕にも現れた。

「この神力は……！」

胸部と肩を、まるで水晶のように透き通った鎧が包み込み、やがて彼の両足も、同じように透き通った鎧が包み込んだ。

まるで、水晶の鎧で武装した戦士が如き姿。

「チリー……アンタ……！」

凄まじい神力と共にその姿を変えたチリーへ、ミラルは驚きを隠せない。

「厄介ですね」

ボソリと呟き、ニコラスは眉をひそめた。

チリーは確かめるように、剣と化した己が両腕へ視線を向け、再び笑みを浮かべると、その両腕を左右に広げた。

「これが俺の　　超越だアアアアアッ！」

白き超越者、ここに覚醒す。

水晶を身にまとうその姿は、美しくありながらも荒々しく、矛盾を孕むが故にその姿は美しい。光が反射し、白く輝く透き通ったその鎧に、高密度の神力が圧縮されているのだと、ニコラスは一目で理解した。

白髪。そして白く輝くその姿は正に

「白き超越者……」

凜としたチリーの瞳が、真っ直ぐにニコラスを捕らえた。

「終わりだ……ニコラス……ッ！」

そう言い放つチリーをしばらく見つめた後、ニコラスは不意に笑みをこぼした。

「何がおかしい……？」

「確かに凄まじい神力です。流石は『白き超越者』……とても言うておきましょう。ですが……お忘れですか？ 私の能力を」

相手の神力を無効化する能力。

これまで、ニコラスに対する神力での攻撃はことごとく無効化されてきた。チリーの剣ですらいとも容易く無効化するニコラスの能力は、恐らくこれまでチリーが見てきた能力の中では「最強」と言っても過言ではなかった。

しかしそれでも、チリーの中に「負ける」という発想は微塵も生まれなかった。

ただ一点だけ、勝利だけを見つめるその瞳に、霧がかかることはなかった。

「その自信、無に帰してあげましょう」

ビクンと。ニシルは肩をびくつかせた。

何かとてつもない、強大な何かを感じて反応したのはニシルだけではなかった。同じ神力使いであるリエイだけでなく、能力を持たないカンバーとクルスですら、何かを感じ取ったかのような反応を見せていた。

「これは……！」

どこか笑んでいるようにも見える表情で、カンバーは驚嘆の声を上げつつニシルへ視線を向けた。

「うん、間違いない……アイツだ。チリーだ……！」

建物の中から感じる、外に漏れ出す程に強大な神力。それがニコラスの物ではないことは、考えるまでもなく理解出来た。

「！ 見て！」

不意に、ニシルが声を上げた。

「ミレイユが……」

表情一つ変えないハズの彼女の顔が、どこか笑っているように見えた。そう見えたのはニシルだけではないらしく、カンバーも同じように感じたのか、ええ、と強く頷いた。

安らかな、笑顔。何かに安堵したかのようなその表情は、彼女がチリーの勝利を確信しているかのように見えた。

対峙する二人を見つめつつ、ミラルはゴクリと生唾を飲み込んだ。能力者ではないミラルにとって、感じられるのは薄らとだけだが、単純な神力の量だけなら圧倒的にチリーの方が勝っている。しかし、ニコラスの表情から読み取れる余裕が、ミラルを安心させてはくれない。なかった。

「チリー……！」

ギュッと拳を握り締め、チリーを見つめる。

雄々しく、猛々しく、荒々しく、しかしそれでいて美しく輝くその姿に、ミラルは数刻見惚れた。

「しねエな……ああ、全ッ然しねエ！」

確かめるように両手へ視線を向け、チリーはニツと笑みを浮かべた。

「負ける気がよオ……全然しねエなア！」

そうだろ？ ミレイユ！

チリーの心の中で微笑むミレイユにそう問いかけ、チリーは改めてニコラスへ視線を放った。

「行くぜ……！」

それはニコラスへ向けた言葉だったか、それとも己の内で暴れ出さんとする神力へ向けた言葉だったか。

水晶に包まれたチリーの背に、徐々にチリーの神力が集中していく。その異常な程に高密度な神力の塊は、能力者ではないミラルにすらハッキリと見える程だった。

「くらいやがれエエエエツッ！」

瞬間、背に集中した神力は、チリーを背中から押し出すようにして放出される。と同時に、チリーは両手を 両の剣をニコラス目掛けて突き出した。

残光。

「だアアアアアッ！」

弾丸の速さで直進するチリーに対して、ニコラスは悠然と両手の平を前へ突き出した。

そしてチリーの剣と、ニコラスの両手の平が触れた瞬間、轟音が鳴り響く。

「これは……ッ！」

先程の突進とはまるで違うことに気が付き、ニコラスはそんな声をもらした。

無効化し切れずに漏れたチリーの神力が、周囲の床を凹ませてい

る。それだけではない、壁や天井にすら、漏れた神力はひびや傷を入れている。

「消せやしねえよ！ テメエなんか…… テメエなんかにはなアアアア！」

脳裏を過るは、二人の笑顔。

同じ顔でも、別の二人。

「コイツは…… コイツは俺だけの力じゃねエエエ！」

自分をかばって命を落とし、それでも尚、自分の背中を押ししてくれたミレイユ。

想像を絶する苦痛と、絶望の中、それでも…… それでも自分を信じ続け、待っていてくれたミラル。

「三人分だッ！ 俺と、ミラルと、ミレイユだ！ この力はッ！ 俺一人だけの力じゃねエんだよ！ テメエ一人で」

更に、放出される神力は勢いを増した。

「消せると思うなアアアアアッ！」

ニコラスの両手で、赤が跳ねた。

「無効化…… し切れない……ッ！」

ここでついに焦りの色を表したニコラスの額には、汗が滲んでいた。

「ッツたり前だろオオオオオアアアッ！」

そして剣は、突き抜けた。

両手の平を貫通し、胸部をも貫通した二つの剣が、ニコラスの背中から突き抜けていた。

「俺の…… 勝ちだ……ッ」

「か……ア……ッ」

血反吐をチリーの顔面へ吐き出しつつ、ニコラスは短く呻き声を上げた。

赤く濁っても尚、その白き姿から美が損なわれることはなく、ま

たその瞳にも、一点の曇りすら見つけ出すことは不可能だった。

勢いよく、チリーが両手をニコラスから引き抜くと同時に、ニコラスの身体はその場へうつ伏せに倒れた。と、同時に、チリーの纏っていた鎧は消えていき、剣と化していた両手は元の両手に戻っていく。

「ハアツ……ハアツ……」

疲労故か呼吸を荒げつつも、チリーはミラルへ視線を向けた。

「チリー……っ！」

今にも泣き出してしまいそうな顔は、安堵と歡喜に満ちていたが、

「ッ！」

それをかき消すかのように、部屋の中に轟音が鳴り響いた。

音の方へ視線を向けると、そこにいたのはチリーの倍近い身長がありそうな大男だった。彼の頭上にあるハズの天井にはポツカリと穴が空いており、縄の梯子が垂らされていた。そしてその梯子の先には、プロペラを回転させて浮遊する飛行物体が存在した。

「む……」

大男の太い右腕は、まるでドリルのようになっており、そのドリルで天井をぶち抜いてきたのであるうことは、容易に想像することが出来た。

「そうか、やられたか」

倒れているニコラスへ視線を向けた後、まるで虫の死骸でも見るかのような顔で、大男は呟くと、すぐにミラルへ視線を向けた。

「デメエは……ッ！」

見覚えのあるその顔に、チリーは険しい表情を浮かべた。

東国の地下洞窟で、赤石を奪った大男 ニューピープルの一人だった。

大男はチリーへ一瞥もくれず、ミラルを縛り付けている十字架を床から無理矢理引き抜いた。

「ちよ、ちよっとアンタ……っ！」

困惑するミラルをよそに、大男は十字架ごとミラルを担いだまま縄梯子の方へ歩を進めていく。

「テムエミラルをどこに」

チリーが大男の方へ駆け出そうとした瞬間、不意にチリーの身体はその場へドシヤリと崩れた。

「お、おい……！ ふざけんな！ 動きやがれッ！」

どれだけ叱咤しようとも、チリーの足は動こうとしなかった。

「あれだけの神力で身体に負担をかけておいて、動けるハズがなからう」

呟くようにそう言いつつ、大男は縄梯子へ手をかけた。

「チリー！ チリーっ！」

必死にチリーへ手を伸ばすミラルの手を掴もうと、チリーはミラルへ手を伸ばす　が、届くハズもなく。

「ミラルッ！」

大男が右手で十字架を担いだまま縄梯子へ両足と左手をかけると、縄梯子は徐々に上へと釣り上げられていく。

「チリーっ！」

徐々に遠くなっていくミラルの声。

ミラルと大男を乗せたままの浮遊物体は、夜空へ少しずつ溶けていく。

「嘘だろ……ッ」

やがて、プロペラの回転する轟音さえもその場からは消え去った。

「ミラル……ミラルッ！ ミラルウウウウッ！」

その叫びは、静寂に飲み込まれて消えた。

episode 104 「Suspicion」

林の中の一角で、少年は　チリーは立ち尽くしていた。

彼の目の前には、木で出来た十字架が立てられており、そこには字が彫られていた。

木漏れ日を背に浴びながら少年は一人、寂しげな笑みをこぼした。「ごめんな。俺達じゃ、こんなモンしか作れなかった……もっとちやんとしたモン、造れりゃ良かったんだけどな……」

すまねえ、と呟くようにそう言って、チリーは決まりが悪そうに後頭部をポリポリとかいた。

風が、そつとチリーの白髪をなげた。

「それじゃあな……。俺はもう、行かなくちゃいけねえ」

名残惜しそうな表情を十字架に向けつつ、チリーは静かに十字架へ背を向けた。

「全部終わったら、またくるよ」

じゃあな、ミレイユ。

背を向けたままそう言ったチリーの頬に、木漏れ日が反射した。

それに貴方、ハーデンに利用されてるだけですし。

前に、あの男……ニコラスに言われた言葉が、ふと脳裏を過った。既に完治した華奢な体躯を、自らの両手で抱き締めるようにして

少年　ライアスは海面を眺めた。

ゲルビア帝国首都パンドラにある港で、ライアスは靴を脱いだ両足を海面に浸けて、海面に映る自分の顔を眺めていた。

利用されている。

東国の地下洞窟での一件依頼、ニコラスのあの言葉が頭から離れない。忘れようとするればする程鮮明に蘇る。

僕が利用されている……？ ハーデンに……？
違う。

かぶりを振ってその考えを振り払い、ライアスは顔をしかめた。
ライアスにとってのハーデンとは、父親代わりのようなものだった。

破壊することしか出来ない、悪魔のような 否、悪魔よりも凶悪なこの忌むべき力を、ハーデンは才能だと認めてくれた。国の役に立つのだと、そう言っただけで自分に居場所をくれた。

暴走した己が力で両親を亡くし、コントロール出来ない力を内包したまま、ただ絶望に打ちひしがれることしか出来なかったライアスにとつて、ハーデンとは救世主であり、希望。

全てを破壊するこの力を持ってしても、破壊することが出来なかった唯一の存在。

「ハーデン……」

地下洞窟でチリーに敗北を喫して以来、ライアスは城へ戻っていない。戦うことでしか、勝つことでしか役に立つことが出来ない自分に敗北は許されない……。

その能力だけが取り柄でしたのに……それすら敗れてしまっただけ……良いとこないですねえ……。ゴミですねゴミ。

ニコラスに言われなくても、そんなことは自分自身が一番よくわかっていることだった。負けてしまった自分は、ハーデンに会わせる顔がない。

ギョツと拳を握り締め、自分の無力さを噛み締める。

だからって、俺が負けて良い理由にはならねえ！ テメエには絶対勝つツツツ！

白髪の、少年。

ハーデンから直々に抹殺を依頼された少年 チリー。ライアス

が唯一敗北したあの少年は、今頃どうしているのだろう……。

倒した相手に止めすら刺せないような甘い少年ではあったが、その実力は本物。凄まじいまでの神力と、何があっても揺るがないその信念。一点の曇りさえ見受けられない、青空のように澄み切った真っ直ぐな瞳。

「今の僕とは、正反対だ……」

あの日以来、ニコラスの言葉だけでなく、彼の存在も忘れられなくなっていた。

敗北とは、忌むべきもの。

敗北とは、あつてはならぬもの。

そう信じて、ライアスは今まで勝ち続けてきた。破壊し続けてきた。

だがチリーへの敗北は……自分の全てを出し切ったあの敗北は驚く程に爽やかで、勝利の、破壊の快感さえも陵駕するような感覚を覚えた。

まるで、友達でも出来たかのような……。

「友達……?」

思えば、これまでの人生、自分に「友達」という存在がいたことなど一度もなかった。

必要ないとさえ考えていた。

お前を殺す気にはなれなかった。

彼とは　チリーとはもう少し別の出会い方をしていれば、「友達」になれたのかも知れない。

他愛のない話題で笑い合い、些細なことで喧嘩して、そして仲直りして、もっと仲良くなつて

「……馬鹿馬鹿しい」

そこまで想像して、ライアスは自嘲気味に笑みを浮かべた。今更どう夢想したって遅い。自分とチリーは、結局ああいう形でしか出会うことが出来なかった……それだけのことだ。

ハーデンがいればそれで良い。そういう風に思っていた。

ハーデンだけが自分を理解し、ハーデンだけが自分を認めてくれる。ハーデンだけをただひたすらに欲していた……。

だが今は違う。

こうして、ハーデンではない別の誰かを求めるようになっていく。会いたいと。

あのチリーという少年にもう一度会いたいと、そう思うようになっていく。

そして、自分にとって全てであったハーデンに対して、疑念さえ抱くようになっていく……。

ふと海面へ目をやると、そこに映っているのは、疑念に満ちた表情をした自分の顔だった。

そんな自分の表情に嘆息し、ライアスが海面から足を引き、立ち上がってその場を立ち去ろうとした時だった。

「ライアス様」

いつの間にかすぐ傍まで、一人の男が歩み寄ってきていた。

ゲルビア城で見た覚えのあるその顔から、ライアスはその男がゲルビア城からきた人間なのだと判断し、面倒くさそうに表情を歪めた。

「……何？」

「陛下がお呼びです」

「そう」

短くそう答えると、ライアスは男を素通りするようにして城へ向かって歩き始めた。そのライアスの後ろを、男はゆっくりとついて行く。

一歩。二歩。三歩。四歩。五歩

「何のつもり？」

ピタリとライアスが足を止めたのと、男が足を止めたのは同時だった。

「それ、しまつてくれる？」

振り返ろうともせずになんか言つたライアスの背中に、男は笑みを

向けた。

「どこから気付いていた……？」

「君が殺気を放った瞬間、かな」

ライアスのその言葉に、男はなるほど、と呟くような声音で言うと、ライアスの背に突き立てようとしていたナイフを引き、ライアスから数歩距離を取った。

「ああ、何か違うと思ったら」

振り向いたライアスの目の前にいたのは、先程までの男ではなかった。身体の各部位がボゴボゴと奇怪な音を立てつつ膨張と収縮を繰り返し、別の形へと徐々に姿を変えていく……まるで化け物が如き姿の生き物だった。

「意外に早く気付いたな……」

やがて変化は収まり、その生き物は一人の男の姿へと変った。

「デイルク」

ライアスが呟いたその言葉に、男は　デイルクは笑みをこぼした。

「で、どういっつもりなのかな？」

悠然とした態度のデイルクとは対照的に、ライアスはピリピリとした殺気を放っていた。それに気付いていながらも、デイルクは大して気にした様子もなく、持っているナイフを適当に弄んでいた。

「場合によっちゃ今この場で君を」

「陛下直々の命令……って言ったら、どうするよ？」

デイルクのその言葉に、ライアスは動揺していることが容易に悟れる程に表情を変えた。

「その冗談、笑えないよ」

「悪いがこれは冗談でも何でもなし……。陛下直々に『ライアスを殺せ』との命が下った……。それだけさ」

ギシリと。歯の軋む音。

いつの間にか握り締めていたライアスの拳に、更に力が込められた。

「白き超越者抹殺に失敗したお前に、陛下はもう用がないらしい」
「嘘だ……！ そんなハズはない……！」

語気を荒げるライアスと、笑みをこぼすディルク。二人のコントラストは互いの心理状態をこれでもかという程にわかりやすく現していた。

「お前にとつて陛下は父親みたいなものだったんだろうが、陛下にとつちやお前なんざ並みの部下程度だ。よっぽどの傀儡^{ミレイユ}姫の方が、お前より大切にされてみたいだしなア……」

それに貴方、ハーデンに利用されてるだけですし。

再び、地下洞窟でのニコラスの言葉が鮮明に蘇る。

僕は……利用されていた……？

ライアスの、ハーデンに対する想い。自分を認め、居場所を与えてくれたハーデンに対する、まるで父親に対するかのような「敬意」、「感謝」、「親愛」、それら全ての感情は、ハーデンにとっては利用価値のある　ライアスを自由に動かすための「材料」でしかなかったということなのだろうか。

だとしたら。

もしそうなのだとしたら。

「僕は……」

ゲラゲラと品の無い笑い声が、ライアスの鼓膜をひたすらに刺激し続ける。

「僕は」

ただ、ハーデンに利用されているだけだった。

その結論へ辿り着いた瞬間、ライアスの頭の中は空白で埋め尽くされた。

何も考えないまま、ただフラフラと未だに笑い続けているディルクへと歩み寄る。

「そっか……そうなんだ……」

ゆつたりとした動作で、ディルクの頭部へライアスの右手が乗せられた。

「　　ッ!?!?」

完全に油断し切っていたディルクは、ライアスの手が自分の頭へ乗せられる、という状態の危険さを理解し、表情を一変させた。次の瞬間には、その頭は派手な音を立てて爆せていた。

ドサリと。ディルクの首から下が倒れ伏す音。

飛び散る肉片を顔に浴びながら、ライアスは蒼白な表情を浮かべた。

「騙されていただけ……か」

そう、ライアスが呟いた瞬間、ライアスの身体はグラリと足元からぐらついた。

何とか体勢を立て直しつつ、ライアスは嘆息する。

「使い過ぎちゃったみたいだね……」

もう、長くはないか。

心の内でそう呟き、ライアスはどこへともなく静かにその場を立ち去った。

一人の少女が、鎖によって両手足を縛り付けられ、椅子に座った状態で張り付けられていた。

その隣には玉座があり、部屋の入り口から玉座へ向けて赤いカーペットが敷かれている。どういわけか部屋の中は薄暗く、明りの類は一切付けられていない様子だった。

玉座には、初老の男が座っている。体格の良い男で、白髪のない、長く艶やかな黒髪は見た目の年齢にはそぐわないように見える。

男は、ただ座っているだけだというのに凄まじい威圧感を放っていた。地上に存在する全ての生物を平伏せさせることが出来るかのようなその威圧感は、正に「王の貫禄」だった。

その男こそ、ゲルビア帝国現国王、ハーデンである。

そしてハーデンの隣の椅子に縛り付けられ、気を失っている少女は、ゲルビア帝国第一王女　ミラルだった。

やがてゆっくりと、少女　ミラルの目は開かれる。

ミラルは目を覚ますと、声を上げるよりも先に自分の着ている服が、気を失う前と違うことに気が付いた。真っ白なフリルのあしらわれた、緑色の豪華なドレス……気を失う前とあまりにも違うその服装に、ミラルは驚きを隠せずにいた。

両手足を動かし、縛られていることを理解すると、次にミラルはここがどこなのかを確認するために周囲を見回そうとした　その時だった。

「随分と冷静だな」

不意に、隣から声かけられる。

「お生憎様。こういう状況には慣れて

隣にいる男へ視線を向けつつ、そう言おうとして、ミラルは口を開けたまま男を凝視した。

「どうした？ この父の顔に虫でも付いているのかね？」

表情を全く変えずに男は　ハーデンはそう言った。

「お父……様……」

呟くようにそう言って、ミラルはゴクリと唾を飲み込んだ。

ゲルビアの首都、パンドラ。ゲルビア帝国国王であるハーデンが住まう、ゲルビア城を中心とした都市で、その面積と人口は小国にも匹敵する程だが、パンドラはゲルビア帝国の国土の三分の一にも満たない。

早朝、人気のないパンドラの中を、静かに歩く三人組がいた。

男が二人、女が一人。三人の内二人は、大陸内では見ないような服装をしており、周囲の景色の中で少しだけ浮いていた。

男の一人　光秀は、そっとリンゴを荷物の中から取り出すと、後ろを歩いている男の方へ、振り向きもせずリンゴを放った

が、次の瞬間、そのリンゴは真っ二つになって地面へ音を立てて落下する。

「……やるようになったじゃねえか」

後ろの男、青蘭が、瞬時に腰に提げている刀を抜刀し、放られたリンゴを切り裂いたのだった。

「ええ、おかげさまで」

青蘭は、光秀の言葉に答えると同時に、刀を鞘の中へ収めると、地面に落ちたリンゴを拾い上げて土を払うと、片方を一口口にしたら、光秀が振り返らずに左手を後ろに差し出すと、青蘭は何も言わずにもう片方のリンゴを光秀の左手へと放った。

光秀は青蘭からリンゴを受け取ると、満足げな表情を浮かべつつ、

そのリングを口にする。

「修行の成果、十分に出てんじゃねえか」

アルケスタからパンドラまでの道中、光秀はことあるごとに青蘭へ刀の稽古をつけていた。青蘭の異常なまでのやる気のせいか、青蘭の刀の腕はメキメキと上達し、短期間の間に、先程のような芸当が出来るまでに成長していたのだった。

俺に、刀を教えて下さい。

空虚なようできて、その奥にドス黒くさえ見える意志を秘めた青蘭の瞳を、光秀は今も忘れることが出来ずにいた。

青蘭が、ただ復讐のためだけに刀を振るっていることは、稽古付けてみてすぐに理解出来た。一太刀ごとに感じる、ドス黒い妄執めいた青蘭の感情。殺意で濁ったその凶刃は、少しでも気を抜けばすぐにでも光秀の喉下まで突きつけられていた。

そんな青蘭に不安を感じつつも、ついにこの場所　パンドラまで辿り着いてしまった。

「ついにここまで辿り着いたわね……」

静かにそう呟いた女性　麗に、青蘭と光秀はコクリと頷いた。

「取りましよう。同胞達の仇を……そして掴むのよ、東国の未来を」

青蘭達がパンドラへ到着してから数時間後、日が昇る頃にチリー達はパンドラへと到着していた。

パンドラに到着したチリー達は、その夥しいまでの人の数に圧倒されていた。どこもかしこも人ばかり、これまで彼らの住んでいたテイテスでは、一瞬たりともあり得ないような光景だった。

これまでの旅の中、様々な町の中を歩いたが、これ程までに人の多い町はチリー達にとっては初めてである。

いつもなら、この物珍しい光景に興奮して、チリーはニシルと共に

に大騒ぎするのだが、今回ばかりはそれどころではなかった。顔を隠すためにかぶっているフードの下で、チリーは険しい表情を浮かべたまま、一言も発さずに歩いている。

「流石は大陸一の人口……ですね」

眼鏡の位置を直しつつ、周囲を見渡しながらカンバーがそう言うのと、隣でニシルがまいったくだよ、と苦笑しつつ頷いた。

「どこもかしこも人だらけ。息苦しいっいたらないね」

そう言っつて、ニシルは小さく溜息を吐いた。

「カンバー、ゲルビア城の位置は把握出来ているのか？」

トレイズの問いに、カンバーはええ、と答えると、そのまま言葉を続けた。

「ゲルビア城はこの町の中心部……。元々パンドラ自体が、ゲルビア城の周囲を囲むようにして作られた町みたいです。パンドラの歴史を語り出すと長くなるので、今は割愛しますが……」

ゲルビア城。という単語を聞いた途端、今まで黙っていたチリーの表情が一変する。

「場所がわかってんならさっさと行くぞ……！　んであのクソハーデンをぶっ飛ばしてミラルを助ける！」

今にも駆け出さんばかりの勢いのチリーに、カンバーは落ち着いて下さい、と右手で制止する。

「落ち着いてなんかいられっかよッ！」

チリー！　チリーっ！

必死に伸ばされたミラルの手を、チリーは掴むことが出来なかった。

動かない身体と、遠ざかっていくミラルに絶望し、己の無力さを噛み締めることしか出来なかった。

アクタニアから、パンドラへ辿り着くまでの数日間、チリーは片時もあの瞬間のことを忘れなかった。

救えなかった。

後一歩だったのに、助けることが出来なかった。

自分を信じて、想像を絶する絶望と苦痛の中、待ち続けてくれた彼女を、救うことが出来なかった。

「今度は絶対エ……掴んでやる！」

悔しがっているのは、チリーだけではない。ニシルも、トレイズも、カンバーも、ミラルを助けることが出来なかったことを悔いている。しかしだからと言って、全員が冷静さを欠くわけにはいかない。

「気持ちは痛い程わかります。ですが、策も無しにただゲルビア城へ突っ込むのはあまりにも無謀です」

「そりゃ……そうだけどよ……ッ」

カンバーの言葉に、チリーが歯噛みした　その時だった。

「いい加減、白状したらどうだ？」

そんな言葉が、路地裏から聞こえてきた。

すぐにチリー達が路地裏へ視線を向けると、そこには数人の兵士に、一人の小さな少年が囲まれていた。

少年は怯え切っており、兵士が何かをする度にビクビクと肩をびくつかせている。

「アジトの場所さえ吐けば、お前だけは助けてやるぞ？」

そんなことを言いながら詰め寄ってくる兵士に、少年は頑なに首を左右に振った。

「頑固なガキだな……一回痛い目見ねえと……」

言いつつ、男は腰に下げている剣を抜いた。

「わかんねえか？」

剣先を突きつけられた少年は、今にも泣き出しそうな表情を浮かべながらも、首を左右に振っていた。

その少年の態度に、剣を少年へ向けた兵士は表情を怒りで歪めると、剣を振り上げた　が、その剣は背後に現れた何者かによって取り上げられる。

「痛い目見んのはテメエの方だ」

兵士が振り向くと、そこにいたのはローブを着込んだ白髪の少年

チリーだった。

チリーは兵士が何か言うよりも早く、兵士の顔面にその右拳を叩き込んでダウンさせると、間髪入れずに残りの兵士にも殴りかかる。そして一分と経たない内に、その路地裏で立っているのはチリーと、その少年だけになった。

「おい、大丈夫か？」

チリーの問いに、少年は安心したような表情を浮かべ、ありがとう、とチリーへ頭を下げた。

「で、何でお前ゲルビア兵なんかに囲まれてたんだ？」

路地裏を出た後、そう問うてくるチリーに、少年は少し答えにくそうに口をつぐんだ。

「ま、別に言いたくねーなら良いけどよ……。もう掴まんじゃねーぞ」

ややぶつきらぼうにそんなことを言ったチリーへ、少年はニコリと微笑んだ後小さく頷いて見せた。

カンバーやニシルは、少年に対して何か聞いたそうな顔をしていたが、ゲルビア兵にあれだけ詰め寄せられ、剣を向けられても話そうとしなかったことだ、自分達がちよつとやそつと質問したくらいでは簡単に話してはくれないだろう、と判断したらしく、チリーと少年のやり取りを静かに見守っているだけだった。

「そんじゃな」

「うん」

チリーに手を振られ、少年がその場を立ち去ろうとした　その時だった。

「ヴィレム！」

若い男性の声の不意に聞こえ、ヴィレムと呼ばれた少年はすぐに声のした方向へ視線を向ける。そこには、やや焦った様子でヴィレムの方へ駆けてくる青年の姿があった。

「あ、兄ちゃん」

「中々帰ってこないから心配したんだぞ……！」

青年はヴィレムの傍まで駆け寄ると、小さく安堵の溜息を吐いた。「何かあったのか？」

青年の問いに、ヴィレムはしばらく答えたくなさそうに視線をそらしていたが、やがて路地裏の方を指差した。

青年は路地裏に倒れているゲルビア兵を見た後、すぐにヴィレム

へ視線を戻すと、またか……！ と口惜しそうに言葉を漏らした。

「ゲルビア兵に捕まってたのか！」

ヴィレムはコクリと頷いた後、すぐにチリーの方を指差した。

「あの人が助けてくれて……」

青年はチリーの方を向くと、すぐに申し訳なさそうな表情を浮かべつつペコリと頭を下げた。

「どなたか存じませんが、ありがとうございます」

「い、いやいや、良いって別に……大したことはしてねーって……」

照れ臭そうに苦笑するチリーだったが、それでも青年はありがとうございます、と繰り返し感謝の意を告げた。

「僕はコイツの……ヴィレムの兄のブルーノと言います。よろしければお礼がしたいんですが……」

ブルーノと名乗ったその青年の言葉に、ニシルはピクリと反応を示した後、一瞬だけニヤリと笑みを浮かべた。

「えっとじゃあ、一晩だけでも良いから泊めてもらえないかな……なんて……」

わざとらしい口調でそんなことをたまうニシルを、カンバーが右手でつついて咎めたが、ブルーノは思いの外簡単に頷いた。

「わかりました。見たところ、貴方方はこの町の間人じゃないようですし、アジトで良ければ泊まって行って下さい。既に三人ほど別の客も泊まっていますか……」

アジト、と言う言葉が気にはなったが、チリー達はブルーノに案内されるがままについて行った。

町から少し外れた場所にある家へ、チリー達は案内された。

木で出来たその小さな家は、最近建てられたばかりなのか外観は

随分と小奇麗に見えた。中には既に人がいるようで、窓から人影が数人分見える。

「ベッドが人数分ないので、何人かは雑魚寝してもらうことになってしまいますが……」

申し訳なさそうにそう言いつつ、ブルーノは小屋のドアを開けた。小屋の中は、外観と同じく小奇麗な感じで、よく手入れが行き届いているような印象を受けた。木製の床を、ギシギシと音を立てつつ居間へと向かうと、ソファに二人の青年が座っているのをチリー達は見つけた。

一人は、口元に無精髭を蓄えた男で、青年というよりおじさんに見えるような男だった。そしてもう一人

「テメエ……ッ！」

そのもう一人を見た瞬間、チリーはギュツと拳を握り締めた。

「何でテメエがこんな所にいやがる……ッ！」

今にも襲い掛からんばかりの勢いで身を乗り出すチリーを、慌てて後ろからニシルが止めるが、それでもチリーはギリギリと歯軋りをしながら青年を睨みつけた。

「青蘭ッ！」

怒気の込められたチリーのその言葉を聞いて初めて、青年は

青蘭はチリーへ視線を向けた。

「スカしてんんじゃねエぞテメエッ！ 表エ出やがれコラ！ こないだの決着……今ここで着けてやらア！」

青蘭はスツと立ち上がると、傍に立てかけていた刀を取った。

「俺は構わない」

表情一つ変えない青蘭のその態度に、チリーの怒りのボルテージは更に高まっていく。

「おい青蘭……」

隣に座っていた男が制止の言葉をかけるが、青蘭はそれを無視してチリーの方へ歩み寄って行く。

「おい離せニシルッ！ コイツだけはいつペンぶつ飛ばさねエと気

がすまねえ！」

「おいやめろってバカチリ！ 今青蘭ともめたって何にもならないだろ！」

ブルーノはしばらく、呆気に取られた様子でチリーと青蘭をポカンと見つめていたが、やがて事の大きさに気が付いたのか、すぐに青蘭の方へ駆け寄って青蘭を制止した。

青蘭はピタリと足を止め、ブルーノへチラリと視線を向けると、すまない、と謝罪の言葉を告げた。

「ああもういい加減にしろって！」

青蘭がソファへ戻っても尚、襲いかかろうと暴れるチリーに、トレイズとカンバーが嘆息した。その時だった。

「あら、少し席を外している間に人が増えているわね」

別の部屋から、おかつぱ頭の女性が居間へ姿を現した。

無精髭の男性の名は光秀、おかつぱ頭の女性の名は麗と言い、ヘルテュラから青蘭と行動を共にしていた東国の人間だった。

青蘭へ襲い掛かろうとするチリーをなんとかいさめ、全員で自己紹介を終えた後、ブルーノが会議室と呼んでいる部屋へチリー達は通された。その際ヴィレムは、どこか別の部屋へとブルーノに連れて行かれていた。

部屋の中には長机が置かれており、それを囲むようにしていくつもの椅子が置かれている。部屋の奥の壁には、大きな白紙が貼り付けられていた。

チリー達と青蘭達が向かい合うようにして座り、ブルーノは白紙の貼り付けられた壁の前へ立った。

「チリーさん……でしたよね？」

ブルーノがチリーへそう問うと、チリーはおう、と返事をする。

「ゲルビア帝国国王ハーデンから、直々に指名手配されている、あのチリーさん……で間違いないですか？」

「！」

表情を一変させたチリー達へ、ブルーノは心配ありません、と微笑みかけると、そのまま言葉を続けた。

「僕は貴方をハーデンの所へ突き出そうとは思いません」

「何か目的があるのか？」

腕を組み、そう問うたトレイズへ、ブルーノははい、と小さく頷いて見せた。

「このパンドラには……いや、パンドラだけではありません。このゲルビア帝国内の至る所に、現在のゲルビア帝国へ反旗を翻しているレジスタンスが存在します。僕は　　そのレジスタンス達を束ねる長です」

ブルーノのその言葉に、その場にいた全員が驚きを隠せなかった。

まるで金縛りにあったかのように、身体を思うように動かせない。元々縛られているため、身体が自由に動かせないのは当然なのだが、それとは別の要因　　隣にいる男の威圧感に圧倒されて、ミラルは身体を動かすことが出来ずにいた。

「どうした？　喜ばんのかね……親子の感動の再会ではないか？」

優しいな笑い……一見そう見えるが男の　　ハーデンの目は少しも笑っていないかった。彼がミラルへ向けている視線は、父親が愛娘に向けるソレとは明らかに違っていた。

「ふむ。感動で声も出んか」

そう言っただち上がると、ハーデンはミラルの正面へ立った。

顔も、声も、髪も、ほぼ全てがミラルの知る父親ハーデンそのものだったが、彼の纏う雰囲気はミラルの知る父親の雰囲気ではない。人間圧倒的な威圧感を持つ、彼の纏うそのオーラは、人間を超越した人間ではない別の何かであるかのような印象を受けた。

超越者。

体内に小赤石を宿す究極のニューピープル。

その二体の内の一人。

同じ超越者でありながら、チリーとは対極にある存在

黒

き超越者。

「……………えしてよ……………」

「何……………？ 聞こえんな」

ブルブルと奮えながらも、精一杯絞り出したその声は、ハーデンには届かなかった。

ミラルは意を決したかのようにハーデンを睨みつけると、小さく息を吸い込み、思い切りハーデンへ投げつけるかのように叫んだ。

「お父様を返してよっ！」

目に涙を浮かべながらも、懸命にハーデンを睨みつけるミラルを、ハーデンはしばらく無表情なまま見つめていたが、やがて顔を右手で多いながら豪快にハーデンは笑い始めた。

「返すだと？ 何を馬鹿なことを！」

ハーデンはミラルへ顔を近づけると、ニヤリと笑みを浮かべた。

「残念ながらあの日以来、この私がハーデンだ。お前の知る父親は^{ハーデン}

……………今頃研究所で骨にでもなっているだろう」

一瞬、アルケスタの研究所で見た白骨死体がミラルの脳裏を過ると同時に、ミラルの頬を一筋の涙が流れた。

ゲルビア帝国の圧政。傍から見ればゲルビア帝国が圧政を行っているように見えなかったのだが実際は違うようで、ゲルビア帝国は数年前から圧政を行っているのだと、ブルーノは語った。過重な税金、国外へ出ることの禁止、そして神力使いの強制徴兵など、ブルーノの語るゲルビア帝国の所業は、ゲルビア国内の見た目の華やかさからは想像も出来ない内容ばかりであった。

それにより、数年前からゲルビア国内に、ゲルビアへ反旗を翻す者達が存在しており、団結して一つの団体を作っていた。それがブルーノを長とするレジスタンスだった。

打倒ゲルビアであるブルーノ達レジスタンスと、利害が一致していると判断したチリー達は、自分達がゲルビアを訪れた理由と、赤石、そしてハーデンとニューピープルのことをその場で打ち明けた。「噂通り、ハーデンは別人になっていたんですね……」

そう言ったブルーノへ、ニシルが噂？ と問うと、ブルーノははい、と短く答えた。

「ゲルビア帝国が圧政を始めたのは、十年前です。これまでそんなことをするような素振りには全く見せなかったのに、突如として圧政を始めたんです」

恐らくその時には既に、オリジナルのハーデンは死に、ニューピープルが玉座へ堂々と座っていたのだろう。

「手を組むか……？ 目的は同じだ」

トレイズの言葉に、ブルーノは逡巡する様子も見せずにコクリと頷いた。

「ゲルビアの徴兵により、我々の中に神力使いは皆無です。カンバーさんの話によれば、貴方達のほとんどが神力使いのようですし……組んだ方が得でしょう。我々も、貴方達も」

そう言っつてブルーノがトレイズへ歩み寄り、握手を求めて右手を

差し出した。その時だった。

スツと。今まで黙っていた麗が右手を挙げた。

「それなら……私達も協力するわ」

東国のこと。東国戦争のこと。復興のために赤石が必要なこと。

そして、ジェノによつて殺された伊織のこと……。麗は、自分達の目的と動機を淡々とその場で語った。チリー達とは、赤石を目的とする点では敵同士とも言えるが、ハーデンを倒さなければならぬ、という点ではここに在る全員の目的と一致していた。

「それじゃあ、一時的にだけ僕らはまた仲間ってこと……だよな？」

やや照れ臭そうに微笑みつつ、ニシルは青蘭に視線を向けたが、青蘭からニシルへ返ってきた視線は酷く冷たいものだった。

ニシルに対する敵意、といった感じのものではない。ただただ冷たい、感情の込められていない視線。

ゾクリと。ニシルは寒気を感じた。いつもなら軽口を叩くか、青蘭にどうかしたのか問いかけるかするハズなのだが、ニシルは蛇に睨まれた蛙のように硬直したまま、青蘭を見つめることしか出来なかった。

ヘルテュラで青蘭と別れてから、もうかなりの日が経っている。

その間に青蘭が変わってしまったもおかしくはないのだが、今の青蘭は変わってしまったというよりは、何かおかし、という印象をニシルは受けた。東国で最後に会った時は、チリーに対して尋常ではない程の怒りを向けてはいたものの、今のような状態ではなかったハズだった。

伊織、という少女がジェノという男に殺されたことはニシルも知っている。つい先程麗が話したばかりだ。彼女の死が、青蘭を変えてしまったのだろうか……。

そこまで考えて、ニシルは青蘭に関する思考を止めた。深く考え

ても仕方がないし、詮索するようなことでもない、と判断したからだ。

「明日、レジスタンスの各チームの長が集まって会議を行う予定になっています。こうして協力関係になった以上、貴方達に参加していただきたい」

ブルーノの言葉に、その場にいた全員が頷いた。

赤石。

内に膨大な神力を秘めた、赤き魔石。東国の地下洞窟で、誰の手にも渡らぬよう安置されていたソレは今、ハーデンの手の手の中にあつた。

微小ながらも赤く妖艶な光を放つ、光沢ある鶏の卵大程の赤石。ハーデンはミラルの前に立つと、それを見せびらかすようにして右手で弄んでいた。

「では、始めようか」

「……始める……？」

ハーデンの言葉を繰り返すミラルに、ハーデンは微笑する。

「聖杯保持者であるお前の体内に、この赤石を取り込むことでお前を神力の姫として覚醒させる」

「神力の姫……ですって……！？」

「聖杯によつて赤石をその身に受け入れることでお前は神力の姫となり、膨大な神力を操るのだ……！」

聖杯とは、赤石を受け入れるための器。

神力の塊である赤石を受け入れ、膨大な神力を扱うための器。

ゾクリと。背筋を悪寒が走つたのをミラルは感じた。

自分の体内に、あの赤い石を　高密度の神力を入れられることが、たまらなく恐ろしかった。

「私を神力の姫にして……どうするつもりなの……？ アンタは……何が目的なの……？」

「同じだよ、オリジナルの私と」

ハーデンのその言葉に、ミラルは短く驚愕の声を上げた。

「じゃあ……何でお父様を……っ！」

「奴のぬるいやり方では、真の共存は 真の統一は不可能だったからだ」

不意にハーデンはミラルへ背を向けると、その両手を大きく広げ、まるで演説でもするかのような姿勢を取った。

「人類とは！ 最も醜く、最も愚かしい生物だとは思わんかね？」

「そんな」

「私はッ！ 人類程愚かしい生命体は他にはいないだろうと思うよッ！ 愚かな理由で大地を汚し、愚かな理由で森を傷つけ、愚かな理由で海へ汚水を垂れ流し、そして愚かな理由で互いに傷つけ合うッッ！ これ程愚かな行為を、長い歴史の中で何度も何度も繰り返している生命体は……人類だけなのだ……！」

少しだけ間を置いたが、すぐにハーデンは語を継いだ。

「私とハーデンの目的は同じだ……。全人類の共存、統一。部族の違いや宗教の違いなどという、取るに足らない理由で二度と争いなど起きぬ世界……！ それが私とハーデンの求めた世界だ……！」

そのためにはまず、と付けたし、ハーデンは更に言葉を続ける。

「人種から統一せねばならん。愚かで脆弱な今の人類に、進化の時間が訪れたのだ！ 新たな人類……新人類……！」

「まさか……っ！」

ハッとなった表情でミラルがそう声を漏らすと、ハーデンはミラルの方へ振り向き、ニヤリと笑みを浮かべた。

「そう、ニューピープルだ」

人工的に造られた、神力を持った人造人間。その全員が人を超えた身体機能を有しており、並みの人間では歯が立たない。

ミラルの想像が正しければこの男は……ハーデンは、全人類を

「赤石の力で創り変えるのだ……全人類をな」

「全人類を……ニューピープルに……！」

「そして全てのニューピープルは、この私の配下となる。究極のニューピープルである……この私のな。私によって全てが統一されることにより、全人類へ真の平和が訪れるのだ！ 誰も争わぬ、誰も傷つかぬ、私とハーデンの……理想の世界だ……！」

声高に語るハーデンの顔は、悦に彩られていた。

「間違ってる……お父様はきつと、そんな世界を創りたかったわけじゃないハズよ！」

「間違っている？」

不意に、ハーデンは身を屈めてミラルへ顔を近づけた。

「間違っているのか？ この私が？ どう間違っているというのだ？」

責めるようにして問いを繰り返すハーデンに、ミラルは圧倒されかけたが、それでも強くハーデンを睨みつけ「負けない」という抵抗の意思を示した。

その態度が気に入らなかつたのか、ハーデンは眉をひそめた。

「アンタがやるうとしてるのは……ただの独裁よ！ 統一された世界は平和かも知れない……だけど、そこに自由はないわ！ 人類が愚かですって？ 違うわ、愚かなのはアンタよ……！ 先のことばかり考えて、現在の人類を犠牲にしようとしてるアンタの方がよっぽど愚かよっ！」

ピクリと。ハーデンの表情が変わった。

「何がわかるというのだ……！」

涙目で必死に叫んだミラルを冷たく睨み付け、ハーデンはミラルの栗色の髪を上から掴み上げた。

「痛っ……！」

「小娘如きに何がわかると言っただッ！」

ハーデンは怒号を飛ばすと、すぐにミラルの髪を放すと、右手に持っていた赤石をミラルの顔へと近づける。

「呑み込め」

「嫌よ……！」

そう言っただけで口に閉じ、ミラルは顔を右にそむけた。が、ハーデンはミラルの顎を強引に左手で掴むと、無理矢理口を開けさせようと下へと引っ張っていく。

「……………っ！」

首を振ってそれを振り払おうとするミラルの頭に、突然何かが巻き付いた。

「呑み込めッ！」

それは、長く伸びたハーデンの髪の毛だった。

ハーデンの黒い髪は、椅子の背もたれへとミラルの頭部を縛り付け、首を振れないように固定しているのだ。

やがて、ハーデンによって無理矢理こじ開けられたミラルの口の中へ、赤石が突っ込まれた。

「がっ……………ああっ……………！」

必死に吐き出そうとするミラルの口の中へ、ハーデンはグイグイと赤石を突っ込んでいく。

それから一分としない内にゴクリと、ミラルは赤石を飲み込んだ。「けほっ……………！」

咳き込むミラルの身体が、徐々に赤く発光し始める。それを眺めながら、ハーデンはニヤリと笑みを浮かべた。

「赤石を受け入れたな！ 神力の姫よッ！」

徐々にミラルを包む光は強まって行き、やがて薄暗かった部屋全体を照らす程の光を発し始める。

赤い、神力の光。

「フハ……………フハハッ！ フハハハハハハハハハハッ！」

赤く染まった部屋の中で、ハーデンの高笑いだけが響き渡った。

チリー達がブルーノと結託した翌日、ブルーノが言っていた通り同じ部屋で会議が行われ、ゲルビアの各地区に存在するレジスタンスの長が、一室に集まっていた。

集まったレジスタンスはブルーノを含めて合計六名。チリー達も数に入れば、部屋の中には十三人の人間が文字通り「詰まっていた。席はレジスタンス達に譲り、チリー達はその後ろに立った状態で会議に参加している。

「そこにいる彼らが、先程話した協力者の方々です。ほぼ全員が神力使用いので、戦力としては申し分ないかと……」

ブルーノの言葉に、レジスタンスの一人　メディアナのアヒムが顔をしかめた。

顎鬚をたつぷりと蓄えた中年男性のアヒムは、如何にも不満がある、といった様子でブルーノへ視線を向けている。

「こんなガキ共が戦力ウ……？　ブルーノよ、ワシらは遊びでやっているわけではない。ゲルビア帝国に反旗を翻すということは、奴らに戦争を仕掛けるのと同じことだ」

言いつつ、アヒムはゆっくりとポケットの中に手を突っ込んだ。

「こおんな風に……」

アヒムがポケットの中から取り出したのは、一本のナイフだった。しかしそれに気付いている者はおらず、全員がアヒムの行動ではなく言葉に注目を向けている。

「ッ！」

カンバーがアヒムの行動に気付き、表情を一変させた頃には既にアヒムは後ろにいる青蘭の方を振り向き、ナイフの刃先を向けていた。

「咄嗟に襲われて反応も出来ないようなクソガキじゃ」

言いかけ、突き出したハズのナイフがピタリと止められているこ

とに、アヒムは気が付いた。

「勝手に侮るのは構わない……。だが、刃を向けるのはやめてもらえませんか……手加減、出来そうにない」

青蘭は、アヒムの突き出したナイフを右手の人差し指と薬指で見事に止めているのだった。だいぶ力を込めているらしく、青蘭の指はプルプルと震えている。

「わ、悪かった……」

アヒムが謝罪すると同時に、ナイフの刃先はパキンと音を立てて折れていた。青蘭の指に挟まれたナイフの刃先を見、アヒムは情けなく小声で悲鳴を上げる。その様子を見、ニシルはクスリと笑みをこぼした。

「私は賛成わたくしです。アヒムさんのナイフを止めた青年も含めて、そちらの方々からは何かしら『強い意思』のようなものを感じます。強い力、何かを切り拓くために必要な力を、彼らは持っています」

静かな口調で、アヒムの隣でそう言ったのはローリアのレジスタンス、ピアンカであった。彼女はブルーノと同じくらいの年齢に見える女性で、長く美しい金髪を後ろで一つに縛っている。上品な服装や物腰から、貴族のような印象を受ける女性だった。

「…… よろしいですか、アヒムさん」

確認するようにそう言ったブルーノへ、アヒムは小さく頷いた。

ブルーノはその様子を確認すると、会議の本題へ入るべくもう一度口を開いた。

「我々レジスタンスは、結成から今日まで、ゲルビア城を陥落させるために様々な準備を行ってきました。武器、資金、そして人材。中でも我々に足りなかったのは、神力使いの存在です」

そこで一度言葉を切り、数瞬間をおいてブルーノは言葉を続けた。「ゲルビア側には強力な神力使いが存在するのに対して、徴兵によって神力使いを失った我々側に神力使いは皆無……そのため、ゲルビア城へ直接攻め込むのは不可能に近かったのですが……」

チラリと。ブルーノの視線がチリー達に向けられる。

「このパンドラへ辿り着くまで、様々なゲルビアの神力使いと戦い、勝利してきた彼らの力を借りることが出来れば、ゲルビア城を陥落させることは不可能ではありません」

そこで不意に、一人の男が手を挙げた。

老衰した雰囲気を持った男だったが、決して年老いているわけではなく、見た目だけならアヒムよりも若く見える男だった。

フベールタのレジスタンス、エメリヒだった。

「念のため確認しておきたい。そこにいる彼らには少年に見える者もいるわけだが……そこにいる全員がゲルビアの神力使い数人分に匹敵する力を持っているのか？」

エメリヒの言葉に、隣にいた老人が頷いた。

「エメリヒの言う通りじゃ。ビアンカやお主の言うこともわからなくてもないがの……そこにいる彼らが本当に力を持っておるのか、わしには不安で不安で仕方ないわい」

カルエダのレジスタンス、カールはそう言うと、机の上にある紅茶を一口口にした。

「何ならココで見せてやろうか……ッ」

眉間にしわを寄せ、剣を出現させようとするチリーを、隣にいたニシルは慌てて止めた。

「落ち着けて！ あのおじいさんの言うことも一理どころか二理も三理もあると思うし……！」

「ほほ……血の気が多いのう」

そう言っただけをこぼすカールに対し、チリーは更に怒りを露わにする。

「エメリヒさん、カールさん。確かにそうかも知れませんが……そこにいる白髪の少年、チリーさんが『ニューピープル』だと言えば、少しは彼の力を信じてもらえますか？」

ブルーノの言葉に、エメリヒとカールだけでなく、その場にいたレジスタンス全員と青蘭ら東国の人間達の表情が変わった。

「……俺が説明しましょう」

嘆息し、カンバーは先日ブルーノにしたのと同じ説明を、他のレジスタンスにもした。

カンバーが話し終える頃には、レジスタンス達のチリー達に対する疑惑の視線は既になくなっていた。カンバーの語る壮絶な内容、そしてそれに伴うチリー達から発せられる「凄み」が、レジスタンス達を信用させたのだ。

「神力使いである彼らの戦力を主軸に置いて、僕はゲルビア城を攻め、最終的には王を打破して革命を起こしたいと考えています。王、ハーデンを倒すという点において、我々とチリーさん達の目的は一致しています……そうですね？」

これには、トレイズが頷いて答えた。

「赤石の奪還と、攫われたミラルの救出……これには、ハーデンの打破が必要不可欠だ……」

「赤石については戦いの後にも話しましょう……。まずは、赤石をハーデンから奪い返すことが先決だわ」

そう言った麗に、トレイズはああ、と小さく答えた。

「ゲルビア城自体は、防衛のためというよりはゲルビアの栄光を示す象徴に近い建築物です。数十年前……戦争が数多く起こっていた頃のゲルビア城は、正に要塞と呼べる建築物でしたが、今のゲルビア城はただ巨大なだけの王の家でしかありません。これはハーデンの先代の先代が、防衛よりも住みやすさに重点を置いて改築を行ったからです。その頃には既に、ゲルビアはこのアルモニア大陸を支配していると言っても差支えのない程の力を持っていましたし、実際ゲルビアがアルモニアを掌握してからは、ゲルビアと他国との間に戦争は起きていません。安心して切った先代の先代の王は、城が住みにくいなどと間抜けなことを抜かし、今のゲルビア城に至ったわけです」

そこで一度言葉を切り、間を置いてからブルーノは語を継ぐ。

「問題は城よりも兵の数です。ゲルビア城には圧倒的な数の兵が雇われていますし、その中には神力使いも存在します……」

「御託は言い、策があるならさっさと策を言いな」

不機嫌そうにそう言ったのは、ゴルベタのレジスタンス、プロルだった。やや幼さの残る顔立ちをしてはいるが、その風貌からして年齢はブルーノと同じくらいだろう。

「……失礼致しました」

ブルーノはペコリと頭を下げた後、壁に貼られた紙に簡素なゲルビア城の図を描いた。

「ゲルビア城には正門と裏門があります。作戦を簡単に言えば、ゲルビア城正門を直接我々レジスタンスが攻めて兵を集中させ、裏門を神力使いの方が極少人数で攻め、ハーデンを打破する……という簡単な作戦です」

そこで、ニシルが手を挙げた。

「裏門から攻めるのは、チリーじゃないとダメだと思う」

何故です？ というビアンカの問いに、ニシルはチリーへ視線を向けつつ答えた。

「ハーデンは究極のニューピープルって言って、他のニューピープルの数倍は強いんだ。その究極のニューピープルと渡り合えるのは多分、同じ究極のニューピープルであるチリーだけだ」

「なるほど……。ですが、城内にハーデンの護衛が残っているはずです。それら全員を彼が相手するのは不可能なのでは？」

「なら、僕が護衛につく。チリーがハーデンと万全の状態で戦えるようにね。裏門から攻める極少人数ってのは、僕とチリーの二人だけで良いかな？」

ニシルの言葉に、ブルーノはコクリと頷いた。

異論を唱える者は、いなかった。

「残りは全員、正門だ……。兵を集中させるには、集中するまでの間にこちら側が優勢である必要がある。数では向こうに勝てん、こちらは質で攻めるしかない……」

トレイズがそう言うと、ブルーノはそうですね、と同意を示した。
「良いのか青蘭……ハーデンをアイツに任せて」

そう言った光秀に、青蘭はああ、と答えた。

「アイツの力はよくわかってる。俺の感情よりも、作戦の成功の方が大切だ……」

大人だねえ、と茶化す光秀に、青蘭はほんの少しだけ微笑んで見せた後、チラリとチリーへ視線を向けた。

「チリー」

すぐに、チリーは青蘭へ目を向けた。

「死ぬなよ」

「デメエこそ」

言い合って、チリーと青蘭は微笑し合った。その様子を見、ニシ
ルも安心したように笑みをこぼす。

「作戦の決行は三日後です。拠点はこのアジトで、各地からレジス
タンスが兵として集まることになっています」

よろしいですか？ 最後にそう付け足したブルーノに、その場に
いた全員が頷いた。

「待ってるよ……ミラル……ッ！」

グツと。チリーは拳を握りしめた。

会議から、作戦決行までの三日間は飛ぶように過ぎていった。武器の配備や隊の編成、城の構造把握、そしてそれぞれの能力の顔見せなど、様々な準備を行っている内にあつという間に時は過ぎて行った。

決行予定時間は明日の早朝。気が付けば、予定の時間まで既に五時間を切っていた。

「この戦い……本当に勝てるのかしら……」

散歩がてらに夜のパンドラを歩きつつ、麗は呟くようにそう言った。その隣で、光秀が訝しげな表情を見せる。

「んだよ、お前らしくねえな……」

「そうね。美しくない……だけど、どうしようもなく不安で仕方ないわ……」

そう言った麗の肩が、小刻みに震えていることに光秀は気が付いた。

恐怖を感じないわけがない。

これまで気丈に振る舞ってはいたものの、麗の中に恐怖が一切ないわけではない。麗も人間だ、怖がりもすれば怯えもする。ゲルビア帝国という大きな相手との戦いの前日ともなれば、いくら麗でも恐れを感じないはずがない。

「光秀……貴方は、私が強いと思う……?」

うつむいて、そう言った麗の声音はどこか震えていた。

「強く見える。見えるだけだ」

「そう。私の強さは所詮、見せかけだけよ……美しくないわ」

うなだれる麗の肩に、光秀はそつと右手を乗せた。

「誰も強くなかええよ……皆、見せかけだけだ」

麗の肩に乗せられた手は、ほんの少しではあるものの震えていた。まるで、麗の震えに呼応するかのよう。

「俺も怖エ……想像しただけでもブルっちまう……。俺の強さも見せかけだけだ……。けどな、誰だってそうだ。全員腹ン中じゃどっかに『弱さ』を抱えてる。だからこそ、見せかけだけでも強くあるうとする。俺も、お前もな……」

だが、と付け足して、光秀はそのまま言葉を続けた。

「その『弱さ』を出さずに強くあるうとする……それって『強く』ねえか？ だからお前は強い、強く見える……！」

真剣な表情で語る光秀を、しばらくポカンと眺めた後、不意に麗はクスリと笑みをこぼした。そしてそれを引き金とでも言わんばかりに、口を押えつつ麗は笑い始めた。

普段の麗の澄ました表情からは想像も出来ないようなあどけない表情に、光秀は目を丸くしてその様子を眺めた。

「何よそれ……メチャクチャじゃないの……」

「……悪かったな」

ブスツとした表情で、すねたように顔をそむける光秀の傍で、麗は笑い続けた。既にその肩から、震えが消えていることには気づかず。

「ありがとう、光秀」

一しきり笑った後、麗はニコリと微笑んでそう言った。それに対して、光秀は恥ずかしげに頭をポリポリとかくばかりで、何も答えない。

「ねえ、光秀」

「……どうしたよ？」

麗はしばらくためるようにして黙り込んだが、やがて意を決したかのように口を開く。

「もし、この戦いが無事に終わったら」

「ん？」

その言葉の続きを、麗は紡がなかった。言いかけ、しばらく口を開けたまま黙っていたが、やがてきつく唇を結ぶ。

その表情に、先程のような怯えやあどけなさは一切残っていないか

った。

決意を固めた「強い」表情。いつも通りの、麗の顔だった。

「いえ、何でもないわ……気を引き締めましょう」

「……ああ」

麗の言葉に、光秀は強く頷いた。

アジトの外で、チリーは夜風にあたっていた。ドアの前に座り込み、丸く輝く月を装飾するようにして散りばめられた星々を、ボンヤリと眺めつつ明日のことを考える。

ミラル……ッ！

既にハーデンは、赤石と聖杯の両方を手にしている。それはチリー達がパンドラへ着く前の時点で、だ。しかしそれでも何も起こらないということは、何か理由があるはず。もしかすると、ミラルが赤石の力を使うまいと何か抵抗をしているのかも知れない。だとすれば、ハーデンはどんな手を使ってでもミラルに赤石の力を使わせるだろう。目的のためにミラルをも殺そうとした男だ、何をやってもおかしくはない。

歯ぎしりの音が、聞こえた。

「あ、そこにいたんだ」

不意に、後ろから声があった。チリーがすぐに振り返ると、そこにいたのはニシルだった。

ニシルはちょこんとチリーの隣に座ると、先程までのチリーと同じように空を見上げる。

「いよいよ、明日だね」

そう言ったニシルに、チリーは無言で頷く。

「島を出てから今日まで、色んな戦いがあったけど……こんなに怖いのは初めてだよ」

言いつつ、ニシルは見て、と自分の手をチリーの方へ差し出した。
「わかるだろ？ 僕、震えてる」

チリーはしばらくニシルの手を見つめた後、そっと自分の手の平をニシルの方へ差し出した。同じように、震えるその手を。

「お前……！」

「『武者震いだ』って言いてエとこだけどな……俺も震えてる。メ
チャクチャ怖エよ」

そんなチリーの言葉に、ニシルは呆気に取られたような表情を見せた。

「意外。チリーのことだから、てつきりブチキしてるもんだと……」

「それはある……でも怖エモンは怖エ……けどな」

震えるその手をギュツと握りしめ、チリーは拳を作るとニシルの方へもう一度差し出した。

「それを取り越えてでも戦わなきゃ勝てねエ……お前だつてわかつてんだろ？」

そう問うてニツと笑って見せたチリーの拳に、ニシルは自分の拳を軽く当てることで応えた。

「だよな」

お互いに顔を見合わせて笑う二人に、もう恐れも迷いも存在しなかった。

「帰ろう皆で。全部終わったらさ……皆で島に帰ろう」

チリーがああ、と答えたのを確認すると、ニシルは更に言葉を続けた。

「それでさ、また浜辺にキリトさんと集まるうよ。島にいた頃より断然強くなった僕らを、キリトさんに見せつけようよ！」

「おう、ボコボコにしてやんぞ！」

うん、と頷いて、ニシルは屈託なく微笑んで見せた。

「勿論、ミラルも一緒に帰る。絶対エ助ける！」

「だね」

ニシルがそう答えるやいなや、チリーは先程握った拳をグツと高

く空へ向けた。真っ直ぐに伸びる、硬く握られたその拳に、ニシルはほんの一瞬だけ見惚れた。

強い、どこまでも強い……真っ直ぐに澄んだ瞳。そして天へと掲げられた、決心で固められた拳。

「帰るぞ、皆で！ だから 絶対エ勝つッ！」

「……うん！」

気が付けばいつの間にか、ニシルも同じようにして拳を突き上げていた。

その二つの拳に、一切の震えはなく

暗い王室に、ノックの音が響いた。それに対し、ハーデンが入れと命じると、中へ入ってきたのはアクタニアでミラルを攫った大男

フォスカーだった。

フォスカーは一礼すると、すぐに口を開く。

「陛下。白き超越者達と東国の生き残り達が、レジスタンス共と結託したようです」

フォスカーの報告に、ハーデンが動じる様子はなかった。

「チリー達がっ！」

歓喜の声を上げるミラルへ目もくれず、フォスカーは更に言葉を続ける。

「何やら不穏な動きがあるようですが……如何いたしましょう」

そこでニヤリと、ハーデンは笑みを浮かべた。

「奴らと呼ば……。白き超越者も、目障りな東国人も、レジスタンス共も……。ここで全て叩き潰す」

奴ら、という言葉に反応したのか、フォスカーは少しだけ笑みを

浮かべた。

「例のニューピープル達ですね……」

「ニューピープルって……アンタ達みたいなのがまだいるの……！」

声を上げたミラルの方へ視線を向けると、ハーデンはミラルの頭部をガツシリと掴むと、ギロリとミラルを睨みつけた。

「やかましいぞ……ッ！ 貴様はさっさと赤石の力を使うが良い！」

「誰が……誰がアンタなんかのために使うもんですかっ！」

ハーデンはしばらくミラルを見つめ、怒りを露わにしたが、やがてミラルの頭を放すと、フォスカーの方へ視線を戻した。

「白き超越者は……私が直接叩き潰す」

「陛下自らが……ですか？」

フォスカーの問いに、ハーデンは静かに頷いた。

「ただの人間やニューピープルでは、究極のニューピープルにはかなうまい。奴は必ず、この私の所へ辿り着く」

少しだけ間を置いた後、ハーデンはすぐに語を継いだ。

「そしてこの小娘の目の前で奴を叩き潰す。二度と抵抗など出来ぬように……希望など持たぬように……！」

邪悪な、ドス黒い笑み。

チリーを信じているミラルでさえ、その笑みには恐怖を感じざるを得なかった。

episode 110 「Outbreak」

その日は、今にも雨が降り出しそうな程に曇っていた。雨雲が太陽を覆い隠し、薄暗くなつたパンドラの町並みは非常に寂しいもので、早朝であるせいもあつて人数が少なかった。

人の少ないパンドラは実に静かなもので、聞こえる音と言えば早朝から外に出ている数少ない人々の足音くらいのものであった。

そんな中、巨大な爆発音がまるで塗りつぶすようにして町の音を彩つた。

「攻め込めエッツッ！」

ゲルビア城正門が、レジスタンスによって爆破されたのだった。

ありつたけの火薬を詰め込んだ特製の爆弾は、もの見事にゲルビア城の正門を爆破した。何事かと正門の方へ集まつてきた兵士達に突つ込むようにして、レジスタンスの兵士達がゲルビア城へ雪崩れ込む。

「何だ……!?!」

声を上げて驚く兵士の腹部に、レジスタンス兵の剣が容赦なく突き刺さる。前のめりに倒れてくる兵士の腹部から剣を抜き、我に続けと言わんばかりにレジスタンス兵が剣を雨雲へ掲げると、士気が上がったのかレジスタンス兵は雄叫びを上げた。

銃声、悲鳴、剣と剣のぶつかる金属音。静かだった町の中を、武骨な音が裝飾していく。

「俺達も行くぞ……」

トレイズがそう言うと、レジスタンス兵達の後方にいた四人は大きく頷き、兵同士の戦いの波の中へと突っ込んでいく。

「トレイズさん！ 氷を使う時は気を付けて下さい！ 雨を凍らせると、味方側にも被害が出ます！」

武器を持った兵士達を素手で叩き伏せながら、傍で氷の剣を振るうトレイズへカンバーがそう声をかけた。

「わかつている！」

まるで爆撃終了を見計らったかのように、雨が降り始めていた。

雨雲から降り注ぐ半透明の雨と、下から吹き上げてくる毒々しい程に赤い雨。その両方がしたたり落ち、地面を汚していく。

レジスタンス側は優勢とは言えなかったが、決して劣勢ではなかった。城の中から続々と現れる兵達に数で押し負けながらも、どうにか食らいついている。それに、神力使いであるトレイズ達が一人分以上の働きをするため、勢力としては五分と言っても良い程だった。

「今は……な」

兵を斬り捨てつつ、トレイズが一人ごちた その時だった。

「うわああああッ！」

悲鳴の方へ目を向けると、そこにいたのは醜いまでに太った男だった。いや、特筆すべきなのは男の風貌ではなく、その男の腹部の中に飲み込まれていくレジスタンス兵だった。

「あれは……ッ!？」

神力使い、それもニューピープルだと、トレイズは直感的に理解した。

神力使いではないレジスタンス兵では太刀打ちが出来ない、そう判断してトレイズが男の方へ駆け出そうとした時だった。

「貴方の相手はこっちよ」

少女の声が、背後から聞こえた。

ぐじゅぐじゅと、まるで粘土同士が混じり合うようにして、レジスタンス兵の身体はみるみる内に男の中へ取り込まれていく。その男によって、もう何人も兵が犠牲となっていた。

「フェルベール様ッ！ それは味方ですッ」

「んあー……？」

フェルベールと呼ばれたその男の身体からはみ出ているのは、ゲルビア兵の頭であった。しかしフェルベールに敵味方は関係ないのか、片っ端からその身体の中へと取り込んでいく。心なしか、その身体は取り込む度に巨大になっていくように見えた。

「あアッ！ うわあああッ！」

次に、右腕をフェルベールに掴まれたレジスタンス兵が、悲鳴を上げた。右腕は徐々にフェルベールの身体と同化していき、その身の一部と化していく。

彼の全身がフェルベールへ取り込まれるのは、時間の問題だった。

「嫌だ……嫌だ！ 助けてくれエエッ！」

男の悲鳴は、空しく雨雲の中へ消えていく。

ポトリと男が落としたロケットペンダントが開き、中に入っている写真が露わになる。中に映っているのは家族のようで、皆一様に笑顔を浮かべている。

男は右腕を取り込まれつつも、落ちたペンダントへ目を向けた。

「嫌だ……嫌だア……ッ……！」

雨とも涙ともわからないしずくを顔中に浴びながら、必死にフェルベールから右腕を引き抜こうとするが、右腕はフェルベールの奥へ奥へと取り込まれるばかりだった。

男の表情に、諦めの色が浮かんだ。その時だった。

「ふっ」

小さく、息を吐く音と共に、男の右腕が切断された。

切断面から血を噴出させつつも、男はその場へしりもちを着く。

「あ、アンタは……ッ！」

男の右腕を切断したのは、東国の衣装に身を包んだ女性。麗だ

った。

麗は小刀についた血を払うと、男の方へ視線を向ける。

「逃げなさい……急いで」

麗はロケットペンダントを拾って男の方へ放る。男は左手でそれをキャッチし、すまねえ、と麗へ言うやいなや、その場から慌てて逃げ去って行った。

「やれやれ……妖怪退治かい……」

吐き捨てるように、麗の隣で男　光秀が言う。

「あん……あー……？」

今度は傍にいたゲルビア兵を身体に取り込みつつ、フェルベールは言葉にならない声を上げた。

敵である故か、麗と光秀は取り込まれていくゲルビア兵には何の興味も示さなかった。

「美しくない……美しくないわ貴方……」

ゆっくりと。麗が小刀を構えると、隣で光秀も腰の刀へ手を添える。

「せめて散る時くらい……美しく散らせてあげましょう……！」

トレイズの背後にいたのは、さながら戦争と言っても良いようなこの状況には恐ろしく不釣り合いな程に可憐な、一人の少女だった。年齢はギリギリ二桁、としか思えない。その華奢な身体を、ゴシツクロリータと呼ばれるフリルまみれの衣装で包んでおり、さしている傘も似たような装飾が施されているものだった。ツインテールに結われた金色の髪は、縦にカールしており、彼女の強気そうな顔によく似合っていた。

そんな人形のような少女は、空いている左手で鎖を握っており、その鎖の先には四つの棺桶が繋がれていた。人一人入るような棺桶

を、こんな華奢な身体をした少女が片手で四つも運んできたなどは、にわかには信じ難かったが、彼女がニューピープルだと仮定すれば合点がいく。

「私の美貌に見惚れるのも良いけど、私達は敵同士よ？　恋は実らないわ」

そんなことをのたまう少女を、トレイズは鼻で笑う。

「気に入らないわね、その態度……このクロネ様の美貌を前にそんなことが出来るなんて……大した度胸ですこと」

不満げな表情を見せると、クロネと名乗った少女は鎖から手を放した。

鈍重な音を響かせて、鎖は地面へ落ちると同時に軽く水しぶきを上げる。それを鬱陶しそうに避けつつ、クロネは四つの棺桶を縦に起こしていく。

その様子に驚くトレイズに目もくれず、クロネは棺桶の一つの蓋を開ける。

「起きなさい、私に隷属する哀れな下僕……レオール」

棺桶の中から姿を現したのは、少年のような風貌をした男だった。何故か両腕には、縫ったような跡があり、生気のない表情もあいまって男の不気味さを引き立てた。

レオール、と呼ばれたその男は、ブランと両腕を下げたまま、虚ろな目でトレイズを見つめている。

「ダニエラ」

次に開けた棺桶の中から現れたのは、傷んだ様子の長い黒髪の中年女性だった。こちらは首筋に縫い目があり、レオールよりもいっそう不気味に見えた。

「ザハール……」

「な　ッ！」

クロネのその言葉に、トレイズは驚愕の声を上げた。

ザハールは、トレイズの記憶が正しければイレオーネ大陸のヴィカルドという町で、神力を利用して町を支配していた男だったハズ

だ。チリーに敗北し、町はザハールの支配から逃れたのだが……。
そのザハールの名前を、何故クロネが呼ぶのか。

「さあ……」

開けた棺桶の中から現れたのは、紛れもないザハール本人であった。短く髪を借り上げた、白いロングコートの筋肉質な男……その顔に生気はないが、トレイズの記憶の中のザハールと寸分違わぬ男だった。

「私の能力は、空っぽの身体に魂を吹き込むこと……。まあ、こんな風に半分程度しか吹き込めないから、意識ははっきりしないけどね。死体はここまで。次はとっておき……身体を特別に新調してあげた特製の下僕よ」

「はしゃいだ様子でクロネはそう言うと、四つ目の棺桶の蓋を開ける。」

「馬鹿な……ッ」

トレイズの表情が、みるみる内に恐怖と驚愕に彩られていく。その様子を、クロネは楽しそうに眺めていた。

棺桶の中から姿を現したのは

「王……ッ！」

虚ろな目をした王 テイテス三代目の王……アレクサンダー三世であった。

狂った笑い声が、雨の中に響き渡っていた。

人のものとは思えない程に邪悪で、歪んでいるように聞こえるその狂った声の主は、愉悦に満ちた表情を長い髪で隠れた顔に浮かべて大鎌を振り回している。

赤。紅。朱。丹。緋。血。視界が、地面が、赤く染まれば染まる程男は ジエノは愉悦の感情を増幅させていく。

ジエノにとつては、レジスタンスのことなどどうでも良い。別に殺しさえ出来ればレジスタンス側についても良いくらいだった。しかしジエノにとつて、今ゲルビア側につくことは非常に有益だった。「来いよオ…… テメエも会いてエだろオ……ッ」

ゲルビア側につけば、あの時仕留め損ねたあの青年と再び刃を交えることが出来る。これまで生きてきた中で最上の手練えさを、もう一度食らうことが出来る。そう考えただけでジエノは身震いする程高揚出来た。

所詮、前菜。

大鎌を振り、一つまた一つと首を狩りながら、ジエノは思う。あの青年との戦いに比べれば、この程度前菜に過ぎない、と。

「ひ…… ひイイイッ！」

聞きなれた悲鳴。ジエノは何の躊躇いもなく鎌を、その男の首目がけて振る。

「青蘭ンンンッ！」

これまでと同じように赤が舞い、首が跳ねることを想像したその時だった。

金属音が、ジエノの鼓膜を震わせた。

ニヤリと口元を釣り上げるジエノの目の前には、心から欲した餌

があった。

「待つてたぜエ……！」

刀、と呼ばれる東国の武器によって止められた大鎌。大鎌を止める、という動作だけでも理解出来る。この青年は、ジエノを倒すために更なる力をつけている。それを感じて、ジエノの表情は益々愉悦に染め上げられていく。

ジエノが大鎌を一度刀から離して距離を取ると、青年も同じようにしてジエノから距離を取った。その様子を見、レジスタンスの男は青年の後ろへと下がっていく。

「ああ、俺も待つていた……！」

「だろうなア……！」

ニタニタと笑みを浮かべるジエノ、それとは対照的に静かな怒りを露わにする青年。

「良い顔になつたじゃねえかア……青蘭よオ……！」

「仇は取らせてもらうぞ……！」

ゆっくりと。青年は刀を構えた。

「ジエノオオオオオオオオッ！」

青年の　　青蘭の怒号が、雨音を切り裂いて周囲に響いた。

刺し違えてでもこの男にだけは引導を渡す。そう覚悟して、青蘭はこの戦いへ臨んだ。

この男だけは……伊織を手にかけたこの男だけは許せない。この男だけは……

「殺さなければ気がすまない」

「奇遇だなア……俺も同じだアッ！」

ジエノはそう言うやいなや、青蘭目がけて大鎌を薙ぐ。素早く青蘭が反応して大鎌を刀で防ぐと、ジエノはすぐに大鎌を引いて再び青蘭へと別方向から大鎌を薙ぐ。それを再び、青蘭が防ぐ。

凄まじい速度で、ソレが繰り返されていた。

能力で強化された青蘭に引けを取らない速度で大鎌を繰り出すジエノ、それを淡々と受け続ける青蘭。目の前で繰り広げられる、非現実的とさえ取れるような光景を眺めながら、レジスタンスの男はすげえ、と言葉を漏らしていた。

「楽しいなア……楽しいなおいイ……ッ！」

長い髪を振り乱しながら、ケタケタと笑いながら大鎌を振るうジエノ。それを不快そうに一瞥した後、青蘭は素早く踏み込み、青蘭目掛けて伸ばされている大鎌の柄を切断した。

「ッ」

ジエノの表情が一瞬歪む。

神力で出現させたあの鎌は、破壊してもすぐに再発動すること、ジエノの神力が続く限り出現させることが出来る。なら、この鎌を失っている「一瞬」で決着^{ケリ}を着けるしかない。

「おおおおおおッ！」

ねえ、そんな顔……しないで。

無意識の内に、青蘭は伊織の顔を思い浮かべていた。

「ッハアッ！」

ジエノ目掛けて全速力で駆ける青蘭を見、ジエノは慌てるどころかニタリと笑みを浮かべていた。

私……幸せだよ？ 大好きな……青蘭君の胸の中で……

死ねて……。

「うわああああああアッ！」

涙と雨で顔をぐちゃぐちゃに濡らしながら、青蘭はジエノへと斬りかかる。

ありがとう、青蘭君。

「ジエノオオオオオッ！」

刀が、振り抜かれた。

涙と雨と血。三つに彩られ、青蘭の顔は鮮やかに装飾されていた。

終わった……。

意外に呆気ない。そう感じつつも、青蘭が仇を討った達成感に浸っていた。その時だった。

「ヒ……ヒハハ……」

腹部を切り裂かれたジエノが、奇怪な声を上げつつ、フラフラと青蘭から距離を取る。

「なッ」

生きている。傷が浅かったのだろうか、ジエノは笑みを浮かべたまま、青蘭の方をじっと見つめていた。

「ヒハハハハハハハハハハッ！ 最高だア！ やっぱ最高だお前はよオオオオッ！」

ジエノは左手を、あろうことか自分の傷口に突っ込んだ後、自身の血にまみれたその左手をペロリと舐めた。

「これだよオ……この感じだア……！」

常軌を逸脱したジエノの様子に、青蘭は戸惑いの色を隠せずにした。

「血だア……誰のモンでもねエ俺の血だア……ッ！」

再び左手に付着した血を舐め、ジエノはもう一度奇声を上げる。

「待ってたぜエ……この俺に血を流させる奴をなア……！」

狂気に彩られたジエノの表情に、青蘭はほんの一瞬ではあるが恐怖さえ感じた。背筋も凍るような狂気。ジエノの浮かべる表情は、およそ人のものとは思えぬものであった。もつと邪悪な……人外の何か。

「狂ってる……ッ」

「狂ってるウ……？」

青蘭の言葉を繰り返し、ジエノはケタケタと不愉快な笑い声を上げた。

「何がおかしい……！？」

「おかしいねエ……おかしくてたまんねエよオ……」

腹をかかえて笑うジエノの腹部からは、今も絶え間なく血が流れ

続けている。しかしジェノはそれをさほど気にする様子もなく、ケタケタと笑い続けていた。

「狂ってる、ねエ……」

笑い過ぎたのか肩で息をしつつも、ジェノはそのまま語を継いだ。

「お前もそうだろオ……なア、青蘭よオ……！」

ジェノのその言葉に、青蘭の表情が一瞬にして憤怒に染まる。

「俺とお前が……同じだと……!?」

「一緒さア……その水たまりでも良いイ……テメエでテメエの面ア見てみなア……！」

ほぼ反射的に青蘭が水たまりへ視線を落とすと、そこに映ったのはジェノの返り血で赤く染まった青蘭自身の顔だった。

奇しくもその赤い装飾は、ジェノの顔の赤と似ているように見えた。

「違う……！」

「違わねエさア……一緒だろオ……?」

長い前髪をかき上げ、ジェノは血で彩られた自分の顔を露わにすると、右手で自分の顔を指差した。

「俺のこの顔とよオ……ッ！」

「黙れ……」

プルプルと。握られた青蘭の拳が震える。それを知ってか知らずか、ジェノは青蘭の怒りを煽るようにして笑い声を上げた。

「黙れ……ッ」

笑、嗤、晒。青蘭の耳を劈くようにして、ジェノの笑い声が響き渡る。

「黙れエエエエッ！」

声を上げ、刀を構え直すと、青蘭はジェノ目掛けて一気に駆け出した。その時だった。

「ッハア……ッ！」

いつの間に再発動していたのか、ジェノの手には大鎌が握られていた。

「ッ！」

青蘭が表情を一変させた時には、既に大鎌は振られていた。

「が……ア……ッ」

ジエノによつて薙がれた大鎌は、青蘭の腹部を切り裂き、血を周囲に飛び散らせた。

ジエノの笑い声によつて冷静さを欠いた、青蘭の判断ミスだった。あのタイミングでがむしゃらに突っ込むことは、こうなることに繋がる。と容易に想像出来たはずだった。

「貴……様……！」

真意はわからないが、ジエノは最初からこうするために青蘭を挑発していたのかも知れない。

激痛に耐えきれず、その場に膝をつく青蘭。その様子を見、ジエノはニタリと笑みを浮かべた。

「これで……対等だア……ッ」

血が、青蘭の腹部から滴り落ちた。

腹部の激痛と、血の生暖かさを感じながら、青蘭はゆっくりと立ち上がる。どうやら傷はそれ程深いわけではないらしい。

これで対等だ。と、ジェノは言った。この傷の浅さは、ジェノが自身の傷と同じ程度にするために狙って浅くしたのだろうか。

「この男……どこまでも……ッ」

どこまでも、戦闘を享樂としてしか認識していない。トランプでポーカーを楽しむように、上質なワインを楽しむように……どこまでも、享樂。

「こんな……こんな男に……ッ！」

青蘭君！

「伊織は……こんな男にッ……！」

刀の柄を握る手に、無意識の内に力が込められる。怒りと憎悪で固められた拳は、雨と血の滴を垂らしながらプルプルと小刻みに震えていた。

「血だア……血だよオ……！」

ゆらりと。少しだけジェノが身体を揺らした。

「血を流しあつてこそその死し合あいだアッ！」

狂気。

常人には理解出来ぬ思想、発想、思考。まるでジェノが人間ではないかのような錯覚を受けても仕方がなかった。否、人間ではないのかも知れない。ジェノの考え方はおよそ人間のものとは思えないものばかりで、もし彼が人間であるのなら狂っている、としか考えられない。

そんな狂った男に、こんな狂った男の享樂のために

「伊織は……伊織はアアアッ！」

絶叫しつつ、青蘭はジェノ目掛けて駆けた。頭の中を支配する憎悪と憤怒が、腹部の痛みを麻痺させる。

がむしゃらに突っ込む青蘭を見、ジェノは笑みを浮かべて大鎌を薙ぐ。それを皮切りに、再び青蘭とジェノの攻防が繰り広げられた。鳴り響く金属音。互いに一步も譲らぬ攻防。あまりの激しさに、火花が散っているようにさえ見えた。

「気持ち良いイイイだろオオオオッ」

青蘭との戦いの中、悦に浸るジェノの目に、一人の男が映る。と同時に、ジェノの表情がやや歪められた。

「目障りだなア……………」

「……………」

ジェノの目が向けられたのは、先程青蘭が助けたレジスタンスの男だった。腰を抜かしたのか、その場にへたり込んだまま男は青蘭とジェノとの戦いを食い入るように見つめていた。

「人が楽しんでんのをよオ…………ジロジロ見てんじゃねエ……………」

男に向けて喋りながらも、青蘭とジェノとの戦いに変化はなかった。依然として互いに譲らないまま、刀と大鎌をぶつけ合っている。「何を言って……………」

言いかけ、青蘭はジェノが次に何をしようとしているのかに気が付き、目の色を変えた。

「まさか…………ツ！」

ジェノは大鎌を振る手を止めると、一気に青蘭との距離を詰めた。

「…………ツ！」

「ちよつと退いてろオ」

ジェノの左手が、青蘭の頭部をガツシリと掴む。青蘭がその左手を掴もうとするよりも早く、ジェノは青蘭の頭を後頭部から地面に思い切り叩きつけた。

「…………ツア……………」

呻き声を上げる青蘭を後目に、ジェノは男へ視線を向けた。

「ひッ……………」

「消えるオ…………ツ」

「やめるオオオオオッ！」

ジェノが大鎌を振り上げるのと、青蘭の叫び声が木霊したのはほとんど同時だった。

「ツハアツ！」

ジェノの大鎌が振り下ろされ、赤い血が舞った。

「な……ッ……ッ……」

しかし舞ったのは、男の血ではなかった。

「ぐ……アアツ……！」

ボトリと。音を立てて何かが落ちる。カランと乾いた音がして、青蘭の持っていた刀がその傍へ落ちていた。

「嘘だろテムエエ……ふざけんじゃねエぞオ……ッ！」

そう言ったジェノの顔は、心底信じられない、と言った様子だった。まるで幽霊か何かでも見たような……信じられないものを見たような表情。しかしそれは、レジスタンスの男も同じだった。

「どうして……！」

傷口から止め処なく溢れ出る血が、青蘭の足元へ血だまりを作った。

「逃げる……」

男は、そこに落ちているモノと青蘭を交互に見、ガタガタと震えていた。

「早くッ！」

青蘭が語を強めると、男は迷った表情を見せながらも、すぐに立ち上がると背を向けてその場から逃げ出して行った。その様子を後目に見つつ、青蘭は安堵の溜め息を吐いて、再びジェノへ視線を向ける。

「何故だア……理解出来ねエ……」

そう言って頭を抱えるジェノに対して、青蘭は無理に笑みを作って見せた。

「理解^{わか}るわけないさ……お前なんかには」

右肘から先の虚無感。味わったことのない感覚に戸惑いながらも、青蘭は仕返しとばかりに笑みを作って見せていた。

「何でクソどうでも良い他人なんかのために手前を犠牲テメエに出来るウ
!?!」

腕を、失っていた。

今まで刀を握り、ジエノの猛攻を耐えしのいできた右腕は、先程の男を助けるためにジエノの大鎌によって失われたのだった。

青蘭にも、どうして必死に助けてしまったのかわからない。伊織の仇を討つという目的に支障が出るようなら、見捨ててしまっても構わない、そう考えても良いハズだった。それなのに青蘭は、あの直後に神力をフルに使って移動し、ジエノの大鎌からあの男を救ったのだ。

違わねエさア……一緒だろオ……?

一緒じゃ、ない。

これでわかった。

「俺はまだ……」

ゆっくりと。残った左腕で刀を拾い上げる。その青蘭の様子を、ジエノは未だに驚愕に歪んだ表情で見つめていた。

「俺はまだ、人間だ」

ジエノとは、違う。

復讐鬼に身をやつしても良いと、考えた。

悪魔が現れて、魂と引き換えに力を与えろと言えば、迷わず力を選んでも良いと思えた。

ジエノを殺すためなら、鬼にでも悪魔にでも、狂人にでもなっても、やっても良いと、考えた。

でも、違った。そうじゃない。

何より伊織は、そんなものは求めていない。

彼女は最後に……最期に何を残した?

ありがとう、青蘭君。

彼女は、笑っていた。

ありがとう、と、そう言って、笑っていた。

青蘭のために、じゃない。本当に笑っていたかったから、彼女は笑っていた。

だから、彼女に無念はない。

彼女の残した笑顔に、無念はない。

じゃあ俺は、誰の無念を晴らすそうとしていたんだ？

「俺が晴らすそうとしていたのは……彼女の無念なんかじゃなかった……」

晴らすそうとしていたのは

「俺、自身だ。俺は俺自身のために、お前を殺したかったんだ」

伊織を守れなかったという、青蘭自身の無念を晴らすために、戦っていた。

何が伊織の仇だ。そんなものは、ただの飾りでしかなかった。自身のためにジエノを殺そうとしているのを「伊織のため」という笠で隠していただけだ。

ごめんな、伊織。

心の中でそう呟き、青蘭は左手で刀を構えた。

「お前を倒す。伊織のためでも、俺自身のためでもない」

待ってるよ……ミラル……ッ！

最初に思い浮かんだのは、青蘭自身でも驚く程意外なことに、あの少年の顔だった。

「アイツのために、ミラルのために……皆のために、俺はお前を倒すんだ」

刀の切っ先を向け、そう言った青蘭を見、ジエノはククツと笑みをこぼした。

「そうかよオ……つまんねエなア……テメエもオ……」

長い髪を垂らし、うつむいたジエノの肩は、どこか落ちていているようにも見えた。

「つまんねエ……つまんねエよオ……テメエなら……理解^{わか}り合えると思っただのによオ……」

ゆつくりと上げられたジェノの表情がほんの一瞬だけ、寂しそうに見えた。

「つまんねエ顔になったなア……テメエエ」

「……悪かったな」

口元を釣り上げる青蘭に、ジェノは怒りを露わにした。

狂ってはいたものの、笑みばかり浮かべていたジェノの表情に、怒りの色が浮かべられていた。

「俺はお前と、同じじゃない」

「わかったよオ、今さっきなア……!!」

だったらア……と言葉を付け足して、ジェノはそのまま語を継いだ。

「もう死ねよオツ!!」

憤怒と悲痛の混じったジェノの叫びが、雨の中に響き渡った。

互いに武器を構えたまま、対峙している状態が続いた。互いに一歩も動かぬまま、相手の出方を見計らっている。一歩でも下手に動けば、一撃で仕留められかねない。そんな緊迫した状態だった。

右腕の切断面からの出血、加えて腹部の傷。ポタポタと音を立てて地面に落ちる自身の血が、青蘭の焦燥感を加速させた。早目に止血しなければ、恐らく出血多量で死にかねない。

一撃。

後一撃で決着をつける……！

しかしこちらは利き腕を失った状態、ある程度は左腕でも刀を扱うことは出来るが、右腕のようにはいかない。それに対して向こうは五体満足、腹部の傷口は浅いとくれば青蘭が不利なのは目に見えていた。

「ああ……決着イ……」

不意に、ジエノが口を開いた。

「着けようやアアアッ！」

ジエノが大鎌を振るつたのと、青蘭が反応したのはほぼ同時だった。青蘭の首目がけて振られた大鎌を、青蘭は素早く刀で弾く。金属音を立てて大鎌が弾かれ、ジエノが軽く体勢を崩した瞬間に、青蘭は勢いよくジエノの懐へ突っ込んだ。

「おおおおおおッッ！」

ここで決着を着ける。

刀を握る左手に力を込めた　その時だった。

「……ッハア！」

楽しそうな、ジエノの声。聴こえた次の瞬間には、青蘭の背中に大鎌が突き刺さっていた。

「が……ア……ッッ……ッ！」

最初の一振りには困。恐らくジエノは、最初からこれを狙っていた

のだろう。

考えて見れば、これまでの戦いの中でジェノが大鎌を弾かれて体勢を崩したことがあっただろうか。否、一度もない。青蘭が何度大鎌を弾こうと、ジェノは体勢を崩すことなく執拗に青蘭に切りかかっていた。よろめきはフェイク……。

警戒するべきだった。

しかし今後悔しても仕方がない、青蘭の背中には既にジェノの大鎌が突き刺さっている。

勝利を確信したかのようなジェノの高笑い。それを耳にしながら、青蘭は激痛に耐えていた。

遠くなる意識。今にも手放してしまいそうな意識を、青蘭は何とか繋ぎ止めた。

「ここで……止まるわけにはいかない……ッ！」

一歩、踏み出した。

「なァ　ッ！」

一瞬で驚愕に歪むジェノの顔を見、青蘭は無理矢理不敵に笑って見せた。

「うおおおおおおおおッ！」

己に喝を入れるかのように雄叫びを上げると、そのまま青蘭はジェノ目掛けて駆け出した。

「馬鹿なァ……ッ!？」

青蘭の背中から大鎌が抜け、滂沱たる血液が青蘭の背中から弾けた時には、既に青蘭はジェノの眼前まで迫っていた。

フツと。小さく息を吐く音。

次の瞬間には、青蘭の刀がジェノの身体を切り裂いていた。

「……ッ」

駆け抜け、ジェノの背後で刀を振りぬいた状態で停止する青蘭。

「ァ……あァ……ッ」

ドサリと音を立てて、呻き声と共にジェノはその場へ倒れ伏した。血の混じった雨水が跳ね、青蘭の背中を赤く濡らした。

「ハアツ……ハアツ……」

息を荒げつつ、後ろを振り向く。そこには倒れ伏し、ピクリとも動かなくなったジェノの姿があった。

「終わっ……た……」

その場に、青蘭は音を立てて膝から崩れた。

達成感と虚無感。二つを同時に味わいながら、青蘭はゆっくりと雨雲に包まれた空を見上げた。

伊織のためじゃない。

自分自身のためでもない。

仲間のために、ジェノを討った。

しかしそれでも、言わずにはいられない。

「伊織……終わったよ……」

血と、雨と、涙。グチャグチャに濡れていく青蘭の中で、彼女が

伊織が笑った気がした。

穏やかに。

ありがとう、青蘭君。

雨はもう少しで止む。そんな気がした。

ゲルビア城裏門は、ブルーノの思惑通り手薄な状態だった。ほと

んどの兵が正門に押し寄せ、レジスタンス達を鎮圧させるために出張っており、裏門の警備を行っている兵士は極少数だった。その様子を見、ニシルはニヤリと笑みを浮かべた。

「作戦通り……ってわけだね」

「ああ……」

ニシルの言葉にそう答え、チリーはロープのフードをかぶり直した。

「ビビってる？」

「まさか」

そう答えたチリーに、ニシルはそつと右拳を差し出した。それを見、チリーは微笑すると、自分の右拳をニシルの右拳にコツンと当てて見せた。

「行くぜ」

「うん……！」

ニシルが強く頷いたのを引き金に、二人は一気に裏門目掛けて駆け出した。

「何者だッ!？」

兵士達の声も聞かず、チリーとニシルは次々と兵士をノックダウンさせていく。

「背中、任せたぜ」

「そつちこそ」

兵士に囲まれ、二人背中合わせの状態で見つめあう。傍から見れば窮地だが、二人の表情に焦りはなかった。むしろ、この状況を楽しんでいるかのようにさえ見えた。

「行ッくぜエエッ！」

チリーの掛け声と同時に、二人は再び兵士達に襲いかかる。

ほとんどの兵士が正門へ出張しているため、数的にはチリーとニシルの二人で倒せない数ではなかった。

みるみる内に一人、また一人と倒されていき、いつの間にかやっ立っているのはチリーとニシルの二人だけとなっていた。

「ざつとこんなもんか」

パンパンと手を叩き、倒れ伏す兵士達を眺めるチリー。その隣で、ニシルは安堵の溜め息を吐いていた。

「ま、ウォーミングアップには丁度良いかな」

だな。とチリーが短く答えた後、二人は顔を見合わせて笑い合った。

「んじゃ、行くぜ……」

ゆっくりと裏門の向こうへ視線を据え、チリーが奥へ進もうとした。その時だった。

「やはり来たか、白き超越者……」

不意に聞こえる、野太い声。次の瞬間には、裏門が轟音を立てて破壊されていた。

「ッ！」

破壊された門の向こうにいたのは、ニシルの倍の身長はある大男だった。肩まで伸ばされた髪はボサボサで、前髪は無造作にかき上げられている。衣類は下半身のみで、まるで岩石のような筋肉を雨に濡らしているが、寒そうな素振りは一切見せていない。

右腕はドリルに変化しており、そのドリルで門を破壊したのだと一目で理解出来た。

「テメエ……！」

東国で赤石を奪い、アクタニアでミラルを攫って行ったあの大男だった。

「我が名はフォスカー……。誇り高き新人類、ニューピープルだ……！」

「何が誇り高きニューピープルだ……このバケモン野郎がッ！ さつさとミラルを返しやがれッ！」

「フン……『バケモン』か……それは貴様も一緒だろう？」

フォスカーの言葉に、チリーが一瞬表情を曇らせた。

「訂正しろ。チリーはバケモンなんかじゃない」

一步、チリーより前に出て、ニシルは強くフォスカーを睨みつけ

た。

「お前らみたいに、目的のために他人を犠牲に出来るような奴こそ『バケモン』だ……！ チリーは人間だ、お前らなんかとは違う」

「ニシル……」

真っ直ぐにフォスカーを睨みつけるニシルへ視線を向けると、フォスカーはニシルを花で笑った。

「チリー、ここは僕に任せてくれ」

「な……！」

「何のために僕がついてきたと思ってるんだよ……。ここは任せて、先に行けって」

「けどよ……」

逡巡するチリーへ、ニシルは小さく嘆息した後親指で裏門の方を指差した。

「ミラル、助けるんだろ？ 行ってこい、相棒」

それでもチリーはしばらく迷いを見せたが、やがて吹っ切れたようにニシルへ背を向け、裏門へ視線を据えた。

「ああ、後は任せませ……相棒」

それだけ言い残すと、チリーはすぐにフォスカーの横を通って破壊された裏門から城の中へと入って行った。

しかし、フォスカーはそれを止めようとはしなかった。

「へえ、行かせてくれるんだ……」

おどけた様子でニシルがそう言うと、フォスカーは口元を釣り上げた。

「どうせ貴様が邪魔をするのだろう。アレを追いかけるのは、貴様を片づけてからで良い」

フォスカーの言葉に、ニシルは突然弾かれるようにして大笑いを始めた。その様子に、フォスカーは不愉快そうに眉をひそめた。

「僕もなめられたモンだね」

一しきり笑った後、ニシルはゆっくりと身構えた。

そこに、先程のようなおどけた様子は一切なかった。

「行くよ……筋肉野郎」

「思ったよりは楽しませてくれそうだな……」
お互いの口元が、同時に釣り上がった。

四面楚歌。

正にトレイズは、四人の敵に囲まれていた。一瞬たりとも気を抜けない……いや、戦いである以上それは当然なのだが、四人相手ともなるとその緊張感は通常よりも張りつめたものとなる。先程まで相手にしていた雑兵なら、トレイズからすればどうということはないのだが、今対峙している相手は　とてもじゃないが雑兵などとは呼べない四人だった。

ライアスとの戦いのトラウマで、神力の使えなくなっていたチリを苦しめた男、レオール。

レオーネ大陸のヴィカルドという町を牛耳り、砂を操る能力を持つザハール。

東国の地下洞窟で、ニシルとカンバーの二人を容易く窮地にまで追い込んだ女、ダニエラ。

そして

「どんな気分かしらあ？　自分の主と二度も対峙する気持ちってえ

」

無邪気に見える笑みを浮かべながらそんなことをたまうクロネに、トレイズは何も答えずにただ怒気の込められた視線を送るだけだった。

「王……ッ」

アレクサンダー。トレイズの人生を変えた恩人であり、テイテス三代目の王である男　アレクサンダー三世が、今トレイズの目の前に敵としてもう一度対峙しているのだ。

「さあ踊りなさい、不細工な人形達」

クイト。クロネが優雅に右手を動かした。すると、今まで虚ろな瞳でトレイズを見つめているだけだったレオール達が、ピクリと反応を示した。

氷で形成された剣の柄を、ギョツとトレイズは握りしめる。実力が未知数な相手三人と、アレクサンダー、その四人を同時に相手するとなると、普段冷静なトレイズでも焦燥感を覚えずにはいられなかった。

まず、レオールの両腕が刃へと変化した。次にダニエラの髪がざわりと蠢き、ザハールの手の中に砂が溢れた。そしてアレクサンダーの手には、槍が握られていた。

「神力も使えるのか……ッ！」

「当然よ。神力は遺伝子に……身体に依存するわ。例え一度死んだ身でも、こうして修復して魂を吹き込めばまた神力を使うことだって出来るに決まってるじゃない。ま、その王様の身体はニューピープルの身体だから、神力は元のものとは違うのでしょうけど……」

でも。と付けたし、ネクロはクスリと笑みをこぼした。

「どうでも良いじゃない、そんなこと……だってもう一度、だあい好きな王様に会えたでしょ？」

「貴様……ッ！」

トレイズが怒りの声を上げた時には、既にレオールがトレイズへと切りかかっていた。すぐに気が付いてトレイズがレオールの刃をかわすと、今度は別の方向から雨によって固められた砂の塊が高速でトレイズ目掛けて発射された。

「チィッ」

舌打ちしつつもトレイズは砂弾を氷剣で砕き、こちらへ髪を伸ばそうとしているダニエラ目掛けて駆ける。

「貴様が一番厄介だ……！」

迫りくる髪の毛を切り裂きつつ、トレイズがダニエラへ切りかかった……その時だった。

「ッ！」

トレイズの剣が、槍の刃先によって受け止められた。

「王……ッ！」

アレクサンダーの槍が、トレイズの氷剣を受け止めているのだっ

た。アレクサンダーと直接刃を交えたことにより、トレイズに一瞬生まれた隙をダニエラは見逃さなかった。

「しまッ」

トレイズがそう言いかけた頃には既に遅く、ダニエラの髪はトレイズ目掛けて勢いよく伸ばされていた。

アレに縛られれば、恐らく総攻撃を受けることになる。そうなれば、とてもじゃないが無事ではすまない。そこまで考えて、トレイズがギシリと歯ぎしりをした。その瞬間、トレイズの目の前で、伸ばされていたハズの髪が宙を舞った。

「カンバー……！」

ダニエラの髪を切断したのは、ナイフを持ったカンバーだった。カンバーはダニエラの髪を切断した後、すぐにアレクサンダーへと視線を向ける。

「申し訳ございませんッ」

そう言って目を閉じ、アレクサンダーの胸部を右足で思い切り蹴り飛ばす。その衝撃で、アレクサンダーがよろめいた隙に、トレイズとカンバーはアレクサンダーから同時に距離を取った。

「大丈夫ですかトレイズさん！」

「ああ、何とかな……」

突如現れたカンバーへ視線を向けクロネは不機嫌そうに口元を歪めた。

「何よアンタ……そのロン毛の仲間あ？ アンタから神力感じないし、ただの人間なんでしょう？ 引っ込んでなさいよ」

「そもそも……いかないんですよ」

言いつつ、カンバーは眼鏡を外すと、その場へ投げ捨てた。

「確かに俺は神力使いじゃありません。トレイズさんのような、神力使いの方々の方が俺なんかよりよっぽど強いです。ですが、俺は俺に出来ることを、俺に出来る範囲で精一杯にやりたいんです。足手まといになるかも知れないとしても……」

裏手に持ったナイフを構え直し、そのまま語を継いだ。

「だから今俺に出来る一番のこと、トレイズさんのサポートは、精一杯やりたいんです。例え相手が、神力使いであっても、です」
「何かっこつけてんのよ……っ！ ム力つくわね。やっちゃいなさい」

クロネが手を動かしたのを合図に、レオールがカンバー目掛けて駆け出した。それに釣られるようにして、アレクサンダーもトレイズへ槍を突き出した。

「クツ……！」

槍を回避し、アレクサンダーへ氷剣を振り下ろそうとして、トレイズは動きを止めた。

「まただ、また……迷っている……！」

あの時も……ヘルテュラで改造されたアレクサンダーと戦った時もそうだった。躊躇って攻撃の手を止め、結果として不覚を取るはめになっていた。

「王の誇りを……守るんじゃないのか……！」

自分に言い聞かせるようにそう言って、トレイズは一度アレクサンダーと距離を取る。アレクサンダーはトレイズの様子を伺っている様子で、ジツとトレイズを見つめたまま構えを解かずにいる。

「貴方の誇りを守るため……もう一度刃を向けることを、どうかお許し下さい」

トレイズの目から、迷いが消えた。

構えられたトレイズの氷剣は、トレイズの決心を映し出すかのようにしてキラリと頭身を輝かせたかのように見えた。

レオールの猛攻を、カンバーはナイフ一本で必死に受け切っていた。両腕の刃を巧みに動かし、様々な方向からくる攻撃を、全てナイフ一本で受け切るのは至難の業だった。

しかし、カンバーにとってはそれ程難しいことではない。疲労は残るものの、過去にナイフ一本で何人も相手と戦ってきたカンバ

ーにとつては、これくらい当然とも言えた。

それにレオールの動きはあまり複雑ではない。この虚ろな瞳と、単調な動き、そしてあの少女の指示。目の前の男が操られていると判断するのに、材料は十分過ぎた。何故かここにいるザハールとダニエラ、アレクサンダーもそうだろう。何故死んだハズの人間までもが、こうして蘇り操られているのかはわからないが、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。

カンバーが思考を巡らせている間にも、レオールの猛攻は続く。しかしそのパターンを、既にカンバーは読んでいる。隙が生まれるまで後……三、二、一……

「そこですッ！」

カンバーが防戦から一転、攻勢に出ようとした瞬間、腹部に激痛が走った。

「……ッ……ッ!?」

ザハールだった。

レオールとの戦いに集中しているカンバーへ、ザハールが砂弾を放ったのだ。

不意の激痛に戸惑うカンバーへ、レオールは容赦なく刃を振り下ろし、返り血がレオールの顔を赤く濡らした。

「くッ……!!」

間一髪状態を逸らすことで致命傷は避けたが、決して無事というわけではない。カンバーの胸部に刻まれた傷跡からは、赤い血が滴り落ちていた。

続け様に、砂弾が数発。何とかナイフで砕くも、その隙にレオールがカンバーへと切りかかる。刃を受けず、レオールの刃を必死にかわすカンバーの表情には、焦りの色が浮かべられていた。

「流石にまずいですね……二対一……!!」

素早くレオールの腹部にひじ打ちを喰らわせて怯ませ、カンバーはすぐさまザハールへと跳びかかり、ナイフの刃先を向けた　　が、

「ッ!!」

そのナイフは、ザハールの目の前に現れた砂の壁によって防がれてしまう。と同時に、砂の壁から大量の砂弾が出現し、空中にいるカンバーを襲った。

まるで鉄の塊を大量にぶつけられたかのような衝撃。ドサリと地面へカンバーが落下した時には、既に意識を手放していた。

槍の能力は、アレクサンダー本人の能力ではない。のにも関わらず、アレクサンダーの槍さばきは達人クラスのもので、トレイズとの戦いの中一瞬たりとも隙を見せたりはしなかった。対するトレイズも、アレクサンダーの動きに対応して槍を氷剣で受け切っている。しかし、同時にダニエラを相手することが出来る程余裕のある状況ではなかった。

「ゲームオーバー、ね」

ダニエラの伸ばした髪は、アレクサンダーとの戦いに集中するトレイズの身体を縛り上げていた。両腕を縛り上げられ、トレイズの手から落とされた氷剣は、音を立てて地面へ落ちると、やがて水となって雨水と混じった。

「ザハール」

一言。クロネがザハールへ指示を出す。すると、ザハールはスツとトレイズへ右手を突き出した。

「カンバー……ッ！」

倒れ伏すカンバーへ視線を向け、声を上げたトレイズの身体へ、ザハールの放った砂弾が大量に叩き込まれた。

ザハールの砂弾を受け、ぐったりと頂垂れるトレイズを眺めつつ、クロネはケラケラと甲高い笑い声をまき散らした。

クロネの不愉快な笑い声に、トレイズは拳を握り締めたが、その拳はどこにも振り下ろすことが出来ない。ダニエラの髪は、きつくトレイズの両手を縛っていた。

ザハールの砂弾による想像以上のダメージに、トレイズは改めてチリーの異常さを実感していた。これだけの威力を持った砂弾を何度も受け、それでも立ち上がり、神力を放出してザハールを倒したのだ。そう考えると、今までには信じ難かった「チリーが究極のニューピープルである」ということにも納得がいく。

そう、それ程までにザハールの砂弾は強力なのだ。

「もう虫の息ね」

「ほざけ……ッ」

「減らず口、その辺でやめたほうが良いわよ？」

冷徹な笑みを浮かべるクロネの表情は、およそ見た目の年齢相応とは思えない表情に見えた。

トレイズは何かダニエラの髪から逃れようともがくが、きつく縛られているダニエラの髪はもがけばもがく程身体に食い込むばかりで一向に千切れる気配はない。

レオール、ザハール、そしてアレクサンダー。三人がトレイズの前へ並び、虚ろな表情で空を見つめている。彼らに、意思はない。一目見ただけでそれがわかる程に、彼らの表情は虚ろに見えてしまう。それは、後ろでトレイズを縛っているダニエラも同様だろう。

「とどめ、刺してあげるわ」

そう言って、クロネは静かにそのか細い指を動かす。すると、ピクリとアレクサンダーが肩を動かし、槍をトレイズへ向けて構えた。「王ッ……」

何かを訴えるようなトレイズの瞳に、アレクサンダーは何一つ反応を示さない。槍を構えたまま、クロネの次の指示を待っている。

「さ、おやりなさい」

クロネの指が、もう一度動かされた

「　　ッ!?!」

が、ピタリとその槍はトレイズの喉元で動きを止めた。

「えっ……!?!」

これまで悠然としていたクロネの口から、戸惑いの声が漏れた。プルプルと。アレクサンダーの槍を持つ手は震えていた。槍を突き出そうとしている自分の手を、必死に抑えているかのような震え。それを、トレイズは驚愕に彩られた顔で凝視していた。

「アンタ……私の指示に従えないの?!?!」

クロネが怒号を飛ばしても、アレクサンダーは動こうとしない。プルプルと手を震わせたまま、槍をトレイズの首元で止めていた。

「もう良いわ……ザハール!」

そう、クロネが痺れを切らしたかのようにザハールを呼ぶと、ザハールは小さく頷いてアレクサンダーの身体を思い切り蹴とばした。

「王ッ……!」

ドサリと。その場で水しぶきを上げながら倒れるアレクサンダーを見、クロネは嘲笑を込めた笑みをこぼした。

「使えない……ホントに使えないわね、この愚図」

クロネはゆっくりとアレクサンダーへ近づくと、その頭を思い切り蹴りつけた。そしてチラリと、トレイズが表情を歪めたのを確認すると、今度はアレクサンダーの頭を、トレイズに見せつけるようにして何度も踏みつけた。

「愚図っ……愚図っ!」

何も言わず、ただ蹴られ続ける哀れな王の姿を見つめつつ、トレイズはグツと両の拳を握った。

頭に血が上っているのが、自分でもわかる。冷たい雨がどれだけ冷やそうとも、追いつかない程にトレイズの怒りは沸騰していた。

「離れる……ッ」

何かの凍る、音がした。

「……っ！」

クロネがトレイズの方へ視線を向けた時には、既にダニエラの髪は半分以上が凍っていた。

「王から……離れるオオオオッ！」

トレイズの叫び声が木霊した瞬間、ダニエラの身体は一瞬にして凍り付いていた。

「嘘……っ!？」

勢いよく髪ごと氷が砕け、トレイズの両手両足が自由になる。

「ザ、ザハール！」

慌ててクロネが指示を飛ばす。が、ザハールが砂弾を発射しようとしてトレイズに対して身構えるよりも、トレイズが拳を振りかぶる方が速かった。

ザハールの顔面に食い込む拳。後方に吹っ飛んでいくザハール目掛けて、トレイズは容赦なく手をかざすと氷柱の先端のように尖った氷弾を数発発射する。その全てがザハールの身体に突き刺さり、ザハールはその場に倒れたままピクリとも動かなくなった。

「レオール……！」

クロネの指示を受け、レオールがトレイズへ切りかかろうと両腕を刃に変えた。その時だった。

レオールの肩に、手が乗せられた。

「どこを見てるんです……？ 貴方の相手は……俺でしょう……！」

「カンバー！」

レオールの背後にいたのは、倒れていたハズのカンバーだった。傷口を押さえながらも、カンバーは何か立ち上がってレオールへと近づいていたのだった。

すぐにレオールはカンバーの方へ向き直り、ナイフで切りかかっ

てくるカンバーへと応戦する。

「くっ……！」

悔しげに歯噛みすると、クロネは仕方なく足を退け、足元に倒れているアレクサンダーへ視線を落とす。すると、アレクサンダーは静かに立ち上がり、トレイズへと槍を構えた。

「王……！」

ゆっくりと。トレイズの右手に氷剣が形成されていく。

対峙する従者と王。静かにトレイズは氷剣を構えた。

「トレイズ……！」

「なッ！」

か細い、絞り出したかのような声が、アレクサンダーの喉から漏れていた。その声に動揺し、トレイズは一瞬泣き出しそうな表情を見せたが、やがて意を決したかのようにアレクサンダーを睨みつけた。

「おおおおおッ！」

叫び、アレクサンダーへと駆けるトレイズ。対するアレクサンダーも、トレイズ目掛けて駆け出していた。

そして次の瞬間、何かを切り裂くような音が響いた頃には、トレイズとアレクサンダーは互いに背を向けあっていた。

「アト……ハ……！」

ガクリと膝から崩れたのは、トレイズではなくアレクサンダーだった。

「マカセ……タ……！」

後は任せた。

少なくともトレイズには、アレクサンダーの言葉はそう聞こえた。「お任せ下さい……！」

背を向けたまま、トレイズは静かにそう告げた。

「嘘……嘘でしょ……！ 何でやられてんのよアンタ達っ！」

凍りついたダニエラ、倒れているザハールとアレクサンダーを交互に見、クロネは見た目の年齢相応の子供のように喚き散らす。そ

の様子を、トレイズは黙って見つめていた。

「レ、レオール！」

まるで最後の切り札とも言わんばかりに、レオールの名を叫ぶクロネ。しかし、その声に応じる者はいなかった。

「能力がなくなつて、勝てないんですよ……」

荒い息の混じったカンバーの声。見れば、彼の目の前では両腕を切り裂かれたレオールが倒れていた。

「何だよ……能力もない雑魚に、どうして……！」

持っていた傘を取り落とし、慌てふためき始めたクロネの前に、トレイズとカンバーの二人が並んだ。

「雑魚の底力、というやつです。あまりなめないで下さい」

「何よ……何よ何よ何なのよっ！ ただの人間の癖に……！ 調子に乗ってんじゃないわよっ！」

怒声を上げながらも、クロネの両足はブルブルと震えていた。

「やはり、操る死体がないと何も出来ませんか」

呆れて溜め息を吐くカンバーに、トレイズはああ、と相槌を打つと、クロネへ近づいてその頭へ右手で触れた。

「さあ、人形遊びはこれで終わりだ……」

「や、やめ……っ！」

クロネが言葉を言い切るよりも、彼女の身体がトレイズの能力によって凍り始める速度の方が速かった。

「凍え死ね……！」

次の瞬間には、クロネは全身を氷漬けにされていた。氷柱に閉じ込められたクロネは、悲痛な表情を浮かべたまま凍り付いていた。

「永久とわに凍れ」

そう言い捨てると、トレイズはクロネへ背を向けた。

先程倒したアレクサンダー達の死体は、雨粒を浴びながら土くれのようにボロボロと崩れ、やがて雨水に溶けてなくなっていくた。

それを眺めた後、
トレイズの頬を雨粒とも涙ともつかない滴が流
れていった。

episode 116 「With you - 1」

既にソレは、人の形を成していなかった。

ただの肉の塊。敵も味方も関係なく取り込み巨大化したソレは、既に麗や光秀の身長の倍のサイズにまで到達していた。

「コイツ……マジでバケモンじゃねえか……！」

フェルベール肉塊から伸ばされる触手を、刀で切り裂きながら悪態を吐く光秀。その隣では、努めて冷静を装っている様子の麗が、小刀で必死に迫りくる触手を切り払っていた。

「本体を叩かないと……これじゃキリがないわね」

既にその場は阿鼻叫喚。レジスタンス兵もゲルビア兵も、必死にフェルベールから逃れようと逃げ惑っているがすぐにその身体は触手によって捕えられ、フェルベールの中に取り込まれていく。既に何人が犠牲になったかなど麗と光秀は記憶していないが、ゲルビアもレジスタンスもフェルベールのせいで等しく大打撃を受けていることだけは確かだった。

早くフェルベールをどうにかしなければ、数で劣るレジスタンス側は確実に敗北する。

「麗、後ろッ！」

「っ！」

不意に背後へ回ってきたフェルベールの触手は、コンマ一秒反応の遅れた麗の身体を素早く捕らえる。必死に抜け出そうともがくが、フェルベールの触手は麗の身体を放すようなことはしなかった。

「チッ……！！」

光秀は舌打ちすると、刀をすぐに鞘へ納め

「うるアッ！」

フェルベールから伸びる触手目掛けて、抜刀した。その瞬間、光秀の刀身から斬撃が放たれ、フェルベールの触手を切り裂く。フェルベールから切断された触手は、麗に巻き付いたまま地面へ音を立

てて落下した。

「私としたことが……美しくないわ……」

「油断すんな、喰われるぞッ」

動きを止めた触手から抜け出すと、再び麗は光秀と共にフェルベルから伸ばされる触手へ応戦する。

いくら切り裂いても無数に伸びてくるフェルベルの触手。そして際限がないかの如く巨大化していくフェルベルの本体。

状況は絶望的だった。

「クソッ……こんなバケモンに勝てんのかよッ！」

伸ばされた触手を切り裂き、光秀は納刀するとすぐに抜刀し、フェルベルの本体目掛けて斬撃を放つ。放たれた斬撃は、防がんとして伸びる触手を切り裂いて貫通しながらフェルベルの本体へと直撃する。

「オオ………！」

「当たったッ！」

光秀の斬撃により、フェルベルの身体は一部分だけ凹んだが、周りの肉がその部分に集まっていき、いとも容易くその穴は塞がれてしまう。

「クソッ………！」

「一撃じゃ……足りないようね」

そう言っつて触手を切り裂くと、麗は自分の右手首に小刀で傷をつけた。

「光秀、頼んだわよ」

「……ああ！」

光秀は麗の行動を見て察したらしく、納刀すると強く頷いた。

苦痛と共に、手首の傷口から流れ出る血を数瞬見つめると、麗はその血を飛ばすようにして右手を薙いだ。すると、麗の手を離れた血液は、いくつもの鋭い小さな刃となってフェルベル目掛けて飛ばされた。

血の刃はフェルベルの触手を切り裂き、全てフェルベルの本

体へと直撃していく。続け様に直撃する血の刃は、フェルベルを覆う肉を削っていく。

「今よっ」

「おおおおおッ！」

すかさず、光秀が抜刀。麗の血の刃によって削られた肉の部分へ、光秀の斬撃が放たれる。

「オオオオオオッ！」

先程よりも大きな叫び声は、フェルベルがダメージを受けている証拠だった。

「アレ！」

麗の指差す先には、削られた肉の内側にあつたのであろうフェルベルの核らしきものだった。露わになった赤い塊を覆い隠すようにして、周囲の肉がその部分へ集まろうとしている。

「アレが本体か……！」

光秀は刀を抜刀したまま、意を決したかのようにフェルベル目掛けて駆け出した。

「光秀っ！」

どこか心配そうな声音の麗を後目に、光秀は露わになっている赤い部分の位置まで跳躍すると、刀の刃先をそこへ向けた。

「うおおおおおおらああああああッ！」

雄叫びを上げ、刀をフェルベル目掛けて突き刺す光秀だったが

「なッ」

既に赤い部分は、肉によって覆われていた。

「光秀！」

刀は赤い部分へ直撃するどころか、逆に集まってきた肉によって取り込まれる形となってしまうていた。

「クソッ！」

何とか抜こうともがくが、刀が抜ける気配はない。光秀が刀を諦めてフェルベルから離れようとした その瞬間だった。

「光秀！ 避けなさいっ！」

「しまッ」

伸ばされた触手が、光秀の左腕へ絡みついていた。更に触手は光秀の身体が本体に取り込まれるのを待とうとせず、既に巻き付いた左腕を取り込もうと同化し始めているのだ。

「切れッ！ 麗イッ！」

「くっ……！」

光秀の左腕ごと切る。そのことに一瞬の逡巡を見せた麗だったが、命を失ってしまうよりはまだマシだと判断し、血の刃を光秀の左腕目掛けて飛ばした。

飛ばされた血の刃は、容易く光秀の左腕を切り裂いた。

「が……ッ！」

呻き声と共に、切断面から真つ赤な血が飛び散る。返り血で赤く染められたフェルベルの身体は、すぐに降り注ぐ雨水が洗い流していく。

「光秀！」

迫りくる触手を切り裂きながらも、麗は落下した光秀の元へと駆け寄っていった。

「おい馬鹿ッ！ 麗ッ！」

光秀が叫ぶのと、光秀を心配するあまり隙の生まれていた麗へと触手が伸ばされるのはほぼ同時だった。

「危ねエッ！」

今は亡き左腕の激痛。歯を食いしばってそれに耐え、光秀は残っている右腕で思い切り麗を突き飛ばす。それと同時に、フェルベルの触手は光秀の右足へと素早く巻き付いた。

「しまった……ッ！」

光秀が声を上げた頃には既に遅く、触手は右足と同化を始めていた。

「光秀えっ！」

悲痛な声を上げると、麗はすぐさま光秀の右足を小刀で光秀から

切断する。

「ぐアアッ！」

光秀の右足から噴き出た赤が、悲痛に染まった麗の表情に色を足した。

「光秀っ！ 光秀！」

左腕と右足。二つを失った光秀は、立ち上がることも出来ないままその場へ倒れ伏した。

「嫌……嫌あつ！」

プライド。使命。強い意思。麗を覆っていた全ては跡形もなく砕け散り、ぐしゃぐしゃに泣き崩れた彼女の表情を露わにした。

貴方がいたから、戦えた。

「光……秀……！」

貴方がいたから、美しくいられた。

「返事してよ……！」

貴方が、いたから……

「嫌ああああああああああっ！」

悲痛な叫び。

もう、戦えない。

降ってくるような絶望が麗の全身に降り注ぐ。

麗の小刀を持つ右手が、静かに降ろされようとした
その時だった。

「っ」

ガツシリと。暖かい手が麗の腕を掴んだ。

「お前が……いた、から……」

温もりは徐々に、冷えていった。

「戦え……た……」

命が少しずつ、失われていくんだって理解わかってしまっ

「お前が、いた……から……ッ」

強く、いられた。

「光秀……っ」

麗の右腕を握っていた手から、糸の切れた操り人形のように力が抜けた。

「オオオオオオオッ！」

その瞬間、フェルベールの雄叫びと共に麗へと触手が伸ばされたが、麗は素早く反応すると、その触手を小刀で切り裂いた。

「絶対……守るから」

次々と麗と光秀へと伸ばされるフェルベールの触手。しかし、その全てを麗は小刀だけで切り払っていく。

「貴方を、こんな肉の塊の一つになんて、しないから」

麗のその瞳には、再び強い意思が宿っていた。一点の曇りもないその瞳は、黒雲に覆われた空とは対照的に見えた。

「光秀……！」

まだ死んではない。呼吸はしている。だが、そう長くは持たないだろう。早急に手当すれば一命を取り留めることも不可能ではないが、この状況下で治療など不可能な上に、仮に治療が可能だとしても、目の前にいるフェルベールを倒さないことにはどうにもならない。

光秀は、助からない。

しかし、それでも

「覚悟を……決めるわ」

小さく、麗は呟いた。

東国 厳密に言うと、既に東国はなくなっているのだが、便宜上東国と呼ばれているその場所は今もまだ暗雲に覆われていた。

過去の東国戦争の傷痕が癒える気配は一向になく、枯れた大地に緑は皆無だった。

ひび割れた地面を草履で踏みつけながら、一人の女性が物憂げに息を漏らす。

赤石の守護者の一人 桐香きりかだった。

巫女装束と呼ばれる衣装に身を包んだ彼女は、灰色の空気の中で独り佇んでいた。

別段、外に何か用があったわけではない。今まで通り、守護者として地下で暮らせれば良い。いつか東国が復興される、その日まで……ただ待つだけで良い。そのハズなのに、桐香は嫌な予感を覚えて外へ出ていた。

嫌な予感。と一口に言っても、それがどういうものなのかは自分自身ですらわからない。だがモヤモヤした感情に内側を覆われ、それを拭うために外の空気を吸おうとして外に出たのだが……。

「外の方が、空気が汚いのに」

自嘲じみた言葉を独りごちて、桐香は肩を落とした。

東国へゲルビアが攻めてくる前日に感じたものと、同じ感覚。これ以上この大地に傷が出来ることはないハズなのだが、何か大切なものがまた壊されてしまうような予感が、桐香にはしていた。

所詮、予感。

そう片づけて思考を放棄することは簡単だった。

しかし思考を続けようが放棄しようが、結局今自分に出来る選択は最初から一つだけ。

ただ、祈る。

そんなことしか出来ない自分に、桐香は齒噛みすることしか出来

なかった。

フェルベールから無数に伸ばされる触手を、ひたすら麗は切り裂いていく。己と、倒れている光秀を守るために。

「ラチがあかないわね……！」

決着を着ける。

素早く、麗は小刀で自分の右手の動脈を切り裂いた。苦痛に表情を一瞬歪めるが、すぐに麗はその右手を空に掲げた。

傷口から溢れる血が、自分自身に降りかかるように。

「とっておきよ。見せてあげるから、感謝しなさい」

止め処なく傷口から溢れ出る麗自身の血液が、麗の身体を伝って行く。そしてその血液は地面へと落ちず、麗の身体を覆うようにして留まっている。

まるで、装甲。

麗の纏う血の装甲は、神力によるものであろう輝きを放っている。既に血はヘルメットののように顔全体も覆っており、今の麗の姿は人の形を象った血の塊のように見えた。

フェルベールから伸ばされる触手は、麗目掛けて向かって行くが、全て麗の纏っている血によって弾かれている。血の中に含まれている神力が、フェルベールの触手を弾いているのだ。

「終わらせるわ……あまり時間はないの」

掲げていた手を降ろすと、ゆっくりと麗はフェルベールへ視線を据えた。そうしている内にも、フェルベールは何本もの触手を麗へ

と伸ばすが、それら全てが容易く弾かれてしまっている。

「オオオオオオッソッソ！」

異変に気付いたのか、フェルベールは不気味な声を上げ、触手を麗へ伸ばすのを一旦止めた。が、

「オオオオオオッソッソ！」

すぐにフェルベールは麗へと一本の触手を伸ばすが、今まで通り麗へ直接ぶつかろうとせず、麗の後ろに回り込むようにして触手は軌道を変えた。

その時点で、既に麗はフェルベールが自分の身体に触手を巻き付けようとしていることに気付いていた。

「ぶっ」

いつの間にか、麗の両腕にはブレード状の刃が形成されていた。麗が右腕のブレードを一振りすると、フェルベールから伸ばされた触手は容易く切り裂かれ、地面へボトリと落ちていった。

落下後、しばらく触手はビクビクと痙攣していたが、麗はその触手を目障りだと言わんばかりに踏み潰し、ギロリとフェルベールへ鋭い視線を注いだ。

「美しくない……美しくないわ貴方。だけど貴方には、美しく散る権利すら与えない」

チラリと倒れている光秀に視線を向けた後、再び麗はフェルベールへ眼光を投げつけた。

「醜く散りなさい」

その刹那、赤い閃光が走った。

否、閃光ではない。それは麗だった。

神力によって操っている血を纏うということは、神力を纏うということ。簡単なことではない、強靱な精神力と集中力、精密な精神力のコントロールがあつてこそ成せる業だ。

纏った神力を操れば、高く跳躍することなど大したことではなかった。

フェルベール向かって閃光が如く直進する麗を阻もうと、フェル

ベールは触手を伸ばすが、その全てが装甲によって弾かれていく。そして次の瞬間には、フェルベールの巨体に麗の拳が叩き込まれていた。

「おおおおおおおおおっ！」

今までの、どこか気取った風な麗からは考えられないような吹っ切れた叫び声。

彼女を飾るものはもう何もない。

彼女を支えていたものはもうない。

彼女を覆っているのは

「ああああああああっ！」

血と神力だけだった。

二撃。

三撃。

四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三………！

凄まじい勢いで叩き込まれる拳が、フェルベール肉塊をグチャグチャにまき散らしていく。

まるで散弾のような麗の連撃。

フェルベールの本体であろう赤い塊は、既に露わになっていた。

もし、この戦いが無事に終わったら

昨夜の言葉が、ふと麗の脳裏に浮かび上がった。

ごめんなさい、無事には終わらなかったわ……。

それは昨夜の自分への謝罪か。それとも光秀への謝罪か。

麗自身にも、よくわからなかった。

「うおおおおおおおっ！」

それがたまらなく嬉しくて、麗は薄れかけの意識の中微笑んだ。

「おい、何ボーっとしてんだよ。泣いてんぞ」

不意にそんな声が聞こえて、麗は自分が赤ん坊を抱いていることに気が付いた。

「あ、あら……ごめんなさい」

慌てて赤ん坊をあやすが、どうにも泣き止む気配はない。麗が嘆息すると、先程の声の主　光秀は痛快に笑った。

「流石の麗も赤ん坊には勝てねえかあ」

「何でも勝ち負けで判断するのは……美しくないわね」

麗のその言葉に、光秀は違えねえとまた痛快に笑って見せた。そんな光秀につられて、麗も笑みをこぼす。

「こんな女房がいて、娘まで出来て、俺あ幸せだなオイ」

「……私もよ」

続けは良い。こんな時間が。

途切れることなく、永遠に。

「大好きよ、光秀」

最初から素直に、そう言えれば良かった。

歪んでいく景色はまるで陽炎のようで

「馬鹿ね……私……」

ポロポロと溢れ出る感情を、麗はもう抑えようとはしなかった。

今まで必死に抑えてきた感情。抑えてしまっていたことを、今更になって後悔した。

「そんなこと……あるわけないのに……」

夢は永久に夢で。

現は永久に現で。

冷たい温もりに包まれて、麗はそっと目を閉じた。

「せめて最期は……貴方の胸の中で
晴れた空から伸びた光が、二人を装飾する。」

冷たくなった麗の背中に、そつと右手がまわされた。

episode 118 「Promise - 1」

「最後にもう一度だけ忠告しておく」

今まで雨音だけが響いていたその場で、不意にフォスカーが口を開く。

「貴様では無理だ。死ぬぞ」

諭すようにそう言ったフォスカーを、ニシルは嘲るように鼻で笑って見せた。

「死にやしないよ……絶対に」

帰るぞ、皆で！

「皆で帰るって……約束したから」

ニシルのその言葉に、フォスカーは呆れたように一度嘆息すると、右腕のドリルを高速で回転させ始めた。

降り注ぐ雨粒がドリルの回転によって弾かれ、音を立てて周囲に飛び散っている。そんな様子を見て、ニシルは一度表情を歪めたが、すぐに悠然とした笑みを浮かべた。

「どうも……ドリルと僕は縁があるみたいだね。グラウスとかいうマッドサイエンティストと言い、アンタと言い」

「やめておくか？」

「まさか。心配してくれるんだね。優しいんだ……」

挑発とも取れるニシルの一言。それをゴングの代わりとでも判断したのか、フォスカーは右腕のドリルをニシル目掛けて突き降ろした。

「うわッ」

間一髪回避するも、今までニシルが立っていた地面は轟音と共に破壊されてしまっていた。深く抉れた地面は最早穴と呼べるレベルで、穴の底から次はお前が抉れる番だ、と聞こえてきたような錯覚をニシルは覚えた。

「又ンッ！」

野太いフォスカーの音が聞こえたかと思うと、今度はフォスカーの左腕がドリルへと変化していた。右腕と同じく高速回転するソレは、先程のドリルの威力を見た後だったせいもあり異常な程凶悪な武器に見えた。

冷や汗だか雨粒だかわからない、額に付着した液体を拭いつつ、ニシルはフォスカーの左腕による二撃目を回避する。

「なんて破壊力だよ……！」

地面に出来た二つの穴から察するに、フォスカーのドリルは恐らくグラウスのドリルとは比べ物にならない程の威力を持っている。あんなもの、一撃でもまともに喰らえば生きていられるはずない。あの高速回転するドリルで血肉をまき散らしながら死んでしまうのかと思うと、余裕を装っていたニシルでさえ寒気を覚えずにはいられなかった。

ドリルに対して、ニシルの能力は熱。鉄であれば大体のものは溶かせる程の超高熱を帯びることは不可能じゃない、だが、果たしてグラウスの時と同じ戦法がフォスカーに通じるのか……。それよりも、ドリルを溶かし切るまでの間にニシルの腕がもつ保証がどこにもない。ただでさえ、神力による拒絶反応によるダメージもあるのだ。グラウスの時と同じ方法でこの場を切り抜けるのは、恐らく不可能に近いだろう。

「これは流石にキツイね……想像以上に」

額から垂れた滴が冷や汗なのだと、ニシルが気づくのに一秒とかからなかった。

城内に残っている兵士達を蹴散らしながら、チリーは城の奥へと進んでいた。

裏門入口に残したニシルのことが気にかかるが、ニシルなら心配

ない……きつとニシルなら無事にあのフォスカーという男を倒して追いついてくるだろう。

「そう信じてもしなきゃやってらんねえよッ！」

目の前の兵士を蹴り倒しながらそう悪態を吐いて、チリーはブルーノから預かった地図を見ながら王座を目指した。

地図によると、ゲルビア城の王座は最上階の最奥に存在する。恐らく、ハーデンはそこで待ち構えている。

恐らく、というよりはほぼ確実に。

城内へ入った時から、漠然とではあるがハーデンが近くにいて、という感覚がチリーにはあった。

同じ究極のニューピープル故か、それとも体内の小赤石が呼応しあっているせいか……その判断を下すことはチリーには出来なかったが、とにかくハーデンが近いということだけは感覚的に理解していた。

城の中に残っている兵士は、ブルーノの作戦通り残りわずかだった。あの程度の人数なら、神力を使わないチリー一人でもさほど苦労せずに蹴散らすことが出来る。

「この奥だな……ッ！」

地図によれば、この廊下の先に王座がある。

廊下は一本道で、真っ直ぐ行けばそのまま王座だ。途中に部屋もない。

拳を握りしめ、意を決して廊下を駆け出した。その時、チリーは視線の先に一人の男を捕らえた。

「チッ……」

舌打ちするチリーを見、男はニヤリと笑みを浮かべた。

「まだいやがったのかよ……！」

防戦一方。

両腕のドリルによるフォオスカーの猛攻を、ニシルは避けることしか出来ずにいた。もう既に地面は穴だらけで、もう少し細かく掘れば一つの大穴が出来る程だった。

「どうした……避けるだけかッ！」

ニシルが一向に攻撃してこないのを不満に思っているのか、フォオスカーは眉をひそめてニシルを怒鳴りつけた。

「そっちが攻撃の手を止めてくれたら……お望み通り今度はこっちから攻撃してあげるよ……！」

必死にドリルを避けながらニシルがそんなことをのたまうと、フォオスカーはドリルを突き降ろすのではなく、振り下ろした。

「う……ッわッ」

今までよりも縦に広いその一撃にやや困惑するも、ニシルはそれを横っ跳びに回避する。

「そこだッ！」

地面へうつ伏せになっているニシルへ、フォオスカーは左腕のドリルを突き降ろす　　が、ニシルは何とか転がってそのドリルを回避する。

「危ないなもうッ！」

このフォオスカーという男の体格と言い、この能力と言い、どうやらニシルとの相性はニシルからすれば最悪らしかった。

ニシルの能力は基本、自分の身体のどこかに熱を帯びさせて、それで相手に触れることでダメージを与えるものだ。それ故に、ニシルは接近戦で戦わざるを得ない。接近戦で戦わなければならぬのはフォオスカーも同じなのだが、問題なのはこの体格差だった。

チリーに散々チビニシと言われ続けているくらいには、ニシルの背は低い。ニシル自身、自分の身体がお世辞にも大きいとは言えないことは理解している。対してフォオスカーは、そのニシルの身長

倍の体格はある男だ。恐らく、今までニシルが出会ってきた人間の中でも最も大きいと言える。

そんな図体の男とニシルが接近戦を行うとなると、断然ニシルの方が不利な上、相手の両腕はあのドリルだ。一撃必殺のあのドリル、避けるだけで精一杯なのに攻めに転じるとなると……

「小賢しい……ッ！」

ひよいひよいとドリルを避け続けるニシルに苛立ちを感じたらしく、フォスカーはいらだった様子でそう言つと、両手のドリルでニシルを挟むようにして左右からニシルへとドリルを薙いだ。

「やば……ッ！」

左右から迫るドリルの回転音。ゾクリと死を予感しつつ、ニシルは思い切つて前方へ跳ねた。

ニシルの身体は左右のドリルに直撃する寸前でフォスカーの両腕を抜けることが出来た。ニシルの背後では、ドリルとドリルのぶつかる轟音が響いている。

「……今だッ」

今まで隙を見せなかったフォスカーの、一瞬の隙。それをニシルが見逃すはずがなかった。

右手へ意識を集中させる。体内の神力の一部が、右手へと集中していく感覚……。徐々に、ニシルの右手は高熱を帯びていく。

「ぐッ……ッ！」

拒絶反応による激痛が、ニシルの右手を襲った。まるで腕の神経の上を大量の蟻が何かが蠢いているかのような痛み。その痛みを表情を歪めながらも、ニシルは熱を帯びた右手をフォスカーへと突き出した

「フンッ」

「ッ！」

太い、まるで丸太のような何かがニシルの腹部に食い込んだ。

「が……ア……ッッ」

それは、フォスカーの右足だった。

フォスカーへと近づいていたニシルへ、フォスカーはその巨大な足で前蹴りを放ったのだ。

ニシルの身体の奥で、何か音が立てて折れている気がした。恐らく肋骨だろう。

凄まじい勢いで吹っ飛び、ニシルは背中から地面へ激突し、そこから更にバウンドして後方へと転がっていく。

想像を絶する激痛。

隙が出来ていたのはフォスカーではない、ニシル自身だった。ニシルがフォスカーの隙だと判断したあの瞬間は恐らく、フォスカーがニシルをおびき寄せるための罠だったのだろう。

しかし、今更気づいても遅かった。

「か……はアッ」

咳き込みながら血を吐きだすニシルを、フォスカーは冷めた目で見降ろしていた。

ピシリと。何かに亀裂の入る音がした。

「え……？」

ベッドで寝たまま、ボンヤリと雨の降り続けている外の景色を見つめていた少女、エルゼはゆっくりと起き上がり、辺りをキョロキョロと見回すが周囲に音の原因らしきものは見当たらない。何かガラスにひびが入るような音だった気がするが、窓ガラスに亀裂は見受けられない。

エルゼは数秒考え込んだ後、枕元に置いておいたペンダントへ手を伸ばした。

数週間前、初めて出来た友達と ニシルと一緒に撮った写真の入ったロケットペンダントだった。

すぐにそれを開け、エルゼははっと息を呑みこんだ。

「ニシル君……」

ガラスに、ひびが入っていた。落としたりした覚えはないはずなのに、何故かニシルの映っている部分を切り裂くようにしてガラスにひびが入っている。

嫌な感じがして、背筋が少しだけ冷えた。

エルゼはペンダントを閉じると、それを大事そうに両手で包み込んで胸へあて、エルゼは祈るようにしてギュッと目を閉じた。

エルゼには、今ニシルが何をしているのかはわからない。何故あの時出会えたのかも、何故何も言わずにどこかへ行ってしまったのかも、何一つわからない。

「ニシル君……！」

それでも先程より強く、エルゼは彼の名を呼んだ。

「これでわかつたろう?」

雨粒と共に上から降ってくるフォスカーの声に、勝ち誇つたような感情は感じられなかった。彼の想定内……フォスカーの予想の範疇を、ニシルは越えなかったということだ。そのせいか、少しだけ残念そうな声にも聞こえた。

「もう少しやるかとも思ったが……まあこんなものか」

そう言つてフォスカーは嘆息しつつ、ニシルへと歩み寄る。その間も両腕のドリルは高速回転を続けていた。

「くや……し、いな……ア」

こんなもの、か。

「僕は……」

こんなもの、か。

「死ぬ、の?」

肋骨が体内でどこかに刺さっているのか、身体の内側から刺されたような痛みをニシルは感じていた。このままだと放つておいても死ぬだろうし、どの道フォスカーにとどめをさされて、無残に肉塊となつて周囲に飛び散るのがオチだろう。

こんなもの、か。僕なんて……

チリーのように、驚異的な身体能力があるわけじゃない。チリーのように、強大な神力とそれに耐えうるだけの器があるわけじゃない。

こんなもの、なのか。

ここで終わる運命なのか。

僕は……!

「む……?」

歩みを止め、フォスカーが顔をしかめた。

「ほう……」

しかめられたフォスカーの表情には、薄らとではあるが笑みが浮かべられていた。

「おい……ッ」

知らず、足が動いた。

全身から発せられる信号が、ニシルの動きを抑制しようともがいているが、ニシルはそれを振り払う。

意志が、強い意志が、動きを止めることを拒んだ。

「誰が……こんなもの、だよ……ッ」

痛む身体の、どの部分も押えることなくニシルは立ち上がる。

ああ、後は任せたぜ相棒。

「なめてんじゃねエエエエエッ！」

叫ぶことで、再び激痛がニシルを襲った。しかしそれでも、ニシルは倒れるどころかよろけることさえしなかった。

「任されてるんだ……相棒アイツに……僕はッ！」

心のどこかで、妬ましく思っていた。

アイツは強い。真っ直ぐで、力強くて、逃げたりなんかしない。

どんなことでも真っ直ぐに立ち向かうアイツが、妬ましかった。

だからこそ、ミラルだってアイツのことが好きなんだって、理解していた。理解していても、抑え切れない感情があった。

全部持つてる。アイツは、僕の欲しいものを全部持つてるんだ。

強くて優しい、息子を捨てたりなんかしない父親。強くて大きくて、誰にも負けない力。真っ直ぐで硬い、逃げることを知らない折れぬ心。そして、ミラル。

妬ましい。

でも、そんなアイツが僕に打ち明けたんだ。自分だって怖い、震えてるって。僕と、同じだって。

それで、さつきはこう言ったんだ。

ああ、後は任せたぜ相棒。

こんな僕に、任せてくれたんだ、アイツ。

余計嫉妬しちゃったよ。かつこ良過ぎ。でもそれよりも、嬉しかった。アイツは僕のこと、相棒だって認めてくれてたんだ。

応えるしかない。

その信頼には応えるしかないんだよ。

「来いよデカブツ……ッ！ お前を……チリーのところへは行かせない！」

鼻屑目に見てもボロボロに見える身体で、ニシルはフォスカーに對してそんな言葉を叩きつけた。

「死ぬつもりか……？」

「死なないって、言ってるだろ……帰るんだよ、皆で……！」

チリーと、ミラルと、トレイズと、カンバーと。

「皆で……帰るんだ……」

先程まで笑みを浮かべていたフォスカーだったが、その言葉に對してはさほど興味もなさそうに表情を薄めていた。

「楽には死ねんぞ」

見せつけるように、フォスカーは右腕のドリルを掲げた。高速回転しながら雨粒を弾き飛ばしているソレが、自分に対して突き出されるのかと思うと、ニシルは雨粒の冷たさとは関係なく身震いしてしまう。

しかしそれでも、逃げる気は全くなかった。今の状態でアレを避けることはまず無理だ。下手に動こうが動くまいが、あのドリルによってメチャクチャにされてしまうのは目に見えている。

「これだけは……二度と、したくなかったんだけどなあ……」
スツと。ニシルは右手を前へ突き出した。

まるで、ドリルを受け止めようとしているかのように。

「又ウンツ！」

野太い声と共に、フォスカーのドリルが突き出された
間、激しい音がニシルとドリルの間で鳴り響いた。

瞬

「又　ツ！？」

「おおおおおおおおおおオオオオツツ！」

フォスカーのドリルを受け止めていたのは、ニシルの小さな右手
だった。

「馬鹿な……ツ！」

バチバチと電流の弾けるような音……恐らく、ニシルが放出して
いる神力と、フォスカーのドリルに込められている神力の反発し合
う音だろう。いや、特筆すべきなのはそのことなどではない。

明らかに無謀でしかないその行為を、先程の一撃でボロボロにな
っているハズの小柄な少年が行っていることだった。

ニシルの能力は、熱。

過去、グラウスという身体を機械に改造していた男と戦う際に、
ニシルはドリルと化しているグラウスの右手を圧倒的熱量で溶かし
ている。しかしその時、ニシルの手の平はドリルによってボロボロ
になっていた。そしてフォスカーのドリルは、威力もサイズもグラ
ウスのものより大きい。つまりニシルは、あの時以上のダメージを
覚悟した上でフォスカーのドリルを受け止めているのだ。

「戦いを……制するのは……ツ！」

この世のものとは思えぬ激痛。

ドリルの衝撃によるダメージと、神力の拒絶反応によるダメージ。
二つの激痛が右腕一本に集中している上、フォスカーに蹴られた時
のダメージも無視できるものではない。もう死んでしまっんじゃな
いかと錯覚するような激痛が、ニシルの身体の至るところを駆け回
っていた。

「『覚悟』だ……ツ！」

「又ウツ！」

咄嗟に、フォスカーはニシルからドリルを離した。それと同時に、ニシルは軽く後方へ背中から吹っ飛んでいく。

「馬鹿か貴様……！」

フォスカーの言葉に、ニシルは答えない。ただ必死に、立ち上がるうとしてもがいていた。

「無謀だ……大人しくした方が苦痛は少なくて済むぞ……」

「へえ……心……配……？ 優しいん、だ……」

まだ減らず口が叩けることに、自分でも内心驚きつつ、ニシルは何とか立ち上がった。

右腕の感覚が、もうほとんどない。指を動かしているハズなのに、動かした感覚がまるでない。しかし指自体は正常に動いている。

そんな自分の右腕を見、ニシルは仕方ないかと呟いて、もう一度右手を突き出した。

「来いよ……デカブツツ！」

覚悟が、木霊した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9301/>

The Legend Of Red Stone

2011年10月2日03時33分発行